

自己点検・評価報告書 別冊

教育・研究活動報告書

平成26年度版

國學院大學

目次

凡例	1
文学部	
日本文学科	3
中国文学科	29
外国語文化学科／教養総合（外国語）	39
史学科	65
哲学科	87
教職課程	97
経済学部	
経済学科／経済ネットワーク学科／経営学科	105
法学部	
法律学科	139
神道文化学部	
神道文化学科	171
人間開発学部	
初等教育学科／健康体育学科／子ども支援学科	193
法科大学院	237
研究開発推進機構	255
教育開発推進機構	269
氏名索引	277

凡 例

1 掲載対象者

本報告書は平成26年度版として作成し、平成26年10月1日現在、國學院大學に在職する専任教員を掲載している。

2 掲載順

文学部、法学部、経済学部、神道文化学部、人間開発学部、法科大学院、研究開発推進機構、教育開発推進機構の順で、教員氏名の五十音順を原則とした。

3 掲載項目における留意事項等

掲載内容については、全て本人からの申し出によるものである。

【職・氏名】

職名については、平成26年10月1日現在のものである。

【学 位】

平成26年5月1日現在の本人の申し出による学士以上の最終学位とした。

【略 歴】

原則として3件までの記載とした。

【最近5年間の主な研究業績等】

平成22～26年度(5年間)の主な研究業績を10点まで記載した。

原則として、著書等は『 』、論文等は「 」で表記した。

【平成21年度以前の主な研究業績等】

平成21年度以前の主な研究業績を5点まで記載した。

原則として、著書等は『 』、論文等は「 」で表記した。

【所属学会】

原則として平成26年5月1日現在所属する学会・研究会とした。

【最近5年間の学会等および社会における主な活動】

最近5年間における学会等における役職や、社会的活動などを記載した。

【教育活動の自己評価】

過去3年間を中心に教育活動全般に関する自己評価並びに教育内容や方法の改善・工夫等、教育活動の実績について記載した。学生の課外活動への指導等についてもこの欄に記載した。

【研究活動の自己評価】

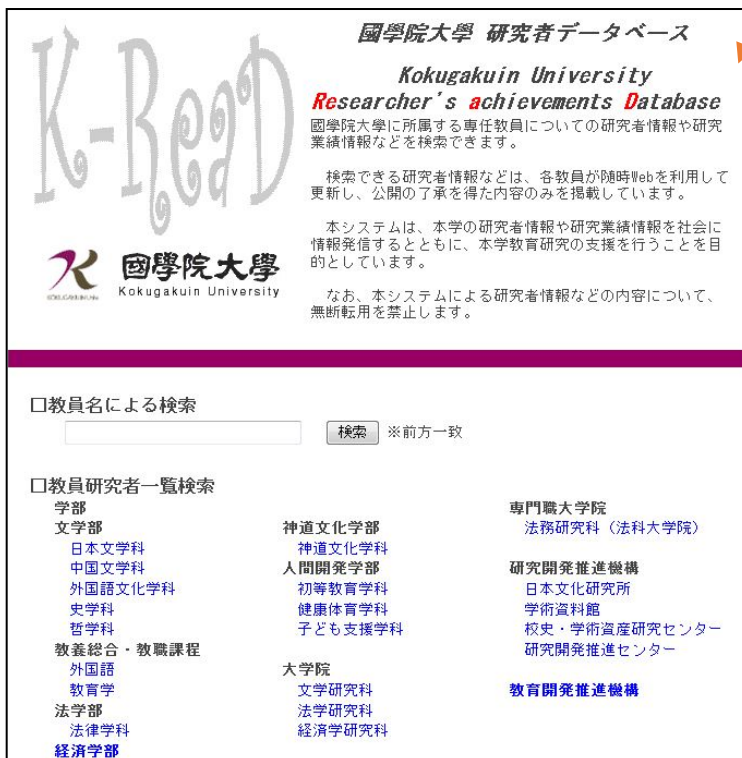
過去3年間を中心に研究活動に関する自己評価等を記載した。

※法科大学院の実務家教員については、【最近5年間の主な研究業績等】【平成21年度以前の主な研究業績等】のかわりに、【主な研究業績等】【主な実務活動・社会的活動等】(記載内容については本人の申し出通り表記)を記載している。

4 ホームページでの公開について

本報告書は、國學院大學ホームページ内「研究者データベース(K-Read)」の情報を基に作成している。本報告書では前記の通り、掲載する業績を限定しているが、ホームページでは全業績を公開している。

URL : <https://www7.kokugakuin.ac.jp/k-read/>



文学部

【日本文学科】

秋澤	互	教	授	5	
飯倉	義之助	教	授	6	
石川	則夫	教	授	7	
井上	明芳	准	教	授	8
大久保	一男	教	授	9	
大和	博幸	教	授	10	
岡田	哲	教	授	11	
小川	直之	教	授	12	
カイザー, シュテファン		教	授	13	
久野	マリ子	教	授	14	
佐野	光一	教	授	15	
新谷	尚紀	教	授	16	
須永	和之	教	授	17	
辰巳	正明	教	授	18	
谷口	雅博	准	教	授	19
豊島	秀範	教	授	20	
中村	正明	准	教	授	21
橋本	貴朗	准	教	授	22
花部	英雄	教	授	23	
針本	正行	教	授	24	
諸星	美智直	教	授	25	
山岡	敬和	教	授	26	
吉田	永弘	准	教	授	27
渡邊	欣雄	教	授	28	

【職・氏名】教授 秋澤 亙 AKIZAWA Wataru

【学 位】博士(文学)(平成20年3月 國學院大學文乙第233号)

【本学就任】平成8年

【略 歴】國學院大學文学部文学科卒業

國學院大學大学院文学研究科日本文学専攻博士課程後期単位取得満期退学

活水女子大学文学部日本文学専任講師

【専門分野】平安朝文学

【最近5年間の主な研究業績等】 [平成22～26年度] (10点まで)					
種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または該当ページ	発行年月
論文	単	「頭中将の変貌・再考」	『活水日文』55号 活水女子大学日本文学会	全162p中 pp.17-39	平26. 1
論文	単	『源氏物語』の皇女―「女源氏の物語」の視点から―	『志能風草』復刊1号 國學院大學王朝文学研究会	全298p中 pp.4-20	平25. 3
論文	単	「袴着―『姪の子の齡』の比喻をめぐる―」	『源氏物語と儀礼』 武蔵野書院	全801p中 pp.47-63	平24. 11
論文	単	「読解の演出としての准拠―『源氏物語』桐壺巻から―」	『源氏物語の礎』 青簡社	全357p中 pp.11-35	平24. 3
編著	共	『源氏物語を考える』(考えるシリーズ3)	武蔵野書院	全234p	平23. 10
論文	単	『『垣間見』私見―『源氏物語』蛭巻を端緒として―」	『物語文学論究』13号 國學院大學物語文学研究会	全314p中 pp.25-36	平23. 3
論文	単	『『和泉式部日記』における和歌贈答の挫折」	『日記文学を考える』 武蔵野書院	全240p中 pp.99-128	平23. 1
論文	単	「道綱母の日月の夢」	『むらさき』47 紫式部学会	全131p中 pp.55-59	平22. 12
論文	単	「中の君の新枕の朝―『源氏物語』総角巻八月二十九日早朝の時間矛盾―」	『平安文学研究』第二号 國學院大學平安文学研究会	全97p中 pp.61-71	平22. 9
編著	共	『王朝文化を学ぶ人のために』	世界思想社	全278p	平22. 8

【平成21年度以前の主な研究業績等】 (5点まで)					
種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または該当ページ	発行年月
論文	単	「源氏物語の音楽・舞楽と准拠―男踏歌をめぐる―」	『王朝文学と音楽』 竹林舎	全614p中 pp.506-529	平21. 12
論文	単	「源氏物語と歌謡―作中女性の受容をめぐる―」	『國學院雑誌』第110巻第11号 國學院大學	全455p中 pp.117-127	平21. 11
論文	単	「仕立物の依頼―不在の時姫の喚起する文脈から―」	『日記文学研究』第三集 新典社	全283p中 pp.66-89	平21. 10
論文	単	『『源氏物語』明石の君の育ちと素養』	『國學院大學大学院平安文学研究』第一号 國學院大學 平安文学研究会	全144p中 pp.31-40	平21. 9
論文	単	「明石一族の和歌」	『源氏物語の歌と人物』 翰林書房	全461p中 pp.91-109	平21. 5

【所属学会】全国大学国語国文学会、中古文学会、國學院大學國文學會、西日本国語国文学会、日記文学会

【最近5年間の学会等および社会における主な活動】

全国大学国語国文学会常任委員(平18. 4～現在に至る)、中古文学会常任委員(平24. 4～現在に至る)、日記文学会運営委員(平14. 4～現在に至る)

【教育活動の自己評価】

正課教育に関する試みとして、10年ほど前からカラー図版を使った授業を展開している。担当科目の都合上、平安朝当時の衣装や色などの時代風俗を可視的に示す必要が多く、これに対しては現在普及しているモノクロの複写(コピー)では対応できない。ために、カラー図版による資料を提供し、学習の理解を高めようとしている。蓄積した図版のデータベースは20,000点を超え、大抵の平安作品の場面解説が可能になった。

このデータベースを無償で広く提供することは可能なのか。文部省管轄の学校教育の正課授業においては、著作権法の規制を免除され、書籍や雑誌から図版を切り取り、教材として使うことができる。しかし、その授業のための図版を、他者が無償で提供できるかどうかは、十分承知していない。

高等学校の先生方から、図版公開の期待が多く寄せられているので、何とかそのために尽力したい。

【研究活動の自己評価】

平成19年に学位論文を公刊してから、10年近くが経過してきたので、第二弾として日記文学の研究書の刊行を目指す。また、現在進行中の『紫式部日記』の意匠研究の延長線上に、国文学研究資料館のプロジェクトに乗る形で、公家装束に関する共同研究を大学院で展開する。

【職・氏名】助教 飯倉 義之 IIKURA Yoshiyuki

【学 位】博士(文学)(平成20年3月 國學院大學 文甲第109号)

【本学就任】平成25年

【略 歴】國學院大學大学院文学研究科博士課程後期 単位取得満期退学
大学共同利用法人人間文化研究機構 国際日本文化研究センター 機関研究員
京都学園大学人文学部歴史文化学科 非常勤講師

【専門分野】口承文芸学、民俗学

【最近5年間の主な研究業績等】 [平成22～26年度] (10点まで)

種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または 該当ページ	発行年月
論文	単	「河童死して手を残す—河童遺物伝承の整理—」	国立歴史民俗博物館・常光徹[編]『河童とはなにか:歴博フォーラム 民俗展示の新構築』 岩田書院	全323p中 pp.211-246	平26. 3
評論・ 書評等	単	書評:「回顧でも展望でもなく—二〇一二年/没後五〇年の、二つの「柳田國男特集」書評—」	『比較日本文化研究』16号 比較日本文化研究会	全189p中 pp.173-178	平25. 12
論文	単	「「ラノベらしさ」と「世界」と「趣向」—ジャンル小説として読むライトノベル—」	一柳廣孝・久米依子『ライトノベル・スタディーズ』 青弓社	全319p中 pp.34-47	平25. 10
辞書・ 事典等	共	『日本怪異妖怪大事典』	東京堂出版	全658p	平25. 7
解説・ 解題等	単	「解題—つながりの昔話研究—」	『野村純一著作集9 口承文芸研究のネットワーク』 清文堂出版	pp.419-431	平25. 4
論文	単	「都市伝説が「コンテンツ」になるまで—「都市伝説」の一九八八～二〇一二年—」	『口承文芸研究』36 日本口承文芸学会	pp.90-102	平25. 3
論文	単	「都市伝説化する「想像力」—「大きな物語の喪失」と陰謀論的想像力—」	『比較日本文化研究』15 風響社	pp.53-63	平24. 9
論文	単	「怪談と口承文芸」	『口承文芸研究』35 日本口承文芸学会	pp.147-157	平24. 3
論文	単	「〈句型〉の認識と説話の分類—「燈台鬼」説話と都市伝説「だるま男」の比較から—」	『説話・伝承学』19 説話・伝承学会	pp.110-127	平23. 3
著書	共	『ニッポンの河童の正体』	新人物往来社	全189p	平22. 10

【平成21年度以前の主な研究業績等】 (5点まで)

種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または 該当ページ	発行年月
論文	単	「郷土史家の声、民俗学者の耳—「不適格な話者」としての郷土史家—」	『郷土史と近代日本』 角川学芸出版	pp.293-312	平22. 3
調査・研究 報告等	共	『世間話関連文献目録集成—(口承)研究へのとびら—』	世間話研究会	全553p	平21. 8
論文	単	「美しい地球の〈秘境〉—(オカルト)の揺籃としての—一九六〇年代(秘境)ブーム—」	『オカルトの惑星:1980年代、もう一つの世界地図』 青弓社	pp.19-39	平21. 2
論文	単	「現地の〈声〉と研究倫理」	『日本民俗学』253号 日本民俗学会	pp.75-83	平20. 2
論文	単	「愚か村話の近代—「解釈する言説」の変遷—」	『口承文芸研究』24 日本口承文芸学会	pp.49-61	平13. 3

【所属学会】日本口承文芸学会、日本民俗学会、説話・伝承学会、現代民俗学会、京都民俗学会

【最近5年間の学会等および社会における主な活動】

渋谷民話の会・温故学会主催「渋谷の民話を語る」講演会実行委員(平21. 4～現在)、
日本口承文芸学会理事・会報委員(平21. 4～平23. 3)、説話・伝承学会事務局幹事(平21. 4～平23. 3)、
国立歴史民俗博物館第四展示室(民俗)展示リニューアル協力者(常光徹班)(平22. 4～平25. 3)、
日本民俗学会中長期計画策定特別委員会委員長(平25. 6～現在)

【教育活動の自己評価】

「伝承文学」「民俗学」という学問が単なる座学ではなく、自らの生活を内省するための方法である事への気づきを促す教育を目指している。そのために学生に身近な現代の文化・行事・物語などが、かつての伝承・民俗と共通する基盤を持っていることを示す、身近な生活空間でのフィールドワークの成果を示すなどして、学生に「学問は自分の生活や人生と無関係ではないのだ」という意識を高めてもらう工夫をしている。

【研究活動の自己評価】

かつての村落共同体の事象に向かいがちな伝承文学・民俗学の方法を積極的に現代文化の分析に用いることで、その有効性と限界を改めて探り、かつ現代文化における文化の不変部分、可変部分を照らし出す研究を目指している。具体的には民俗文化の研究と並行して現代のポピュラー・カルチャーやマスメディア、生活文化の分析も行い、両者の対照から変化・変容を考察する手法を試みている。

【職・氏名】教授 石川 則夫 ISHIKAWA Norio

【学 位】博士(文学) (平成22年7月 國學院大學 文乙第254号)

【本学就任】平成8(1996)年4月1日

【略 歴】國學院大學文学部文学科卒業

國學院大學大学院文学研究科日本文学専攻博士課程単位取得満期退学

【専門分野】日本近代文学

【最近5年間の主な研究業績等】 [平成22～26年度] (10点まで)

種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または該当ページ	発行年月
論文	単	「批評の中の〈私〉へ—小林秀雄「私小説論」が問うこと—」	『都留文科大学研究紀要』第79集 都留文科大学研究紀要編集委員会	全25p	平26. 3
論文	単	「小林秀雄「私小説論」の指向性」	『日本文学論究』第73冊 國學院大學國文學會	全14p	平26. 3
論文	単	「小林秀雄の講演「雑感」と「本居宣長」—昭和四十年・國學院大學での講演から—」	『日本文学論究』第72冊 國學院大學國文學會	全13p	平25. 3
論文	単	「夏目漱石『ころ』「上・先生と私」を追跡する—回想の往還記述—」	『國學院大學教育学研究室紀要』第47号 國學院大學教育学研究室	全11p	平25. 2
論文	単	「小説の時間—「ざくろ」と「笹舟」に触れて—」	『川端文学への視界(川端康成学会編)』 第27号 川端康成学会・(株)銀の鈴社	全15p	平24. 6
論文	単	「森鷗外「舞姫」の今—中等室の読者へ—」	『國學院大學教育学研究室紀要』第46号 國學院大學教育学研究室	全10p	平24. 2
論文	単	「森鷗外「舞姫」を読むために—発見的記述の行方—」	『國學院大學教育学研究室紀要』第45号 國學院大學教育学研究室	全12p	平23. 2

【平成21年度以前の主な研究業績等】 (5点まで)

種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または該当ページ	発行年月
論文	単	「小林秀雄「真贋」論—その虚構を貫くもの—」	『都留文科大学研究紀要』第71集 都留文科大学	pp.53-74	平22. 3
著書	単	『文学言語の探究—記述行為論序説—』	笠間書院	全403p	平22. 2
論文	単	「書くことの交錯と飛躍—夏目漱石『ころ』論—」	『国文学解釈と鑑賞』第106巻3号 至文堂	pp.100-107	平20. 7
論文	単	「文学研究の記述行為論へ」	『國學院雑誌』第104巻第8号 國學院大學	全58p中 pp.1-11	平15. 8
論文	単	「物語の失速／小説の挫折◎「伊豆の踊子」再論」	『〈新しい作品論〉へ、〈新しい教材論〉へ』2 右文書院	pp.144-158	平11. 2

【所属学会】國學院大學國文學會、日本近代文学会、川端文学研究会、昭和文学会、言語問題総合研究会、横光利一文学会、日本文学協会

【最近5年間の学会等および社会における主な活動】

明治書院国語教科書編集委員(平10. 3～現在)

【教育活動の自己評価】

1年生の導入教育科目では、基礎学力の確認、レポートの書き方等既定の共通シラバスに沿った授業を行うが、特に準備学習の重要性を確認することに努めた。授業の数日前には必ず一斉メール送信機能を活用し、授業内容の予告と予習の励行を促した。結果として、使用するテキストの入手を受講生自ら行うなど授業への導入がスムーズになった。レポートは3回提出・添削後返却したが、37名に1名ずつ返却するのかなり時間がかかり改善すべきところである。また、書ける者と書けない者の差異があり、特に書けない者へのフォローをどうするか今後の課題点である。

3年生の演習科目では、大学院生TAをつけてレジュメ作成指導を授業前に行い、研究論文の前提になるような発表を促した。4年生では卒論のための先行研究論文の調査結果を各自が発表し、検討し合う形式で行い、各自の卒論研究に資するよう配慮したが、受講生数24名では1名の持ち時間が少なく、どう効率よく行うかが課題である。また前期課題として各自の研究対象における先行研究史を提出させたが、これは卒論の第I章になるので、夏期休暇中は本論の下書きへ進めることになる。

大学院では、「私小説に関わる言説」の調査・検討をテーマとし、演習を行った。この演習テーマに沿った論文作成が後期の課題となる。博士後期課程者のTAが中心に文献調査を継続中である。

今年度の課題としては、昨年10名だった卒論履修者が今年は24名に増加したため、いかにして充実した指導を行うかが問題であり、演習の時間外での指導を計画的に組み込まざるをえなかったことについて受講生の反応を踏まえて対策をたてたい。

【研究活動の自己評価】

継続中の研究課題は小林秀雄研究と文学理論研究である。前者は毎年論文として発表しているが25年度には國學院大學国文学会春季大会でのシンポジウムに「私小説論」を中心に研究発表する機会を得られたので、昭和10年前後の批評活動への見直しを探る事ができた。成果として、「日本文学論究」「都留文科大学研究紀要」へ論文文化できた。後者の文学理論研究には言語論的研究方法の追求をテーマとしているが、レトリック論からの展開をどう考えるか、考察中である。また、ここ数年間にわたって、国語教育研究方面への関心から、高校教材として採用される近代文学で、森鷗外「舞姫」論を2つ、漱石「ころ」論は1つ「教育学研究室紀要」へ投稿しているが、「ころ」論は継続して考察中である。

また、学会活動として、昭和文学会では幹事、日本近代文学会では評議員、日本文学協会では運営委員の役職を受けており、日本文学協会にあっては、投稿論文の査読評価と研究発表大会(24年度長野野大・25年度神戸大・26年度いわき明星大)における司会を受け持っている。しかし、ここ数年は学務のため、学会への参加がままならない状況である。

【職・氏名】准教授 井上明芳 INOUE Akiyoshi

【学 位】博士(文学)(平成26年3月 國學院大學 文乙第269号)

【本学就任】平成23年

【略 歴】國學院大學文学部文学科 卒業

國學院大學大学院文学研究科日本文学専攻 博士課程後期 単位取得満期退学

青山学院女子短期大学現代教養学科日本専攻 非常勤講師

【最近5年間の主な研究業績等】 [平成22～26年度] (10点まで)

種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または該当ページ	発行年月
調査・研究報告等	単	『森敦「月山」総合的研究』	國學院大學	全471p	平26.3
論文	単	「横光利一「純粹小説論」の(境界)性」	『日本文学論究』第73冊 國學院大學国文学会	全10p	平26.3
論文	単	「恩田陸「ピクニックの準備」の構造的把握—「期待」される物語—」	『國學院大學教育学研究室紀要』第48号 國學院大學文学部教育学研究室	全10p	平26.2
調査・研究報告等	単	『横光利一自筆資料集—横光家・鶴岡市所蔵資料の翻刻と調査—』	國學院大學	全213p	平25.3
著書	単	『文学表象論・序説 小林秀雄・横光利一—文学言説の境界』	翰林書房	全391p	平25.2
論文	単	「山田詠美「ひよこの眼」の構造—学ばれる物語の発見—」	『國學院大學教育学研究室紀要』第47号 國學院大學文学部教育学研究室	全10p	平25.2
論文	単	「描かれる子ども像—近代への視線」	『國學院大學出版部発行の児童雑誌「兄弟」「姉妹」「兄弟姉妹」の総合的研究』 國學院大學	全7p	平25.2
調査・研究報告等	共	平成23年度文学部共同研究報告書 横光利一「夜の靴」研究 本文校異、注釈及び関連資料調査	國學院大學	全316p	平24.3
論文	単	教材としての「富嶽百景」の構造的把握—他者とともに在ることの発見—	『國學院大學教育学研究室紀要』第46号 國學院大學文学部教育学研究室	全11p	平24.2
論文	単	国木田独歩「牛肉と馬鈴薯」論—独白を生成する会話体構造—	『解釈』第57巻第7・8号 解釈学会	全10p	平23.8

【平成21年度以前の主な研究業績等】 (5点まで)

種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または該当ページ	発行年月
著書	共	『横光利一 歐洲との出会い『歐洲紀行』から『旅愁』へ』	おうふう	全222p	平21.7
論文	単	「閉じられたフィクション—荷風「腕くらべ」を読む—」	『文学』第10巻第2号 岩波書店	pp.72-79	平21.3
論文	単	「小林秀雄の(歴史)観・序説—「私」の問題と(歴史)観との接統一」	『國學院大學紀要』第46巻 國學院大學	pp.27-43	平20.2
論文	単	「横光利一「機械」論—語ることの原理へ—」	『國學院雑誌』第106巻第1号 國學院大學	pp.61-73	平17.1
辞書・事典等	共	『横光利一事典』	おうふう	全648p	平14.10

【所属学会】國學院大學國文學會、日本近代文学会、解釈学会、日中文化研究会、昭和文学会、横光利一文学会

【最近5年間の学会等および社会における主な活動】

【教育活動の自己評価】

学科の初年時導入教育として「日本文学概説Ⅰ」を担当し、本学の歴史や学問伝統について教授し、学生の学びの基礎の育成に努めた。そのために必要な「読む力」「書く力」の育成を目標にしてレポートを課し、添削の上返却するなど、一人一人の能力の向上につながるよう心掛けた。専門教育では「日本文学講読Ⅰ・Ⅱ」を担当し、小説テキストの構造分析を通じて(読み)の可能性について講義し、小説の読解方法の修得につとめた。また「日本文学演習Ⅱ」では、グループ発表の形式をとり、個々の読解力や発表力を、話し合いや資料の共同作成を通じて、より発揮できるようにした。演習内容も単行本だけではなく、初出雑誌などの書誌的事項の調査も重視し、研究手法の基礎的習得に配慮した。これらの集大成として卒業論文の作成の指導を通じて、自ら考え、自ら執筆するという主体性を養成しつつ、社会に向けて情報発信できる力を習得させた。大学院では、中学校・高等学校の国語教科書に採録されている題材を取り上げ、教材観を養いつつ、若手教員の育成に努めた。課外活動として横光利一や森敦などの研究会を組織し輪読や現地調査など、多岐にわたる研究方法へのアプローチを通じて学生の研究面での能力の育成を支援している。

【研究活動の自己評価】

横光利一や森敦について、自筆資料の調査、翻刻を中心に研究を進めた。横光の自筆資料については平成23年～平成24年度「横光利一自筆資料の調査翻刻による研究基盤形成」(研究活動スタート支援、JSPS科研費 No.23820049)で行い、森の自筆資料については平成25年～平成27年度(予定)「森家所蔵森敦自筆資料による基礎的研究」(基盤研究C、JSPS科研費 No.25370228)で研究中である。これらは横光、森の未公開資料を含むため、それぞれの研究の基礎的な寄与を果たすとともに、「日本文学演習Ⅱ」などで紹介し、教育的に意義のある知見を示している。これらを踏まえながら、論考をまとめ、学位申請論文を提出し、博士(文学)(文乙 第269号 國學院大學)を平成26年3月に取得した。テキスト理論と自筆原稿などの書誌的研究とを融合させ、小説テキストの研究のさらなる可能性について見出した。

【職・氏名】教授 **大久保 一 男** OKUBO Kazuo
 【学 位】博士(文学)(平成7年1月 國學院大學 文乙第117号)
 【本学就任】昭和58年
 【略 歴】國學院大學文学部文学科卒業
 國學院大學大学院文学研究科日本文学専攻博士課程単位取得満期退学
 山梨県立女子短期大学国文学科助教授
 【専門分野】国語学
 【受賞歴等】今泉博士記念賞(平成7年3月)

【最近5年間の主な研究業績等】 [平成22～26年度] (10点まで)					
種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または該当ページ	発行年月
論文	単	「源氏びいきの待遇法—源氏物語における敬語不使用場面について—」	『國學院雑誌』第112巻第10巻 國學院大學	全11p	平23. 10

【平成21年度以前の主な研究業績等】 (5点まで)					
種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または該当ページ	発行年月
論文	単	「覚一本平家物語の『まかる』」	『國學院雑誌』第104巻第7号 國學院大學	pp.1-12	平15. 7
論文	単	「続日本紀宣命の『ます・います』」	『國學院雑誌』第103巻第3号 國學院大學	pp.1-10	平14. 3
論文	単	「源氏物語の敬語法に関する一つの事例」	『国語研究』第64号 國學院大學国語研究会	pp.15-17	平13. 3
著書	単	『源氏物語の敬語法』	おうふう	全250p	平7. 4
論文	単	「続日本紀宣命の客体敬語」	『國學院雑誌』第83巻第5号 國學院大學	pp.13-23	昭57. 5

【所属学会】日本語学会、國學院大學国語研究会

【最近5年間の学会等および社会における主な活動】

【教育活動の自己評価】

学部で担当する、いずれも『源氏物語』を教材とする、「講読」と「演習」において、原文の現代語訳をとおして、各自の使用する現代語を豊かにしてほしいという願いを込めて、教育にあたっている。卒業後の社会生活をも見据えての願いである。古文読解のための、語彙・語法を中心とする事項の解説は、「高校で学んでいるはず」を禁句とし、基本事項から、分かり易さを念頭に。板書の仕方にも意を用い、筆記に際して読み易い文字を書くことの心構えを喚起する。あまりにも稚拙な文字を書く学生が増加していることを憂慮してのことである。期末試験の答案および演習時の発表から読み取る教育活動の成果は、達成度60%と自己評価する。

大学院においては、口頭による研究発表と論文作成を目指して「演習」を行うが、学生の意欲と努力とによって、成果が得られていると認識する。

【研究活動の自己評価】

主な研究領域を、『源氏物語』を中心とした古代の敬語使用法としているが、論文発表が途絶えていることにおいて、研究活動が停滞しているとせざるをえない。目下、敬語史に関する事項と『源氏物語』中の敬語語彙に関する事項について調査の途上にあるが、進捗に努めて目的を果たす(1件は、平27.2の発行誌に掲載)。ひきつづき、テーマとしてきた、敬語の不使用箇所を含めた『源氏物語』の敬語使用法について取り組む所存である。

【職・氏名】教授 大 和 博 幸 OWA Hiroyuki
 【学 位】文学士
 【本学就任】昭和46年
 【略 歴】國學院大學文学部史学科卒業
 國學院大學図書館司書
 【専門分野】日本近世出版文化史、図書館文化史
 【受賞歴等】日本出版学会賞<佳作>(平成4年5月)

【最近5年間の主な研究業績等】 [平成22～26年度] (10点まで)					
種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または 該当ページ	発行年月
論文	単	「明治期の地方出版業者—明治六年～明治十五年—」	『國學院大學伝統文化リサーチセンター研究紀要』第3号 國學院大學伝統文化リサーチセンター	全286p中 pp.175-196	平23. 3

【平成21年度以前の主な研究業績等】 (5点まで)					
種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または 該当ページ	発行年月
論文	単	「江戸後期・明治初年の地方出版業者—文政元年から明治五年まで—」	『國學院大學伝統文化リサーチセンター研究紀要』第2号 國學院大學伝統文化リサーチセンター	pp.131-148	平22. 3
論文	単	「伊勢山田の地方書肆講古堂(藤原家・加藤家)文書の解題と翻刻—近世の部」	『日本出版史料—制度・実態・人』8 日本エディタースクール出版部	全170p中 pp.1-31	平15. 5
論文	単	「広域出版流通の進展と本屋(書物屋)仲間の変容」	『図書館文化史研究』No.18 日外アソシエーツ	全119p中 pp.21-42	平13. 9
論文	単	「江戸時代広域出版流通の形成と発展—基礎的考察」	『國學院雑誌』第102巻第2号 國學院大學	全64p中 pp.31-48	平13. 2
著書	共	『近世地方出版の研究』	東京堂出版	全293p	平5. 5

【所属学会】日本出版学会、日本図書館情報学会、国史学会

【最近5年間の学会等および社会における主な活動】

【教育活動の自己評価】

司書課程では、司書資格取得に必要な科目(前期4コマ・後期5コマ)、司書教諭資格取得に必要な科目(夏季集中講義1コマ)の授業を担当した。司書資格科目では、対象者であるすべての利用者に均等なサービスを提供するように努力し続けることが公共図書館サービスの在り方であることを、司書教諭資格科目では、読書能力の向上が今後社会生活を送る上で極めて重要な要素となることを認識してもらえよう講義を心掛け、受講生の理解力を高めるために適切なアドバイスを行うように努めた。

授業では他に、書誌学1・書誌学2(日本文学科選択科目)前・後期1コマの講義を担当した。書誌学1では和本の形態についての基礎知識、書誌学2では江戸期の版本を題材としてその発展過程と流通事情に深くかかわる本屋についての基礎知識を得てもらうように努めた。この講義では、なるべく和本の現物ないし複製資料などを用意し、受講生の理解力の向上に配慮しながら丁寧な授業を行うように心掛けた。

【研究活動の自己評価】

三都(京都・大坂・江戸)以外の地に所在していた江戸期の地方本屋を研究対象として、その実数把握や営業の実態、三都本屋仲間との関係(仲間加入本屋発行本の入手方法・流通状況など)、版權の問題(作者や蔵版者との関係)、流通上関連する他業種(彫師・摺師など)との関係などといった観点から実態解明を進め、いくつかの論文にまとめて発表してきた。今後は、同様の視点から明治期までの地方在住本屋の実態把握を進めて行きたいと考え資料の収集にあたり現在論文を作成中であり、いずれ発表の機会を得たいと考えている。

【職・氏名】教授 岡田 哲 OKADA Satoshi

【学 位】文学修士

【本学就任】昭和61年

【略 歴】國學院大學文学部文学科卒業

國學院大學大学院文学研究科日本文学専攻博士課程後期単位取得満期退学

【専門分野】日本文学、日本近世文学

【最近5年間の主な研究業績等】 [平成22～26年度] (10点まで)					
種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または該当ページ	発行年月
翻訳・翻刻書	単	『講談丸本『大岡政要録 惣吉一件』解題と翻刻』(上)	『渋谷近世(國學院大學近世文学学会会報)』20号 國學院大學近世文学学会	全26p	平26. 3
翻訳・翻刻書	単	『幕末の地方戯作『安鶴在世記』-解題と翻刻』	『渋谷近世(國學院大學近世文学学会会報)』19号 國學院大學近世文学学会	全118p中 pp.15-27	平25. 3
翻訳・翻刻書	単	『白川根笹雪』	『近世実録翻刻集』 近世実録翻刻集刊行会(発行責任・大阪大谷大学高橋圭一研究室)	全352p中 pp.205-226	平25. 2
論文	単	『『白川根笹雪』攷一近世実録物の一展開一』	『國學院雑誌』第113巻第7号 國學院大學	全14p	平24. 7
翻訳・翻刻書	単	解題と翻刻『麻布黒鍬谷敵討』-もう一つの『白川根笹雪』	『渋谷近世(國學院大學近世文学学会会報)』18号 國學院大學近世文学学会	全154p中 pp.34-85	平24. 3
翻訳・翻刻書	単	『近世俗文芸と謡曲』	『金春月報』3・4・5・6・7 金春円満井会	全15p	平24. 3
翻訳・翻刻書	単	『『近代東怪談』-翻刻と解題-』	『渋谷近世(國學院大學近世文学学会会報)』17号 國學院大學近世文学学会	全140p中 pp.23-33	平23. 3
著書	単	『お江戸の名所検定』	技術評論社	全206p	平22. 9
その他	単	『句集あそびがみ』	沖積社	全314p	平22. 9

【平成21年度以前の主な研究業績等】 (5点まで)					
種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または該当ページ	発行年月
翻訳・翻刻書	共	『幕末期・開化期文学資料集・仮名垣魯文2』	國學院大學文学部日本文学科 1015研究室	全270p	平22. 3
論文	単	『『日本永代蔵』の造形-連想の連鎖-』	『國學院雑誌』第108巻第1号 國學院大學	pp.1-13	平19. 1
論文	単	『『大岡政談』余滴』	『江戸文学』29 ペリかん社	全192p中 pp.94-97	平15. 11
著書	共	『世界一難しい漢字を使う日本人』	トランスワールドジャパン	全191p	平14. 8
論文	単	『『国に移して風呂釜の大臣』攷』	『國學院大學紀要』第38巻 國學院大學	pp.165-187	平12. 3

【所属学会】日本近世文学会、日本文学協会

【最近5年間の学会等および社会における主な活動】

【教育活動の自己評価】

講義科目においては、双方向の授業展開を心がけている。発問の回数を多くし、その答えを全体に対して復唱するなど注意喚起にも配慮している。また導入基礎科目では、それに加えて、辞書類の選択方法・レポートの書き方など、上級学年の演習科目に結びつく内容を必須の形で授業回数に取り込んでいる。また学科他専攻との導入科目との関連を重視して、そちらの領域での素材や研究方法が、所属専攻ではどのように関連づけられるかを常に念頭において、教材選びをしている。また演習ではガイダンス資料を配付して、レジュメの作成までのプロセス、レジュメ作成の方法、発表・司会・質疑応答の方法など、学生の主体的に演習に取り組む意欲を喚起し、持続させる努力を行っている。また研究室では、学生参加の研究会を週一回のペースで開き、演習形式で議論を行い、その成果は研究室発行の会報に生かせる形をとっている。また同時にそこで得た。読解力を自らの創作(創造)能力に発揮できるように、文芸創作活動も行うよう推奨しており、その成果は2～3年に一度書籍の形でまとめて、発行している。

【研究活動の自己評価】

近世文学における話藝(講談・実録体小説)と元禄期から近世中期の散文形態(韻文系を主体とする作家、例えば西鶴など)を専門研究領域としている。前者の場合は学会全体が基礎研究の段階であり、新出資料の発掘や未紹介資料の解題・翻刻を主とする。解題では、写本で残る諸資料の調査結果・諸本の本文異同・系統の特定など文献学的な基礎研究の成果を専らとしている。後者では読解研究に力を注いでいる。特に本学の伝統領域である民俗学の成果を踏まえた読解方法や韻文(俳諧)の方法に基づく読解方法の可能性を探っている。また読解と創作は一体のものであるという信念の基に、創作面においても、その成果は2冊の句集として刊行している。

【職・氏名】教授 小川直之 OGAWA Naoyuki
 【学 位】博士(民俗学)(平成7年11月 國學院大學 文乙第124号)
 【本学就任】平成6年
 【略 歴】國學院大學文学部文学科卒業
 平塚市博物館主任学芸員
 【専門分野】民俗学
 【受賞歴等】第1回日本民俗学会研究奨励賞(昭和56年)

【最近5年間の主な研究業績等】 [平成22～26年度] (10点まで)					
種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または 該当ページ	発行年月
論文	単	「折口信夫の民俗探訪」	『現代思想』5月臨時増刊号 第42巻第7号 青土社	pp.199-211	平26. 4
論文	単	「民俗芸能の舞台公演と写真—折口博士民俗 写真コレクションから—」	『國學院大學研究開発推進機構学術資料セ ンタープロジェクト研究報告 人文科学と画 像資料研究』第7集 國學院大學研究開発推進機構学術資料センター	pp.5-41	平26. 2
論文	単	「神樹見聞録—フィールドワークから見えてくる こと」	『暮らしの伝承知を探る』 玉川大学出版部	pp.66-107	平25. 10
著書	単	『日本の歳時伝承』	アーツアンドクラフツ	全308p	平25. 10
論文	単	「「若水」から聖水信仰論へ」	『國學院雑誌』第114巻第10号 國學院大學	pp.85-110	平25. 10
論文	単	「棚田と民俗文化—日本の原風景—とは何か —」	『日本の原風景・棚田』第14号 棚田学会	pp.3-13	平25. 7
論文	単	「柳田國男・折口信夫と三遠南信」	『伊那民俗研究』第20号 柳田國男記念伊那民俗学研究所	pp.13-40	平25. 5
論文	単	「柳田國男と折口信夫—民俗学の交錯—」	『日本民俗学』271号 日本民俗学会	pp.91-119	平24. 8
論文	単	「日本における「歴史文化基本構想」の策定と 今後」	『伝承文化研究』第10号 國學院大學伝承文化学会	pp.1-10	平24. 3
論文	単	「「文化産業」をどう捉えるか—日本の場合から —」	南台科技大學応用日語系2011年国際学術 検討会論文集「文化産業と日本語教育の結 合とその可能性 台湾 南台科技大學人文社会学院応用日語 系	pp.33-50	平23. 10

【平成21年度以前の主な研究業績等】 (5点まで)					
種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または 該当ページ	発行年月
編著	共	『折口信夫・釋迢空—その人と学問—』	おうふう	全402p中 pp.39-77, 361-402	平17. 4
編著	共	『多摩民具事典』	(財)たましん地域文化財団	全400p	平9. 10
著書	単	『歴史民俗論ノート』	岩田書院	全122p	平8. 2
著書	単	『摘田稲作の民俗学的研究』	岩田書院	全600p	平7. 7
著書	単	『地域民俗論の展開』	岩田書院	全416p	平5. 6

【所属学会】日本民俗学会、日本文化人類学会、日本民具学会、棚田学会、芸能学会、東アジア比較文化国際会議

【最近5年間の学会等および社会における主な活動】

日本民具学会 理事・評議員(平22. 10～現在)、棚田学会理事(平11. 8～現在)、芸能学会理事(平26. 7～現在)、
 八王子市史編集委員会委員(平21. 4～現在)、平塚市文化財保護委員会委員(平成19. 10～現在)、
 秦野市文化財保護委員会委員(平成23. 1～現在)、豊島区文化財保護委員会委員(平成23. 6～現在)

【教育活動の自己評価】

教育活動は学部の専門教育、大学院における専門教育ならびに研究指導、課外活動である民俗学研究会での研究指導の3つを並行して行っている。学部専門教育は1年生の伝承文学概説から3・4年生の演習ならびに卒業論文指導があり、民俗学・伝承文化研究の入門から研究実践の指導までに及んでおり、具体的事象の把握から自らの視点を明確にしながらの実証的分析が行えることを目指している。演習においては、概ね受講者が比較研究法に基づく実証的な研究法が修得できている。大学院においては、22年度から26年度の間課程博士2名、論文博士2名の主査あるいは副査を務め、研究者の輩出を進めている。研究指導を行った大学院前期課程修了者・後期課程満期退学者の中には、公立博物館学芸員として採用になった者、本学研究開発推進機構のPD研究員などとして勤務する者もあり、研究指導等の実効があがっているといえる。課外の民俗学研究会は学部1年生から大学院生までが会員で、毎週2回の研究発表指導、年2回の実地調査の指導を行い、学部生の中から毎年、大学院進学者が出ている。

【研究活動の自己評価】

最近5年間の活動は、神樹・聖水・年中行事など個別課題の研究、折口信夫・柳田國男の民俗研究に関する学史的な研究、中国貴州省ならびに台湾、韓国、インドでの海外民俗研究の3つを並行して進めている。個別課題の研究では著書の出版、論文発表を積極的に進めている。折口・柳田の民俗研究に関する学史的な研究も論文執筆を行うとともに、折口に関しては折口博士記念古代研究所所蔵資料の整理等を進めている。海外民俗研究については、現地研究者との共同研究を中心とし、その成果は論文に組み込んでいるが、できる限り本学大学院生から参加希望者を募り、院生の海外調査研究の機会をつくっている。

【職・氏名】教授 **カイザー, シュテファン** Stefan KAISER
 【学 位】Ph.D.(昭和60年5月 ロンドン大学)
 【本学就任】平成23年
 【略 歴】ロンドン大学SOAS(アジア・アフリカ研究科)日本語科助教授
 ロンドン大学日本研究センター所長
 筑波大学教授・留学生センター長
 【専門分野】日本語学、日本語教育学

【最近5年間の主な研究業績等】 [平成22～26年度] (10点まで)					
種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または該当ページ	発行年月
著書	単	『漢字の魅力にひそむエンドレス感と西洋世界の漢字学習「システム」』	高田智和・横山詔一編『日本語文字・表記の難しさと、おもしろさ』彩流社	全25p	平26. 3
論文	単	「明治前後の西洋人によるワ・ガの記述再考」	『國學院大學大学院紀要—文学研究科—』第45輯 國學院大學大学院	全15p	平26. 3
著書	共	Japanese: a Comprehensive Grammar, 2nd ed.	Routledge	全698p	平25. 1
著書	単	「漢字:その魅力にひそむエンドレス感」	第4回NINJALフォーラム『日本語文字・表記の難しさとおもしろさ』 国立国語研究所	全7p	平24. 6
論文	単	「日本語動詞活用の分類 ロドリゲスと宣長を中心に」	『國學院雑誌』第112巻第12号 國學院大學	全14p	平23. 12

【平成21年度以前の主な研究業績等】 (5点まで)					
種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または該当ページ	発行年月
論文	単	「日本語学史におけるシーボルトの位置付け—関係資料からの追求—」	『日本語の研究』第4巻1号 日本語学会	pp.31-46	平20. 1
著書	共	『朝倉日本語講座1 世界の中の日本語』	朝倉書店	全237p	平17. 6
論文	単	「Exercises in the Yokohama Dialectと横浜ダイアレクト」	『日本語の研究』第1巻1号 日本語学会	pp.35-49	平17. 1

【所属学会】日本語学会

【最近5年間の学会等および社会における主な活動】

人間文化研究機構教育研究評議会評議員(平22. 4～平25. 3)

【教育活動の自己評価】

近年、はじめて学部演習を担当することになり、いろいろ考えたあげく、日本語教育関係の教材を題材にすることにしました。日本語教育というと通常は日本で開発された教材が中心になるが、向きをかえて記述言語が英語であるもの、海外で出版されたものを中心に選定した。通年の授業なので、興味が持続するように、前半では新規な方法や発送による漢字の教材や辞書を扱ったが、後半では日本語のテキストを材料により厳密な教科書分析とその方法を対象とした。いずれのばあいも、海外の目でみた日本語という視点を導入することにより、国際的なアウトルックをもつ学生の育成をめざし、活発な発表と討論が実施できた。また、大学院の授業でも、英語で書かれた文字学の入門書を扱い、関係外国語では16世紀のポルトガル人が書いた、ラテン語による日本語の分析を扱い、常に国際性を追求している。

【研究活動の自己評価】

近年の研究には二つのストランドがあり、漢字とその教育と、西洋人による日本語研究史とである。前者は「漢字の魅力にひそむエンドレス感」とそれを発展させた『漢字の魅力にひそむエンドレス感と西洋世界の漢字学習「システム」』として活字化し、西洋人学習者にとっての漢字の学習困難さとその解決法の試みを分析した。後者としては日本語教育における現行の動詞分類を、17世紀のロドリゲスがすでに類似した発想で行ったこと、宣長も後続の学者よりはおおきなパターンを重視した点を示し、また別稿では明治前後の西洋人が西洋諸語に存在しないハとガの本質に苦勞した研究史を扱った。

【職・氏名】教授 久野 マリ子 KUNO Mariko

【学 位】博士(文学)(平成18年3月 國學院大學 文乙第218号)

【本学就任】昭和59年

【略 歴】高知女子大学文学部国文学科卒業

東京都立大学大学院人文科学研究科博士課程単位取得満期退学

國學院大學日本文化研究所教授

【専門分野】日本語学、方言学、音声学

【受賞歴等】沖縄文化協会金城朝永賞(平成6年11月)、吉川博士記念賞(平成19年6月)

【最近5年間の主な研究業績等】 [平成22～26年度] (10点まで)

種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または 該当ページ	発行年月
論文	単	「首都圏方言の形成と共通語化」	『首都圏の言語の実態と動向に関する研究 成果報告書 首都圏言語研究の視野』 人間文化機構国立国語研究所	全326p中 pp.19-38	平26. 2
論文	単	「首都圏方言若年層の音声の変遷」	『首都圏の言語の実態と動向に関する研究 首都圏言語研究の視野』 人間文化機構国立国語研究所	全326p中 pp.219-225	平26. 2
編著	共	『日本のことばシリーズ23 愛知県のことば』	明治書院	全234p	平25. 3
編著	単	『首都圏方言の研究』4号	『首都圏方言の研究』4 國學院大學大学院文学研究科久野研究室	全94p	平25. 3
論文	共	「新書のカタカナ表記に見る外来語の増加について」	『首都圏方言の研究』4 國學院大學大学院文学研究科久野研究室	全9p	平25. 3
論文	単	「新東京都言語地図点描—音韻・アクセントといくつかの項目から—」	『国語研究』76 國學院大學国語研究会	全35p	平25. 2
論文	共	「神奈川県小田原市方言におけるいくつかの音声現象の動向」	『神田外語大学院紀要』18 神田外語大学大学院	pp.11-30	平24. 3
論文	共	「神奈川県小田原方言におけるラ行音の撥音化」	Scientific Approaches to Language 11 Kanda University of International Studies	全338p中 pp.89-102	平24. 3
論文	単	「第二言語習得における弁別の特徴と余剰の特徴—台湾母語話者の清音・濁音と有気音と無気音の聞き分けについて—」	『國學院雑誌』第112巻第12号 國學院大學	全118p中 pp.40-53	平23. 12
論文	単	「首都圏方言における大学生の言語生活—挨拶表現と音声変化の例—」	『國學院雑誌』第112巻第5号 國學院大學	全58p中 pp.1-19	平23. 5

【平成21年度以前の主な研究業績等】 (5点まで)

種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または 該当ページ	発行年月
著書	単	『日本方言基礎語彙の研究』	おうふう	全412p	平17. 6
編著	共	『東京語のゆくえ』	東京堂	全381p	平8. 3
論文	共	「四つ仮名対立の消失過程」	『国語学』180号 日本語学会	全13p	平7. 3
編著	共	『現代日本語方言大辞典』	明治書院	1～6巻; 全5547p 7～9巻; 全1487p	平4. 2
著書	共	『琉球竹富島の方言』	國學院大學日本文化研究所	全141p	平2. 3

【所属学会】日本音声学、国語学会、日本方言研究会、國學院大學国語研究会、日本言語学会、古事記学会、沖縄文化協会、社会言語科学会、日本音韻研究会、九州方言研究会、琉球大学琉球方言学会、日本語学会

【最近5年間の学会等および社会における主な活動】

日本学術振興会科学研究費補助金 審査第二部会文学小委員会委員(平21. 3～平22. 3)、

日本音声学監査(平26. 4～現在)、

大学共同利用機関法人 人間文化研究機構国立国語研究所外部評価委員(平21. 9～平23. 3)

【教育活動の自己評価】

学部専門教育では『現代日本語研究』『言語学』の演習を担当した。パワーポイントを用いたプレゼンテーションを体験させ、各自の研究成果を表現する体験を通して、わかりやすい自己表現と現代日本語学の基礎的作業を身につけさせた。『音声学』では、実践的な音声学と授業を通じて、日本語に起きている日本語変化を自覚させた。文学部講演会を開き、最高の研究者の研究の一端を披露してもらい学生に一流の研究の雰囲気を与えた。大学院においては二人の博士号審査の主査を務めた。大学院の演習テーマである『首都圏方言の研究』の成果を毎年刊行し、大学院生の成果の公表に努めている。学部では國學院大學方言研究会を主宰し、新潟県魚沼市方言の研究について学生の自主的な研究、研究成果発表を指導した。卒業論文の学生を対象に、卒業論文中間発表会、卒業論文発表会を開き、ゼミのない本学において学生同士の横のつながりを保つよう努めている。

【研究活動の自己評価】

首都圏方言の研究を中心に、学術振興会の科学研究費補助金基盤C、挑戦的研究の研究分担者として研究を進めた。積極的に海外の学会での発表をしている。東京市出身の方言音声の収集を積極的に進め、その文字化をおこなった。日本音声学では監査、日本語学会の評議員、日本方言研究会の世話人を務め、学会の発展に貢献している。研究活動としては引き続き首都圏方言の研究を続けている。東京都言語地図の作成と発表も準備している。

【職・氏名】教授 佐野 光一 SANO Koichi
 【学 位】美術学修士
 【本学就任】昭和56年
 【略 歴】東京教育大学教育学部芸術学科書専攻卒業
 東京教育大学大学院美術学専攻修士課程修了
 【専門分野】書法、篆刻、金石学

【最近5年間の主な研究業績等】 [平成22～26年度] (10点まで)					
種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または 該当ページ	発行年月
論文	単	「迷盤・迷鼎の文字形體—西周金文の変遷から」	『若木書法』十三 國學院大學若木書法會	全108p中 pp.1-16	平26. 2
論文	単	「江戸版本 節用の草書『和漢草字辨』を基として」	『若木書法』十一 國學院大學若木書法會	全94p中 pp.7-19	平24. 2
論文	単	「天長市出土木牘の書法—漢隸の成立と草書の成長」	『若木書法』十 國學院大學若木書法會	全87p中 pp.1-16	平23. 2

【平成21年度以前の主な研究業績等】 (5点まで)					
種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または 該当ページ	発行年月
論文	単	「漢隸の成立一点の確立により近代書體が成る。」	『若木書法』九 國學院大學若木書法會	全117p中 pp.1-20	平22. 3
編著	単	『改訂・草書の覚えかた』	天来書院	全143p	平18. 4
著書	単	『収蔵賞鑑印』	東京堂出版	全188p	平4. 2
著書	単	『篆刻入門—その基礎知識』	東京堂出版	全207p	平2. 5
編著	単	『木簡字典』	雄山閣出版	全878p	昭60. 8

【所属学会】

【最近5年間の学会等および社会における主な活動】

【教育活動の自己評価】

実技科目以外では、影印講読、表現文化、表現文化演習の3教科を担当した。何れも手作りの教材を使い、学生の理解度により、修得できる方法と内容を心がけ作成した。影印講読は140から150名の学生に、一ヶ月に一度のノート提出と添削返却を行い、毎週課題を出し、理解度を確かめながら進めた。その内容は漢字仮名の基礎知識と読解力を高める作業を主とした。「粘葉本和漢朗詠集」を基にワークブックを作り易しいものから難しいものへと深めていった。またプリントを各週3枚程を用いて、漢字の書体と変遷、行書の特徴、別体を知ること、基本字例を何度も書くことから修得できる様にした。仮名は、萬葉仮名、片仮名、平仮名の特徴と成立など、「典型的資料をもとに読み書いて、日本独自の仮名の美と共に、それらの書体としての特質や変遷を正しく理解させるようにした。影印本を読む基礎力は半年という短い期間では確立することが難しいが、文学を専攻する学生が、直接古典の原本を読む入門の授業として、浅くとも広い基礎知識を持ち基本が身につく手ほどきとして内容を工夫している。表現文化の方は、甲骨文字を読み書くとか、短冊に和歌を手を持って書けるようにするとか、具体的な目標を挙げている。そして授業のために作った教材を丁寧に模写や臨書する指導をし、文字の美を広く理解する内容としている。又書道研究會の学生を指導し、他学部の学生の書法の理解と享受表現など支援している。

【研究活動の自己評価】

社会人を対象とした授業で、新出土の中国古代文字を資料としているため、年に2・3種選び、細かな分析研究を行っている。文字学的にも書法の面からも分析するため、まず基本字例を、八百字から千字の量で作る。そして基本点画、結構、章法など分析し、前後する時代の典型的なものを比較し、その特徴をしっかり把握することに努めてきた。最近の研究対象は、甲骨・金文・楚簡戦国文字、前漢から新、後漢の簡牘文字を専攻する。時代は長く、新資料も大量にある。今日まで空白時代であったものが、具体的に考古学的な発掘による資料により、めざましい進歩で文字の事実が明らかになっている分野である。この時代にこれに関わっている研究者として、特に隸変については一家言を持つ成果を成したと自負する。又古隸や漢隸から草書が成立するが、それについてもいよいよ理解を深め、佳境に入っていくべく務めたい。また表現文化演習で、これまで日本の書道史では、文字学的・構造的追求が少なかったが、日本独自の別字という観点から、日本の書の変遷の中で大きな問題となっている和様とは何か御家流とは何か、それらの特質はということ、字形で追求する作業を一步一步進めている。

【職・氏名】教授 **新谷 尚紀** SHINTANI Takanori
 【学 位】博士(社会学)(平成10年2月 慶應義塾大学 第3159号)
 【本学就任】平成22年
 【略 歴】早稲田大学大学院文学研究科史学(日本史)専攻博士課程 単位取得退学
 山村女子短期大学国際文化科助教授
 国立歴史民俗博物館民俗研究部教授
 【専門分野】日本民俗学

【最近5年間の主な研究業績等】 [平成22～26年度] (10点まで)					
種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または該当ページ	発行年月
論文	単	「しあわせとは何か」	『宗教研究』第88巻第2輯 日本宗教学会	pp.105-130	平26. 9
論文	単	「伊勢神宮と持統天皇一遷宮についての伝承分析学(日本民俗学)からの一視論一」	『明治聖徳記念学会紀要』復刊第50号	pp.31-45	平25. 11
著書	単	『伊勢神宮と三種の神器—古代日本の祭祀と天皇—』	講談社選書メチエ	全320p	平25. 11
論文	単	「鎮魂の祭儀—折口信夫の鎮魂論と文献史学との接点を求めて—」	『國學院雑誌』第114巻第10号 國學院大學	pp.51-68	平25. 10
編著	共	『民俗小事典 食』	吉川弘文館	全512p	平25. 8
論文	単	「ケガレの構造」	『岩波講座 日本の思想 第六巻 秩序と規範 「国家」の成り立ち』 岩波書店	pp.21-56	平25. 6
論文	単	「日本の民俗学と台湾の民俗研究への寄与の可能性」	『國立臺北藝術大學二〇一一文化資源經展講座暨研究生學術檢討會論文集』『文資学報』第七期	pp.157-194	平24
著書	単	『日本人はなぜそうしてしまうのか お辞儀、胸上げ、拍手…の民俗学』	青春出版社	全189p	平24
著書	単	『民俗学とは何か—柳田・折口・洪沢に学び直す—』	吉川弘文館	全257p	平23. 5
論文	単	「戦死者記念と文化差—memorialと慰霊 fallen soldiersと英霊—」	関沢まゆみ編著『戦争記憶論』 昭和堂	全286p pp.203-225	平22. 7

【平成21年度以前の主な研究業績等】 (5点まで)					
種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または該当ページ	発行年月
著書	単	『伊勢神宮と出雲大社—「日本」と「天皇」の誕生—』	講談社選書メチエ	全276p	平21. 3
著書	共	『ブルターニュのパルドン祭り—日本民俗学のフランス調査—』	悠書館	全295p	平成20
著書	単	『柳田民俗学の継承と発展—その視点と方法—』	吉川弘文館	全523p	平17
著書	単	『両墓制と他界観』	吉川弘文館	全313p	平3
著書	単	『ケガレからカミへ』	木耳社	全244p	昭62

【所属学会】日本民俗学会

【最近5年間の学会等および社会における主な活動】

【教育活動の自己評価】

日本文学科の伝承文学専攻は、単なる昔話や伝説だけを学習するコースではない。日本文学科に所属して伝承文化を学習するコースである。その伝承文化研究とは、柳田國男が折口信夫の理解と協力を得ながら日本で創生した日本民俗学のことである。日本民俗学はフォークロアの翻訳学問ではなく独自の視点と方法を持っている。このことを担当する「民俗学史」の講義で具体的な例をあげながらわかりやすい解説につとめている。そして、「演習」では実際に学生たちの選択したテーマにそって論文の作成と論集の刊行へと指導している。その延長上ですぐれた卒業論文を書く学生たちも出てきている。

【研究活動の自己評価】

西洋科学の輸入ではない日本創生の日本民俗学(伝承文化分析学)への誤解を解き、その独自性と学術的な価値を広く理解してもらうために、専門的な学術論文と研究著作(「高度経済成長と農業の変化」、『伊勢神宮と出雲大社』など)の刊行を中心にしつつ、教科書(『民俗学とは何か』)や、わかりやすい一般書(『日本人はなぜそうしてしまっているのか』)の刊行にもつとめている。

【職・氏名】教授 須 永 和 之 SUNAGA Kazuyuki
 【学 位】学術修士
 【本学就任】平成11年
 【略 歴】國學院大學文学部文学科卒業
 図書館情報大学大学院図書館情報学研究科修士課程修了
 筑波大学図書館部情報サービス課
 図書館情報大学図書館情報課
 沖縄国際大学文学部国文学科専任講師
 【専門分野】図書館学
 【受賞歴等】第4回小林宏記念日仏図書館情報学会奨励賞(平成26年)

【最近5年間の主な研究業績等】 [平成22～26年度] (10点まで)					
種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または該当ページ	発行年月
論文	単	「フランスの学校図書館」	『日仏図書館情報研究』38 日仏図書館情報学会	全50p中 pp.23-38	平25
著書	共	「フランスに見る学校図書館専門職員:ドキュマンタリスト教員の活動」	全国学校図書館協議会	全119p	平24. 7
評論・書評等	単	「図書館のトポロジー (INFOSTA Forum 第256回)」	『情報の科学と技術』 vol.62 No.4 情報科学技術協会	全189p中 p.185	平24. 4
論文	単	Le cursus des bibliothécaires japonais	Bibliothèque(s) Association des bibliothécaires de France	全86p中 pp.38-39	平24. 3
その他	単	「海外レポート カリブ海から21世紀の学習者へ: 第40回IASL大会参加報告」	『学校図書館』 通巻735号 全国学校図書館協議会	pp.81-83	平24. 1
著書	共	『学校経営と学校図書館(シリーズ学校図書館学;第1巻)』	全国学校図書館協議会	全体p205 p39-50, p66-69, p96-117	平23. 3
論文	単	「海外の学校図書館の動向」	『学校図書館』 通巻723号 全国学校図書館協議会	pp.33-35	平23. 1
解説・解題等	共	「子どもが伸びる読書日記」	経済界	全94p中 pp.79-81	平22. 10

【平成21年度以前の主な研究業績等】 (5点まで)					
種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または該当ページ	発行年月
調査・研究報告等	共	「学校図書館活用ハンドブック:学力向上のための読書活動」	静岡大学	全68p中 pp.3-4, 7, 12	平22. 3
調査・研究報告等	単	「全国SLA委嘱研究報告(3)学校図書館の可能性と期待」	『学校図書館』 通巻708 全国学校図書館協議会	pp.81-83	平21. 10
調査・研究報告等	単	「学校図書館評価基準:項目の解説(特集 学校図書館を評価する)」	『学校図書館』 通巻701 全国学校図書館協議会	pp.37-42	平21. 3
論文	単	「フランスの学校図書館における目録情報:汎用システムBCDIの活用」	『現代の図書館』 46巻3号 日本図書館協会	pp.214-219	平20. 9
調査・研究報告等	共	『平成18年度新教育システム開発プログラム報告書』	全国学校図書館協議会	全52p中 pp.6-7	平19. 3

【所属学会】日本図書館情報学会、西日本図書館学会、日本学校図書館学会、日本図書館文化史研究会、情報メディア学会
 国際学校図書館協会(IASL ; International Association of School Librarianship)、日仏図書館情報学会、

【最近5年間の学会等および社会における主な活動】
 日本図書館協会『現代の図書館』編集委員長(平13～現在)

【教育活動の自己評価】

学校図書館司書教諭課程の2科目で『学校経営と学校図書館』『学習指導と学校図書館』では受講者参加型の演習形式で学生による研究発表を行って、学生たちから学習内容の理解が深まったと好評を得ている。学校図書館司書教諭課程の『学校図書館メディアの構成』『情報メディアの活用』、図書館司書課程の『情報資源組織概論1』『情報資源組織演習1・3』では、学生が理解しにくい内容を配布資料で図解し、プレゼンテーションソフトウェアを用いて工夫を行い、深く理解できるようにした。

【研究活動の自己評価】

国際図書館連盟IFLAおよび国際学校図書館協会IASLの研究大会に参加して、図書館関係者および研究者と連携を深めて、世界各国の図書館事情および学校図書館の活動状況について研究を行っている。とりわけ、フランスの学校図書館専任専門教員であるドキュマンタリスト教員についての研究を継続しており、日本の学校図書館の教職員(司書教諭および学校司書)の養成課程との比較という点で、今後はさらに研究を深めたい。

【職・氏名】教授 辰 巳 正 明 TATSUMI Masaaki
 【学 位】博士(文学)(平成7年7月 成城大学 文博乙4号)
 【本学就任】平成12年
 【略 歴】二松学舎大学文学部国文学科卒業
 成城大学大学院文学研究科国文学専攻博士課程単位取得満期退学
 大東文化大学文学部日本文学科教授
 【専門分野】上代文学、東アジア比較文化論
 【受賞歴等】上代文学会賞(昭和60年)

【最近5年間の主な研究業績等】 [平成22～26年度] (10点まで)					
種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または 該当ページ	発行年月
論文	単	「万葉びとの旅は何を発見したか」	『文学・語学』208号 全国大学国語国文学会	全106p中 pp.37-43	平26. 3
編著	共	『古事記歌謡注釈』	新典社	全285p	平26. 3
論文	単	「折口学とアジア文化研究」	『國學院雑誌』第114巻第10号 國學院大學	全125p中 pp.19-32	平25. 10
論文	単	「山上憶良与九想観詩」	『国際中国文学研究叢書』第二集 上海古籍出版社	全317p中 pp.60-70	平25. 10
論文	単	「天皇の歌」	『國學院雑誌』第114巻第8号 國學院大學	全88p中 pp.17-27	平25. 8
著書	単	『懐風藻全注釈』	笠間書院	全534p	平24. 10
著書	単	『万葉集の歴史』	笠間書院	全615p	平23. 10
著書	単	『コレクション山上憶良』	笠間書院	全120p	平23. 7
論文	単	「山上憶良と敦煌詩一九相観詩との関係か ら」	『国語と国文学』87巻7号 東京大学国語国文学会	全80p中 pp.1-14	平22. 7
論文	単	「古代日本漢詩の成立」	『東亜視域与遣隋唐使』 光明日報社/中国	全242p中 pp.54-61	平22. 6

【平成21年度以前の主な研究業績等】 (5点まで)					
種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または 該当ページ	発行年月
論文	単	「歌謡の時代」	『國學院雑誌』第110巻第11号 國學院大學	全455p中 pp.1-12	平21. 11
論文	単	「カムヤマトイハレヒコの誕生」	『古代文芸論叢』 おうふう	全870p中 pp.38-50	平21. 11
著書	単	『歌垣－恋歌の奇祭をたずねて』	新典社	全159p	平21. 1

【所属学会】美夫君志会、上代文学会、全国大学国語国文学会、東アジア比較文化国際会議

【最近5年間の学会等および社会における主な活動】

東アジア比較文化国際会議日本支部理事(平8. 10～現在)、全国大学国語国文学会常任委員(平22. 7～現在)

【教育活動の自己評価】

写本影印を使用しながら、解説をすることで、出来るだけ原典に触れるように努めた。

【研究活動の自己評価】

文学史を考えた作品研究を目的とした。

【職・氏名】准教授 谷口雅博 TANIGUCHI Masahiro

【学 位】博士(文学)(平成21年7月 國學院大學 文乙第244号)

【本学就任】平成22年

【略 歴】國學院大學文学部第二部文学科 卒業

國學院大學大学院文学研究科博士課程後期 単位取得満期退学

國學院大學文学部兼任講師

【専門分野】日本上代文学(古事記・日本書紀・万葉集・風土記)

【最近5年間の主な研究業績等】 [平成22～26年度] (10点まで)					
種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または該当ページ	発行年月
論文	単	「崇神天皇」	『歴史読本』58巻4号 新人物往来社	全336p中 pp.78-83	平25.4
論文	単	『古事記』上巻・出雲系系譜記載の意義	「古事記」編纂1300年に寄せて『日本神話をひらく』第九回日本文学国際会議 フェリス女学院大学	全235p中 pp.192-210	平25.3
論文	単	「古事記の成立を考える」	國學院大學創立130周年記念事業 文学部企画 学術講演会・シンポジウム報告書 國學院大學 文学部	全117p中 pp.8-19	平25.3
論文	単	『古事記』神話の中の災害－災いをもたらすモノ－	季刊『悠久』129号 おうふう	全108p中 pp.23-36	平25.1
論文	単	『出雲国風土記』の声と語り	語りの講座『昔話の声とことば』 三弥井書店	全319p中 pp.208-235	平24.12
論文	単	『古事記』「祖」字の用法	『國學院雑誌』第112巻第11号 國學院大學	全516p中 pp.110-122	平23.11
論文	単	「風土記」の異類婚－始祖を語る(型)－	『古代文学』50号 古代文学会	全136p中 pp.38-44	平23.3
論文	単	『日本書紀』の応神天皇像	季刊『悠久』121号 おうふう	全176p中 pp.42-54	平22.8
論文	単	『常陸国風土記』国名起源説話考	『國學院雑誌』第111巻第7号 國學院大學	全75p中 pp.1-13	平22.7
論文	単	「王権伝承と歴史叙述」	『躍動する日本神話』 森話社	全275p中 pp.94-109	平22.5

【平成21年度以前の主な研究業績等】 (5点まで)					
種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または該当ページ	発行年月
論文	単	『常陸国風土記』香島郡「事向」の文脈	青木周平先生追悼『古代文芸論叢』 青木周平先生追悼論文集刊行会	全870p中 pp.413-425	平21.11
論文	単	『出雲国風土記』地名起源記事の文体－(秋鹿郡)を中心に－	『風土記の表現－記録から文学へ－』 笠間書院	全543p中 pp.131-148	平21.7
著書	単	『古事記の表現と文脈』	おうふう	全401p	平20.11
著書	共	『風土記探訪事典』	東京堂出版	全308p	平18.9
論文	単	『播磨国風土記』の天日槍命と葦原志許乎命	『大美和』110号 大神神社	全88p中 pp.12-19	平18.1

【所属学会】古事記学会、美夫君志会、古代文学会、萬葉学会、アジア民族文化学会、國學院大學國文學會、日本文学協会、上代文学会

【最近5年間の学会等および社会における主な活動】

古事記学会事務局担当理事(平成22.7～現在)、上代文学会常任理事(平成23.4～現在)

【教育活動の自己評価】

学部1年生の導入教育として日本文学概説を担当。漢字の伝来からはじまる文字表記の歴史を確認し、文字表記の発達展開と文学作品の内容とが密接に関連する点を説明。作品としては、上代・中古・中世文学あたりまでを、毎年一つのテーマを設けて通覧。また、2年次以降の分野を専攻する場合にも参考とし得るように、伝承文学、日本語学、書誌学的内容も盛り込んでいる。特に書誌学的な面については、古写本の複製本等を見せ、後に演習授業で要求される本文校訂に関する基礎知識について触れている。漢字では異体字、仮名では変体仮名を読むことを実践して、古写本や注釈書類を読む力を身につけるためのきっかけ作りをしている。次に、2年次以降を対象とする演習科目では、『古事記』『風土記』等の上代散文作品を対象とし、本文校訂・訓読文作成・語釈の検討を通して新たな作品の読みを模索している。平成25年度より大学院での指導教員となり、授業において『古事記』注釈の細部に亘る検討を行っている。平成25年度末に課程博士論文2本、修士論文2本の副査を担当した。

【研究活動の自己評価】

『國學院雑誌』平成23年11月特集号「古事記研究の現在」の責任編集及び執筆を行う。平成24年度國學院大學創立130周年記念事業学術講演会『古事記』の成立を考える－撰録1300年記念－の開催担当責任者となり、年度末作成の報告書には論文を執筆。平成24年度刊行の國學院大學貴重書影印叢書第一巻所収『猪熊本令義解』の解題執筆、平成25年刊行の第二巻『神皇正統記・轍原抄』の責任編集(共編)を担当。平成25年後期から始まった、國學院大學21世紀研究教育計画の研究事業『古事記』の学際的・国際的研究に研究代表者の一人として参画、現在に至る(以後継続予定)。

【職・氏名】教授 豊島秀範 TOYOSHIMA Hidenori

【学 位】博士(文学)(平成8年3月 國學院大學 文乙第130号)

【本学就任】平成15年

【略 歴】國學院大學文学部文学科卒業

國學院大學大学院文学研究科日本文学専攻博士課程単位取得満期退学

【専門分野】平安朝文学・中世王朝文学、(民俗学・儀礼文化学)

【最近5年間の主な研究業績等】 [平成22～26年度] (10点まで)					
種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または該当ページ	発行年月
著書	共	『狭衣物語全註釈』Ⅷ(巻4上)	おうふう	全467p中 pp.2-134	平26. 4
著書	共	『青森県史』民俗編 資料 津軽 第1部・第3部	青森県発行 青森県史編纂委員会編	全771p中 pp.221-251, CD-ROM1枚	平26. 3
著書	共	『源氏物語本文のデータ化と新提言』3	科研費「基盤研究C」による報告書	全371p中 pp.118-370	平26. 3
論文	単	「天皇と和歌—後鳥羽院の四季の和歌を中心に—」	『國學院雑誌』第114巻 第8号	pp.1-16	平25. 8
論文	単	「アメリカ議会図書館本『源氏物語』本文の実態—「桐壺」巻を中心に—」	『平安文学研究』第4号 國學院大學大学院平安文学研究会発行	全57p中 pp.1-19	平25. 8
論文	単	「物語を支える儀礼文化—寺社詣でと花宴—」	『儀礼文化学会紀要』第1号(通巻第44号) 儀礼文化学会発行	全212p中 pp.177-194	平25. 3
著書	共	『狭衣物語全註釈』Ⅶ(巻3下)	おうふう	全509p中 pp.2-136	平25. 2
著書	共	『狭衣物語全註釈』Ⅵ(巻3中)	おうふう	全420p中 pp.2-160	平24. 2
著書	共	『源氏物語本文の研究』	科研費「基盤研究A」による研究報告書	全283p中 pp.49-80	平23. 3
著書	共	『狭衣物語全註釈』Ⅴ(巻3上)	おうふう	全443p中 pp.6-140	平22. 11
【平成21年度以前の主な研究業績等】 (5点まで)					
種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または該当ページ	発行年月
論文	単	「吉川家本(毛利家伝来)『源氏物語』の目録と巻末注記—七毫源氏との比較—」	科研費「基盤研究A」による報告書『源氏物語本文の再検討と新提言』3所収	全387p中 pp.91-104	平22. 3
著書	共	『狭衣物語全註釈』Ⅳ(巻2下)	おうふう	全461p中 pp.3-95, 268-281	平21. 10
著書	共	『狭衣物語全註釈』Ⅲ(巻2上)	おうふう	全363p中 約 70頁担当	平20. 10
著書	共	『青森県史』民俗編 資料 下北 第1部・第3部	青森県発行 青森県史編纂委員会編	全711p中 pp.215-258, 554-652	平19. 3
著書	単	『物語史研究』	おうふう	全663p	平6. 5

【所属学会】國學院大學国文学会、日本文学協会、中古文学会、全国大学国語国文学会、物語研究会、中世文学会、儀礼文化学会、日本民俗学会、

【最近5年間の学会等および社会における主な活動】

中古文学会常任委員・同編集委員(平22. 5～25.5) 我孫子市教育委員(平24. 12～現在に至る)

【教育活動の自己評価】

平成24年から千葉県我孫子市の教育委員として、国でも議論が進んでいる教育委員会の在り方や、いじめ問題、小中一貫教育などに対する検討と対応に関わってきている。その経験に基づき、教員を目指す学生に対して、教員として必要な知識や対応などについて、具体的な話し合いが可能になっている。また、学部の演習授業では、発表資料や態度などに対して、受講生それぞれが評価する形を採用し、前期と後期の2回、発表の機会を設けている。そのために、前期での資料や発表に対して評価の低かったところを修正して、後期には満足いく発表を実現できるようになっている。さらには大学院生の演習授業では、『狭衣物語』の写本の内、初めての本文を校訂し、校異・現代語訳・語釈を施した資料を作成し、発表と議論を経て、テキストとして完成させて製本し、研究者70名ほどに送付している。平成26年度には2冊目のテキストを完成させる予定である。

【研究活動の自己評価】

『源氏物語』と『狭衣物語』の研究を継続してきている。すなわち、平成19～22年度は文科省の「基盤研究A」を、23～25年度は「基盤研究C」による『源氏物語』の本文研究を行ない、平成26年度からの3年間も「基盤研究C」による「源氏物語の本文研究」を継続していく。『狭衣物語』については、400頁ほどの『狭衣物語全註釈』を毎年1冊ずつ刊行しており、全11冊のうち、残る3冊についての研究作業と刊行を、引き続き行なっていく。

【職・氏名】准教授 中村正明 NAKAMURA Masaaki

【学 位】修士(文学)

【本学就任】平成26年

【略 歴】國學院大學文学部文学科卒業

國學院大學大学院文学研究科日本文学専攻 博士課程後期単位取得満期退学

【専門分野】近世文学(江戸戯作)、明治初期文学

【最近5年間の主な研究業績等】 [平成22～26年度] (10点まで)					
種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または該当ページ	発行年月
翻訳・翻刻書	単	「黄表紙『間違曲輪遊』翻刻と注釈」	『澁谷近世 國學院大學近世文学会会報』第19号 國學院大學近世文学会	pp.36-55	平25. 3
翻訳・翻刻書	単	「恋川春町の狂文全翻刻」	『澁谷近世 國學院大學近世文学会会報』第19号 國學院大學近世文学会	pp.28-35	平25. 3
論文	単	「昔話物合巻の概要」	『日本文学論究』第72冊 國學院大學國文學會	pp.41-52	平25. 3
論文	単	「酒上不埒の狂歌 一附・全狂歌ならびに索引」	『國學院大學紀要』第51巻 國學院大學	pp.59-97	平25. 1
論文	単	「恋川春町の狂文」	『國學院雑誌』第113巻第12号 國學院大學	pp.29-44	平24. 12
論文	単	「黄表紙化された伝承童謡―「いつちくたつちく」「かごめかごめ」など」	『澁谷近世 國學院大學近世文学会会報』第18号 國學院大學近世文学会	pp.107-114	平24. 3
翻訳・翻刻書	単	「黄表紙『桃太郎再駈』翻刻と注釈」	『澁谷近世 國學院大學近世文学会会報』第18号 國學院大學近世文学会	pp.133-151	平24. 3
論文	単	「童言葉と黄表紙―「焼いた牛蒡をおつつける」ほか―」	『日本文学論究』第71冊 國學院大學國文學會	pp.92-104	平24. 3
著書	共	『コレクション・モダン都市文化第66巻 江戸文化と下町』	ゆまに書房	全849p	平23. 9
著書	単	『膝栗毛文芸集成』全十二巻	ゆまに書房	全5896p	平22. 6

【平成21年度以前の主な研究業績等】 (5点まで)					
種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または該当ページ	発行年月
著書	共	『幕末・開化期文学資料集 仮名垣魯文二』	國學院大學文学部日本文学1015研究室	全269p	平22. 3
論文	単	「十返舎一九作『滑稽三人生酔』の基礎的研究と翻刻 ―國學院大學図書館所蔵未刊滑稽本について―」	『國學院大學紀要』第46巻 國學院大學	pp.201-233	平20. 2
著書	単	『草双紙研究資料叢書』全八巻	クレス出版	全4460p	平18. 6
論文	単	「昔話物黄表紙の概要と展開」	『昔話伝説研究』第23号 昔話伝説研究会	pp.81-93	平15. 3
論文	単	「黄表紙『不物好持たが病』考 ―刊年及び素材と趣向について―」	『國學院雑誌』第101巻第3号 國學院大學	pp.54-65	平12. 3

【所属学会】國學院大學國文學會、日本近世文学会

【最近5年間の学会等および社会における主な活動】

國學院大學オープンカレッジ講師 (平20. 4～現在)

【教育活動の自己評価】

担当科目においては、学生の主体的な学習を促しており、一方的な講義にならないように工夫している。そのために、学生に問題提起や調査主題を設定して事前事後の学習に取り組むよう指示し、積極的な授業参加をするように呼びかけている。特に「日本文学演習」では、他人の演習発表を聴く折にもワークシートを用いて、その発表に関する評価や疑問点等を細かくチェックさせ、自分の発表改善に活かせるような方法を探っている。また、学生主体の研究会を指導しており、学生の研究活動をバックアップしてその取り組みを支えている。

【研究活動の自己評価】

ここ数年の研究活動は大きく三点に絞られる。一つ目は、戯作者恋川春町の文芸活動を総括するために、黄表紙作品読解を中心として狂歌狂文類の整理解説に取り組んでいる。二つ目は、膝栗毛文芸の総体的な把握と研究である。いまだ未整理のままである膝栗毛文芸を、滑稽本のみならずさまざまなジャンルへと波及した作品までも視野に入れて整理している。そして、それらの特徴や文学史的な位置付けを施している。それらの成果の一環として、編著『膝栗毛文芸集成』(第二十九巻まで刊行中)をまとめている。三つ目は、仮名垣魯文や岡本起泉など明治初期戯作者の戯作類を整理して読解するという基礎的作業を進めている。これは、研究者仲間と明治初期文学研究会という研究会を催して輪読を行い、資料集をまとめるなどの成果を遺している。

【職・氏名】准教授 橋本貴朗 HASHIMOTO Takaaki
 【学 位】博士(芸術学)(平成21年3月 筑波大学 博甲第5136号)
 【本学就任】平成22年
 【略 歴】大東文化大学文学部日本文学科 卒業
 筑波大学大学院博士課程人間総合科学研究科芸術学専攻 修了
 国際仏教学大学院大学学術フロンティア研究員
 【専門分野】日本書道史、書学、書法美学

【最近5年間の主な研究業績等】 [平成22～26年度] (10点まで)

種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または該当ページ	発行年月
論文	単	『源氏物語』梅枝巻に見る中国書論の受容	『若木書法』13 國學院大學文学部若木書法會	pp.39-54	平26. 2
その他	共	「書学書道史学会会員研究動向(平成24年度)」	『書学書道史研究』第23号 書学書道史学会	pp.93-108	平25. 10
調査・研究報告等	共	『成復旺主編・中国人民大学出版社『中国美学範疇辞典』訳注』索引(2012年度大東文化大学人文科学研究科研究報告書)	大東文化大学人文科学研究科	全112p	平25. 3
教科書・参考書	共	『書道 I 教授資料 学習指導の研究』	教育出版	全182p	平25. 3
論文	単	「鎌倉時代における中国書論受容の一端—「似絵詞」から『明月記』に及ぶ—」	『若木書法』12 國學院大學文学部若木書法會	pp.6-20	平25. 2
論文	単	『源氏物語』総合巻に見る中国書論の受容(下)」	『若木書法』11 國學院大學文学部若木書法會	pp.39-47	平24. 2
著書	共	『別冊太陽 日本のお書』	平凡社	全175p	平24. 1
調査・研究報告等	共	『成復旺主編・中国人民大学出版社『中国美学範疇辞典』訳注』第7冊(2010年度大東文化大学人文科学研究科研究報告書)	大東文化大学人文科学研究科	全260p	平23. 3
論文	単	『源氏物語』総合巻に見る中国書論の受容(上)」	『若木書法』10 國學院大學文学部若木書法會	pp.37-45	平23. 2
その他	単	「清水浜臣、都伎山に登る—「安倍小水磨願經」の伝来をめぐって—」	『國學院雑誌』第111巻第9号 國學院大學	pp.36-37	平22. 9

【平成21年度以前の主な研究業績等】 (5点まで)

種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または該当ページ	発行年月
著書	共	『決定版 日本書道史』	芸術新聞社	全190p	平21. 5
論文	単	「「慈光寺経」研究」	筑波大学学位論文	全510p	平21. 3
論文	単	「「慈光寺経」の料紙装飾について」	『芸術学研究』第12号 筑波大学大学院人間総合科学研究科	pp.127-137	平20. 3
論文	単	「「慈光寺経」の伝来について」	『書芸術研究』第1号 筑波大学大学院人間総合科学研究科書研究室	pp.17-28	平20. 3
論文	単	「「慈光寺経」の書風について」	『書学書道史研究』第17号 書学書道史学会	pp.43-55	平19. 9

【所属学会】書学書道史学会

【最近5年間の学会等および社会における主な活動】

書学書道史学会幹事(平20.4～現在)、平成23年度ときがわ町郷土誌講座講師(平23.7)、神社本庁第73回正階基礎研修(甲)講師(平24.6)、神社本庁第106回中堅神職研修(丁)講師(平25.4)

【教育活動の自己評価】

大学における教育と研究は、車の両輪というべきものであり、両者の連関を図るとともに、担当科目において研究成果の還元を鋭意、実践している。あわせて、当該分野・領域の最新の研究動向を反映させることも心がけている。講義系科目では、原色・原寸の複製資料を活用するとともに、図書館所蔵の貴重書の閲覧、学外の美術館・博物館の見学を実施、またゲスト講師を迎えてのレクチャー等も行っている。一方の実技系科目においても、単なる一過性の体験とならないように、理論・歴史に関する講義も織り交ぜて各回を構成。多角的に興味・関心を引き出し、学生の自発的・主体的な取り組みを促している。平成26年度からは、新設された全学対象の國學院科目・書道入門も担当。課外では、書道研究会の顧問を務めるほか、平成23年度より、神職を目指す神道文化学部生のための書道講座も行っている。また、オープンカレッジにおいても書道関連講座を受け持ち、所属学部・学科に限らず、全学の教育、また地域・社会の生涯学習にも資すべく努めている。

【研究活動の自己評価】

これまでは写経を中心に取り組んできたが、着任以来、平安・鎌倉時代における中国書論受容の諸相の解明を継続的に進めている。長らく中国の芸術論の訳注にも携わっており、その成果を発展させつつ、広く東アジアの観点に立つものである。また、南北朝・室町時代の日本書道史に関しても、能書の家・世尊寺家を軸にして、再考を試みている。本件については平成24年度、鹿島美術財団の研究助成に採択された(課題「南北朝・室町時代における世尊寺家の書法継承—絵巻物・古筆切を中心として—」)。平成26年度からは、学生有志とともに、学外の研究者も交えて、図書館所蔵の古筆手鑑の翻刻・解題の勉強会をスタートさせた。その成果は順次、公表の予定である。

【職・氏名】教授 **花部英雄** HANABE Hideo
 【学 位】博士(文学)(平成16年1月 國學院大學 文乙192号)
 【本学就任】平成16年
 【略 歴】國學院大學文学部文学科卒業
 実践女子学園中学高校教諭(国語科)
 【専門分野】口承文芸

【最近5年間の主な研究業績等】 [平成22～26年度] (10点まで)					
種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または 該当ページ	発行年月
編著	単	『雪国の女語り 佐藤ミヨキの昔話世界』	三弥井書店	全351p	平26. 3
編著	単	『語りの講座 昔話入門』	三弥井書店	全261p	平26. 3
著書	単	『まじないの文化誌』	三弥井書店	全324p	平26. 1
論文	単	「芭蕉における西行伝承」	『西行学』4号	全225p中 pp.141-148	平25. 8
編著	単	『語りの講座 昔話の声とことば』	三弥井書店	全319p	平24. 12
論文	単	「西行伝承の研究史」	『西行学』3号	全247p中 pp.131-139	平24. 8
論文	単	「柳田昔話研究の軌跡」	『日本民俗学』270号	全262p中 pp.9-29	平24. 5
論文	単	「桃太郎の素性—アジアの「猿蟹合戦」との比較から—」	『國學院雑誌』第113巻第5号 國學院大學	全57p中 pp.1-17	平24. 5
論文	単	「昔話における異類」	『日本文学論究』	全135p中 pp.14-21	平24. 3
著書	共	『中国民話の旅』	三弥井書店	全237p	平23. 2

【平成21年度以前の主な研究業績等】 (5点まで)					
種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または 該当ページ	発行年月
著書	単	『昔話と呪歌』	三弥井書店	全318p	平17. 3
著書	単	『漂泊する神と人』	三弥井書店	全306p	平16. 1
著書	共	『日本民話集』	作品社	全45巻	平11～平14
著書	単	『呪歌と説話—歌・呪い・憑き物の世界—』	三弥井書店	全301p	平10. 4

【所属学会】日本口承文芸学会、説話・伝承学会、日本民俗学会、説話文学学会、日本昔話学会

【最近5年間の学会等および社会における主な活動】

日本口承文芸学会会長(平21. 4～平23. 3)

【教育活動の自己評価】

学部の科目「伝承文学史」では、授業に集中してもらうための工夫として、毎回用意する教材用資料の中味を必要最小限の情報にとどめたシンプルなものを中心とし、学生に書かせることを中心とした展開を試みた。基礎的な「伝承文学概説」については、自主的な学習を旨とし、伝承資料を提示し、その読解と意見をまとめる作業を課し、提出させコメントを加えて返却した。演習の科目では、帰納法に基づいた結論を求めめるために、発表資料の博捜を指示し、それを一覧表に作成させ、表を見て資料の傾向や問題点の発見することを徹底させた。いい発表が見られた。

【研究活動の自己評価】

ここ数年調査を続けてきた新潟県魚沼市の佐藤ミヨキ唄の昔話を、國學院大學の助成を得て一冊の本(『雪国の女語り』)にまとめることができた。伝承的な語り手の昔話集の刊行が困難な時代で、それなりの意義ある刊行と自負している。昔話に加え、昔話をどのように記憶、取得し、また次世代へ継承してきたのかについての解説をまとめた。積年の懸案を成し遂げることができて安堵している。また、口承文芸における呪いの研究について、二冊目となる『まじないの文化誌』を上梓することができた。まじないを民俗学的視点から追究した論考と、江戸期の呪い書『咒詛調法記』の翻刻と注釈を加えたものを掲載した。日本経済新聞の文化欄に取り上げられた。

【職・氏名】教授 針本正行 HARIMOTO Masayuki
 【学 位】博士(文学)(平成13年11月 國學院大學 文乙第165号)
 【本学就任】平成8年
 【略 歴】國學院大學文学部文学科卒業
 國學院大學大学院文学研究科博士課程単位取得満期退学
 江戸川女子短期大学人文学科国文学専攻助教授
 【専門分野】平安時代文学の研究

【最近5年間の主な研究業績等】 [平成22～26年度] (10点まで)					
種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または 該当ページ	発行年月
翻訳・ 翻刻書	共	「國學院大學図書館所蔵『咸陽宮』の解題と翻刻」	『國學院大學校史・学術資産研究』第6号 國學院大學校史・学術資産研究センター	全46p中 pp.1-26	平26. 3
論文	単	「王朝文学と賀茂神社」	『悠久』131 おうふう	全130p中 pp.55-68	平25. 7
論文	単	「『蜻蛉日記』の表現」	『志能風草(復刊)創刊号』1 國學院大學 王朝文学研究会・和歌文学研究会	全298p中 pp.276-282	平25. 3
翻訳・ 翻刻書	単	「國學院大學図書館所蔵『ひいな鶴』の解題と翻刻」	『國學院大學 校史・学術資産研究』5 國學院大學研究会開発推進機構校史・学術資産研究センター	全393p中 pp.1-25	平25. 3
論文	単	「伊勢物語絵の表現—國學院大學図書館所蔵『伊勢物語絵巻』二九段を中心として—」	『國學院雑誌』第113巻第10号 國學院大學	全52p中 pp.1-16	平24. 10
編著	共	『世界一わかりすぎる源氏物語』	角川学芸出版	全207p	平23. 9
翻訳・ 翻刻書	単	「奈良絵本『花鳥風月』(零本一冊)の解題と翻刻」	『物語文学論究』13 物語文学研究会	全314p中 pp.294-303	平23. 3
辞書・ 事典等	共	『源氏物語大辞典』	角川学芸出版	全1613p	平23. 2
論文	単	「國學院大學所蔵の絵入り物語」	『中古文学』86 中古文学会	全100p中 pp.15-24	平22. 12
調査・研究 報告等	単	「國學院大學所蔵の絵入り物語—「呉越絵」「舟のあとく」を中心として—」	絵入り本国際集會		平22. 9

【平成21年度以前の主な研究業績等】 (5点まで)					
種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または 該当ページ	発行年月
論文	単	「國學院大學所蔵『船のあとく』と神功皇后譚」	『物語絵の世界』 國學院大學文学部針本正行研究室	pp.87-110	平22. 3
編著	共	『源氏物語入門』	角川学芸出版	全268p中 pp.11-57	平20. 7
編著	共	『源氏物語事典』	大和書房	全456p	平14. 5
著書	単	『平安女流文学の表現』	おうふう	全395p	平13. 5
著書	単	『平安女流文学の研究』	桜楓社	全454p	平4. 11

【所属学会】中古文学会、全国大学国語国文学会、和歌文学会、和漢比較文学会

【最近5年間の学会等および社会における主な活動】

中古文学会委員(平19～現在)、日記文学会代表(平20～平26)、全国大学国語国文学会理事(平13～現在)

【教育活動の自己評価】

学部の専門教育で担当する『源氏物語』・『古今和歌集』の演習では、グループ発表の形式をとり、個々の学生の問題意識を自己完結するのではなく、共有するようにした。演習内容も、現代の活字本によらず、宮内庁書陵部蔵青表紙本源氏物語、元永本古今和歌集などを用いて、古典文学の享受をできるようにし、用例の悉皆調査、中世から現代の注釈の研究結果をふまえさせ、古典学習の基礎力習得に配慮した。また、随時、架蔵の鎌倉・室町時代の古筆、江戸時代の屏風・奈良絵本を紹介し、古典に直接触れることで過去の遺物ではない、生きた古典文学への実感を深めるようにした。大学院教育においては、院内の学習研究にとどまることなく、学外の学会、研究会での発表を奨励し積極的支援している。若手研究者支援として、平成22年度から平成26年度の間に、2名の課程博士申請論文の主査をつとめた。さらに、正課の授業だけではなく、課外活動の場での学生教育も重視し、「源氏物語研究会」・「物語文学研究会」・「百人一首の会」・「競技カルタの会」などの顧問をつとめ、源氏物語の講読、競技カルタの実践、古典文学ゆかりの地や歌枕などをめぐる研究旅行を行い、学生の多面的な学習能力の開発を支援している。

【研究活動の自己評価】

『源氏物語』を中心とする平安時代文学の表現方法及び國學院大學図書館所蔵の古典籍の調査などの研究をすすめた。『源氏物語』の生成基盤としての賀茂信仰との関係、『伊勢物語』の生成過程と物語絵と注釈との関係、『蜻蛉日記』の和歌表現「穂に出づ」などについて明らかにした。また、國學院大學図書館所蔵の中でも江戸時代前期に成立した『ひいな鶴』・『咸陽宮』・『羅生門』・『呉越絵』などを対象として、それらの成立過程に、絵草紙屋「大和小泉」、書写者の一人である朝倉重賢の存在があることを明らかにした。

【職・氏名】教授 諸 星 美 智 直 MOROHOSHI Michinao

【学 位】博士(文学)(平成16年3月 國學院大學 文乙第207号)

【本学就任】平成2年

【略 歴】國學院大學文学部文学科卒業

國學院大學大学院文学研究科日本文学専攻博士課程単位取得満期退学

徳島文理大学短期大学部経営情報学科一般教育専任講師

【専門分野】日本語教育学・日本語教育史・近代日本語・ビジネス文書学

【受賞歴等】吉川博士記念賞(平成19年)

【最近5年間の主な研究業績等】 [平成22～26年度] (10点まで)					
種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または該当ページ	発行年月
論文	単	「近世期吟味控類における「尋問」と「釈明」のストラテジーについて」	『歴史語用論の世界』ひつじ書房	pp.133-160	平26. 6
その他	共	「〔座談会〕江戸語・東京語から首都圏方言へ」	『國學院雑誌』第115巻第2号 國學院大學	pp.45-70	平26. 2
その他	単	「2012年度南台科技大学日本語教育実習スタディーツアーの記録」	『国学院大学日本語教育研究』4号 国学院大学日本語教育研究会	全19p	平25. 3
論文	単	「ビジネス日本語教材としての経済小説」	『国学院大学日本語教育研究』4号 国学院大学日本語教育研究会	全16p	平25. 3
論文	単	「日本語ビジネス文書学の構想—研究分野と研究法—」	『国語研究』75号 国学院大学国語研究会	pp.1-17	平24. 3
論文	単	「ビジネス文書における「あしからず」の機能—ビジネス文書文例集を資料として—」	『国学院大学日本語教育研究』3号 国学院大学日本語教育研究会	全14p	平24. 3
論文	単	「日本語学習辞書史における船岡献治編纂『鮮訳国語大辞典』について」	『國學院雑誌』第112巻第12号 國學院大學	pp.1-15	平23. 12
その他	単	「2010年度南台科技大学サマーキャンプ(暑假日語夏令營)における日本語教育実習の記録」	『国学院大学日本語教育研究』2号 国学院大学日本語教育研究会	全15p	平23. 3
論文	単	「ビジネス文書におけるポライトネス・ストラテジーについて」	『国学院大学日本語教育』2号 国学院大学日本語教育研究会	全14p	平23. 3
論文	単	「近世武家社会における言語行動」	『国語研究』74号 国学院大学国語研究会	pp.1-14	平23. 3

【平成21年度以前の主な研究業績等】 (5点まで)					
種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または該当ページ	発行年月
論文	単	「John・Macgowan“A manual of the Amoy colloquial”と三矢重松・辻清蔵訳述『台湾会話篇』」	『国語研究』72号 国学院大学国語研究会	pp.65-82	平21. 3
教科書・参考書	共	『そのまま使えるビジネス文書文例集』	かんき出版	全288p	平20. 6
論文	単	「函館中央図書館蔵「蠣崎文書」に見る松前藩士の音韻状況」	『日本語の研究』4巻1号 日本語学会	pp.159-173	平20. 1
著書	単	『近世武家言葉の研究』	清文堂	全518p	平16. 5
論文	単	「近世蝦夷地における和人社会の言語状況」	『国語と国文学』79巻11号 東京大学国語国文学会・至文堂	pp.180-189	平14. 11

【所属学会】國學院大學国語研究会、日本語学会、日本近代語研究会、国史学会、日本語教育学会、日本語教育史研究会、国学院大学日本語教育研究会、ビジネス日本語研究会

【最近5年間の学会等および社会における主な活動】

日本近代語研究会運営委員(平19. 9～現在)

【教育活動の自己評価】

リーマンショック直後から就職部委員を継続して担当して学生の悲惨な就職状況に長年接してきたため、キャリアデザインを特に重視している。このため、専門分野も実学であるビジネス言語学に変更し、学部の日本語学演習Ⅲをビジネス言語学と日本語教育史・近代敬語史との組み合わせとし、ことにビジネス文書・経済小説・企業ウェブサイト等を資料とした演習により、社会人基礎力とビジネス言語学の研究能力の充実を図っている。日本語教育については、留学生の日本語能力の充実を重視する企業のニーズに対応できないカリキュラムとなったため、留学生の日本語能力強化と就職力強化を再度図るために万難を排して尽力している。副専攻「日本語教員養成課程」で日本語教員を養成し、ことに隔年で8月後半に台湾の南台科技大学における日本語教育実習で学生を引率・指導している。学部・大学院を通じたビジネス言語学の研究教育体制の充実を図った結果、日本語教授法とともにビジネス言語学を専門とする有為な人財が育ちつつある。

【研究活動の自己評価】

実学重視の観点から、現在、日本語教育学の中でも、海外で先行しているビジネス日本語研究を、日本語母語話者も対象に含め、話す・聞く・読む・書くに稼ぐを加えたビジネスパーソンの養成に寄与して母国経済の発展に貢献するビジネス言語学の研究法の確立を最大の目標として、文書・会話の両方に渡って研究を進め、語法の特徴を解明して成果をまとめている。日本語教育史の研究は、宏文学院や振武学堂・東斌学堂などで辛亥革命に身を捧げた留学生の日本語教育に尽力して革命に貢献した院友日本語教師の事績とその作成した日本語教材の近代共通語成立史における特質を解明して順次論考にまとめている。原点である近世武家言葉の研究については、ポライトネス・ストラテジーの観点から再検討を加えて論考にまとめている。

【職・氏名】教授 山岡 敬和 YAMAOKA Yoshikazu

【学 位】修士(日本文学)

【本学就任】平成2年

【略 歴】國學院大學文学部文学科卒業

國學院大學大学院文学研究科日本文学専攻博士課程後期単位取得満期退学

【専門分野】日本中世文学

【受賞歴等】第二回長塚節文学賞小説部門大賞(平成10年)

【最近5年間の主な研究業績等】 [平成22～26年度] (10点まで)					
種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または該当ページ	発行年月
著書	単	『説話文学の方法』	新典社	全366p	平26. 2

【平成21年度以前の主な研究業績等】 (5点まで)					
種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または該当ページ	発行年月
論文	単	「歌徳説話——その発生に関する一考察——」	『國學院雑誌』 第110巻第11号 國學院大學	全10p	平21. 11
論文	単	「貴種流離譚とは何か」	『國文學解釈と教材の研究』 第54巻4号 學燈社	全9p	平21. 3
論文	単	「隣の翁考——『宇治拾遺物語』を中心にして——」	『國學院雑誌』 第109巻第5号 國學院大學	全13p	平20. 5
論文	単	「蛇考—蛇への変身—」	『國學院雑誌』 第106巻第6号 國學院大學	全12p	平17. 6
論文	単	「蛇考—蛇との婚姻—」	『國學院雑誌』 第104巻第2号 國學院大學	全60p中 pp.1-13	平15. 2

【所属学会】國學院大學國文學會

【最近5年間の学会等および社会における主な活動】

茨城県古河市古河文学館古典講座担当(平14. 4～現在)

【教育活動の自己評価】

日本文学、特に古典文学の世界に対して、どうすれば学生達が興味を持ち、面白いと感じてくれるかを常に心がけて、全ての授業及び指導に当たってきたが、それがうまくいっている授業とそうでない授業があり、さらに改善に努めたいと考えている。1年次の文学概説の授業では、文学とは何かから始まり、表現とテーマとの関係、及び和歌の発生について講義し、毎時間読書記録を提出させ、書く能力の指導にも努めた。また日本基礎古典文学の授業では、学科目標達成のために古典を訳す力を身に付けさせることに取り組んだ。3年次からの日本文学演習の授業では、自ら問題点を設定してその答えを探ることを通して、調べ考察する力、および探求する姿勢を身につけることを指導してきた。また日本時代文学史の授業では、テーマ毎の講義を通して、一つの事項が時代毎に変化する文学の在り様を講義してきた。さらに卒業論文指導では個別の関心に基づいた文学研究の達成を目指して、演習発表を取り入れ指導に当たっている。

【研究活動の自己評価】

昨年度1年間をかけて、これまでの論文に手を入れてまとめ上げて、今年度2月に『説話文学の方法』と題して出版することができた。これで従来から取り組んできた「説話文学の研究についてはひとまず完成を見たので、今後は——折口信夫の学問の検証と継承——というテーマもと、貴種流離譚の研究に引き続いて、現在は「水の女」の研究に取り組んでおり、その成果を今年度中に発表する予定である。

【職・氏名】准教授 吉田永弘 YOSHIDA Nagahiro
 【学 位】博士(文学)(平成13年3月 國學院大學 文甲第32号)
 【本学就任】平成19年
 【略 歴】國學院大學大学院文学研究科日本文学専攻博士課程後期修了
 愛知県立大学文学部国文学科講師
 愛知県立大学文学部国文学科助教授
 【専門分野】国語学

【最近5年間の主な研究業績等】 [平成22～26年度] (10点まで)					
種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または該当ページ	発行年月
論文	単	「いわゆる「公尊敬」について」	『日本語文法史研究』2 ひつじ書房	pp.43-60	平26. 10
その他	単	(学界時評)「日本語の歴史的研究」	『リポート笠間』56 笠間書院	pp.37-40	平26. 5
論文	単	「「る・らる」の尊敬用法の拡張」	『説林』62号 愛知県立大学国語国文学会	pp.1-12	平26. 3
論文	単	「古代語と現代語のあいだ—転換期中の世語文法—」	『日本語学』33巻1号 明治書院	pp.72-84	平26. 1
論文	単	「「る・らる」における肯定可能の展開」	『日本語の研究』9巻4号 日本語学会	pp.18-32	平25. 10
学会発表等	単	「「る・らる」における肯定可能の展開」	日本語学会春季大会 於:千葉大学		平24. 5
論文	単	「平家物語と日本語史」	『説林』60号 愛知県立大学国文学会	pp.53-68	平24. 3
論文	単	「屋代本平家物語卷十一の性格一字形と語句の観点から」	千明守編『平家物語の多角的研究 屋代本を拠点として』 ひつじ書房	全297p中 pp.45-61	平23. 11
論文	単	「タメニ構文の変遷 —ムの時代から無標の時代へ—」	青木博史編『日本語文法の歴史と変化』 くろしお出版	全245p中 pp.89-117	平23. 11

【平成21年度以前の主な研究業績等】 (5点まで)					
種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または該当ページ	発行年月
論文	単	「国語学から見た延慶本平家物語」	栃木孝惟・松尾葦江編『延慶本平家物語の世界』 汲古書院	全264p中 pp.148-165	平21. 5
論文	単	「源氏物語の「御」—自体尊敬の存否—」	『國學院雑誌』109巻10号 國學院大學	pp.122-133	平20. 10
論文	単	「中世日本語の因果性接続助詞の消長 —ニヨッテの接続助詞化を中心に—」	青木博史編『日本語の構造変化と文法化』 ひつじ書房	全276p中 pp.181-203	平19. 7
論文	単	「体言承接のタリの位置づけ」	『日本語の研究』2巻1号 日本語学会	pp.78-92	平18. 1
論文	単	「ホドニ小史—原因理由を表す用法の成立—」	『国語学』51巻3号 国語学会	pp.74-87	平12. 12

【所属学会】日本語学会、日本語文法学会、國學院大學国語研究会

【最近5年間の学会等および社会における主な活動】

【教育活動の自己評価】

平成25年度は国内派遣研究のため1年間講義を担当していない。24年度の授業アンケートの結果を見ても、学生から特に改善すべき要望は記されていない。記述試験で正答率の低かった箇所の教え方などを改善して26年度の講義に臨む。

【研究活動の自己評価】

平成25年度国内派遣研究員として1年間研究活動に専念できた。この1年間で、大規模な調査と考察を行う時間が確保することができ、研究発表1回と論文3編を仕上げることができた。当面は、その遺産によって研究発表と論文執筆を続けることができるだろう。次回の派遣研究を心待ちにしつつ、日常業務に取り組む所存である。

【職・氏名】教授 渡邊 欣雄 WATANABE Yoshio

【学 位】博士(社会人類学)(平成12年2月 東京都立大学 社博第65号)

【本学就任】平成24年

【略 歴】東京都立大学大学院社会科学部博士課程社会人類学専攻 単位取得満期退学
首都大学東京都市教養学部人文社会系教授 (大学院兼任、東京都立大学兼任)
中部大学国際関係学部中国関係学科教授 (大学院国際人間学研究科兼任)

【専門分野】文化(社会)人類学、沖縄民俗学、文化地理学、東アジア文化研究

【受賞歴等】伊波普猷賞(昭和60年)、東村村政功労賞(平成2年)、沖縄研究奨励賞(平成5年)、民俗研究傑出貢献賞(平成17年)

【最近5年間の主な研究業績等】 [平成22～26年度] (10点まで)

種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または該当ページ	発行年月
解説・解題等	単	「序言―客家は永遠的師友」	河合洋尚主編『日本客家研究的視角与方法―百年の軌跡』社会科学文献出版社	全190p中 pp.1-7	平25. 10
学会発表等	単	研究発表「コミュニティの人類学―わが研究の回顧と展望―」	日本文化人類学会第5回課題研究懇談会『危機の克服のと地域コミュニティ』の特集「コミュニティ再考」於・名古屋大学文学部		平25. 9
その他	単	[談話室]「在華日本人研究」	『國學院雑誌』第114巻第3号 國學院大學	全50p中 pp.44-45	平25. 3
論文	単	「風水と家―『葬経』の親族理論―」	『生をつなぐ家―親族研究の新たな地平―』風響社	全340p中 pp.71-86	平25. 2
論文	単	「台湾之鬼小考―旨在理解異文化的民俗知識論―」	『節日研究』(鬼節專輯) 6輯 泰正出版社	全344p中 pp.39-53	平24. 12
学会発表等	単	「The History of Feng-shui Science Technologies in China and Japan」	A two-day International Conference titled Diversities in Folk Cultures of India and Japan Centre for Japanese, Korean and North East Asian Studies, School of Language, Literature and Culture Studies, Jawaharlal Nehru University		平24.9～平24.9
学会発表等	単	講演「沖縄民俗の現代―高齢者生活論―」	『成城大学民俗学研究所紀要』第36集 成城大学民俗学研究所	全148p中 pp.1-30	平24. 3
学会発表等	単	「都城風水概説」	『比較日本学教育研究センター研究年報』第7号 お茶の水女子大学比較日本学教育研究センター	全342p中 pp.15-19	平23. 3
論文	単	「持続可能な理論構築のために―一六〇年代学部生からの現代人類学批判―」	『社会人類学年報』第36巻 東京都立大学社会人類学会	全183p中 pp.103-122	平22. 11
著書	単	『風水思想と東アジア』(韓国語版)	Ehak出版社	全251p	平22. 11

【平成21年度以前の主な研究業績等】 (5点まで)

種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または該当ページ	発行年月
辞書・事典等	共	『沖縄民俗辞典』	吉川弘文館	全656p	平20. 7
編著	共	『精選日本民俗辞典』	吉川弘文館	全614p	平18. 3
編著	単	『世界の宴会』(アジア遊学61号)	勉誠出版	全256p	平16. 3
著書	単	『風水の社会人類学-中国とその周辺比較-』	風響社	全467p	平13. 12
編著	共	『日本民俗大辞典』上巻・下巻	吉川弘文館	上巻: 全1008p 下巻: 全	上巻: 平11.10 下巻: 平12.4

【所属学会】日本文化人類学会、日本民俗学会、人文地理学会、日本台湾学会

【最近5年間の学会等および社会における主な活動】

日本文化人類学会 会長(平22. 6～平24. 6)、日本民俗学会 理事(平22. 10～平24. 9)、東京都立大学社会人類学会 会長(平18. 4～平24. 3)、
神奈川大学国際常民文化研究機構運営委員(平22. 4～現在)、長崎大学中長期重点研究課題助言評価学外有識者(平22. 4～現在)、
国立民族学博物館運営会議副議長(平24. 4～現在)、国立民族学博物館共同利用委員会委員(平26. 4～現在)、
大学評価・学位授与機構大学機関別認証評価委員会専門委員(平25. 5～平26. 4)、日本学術振興会科研費委員会専門委員・幹事(平24. 1～平25. 12)

【教育活動の自己評価】

A学部教育「儀礼文化論」においては、写真入りの教科書渡邊欣雄著『世界のなかの沖縄文化』を用いて、各授業1～2章程度を解説している。解説に必要なサブテキスト＝プリントを配布して補足説明を加えたり、ビデオ・PPTなどを用いて視覚的にわかるように努めている。「伝承文学演習」においては、約1ヶ月数回にわたり演習の趣旨説明を行った後、1時限2人の発表を原則として発表させている。

B大学院教育「文化人類学特論」においては、本学で文化人類学の教育はほとんど教えられていないので文化人類学史、近年のポストモダン人類学、社会人類学の基礎理論、知識人類学など、主として全世界的な文化現象を解きうる理論紹介として解説を行っている。「民俗学研究/特殊研究」は演習形式で行っており、とくに民俗学最新の学問的傾向である「ポストモダン民俗学」までの学説史や、意義を解説した後、一時間一人の発表と質疑応答を行っている。

【研究活動の自己評価】

最近のわたしの研究活動としては、A継続的な沖縄研究、B継続的な中国・台湾研究、C継続的な風水研究、D民俗学研究的新たな試み、Eその他要求に応じた研究発表に分けられるであろう。Aは、2008年に『沖縄民俗辞典』を編集したが、それ以後主として高齢者研究を継続的にやっている。Bはここ10年続けている中国の市場経済化に注目して、さまざまな発表を行ってきた。できるなら今後は7世紀にわたりグローバル化の中心だった中国「華文明」の解明にあたりたいと思っている。Cは『民俗知としての風水』(2012)を刊行したように、これまでの風水研究の集大成と残された問題について発表・執筆しているところである。Dは本学就任後、民俗学研究としてはなほ不足している2つの研究に着手した成果である。すなわち「在華日本人研究」と「在琉中国・台湾人研究」である。日本民俗を単一の歴史や文化に見立てる従来研究に対する、根源的な批判運動を起こそうとしている、その成果の一端である。Eは国内外から講演・発表・講義や執筆依頼の多い文化人類学的、民俗学的な諸問題に答えるべく、発表・執筆したものがあるということである。

文学部

【中国文学科】

赤井益久	教授	31
浅野春二	教授	32
石本道明	教授	33
呉鴻春	准教授	34
長谷川清貴	准教授	35
波戸岡旭	教授	36
牧野格子	准教授	37
宮内克浩	准教授	38

【職・氏名】教授 赤井 益久 AKAI Masuhisa

【学 位】博士(文学)(平成15年1月 國學院大學 文乙第177号)

【本学就任】昭和60年

【略 歴】早稲田大学第二文学部東洋文化専修卒業

國學院大學大学院文学研究科博士課程後期単位取得満期退学

【専門分野】中国古典文学、中国古典語法

【受賞歴等】吹野博士記念賞(平成16年)

【最近5年間の主な研究業績等】 [平成22～26年度] (10点まで)

種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または 該当ページ	発行年月
著書	単	『中唐文人の文芸及其世界』	中華書局	全267p	平26. 1
論文	単	「唐傳奇「崑崙奴」芻議」	『中国古典研究』第55号 中国古典学会	全82p中 pp.1-21	平25. 12
その他	共	文部科学省検定済教科書 『高等学校 古 典B(古文編)』	三省堂	全248p	平25. 3
教科書・ 参考書	共	文部科学省検定済教科書 『高等学校 古 典B(漢文編)』	三省堂	全176p	平25. 3
論文	単	「初年次教育の再構築に向けて」	『國學院大學教育開発推進機構紀要』 第4号 國學院大學教育開発推進機構	全132p中 pp.1-14	平25. 3
評論・ 書評等	単	書評 岡田充博著『唐代小説「板橋三娘子」 考—西と東の変遷変馬譚のなかで—』	『中国文学報(京都大学)』 82 京都大学中国文学会	pp.152-166	平24. 4
教科書・ 参考書	共	文部科学省検定済教科書 『精選 国語総 合』	三省堂	全384p	平24. 3
教科書・ 参考書	共	文部科学省検定済教科書 『高等学校 国 語総合(現代文編)』	三省堂	全240p	平24. 3
教科書・ 参考書	共	文部科学省検定済教科書 『高等学校 国 語総合(古典編)』(全176頁)	三省堂	全176p	平24. 3
論文	単	「第2ステージを迎えた認証評価と教学経営」	『國學院大學教育開発推進機構紀要』 第3号 國學院大學教育開発推進機構	全180p中 pp.1-22	平24. 3

【平成21年度以前の主な研究業績等】 (5点まで)

種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または 該当ページ	発行年月
著書	単	『中国山水詩の景観』	新公論社	全370p	平22. 3
論文	単	「杜子春伝」臆説」	『中国古典研究』 第53号 中国古典学会	全90p中 pp.1-21	平20. 12
著書	単	『中唐詩壇の研究』(東洋学叢書60)	創文社	全590p	平16. 10
翻訳・ 翻刻書	単	呉志達著『唐伝奇入門』(中国古典文学基本 知識叢書、復刻版)	日中出版	全194p	平15. 3
著書	単	『漢詩漢文解釈講座』第2巻(唐詩・上)	昌平社	全516p	平7. 5

【所属学会】日本中国学会、中国古典学会、東方学会、中国唐代学会、中唐文学会、日本高等教育学会、初年次教育学会

【最近5年間の学会等および社会における主な活動】

独立行政法人大学評価・学位授与機構認証評価専門委員(平21. 5～現在)

【教育活動の自己評価】

平成21年～22年は、教育支援及び学修支援の強化のため新設された教育開発推進機構長として「教育開発センター」「共通教育センター」「学習支援センター」を統括し、3ポリシーの制定、FD活動の実質化、共通教育の見直し、学修支援体制の強化と拡充のために従事した。平成19年～平成22年は、副学長として学校法人の短中期計画である「21世紀研究教育計画」の担当理事として計画の策定と公表に携わり、併せて21世紀研究教育計画委員会規程の改正及び「研究教育開発推進に関する指針」(平成20年策定)をとりまとめた。平成23年、学長に就任して以降、創立130周年に当たる平成24年に同計画(第三次)を策定に携わり、平成24年11月4日の創立記念日に公表した。計画の実行をPDCAサイクルに沿って運営することに心がけ、三年目に当たる平成26年4月には、同計画(第三次)の「修訂版」を作成し、計画の見直しと新展開を反映させた。大学構成員や卒業生・在学生保護者の方々にも周知を徹底し、大学の進むべき方向性を共有し、連携を促すように努めた。

【研究活動の自己評価】

中国文学史における唐代中期のいわゆる「中唐」の位置づけや時代相を研究し、これまでに詩歌方面では『中唐詩壇の研究』(平成16年、創文社。東洋学叢書60)、山水詩研究として『中国山水詩の景観』(平成22年、新公論社)、『中唐文人の文芸及其世界』(2014年、中華書局)を刊行した。小説方面では、「杜子春伝臆説」(中国古典研究第53号)「崑崙奴芻議」(同第55号、平成25年)等の論文や関連の書評を発表した。また、日本に伝わる漢籍とその受容の在り方を研究し、その実際を版本に即して通覧する企画を開催した。《和刻本に見る唐詩の受容》(第1回、平成22年—総集—、第2回平成24年—別集—、東京六本木ギャラリー—楓樹)では、平安・室町期、江戸時代を通して漢籍がどのように受容され、自国の文化として発展、変容していったかを考察し、パンフレットを刊行した。今後も研究の進展と公開を心がけたい。

【職・氏名】教授 浅野 春二 ASANO Haruji

【学 位】博士(文学)(平成13年4月 國學院大學 文乙第161号)

【本学就任】平成14年

【略 歴】國學院大學文学部文学科卒業

國學院大學大学院文学研究科日本文学専攻博士課程後期中途退学

國學院短期大学国文科専任講師

【専門分野】道教儀礼研究

【受賞歴等】吹野博士記念賞(平成17年)

【最近5年間の主な研究業績等】 [平成22～26年度] (10点まで)					
種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または該当ページ	発行年月
論文	単	「八門召魂壇に用いる鐵跡臺光寶章について—南宋期道教の神虎召魂法から—」	『國學院中國學會報』第59輯 國學院大學中國學會	pp.42-59	平25. 12
論文	単	「神虎召魂法における八門召魂壇—南宋期道教の黄籙齋から—」	『儀礼文化学会紀要』第1号 儀礼文化学会	pp.133-162	平25. 3
論文	単	「八門召魂壇に用いる召魂幡について—南宋期道教の神虎召魂法から—」	『國學院中國學會報』第58輯 國學院大學中國學會	pp.72-90	平25. 3
その他	単	「台湾漢族の伝統的な葬式」	『父の初七日』(台湾映画『父後七日』日本公開用パンフレット) 太秦株式会社	全22p中 pp.3-4	平24. 3
その他	共	「川とあの世はつながっている『父の初七日』に描かれた葬儀をめぐって」(鼎談)	『父の初七日』(台湾映画『父後七日』日本公開用パンフレット) 太秦株式会社	全22p中 pp.13-14	平24. 3
論文	単	「バイエルン州立図書館所蔵『招魂書』に見るヤオ族の招魂儀礼について」	『瑤族文化研究所 通訊』第3号 神奈川大学ヤオ族文化研究所	pp.103-137	平23. 11
評論・書評等	単	「劉枝萬口述 林美容・丁世傑・林承毅訪問記録『學海悠遊:劉枝萬先生訪談録』」	『東方宗教』第118号 日本道教学会	pp.105-112	平23. 11
論文	単	「神虎堂中の陰陽二壇について(中)」	『國學院中國學會報』第56輯 國學院大學中國學會	pp.44-61	平22. 12
論文	単	「洞視法と神虎法—南宋期の靈寶齋の儀式書に見える修行法と召魂法とについて」	『東方宗教』第116号 日本道教学会	pp.47-72	平22. 11

【平成21年度以前の主な研究業績等】 (5点まで)					
種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または該当ページ	発行年月
論文	単	「神虎法による召魂儀礼の性格—魂覓ぎ・嘯・招魂歌の観点から」	『國學院中國學會報』第54輯 國學院大學中國學會	pp.99-116	平20. 12
論文	単	「道教儀礼の依頼者と道士—台湾南部の閩南系漢族社会から」	堀池信夫・砂山稔編『道教研究の最先端 第一九回国際宗教学宗教史会議世界大会道教パネル論集』 大河書房	pp.133-163	平18. 8
著書	単	『台湾における道教儀礼の研究』	笠間書院	全554p	平17. 11
著書	単	『飛翔天界 道士の技法』(シリーズ道教の世界4)	春秋社	全234p	平15. 10
著書	共	『道教の教団と儀礼』(講座道教 第二巻)	雄山閣出版	全328p中 pp.116-143, p284, 298-312	平12. 5

【所属学会】儀礼文化学会、日本中国学会、財団法人無窮会、國學院大學国文学会、全国大学国語国文学会、國學院大學中国学会、日本文化人類学会、日本民俗学会、日本道教学会、道教文化研究会、「宗教と社会」学会、財団法人東方学会

【最近5年間の学会等および社会における主な活動】

日本道教学会理事(平17. 1～現在)

【教育活動の自己評価】

学部の専門教育では、中国語の初級と民俗文化の科目を担当した。語学に苦手意識を持ち、学修方法が身につけていない学生が多いので、中国語の授業では、テキストの暗誦に重点を置いて指導した。また自身の留学体験から、学生にも留学を推奨している。中国語に興味を持ち、学修を継続し、十分に力をつけて卒業していく者も多くなってきているので、一定の成果を挙げているものと思われる。民俗文化の関する科目では、資料によって考えることに重点を置いて指導した。資料調査の方法についてはある程度身につくようになってきているが、資料の分析・考察については十分に成果を挙げることができていないように思われる。今後さらに工夫して指導していきたい。大学院では、資料の読解・分析と課題の発見に重点を置いて指導している。

【研究活動の自己評価】

フィールドワークによって、台湾漢族の道教儀礼及び湖南のヤオ族の道教儀礼を研究している。また道蔵所収の文献によって南宋期の召魂儀礼を研究している。

【職・氏名】教授 石本道明 ISHIMOTO Michiaki
 【学 位】文学修士
 【本学就任】平成元年
 【略 歴】國學院大學文学部文学科卒業
 國學院大學大学院文学研究科博士課程前期修了
 國學院大學大学院文学研究科博士課程後期単位取得満期退学
 【専門分野】中国文学

【最近5年間の主な研究業績等】 [平成22～26年度] (10点まで)					
種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または該当ページ	発行年月
著書	共	『孔子全書』第13巻 『孔子家語』(1)	明德出版社	全343p	平26. 3
学会発表等	単	講演『『論語』を読もう——日本人と論語——』	柏市立図書館		平25. 12
学会発表等	単	講演「『礼』——人を造るために——『論語』を読む」	千葉経済大学総合図書館講演会 2013年度第1回		平25. 7
学会発表等	単	講演『『論語』と礼と——心のかたち』	稲城地区道徳授業公開講座講演 〔稲城市立第六中学校〕		平25. 5
学会発表等	単	「浅見綱斎『楚辞師説』について」	國學院大學中國學會第201回例会		平24. 10
学会発表等	単	「柳宗元「天對」管見」	國學院大學中國學會第54回大会		平23. 6
評論・書評等	単	『宋代文人の詩と詩論』横山伊勢雄著 書評	『新しい漢字漢文教育』第52号 全国漢文教育学会 研文社		平23. 5
論文	単	「日本における宋代詩文受容の画期について——摺本珍重期を中心として——」	『國學院雑誌』第112巻第1号 國學院大學	全15p	平23. 1
学会発表等	単	講演「怒れる孔子——『論語』を読む——」	千葉経済大学総合図書館講演会 2010年度第1回		平22. 7
学会発表等	単	「注釈としての「天問天対解」について」	國學院大學中國學會第53回大会		平22. 6

【平成21年度以前の主な研究業績等】 (5点まで)					
種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または該当ページ	発行
論文	単	「楊万里「天問天対解」初探」	『國學院雑誌』第111巻第2号 國學院大學	全14p	平22. 2
論文	単	「顔之推「帰心篇」と楚辞「天問」と」	『國學院中國學會報』第54輯 國學院大學中國學會	pp.1-13	平20. 12
著書	共	『孔子全書』第12巻 『史記』(2)	明德出版社	全180p	平20. 11
論文	単	「楚辞「天問」の発想の原委に関する一考察」	『國學院雑誌』109巻第2号 國學院大學	全12p	平20. 2
著書	共	『朱熹詩集伝全注釈』第8巻	明德出版社	全276p	平10. 12

【所属学会】日本中国学会、無窮会東洋文化研究所、國學院大學中國學會、中国社会文化学会、宋代文学学会

【最近5年間の学会等および社会における主な活動】

【教育活動の自己評価】

昨今は、高校教育と大学基礎課程の接続が均しく問題になっている。私も、入学生の授業時に直面する問題である。したがって、1年次の講義では、可能な限り知的興味を喚起するよう心がけている。具体的には「現物」の提示、視覚的教材の使用である。例えば版本を手にとれるよう全員分の部数を配布し、古典の原態を実感させる等である。2年次以降では、知る授業から考える授業への内容的移行を意識している。ほぼ毎時間、考える材料としての古典を提示し、自身の内部にある価値観との連続性を発見できるよう留意している。3年次以降は、学科生全体への演習「卒業論文Ⅰ」において、論文テーマの設定を重点的に指導している。全員から少なくとも3回は研究動機・目的・内容・方法・文献リストを提出させ、添削して返却の後、面談指導を繰り返し、その質的向上を図っている。

【研究活動の自己評価】

最近楚辞「天問」研究と、孔子関連基礎文献の注釈に力を傾注している。「天問」研究は、その淵源・特徴・内容・整序・研究史・後代の影響作品と研究を進めた。しかしその他多様な文献との関連性や、他の楚辞作品との位置付けを巡っては、未だ解明は進んでいない。この問題を論じる準備にも着手しているが、当面は現今までの継統として、中国近世以降の影響作品・日本の注釈へと研究対象を広げる予定である。もう一方では、孔子関連基礎文献の注釈を『孔子全書』として公刊している。吹野安博士との共著で、平成11年以来、『論語』10巻・『史記』2巻を終え、本年3月に『孔子家語』第1巻目を刊行した。『孔子家語』は全5巻の規模を目睹している。

【職・氏名】准教授 吳 鴻 春 WU Hongchun

【学 位】文学士

【本学就任】平成11年

【略 歴】復旦大学(中国)中国語言文学系卒業
山口大学外国人教師

【専門分野】中国文学

【最近5年間の主な研究業績等】 [平成22～26年度] (10点まで)					
種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または該当ページ	発行年月
論文	単	『『論語』「必有我師焉」再考』(訳 松野敏之)	『斯文』第124号 斯文会	全191p中 pp.108-121	平26. 3
論文	単	『『杜撰』語源考』	『國學院雑誌』 國學院大學	全62P中 pp.1-15	平26. 3
翻訳・ 翻刻等	単	『四季散文』(前田夕暮、金子光晴、永井荷風、水上勉 作)	『世界文学』2013年第5期 中国社会科学院外国文学研究所	全320p中 pp.172-190	平25. 9
翻訳・ 翻刻等	単	『結城昌治超短篇五篇』	『世界文学』2013年第4期 中国社会科学院外国文学研究所	全320P中 pp.159-181	平25. 7
翻訳・ 翻刻等	単	『拿破侖狂』(小説集 阿刀田高 作)	上海訳文出版社	全231p	平25. 5
翻訳・ 翻刻等	単	『阿刀田高超短篇小説十篇』	『外国文芸』2012年第4期 上海訳文出版社	全160P中 pp.118-148	平24. 8
評論	単	『独鍾情於短篇』	『外国文芸』2012年第4期 上海訳文出版社	全160p中 pp.115-118	平24. 8
翻訳・ 翻刻等	単	『日本微型小説小輯』(森鷗外、夏目漱石、志賀直哉などの作家のショートショート十五篇及び渡邊晴夫の評論「現当代の日本微型小説」)	『世界文学』2011年第6期 中国社会科学院外国文学研究所	全320P中 pp.6-82	平23. 11
翻訳・ 翻刻等	単	『被害人』(結城昌治、佐野洋などの作家のショートショート六篇)	『外国文芸』2011年第4期 上海訳文出版社	全160P中 pp.129-153	平23. 7
評論	単	『日本微型小説一束』	『外国文芸』2011年第4期 上海訳文出版社	全160P中 pp.127-129	平23. 7

【平成21年度以前の主な研究業績等】 (5点まで)					
種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または該当ページ	発行年月
編著	単	『『鐵研齋詩存』輯校』	汲古書院	全340p	平13. 10
特許	単	漢字音形入力方法	『發明專利公報』 中国專利局(特許庁)		平11. 7
論文	単	『嚶と鳴き 友の声を求める—中日の詩人の唱酬の一頁』	『東亜経済研究』 山口大学東亜経済学会	全123p中 pp.83-121	平11. 3
翻訳・ 翻刻書	単	海保元備『漁村文話』『漁村文話続編』	『日本学者中国文章学論著選』 上海古籍出版社	全295p中 pp.201-256	平6. 5
著書	共	『十大散文家』	上海古籍出版社	全218p中 pp.127-153	平2. 7

【所属学会】日本中国語学会、日本中国学会

【最近5年間の学会等および社会における主な活動】

【教育活動の自己評価】

学生による「授業評価」を参考にし、講義の目標を達成できるよう努めた。コミュニケーションの授業では、学生の能力に相応しい教材を編集し、授業中に問答形式・聞き取り形式などを多用し、丁寧な反復練習により中国語の実力が身につくよう努めた。中国文学科の課程にあるべき旧白話の内容がないことに注目し、これを補うためこの二年、『水滸伝』原文の一部をテキストとして講読した。漢文と中国現代文の間に存在する旧白話について、学生の理解はある程度進んだと考える。主題講座では、漢文の文法と語彙をテーマにした。あえて学生に馴染みのある訓読ではなく、多量の例文を簡易な日本語で意味を説明する方法を採用した。ほかに、今年度まで、オープンカレッジの講師として、社会人に対する唐詩の講座を四年間担当した。

【研究活動の自己評価】

ここ数年、古代中国語の訓釈を中心に研究をすすめている。例えば、「睢鳩」の解釈、「杜撰」の語源、齋藤拙堂の訓詁学の貢献、または孔子の君子論などについて、学会の報告或いは論文の形で発表した。ほかに、日中文化交流の視点から、日本の優秀な短篇小説とショートショートを中国に紹介し、約50点くらいの作品を中国の外国文学専門誌に翻訳して発表した。

【職・氏名】准教授 長谷川 清 貴 HASEGAWA Kiyotaka

【学 位】修士(文学)

【本学就任】平成20年

【略 歴】國學院大學文学部文学科卒業

國學院大學大学院文学研究科日本文学専攻(漢文学コース)博士課程後期単位取得退学

暁星中学校・高等学校教諭(国語)

【専門分野】中国思想

【最近5年間の主な研究業績等】 [平成22～26年度] (10点まで)					
種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または該当ページ	発行年月
学会発表等	単	「戦国楚竹書「孔子詩論」と『論語』と」	國學院大學中國學會 第203回例会		平25. 5
論文	単	「『論語』「思無邪」章小考——その成立時期と動機について」	『國學院雑誌』 第113巻第3号 國學院大學	全50p中 pp.1-13	平25. 3
学会発表等	単	「『論語』爲政篇「思無邪」章について」	國學院大學中國學會 第200回例会		平24. 5
学会発表等	単	「子貢に見える諸相」	國學院大學中國學會 第199回例会		平23. 12
論文	単	「多能なる聖者——『論語』「太宰問于子貢」章小考」	『國學院中國學會報』 第56輯 國學院大學中國學會	全142p中 pp.19-30	平22. 12

【平成21年度以前の主な研究業績等】 (5点まで)					
種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または該当ページ	発行年月
論文	単	「荀悦における「復讐の義」」	『國學院中國學會報』 第55輯 國學院大學中國學會	全153p中 pp.19-31	平21. 12
論文	単	「荀悦『漢紀』における「春秋之筆法」—昌邑王廢位記事を中心に—」	『國學院雑誌』 第110巻第10号 國學院大學	全54p中 pp.1-15	平21. 10
論文	単	「荀悦の災異観」	『國學院中國學會報』 第54輯 國學院大學中國學會	全144p中 pp.22-43	平20. 12
論文	単	「「封人」考」	『國學院中國學會報』 第52輯 國學院大學中國學會	pp.22-35	平18. 12
論文	単	「「七諫」と東方朔」	『東洋文化』 復刊第88号 無窮會	pp.26-39	平14. 3

【所属学会】國學院大學中國學會、日本中國學會、財団法人無窮會

【最近5年間の学会等および社会における主な活動】

【教育活動の自己評価】

学生の専門分野における知識の向上、および論理的思考力・知的探求意欲・人間性の涵養に資することを目標に、授業を行った。授業においては、以下の1～6の具体的方針をとった。1、シラバスに準拠した授業を行った。2、受講者には辞書(紙媒体)の携行を義務づけ、授業内で随時引いて確認させた。3、多くの授業でK-SMAPYを活用して教材プリントを配付するとともに、板書を含む説明を工夫し、効率よくノートをとり理解できるよう配慮した。4、基礎知識の修得を主目的とする授業では、随時小テストを実施し、知識の定着を図った。5、論理的思考力・知的探求意欲の向上を主目的とする授業では、参考図書を多く示し、授業内容の補完を促した。6、課題・レポートや授業時・期間内試験の実施に際しては、返却日を設けて希望者に返却し、振り返り学修を促した。

【研究活動の自己評価】

中国先秦～漢代の思想・思想史を、特に儒家・儒教思想を対象に研究した。その中で、主たるテーマ・内容は以下の通りである。1、『論語』の研究。『論語』に見える諸相を、思想史を援用して論じた。例えば、『論語』で、孔子は多能よりも専一を尊び、専一化された徳を「聖」と見なしているが、当時の世が重視したのは多能であり、むしろ多能こそ「聖」と評価していた可能性を指摘した。2、後漢末・荀悦の思想研究。特に、『春秋』学者としての荀悦の思想に注目し、その政治論や著作に春秋学が濃厚に反映されていること、中でも、編年体の前漢史である『漢紀』の中に、その要素が強いことを論じた。

【職・氏名】教授 波戸岡 旭 HATOOKA Akira
 【学 位】文学博士(平成3年6月 國學院大學 乙文第97号)
 【本学就任】昭和54年
 【略 歴】國學院大學文学部文学科卒業
 國學院大學大学院文学研究科日本文学専攻博士課程単位取得満期退学
 【専門分野】日中比較文学、日本漢文学

【最近5年間の主な研究業績等】 [平成22～26年度] (10点まで)					
種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または 該当ページ	発行年月
論文	単	「島田忠臣の稗史詩」	『東アジア比較文化研究』13号 東アジア比較文化国際会議日本支部	全15p	平26. 6
解説・ 解題等	共	「釈迦舍利蔵誌」の文構成と修辞	『円仁と石刻の史料学』 高志書院	全3p	平23. 11
論文	単	杜甫「登岳陽楼」と芭蕉「おくのほそ道」「松嶋」と	『東アジア比較文化研究』10号 東アジア比較文化国際会議日本支部	全9p	平23. 6

【平成21年度以前の主な研究業績等】 (5点まで)					
種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または 該当ページ	発行年月
論文	単	「菅原道真「秋湖賦」考—感は事に因りて発し、興は物に遇うて起る—」	『國學院雑誌』第111巻第3号 國學院大學	全8p	平22. 3
著書	共	『「懐風藻」の自然描写—長屋王邸宅宴関連詩を中心に—』	辰巳正明編『「懐風藻」—日本の自然観はどのように成立したか』 笠間書院	全241p中 pp.118-136	平20. 6
著書	単	『宮廷詩人 菅原道真—「菅家文草」「菅家後集」の世界—』	笠間書院	全686p	平17. 2
論文	単	「越中三賦の時空—大判家持と中国文学—」	『高岡市万葉歴史館叢書』6「—越中三賦を考える—」	pp.1-48	平7. 9
著書	単	『上代漢詩文と中国文学』	笠間書院	全354p	平1. 11

【所属学会】國學院大學中國學會、儀礼文化学会、東アジア比較文化国際会議、和漢比較文学会

【最近5年間の学会等および社会における主な活動】

俳句雑誌『天頂』主宰(平11～現在)

【教育活動の自己評価】

毎時、前回聴講した講義内容をレポート用紙に整理して提出させ、受講生の学修を確認している。

【研究活動の自己評価】

- ・『菅家文草』の詩の注釈・鑑賞を続行中。
- ・杜甫詩の近世俳諧への影響について調査。
- ・菅原道真と白居易との詩境の比較について考究。

【職・氏名】准教授 牧野 格子 MAKINO Noriko
 【学 位】博士(文学)(平成16年9月 関西大学 文甲第158号)
 【本学就任】平成19年
 【略 歴】立命館大学文学部文学科中国文学専攻卒業
 関西大学大学院文学研究科中国文学専攻博士後期課程修了
 関西大学文学部非常勤講師
 【専門分野】中国近現代文学

【最近5年間の主な研究業績等】 [平成22～26年度] (10点まで)					
種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または該当ページ	発行年月
翻訳・翻刻書	共	『新編 台湾映画——社会の変貌を告げる(台湾ニューシネマからの)30年——』	晃洋書房	全173p中 pp.8-39	平26. 1
論文	単	「一九二五年中国におけるアメリカ留学派遣とその周辺について——『申報』記事より——」	『國學院中國學會報』 第59輯 國學院大學中國學會	全15p	平25. 12
論文	単	「謝冰心的“問題”与“主義”」	《冰心論集》(2012) 上海交通大学出版社		平25. 6
論文	単	「1924年『申報』記事からみるアメリカ留学派遣——「移民法」改正による影響を中心に——」	『國學院中國學會報』 第58輯 國學院大學中國學會	全12p	平25. 3
学会発表等	単	「中國現代文學者の留美経験」	國立清華大學臺灣文學研究所		平25. 3
学会発表等	単	「謝冰心的“問題”与“主義”」	冰心文学第四届国際學術研討会 中国・重慶 重慶師範大学		平24. 10
論文	単	「謝冰心と“蒋夫人文学獎金コンクール”: 文芸部門受賞作品審査をめぐる」	『関西大学中国文学会紀要(荻野脩二教授退休記念号)』 第33号 関西大学中国文学会	全14p	平24. 3
評論・書評等	単	「虞萍著『冰心研究—女性・死・結婚—』(汲古書院、2010年)」	『中国女性史研究』 第21号 中国女性史研究会		平24. 2
論文	単	「謝冰心と梁実秋—アメリカ留学とその後」	『國學院雑誌』 第112巻第8号 國學院大學	全13p	平23. 8
論文	単	「留学生としての聞一多と謝冰心」	『神話と詩(日本聞一多学会報)』 第九号 日本聞一多学会	全21p	平22. 12

【平成21年度以前の主な研究業績等】 (5点まで)					
種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または該当ページ	発行年月
論文	単	1936年広東省における民族主義文学運動と新生活運動の展開について—『時代文芸』、『新生路月刊』等の“民族英雄”の視点から—	『立命館文学』 615号 立命館大学文学部人文学会	全12p	平22. 2
翻訳・翻刻書	共	『家族への手紙——謝冰心の文革』	関西大学出版部	全129p	平20. 2
論文	単	「グレース・ボイントンについて——謝冰心、楊剛との交流を中心に」	『関西大学中国文学会紀要』 第27号	pp.111-130	平18. 3
論文	単	「關於在威爾斯利大学的中国和日本留学生的交流——以謝冰心為例」	『冰心論集三』 海峡文芸出版社	pp.497-508	平16. 11
学会発表等	単	“Before Mona Lisa Smile: Asian Women at Wellesley College 1920-1930”	於 Wellesley College		平15. 3

【所属学会】日本中国学会、中国冰心文学学会、日本現代中国学会

【最近5年間の学会等および社会における主な活動】

中国冰心文学学会常務理事

【教育活動の自己評価】

本学就任後、中国文学科において主に現代中国語と中国現代文学の講義と演習を担当してきた。現代中国語は、初級と初中級レベルを扱い、文法説明、暗唱を用いた発音練習・矯正を重点に置く教育を行っている。

中国現代文学の講義では、作品閲読、原典研究を担当している。原典研究では、卒業論文執筆を想定して、第一次、二次資料の扱い方を講義している。学生からは卒業論文執筆の上で役立つとの評価を得ている。

2011年度からは課外活動の一環として、中国現代文学研究会の活動を開始し、顧問を務めている。この会は現代中国語、現代文学を学ぶ学生が集まり、また中国留学希望者にとっての情報交換の場になっている。活動も4年目に入り、学生の間では役割分担が定まり、軌道に乗った。

本年度(2014年)、本学の「特色ある教育研究」の一環として、留学前後の中国語教育研究を行っており、留学予定校を訪問し、如何なる中国語教育が行われているか見学している。さらに、留学前の効果的な教育、また留学後、運用能力維持のための効果的な教育方法を実験授業の実施、関係書籍・資料、学会参加などを通して研究を進めている。

【研究活動の自己評価】

一貫して、謝冰心の文学を研究している。博士論文で彼女のアメリカ留学時代(1920年代)を扱ったことから、近年は他のアメリカ留学経験者にも注目し、特に梁実秋の研究を進めている。さらに、時代的背景として、1920年代の中国におけるアメリカ留学派遣の歴史も研究している。主に当時の大新聞『申報』を用い、当時の状況を調査している。文学から歴史の領域まで研究を行っている。

【職・氏名】准教授 宮内克浩 MIYAUCHI Katsuhiro
 【学 位】文学修士
 【本学就任】平成16年
 【略 歴】國學院大學文学部文学科卒業
 國學院大學大学院文学研究科博士課程後期単位取得満期退学
 暁星高等学校教諭(国語科)
 【専門分野】中国古典文学

【最近5年間の主な研究業績等】 [平成22～26年度] (10点まで)					
種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または該当ページ	発行年月
論文	単	「後漢・高彪「督軍御史箴」小考」	『國學院雑誌』第113巻第3号 國學院大學	全13p	平24. 3

【平成21年度以前の主な研究業績等】 (5点まで)					
種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または該当ページ	発行年月
論文	単	「後漢「北征頌」三首考」	『國學院雑誌』第109巻第9号 國學院大學	全15p	平20. 9
論文	単	「伝崔瑗「竇大將軍鼎銘」小考」	『國學院中國學會報』第50輯 國學院大學中國學會	pp.13-27	平16. 12
論文	単	「崔琦「外戚箴」小考」	『國學院雑誌』第105巻第2号 國學院大學	pp.45-57	平16. 2
論文	単	「張衡「応問」攷」	『國學院中國學會報』第48輯 國學院大學中國學會	pp.26-44	平14. 12

【所属学会】國學院大學中國學會、日本中国学会、財団法人無窮会

【最近5年間の学会等および社会における主な活動】

國學院大學中國學會副会長(平22. 4～平25. 3)

【教育活動の自己評価】

専門教育に関しては、その学修初期段階にあたる授業では漢文訓読法の基礎の定着を目指し、小テストを随時行い、学生に到達度合いと課題の自覚を促し、もって基礎力の充実を図る方途とした。また上級生の『文選』や唐宋詩文の演習では、特に発表前の準備段階での指導を重視し、レジュメ作成・訓読の仕方・注釈書の読解・文献調査の方法について、習得・習熟に配慮した。課外活動の場での学生教育としては、顧問をつとめる「漢代文学研究会」において、『前漢記』の輪読を週1回行うとともに、長期休暇中に合宿を行って、広く中国古典の学修の意義や、また、学ぶこと自体の意義を学生が考え、知るきっかけとなるよう多角的な学修を目指した。

【研究活動の自己評価】

後漢後期の文学の傾向について、賦・銘・箴や上書文といった様々なジャンルの詩文を取り上げた作品研究を行い、年1回のペースであるが、口頭発表を行った。和帝・安帝期に活躍した李尤や、時代が下った靈帝期の高彪の作品を取り上げながら、当時の文人官僚の文学創作は、『詩経』の詩人の製作動機を継承する「詩人の義」の発揚がその契機となっている場合が多く見られるとの見通しを立てている。ただし、それを論文として発表できたものは、この5年間においては1篇に止まっており、論文にまとめ上げることが喫緊の課題として残されている。

文 学 部

【外国語文化学科】

秋 吉 良 人 准 教 授	41
浅 井 理 恵 子 准 教 授	42
岩 瀬 由 佳 准 教 授	43
大 熊 光 子 教 授	44
笠 間 直 穂 子 准 教 授	45
上 石 田 麗 子 准 教 授	46
黒 澤 直 道 教 授	47
穴 戸 節 太 郎 准 教 授	48
出 世 直 衛 教 授	49
白 井 重 範 准 教 授	50
スピアーズ, スコット 准 教 授	51
高 橋 昌 一 郎 教 授	52
高 橋 誠 教 授	53
高 屋 景 一 准 教 授	54
野 呂 健 教 授	55
針 谷 壮 一 教 授	56
福 井 崇 史 准 教 授	57
福 島 直 之 教 授	58
藤 野 敬 介 准 教 授	59
村 山 雅 人 教 授	60
矢 島 昂 教 授	61
山 西 治 男 教 授	62

【教養総合（外国語）】

安 部 住 雄 教 授	63
-------------	-------	----

【職・氏名】教授 **秋吉良人** AKIYOSHI Yoshito
 【学 位】博士(文学)(平成11年3月 東京大学 博人社第237号)
 【本学就任】平成12年
 【略 歴】和光大学人文学部人間関係学科卒業
 東京大学大学院人文社会系研究科欧米系文化研究専攻博士課程修了
 東京大学大学院人文社会系研究科研究員
 【専門分野】仏文学
 【受賞歴等】第18回渋沢・クロード賞受賞(『サドにおける言葉と物』平成13年、風間書房)

【最近5年間の主な研究業績等】 [平成22～26年度] (10点まで)					
種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または 該当ページ	発行年月
論文	単	「フロイトの夢 第三章フロイトの「歩み」」	『思想』第6号 岩波書店	全22p	平25. 6
論文	単	「フロイトの夢 第二章フロイトとフリース」	『思想』第5号 岩波書店	全20p	平24. 5
論文	単	「フロイトの夢 第一章 幽霊たち:父ヤーコプと友フリース」	『思想』第9号 岩波書店	全21p	平23. 9

【平成21年度以前の主な研究業績等】 (5点まで)					
種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または 該当ページ	発行年月
評論・ 書評等	単	「フロイトとフリース:もうひとつの「精神分析 運動史」」	『フロイト全集』13巻 月報15 岩波書店	全6p	平21. 3
著書	単	『サド一切断と衝突の哲学』	白水社	全285p	平19. 12
論文	単	「フロイトにおける『母なる大地』と『直立』」	『國學院雑誌』第104巻第10号 國學院大學	pp.1-17	平15. 10
論文	単	「フロイトにおける『器官抑圧』:直立と嗅覚」	『國學院大學紀要』第41巻 國學院大學	pp.1-31	平15. 3
著書	単	『サドにおける言葉と物』	風間書房	全274p	平13. 2

【所属学会】

【最近5年間の学会等および社会における主な活動】

【教育活動の自己評価】

昨今の学生の勉学の状況を見ると、復習をしないものが大半なので、初級のフランス語の授業においては、前回の復習に時間をかけている。授業時間内に覚えるべきことは覚えるよう、ゆっくりと声に出し繰り返しながら進むようにしている。読解のクラスでは、フランス語本文に触れる機会を増やすため、平易な読み物を多く読むようにしている。

【研究活動の自己評価】

今までなされてこなかったフロイトの初期の研究に、友人フリースとの交流の影響を探りながら光を当てている。

【職・氏名】准教授 浅井理恵子 ASAI Rieko

【学 位】修士(文学)

【本学就任】平成17年

【略 歴】津田塾大学学芸学部数学科卒業

国際基督教大学教養学部社会科学科卒業

津田塾大学大学院文学研究科英文学専攻アメリカ文化研究コース後期博士課程単位取得満期退学

【専門分野】アメリカ史

【最近5年間の主な研究業績等】 [平成22～26年度] (10点まで)					
種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または該当ページ	発行年月
論文	単	『『フェミニスト』とは誰か？—アメリカ史研究における1960-70年代の女性解放運動研究の動向と展望』	『Walpurgis 2012』(外国語文化学科・外国語研究室紀要) 國學院大学外国語研究室・外国語文化学科	全12p	平24. 3
翻訳・翻刻書	単	グレッグ・ロビンソン著「シティズンシップの最前線—人種、シティズンシップ、そして同性婚」	『家族と教育』 (ジェンダー史叢書 第2巻) 明石書店	全19p	平23. 12
評論・書評等	単	「真珠湾への道程—中国はアメリカの「手先」にされたのか シドニー・パッシュ セミナー参加記」	CPAS Newsletter 第12巻第1号 東京大学アメリカ太平洋地域研究センター	全2p	平23. 9
論文	共	Hiroshima and the U.S. Peace Movement: Commemoration of August 6, 1948-1960	The United States and the Second World War: New Perspectives on Diplomacy, War, and the Home Front (本のタイトル) Fordham University Press	全400p中 pp.333-365	平22. 6

【平成21年度以前の主な研究業績等】 (5点まで)					
種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または該当ページ	発行年月
論文	単	Commemoration of Hiroshima and Nagasaki Days in the United States: A Preliminary Comparison, 1980 and 1985	『情報文化論』vol. 7 (2005-2006) 情報文化研究会	pp.74-90	平18. 12
論文	単	「原爆とアメリカの反核運動—8月6日の記念活動を中心に—」	『國學院雑誌』第107巻第12号 國學院大学	pp.1-11	平18. 12
論文	単	Commemoration of Hiroshima Day in the Antinuclear Weapons Movement in the United States, 1950-1955: The Case of the Fellowship of Reconciliation	Tsuda Review 46 (紀要) 津田塾大学	pp.1-26	平17. 11
論文	単	「せめぎあひあうヒロシマの記憶—1955年シカゴにおける広島原爆投下日の記念集会とその新聞報道をめぐり—考察」	『立教アメリカン・スタディーズ』第26号(紀要) 立教大学アメリカ研究所	pp.111-128	平16. 3
論文	単	「アメリカ平和運動史研究の展開—過去20年間の動向を中心に—」	『津田塾大学言語文化研究所報』第18号 津田塾大学言語文化研究所	pp.35-47	平15. 7

【所属学会】アメリカ学会、アメリカ史学会、アメリカ政治研究会、ジェンダー史学会

【最近5年間の学会等および社会における主な活動】

【教育活動の自己評価】

主として外国語科目(英語)を担当している。学生の積極的な授業参加を促すため、単なる訳読に終始するのではなく、教壇で担当箇所を説明させたり、リスニング科目においては会話練習を頻繁に行うなど、さまざまなアクティビティを授業に取り入れている。また、リスニング科目においては、CDが添付されたテキストが大半を占めるようになり、自宅学習が可能となっている。そのような状況を活かし、授業外で英語を聴く時間を出来る限り増やす目的で、課題を多く出すようにしている。外国語科目以外では、アメリカの社会や文化に関する講義科目を担当している。日本に入ってくるアメリカの情報は、量が多いが内容に偏りがある。このことから、特にアメリカの国内問題など日本ではあまり報道されないトピックを積極的に取り上げることで、受講生の関心を喚起するようにしている。

【研究活動の自己評価】

平成24年より、新しい研究テーマに取り組んでいる。「冷戦初期の米軍におけるマンパワー(動員)政策とジェンダー」というもので、戦後アメリカの新しい国際的役割がアメリカ国内のジェンダー規範に及ぼした影響について研究している。国外派遣研究期間(平成24～25年)中に収集した史料をもとに、研究論文を発表する予定である。

【職・氏名】准教授 岩瀬 由佳 IWASE Yuka
 【学 位】博士(言語文化学)(平成12年3月 大阪外国語大学 博甲第1号)
 【本学就任】平成14年
 【略 歴】大阪外国語大学外国語学部アラビア語学科卒業
 大阪外国語大学大学院修士課程外国語学研究科西アジア語学専攻修了
 イギリス、エジンバラ大学修士の学位授与(MSc by Research,1998年10月)
 大阪外国語大学大学院言語社会研究科博士後期課程修了
 【専門分野】インド・アラブの説話文学と関連文学の比較研究

【最近5年間の主な研究業績等】 [平成22～26年度] (10点まで)					
種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または該当ページ	発行年月
論文	単	Development of Selected Stories from the “Pañcatantra”/“Kalīlah wa Dimnah”: Genealogical Problems Reconsidered on the Basis of Sanskrit and Semitic Texts	青山社	全360p(viii, 344p)	平23. 2
論文	単	「ライオンの従者たちとラクダ」のプロットの発展について	『國學院雑誌』第111巻第12号 國學院大學	pp.1-16	平22. 12

【平成21年度以前の主な研究業績等】 (5点まで)					
種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または該当ページ	発行年月
論文	単	「猿と鱈」のプロットの発展について	『國學院雑誌』第108巻第5号 國學院大學	pp.1-15	平19. 5
論文	単	The Development of the Story of ‘Honest-wit and Evil-wit’	『國學院大學紀要』第45巻 國學院大學	pp.29-61	平19. 2
論文	単	The Development of the Names of Characters in the “Pañcatantra”/“Kalīlah wa-Dimnah”: Characters in Embedded Stories	『関西アラブ研究』第2号 関西アラブ研究会	pp.7-23	平14. 12
論文	単	「鉄を食う鼠」のプロットの変化について	『國學院雑誌』第103巻第11号 國學院大學	全86p中 pp.44-57	平14. 11
論文	単	『井戸の中の男』の発展について—宗教的背景の考察—	『EX ORIENTE』vol.4 大阪外国語大学言語社会学会	pp.97-122	平12. 12

【所属学会】日本中東学会、日本オリエント学会、イギリス Royal Asiatic Society、関西アラブ研究会

【最近5年間の学会等および社会における主な活動】

【教育活動の自己評価】

教養総合の英語科目および外国語文化学科の専門科目(イギリスに関する講義含む)のほか、アラブ・イスラーム文化についての講義を担当している。英語の授業では、独自の教材・テキストを作成し、本学の学生に適した授業にするよう努力している。また、毎回の宿題として復習および次回授業内容の予習を課している。文法を中心とした授業ではさらに、単元ごとに小テストを行うことで基礎の定着を図り、次の回に返却することでフィードバックしている。

【研究活動の自己評価】

平成18年のエジンバラ大会に続いて、平成21年に京都で開催されたサンスクリット大会に参加して、世界の研究者と交流をもった。また、平成22年の国内派遣研究期間には、延べ3ヶ月間、ヨーロッパ(イギリスおよびアイルランド)、インド、中東地域に滞在して資料収集するとともに教材用の画像を撮影した。撮影した画像は教材として、主に講義科目で活用している。また、当初計画にはなかったが、博士論文を推敲し、平成23年2月に青山社から出版した。今後は、説話に限らずさらに視野を広げて研究活動を続けたい。

【職・氏名】教授 大熊光子 OKUMA Mitsuko

【学位】文学修士

【本学就任】昭和50年

【略歴】東京女子大学文理学部英米文学科卒業

東京大学大学院人文科学研究科英語英文学専攻博士課程単位取得満期退学

【専門分野】英文学・英語教育

【受賞歴等】天達文子賞(東京女子大学、昭和44年)

【最近5年間の主な研究業績等】 [平成22～26年度] (10点まで)

種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または該当ページ	発行年月
論文	単	「ウルフ受容を考える—小説、および、映画『めぐりあう時間たち』を中心に—」	『國學院雑誌』第115巻第11号 國學院大學	pp.19-33	平26. 11
評論・書評等	単	Alison Light, “Mrs. Woolf and the Servants”(Penguin Fig Tree, 2007)	『ヴァージニア・ウルフ研究』第27号 日本ヴァージニア・ウルフ協会	全126p中 pp.88-91	平22. 10

【平成21年度以前の主な研究業績等】 (5点まで)

種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または該当ページ	発行年月
論文	単	『オーランド』論考:ジャンル、及び、ジェンダーの視点から	『Walpurgis 2007』 國學院大學外国語研究室・外国語文化学科	pp.1-21	平19. 2
論文	単	「フラッシュ、ウィルソン、そしてエリザベス—伝記論からの『フラッシュ』考察—」	『Walpurgis 2006』(國學院大學外国語研究室・外国語文化学科紀要) 國學院大學外国語研究室・外国語文化学科	全148p中 pp.1-18	平18. 3
論文	単	「『ダロウェイ夫人の歳月』から『幕間』へ」	『國學院雑誌』第103巻第6号 國學院大學	pp.1-10	平14. 6
翻訳・翻刻書	単	「コミュニケーション重視方法論は万能薬か？」	The Newsletter of JALT Teacher Education, Vol.7, No.1	pp.17-22	平11. 6
論文	単	「『男って、ほんと邪魔だわね！でも・・・』—老嬢たちのユートピア・克蘭フォード」	『國學院雑誌』第98巻第10号 國學院大學	pp.14-27	平9. 10

【所属学会】日本英文学会、イギリスブロンテ協会、全国語学教育学会、日本ヴァージニア・ウルフ協会会員、イギリスウルフ協会会員

【最近5年間の学会等および社会における主な活動】

【教育活動の自己評価】

学部1～2年次対象の英語科目については、近年の学力差の広がりにも鑑みて、学力の劣る学生、英語学習にうまく取り組めない学生にも、興味、関心を持って課題に対処できるよう留意しつつ教育を行っている。また、3～4年次対象の外国文学、外国語学については、単なる語学学習にとどまらない、英語という言葉の背景にある文化、歴史といったものにも目配りをしながら、少し、難度の高い文献を読むことを通して、英語力のさらなる養成と、英文学、英語学への理解が深まるように心がけている。

【研究活動の自己評価】

ヴァージニア・ウルフ研究については、この10年来、時間、歴史認識、ジャンル、ジェンダーといった視点から、いくつかの作品を取り上げて考察を続けてきたが、ウルフにヒントを得た現代作家の作品との比較などを通して、また、あらたな切り口を持ったウルフ再読の結果を、近日中にまとめる予定である。また、ウルフ関連の学会に参加する中で与えられた、多様な考察も参考に、自分なりの視点で考えていきたいと思っている。

【職・氏名】助教 笠間直穂子 KASAMA Naoko
 【学 位】修士(学術)
 【本学就任】平成25年
 【略 歴】上智大学外国語学部フランス語学科 卒業
 東京大学大学院総合文化研究科 地域文化研究専攻 修士課程 修了
 慶應義塾大学理工学部非常勤講師
 【専門分野】近現代フランス語文学
 【受賞歴等】第15回日仏翻訳文学賞(平成22年・小西国際交流財団)

【最近5年間の主な研究業績等】〔平成22～26年度〕(10点まで)					
種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または該当ページ	発行年月
評論・書評等	単	「工藤庸子著『近代ヨーロッパ宗教文化論:姦通小説・ナポレオン法典・政教分離』」	『女性史学』第24号 女性史総合研究会	pp.82-85	平26. 7
論文	単	「言語・殺戮・傷痕 フローベール『サランボー』について」	『國學院雑誌』第115巻第5号 國學院大學	pp.1-17	平26. 5
評論・書評等	単	「シンデレラ」「ジルの妻」	『いま、世界で読まれている105冊』 テン・ブックス	全272p中 pp.147-148, 156-157	平25. 12
論文	単	「多角的スタイルをめぐって」	『ユリイカ』3月臨時増刊号(「世界マンガ体系」) 青土社	pp.101-108	平25. 3
論文	単	「ひとつの土地を描く ラミュ『詩人の訪れ』」	『O-M 2011-2012』 学習院大学大学院人文科学研究科	pp.5-20	平24. 3
翻訳・翻刻書	単	ジャン・ポーラン「よきタベ」	『ろうそくの炎がささやく言葉』 勁草書房	pp.55-57	平23. 8
論文	単	「フランス語圏漫画における叙述と描写」	『学習院大学文学部年報』第57輯 学習院大学文学部	pp.47-63	平23. 5
論文	単	「照らし合う関係 マリー・ンディアイとクレール・ドゥニ」	『文芸研究』第114号 明治大学文学部	pp.65-76	平23. 3
翻訳・翻刻書	単	シャルル・フェルディナン・ラミュ著『使いの者』	『Les Lettres françaises』第30号 上智大学フランス語フランス文学会	pp.53-64	平22. 7
学会発表等	単	「語りと描写」	ワークショップ「文学研究とBD」(日本フランス語フランス文学会2010年度春季大会)		平22. 5

【平成21年度以前の主な研究業績等】(5点まで)					
種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または該当ページ	発行年月
論文	単	「仮の名前 マリー・ンディアイ『水入らず』『ロージー・カルブ』をめぐって」	『Les Lettres françaises』第29号 上智大学フランス語フランス文学会	pp.53-59	平21. 9
翻訳・翻刻書	単	マリー・ンディアイ『心ふさがれて』	インスクリプト	全356p	平20. 10
論文	単	「直接話法とタイポグラフィ フローベールからラ・フォンテーヌへ」	『Lingua』第17号 上智大学一般外国語教育センター	pp.149-166	平19. 11
論文	単	「二重の呼びかけ フローベールの1836年の小説群における自由間接話法の萌芽」	『Les Lettres françaises』第27号 上智大学フランス語フランス文学会	pp.1-11	平19. 7
論文	単	「言語学と文学批評の間に 自由間接話法理論の黎明期におけるフローベール作品の位置」	『日本フランス語フランス文学会 関東支部論集』第14号 日本フランス語フランス文学会	pp.123-135	平17. 12

【所属学会】上智大学フランス語フランス文学会、日本フランス語フランス文学会

【最近5年間の学会等および社会における主な活動】

学習院大学人文科学研究科客員研究員(平22. 4～現在)、日本フランス語フランス文学会 関東支部論集編集委員(平24. 4～平26. 3)、日本フランス語フランス文学会 常任幹事(平26. 5～現在)、日仏翻訳文学賞選考準備委員(平26. 5～現在)

【教育活動の自己評価】

フランス語教育においては、初級・中級レベルを担当し、カリキュラムの要請に従って、文法、会話、講読の授業をおこなった。いずれの場合にも、実践で役立つ単語・表現に重点を置き、とりわけ初級の授業では教室にある備品・文房具等をイラストで示したオリジナル教材を作成したほか、全員に書画カメラを使って発表させるなど、教科書をなぞるだけではなく自ら発信することを促した。また、フランス語圏文化に関する講義では、デパートや漫画など学生になじみのあるテーマを取りあげ、硬軟取り混ぜた視聴覚教材を適宜用いることで、近代西欧文明の抱える問題を身近に感じてもらうことに努めている。

【研究活動の自己評価】

翻訳紹介と学術的アプローチを両輪とする活動をつづけてきた。現在の関心は三つの柱に集約できる。第一は卒業論文以来継続しているフローベール研究であり、本年は諸作品の中でも手薄になっていた『サランボー』に取り組むことができた。第二はフランス語圏漫画研究であり、これまでの商業誌等における作品紹介に加え、理論面を重視した論文を二本発表した。第三は未だ日本の知名度が低い近現代のすぐれた作家に照明を当てた研究であり、ンディアイおよびラミュの功績を論文にまとめた。

【職・氏名】准教授 上石田 麗子 KAMIISHIDA Reiko

【学 位】修士(文学)

【本学就任】平成20年

【略 歴】九州大学人文科学府言語・文学専攻英語学・英文学専修修士課程修了

九州大学人文科学府言語・文学専攻英語学・英文学専修博士課程(後期)単位取得満期退学

上田女子短期大学総合文化学科専任講師

【専門分野】20世紀イギリス小説 特にD.H.ロレンス

【最近5年間の主な研究業績等】 [平成22～26年度] (10点まで)					
種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または該当ページ	発行年月
評論・書評等	単	Kirsty Martin, Modernism and the Rhythms of Sympathy (書評)	『D. H. ロレンス研究』第24号 日本ロレンス協会	全7p	平26. 3
論文	単	「パンクシー— ヴァンダル、ラディカル、ブリストル」	『Walpurgis 2013』 國學院大學外国語研究室・外国語文化学科	全22p	平25. 3
学会発表等	単	「THEY LIVEに描かれる同時代からの引喩について」	日本映画学会 第8回全国大会		平24. 12
評論・書評等	単	『イグジット・スルー・ザ・ギフトショップ』から見える、現代アートにおける「オリジナル」と「複製」の関係について	『日本映画学会会報』32 日本映画学会	全3p	平24. 9

【平成21年度以前の主な研究業績等】 (5点まで)					
種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または該当ページ	発行年月
論文	単	『『灯台へ』における対象の捕捉の問題』	『Walpurgis 2010』 國學院大學外国語研究室・外国語文化学科	全17p	平22. 3
論文	単	『『トリストラム・シャンディ』における想念と言葉の増殖』	『國學院雑誌』第110巻第10号 國學院大學	全12p	平21. 10
論文	単	「言語的動物/ 動物的语言語: ロレンスとウルブにおける言語観の違い」	『Walpurgis 2009』 國學院大學外国語研究室・外国語文化学科	pp.33-55	平21. 3
論文	単	The Paradox in Lawrence's Speculative Writings	『D. H. ロレンス研究』第17号 日本ロレンス協会	pp.43-53	平19. 3
論文	単	「Kangarooに表れた相対性理論とシェストフ哲学の影響—1920年代初頭におけるロレンスのRelativityへの関心について」	『D. H. ロレンス研究』第16号 日本ロレンス協会	pp.16-31	平18. 3

【所属学会】日本英文学会九州支部、日本ロレンス協会、日本英文学会、日本ヴァージニア・ウルフ協会、日本映画学会

【最近5年間の学会等および社会における主な活動】

【教育活動の自己評価】

学部の教養教育では、主に1、2年生向けの英語科目を担当した。教科書選定の際には、大学生の知的関心が満たされると同時に、基礎的な英語力が身に付くテキストを選ぶよう心がけた。語学の少人数授業では授業中に二回は発言の機会を持たせ、受講者が参加しやすい雰囲気作りを目指した。外国語文化学科での専門教育では『外国文学I』を担当し、主にイギリスの短編小説を精読した。訳読を通じて受講者一人一人に作品を解釈させ、コメントペーパーやレポートで、作品への理解度を判断した。テーマ別講義では『20世紀モダニズムの作家たち』、『反消費・反広告文化の研究』というタイトルで、産業革命や第一次世界大戦に付随する形で展開した大量生産・大量消費の文化の変遷を、学生とともに見ていった。大人数の講義でも、毎週コメントペーパー一枚一枚に目を通し、次の週の授業冒頭で質問に答えるなど、双方向性のある授業運営を試みた。

【研究活動の自己評価】

D. H. ロレンス、ヴァージニア・ウルフを中心とするイギリスのモダニスト作家の表現方法や時代背景の調査を中心に研究を進めた。モダニズムについて講ずるため、小説だけではなく、モダニズムの文化、特に建築、絵画、映画等に調査対象を拡げた。第二次世界大戦後の大量生産・大量消費社会について調査するうちに、壁の上の大量生産作品とも言えるグラフィティに行き当たり、現代を代表するグラフィティ・ライターであるパンクシーの出身地ブリストルへ現地調査に行き、論文を書いた。

【職・氏名】教授 黒澤直道 KUROSAWA Naomichi
 【学 位】博士(学術)(平成15年3月 東京外国語大学 博甲第38号)
 【本学就任】平成16年
 【略 歴】東京外国語大学外国語学部中国語学科卒業
 東京外国語大学大学院地域文化研究科博士後期課程修了
 日本学術振興会特別研究員(PD)
 【専門分野】中国語、中国の文化と民族

【最近5年間の主な研究業績等】 [平成22～26年度] (10点まで)					
種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または 該当ページ	発行年月
論文	単	「様々な“文字”をめぐって ～ナシ語～」	東京外国語大学オープンアカデミー2012年度後期開講講座「言葉とその周辺をきわめる」 東京外国語大学語学研究所	pp.69-90	平26. 3
その他	単	「ナシ族の歴史・言語・文学—雲南の高原で育まれた文化」	FIELDPLUS No.11 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所	pp.10-11	平26. 3
論文	単	「ナシ(納西)語の文字とその背景」	『國學院雑誌』 第114巻第7号 國學院大學	pp.1-17	平25. 7
論文	単	「中国ナシ族の言語伝承—情死の経典『ルバルザ』を例として」	『語りの講座 昔話の声とことば』 三弥井書店	全319p中 pp.265-291	平24. 12
学会発表等	単	「中国のナシ族—ナシ語教育とトンバ文化伝承の現状について」	関西大学人権問題研究室合宿研究会(於 関西大学セミナーハウス)		平24. 7
著書	単	『ナシ族の古典文学—『ルバルザ』・情死のトンバ経典』	雄山閣	全188p	平23. 11

【平成21年度以前の主な研究業績等】 (5点まで)					
種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または 該当ページ	発行年月
論文	単	「ナシ(納西)語大研鎮方言の音韻体系—先行研究との比較を中心に」	『アジア・アフリカ言語文化研究』 第77号 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所	pp.63-81	平21. 10
論文	単	「ナシ族トンバ経典文字テキストの基礎的研究—出現頻度に基づいた「骨組み」の抽出」	『國學院雑誌』 第110巻第3号 國學院大學	pp.1-17	平21. 3
論文	単	「ナシ(納西)語による出版物について」	『國學院大學紀要』 第47号 國學院大學	pp.1-13	平21. 2
著書	単	『ナシ(納西)族宗教経典音声言語の研究:口頭伝承としての「トンバ(東巴)経典』	雄山閣	全216p	平19. 2
著書	単	『ツォゼルグの物語:トンバが語る雲南ナシ族の洪水神話』	雄山閣	全157p	平18. 6

【所属学会】日本中国学会、日本口承文芸学会、東京外国語大学中国言語文化研究会、日本中国語学会、社会環境学会

【最近5年間の学会等および社会における主な活動】

東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所共同研究員(平23.4～平26.3)

【教育活動の自己評価】

導入教育に位置づけられる外国語文化基礎演習では、学生の日本語能力を高めるため、提出された課題の添削に特に力を入れた。中国語入門、中国語演習Ⅰ、中国語演習Ⅱでは、語学の基礎力を身につけさせることと同時に、映像教材などを使って中国の文化的な背景についても極力紹介した。外国語文化総合演習の授業では、中国語の読解力とともに、学生自らが選択したテーマでの発表を通じて、主体的な学修ができるよう配慮した。中国地域文化論Ⅰ・Ⅱでは、中国の民族問題など、最新の情勢を極力盛り込むようにした。なお、いずれの授業でも每期授業アンケートを実施し、できるだけ学生からの要望に応えるようにしている。

【研究活動の自己評価】

中国の少数民族、特に雲南省の西北部に居住するナシ族の言語と文化について研究を進めた。ナシ族の古典文学とされるナシ語の経典について、同一の物語の複数のテキストを相互に比較・検討し、さらに、ナシ語のインフォーマントから得られた助言も参考にしながら、原文に忠実な日本語訳を作成した。また、観光開発の大きなうねりの中で変化する現在のナシ族の言語や文字の状況について、最新の情報を収集しながら、その問題点について考察を行った。

【職・氏名】准教授 宍戸 節太郎 SHISHIDO Setsutaro

【学 位】博士(文学)(平成21年9月 上智大学 乙第270号)

【本学就任】平成24年

【略 歴】上智大学大学院文学研究科ドイツ文学専攻博士後期課程満期修了退学
早稲田大学文学部(現文学学術院) 非常勤講師
上智大学文学部ドイツ文学科 非常勤嘱託講師

【専門分野】ドイツ現代文学・思想・文化

【最近5年間の主な研究業績等】 [平成22～26年度] (10点まで)					
種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または該当ページ	発行年月
論文	単	「ドイツ現代文化横断——小説、映画、ポップ・ミュージック」	『國學院雑誌』第115巻第2号 國學院大學	pp.19-34	平26. 2
その他	単	エッセイ:「二〇〇〇年代のドイツ映画」	『國學院雑誌』第114巻第7号 國學院大學	pp.42-43	平25. 7
翻訳・ 翻刻書	共	スヴェン・ハヌシエック『エリアス・カネッティ伝記 上巻』	上智大学出版	全526p	平25. 6
翻訳・ 翻刻書	共	スヴェン・ハヌシエック『エリアス・カネッティ伝記 下巻』	上智大学出版	全555p	平25. 6
著書	単	『カネッティを読む——ファンズム・大衆の20世紀を生きた文学者の軌跡』	現代書館	全229p	平25. 2
著書	共	公益財団法人日本ドイツ語学文学振興会編『独検過去問題集2012年版(2級・準1級・1級)』	郁文堂	全168p	平24. 5
著書	共	財団法人日本ドイツ語学文学振興会編『独検過去問題集2011年版(2級・準1級・1級)』	郁文堂	全168p	平23. 5

【平成21年度以前の主な研究業績等】 (5点まで)					
種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または該当ページ	発行年月
論文	単	「近代的「個人」の戯画——エリアス・カネッティの小説『眩暈』におけるパラダイム転換」	上智大学ヨーロッパ研究所研究叢書3『文学におけるモダン』 上智大学ヨーロッパ研究所	pp.109-123	平21. 12
論文	単	「他在の可能性——エリアス・カネッティにおける「変身」の詩学」	博士論文 上智大学	全118p	平21. 9
編著	共	日本独文学会研究叢書059号『「群衆と権力」の射程——エリアス・カネッティ再読』	日本独文学会	全92p	平21. 5
翻訳・ 翻刻書	共	アウグスト・クビツェック『アドルフ・ヒトラー——我が青春の友』	MK出版社	全472p	平16. 6
著書	共	日本独文学会研究叢書002号『(戦後文学)を越えて——1989年以降のドイツ文学』	日本独文学会	全96p	平13. 4

【所属学会】日本独文学会、ドイツ現代文学ゼミナール、日本オーストリア文学会、上智大学ドイツ文学会

【最近5年間の学会等および社会における主な活動】

「独検(ドイツ語技能検定試験)」(財団法人ドイツ語学文学振興会)出題委員(1級、準1級、2級担当)(平22. 3～平24. 2)、
獨協大学エクステンション・センター 講師(ドイツ語担当)(平25. 4～平26. 3)、日本オーストリア文学会幹事(平26. 5～現在)

【教育活動の自己評価】

平成22年3月から平成24年2月まで務めた「独検(ドイツ語技能検定試験)」出題委員、また平成25年4月から平成26年3月まで務めた獨協大学エクステンション・センターでの、社会人向け語学講座講師などが良い刺激となり、大学を取り巻く環境も視野に入れながら授業展開する視座を獲得できた意義は大きい。平成24年4月國學院大學文学部外国語文化学科専任職着任後には、それまで以上に学生個々に対する教育の責任の重さを自覚し、長期的観点からの指導という面でも、与えられた任務に適応努力を続けている。授業では、学生の積極的な参加、自主的な問題発見・学びを促すべく、少人数規模でのグループ討議や発表なども取り入れ、自覚的な学びと成果の共有が図れるよう工夫を続けている。

【研究活動の自己評価】

何よりもまず、大学院博士前期課程時代から20年の長きにわたって蓄積を続けてきた研究成果を、平成25年2月國學院大學出版助成金を得て、『カネッティを読む——ファンズム・大衆の20世紀を生きた文学者の軌跡』(現代書館)として公刊することができた。1981年にノーベル文学賞を受賞したエリアス・カネッティについて、日本人の手になる初の概論書であり、関連分野の今後の研究に欠かせない一里塚、叩き台となると期待される。平成25年6月に刊行されたスヴェン・ハヌシエック『エリアス・カネッティ伝記(上・下巻)』の翻訳作業もまた、日本の現代文学研究における重要な成果の一つと目され、今後の活発な学術的議論に資すると期待される。

【職・氏名】教授 出世直衛 SHUSSE Naoe

【学 位】文学修士

【本学就任】平成6年

【略 歴】上智大学外国語学部英語学科卒業

上智大学大学院外国語学研究科言語学専攻博士後期課程単位取得満期退学

【専門分野】言語学、音声学

【最近5年間の主な研究業績等】 [平成22～26年度] (10点まで)					
種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または該当ページ	発行年月
論文	単	「モナリザは惚れた男の夢を見るか…テキストの自律性」	『國學院雑誌』第115巻第11号 國學院大學	pp. 34-43	平26. 11

【平成21年度以前の主な研究業績等】 (5点まで)					
種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または該当ページ	発行年月
論文	単	「言語進化の迷宮」	『國學院雑誌』第109巻第7号 國學院大學	pp. 1-14	平20. 7
論文	単	「伝達装置としての自然言語—機能と限界」	『Walpurgis 2004』(國學院大學外国語研究室・外国語文化学科紀要) 國學院大學外国語研究室・外国語文化学科	pp.31-48	平16. 3
論文	単	「言語的タブーとその意味」	『國學院雑誌』第103巻第12号 國學院大學	pp.1-13	平14. 12
論文	単	「母国語話者の謎」	『Walpurgis 2002』(國學院大學外国語研究室・外国語文化学科紀要) 國學院大學外国語研究室・外国語文化学科	pp.49-62	平14. 3
論文	単	「言葉遊びの弁別素性分析…試論」	『國學院雑誌』第97巻第3号 國學院大學	全81p中 pp.42-54	平8. 3

【所属学会】日本音声言語医学会

【最近5年間の学会等および社会における主な活動】

【教育活動の自己評価】

2012年度より、外国語文化学科の英語演習Ⅱにおいて、教科書を作成し使用している。昨今の大学生用教材に根本から欠けている部分を補う主旨で作成した。毎年小規模な改定をしているが、誤り等が出尽くして内容が確定したら、音声教材を作成する予定である。

学生の成績評価に関して、達成度を正しく測り、かつ厳しすぎず、甘すぎず、かつ公平性を確保する方策を試行錯誤しつつ模索している。

【研究活動の自己評価】

ヒトと言語の関わり、言語のシステム上の問題、などについて調査中である。

【職・氏名】准教授 白井重範 SHIRAI Shigenori

【学 位】博士(学術)(平成19年6月 東京大学 博総合第757号)

【本学就任】平成15年

【略 歴】二松学舎大学文学部中国文学科卒業

埼玉大学大学院文化科学研究科日本・アジア研究専攻修士課程修了

東京大学大学院総合文化研究科地域文化研究専攻博士課程単位取得満期退学

【専門分野】中国近現代文学

【最近5年間の主な研究業績等】 [平成22～26年度] (10点まで)					
種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または該当ページ	発行年月
論文	単	「茅盾小説の「主題先行」批判をめぐって」	『國學院雑誌』第114巻第9号 國學院大學	pp.1-15	平25.9
著書	単	『「作家」茅盾論——二十世紀中国小説の世界認識』	汲古書院	全321p	平25.7
論文	単	「不甲斐なさをかみしめる—茅盾小説における「不能」男性の系譜—」	『季刊中国』第110号 日本中国友好協会	pp.74-84	平24.9
論文	単	「『現代文学』研究の遺産」	『麦灯』第26号 二松学舎大学中国語文研究会	pp.105-130	平24.2
論文	単	「茅盾小説の世界構造——1930年代の都市・農村イメージ」	『中国研究月報』2011年11月号 中国研究所	pp.3-17	平23.11
編著	共	『左翼文学的時代——日本“中国三十年代文学研究会”論文選』	北京大学出版社	全412p	平23.11

【平成21年度以前の主な研究業績等】 (5点まで)					
種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または該当ページ	発行年月
論文	単	「銭理群の戦略—『拒絶遺忘：“1957年学”研究筆記』を読む」	『科学研究費基盤研究(B)「文化大革命の文化史的再考」2009年度研究会記録／文化大革命関連書籍・資料目録』 「文化大革命の文化史的再考」研究会事務局	pp.1-16	平22.3
論文	単	「茅盾「追求」試論—あるいは徒花的ポストモダニティー」	『國學院雑誌』第110巻第7号 國學院大學	全13p	平21.7
論文	単	「『嚴霜下の夢』をめぐって—「茅盾と北欧神話」補遺」	『Walpurgis 2008』(國學院大學外国語研究室・外国語文化学科紀要) 國學院大學外国語研究室・外国語文化学科	pp.61-82	平20.3
論文	単	「茅盾と銭杏邨—革命文学論戦再考—」	『國學院大學紀要』第46巻 國學院大學	pp.85-110	平20.2
論文	単	「『子夜』私論」	『Walpurgis 2007』(國學院大學外国語研究室・外国語文化学科紀要) 國學院大學外国語研究室・外国語文化学科	pp.45-66	平19.2

【所属学会】日本中国学会、日本現代中国学会、中国文芸研究会、中国三十年代文学研究会

【最近5年間の学会等および社会における主な活動】

【教育活動の自己評価】

中国語関連科目は、初級レベルでは正確な発音、自然なリズムやイントネーションの修得のほか、中国語の構造(語順)を即座に把握できるよう指導することで、中国語の発想法を体得させることを目的としている。中級レベルでは重要な複文をふまえて長文を読みこなし、やや複雑な中国語文を理解できるよう導くとともに、音声面では日常的コミュニケーションに必要な速度を重視している。上級レベルでは、高度な中国語文について、正確な読解を前提としつつ、原文のニュアンスを活かした日本語訳の作成を課すほか、文字テキストを用いず、音声のみで情報を取り入れる訓練を並行して行い、実用的中国語能力の完成を目指している。文化演習科目では、教員が司会者となって、出席者全員の意見を引き出す試みを続けている。日常的疑問の多角的検討から始め、テーマを国内から海外へと移行させ、比較文化、外国文化研究の基礎的なスキルや考え方の修得をはかっている。また、レポート作成において、主張に説得力を持たせるための文章構成、用語の吟味、引用、注釈の付け方などを丁寧に指導している。外国文学関連科目は、20世紀中国の短篇小説を題材に、作品を歴史的文脈に即して理解した上で、他者への想像力を涵養すべく、現在の我々の問題関心との近似や乖離を議論している。演習および講義科目におけるアクティブラーニングの実践は、学生の複眼的思考方法の会得に一定の成果をあげている。

【研究活動の自己評価】

20世紀中国の作家・茅盾の現実(社会)認識が、如何にして作品上に表出されたかを考察し、これまでの成果を拙著『「作家」茅盾論—二十世紀中国小説の世界認識』(汲古書院)として出版した。また、中国三十年代文学研究会の歴代の論文を中国に紹介すべく、『左翼文学的時代—日本“中国三十年代文学研究会”論文選』(北京大学出版社)を編集した。現在は茅盾研究と並行して、20世紀の代表的作家の作品を、中華人民共和国における規範的な解釈と一線を画しつつ、作家の内面や自意識の表れを見る素材として再読している。その他、現代中国知識人の思索を思想的資源として汲み取る作業も行っている。

【職・氏名】准教授 **スピーアーズ, スコット** Scott SPEARS
 【学 位】博士(文学)(平成23年2月 早稲田大学 第5561号)
 【本学就任】平成24年
 【略 歴】国際基督教大学教養学部人文科学科卒業
 早稲田大学大学院修士課程文学研究科日本文学専攻修了
 早稲田大学大学院博士後期課程文学研究科日本文学専攻単位取得退学
 【専門分野】日本中世文学、和歌文学

【最近5年間の主な研究業績等】 [平成22～26年度] (10点まで)					
種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または該当ページ	発行年月
論文	単	「鎌倉末・南北朝初期の二条派門弟 一元盛の著作を通して」	『國學院雑誌』第114巻第11号 國學院大學	pp.555-568	平25. 11
論文	単	「惟宗光吉とその生涯 —『惟宗光之朝臣集』を通して—」	『和歌文学研究』第104号 和歌文学会	全12p	平24. 6
学会発表等	単	「医家惟宗氏と『勅撰作者部類』の増補 —光吉・光庭・光之・光方—」	和歌文学会5月例会		平23. 5
論文	単	「鎌倉将軍と和歌の研究」	博士論文 早稲田大学		平23. 2
論文	共	「『嘉吉門院集』注釈(三)」	『古典遺産』第60号 古典遺産の会	pp.22-30	平22. 12

【平成21年度以前の主な研究業績等】 (5点まで)					
種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または該当ページ	発行年月
学会発表等	単	「ハイクからタンカへ —アメリカ短歌運動の後発と初期俳句運動の問題について」	早稲田大学比較文学研究室 第210回月例研究発表会		平21. 12
論文	単	「『勅撰作者部類』注記考—「至～年」は何を意味するか—」	『研究と資料』第61輯 研究と資料の会	pp.29-50	平21. 7
学会発表等	単	「鎌倉将軍と和歌—源実朝をめぐる—」	和歌文学会7月例会		平21. 7
論文	単	「翻訳と解釈の狭間で—古典和歌翻訳の問題について—」	『比較文学年誌』第44号 早稲田大学比較文学研究室	pp.16-29	平20. 3
論文	単	「『勅撰作者部類』の諸問題—その改編を中心に—」	『和歌文学研究』第95号 和歌文学会	pp.32-43	平19. 12

【所属学会】和歌文学会、早稲田大学国文学会、無窮会、中世文学会

【最近5年間の学会等および社会における主な活動】

桜剣友会(小金井市内少年剣道会)(平22. 6～現在)

【教育活動の自己評価】

英語演習科目を担当し、そこにおいて、入学前に学生が身につけた基礎英語力を駆使して、会話・ディスカッション技術を身につけるための練習を実施した。平成25年度に同様の訓練を経験した学生は、今年では、積極的な授業参加がみられ、その成果が確認できた。さらに、西洋文化の基礎となる聖書及びギリシャ神話を授業で扱い、西洋文明についての理解を深めようとした。宗教のみならず、文学・芸術・政治等への影響を紹介し、西洋文化の多角的理解を促し、今後の学習に役立たせるよう工夫した。また、平成25年度より担当した社会人講座においては、『金葉和歌集』を取り上げ、本学所蔵写本等を用いながら、院政期歌壇及び宮廷社会を紹介し、和歌の多面的な学習につとめた。

【研究活動の自己評価】

鎌倉・南北朝時代の勅撰和歌集及び二条派の研究を進めてきた。平成25年11月の『國學院雑誌』では、その成果の一部分を発表することができた。関連作品として、『勅撰作者部類』の調査・研究を進めており、その成立背景等の究明につとめた。

【職・氏名】教授 高橋 昌一郎 TAKAHASHI Shoichiro

【学 位】修士(哲学)

【本学就任】平成8年

【略 歴】ウエスタンミシガン大学教養学部数学科・哲学科卒業
ミシガン大学大学院哲学研究科修士課程修了
東京大学教養学部研究生
城西国際大学人文学部国際文化学科助教授

【専門分野】論理学、哲学、認知科学

【受賞歴等】ロバート・フリードマン哲学賞(昭和58年)、プレジデンシャル・スカラール賞(昭和59年)

【最近5年間の主な研究業績等】 [平成22～26年度] (10点まで)					
種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または該当ページ	発行年月
編著	単	『絵解きパラドックス』	ニュートンプレス	全144p	平26. 4
著書	単	『小林秀雄の哲学』	朝日新聞出版社(朝日新書)	全257p	平25. 9
翻訳・翻刻書	単	「ジョン・フォン・ノイマン:数学者」	『現代思想』第41巻第10号 青土社	pp.10-24	平25. 8
翻訳・翻刻書	共	『記号論理学』	丸善	全150p	平25. 1
翻訳・翻刻書	単	「アラン・チューリング:計算機械と知性」	『現代思想』第40巻第14号 青土社	pp.8-36	平24. 11
著書	単	『感性の限界』	講談社(現代新書)	全272p	平24. 4
論文	単	「決定論と非決定論の絶妙なバランス」	『別冊ニュートン:未来はすべて決まっているのか』 ニュートンプレス	pp.134-137	平23. 9
解説・解題等	単	「パラドックスに挑戦」	『別冊ニュートン:数学パズル論理パラドックス』 ニュートンプレス	pp.110-141	平23. 4
著書	単	『東大生の論理』	筑摩書房(ちくま新書)	全208p	平22. 12
著書	単	『知性の限界』	講談社(現代新書)	全288p	平22. 4

【平成21年度以前の主な研究業績等】 (5点まで)					
種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または該当ページ	発行年月
著書	単	『理性の限界』	講談社(現代新書)	全274p	平20. 6
著書	単	『哲学ディベート』	日本放送出版協会(NHKブックス)	全302p	平19. 11
著書	単	『科学哲学のすすめ』	丸善	全192p	平14. 1
著書	単	『ゲーデルの哲学』	講談社(現代新書)	全254p	平11. 8
著書	単	『MODERN LOGIC』	Eishinsha	全178p	平4. 4

【所属学会】米国記号論理学会(The Association for Symbolic Logic USA)、
米国科学哲学会(The Philosophy of Science Association USA)
日本科学哲学会、日本哲学会、日本認知科学会、情報文化研究会、JAPAN SKEPTICS

【最近5年間の学会等および社会における主な活動】

情報文化研究会会長(平8～現在)

【教育活動の自己評価】

情報を論理的に分析して本質を見極める姿勢と、自由な発想に基づくオリジナリティを重視している。学生各自の個性を尊重した教育活動を目標に設定している。

【研究活動の自己評価】

ゲーデルの不完全性定理の哲学的帰結を出発点として、理性・知性・感性の限界に関わる諸問題を追究している。従来の学問的枠組みに留まらず、新たな学問的方法論を模索している。

【職・氏名】教授 高橋 誠 TAKAHASHI Makoto

【学 位】文学修士

【本学就任】昭和58年

【略 歴】東京大学文学部英語英米文学科卒業

東京大学大学院人文科学研究科英語英文学専門課程(修士課程修了)

【専門分野】英国17世紀神秘主義、英国19世紀ロマン主義文学、美術

【最近5年間の主な研究業績等】 [平成22～26年度] (10点まで)					
種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または該当ページ	発行年月

【平成21年度以前の主な研究業績等】 (5点まで)					
種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または該当ページ	発行年月
論文	単	「ジョナサン・スウィフト『桶物語』と「薔薇十字」」	『國學院大學紀要』第48巻 國學院大學	pp.93-119	平22. 2
論文	単	「ジョナサン・スウィフト『聖霊の機械的招喚』論考」	『Walpurgis 2009』 國學院大學外国語研究室・外国語文化学科	pp.19-39	平21. 2
翻訳・翻刻書	単	E.P.ゴールドシュミット著『ルネサンスの印刷本=活字体、挿絵、装飾』(翻訳、解説論文)	国文社	全220p	平19. 6
論文	単	「T.L.ピーコックの諷刺小説『夢魔の館』と秘密結社」	『國學院大學紀要』第44巻 國學院大學	pp.131-158	平18. 3
翻訳・翻刻書	単	P.J.フレンチ『J.ディー=エリザベス朝の魔術師』	平凡社	全299p	平元. 11

【所属学会】日本英文学会、東大英文学会

【最近5年間の学会等および社会における主な活動】

【教育活動の自己評価】

外国語文化学科の新設に伴い、学科専門の講義、演習に携わってきた。例えば、英語演習、英語文献演習をはじめとして、全学科共通の主題講座等では、自分の専攻とする「美術と文学」、「映画と文学」等に関して、さまざまな媒体を用いて教育活動に従事してきた。

卒論指導では、映画を専攻とする学生を対象に、「ヒッチコックとゴシック小説」に関して論文指導をしてもいる。

【研究活動の自己評価】

17世紀の哲学・神秘思想を中心にしながら、特にディー、パラケルスス、フラッド等の神秘主義、それに対するスウィフトの風刺、批判に関して論述してきた。これからは、特にM.キャベンディッシュ、コンウェイ等に関する哲学思想に関して研究していく予定である。

【職・氏名】准教授 高屋 景一 TAKAYA Keiichi

【学 位】Ph.D.(平成16年9月 Simon Fraser University)

【本学就任】平成21年

【略 歴】東京学芸大学大学院修士課程教育学研究科学校教育専攻修了
サイモン・フレーザー大学大学院博士後期課程教育学研究科カリキュラム論専攻修了
サイモン・フレーザー大学大学院教育学研究科研究助手(RA)・非常勤講師

【専門分野】教育哲学、教育思想史、カリキュラム論

【最近5年間の主な研究業績等】 [平成22～26年度] (10点まで)

種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または 該当ページ	発行年月
翻訳・ 翻刻書	共	『想像力と教育:認知的道具が培う柔軟な精神』	北大路書房	全327p	平25. 11
論文	単	Renewing the sense of wonder in the minds of high school and college students (Wonder-Full Education: The Centrality of Wonder in Teaching and Learning Across the Curriculum, Ch.6)	Routledge	pp.97-109	平25. 7
著書	単	Jerome Bruner: Developing a Sense of the Possible (Springer Briefs on Key Thinkers in	Springer	全59p	平25. 6
論文	単	「教育学的想像力論についての思想的序説」	『國學院雑誌』 第114巻第6号 國學院大學	pp.1-17	平25. 6
学会発表 等	単	Rudolf Steiner's concepts of the unconscious and imagination: possibilities of integrating his educational ideas into public education	The 11th Hawaii International Conference on Education		平24. 1
論文	単	「社会性・道徳性を涵養するジグソー・クラスルームの論理:「ケアの倫理」との比較から」	『Warpurgis』 2011 國學院大學外国語研究室・外国語文化 学科	pp.73-86	平23. 3
論文	単	「イガートン・ライアソンの教育上の業績:カナダ公教育制度成立および北米におけるペスタロッチ主義の普及について」	『國學院雑誌』 第111巻第10号 國學院大學	pp.1-15	平22. 9
論文	単	「The Role of Imagination and Creativity in the Japanese Culture of Education (日本の教育文化における想像力・創造性と型の意義)」	『國學院雑誌』 第111巻第5号 國學院大學	pp.1-8	平22. 5

【平成21年度以前の主な研究業績等】 (5点まで)

種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または 該当ページ	発行年月
論文	単	Sources of the Educational Concept of Imagination: Responses to Locke by Leibniz, Hume, and Condillac	『Walpurgis』 2010 國學院大學外国語研究室・外国語文化 学科	pp.83-95	平22. 3
翻訳・ 翻刻書	共	『想像力を触発する教育:認知的道具を活かした授業づくり』	北大路書房	全225p	平22. 1
論文	単	「デューイの哲学における想像力概念の役割:芸術的、宗教的、教育的経験の核としての想像力」	『日本デューイ学会紀要』 第50号 日本デューイ学会	pp.21-31	平21. 10
論文	単	How to develop students' imaginations	Journal of Educational Thought Vol. 43, No.1 University of Calgary	pp.79-86	平21. 5
著書	共	Teaching and Learning Outside the Box: Inspiring Imagination Across the Curriculum	Teachers College Press	全160p	平19. 5

【所属学会】日本デューイ学会、教育哲学会、教育思想史学会、Philosophy of Education Society (U.S.A.)、Imaginative Education Research Group (Canada)、日本英語教育史学会

【最近5年間の学会等および社会における主な活動】

国際ロータリー財団第2780地区学友会幹事(平20. 9～現在)

【教育活動の自己評価】

担当科目は年によって変わることもあるが、主として1～2年次の英語科目を担当する上で、以下の諸点を念頭に授業を構想し、運営している。第一に、学生一人一人が自分自身の目標や勉強の仕方を確立するように方向づけること。例えば、受験勉強や高校までの学習ではあまりしてこなかった活動を授業に取り入れ、様々な学び方があることに気づかせるようにしている。第二に、学生一人一人が英語を使っている一必ずしも話を意味するものではない一時間を授業中に最大限確保すること。こうすることによって、どのようなところが分かっていないのか、足りないのかということに学生自身が気づくことを促し、同時にこちらが伝えたい内容を受け入れる態勢を学生の側に準備することになる。このような全体的な方針のもと、以下のような活動を授業に取り入れている。(1) 与えられたテーマについて英語で説明する活動。(2) 小グループで意見を交換したりお互いの英語をチェックしたりする活動。(3) 比較的長めの文章(3～10ページ程度)に限られた時間で目を通し、概要をつかむこと。(4) 読むに値する本(原書)を、半期または1年で読み通すこと。(5) 英語圏の子どもが英語を習得する上で最初に学ぶ、身体活動と結びついたメタファー的な表現に触れ、英語を身体や感情や感覚と結びつけたレベルで理解すること(要するに英語の感覚を身体で覚えること)。毎学期末の授業アンケートに対するコメント等を見る限り、このような方針は学生に伝わっているように思われる。ただし、慣れない学習方法に戸惑う者もいるであろうことは推測できる。概して少数派だとは思いますが、そのような学生にとっても満足のいく授業にするために、教材や授業方法を工夫する余地はまだある。

【研究活動の自己評価】

想像力を触発する授業(カリキュラムおよび教授法)を研究する一環として、この数年、二つのテーマに取り組んできた。一つはアメリカの心理学者ジェローム・ブルーナーの認知理論と教育理論の研究。もう一つはブルーナーに代表される20世紀半ば以降の認知理論・教育理論のうち、想像力に特に関連が深いと思われる理論や実践の研究。例えばキエラン・イーガンの想像力・教育理論、メタファーの認知的研究である。教育哲学および思想史の領域ではペスタロッチ主義の英語圏における伝播過程を調べている。特にこれまでの研究があまり正面から扱ってこなかった点(既存の文献には言及されていることはあるが、あまり詳細が明らかになっていない点)に注目している。一つはカナダの教育者イガートン・ライアソンの教育上の業績、もう一つはイギリスの「本国および植民地学校協会」の活動である。どちらも19世紀にイギリス、アメリカ、カナダ(そして日本)で教員養成制度成立にあたってペスタロッチ主義が大きな影響を与えた際に重要な貢献をしたが、あまり深く研究されてこなかった(ライアソンについてカナダでは知られており先行研究もあるが、日本ではほぼ知られていない)。ペスタロッチ主義研究の盛んな日本において、これまでの研究の盲点といえるテーマである。

【職・氏名】教授 野 呂 健 NORO Ken
 【学 位】文学修士
 【本学就任】平成3年
 【略 歴】上智大学外国語学部英語学科卒業
 ブラウン大学人類学科客員研究員
 防衛医科大学校医学部進学課程助教
 【専門分野】英語学、英文法、語用論

【最近5年間の主な研究業績等】 [平成22～26年度] (10点まで)					
種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または該当ページ	発行年月
論文	単	「連続スキミング」と「一括スキミング」	『Walpurgis 2014』(國學院大學外国語研究室・外国語文化学科紀要) 國學院大學外国語研究室・外国語文化学科	全19p	平26. 3
論文	単	「英語の主語の実態を探る」	『國學院大學紀要』第50巻 國學院大學	全24p	平24. 2
論文	単	「英語シンタクスにおける交替現象再考」	『Walpurgis 2010』(國學院大學外国語研究室・外国語文化学科紀要) 國學院大學外国語研究室・外国語文化学科	全16p	平23. 3

【平成21年度以前の主な研究業績等】 (5点まで)					
種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または該当ページ	発行年月
論文	単	We, the Multi-code Users	『Walpurgis 2009』(國學院大學外国語研究室・外国語文化学科紀要) 國學院大學外国語研究室・外国語文化学科	全125p中 pp.57-77	平21. 3
論文	単	「転移修飾 (Transferred Epithet) とその周辺」	『Walpurgis 2008』(國學院大學外国語研究室・外国語文化学科紀要) 國學院大學外国語研究室・外国語文化学科	全144p中 pp.1-21	平20. 3
論文	単	Indirect Speech Acts as Metonymy	『Walpurgis 2007』(國學院大學外国語研究室・外国語文化学科紀要) 國學院大學外国語研究室・外国語文化学科	pp.59-75	平19. 2
論文	単	「メタファー能力(Metaphoric Competence)について」	『Walpurgis 2006』(國學院大學外国語研究室・外国語文化学科紀要) 國學院大學外国語研究室・外国語文化学科	pp.19-40	平18. 3
論文	単	「欧州における英語の拡大」	『國學院大學紀要』第42巻 國學院大學	全377p中 pp.97-119	平16. 2

【所属学会】日本英語学会、日本語用論学会

【最近5年間の学会等および社会における主な活動】

【教育活動の自己評価】

学部の授業では、英文法、外国語学(英語学)、外国語総合演習等を担当し、英語を形式・構造・意味・用法のそれぞれの視点からとらえる訓練を行った。高校までの英語学習が必ずしも十分な状況にないことにかんがみて、1年次の英文法では、高校から大学へのスムーズな移行を念頭に置き、英語の全体を体系的に学べるよう心掛けた。授業の約半分を説明、残り半分を問題演習にあてて学生自らが解答を導き出せるようにした。外国語学は講義科目であるが、英文法の知識の上に必要な先端的情報も加えて、より深い理解に到達し、学生自身が納得し、人に説明できるよう懇切丁寧に解説した。これまで漠然と暗記していた項目に、理由・根拠・理屈があることを知って欲しいと言う気持ちが私には強い。外国語学では、自作の教材を作成して、より効率的に学習が進むように工夫した。この教材は、毎年改善を重ねており、かなり完成度が高く学生にも好評である。外国語総合演習では、学生がプレゼンテーション形式で自分の分担部分を説明する形式を取ったが、学生の積極的な授業参加を促すために、コメンテーター役をあらかじめ決めて、学生同士が主体的に学びを進める工夫を行った。英文法については試験によって学習成果を客観的に把握したが、より効果的な1年間の学習の流れを作るために、試験は年4回実施した。外国語学については、持ち帰り試験を行い、設問に対して時間をかけてじっくり調べ、きちんとまとめあげる習慣が身に着くようにした。学生の答案には力作が多かったのも、成果があがったと考えている。外国語総合演習では、毎週毎週の授業が評価に直結する、教員と学生双方に緊張感が強いられる授業を行った。大学院においては、対照言語研究を担当し、英語と日本語の構造の違いを各文法項目・問題の多い語法について学生とともに検討した。また、英訳の源氏物語の講読を通して、日本語と英語の翻訳上の問題、文学・文化上の特質についても積極的に討論することによって、理解を深めた。大学院の場合には、学生の専攻のバランスが毎年異なるので、言語の対照と源氏物語にかける時間配分は、その都度学生の了解を得て決定した。

【研究活動の自己評価】

英語学(英文法・語法)、語用論を中心に研究しているが、ここ数年は、認知言語学をベースに各種の言語現象を解明しようと努力してきた。言語は形式と構造を持つが、それをコントロールしているのはやはり「脳」と「脳が生み出そうとしている意味」であると考えざるを得ない。例外的な語法のひとつだが、認知作用が文法規則に優先している結果であると思われる。形式だけでは限界があるところを、形式を破る自由と権限行使することによって、無限性と連続性が基本である世界に対処可能なものである。人間の脳はコンピュータよりもはるかに優れている。また、言語使用・獲得には、ミラー・ニューロンの機能なども大きくかかわっているようである。この様な研究を進めているため、近年は「主語とはなにか」とか「目的語とはそもそも何なのか」といった、より根源的な部分に焦点を当てて、地味な研究活動を行っている。

【職・氏名】教授 針谷 壮一 HARIGAYA Soichi

【学 位】修士(言語学)

【本学就任】平成14年

【略 歴】東京外国語大学外国語学部中国語学科卒業

東京外国語大学大学院地域文化研究科地域文化専攻博士後期課程単位取得満期退学

【専門分野】中国語学(現代中国語の文字・語彙・文法)

【最近5年間の主な研究業績等】 [平成22～26年度] (10点まで)					
種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または該当ページ	発行年月
論文	単	「簡体字と繁体字の変換に関するいくつかの問題」	『Walpurgis 2013』(國學院大學外国語研究室・外国語文化学科紀要) 國學院大學外国語研究室・外国語文化学科	全13p	平25. 3
論文	単	「《漢語拼音方案》制定過程についての一考察」	『Walpurgis 2012』(國學院大學外国語研究室・外国語文化学科紀要) 國學院大學外国語研究室・外国語文化学科	全11p	平24. 3
論文	単	「「多くの」なのか「いくつかの」なのか——ある中国語の構文をめぐって——」	『國學院雑誌』第111巻第8号 國學院大學	全10p	平22. 8

【平成21年度以前の主な研究業績等】 (5点まで)					
種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または該当ページ	発行年月
論文	単	「“很+有+NP”に関する一考察」	『Walpurgis 2010』(國學院大學外国語研究室・外国語文化学科紀要) 國學院大學外国語研究室・外国語文化学科	pp.1-16	平22. 3
論文	単	「《第一批異体字整理表》の現在」	『Walpurgis 2008』(國學院大學外国語研究室・外国語文化学科紀要) 國學院大學外国語研究室・外国語文化学科	pp.23-34	平20. 3
論文	単	「老舎の小説に見られる前置詞“对”の用法」	『國學院雑誌』第105巻第10号 國學院大學	pp.1-11	平16. 10
論文	単	「前置詞“对”の意味とその記述について」	『Walpurgis 2004』(國學院大學外国語研究室・外国語文化学科紀要) 國學院大學外国語研究室・外国語文化学科	pp.49-62	平16. 3
論文	単	「迷走する日本と拡張する中国—パーソナルコンピュータの文字コードの場合—」	『國學院雑誌』第103巻第11号 國學院大學	pp.31-43	平14. 11

【所属学会】日本中国語学会、中国語教育学会

【最近5年間の学会等および社会における主な活動】

【教育活動の自己評価】

教養総合課程(1～2年次)における教育活動では、外国語教育の特殊性をふまえ、通常の文法・読解のほか、発音テストによる成績評価を導入するなど、学生の言語運用能力を向上させるような工夫を行っている。また、専門教育課程(3～4年次)における教育活動では、本学の学生の外国語力にあわせ、いたずらに専門的な知識を教授するのではなく、ステップを踏んで実用と理論を有機的に総合できるよう、プリントや映像などの教材を随時作成し活用している。

【研究活動の自己評価】

ここ数年は、中国における言語政策の変遷についても研究を進めており、台湾・香港を含めた文字使用の実態調査ならびにコンピュータにおける中国語文字処理の実態調査に取り組んでいる。その成果の一部はすでに論文として発表したところである。また、中国語の文法・語彙の分野については、従来の研究を踏まえつつ、学界の最新の成果を吸収しながら、新しい問題点の発掘を含め、研究を進めていきたいと考えている。

【職・氏名】准教授 福井 崇史 FUKUI Takashi

【学 位】博士(文学)(平成20年1月 筑波大学 乙第2333号)

【本学就任】平成21年

【略 歴】成城大学文芸学部英文学科 卒業

筑波大学大学院人文社会科学研究科文芸・言語専攻総合文学領域 単位取得満期退学
中央学院大学商学部非常勤講師

【専門分野】19世紀末アメリカ文学研究、批評理論

【最近5年間の主な研究業績等】 [平成22～26年度] (10点まで)					
種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または該当ページ	発行年月
学会発表等	単	「トウエインと裁判/法廷」(ワークショップ: Joan of Arcを新しく読む)	日本マーク・トウエイン協会 第17回大会 ワークショップ (於・慶應義塾大学)		平25. 10
論文	単	「衣服は人を作らない——八九〇年のアルジャー作品と『美しき犯罪者』言説——」	『國學院雑誌』第113巻第4号 國學院大學	pp.1-17	平24. 4
論文	単	「『人種』表象批評からトランス・ジェネレイショナルな視点へ——シヨパンとチェスナットの短編作品を通じて」	『國學院雑誌』第112巻第6号 國學院大學	pp.1-11	平23. 6
論文	単	「『迫真』のドキュメンタリーは何を伝えたか——クレイン、ロンドン、シンクレアの『共犯』」	『アメリカ文学』第71号 日本アメリカ文学会東京支部	pp.26-32	平22. 6

【平成21年度以前の主な研究業績等】 (5点まで)					
種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または該当ページ	発行年月
論文	単	「『“White”の動揺』は何をもたらしたか:『パクトラス・プライム』における『資産』の与奪」	『Walpurgis 2010』 國學院大學外国語研究室・外国語文化学科	pp.17-34	平22. 3
論文	単	“Smooth Criminals in the Late Nineteenth-Century U.S.: An Alger Hero’s Possible Fall from Grace.”	The Journal of the American Literature Society of Japan [査読付全国誌] No.8 日本アメリカ文学会	pp.19-37	平20
論文	単	「抵抗する『混血』性:Iola Leroyと不可視の『人種』性の使い方」	『アメリカ文学研究』第44号[査読付全国誌] 日本アメリカ文学会	pp.19-33	平20. 3
論文	単	「『指紋』から『血』へ:『まぬけのウィルソン』の『視線』の行き着く先」	『マーク・トウエイン研究と批評』第6号[査読付全国誌] 日本マーク・トウエイン協会	pp.66-74	平19. 4
論文	単	「『色』と『血』の政治学:遺伝子なき『遺言』と『至上の義務』」	『文学研究論集』第25号 筑波大学比較・理論文学会	pp.61-72	平19. 3

【所属学会】筑波大学比較理論文学会、日本マーク・トウエイン協会、日本アメリカ文学会

【最近5年間の学会等および社会における主な活動】

【教育活動の自己評価】

ここ数年における授業運営方法上の工夫としては、(学年を問わず)英語リーディング系の授業において、「マークシート方式」の試験に慣れ過ぎてしまった学生たちの目を覚まし、さらに日本語への意識を高めさせるため、期末等に実施する試験は全て(英訳にしる和訳にしる)訳文を書かせるものにした、ということが挙げられる。正答選択方式の試験に比して大幅に採点の手間がかかるが、「自分はそれなりに出来る」と考えていた学生たちが、自分たちの英語(だけでなく日本語)の運用能力について見つめ直す、良い機会となっているようである。

また、外国語文化学科2年生対象の「英語演習2」の授業では、学生たちにグループを組ませ、前期は毎回英文法に関する模擬授業を、後期は毎回「英語にまつわるものであれば内容は自由」という模擬授業の実施を例年課してきたが、2年ほど前からそこに、「模擬授業後に無記名で10点満点のピア評価を実施」という要素を付加している。これにより、模擬授業を行う学生たちには緊張感が生まれ、模擬授業を受ける学生たちには責任感が生まれるという、相乗効果が得られている。さらに、それまでは模擬授業の内容だけで評価しており無試験であったが、学生たちの実施した模擬授業から演習問題を抽出して構成した試験を期末に課すという方式に変更し、さらに教育効果が向上したといえよう。

【研究活動の自己評価】

数年前まで学部紀要の編集委員を継続的に務めていた都合上、当該紀要への研究論文の投稿・掲載が多くなり、外部研究誌への投稿に挑戦する機会がなかった。当該委員を離れた後、意図的に充電(/放電?/漏電?)期間を設けるつもりで新規研究論文に取りかからなかったが、他の不慣れた学内業務に忙殺される年度が続き、因らずもその「期間」が長期化してしまったのは反省点である。昨年(2013年)、所属学会の一つから大会のワークショップにパネリストとしての参加を促され、そこで新たな研究の切り口を見出すことが出来たのは、思いがけない幸運であった。

【職・氏名】教授 福島直之 FUKUSHIMA Naoyuki
 【学 位】文学修士
 【本学就任】昭和63年
 【略 歴】東京大学教養学部教養学科(イギリスの文化と社会分科)卒業
 東京都立大学大学院人文科学研究科英文学専攻修士課程修了
 横浜国立大学教育学部助教授
 【専門分野】英語学、音韻論、言語学

【最近5年間の主な研究業績等】 [平成22～26年度] (10点まで)					
種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または該当ページ	発行年月
翻訳・翻刻書	共	「B・H・チェンバレンからE・B・タイラーへの書簡(新出のB・H・チェンバレン、E・B・タイラー宛書状の紹介と検討)」	『國學院大學研究開発推進機構紀要』第3号 國學院大學研究開発推進機構	pp.154-133	平23. 3
論文	単	「最適性理論とダーウィニズム」	『國學院雑誌』第111巻第11号 國學院大學	pp.306-312	平22. 11

【平成21年度以前の主な研究業績等】 (5点まで)					
種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または該当ページ	発行年月
論文	単	「イントネーションとピッチ曲線」	『Walpurgis 2003』(國學院大學外国語研究室・外国語文化学科紀要) 國學院大學外国語研究室・外国語文化学科	pp.37-53	平15. 3
論文	単	「Perl言語で音韻理論を検証する」	『音韻研究』 音韻論研究会	pp.195-200	平8. 11
論文	単	Notes on “Extrapolation to Zero” in Estimating the Number of Syllable Types	『Walpurgis '95』(國學院大學外国語研究室紀要) 國學院大學外国語研究室	pp.1-11	平7. 2
学会発表等	単	「英語音節種類数を推測する」	英語音韻論研究会第14回大会		平4. 5
論文	単	Annotations of Kunihiko's Sense Relations in Polysemy	Studies in English Philology and Linguistics in Honour of Dr. Tamotsu Matsunami 秀文インターナショナル	pp.436-447	昭59. 3

【所属学会】日本英文学会、日本英語学会、日本音韻論学会、日本音声学会、Linguistic Society of America

【最近5年間の学会等および社会における主な活動】

【教育活動の自己評価】

FYEは、教材を、会話中心のものから文化中心のものへ変更した。イギリス事情をBBCのニュースや市販の教科書から知るもので、学生は関心示している。少々音声的にも、内容的にも従来の会話教材と比較し難度が高いが、学生の知的好奇心を満足させるようなものがよいと考えた結果である。発音については、1年生用に英語教室で編集したFYEハンドブックの中でも、私自身が執筆した発音編を十全に利用し、受講生の関心を高めたと考える。英語演習4は、日本語についての言語学的な知識を英語で学ぶという考えの基に授業を行った。教材理解のために補助教材をK-SMAPYの教材欄に格納したが、学生の利用率が予想以上に低い。利用は学生の自主性に任せず、教員の側から積極的に利用を促す必要がある。英米語研究は、ヒアリングと発音の指導と、英語音声に関する理論を組みあわせて行っている。50名を超えるクラスではかなりの困難を伴うが、個別の実習にも対応しながら行っている。教材は英語で書かれたものを使ったためにその解説をハンドアウトのたちで作成した。言語論は、言語に関する話題を取り上げ、理論的な研究を紹介し、受講生に問いかけるという手法で行っている。言語に関する受講生の関心度は高いが、自分で考えることができるように指導することを心がけた。毎回の授業では、内容理解の補助のためにハンドアウト配布した。

【研究活動の自己評価】

『「最適性理論」とダーウィニズム』(2010)は、「最適性理論」という用語のもつ二重性を指摘したものである。この用語は、一方で、ダーウィニ的な思想に基づいた最適性に関する一般的な論考を指すが、他方で、同様の思想に基づいた個別の分野の理論がある。このことは、特に日本の音韻論研究者の間では認識されていない。その意味でこの研究は重要な意味をもっている。

「B・H・チェンバレンからE・B・タイラーへの書簡」(2011)は、チェンバレンがタイラーに宛てて日本文化について書いたものを日本語に翻訳したものである。19世紀の日本をイギリス人がどのように見ていたかを間近で感じる事ができたが、比較文化研究の手法として翻訳が有用であるとことを少しは示す事ができた。

【職・氏名】准教授 藤野 敬介 FUJINO Keisuke
 【学 位】博士(文学)(平成15年3月 東洋大学 文博甲第14号)
 【本学就任】平成19年
 【略 歴】カナダ・ヴィクトリア大学人文学部リベラル・スタディーズ学科(Bachelor of Arts in Liberal Studies)卒業
 東洋大学大学院文学研究科英文学専攻博士後期課程修了
 防衛教官 防衛大学校総合教育学群外国語教育室助教授
 【専門分野】英文学、カナダ文学、教育催眠、英国心霊主義研究

【最近5年間の主な研究業績等】 [平成22～26年度] (10点まで)					
種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または該当ページ	発行年月
論文	単	「サマセット・モームと池波正太郎:職人作家にことっての戯曲、小説、そして人間」	『Walpurgis 2014』 國學院大學外国語研究室・外国語文化学科	全28p	平26. 3

【平成21年度以前の主な研究業績等】 (5点まで)					
種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または該当ページ	発行年月
論文	単	「コナン・ドイルの『毒ガス帯』一瞬かかれた心霊主義者の種子」	『Walpurgis 2009: 國學院大學外国語研究室・外国語文化学科紀要』 國學院大學外国語研究室・外国語文化学科	全19p	平21. 3
論文	単	「女神の復活と女子ホッケーの再興-Dry Lips Oughta Move To Kapuskasingとアイスホッケー史におけるジェンダー-」	『カナダ文学研究』 第13号 日本カナダ文学会	pp.1-29	平17. 12
論文	単	「英語の基礎体力作り-新しい英語教育の可能性を探って-」	『シルフェ』 第44号 シルフェ英語英米文学会	pp.70-102	平17. 3
論文	単	Matthew Arnold on Science: Changing Attitudes in His Educational, Religious, and Social Criticism	三恵社	pp.1-240	平16. 2
論文	単	Culture, Science, and Society: A Study of Matthew Arnold's Culture and Anarchy	『防衛大学校紀要(人文科学篇)』 第86輯	pp.77-100	平15. 3

【所属学会】日本カナダ文学会、日本モーム協会、日本教育催眠学会、The National Guild of Hypnotists、日本医療催眠学会

【最近5年間の学会等および社会における主な活動】

財団法人・日本英語検定協会 文部科学省認定英語技能検定 面接委員(平14. 11～現在)、
 特定非営利活動法人・教育改革2020 理事(平20. 7～現在)

【教育活動の自己評価】

学部の授業においては、英語の発声・発音をベースとした音読の授業を中心に、学生の英語学習のモチベーションの維持を目的とした「英語を学ぶことの楽しさ」を伝える授業を提供することを心掛けている。外国語文化学科の専門教育においては、単なる英語(語学)の学習だけではなく、同時に外国文化・教養を養うことを意識して授業を行っている。教養総合科目のテーマ別講義においては、催眠という技術を通じて言葉と心理とのつながりを探究する授業を行い、単なるコミュニケーション論としてではなく、大学生の間でも問題が顕在化しつつあるいわゆる「心の病」について考える場を提供している。

【研究活動の自己評価】

カナダ文学および英国心霊主義研究の分野においては、L.M.モンゴメリのいわゆる「エミリー・シリーズ」における英国心霊主義の影響について研究を続けている。英文学の分野においては、W.S.モームの研究を本格化させ、モームと池波正太郎という二人の「職業作家」の共通点について検証を行った。教育催眠の分野においては、自己暗示による英語学習のモチベーションの向上やいわゆる「シャイな日本人」の克服の可能性を引き続き研究している。

【職・氏名】教授 村山 雅人 MURAYAMA Masato
 【学 位】文学博士(Ph.D.)(昭和54年12月 ウィーン大学大学院)
 【本学就任】昭和61年
 【略 歴】上智大学文学部ドイツ文学科卒業
 ウィーン大学大学院ドイツ文学専攻博士課程修了
 山梨医科大学医学部医学科助教授
 【専門分野】オーストリア文学、ウィーン文化史、ウィーンのユダヤ人問題

【最近5年間の主な研究業績等】 [平成22～26年度] (10点まで)					
種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または該当ページ	発行年月
論文	単	「テオドール・ヘルツルのシオニズム小説『古い新しい国』」	『國學院雑誌』第113巻第9号 國學院大學	全48p中 pp.1-16	平24. 9
論文	単	「マルティン・ブーバーと文化的シオニズム」	『Walpurgis2011』 國學院大學外国語研究室・外国語文化学科	pp.57-71	平23. 3

【平成21年度以前の主な研究業績等】 (5点まで)					
種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または該当ページ	発行年月
論文	単	「政治的シオニズムの発生と展開——モーゼス・ヘス、レオン・ピンスカー、ナタン・ビルンバウム、テオドール・ヘルツル」	『Walpurgis 2010』 國學院大學外国語研究室・外国語文化学科	pp.1-19	平22. 3
論文	単	「テオドール・ヘルツル『ユダヤ人国家』成立の過程」	『Walpurgis 2008』 國學院大學外国語研究室・外国語文化学科	pp.39-60	平20. 3
論文	単	「長編『自由への道』—アルトゥール・シュニツラーとユダヤ人問題—」	『國學院大學紀要』第46巻 國學院大學	pp.235-261	平20. 2
論文	単	「テオドール・ヘルツルの戯曲『新しいゲト』—同化思想の破綻の記録」	『Walpurgis 2007』 國學院大學外国語研究室・外国語文化学科	pp.1-19	平19. 3
論文	単	「テオドール・ヘルツルとドレフュス裁判—シオニスト転向への一つの転換点」	『Walpurgis 2006』 國學院大學外国語研究室・外国語文化学科	pp.1-19	平18. 3

【所属学会】ウィーン・グリルパルツァー協会、日本独文学会、日本オーストリア文学会

【最近5年間の学会等および社会における主な活動】

日本オーストリア文学会 幹事(平23. 5～平26. 5)

【教育活動の自己評価】

教養総合のドイツ語科目を担当し、1年生の授業では正しい発音と平易なドイツ語文章を理解するために必要な文法の基礎を、ドイツ語と日本語の構造の違いに留意しつつわかりやすく説明し、受講生が文法知識とあわせて意思疎通のツールとして作文能力を習得できるようにした。半期授業の「ドイツ語入門」の授業では、受講生の興味を喚起するために、日常生活で頻繁に使われる動詞を選び、その動詞を用いて、旅行の際にも即応できるドイツ語表現を載せたテキストを自ら作成した。また2年生の授業や専門科目の「ドイツ語演習4」では、読物作品を教材に選び、ドイツ語の語彙を増やし、読解力と運用能力を高めることに授業の目標を置いた。これらのドイツ語授業を通じて、ドイツ語圏の文化だけでなくヨーロッパ文化全般に対する理解を深め、さらに世界に対する学生たちの視野を広げることに意を注いだ。講義科目の「ヨーロッパ現代事情」では、ヨーロッパ統合理念の歴史を現代までたどり、様々な統合理念が生まれた歴史的背景、および過去の統合理念とEU理念との関連性や相違点を解説し、受講生がヨーロッパの地理的状況をふまえて、その歴史や文化に目を向けるようにした。「ヨーロッパ地域文化論」では、「世紀末ウィーン」という概念のもとに理解される19世紀末ウィーンの文化現象が出現した経緯と、ユダヤ人がこの文化創造に多大の貢献を果たすことになった歴史・社会的因果関係を明らかにし、ウィーンという都市だけでなく芸術に対する興味を喚起することにつとめた。

【研究活動の自己評価】

反ユダヤ主義が高まった19世紀末に『ユダヤ人国家』を著し、ユダヤ人国家建設運動を世界的規模で展開した政治的シオニズムの創始者テオドール・ヘルツル研究を通して、シオニズム運動発生要因を歴史的、社会的、宗教的背景から検証した。このテーマとの関連で、ユダヤ人の在り方について政治的シオニズムとは根本的に理解を異にする文化的シオニズムにも研究対象を広げ、同時に、いかなる種類であれシオニズムを否定して同化主義を主張するユダヤ人作家の研究も進めた。ユダヤ人問題に対するユダヤ人の姿勢はこのように多様かつ複雑であり、19世紀末ウィーンのユダヤ人作家が彼らの文学作品を通じてユダヤ人問題に関していかなる態度表明をしているか、その検証を行った。

【職・氏名】教授 矢島 昂 YAJIMA Takashi
 【学 位】文学修士
 【本学就任】昭和52年
 【略 歴】東京都立大学人文学部独文科卒業
 東京都立大学大学院人文科学研究科独文学専攻修士課程修了
 【専門分野】独文学

【最近5年間の主な研究業績等】 [平成22～26年度] (10点まで)					
種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または 該当ページ	発行年月

【平成21年度以前の主な研究業績等】 (5点まで)					
種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または 該当ページ	発行年月
論文	単	「オスカル・レールケとベルリン ―第一詩集『遍歴』を中心として―」	『國學院雑誌』第110巻第9号 國學院大學	全48p中 pp.1-13	平21. 9
論文	共	「より大きな希望―イルゼ・アイヒンガーの天国と地獄」	『ダンテと現代』 沖積舎	全548p中 pp.394-463	平18. 6
論文	単	「遍歴(Ⅰ)―オスカル・レールケノート2」	『Walpurgis '94』(國學院大學外国語研究室紀要) 國學院大學外国語研究室紀要	pp.69-81	平6. 2
論文	単	「不可視の領域―オスカル・レールケの二つの作曲家評伝」	『國學院雑誌』第95巻第1号 國學院大學	pp.66-76	平6. 1
論文	単	「ある三角測量の試み―レールケを中心として」	『國學院大學紀要』第31巻 國學院大學	pp.105-127	平5. 3

【所属学会】日本独文学会、ドイツ・シラー協会

【最近5年間の学会等および社会における主な活動】

【教育活動の自己評価】

外国語、および外国語文化学科の専門科目である「文化研究演習」のいずれにおいても、ヨーロッパ文化全体の系統的理解を目標に、資料や映像の提示に関して工夫を続けているが、こちら側の授業形成の前提となっている知識の量と、受講者側が実際に持っている知識の総量との乖離が年々大きくなっており、本来ならば大学入学までに身につけている筈の知識部分までの解説に時間をとられ、系統的理解どころか、個別的な理解を得るのに苦闘している状況である。

【研究活動の自己評価】

近年、これまで長年の研究テーマであった近代自然抒情詩を棚上げにして、中世ドイツの自由帝国都市に関する調査研究に注力し、年間一ヶ月の現地調査を含めて鋭意努力を重ねている。資料の蒐集が比較的順調に進む一方、授業の運営、研究室の雑務等に時間をとられ、整理のために割く余裕がなくなっているのが残念なところである。しかしながら、その成果をここの二年のうちにある程度までまとめることを意図している。

【職・氏名】教授 山西 治 男 YAMANISHI Haruo
 【学 位】文学修士
 【本学就任】平成4年
 【略 歴】明治大学文学部文学科英米文学専攻卒業
 明治大学大学院文学研究科博士前期課程英文学専攻修了
 【専門分野】英米文学、英語

【最近5年間の主な研究業績等】 [平成22～26年度] (10点まで)					
種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または該当ページ	発行年月
辞書・事典等	共	『現代用語の基礎知識 2014』	自由国民社	全1578p中 pp.1173-1181	平26. 1
辞書・事典等	共	『現代用語の基礎知識 2013』	自由国民社	全1596p中 pp.1144-1152	平25. 1
編著	共	『オープン・リーディング——英米文学・文化の広場』	DTP出版	全148p	平24. 3
翻訳・翻刻書	共	『渡り鳥からのメッセージ(Message from WATARIDORI)』	自由国民社	全32p	平24. 3
著書	単	『英語は要領!』	アスコム	全173p	平24. 2
辞書・事典等	共	『現代用語の基礎知識 2012』	自由国民社	全1587p中 pp.1162-1170	平24. 1
著書	単	『大人のやり直し英語』	アスコム	全173p	平23. 6
編著	共	『やさしい翻訳入門』	DTP出版	全69p	平23. 4
論文	単	「英語の時制を考える——英語と日本語との狭間で」	『英語英文学論集 第39号』 都留文科大学英文学会	pp.122-140	平23. 3
辞書・事典等	共	『現代用語の基礎知識 2011』	自由国民社	全1684p中 pp.1245-1250	平23. 1

【平成21年度以前の主な研究業績等】 (5点まで)					
種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または該当ページ	発行年月
翻訳・翻刻書	共	「The Giving Tree論」	『英語英文学論集』 第38号 都留文科大学英文学会	pp.93-114	平22. 3
辞書・事典等	共	『現代用語の基礎知識 2010』	自由国民社	全1731p中 pp.1190-1197	平22. 1
論文	単	「二人のLA詩人——ビュークとダナ」	『英語英文学論集』 第35号 都留文科大学英文学会	全127p中 pp.41-57	平19. 3
著書	共	『英語ってそういうことだったのか!!』	アスコム	全157p	平18. 12
翻訳・翻刻書	共	『世界の作家32人によるワールドカップ教室』	白水社	全494p	平18. 5

【所属学会】日本英文学会

【最近5年間の学会等および社会における主な活動】

【教育活動の自己評価】

1) 英語に対して苦手意識を持っている学生から、苦手意識を軽減し、「使える英語」の力を養成させることを目標にしている。この点については、学生の英語の苦手意識の軽減はかなりはかれたと思う。2) 英語および英米文化の基礎知識を教授し、英米文化の視点、見方を学修させることについては、「英米文学・文化の広場」という副題を持つテキスト『オープン・リーディング』を編集・作成した。授業・講義においては、そうしたテキストなどを使用し、DVDなどの視覚教材を利用することで、改善をはかった。

【研究活動の自己評価】

1) いかにしたら日本人が英語を習得できるかという点を研究課題とし、英語の学習教材や英語に関する文庫本(『英語は要領!』)を出版した。また、従来の作成したテキストを改訂し、学生の声に真摯に耳を傾けた上で、学生の英語学習、自学学習に資する新たな学習教材を企画、作成している。
 2) 英和翻訳については『やさしい翻訳入門』を出版することで、一定の成果を見た。今後は翻訳の実践的な仕事を続けるとともに、翻訳理論・翻訳技術論をまとめていく予定である。
 3) アメリカの詩人・作家のジェラルド・ロックリンとチャールズ・ブコウスキーを軸として、現代アメリカ詩および小説の研究を引き続き行っていく。

【職・氏名】教授 **安部住雄** ABE Sumio
 【学 位】文学修士
 【本学就任】昭和49年
 【略 歴】東京大学文学部フランス語フランス文学専修課程卒業
 東京大学大学院人文科学研究科仏語仏文学専攻修士課程修了
 東京大学大学院人文科学研究科仏語仏文学専攻博士課程満期退学
 【専門分野】フランス革命期の文化、サン＝ジュスト研究、近代建築研究

【最近5年間の主な研究業績等】 [平成22～26年度] (10点まで)					
種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または該当ページ	発行年月
評論・書評等	単	「遠藤新、哲学する建築」	『國學院雑誌』第115巻第7号 國學院大學	全2p	平26. 7

【平成21年度以前の主な研究業績等】 (5点まで)					
種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または該当ページ	発行年月
論文	単	「騎士オルガンはどこへ向かうのか、詩人サン＝ジュスト」	『Walpurgis 2009』(國學院大學外国語研究室・外国語文化学科紀要) 國學院大學外国語研究室・外国語文化学科	全10p	平21. 3
論文	単	「「人は罪を犯さずして統治することはできない」、サン＝ジュスト『国王裁判演説』をめぐって」	『國學院雑誌』第109巻第12号 國學院大學	全14p	平20. 12
学会発表等	単	「長編詩『オルガン』をめぐって、若き日のサン＝ジュスト」(公開講演)	サン＝ジュスト研究会、ユニ・カレッジ共催		平20. 11
教科書・参考書	共	『フランス文法ABC(三訂版)』	白水社	全80p	平12. 3
論文	単	「精神の革命、革命の精神ーブレランクールのサン＝ジュスト」	『Walpurgis '95』(國學院大學外国語研究室紀要) 國學院大學外国語研究室紀要	p39～p54	平7. 3

【所属学会】日本フランス語フランス文学会、サン＝ジュスト研究会

【最近5年間の学会等および社会における主な活動】

【教育活動の自己評価】

担当する科目は教養総合科目のフランス語、テーマ別講義および外国語文化学科の専門科目フランス語演習、講義科目等多岐にわたるが、対象となる学生の人数の多寡、理解力の程度に応じて、各科目ごと最適と思われる授業方法、教材等を用いている。各学期の授業開始時には各科目でアンケートを実施して、当該科目に関する学生の知識、関心の把握に努め、学生の理解のために各科目で、講義の手がかりとなる資料(とくに図版資料)やフランス語の補足問題等を数多く作成し、配布、使用している。教育方法については、語学を始め同系統の分野を担当する教員とたえず意見交換を行い、とるべき方法があれば採用している。ただ、学生の基本的知識の欠如は近年著しいものがあり、これをどう補いながら授業の水準を保つかが最大の課題である。

【研究活動の自己評価】

主たる研究テーマであるサン＝ジュスト研究については、彼の思想、行動をたどり検証する作業がジャコバン独裁のいわゆる「恐怖政治」の段階にある。さらに、十年以上にわたりサン＝ジュスト研究会で中心となって行っている長編叙事詩『オルガン』の翻訳解説作業については、すでに全編の翻訳を終えて現在最終的な調整段階にあり、近々の刊行を目指している。また、フランス革命期の建築家の研究を進めるかたわら、近年は日本の近代建築の研究も視野にいれ、書籍等の資料収集にとどまらず日本各地の近代建築の実地調査を機会あるごとに行っている。

文学部

【史学科】

青木	豊	教授	67
上山	和雄	教授	68
大久保	桂子	教授	69
落合	知子	准教授	70
金子	修一	教授	71
佐藤	長門	教授	72
柴田	紳一	准教授	73
谷口	康浩	教授	74
千々和	到	教授	75
根岸	茂夫	教授	76
林	和生	教授	77
樋口	秀実	教授	78
藤澤	紫	教授	79
古山	正人	教授	80
矢部	健太郎	准教授	81
山崎	雅稔	助教	82
吉岡	孝	准教授	83
吉田	恵二	教授	84
吉田	敏弘	教授	85

【職・氏名】教授 青木 豊 AOKI Yutaka
 【学 位】博士(歴史学)(平成12年2月 國學院大學 文乙第154号)
 【本学就任】平成15年
 【略 歴】國學院大學文学部史学科卒業
 國學院大學考古学資料館学芸員
 【専門分野】博物館学、考古学、和鏡史
 【受賞歴等】第6回樋口博士記念賞(昭和59年)

【最近5年間の主な研究業績等】 [平成22～26年度] (10点まで)

種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または 該当ページ	発行年月
編著	共	『神社博物館事典』	雄山閣	全306p	平25. 12
著書	単	『集客力を高める博物館展示論』	雄山閣	全199p	平25. 9
編著	共	『人文系 博物館資料保存論』	雄山閣	全220p	平25. 5
編著	共	『人文系 博物館展示論』	雄山閣	全245p中 pp.1-12	平25. 3
著書	共	『博物館学IV－博物館実習』	学文社		平25. 3
著書	共	『博物館危機の時代』	雄山閣	全233p中 pp.160-184	平24. 10
編著	単	『人文系 博物館資料論』	雄山閣	全238p中 pp.1-13	平24. 8
編著	共	『博物館学人物誌』	雄山閣	全314p	平24. 5
著書	共	『博物館学 I』	学文社	全249p中 pp.17-39	平24. 4
編著	単	『明治期博物館学基本文献集成』	雄山閣	全381p	平24. 3

【平成21年度以前の主な研究業績等】 (5点まで)

種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または 該当ページ	発行年月
著書	単	『博物館展示の研究』	雄山閣	全442p	平15. 9
著書	単	『博物館映像展示論』	雄山閣出版	全252p	平9. 9
論文	単	「所謂住之江鏡・住吉鏡・龍宮鏡・長生殿鏡に 関する一考察」	『國學院大學考古学資料館紀要』 第12輯 國學院大學考古学資料館	pp.119-141	平8. 3
著書	単	『和鏡の文化史』	刀水書房	全305p	平4. 7
著書	単	『博物館技術学』	雄山閣出版	全231p	昭60. 3

【所属学会】全日本博物館学会、日本考古学協会、祭祀考古学会、神奈川県考古学会、生きもの文化誌学会

【最近5年間の学会等および社会における主な活動】

長野県丸子町立博物館運営委員(平12. 4～現在)、板橋区立郷土博物館運営委員(平12. 4～現在)、
 文化庁登録美術品調査研究協力者会議委員(平11～現在)、渋谷区文化財審議委員(平15～現在)、
 板橋区立博物館運営委員(平8～現在)、(財)家具の博物館理事(平16～現在)、中国西安「西安于右任故居記念館」顧問(平16～現在)、
 長野県木島平村農村文明塾有識者会議顧問(平23. 4～現在)、上海大学特別教授(平25. 11～現在)、
 長野県木島平村ふるさと館顧問(平26. 4～現在)

【教育活動の自己評価】

学部の授業に於いては、興味をもって取り組んでもらえるように実物資料、映像を多数交えた授業を展開している。
 また、学部用教科書もしくは参考書として、平成24年度には『博物館学 I』(共著 学文社)、『人文系 博物館資料論』(編著 雄山閣)、
 『博物館 iv－博物館実習』(共著 学文社)、『人文系 博物館展示論』(編著 雄山閣)、『人文系 博物館資料保存論』
 (編著 雄山閣)を編纂した。大学院用の博物館学史については、『明治期博物館学基本文献集成』(編著 雄山閣)を編纂した。
 また、急激な発展状態にある中国博物館学界と学術交流を実施している。平成25年度は、上海大学での「博物館展示論」の特別授業や西安市文物局関係者・西安市内博物館関係者を、國學院大学に招聘して1週間の特別授業を実施している。

【研究活動の自己評価】

博物館学史の研究。具体的には、博物館学が始まる明治8年(1875)から、戦前期までの博物館学形成期に関する文献を渉猟し、
 学史の構築を行っている。平成24年に『明治期博物館学基本文献集成』(雄山閣)を上梓し、現在は大正～戦前期までの学史の
 体系づくりに取り組んでいる。当該期の文献集成は、平成27年に刊行を予定している。

また一方、博物館の活性化、具体的には集客力の高揚を目的とする博物館経営について研究している。

【職・氏名】教授 上山和雄 UHEYAMA Kazuo

【学位】博士(文学)(平成17年10月 東京大学 乙第16357号)

【本学就任】昭和59年

【略歴】信州大学文理学部人文科学科卒業

東京大学大学院人文科学研究科国史学専攻博士課程単位取得満期退学

城西大学経済学部経済学科助教授

【専門分野】日本近代史

【最近5年間の主な研究業績等】〔平成22～26年度〕(10点まで)

種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または該当ページ	発行年月
論文	単	「絹織物輸出商社、堀越商会の経営—1937-41年」	『横浜開港資料館紀要』第32号 横浜開港資料館	全18p	平26.3
論文	単	「木野崎河岸の薪炭商、谷口家の動向」	『野田市史研究』第24号 野田市	全28p	平26.3
編著	共	『戦前期北米の日本商社—在米接收資料による研究—』	日本経済評論社	全352p	平25.3
論文	単	「絹織物輸出商社、堀越商会の経営—1931-32年—」	『横浜開港資料館紀要』第31号 横浜開港資料館	pp.1-29	平25.3
学会発表等	共	「戦前期日本商社の外国間貿易」	社会経済学会大会 第81回		平24.5
編著	単	『歴史の中の渋谷—渋谷から江戸・東京へ—』	雄山閣	全351p	平23.3

【平成21年度以前の主な研究業績等】(5点まで)

種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または該当ページ	発行年月
論文	単	「東京オリンピックと渋谷、東京」	老川慶喜編『東京オリンピックの社会経済史』 日本経済評論社	pp.39-74	平21.11
著書	単	『北米における総合商社の活動—1896～1941年の三井物産—』	日本経済評論社	全564p	平17.5
編著	共	『帝都と軍隊—地域と民衆の視点から—』	日本経済評論社	全376p	平14.1
編著	共	『対立と妥協—1930年代の日米通商関係』	第一法規出版株式会社	pp.1-42, 309-346	平6.10
著書	単	『陣笠代議士の研究』	日本経済評論社	全321p	平1.9

【所属学会】史学会、社会経済史学会、土地制度史学会、国史学会、鉄道史学会、首都圏形成史研究会

【最近5年間の学会等および社会における主な活動】

横浜市文化財保護審議委員(平14～現在)、野田市史編集委員(平3～現在)、教科用図書検定調査審議会委員(平18～現在)、横浜開港資料館館長・横浜都市発展記念館館長・横浜ユーラシア文化館館長(平23～現在)

【教育活動の自己評価】

長く勤めてきましたので、講義は渋谷学や江戸・東京学を何回か担当するくらいで、残りは大学院・学部の演習を担当しています。導入演習は学科のカリキュラムに沿って授業、2年生から3年生にかけては近現代の資料を読むと同時に、基本的なテーマや各自が関心を持つテーマに関する論文の講読・紹介を行います。4年生では、卒業論文に関する報告・発表を主にします。4年の夏季に合宿を行います。

【研究活動の自己評価】

専門は商社史研究になります。現在は、開港資料館や三井文庫を拠点に友人たちと継続的に共同研究を進めています。これ以外では、関わった、あるいは関わっている地域で興味ある分野・テーマに取り組んでいます。大学では渋谷学、横須賀では軍港、柏では飛行場、野田では石材や薪炭などです。どんな人物でも豊かな過去を持っているように、どんな地域・事物・国も興味深い歴史を持っています。それらをできるだけ提示できればと思っています。

【職・氏名】教授 大久保 桂子 OKUBO Keiko
 【学 位】文学修士
 【本学就任】平成2年
 【略 歴】東京女子大学文理学部史学科卒業
 東京女子大学大学院文学研究科修士課程修了
 慶應義塾大学大学院文学研究科博士課程単位取得満期退学
 千葉大学教養部助教授
 【専門分野】イギリス近代史

【最近5年間の主な研究業績等】 [平成22～26年度] (10点まで)					
種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または 該当ページ	発行年月

【平成21年度以前の主な研究業績等】 (5点まで)					
種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または 該当ページ	発行年月
著書	共	『ヨーロッパ近世の開花』	中公文庫 中央公論新社	全601p中 pp.11-19, 71-109, 151-244, 340-385, 581-586	平21. 1
論文	単	「奨学金制度の課題－私立大学の視点から」	『大学と学生』 第7号(通巻481号) 日本学生支援機構	全62p中 pp.6-14	平16. 10
翻訳・ 翻刻書	単	ジョン・ブリュア『財政=軍事国家の衝撃－戦争・カネ・イギリス国家 1688-1783』	名古屋大学出版会	全271p+43p	平15. 7
論文	単	「戦争と女性・女性と軍隊」	『岩波講座 世界歴史25』 岩波書店	全21p	平9. 12
著書	共	『世界歴史大系 イギリス史2<近世>』	山川出版社	全458p	平2. 3

【所属学会】西洋史学会

【最近5年間の学会等および社会における主な活動】

NHK教育テレビ「高校世界史」講師(平12. 4～現在)、
 日本学生支援機構奨学事業運営協議会委員(平20. 4～現在)、東都大学野球連盟理事(平17～現在)

【教育活動の自己評価】

シラバスに明記した授業計画どおりに授業を進め、期末試験においては到達目標の達成度を詳細に検証した。質保証の要件に抵触するような授業運営をしていない。

【研究活動の自己評価】

学内業務および課外活動支援に追われ、十分な研究成果をあげることができなかった。

【職・氏名】准教授 落合知子 OCHIAI Tomoko
 【学 位】博士(学術)(平成22年9月 お茶の水女子大学 博乙第288号)
 【本学就任】平成21年
 【略 歴】國學院大學文学部史学科 卒業
 國學院大學大学院文学研究科史学専攻考古学コース(博物館学) 博士課程後期中退
 千葉大学・日本大学理工学部・東京農業大学非常勤講師
 【専門分野】博物館学・考古学
 【受賞歴等】加藤有次博士記念賞(平成23年)

【最近5年間の主な研究業績等】 [平成22～26年度] (10点まで)					
種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または該当ページ	発行年月
著書	単	『野外博物館の研究 改定増補』	雄山閣	全336p	平26. 10
論文	単	「濱田耕作と博物館—明治37年のMuseologieの記述—」	『全博協研究紀要』第16号 全国大学博物館学講座協議会	全84p中 pp.15-21	平26. 3
評論・書評等	単	「青木豊著『集客力を高める博物館展示論』」	『全博協研究紀要』第16号 全国大学博物館学講座協議会	全84p中 pp.35-37	平26. 3
論文	単	「戦後の動物園における博物館学思想の一考察—古賀忠道と佐々木時雄にみる動物園のあり方—」	『國學院大學大学院紀要—文学研究科—』第45輯 國學院大學大学院	全294p中 pp.51-67	平26. 3
著書	共	『神社博物館事典』	雄山閣	全306p中 pp.247-259	平25. 12
著書	共	『人文系博物館資料保存論』	雄山閣	全220p中 pp.64-95	平25. 5
著書	共	『人文系博物館展示論』	雄山閣	全245p中 pp.107-134	平25. 3
論文	単	「我が国最初の登録野外博物館—宮崎自然博物館の成立とその社会的背景—」	『國學院雑誌』第113巻第8号 國學院大學	全58p中 pp.17-32	平24. 8
著書	共	『博物館学人物史 下』	雄山閣	全314p中 pp.197-208	平24. 5
著書	共	『観光考古学』	ニューサイエンス社	全220p中 pp.114-125	平24. 5

【平成21年度以前の主な研究業績等】 (5点まで)					
種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または該当ページ	発行年月
著書	単	『野外博物館の研究』	雄山閣	全342p	平21. 9
論文	単	「道の駅博物館の研究」	『全国大学博物館学講座協議会研究紀要』第10号	全73p中 pp.41-61	平20. 3
著書	共	『史跡整備と博物館』	雄山閣	全280p中 pp.210-221	平18. 3
論文	単	「野外博物館小史」	『國學院大學博物館学紀要』第30輯 國學院大學博物館学研究室	全170p中 pp.23-54	平18. 3
著書	共	『考古学入門』	日本放送協会学園	全123p	平16. 4

【所属学会】全日本博物館学会、保存修復学会

【最近5年間の学会等および社会における主な活動】

全国大学博物館学講座協議会事務局幹事(平17. 4～平22. 9)、全国大学博物館学講座協議会委員長補佐(平22. 10)、文部科学省GP『高度博物館学教育プログラム』(平21. 10～平24. 3)、全国大学博物館学講座協議会東日本部会研究助成に採択(平22. 9～平23. 8)、木島平村ふるさと資料館顧問(平26. 7～現在)、上海大学特別研究員(平26. 9～現在)

【教育活動の自己評価】

学部では学芸員資格課程の「博物館概論」「博物館資料保存論」を担当し、特に「博物館概論」は学芸員資格課程の要となる授業であることから、国家資格である学芸員資格を取得する意義と目的を確認させることに重きを置いている。また、大学院の博物館学コースへの進学も視野に入れながら、学部生に於いても質の高い博物館学教育を実践している。さらに障害を持つ学生や海外からの留学生の受け入れも積極的に行ない、資格取得の道を開いている。大学院では「地域博物館論研究」「博物館学専門実習・特殊実習」を担当している。國學院大學は平成21年に文部科学省GP「高度博物館学教育プログラム」に採択され、上級学芸員と博物館学教員の育成を実践している。GP終了後も事業は引き続き継続され、博物館学芸員および博物館学非常勤講師の輩出が顕著となっている。また留学生の入学も増加し、日本のみならず海外においても國學院大學の高度博物館学教育が定着したと思われる。平成25年7月に本邦初の大学院生による手作り資料館「木島平ふるさと資料館」が開館し、院生による展示・教育活動の更新が継続されている。

【研究活動の自己評価】

平成24年に國學院大學文学部研究助成を得て、隠岐の島地域における野外博物館の調査、平成26年1月に全国大学博物館学講座協議会(委員長校)が文化庁「平成25年度博物館・美術館相互交流事業」に採択され、上海大学から研究者を招聘し、國學院大學博物館学研究室と相互交流を行った。同年3月に中日博物館交流団を受け入れ、本校において博物館学講座を開催し、博物館資料保存論、博物館実習を担当した。以上、中国を中心とした博物館学の啓蒙に努めた。

【職・氏名】教授 金子修一 KANEKO Shuuichi

【学 位】文学修士

【本学就任】平成17年

【略 歴】東京大学文学部東洋史学科卒業
東京大学大学院人文科学研究科修士課程修了
山梨大学教育人間科学部教授

【専門分野】中国古代史

【最近5年間の主な研究業績等】 [平成22～26年度] (10点まで)					
種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または該当ページ	発行年月
編著	共	『梁職貢図と東部ユーラシア世界』	勉誠出版	全560p中 前書p1-8, 本文p502-530	平26. 5
編著	共	『訳註日本古代の外交文書』	八木書店	全412p中 pp.3-5,12-22, 本編pp.1-20	平26. 2
論文	単	「禰氏墓誌と唐朝治下の百済人の動向」	『日本史研究』615 日本史研究会	pp.103-120	平25. 11
編著	共	『大唐元陵儀注新釈』	汲古書院	全428p中 pp.5-28, 33-38,357-360	平25. 2
論文	単	「漢唐之際遺詔の変遷及意義」	『中華文史論叢』2012年第1期総第105期 『中華文史論叢』編集部	全33p	平24. 3
論文	単	「大唐元陵儀注」と『大唐開元礼』	鈴木靖民編『日本古代の王権と東アジア』所収 吉川弘文館	全19p	平24. 3
論文	単	「読『旧唐書』巻25・巻26礼儀志「宗廟」節記」	『國學院大學大学院紀要—文学研究科—』第43輯 國學院大學大学院	全22p	平24. 3
編著	共	『世界史史料4 東アジア・内陸アジア・東南アジアⅡ 10—18世紀』	岩波書店	全446p	平22. 11
論文	単	「東アジア世界論」	荒野泰典・石井正敏・村井章介編『日本の対外関係1 東アジア世界の成立』吉川弘文館	pp.192-216	平22. 6
論文	共	「唐代後半期の朝賀之礼」	杜文玉編『唐史論叢』第12輯 三秦出版社	pp.1-28	平22. 4

【平成21年度以前の主な研究業績等】 (5点まで)					
種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または該当ページ	発行年月
編著	共	『世界史史料3 東アジア・内陸アジア・東南アジアⅠ 10世紀まで』	岩波書店	全428p	平21. 12
著書	単	『中国古代皇帝祭祀の研究』	岩波書店	全622p	平18. 4
著書	単	『隋唐の国際秩序と東アジア』	名著刊行会	全390p	平13. 1
著書	単	『古代中国と皇帝祭祀』	汲古書院	全328p	平13. 1
著書	共	『世界歴史大系 中国史2—三国～唐—』	山川出版社	全662p中 pp.364-413, 486-515	平8. 7

【所属学会】史学会、歴史学研究会、高知海南史学会、東洋史研究会、唐代史研究会、日本中国考古学会、中国社会文化学会、中国史学会、東方学会、中国武則天研究会(中国)、唐史研究会(中国)、中国史研究会(韓国)

【最近5年間の学会等および社会における主な活動】

東方学会 東方学編集委員(平25. 6～現在)

【教育活動の自己評価】

最近是中国史を専攻する学生が減少しているので、学部の専門教育については少数の学生を継続して教育する状態が続いている。中国の史料については学生向けの註釈書が極めて少ないので、『資治通鑑』をテキストとして漢文の読解力を鍛えるようにしている。その分、研究史について説明する時間が少なくなるので、ゼミに参加している学生には、私も共著者として参加している『世界歴史大系中国史2』を読んでもらっている。特殊講義等については、漢文史料を読み下した論文等があればそれを配布し、適当なテキストが無ければ、自分で史資料を作成して配布している。また、授業の終わりには纏めとして授業内容の概要を配布し、専門以外の学生にも理解できるように配慮している。大学院の授業では、最近中国を中心に原典に句読点を付した標点本が普及しているので、四部叢刊本の張九齡『曲江集』を用いて、白文の詔勅を院生が自力で読み下せるように指導している。『曲江集』の読解は既に4年目に入り、これまで読んできた詔勅については編年作業を行い、今後の集大成に備えるようにしている。また昨年度は、唐代の勳官の役割に関する研究をした課程博士1名の論文を指導した。

【研究活動の自己評価】

上にも述べたように、中国史については註釈書が極めて少ない。私は本学着任前から、唐の代宗皇帝の喪葬儀礼の式次第である「大唐元陵儀注」と日本古代の外交文書(相手国は渤海を主として新羅や中国の南朝宋・隋・唐)の解読を、若手を中心としたそれぞれの専門家と続けてきた。幸いにそのどちらも解読が終了したので、それぞれ科研費の研究成果公開促進費を受けて『大唐元陵儀注新釈』(2013年)、『訳註日本古代の外交文書』(2014年)として出版し、難解な史料の理解普及に努めた。なお後者については、その準備過程で平成23年度～平成25年度の科研費(基盤研究C)を受けることができた。

【職・氏名】教授 佐藤長門 SATO Nagato

【学 位】博士(歴史学)(平成20年7月 國學院大學 文乙第237号)

【本学就任】平成10年

【略 歴】國學院大學文学部史学科卒業

國學院大學大学院文学研究科日本史学専攻博士課程後期単位取得満期退学

駒場学園高等学校教諭

【専門分野】日本古代史、古代王権・国家の権力構造論

【最近5年間の主な研究業績等】 [平成22～26年度] (10点まで)					
種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または該当ページ	発行年月
その他	共	「座談会 日本史の論点・争点 古代女帝研究の現在」	『日本歴史』796号 吉川弘文館	pp.2-27	平26. 9
論文	単	「藤原広嗣—平城宮を震撼させた九州の反乱」	『歴史読本』2014年4月号 KADOKAWA	全256p中 pp.78-83	平26. 2
論文	単	「天孫降臨神話の改作と八世紀前後の王位継承」	『國學院雑誌』第114巻第1号 國學院大學	全56p中 pp.1-16	平25. 1
論文	単	「孝謙天皇—なぜ、日本史上初となる女性皇太子が誕生したのか?」	『歴史読本』2012年7月号 新人物往来社	全336p中 pp.114-120	平24. 7
論文	単	「称徳天皇—讓位からわずか六年後の重祚と道鏡寵愛の理由とは?」	『歴史読本』2012年7月号 新人物往来社	全336p中 pp.122-128	平24. 7
論文	単	「承和の変前夜の春宮坊—「藩邸の旧臣」をめぐって—」	『日本古代の王権と東アジア』 吉川弘文館	全397p中 pp.88-116	平24. 3
論文	単	「入唐僧の情報ネットワーク」	『円仁と石刻の史料学—法王寺釈迦舍利蔵誌』 高志書院	全322p中 pp.260-287	平23. 11
論文	単	「斑鳩宮家—山背大兄王の自害で消えた聖徳太子の血筋」	『歴史読本』2011年10月号 新人物往来社	全340p中 pp.64-69	平23. 10
論文	単	「円珍の入唐動機に関する学説史的検討」	『椋山林継先生古希記念論集 日本基層文化論叢』 雄山閣	全647p中 pp.357-372	平22. 8
論文	単	「日本古代讓位論—九世紀の事例を中心として—」	『国史学』200号 国史学会	全287p中 pp.5-51	平22. 4

【平成21年度以前の主な研究業績等】 (5点まで)					
種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または該当ページ	発行年月
論文	単	「用明・崇峻期の政変と蘇我氏—飛鳥寺建立前夜の倭王権—」	『古代東アジアの仏教と王権—王興寺から飛鳥寺へ—』 勉誠出版	全398p中 pp.371-393	平22. 3
学会発表等	単	「日本天台僧円珍の入唐動機」	中国・鄭州大学、「東アジアにおける中原文化の受容と展開」国際シンポジウム		平21. 8
論文	単	「円仁と遣唐使・留学生」	『円仁とその時代』 高志書院	全300p中 pp.191-215	平21. 2
著書	単	『日本古代王権の構造と展開』	吉川弘文館	全383p	平21. 2
論文	単	「古墳時代の大王と地域首長の服属関係」	『國學院雑誌』第109巻第11号 國學院大學	pp.54-68	平20. 11

【所属学会】國學院大學国史学会、歴史学研究会、続日本紀研究会、日本史研究会、大阪歴史学会、木簡学会

【最近5年間の学会等および社会における主な活動】

北海道新聞社・ぶんぶん講座講師(平20. 9～平22. 10)、中日新聞社・栄中日文化センター講師(平21. 3～平成25. 11)、朝日カルチャーセンター(横浜)講師(平21. 4～平22. 6)、朝日カルチャーセンター(新宿)講師(平24. 3)

【教育活動の自己評価】

講義科目である日本時代史1・2では、日本古代史をフィールドとして、天皇を核とする王権構成者がどのような構造的変遷をたどったかを論じているが、授業が終了する10分ほどを使って、その日に学んだことや疑問点などをコメントペーパーに記入してもらい、提出させている。これは学生の出席を確認するとともに、一方通行になりがちな講義科目の欠点を補い、学生の理解度や関心の度合いを確認するためにおこなっているもので、重要と思われる質問や意見に対しては、次の授業の冒頭で回答している。授業は毎回レジュメを配布するとともに、パワーポイントを使用して可視的な授業展開を志している。3・4年次対象の史学展開演習・応用演習では、発表をおこなう学生を前もって研究室に呼び、あらかじめレジュメの点検をするとともに、質問に答えるようにしている。

【研究活動の自己評価】

学部・大学院以来の研究テーマである、日本古代王権・国家の権力構造解明に、引き続き取り組んでいく。具体的には、古代女帝と不婚の問題、讓位制の成立と展開、春宮坊を拠点とする官人と王権の関係などに焦点を当て、日本古代王権の特質を明らかにしていきたい。また、大学院時代からはじめた入唐僧に関する考察も、続けておこなっていく。9世紀以降の日本では、密教の導入が求められたが、同時代の東アジアでは禅宗が広がっていた。なぜ日本だけが違う方向を向いていたのか。このような仏教受容の観点からも、検討していきたい。

【職・氏名】准教授 柴田 紳一 SHIBATA Shin'ichi

【学 位】文学士

【本学就任】平成8年

【略 歴】國學院大學文学部史学科卒業
國學院大學日本文化研究所助教授

【専門分野】日本近代史

【受賞歴等】〈(財)吉田茂記念事業財団〉吉田茂賞(昭和63年3月)

【最近5年間の主な研究業績等】 [平成22～26年度] (10点まで)					
種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または該当ページ	発行年月
論文	単	「軍令部総長豊田副武と終戦」	『國學院雑誌』第115巻第4号 國學院大學	全12p	平26. 4
論文	単	「平沼騏一郎の枢相再任と御前会議参列」	『栃木史学』第26号 國學院大學栃木短期大学史学会	全9p	平24. 3
論文	単	「吉田茂、開戦前夜最後の対英親善工作」	『中央公論』1524号 中央公論新社	全12p	平23. 3
編著	単	『吉田茂書翰 追捕』	中央公論新社	全216p	平23. 3

【平成21年度以前の主な研究業績等】 (5点まで)					
種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または該当ページ	発行年月
著書	単	『日本近代史研究余録—人物・史料・書物・読書—』	渡辺出版	全302p	平21. 9
著書	共	『歴史としての吉田時代』	中央公論新社	全179p中 pp.39-51	平21. 9
著書	共	『大中臣祭主藤波家の研究』	続群書類従完成会	全380p	平12. 3
著書	共	『開戦と終戦』	情報文化研究所	全248p	平10. 10
著書	単	『昭和期の皇室と政治外交』	原書房	全290p	平7. 8

【所属学会】国史学会、政治経済史学会、軍事史学会、日本歴史学会、日本国際政治学会

【最近5年間の学会等および社会における主な活動】

【教育活動の自己評価】

授業の面では、学生に対しては、本学の伝統と蓄積とを踏まえ、「大学生として学ぶ」とはどのようなことか、また「國學院大學で学ぶ」とはどのようなことか、を意識・認識・理解出来るように、指導・教育している。いかに自らの頭で考え、より深く調べ、自らの関心を深め、さらに自らの所見を言語化し、また他者との見解の相違にもどのように対応していくかを、各自が実践出来るように努めている。またオフィスアワーでは、史学科の学生はもとより、他学部・他学科の学生にも積極的に面談している。課外活動では、顧問を務める「史学会」メンバーへの個別指導も行なっている。

【研究活動の自己評価】

昭和史研究、特に終戦史関連の研究を鋭意進めているが、吉田茂についてもさらにいくつかの論文を発表した後、伝記的研究をまとめたと考えている。また昭和史に深く関与し、著名でありながら、伝記(自伝・回顧録を含め)もなく、研究もほとんどなされていない人物(たとえば終戦前後に昭和天皇・内大臣木戸幸一を補佐し篤く信任された松平康昌など)についても伝記的研究を進めたい。現在、本学所蔵の井上毅宛書簡の一部の影印・翻刻に解題・解説を付し刊行する学内事業に参加しているが、本学所蔵で学界・学外には未紹介の史料を積極的に知らせて行きたいと考えている。

【職・氏名】教授 谷口康浩 TANIGUCHI Yasuhiro
 【学 位】博士(歴史学)(平成17年7月 國學院大學 文乙第211号)
 【本学就任】平成19年
 【略 歴】國學院大學大学院文学研究科日本史学専攻博士課程後期中退
 國學院大學文学部助手(専任)
 國學院大學文学部准教授
 【専門分野】日本先史考古学
 【受賞歴等】第6回尖石縄文文化賞受賞(平成17年)

【最近5年間の主な研究業績等】 [平成22～26年度] (10点まで)

種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または該当ページ	発行年月
著書	共	『講座日本の考古学4 縄文時代(下)』	青木書店	全669p中 pp.215-250	平26. 5
学会発表等	単	The Beginning of Pottery Culture in the Pleistocene Japanese Archipelago	19th Annual Meeting of the European Association of Archaeologists 2013 Pilsen Czech Republic The European Association of Archaeologists		平25. 9
辞書・事典等	単	「墓域からみた縄文社会」	『事典 墓の考古学』 吉川弘文館	全473p中 pp.35-38	平25. 5
編著	共	『縄文人の石神 大形石棒にみる祭儀行為』	六一書房	全239p	平24. 5
論文	単	「祭祀考古学は成り立つか 方法論研究の必要性」	『祭祀儀礼と景観の考古学』 國學院大學伝統文化リサーチセンター	全8p	平24. 3
著書	単	『縄文文化起源論の再構築』	同成社	全293p	平23. 12
論文	単	「大形石棒の重要性と研究課題」	『縄文時代の考古学1 縄文文化の輪郭』 國學院大學研究開発推進機構学術資料館	全195p中 pp.27-38	平23. 2
論文	単	「「羨道」とは何か—境界としての象徴性と儀礼—」	『日本基層文化論叢』 雄山閣	全15p	平22. 8
論文	単	「縄文時代概念の基本的問題」	『縄文時代の考古学1 縄文文化の輪郭』 同成社	全29p	平22. 6
論文	単	「縄文時代の開始—「草創期」再考—」	『縄文時代の考古学1 縄文文化の輪郭』 同成社	全19p	平22. 6

【平成21年度以前の主な研究業績等】 (5点まで)

種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または該当ページ	発行年月
論文	単	「縄文時代の生活空間—「集落論」から「景観の考古学」へ—」	『縄文時代の考古学8 生活空間』 同成社	全22p	平21. 3
論文	単	「縄文時代の環状集落と集団関係」	『考古学研究』 第55第3号 考古学研究会	全16p	平20. 12
論文	単	「縄文時代の祖先祭祀と社会階層化—儀礼祭祀と特殊生産の関係—」	『國學院雑誌』 第109巻第11号 國學院大學	全14p	平20. 11
論文	共	「土器型式情報の伝達と変容—属性分析からみた加曽利E式土器の多様性—」	『縄文時代の考古学7 土器を読み取る—縄文土器の情報—』 同成社	全20p	平20. 8
著書	単	『環状集落と縄文社会構造』(博士論文)	学生社	全303p	平17. 3

【所属学会】日本考古学協会、考古学研究会、日本第四紀学会

【最近5年間の学会等および社会における主な活動】

日本学術振興会特別研究員審査会専門委員・国際事業委員会書面審査員(平22. 8)

国立歴史民俗博物館総合展示第1室リニューアル委員会委員(平26. 4～現在)

新潟県文化財審議委員(平25. 4～現在)

【教育活動の自己評価】

学部の専門教育として担当している3・4年生の『史学展開演習』『史学応用演習』では、シラバス以外に、毎回の演習発表のテーマに関する解題ならびに推奨する研究論文を網羅したリーディングリストを作成して受講生に配布している。受講者全員が各回のテーマやポイントを理解するとともに、最近の優れた研究論文を数多く、かつ批判的に読むことで、先史考古学の研究法を学べるように工夫している。また、後期授業開始後の10月には、卒業論文中間報告会を受講者全員参加のもとに開催し、卒業論文のまとめに向けた研究指導を毎年実施している。

【研究活動の自己評価】

縄文文化の歴史的位置づけや総合的評価を、世界史的視点ならびに日本文化の形成という大きな歴史的脈絡から見直したいという問題関心の下で、研究をおこなっている。平成25年度には、イギリス・ロンドン大学考古学研究所に留学し、ブリティッシュアイランドおよび西北ヨーロッパの新石器時代文化と縄文文化との比較考古学という新たな試みに取り組んだ。また、国内では国立歴史民俗博物館が推進する共同研究『先史時代における社会複雑化・地域多様化の研究』に参加し、縄文時代における社会複雑化・階層化について、同分野の中堅研究者とともに先端的な研究を進めている。自分自身の調査・研究では、「縄文草創期」の再検討を中心的な研究課題として、日本列島における土器文化の起源とその実年代・古環境、草創期における人間行動と遺跡形成などを解明するために、新潟県津南町卯ノ木泥炭層遺跡、群馬県長野原町居家以岩陰遺跡などでの学術発掘調査を進めている。さらに、先史時代における社会組織と儀礼祭祀体系への強い関心から、縄文時代中期以降に著しく発達する大形石棒とその祭儀の研究を意欲的に展開している。

【職・氏名】教授 千々和 到 CHIJIWA Itaru
 【学 位】文学修士
 【本学就任】平成5年
 【略 歴】東京大学文学部国史学科卒業
 東京大学大学院人文科学研究科修士課程修了
 東京大学史料編纂所 教授
 【専門分野】日本中世史

【最近5年間の主な研究業績等】 [平成22～26年度] (10点まで)					
種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または該当ページ	発行年月
論文	単	「バジル・ホール・チェンバレンのお札コレクション」	Ofuda Amulettes et talismans du Japon On Japanese Charms Collège de France	全401p中 pp.89-108	平26. 6
編著	共	『下里・青山板碑石材採掘遺跡群 一割谷採掘遺跡一』	埼玉県小川町教育委員会 小川町埋蔵文化財調査報告書 33	全139p	平26. 1
論文	単	「バジル・ホール・チェンバレンのお札コレクション—神社のおふだと神代文字を中心に—」	『日本村落自治史料調査研究所研究紀要』17 日本村落自治史料調査研究所	全68p中 pp.1-18	平25. 6
論文	単	「塩津・起請文木簡の古文書学的考察」	『國學院雑誌』 第113巻第6号 國學院大學	全50p中 pp.1-11	平24. 6
学会発表等	単	「日本の『おふだ』に書かれた字」	同志社大学大学院国際シンポジウム 2011『文字の宇宙—かたちの意味、意味のかたち—』	全185p中 pp.147-164	平23. 11
論文	共	「新出のB・H・チェンバレン、E・B・タイラー宛書状の紹介と検討」	『國學院大學研究開発推進機構紀要』3 國學院大學研究開発推進機構	全210p中 pp.133-166	平23. 3
論文	共	「國學院大學図書館所蔵 森田清太郎旧蔵醍醐寺地藏院等文書」	『國學院大學 校史・学術資産研究』3 國學院大學研究開発推進機構校史・学術資産研究センター	全354p中 pp.175-197	平23. 3
論文	単	「上田市の中世における信仰と史料—塩田平の石造物と生島足島神社起請文を中心に—」	『向学の燈花—新上田自由大学歴史学教室開創30周年記念誌—』 新上田自由大学歴史学教室	全239p中 pp. 23-60	平22. 11
編著	共	『日本の護符文化』	弘文堂	全350p	平22. 7

【平成21年度以前の主な研究業績等】 (5点まで)					
種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または該当ページ	発行年月
著書	単	『板碑と石塔の祈り』	山川出版社	全104p	平19. 8
論文	単	「日本の金石文研究 現況」	『大東文化研究』 第55号 (韓国)成均館大学校大東文化研究院	全434p中 pp.137-165	平18. 9
論文	単	「大師勸請起請文—南北朝・室町時代の特殊な起請文—」	羽下徳彦編『中世の社会と史料』 吉川弘文館	pp.170-192	平17. 2
論文	単	「中世日本の人びとと音」	『歴史学研究』 691 歴史学研究会	pp.51-59	平8. 11
著書	単	『板碑とその時代』	平凡社選書	全285p	昭63. 3

【所属学会】地方史研究協議会、日本古文書学会、東国文化研究会、史学会、歴史学研究会、日本歴史学会

【最近5年間の学会等および社会における主な活動】

日本歴史学会 理事(平21.7～平成25.7)・評議員(平20.7～現在)、日本古文書学会 理事(平15.4～現在)、埼玉県小川町下里割谷板碑石材採掘遺跡調査指導委員会 委員長(平23.12～現在)

【教育活動の自己評価】

学部・大学院の教育活動としては、日本中世前期を中心に、講義・演習と卒論・修論・博士論文等の作成指導をしている。研究指導の上では、一点の史料を丁寧に読み込むことから、どれほど豊かな情報が引き出せるか、そうした情報を引き出すことがどれほど楽しい作業なのかを伝えたいと考えている。そのためには、書籍や印刷物だけではなく、原史料に触れ、見ることも重要である。様々な制約はあるが、学内での史料見学のほか、学外での企画をできるだけ紹介することになっている。なお、卒業論文の指導は、とくに力を入れている。日本文学科はじめ多くの学科が必修でなくなったあとも、史学科は全員必修にしているため、それは当然のことであろう。私自身の実践の報告は、『國學院大學教育開発推進機構紀要』4号(2013年3月)に「卒業論文と私」と題して詳細に記したので、ここでは繰り返さない。

【研究活動の自己評価】

研究活動としては、中世に生きた人々の心性や生活を具体的に明らかにすることを目指している。具体的には、①起請文と呼ばれる誓約の文書や護符等の史料収集・検討と、②関東・東北地方を中心として板碑や石塔などの石造物を中心として資料収集を続けている。②については、埼玉県小川町の「板碑石材製作遺跡」を国指定にすることに微力ながらお手伝いでき、その作業の中で多くの新知見を得られたので、それなりに満足している。また①については、4年前に研究仲間と『日本の護符文化』を刊行でき、その後平成23～25年度に科学研究費基盤研究(C)「中・近世起請文の様式についての研究」で研究費を得、その研究成果は國學院大學博物館での企画展示「起請文と牛玉宝印」(平成26年3月15日～5月18日)で公開できたが、それらの成果を含めた起請文についての研究書は、いまだ刊行にいたっていない。3年半後のリタイアを前に、これまでの調査研究の成果を集大成することを目指したいと考えている。

【職・氏名】教授 根岸茂夫 NEGISHI Shigeo
 【学 位】博士(歴史学)(平成12年3月 國學院大學 文乙第155号)
 【本学就任】昭和63年
 【略 歴】國學院大學文学部史学科卒業
 國學院大學大学院文学研究科日本史学専攻博士課程後期単位取得満期退学
 埼玉県学芸員(県史編さん室勤務)
 【専門分野】日本近世史
 【受賞歴等】東京都文化功労表彰(平成21年)

【最近5年間の主な研究業績等】 [平成22～26年度] (10点まで)					
種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または 該当ページ	発行年月
論文	単	「近世初期武蔵における伝馬継立制度の形成」	『埼玉の文化財』54 埼玉県文化財保護協会	全7p	平26. 3
調査・研究報告等	共	『近世における前期国学の総合的研究』	國學院大學文学部	全184p	平26. 3
評論・書評等	単	「歴史からみた渋谷」	『結節点としての渋谷』 國學院大學研究開発推進センター 渋谷学研究会	全12p	平26. 2
翻訳・翻刻書	共	『東羽倉家文書史料集』一	國學院大學文学部	全174p	平25. 11
論文	単	「近世前期の岩槻藩と幕政」	『岩槻藩の殿様』さいたま市立博物館	全8p	平25. 10
翻訳・翻刻書	共	『行田市史』資料編 近世2	行田市	全944p	平25. 3
論文	単	「仙台藩の行列と軍役」	『仙臺郷土研究』通巻283 仙台郷土研究会	全17p	平23. 12
論文	単	「真田家の大名行列」	『大名の旅—松代藩の参勤交代—』 真田宝物館	全7p	平23. 9
論文	単	「谷間の村と町の風景」	渋谷学叢書2『歴史のなかの渋谷』雄山閣	全24p	平23. 3
編著	共	『近世の環境と開発』	思文閣出版	全362p	平22. 12

【平成21年度以前の主な研究業績等】 (5点まで)					
種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または 該当ページ	発行年月
著書	単	『大名行列を解剖する』	吉川弘文館	全214p	平21. 11
著書	共	『金沢城下町—社寺信仰と都市のにぎわい—』	北国新聞社	全278p	平16. 6
編著	共	『江戸版本解説大字典』	柏書房	全1141p	平12. 9
著書	単	『近世武家社会の形成と構造』	吉川弘文館	全356p	平12. 2
編著	共	『新編古文書解説字典』	柏書房	全580p	平5. 5

【所属学会】国史学会、地方史研究協議会、関東近世史研究会、日本史研究会

【最近5年間の学会等および社会における主な活動】

埼玉県県政史料・新出重要史料刊行事業編集委員(平9～現在)、学習院大学史料館客員研究員(平11～現在)、
 国史学会評議員(平12～現在)、関東近世史研究会評議員(平13～現在)、埼玉県文化財審議委員会委員(平14～現在)、
 埼玉県行田市史編さん委員会委員(平17～現在)、東村山市文化財審議委員会会長(平18～現在)、
 地方史研究協議会委員(平18～現在)、新座市文化財審議委員会会長(平20～現在)、
 渋谷区文化財保護審議委員(平23～現在)、埼玉県文化財審議委員会副会長(平24～現在)、
 小金井市史編さん委員会委員長(平24～現在)

【教育活動の自己評価】

講義・演習といった授業のほかに、卒業論文・修士論文・博士論文の指導などに多くの時間を割いている。講義では必ずパワーポイントを使用し、図像を取り混ぜて学生の興味と理解を増すように工夫し、レジュメも同一の規格で総番号を付し、余白を多くして書き込みができるようにし、保存・活用の便を図っている。演習は、予習・復習や課題の提出を細やかに指導している。また論文指導にオフィスアワー以外にも時間を作り、休暇期間に合宿による中間報告を行い、指導と学生同士の連携の輪を作るよう心掛けている。ただ、歴史的な常識と理解していた事象を、最近の学生が知識として持っておらず、授業や様々な指導の場で基礎的な知識から教示しなければならないことを強く感じている。かつ指導をていねいにする自身で考えず教員に頼ってくる学生も目につくようになり、指導法を模索している。

【研究活動の自己評価】

研究活動は大きく三本の柱を立てている。第一に学生のころから続けている近世武家社会の研究であり、現在では大名行列に象徴される武家の行列に注目し、その構造や近世社会への位置付けを検討している。第二に各地の農村史料調査や自治体史の編纂への参加から、近世における地域社会の展開を当時の人々の目線から復元し、また近世の景観の変化を考察している。第三に荷田春満を中心に近世の前期国学の形成と展開を解明し、近世社会の展開に位置付ける作業を平成13年から進め、『新編荷田春満全集』の編纂、2度にわたる科研費の取得や國學院大學特別推進研究費の補助により、京都市の東丸神社史料の調査・研究を多くの研究者とともに続けている。特に第三の研究は、若手研究者の育成に繋がっていると考えている。

【職・氏名】教授 林 和 生 HAYASHI Kazuo
 【学 位】文学修士
 【本学就任】平成8年
 【略 歴】京都大学文学部史学科人文地理学専攻卒業
 京都大学大学院文学研究科地理学専攻修士課程修了
 福井大学教育学部助教授
 【専門分野】歴史地理学、地域研究(中国)

【最近5年間の主な研究業績等】 [平成22～26年度] (10点まで)					
種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または該当ページ	発行年月
論文	単	「台地と川がつくった魅力あふれる街・渋谷」	『歴史のなかの渋谷:渋谷から江戸東京へ』 雄山閣	全351p中 pp.11-55	平23. 3

【平成21年度以前の主な研究業績等】 (5点まで)					
種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または該当ページ	発行年月
論文	単	「中国近世における水陸交通の展開」	『領域と移動 アジアの歴史地理1』 朝倉書店	全341p中 pp.213-229	平19. 6
論文	単	「経済改革下の郷鎮企業の発展方向」	『内陸中国の変貌 改革開放下の河南省鄭州市域』 ナカニシヤ出版	pp.97-153	平15. 11
論文	単	「経済改革下における広西チワン族自治区の墟市」	石原潤編『農村空間の研究 下』 大明堂	pp.177-194	平15. 3
論文	単	「綿陽市における工業企業の発展動向―旧国営国防工業企業の変身を中心に―」	『内陸工業都市綿陽市と周辺農村の変容』 京都大学大学院文学研究科地理学教室	pp.76-108	平14. 3
論文	単	「登封市の鋳工業の発展と郷鎮企業―鋳山地域の郷鎮企業の存在形態」	『河南省登封市の市場経済化と地域変容』 京都大学大学院文学研究科地理学教室	pp.103-138	平10. 3

【所属学会】人文地理学会、歴史地理学会、東洋史研究会、日本地理学会、市場史研究会、国史学会、日本国際地図学会

【最近5年間の学会等および社会における主な活動】

歴史地理学会常任委員長(平20. 4～平25. 3)

【教育活動の自己評価】

特殊講義など講義科目では、視聴覚教材を多用して教育効果が得られるように工夫している。講義の内容は毎年変えているため、教科書は用いず、図表をふんだんに盛り込みながら授業内容を要約したプリントを毎時間配布して学生の理解を助け、かつ学生が自ら考えることができるように問題提起しながら授業を進めている。また、ほとんどの授業ではパワーポイントを用いて、文字データだけでなく写真や地図、図表をスクリーンに提示したり、またDVD教材も適宜活用して学生の理解が深まるように努力している。演習科目の学生指導では図書館等での文献調査だけでなく、学生を引率して年に複数回エクスカージョンを実施したり、古地図や絵図を携帯して歴史的な農村景観や街並み景観などの実地調査を行わせて、地域に残る様々な歴史的景観の調査のみならず、聞き取りにより歴史的景観を守ってきた人々の暮らしぶりも理解させるように努力している。さらに受講生それぞれに半期に必ず1～2回の報告の機会をもたせて相互に問題点を討論させ、合わせてレポートも書かせている。授業全般に対しては、学生による授業評価アンケートの結果をもとに、シラバスや講義内容を修正して教育効果が高まるように工夫している。

【研究活動の自己評価】

中国を対象地域に、1)宋代以降の鎮市・墟市・集市など地方中心集落の発達と商品流通網の展開に関する歴史地理学的研究、2)江南地方の水郷地帯に立地する鎮市の歴史的都市景観の特徴とそれらの形成プロセス、および景観の保護・保存に関する研究、3)中国最大の経済都市である上海市内に残る伝統的街並み景観の形態と変容に関する研究を進めている。古文書や古地図・絵図などの文献史料の蒐集だけでなく、現地で様々な都市の歴史的街並みについての実地調査を行っている。また、近世近代の江戸・東京を構成する特色ある街並み景観の形成プロセスと変容について、主に自然環境との関わりから解明を進めている。

【職・氏名】教授 樋口 秀実 HIGUCHI Hidemi
 【学 位】博士(歴史学)(平成15年1月 國學院大學 文乙第176号)
 【本学就任】平成16年
 【略 歴】國學院大學文学部史学科卒業
 國學院大學大学院文学研究科日本史学専攻博士課程後期単位取得満期退学
 國學院大學文学部兼任講師
 【専門分野】中国近代史、日中関係史

【最近5年間の主な研究業績等】 [平成22～26年度] (10点まで)					
種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または該当ページ	発行年月
評論・書評等	単	「支那通としての「板垣征四郎」	『日本歴史』第792号 吉川弘文館	全3p	平26. 5
論文	単	「日中戦争下、湖北省における日本の占領地統治と汪兆銘政権」	『東アジア近代史』第17号 ゆまに書房	全20p	平26. 3
論文	単	「満洲国「帝位継承法」の研究」	『東洋学報』第95巻1号 東洋文庫	全21p	平25. 6
論文	単	「満洲国「建国神廟」創設をめぐる政治過程」	『東洋学報』第93巻1号 東洋文庫	全27p	平23. 6
論文	単	「満洲国皇帝制度の成立と皇帝即位儀礼」	『国史学』第200号 国史学会	全288p中 pp.147-196	平22. 4

【平成21年度以前の主な研究業績等】 (5点まで)					
種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または該当ページ	発行年月
論文	単	「袁世凱帝政運動をめぐる日中関係」	『國學院雑誌』第108巻第1号 國學院大學	全15p	平19. 9
編著	共	『戦間期の東アジア国際政治』	中央大学出版部	全613p	平19. 6
編著	共	『国境を越える歴史認識—日中対話の試み—』	東京大学出版会	全381p中 pp.111-136	平18. 5
論文	単	「東三省政権をめぐる東アジア国際政治と楊宇霆」	『史学雑誌』第113編7号 史学会	pp.37-70	平16. 7
著書	単	『日本海軍から見た日中関係史研究』	芙蓉書房出版	全308p	平14. 5

【所属学会】国史学会、史学会、東アジア近代史学会、東北アジア地域史研究会

【最近5年間の学会等および社会における主な活動】

【教育活動の自己評価】

近年の大学教育、とくに3～4年生のそれは、就職活動と連動させなければいけない部分が多くなっている。このため、とくにゼミ形式の少人数クラスでは、単に机上で文献や資料を読むというだけでなく、そこから得た知識をいかに整理して論理的構造を構築するか(たとえば、情報収集⇒疑問・仮説の提示⇒検証⇒結論の提示)、さらには、その成果をいかに人前で発表するか(いわゆるプレゼンテーションの技術)にも心を砕きながら、授業を展開している。就職後に必要となる能力は、情報を収集するだけでなく、それを整理して結論や要点を導き出し、「自分の言葉」で社会に発表することであると考えるからである。また、学生の指導にあたっては、「まず褒めてから問題点を指摘」するように心掛けている。否定から入ってしまうと、学生のやる気がそがれ、能力の向上を止めてしまうと思われるからである。

【研究活動の自己評価】

最近数年間は、アジアにおける対日協力者の研究を進めている。これは、第二次世界大戦後の日中両国で「対日協力者」が一方的に断罪された結果、両国の歴史認識が偏りがちとなり、現在の日中対立の一因である歴史認識問題に発展しているからである。また、「対日協力者」が中国において断罪されながら、戦後の東南アジア各国において指導者になったり、英雄扱いされたりしていることに関しても、地域的偏向がある。すなわち、対日協力者に関する研究は、東アジア(東南アジアを含めての)における歴史認識の相対化をはかるうえで、格好の分析対象なのであり、今後の数年間もこの研究を進めていきたいと考えている。

【職・氏名】教授 藤澤 紫 FUJISAWA Murasaki
 【学 位】博士(哲学)(平成11年7月 学習院大学 乙第90号)
 【本学就任】平成26年
 【略 歴】学習院大学大学院人文科学研究科哲学専攻 博士後期課程単位取得満期退学
 日本学術振興会特別研究員
 國學院大學大学院文学研究科客員教授
 【専門分野】日本美術史、日本近世文化史、比較芸術学
 【受賞歴等】第20回内山晋米寿記念浮世絵奨励賞新人賞(平成16年)

【最近5年間の主な研究業績等】 [平成22～26年度] (10点まで)

種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または該当ページ	発行年月
論文	単	「浮世絵におけるやまと絵と琳派受容―師宣、春信、そして北斎」	『美術フォーラム21』29号 一般社団法人美術フォーラム21	全166p中 pp.113-118	平26. 5
論文	単	「江戸の「美男子」―江戸文化の中の男たち」	『江戸の美男子』展図録 太田記念美術館	p6-15	平25. 7
著書	共	『超域する異界』	勉誠出版	全400p中 pp.205-222	平25. 2
論文	単	「浮世絵と美人 ―リアリズムとファンタジー―」	『聚美』4号 青月社	p74-93	平24. 6
著書	共	『豊穰の日本美術(小林忠先生古希記念論集)』	藝華書院	全584p中 pp.96-101	平24. 3
著書	単	『「日本美術史」学習指導書』	玉川大学通信教育部	全34p	平24. 2
著書	共	『ミネアポリス美術館 浮世絵名品集成』	藝華書院	全368p中 pp.202-212	平23. 11
論文	単	“L’ukiyo-e e la moda di Edo: l’ukiyo-e come mass media”「浮世絵と江戸のファッション～メディアとしての浮世絵～」	Porti di Magnin 73 イタリア・トリノ文化協会	pp.122-125	平23. 5
論文	単	「歌川広重画「名所江戸百景」にみるメディア性と吉祥性―報道と祈り」	『國學院雑誌』第111巻第11号 國學院大學	pp.269-281	平22. 11
学会発表等	単	「海外レポート(二) イタリア・トリノでの浮世絵展の開催とコレクション調査の報告 浮世絵から現代のイラストまで―日本の偉大なグラフィックアート展―“Dall’ukiyo-e all’illustrazione contemporanea a Torino”(イタリア・トリノ)の企画・調査・開催について」	『浮世絵芸術』160号 国際浮世絵学会	全88p中 pp.61-64	平22. 7

【平成21年度以前の主な研究業績等】 (5点まで)

種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または該当ページ	発行年月
論文	単	「春信の絵本と錦絵―絵を読む楽しみ」	『アジア遊学』109号 勉誠出版	pp.104-112	平22. 3
論文	単	「新出の「酒呑童子絵巻」と国際交流～ジャパニーズ・アニメーションとコミックの源流～」	『國學院大學紀要』第48巻 國學院大學	pp.331-340	平22. 2
著書	単	『遊べる浮世絵―体験版江戸文化入門―』	東京書籍	全112p	平20. 9
著書	共	『広重 名所江戸百景/秘蔵 岩崎コレクション』	小学館	pp.194-207, 146-177	平19. 7
著書	単	『鈴木春信絵本全集』	勉誠出版	全1846p	平12. 2

【所属学会】 学習院大学哲学会、美術史学会、国際浮世絵学会、古今短歌会

【最近5年間の学会等および社会における主な活動】

国際浮世絵学会常任理事(平14.4～現在)、国際浮世絵学会国際委員会委員長(平22.4～現在)
 切手の博物館(豊島区目白) 専門委員・同館主催「切手貼絵コンテスト」審査員(平21.9～現在)
 財団法人アダチ伝統木版画技術保存財団評議員(平25.4～現在)

【教育活動の自己評価】

美術史は文化史研究の一端をなすものであり、学生にも常に「作品を身近な文化的史料として検証する」姿勢を持つように促している。学部では「日本美術史」「史学特殊講義」「史学基礎演習B」を担当。「日本美術史」は古代から現代の美術の歴史と変遷を辿る長大な内容で、かつ受講生数も多いため、参加型、体験型を意識して構成している。パワーポイントで作品を鑑賞し、毎時間のコメント提出、展覧会情報の配布、美術文化体験レポートの作成などを習慣づけた。「史学基礎演習B」では絵画史料の読み方を学ぶため、歌川広重画「名所江戸百景」に描かれた景観を、古地図やフィールドワークの成果と比較して発表させ、一冊のゼミレポート集としてまとめている。大学院では現在、博士前期課程3名、博士後期課程4名の学生を主査として指導、「比較芸術学特殊研究」「史料学研究Ⅰ」の2つの演習を担当している。小規模ではあるが「国際子ども文化研究会」を立ち上げ、大学院生を中心に学外の研究者と協力し活発な意見交換も行っている。日本美術史の専門家志す秀逸な人材が、本学を基盤に育ちつつあることを実感している。

【研究活動の自己評価】

浮世絵や近世諸派の絵画を軸とした研究成果を発表してきたが、現在は更に時代や地域、分野の幅を広げた検証を行うとともに、美術を介した諸外国との文化交流についても論じている。現在研究中の課題は①芸術と人間(美人画と風俗表現)②美術とメディア(浮世絵と出版文化)③美術と地域(名所絵と景観表現)④美術と習俗(信仰と異界表現)⑤美術と意匠(染織・工芸とデザイン史)⑥美術と国際交流(比較文化研究、里帰り展の企画)の6点で、近著として「浮世絵におけるやまと絵と琳派受容―師宣、春信、そして北斎」(『美術フォーラム21 第28号 特集:やまと絵と琳派の交流』2014年5月)などを発表。また平成23年度から1年間「超域する「異界」―異文化研究・国語教育・エコロジー教育の架け橋として―」研究協力者として日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究(C)助成を受け、平成24年度に『超域する異界』刊行に際し、研究協力者として日本学術振興会科学研究費助成事業科学研究費補助金「研究成果公開促進費」・東洋大学井上円了記念助成金(刊行助成)を受けた。

【職・氏名】教授 古山 正人 FURUYAMA Masato

【学 位】文学修士

【本学就任】平成7年

【略 歴】新潟大学人文学部史学科卒業

東京大学大学院人文科学研究科西洋史学専攻博士課程単位取得満期退学

電気通信大学電気通信学部人文社会科学系助教授

【専門分野】古代ギリシア史

【最近5年間の主な研究業績等】 [平成22～26年度] (10点まで)					
種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または該当ページ	発行年月
論文	単	The Politics and Culture in the Sixth Century Sparta. A Reappraisal of M.I.Finley's Sixth-Century Revolution	<i>The Proceedings 9th Korea-Japan China Symposium on Ancient History of Europe, 21-24 October 2010</i>	全15p	平22. 10
論文	単	「スパルタとペリオイコイの法的軍事的関係」	『國學院雑誌』第111巻第6号 國學院大學	全16p	平22. 6

【平成21年度以前の主な研究業績等】 (5点まで)					
種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または該当ページ	発行年月
著書	単	『スパルタの国家構造の再検討——ペリオイコイ研究の視点から——』	科学研究費補助金(基盤研究(C)課題番号18520571)研究成果報告書	全173p	平21. 3
論文	単	「キュテラとキュテロディクス」	『國學院雑誌』第109巻第6号 國學院大學	全10p	平20. 6
論文	単	「西欧のアミュレットについて—古代ギリシア・ローマを中心に—」	『國學院大學紀要』第46巻 國學院大學	全25p	平20. 2
著書	共	『西洋古代史料集』第2版	東京大学出版会	全298p	平14. 4
著書	共	『岩波講座世界歴史4 地中海世界と古代文明』	岩波書店	全342p	平10. 6

【所属学会】日本西洋古典学会、日本西洋史学会、史学会、古代世界研究会、西洋史研究会、地中海学会

【最近5年間の学会等および社会における主な活動】

【教育活動の自己評価】

1年生前期向けの史学導入演習は、図書館の利用方法や文献検索方法に時間を割き、専門論文・専門書の読み方を指導している。またテキストに見える漢字のテストも適宜実施し、ノートチェックも行い、基礎学力の向上に努めている。基礎Bでは専門論文・専門書の理解力を高めることを主眼に各自に発表させ、それに基づく議論をしている。歴史のさまざまな理論についても毎回テーマを出し、調べた結果を発表させている。外書講読で毎回事前に翻訳を作成させ、授業時に校正したものを提出させてチェックして返却している。展開演習・応用演習では英文講読と、学生各自の研究テーマに関するレポートを柱に西洋史古代史・中世史研究の基礎形成と卒業論文作成に向けての応用力の涵養に努めている。レポートについても事前に報告者と面談して指導して指導している。また2・3年生には夏期休暇中に英語テキストを10頁程度翻訳してもらい、それに一部朱を入れて返却し、英語文献の読解力をつける試みをしている。また、研究テーマについて4000字程度のレポートを提出してもらい、表現力をつけると共に、論文読解力の涵養をはかっている。4年生には、上記の指導に加えて、適宜卒論指導をしている。そこでは、研究テーマの課題・問題点を明確に意識し、掘り下げた議論を展開すると共に、簡潔で明確な文章を書くように指導している。

【研究活動の自己評価】

古代ギリシア史研究、とりわけスパルタ史研究を主要フィールドとしている。我が国のスパルタ史研究では取り上げられなかった時代・テーマを取り上げ、学会に貢献していると自負する。近年はペリオイコイ共同体のありようを再検討することで、スパルタの国家構造を捉え直した。現在は、スパルタのエフォロイ制度を中心とした政治システムの通時的研究に着手している。また、並行して古代ギリシアの供犠について研究を進めている。従来は、動物犠牲を重視する見方と供犠後の平等な共食を重視する見方が有力であったが、これを批判し、供犠儀礼全体を一体のものとして捉える傾向が強まっている。現在、こうした研究動向の詳細を追っているところだ。

【職・氏名】准教授 矢部 健太郎 YABE Kentaro
 【学 位】博士(歴史学)(平成16年3月 國學院大學 文甲第60号)
 【本学就任】平成19年
 【略 歴】國學院大學文学部史学科卒業
 國學院大學大学院文学研究科日本史学専攻博士課程後期修了
 防衛大学校人文社会科学群人間文化学科講師
 【専門分野】室町・戦国・織豊期の政治史・公武関係史

【最近5年間の主な研究業績等】 [平成22～26年度] (10点まで)					
種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または該当ページ	発行年月
論文	単	「前田玄以の呼称と血判起請文―「民部卿法印」から「徳善院僧正」へ―	山本博文・堀新・曾根勇二編『豊臣政権の正体』 柏書房	pp.239-264	平26. 5
著書	単	『関ヶ原合戦と石田三成』	吉川弘文館	全253p	平26. 1
論文	単	「関白秀次の切腹と豊臣政権の動揺―秀吉に秀次を切腹させる意思はなかった―	『國學院雑誌』 第114巻第11号 國學院大學	pp.460-475	平25. 11
論文	単	「『源姓』徳川家への『豊臣姓』下賜―秀忠の叙任関係文書の検討から―	『古文書研究』 74号	pp.16-34	平24. 12
論文	単	「『御湯殿上日記』と秀次事件」	天野忠幸・片山正彦・古野貢・渡邊大門編『戦国・織豊期の西国社会』 日本史史料研究会	pp.747-780	平24. 10
論文	単	「『大かうさまくんきのうち』の執筆目的と秀次事件」	金子拓編『信長記』と信長・秀吉の時代』 勉誠出版	pp.147-191	平24. 7
著書	単	『豊臣政権の支配秩序と朝廷』	吉川弘文館	全300p	平23. 12
論文	単	「秀次事件と血判起請文・『掟書』の諸問題―石田三成・増田長盛連署血判起請文を素材として―	山本博文・堀新・曾根勇二編『消された秀吉の真実―徳川史観を越えて』 柏書房	pp.267-294	平23. 6
論文	単	「秀吉の小田原出兵と『清華成』大名」	『國學院大學紀要』 49号 國學院大學	pp.131-159	平23. 2
論文	単	「中世武家権力の秩序形成と朝廷～近衛府の任官状況をめぐって～」	『国史学』 200号 国史学会	pp.53-102	平22. 4

【平成21年度以前の主な研究業績等】 (5点まで)					
種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または該当ページ	発行年月
論文	単	「小早川家の『清華成』と豊臣政権」	『国史学』 196号 国史学会	全160p中 pp.63-98	平20. 12
論文	単	「東国『惣無事』政策の展開と家康・景勝―『私戦』の禁止と『公戦』の遂行―	『日本史研究』 509号 日本史研究会	pp.34-57	平17. 1
論文	単	「太閤秀吉の政権構想と大名の序列」	『歴史評論』 640号	pp.42-54	平15. 7
論文	単	「豊臣『武家清華家』の創出」	『歴史学研究』 第746号 歴史学研究会	pp.17-31	平13. 2
論文	単	「豊臣秀吉から天皇への使節」	『日本史研究』 459号 日本史研究会	pp.30-51	平12. 11

【所属学会】国史学会、戦国史研究会、歴史学研究会、日本史研究会、日本古文書学会、織豊期研究会

【最近5年間の学会等および社会における主な活動】

全日本剣道連盟東日本資料小委員会幹事(平17. 7～現在)、日本古文書学会編集委員(平20. 4～現在)、日本古文書学会運営委員(平22. 4～現在)、日本古文書学会評議員(平成26. 9～現在)、国史学会委員(平21. 6～平26. 5)

【教育活動の自己評価】

毎年30名を超える卒業論文のゼミ生を抱え、その指導が教育活動の重要な柱の1つとなる。充実した卒業論文を執筆するには史料収集と読解という基礎的な力が必要不可欠なので、コツコツと図書館に通い、辞書を引いて正確に現代語訳をするという基本的な作業の必要性を説き、4年生までの各学年次に史料読解を重視した報告の場を繰り返し与えている。加えて平成25年度には初めて大学院で講義を担当し、自身の最新の研究と今後の展望について整理する機会となった。また、修士論文の副査も初めて1名受け持った。なお、同年度には文学部の教務委員長・教務部委員として、学部全体の教育改善に努めた。

【研究活動の自己評価】

これまでは豊臣政権期、特に天正期の研究を中心としてきたが、近年は文禄・慶長期の研究にも関心を深めている。特に、豊臣政権末期の重要事件である「秀次事件」については、論文2本と単著の中で取り扱い、新聞・テレビなどでもコメントする機会があった。また、公武関係の分野では、平成24年度から『御湯殿上日記』の研究会を主催し、大学院生らとともに翻刻・校訂等の作業を継続的に行っている。

【職・氏名】助教 山崎 雅稔 YAMASAKI Masatoshi
 【学 位】修士(教育学)
 【本学就任】平成24年
 【略 歴】東京学芸大学大学院修士課程教育学研究科社会科教育専攻修了
 國學院大学大学院博士後期課程文学研究科日本史学専攻単位取得退学
 國學院大學21世紀COEプログラム支援研究員
 【専門分野】日本古代史

【最近5年間の主な研究業績等】 [平成22～26年度] (10点まで)					
種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または該当ページ	発行年月
翻訳・翻刻書	共	『日韓でいっしょに読みたい韓国史—未来に開かれた共通の歴史認識に向けて—』	明石書店	全213p	平26. 1
学会発表等	単	「日韓歴史共通教材の課題と教材案—前近代史分野—」	日韓国際シンポジウム報告集『日韓歴史共通教材の新たな地平を目指して—日韓歴史共通教材の射程—』 平成25年度科学研究費助成事業(基盤研究(B))「自国史を越えた歴史認識の共有をめざす日韓共通歴史教材の基礎的研究」(研究代表者:田中暁龍、課題番号25285249)	全47p中pp.15-30	平26. 1
辞書・事典等	共	『新編史料でたどる日本史事典』	東京堂出版	全332p	平24. 7
論文	単	藤原衛の境涯	『帝京大学外国語学部外国文学論集』第18号 帝京大学第2外国語部会	pp.159-181	平24. 2
論文	単	「日本の8世紀東アジア史研究の現状と課題」	李基東・延敏洙他『8世紀東アジアの歴史像』(東北アジア歴史財団企画研究51) 東北アジア歴史財団	pp.111-157	平23. 8
論文	単	「唐代登州赤山院の八月十五日節」	『史海』57号 東京学芸大学史学会	pp.1-11	平22. 6

【平成21年度以前の主な研究業績等】 (5点まで)					
種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または該当ページ	発行年月
学会発表等	単	「日本の中学・高校教育における自国史と世界史」	成均館大学東アジア歴史研究所国際シンポジウム「東アジアの自国史と世界史教育」		平21. 11
論文	単	「新羅国執事省牒からみた紀三津「失使旨」事件」	木村茂光編『日本中世の権力と地域社会』 吉川弘文館	pp.1-35	平19. 7
編著	共	日韓歴史共通教材『日韓交流の歴史—先史から現代まで—』	明石書店	全453p	平19. 3
論文	単	「甄萱政権と日本の交渉」(韓国語論文「甄萱政権と日本の交渉」)	韓国古代史研究会編『韓国古代史研究』第35号	pp.1-25	平16. 3
論文	単	「承和の変と大宰大式藤原衛四条起請」	歴史学研究会編『歴史学研究』第751号	pp.1-15	平13. 7

【所属学会】東京歴史学研究会、国史学会、唐代史研究会、歴史学研究会

【最近5年間の学会等および社会における主な活動】

【教育活動の自己評価】

学部の専門教育では、日本古代史の演習を担当して『日本書紀』の講読を通して学生個々の史料読解能力の向上を図った。正課の授業以外に、毎年、夏・春の2度合宿を行い、卒業論文作成に向けて指導するとともに、群馬県高崎市・東京都府中市の踏査活動、東京国立博物館・江戸東京博物館の見学を行うなど課外活動を通じた学習機会の確保も重視し、学生の見聞を広げるとともに多方面での能力開発を図った。また、文学部史学科の教務委員として、導入教育資料の作成を行うとともに、成績不振者等を対象とする修学面談を行い、対象学生の学びの質の向上に努めた。

【研究活動の自己評価】

科学研究費採択の「自国史を越えた歴史認識の共有をめざす日韓共通歴史教材の基礎的研究」(基盤研究B・課題番号25285249)に研究分担者として参加し、事務局を務めつつ、教材研究を行った。これに関連して、韓国通史教材図書の翻訳を行い、刊行した。國學院大學特別推進研究助成金を受けて「古代日本・新羅の対外関係の比較史的研究」を進めて関連史料の収集と年表の作成、及び国外調査を実施し、東アジア国際関係史の問題解明に努めた。また、8世紀東アジア史に関する研究の現状と課題の整理を行って国外で公表した。

【職・氏名】准教授 吉岡 孝 YOSHIOKA Takashi
 【学 位】文学修士
 【本学就任】平成18年
 【略 歴】國學院大學文学部史学科卒業
 法政大学大学院人文科学研究科日本史学専攻修士課程修了
 法政大学大学院人文科学研究科日本史学専攻博士課程単位取得満期退学
 【専門分野】日本近世史

【最近5年間の主な研究業績等】〔平成22～26年度〕（10点まで）					
種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または 該当ページ	発行年月
論文	単	「幕末維新期、藩邸をめぐる人の移動—伊予西条から渋谷へ—」	『結節点としての渋谷—江戸から東京へ—』 國學院大學研究開発推進センター	全134p中 pp.45-75	平26. 2
著書	共	『千駄ヶ谷五丁目遺跡3次報告』	四門	全270p中 pp.208-218	平25. 10
論文	単	「貝取村森田氏一件」からみた八王子千人同心の「自治」	『國學院雑誌』 第114巻10号 國學院大學	全125p中 pp.1-13	平25. 10
論文	単	「八王子千人組における月番所の成立とその意義」	『日本歴史』 第783号 日本歴史学会	全144p中 pp.35-51	平25. 8
論文	単	「八王子千人組における番組合の成立とその意義」	『國學院大學紀要』 第51号 國學院大學	全198p中 pp.99-120	平25. 1
論文	単	「荻生徂徠『政談』の構想と社会的実践の可能性」	『國學院雑誌』 第112巻第4号 國學院大學	全58p中 pp.1-14	平23. 4
論文	単	「藩邸からみた渋谷」	上山和雄編『歴史のなかの渋谷』 雄山閣	全346p中 pp.135-158	平23. 3
論文	単	「松崎慊堂をめぐる空間と人物」	上山和雄編『歴史のなかの渋谷』 雄山閣	全346p中 pp.159-180	平23. 3
論文	単	「ある開発批判言説の同時代認識と世界観—武蔵野の開発をめぐる—」	根岸茂夫・大友一雄・佐藤孝之・末岡照啓編『近世の環境と開発』 思文閣出版	全359p中 pp.29-48	平22. 12
論文	単	「吉宗政権における古式復興と儀礼」	『国史学』 第200号 国史学会	全287p中 pp.103-145	平22. 4

【平成21年度以前の主な研究業績等】（5点まで）					
種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または 該当ページ	発行年月
編著	単	『新編荷田春満全集』第10巻「国史」	おうふう	全484p	平21. 1
著書	共	『高尾山薬王院文書を紐とく』	ふこく出版	全231p中 pp.117-123, 189-192	平17. 6
著書	単	『江戸のバガボンドたち』	ぶんか社	全366p	平15. 12
著書	共	『小川町の歴史 通史編』上巻	小川町	全854p中 pp.725-746, 838-847	平15. 10
著書	単	『八王子千人同心』	同成社	全206p	平14. 12

【所属学会】日本史研究会、地方史研究協議会、国史学会、日本古文書学会、歴史学研究会、史学会

【最近5年間の学会等および社会における主な活動】

江戸川区文化財保護審議会委員(平22. 10～現在)、厚木市文化財保護審議会委員(平23. 4～現在)

【教育活動の自己評価】

演習科目では、個々の学生に史料を読ませて、それを考察する作業をさせている。史料はくずし字で書かれている古文書などを担当者と相談して適宜選択しているため、その解説も大きな要素である。また史学科においては卒業論文が必修であるため、それを念頭に入れて、先行研究の整理をさせ、問題点の抽出を行なわせている。実際の演習においては質疑応答を重視し、報告能力を向上させるとともに討論能力をも切磋琢磨させることを心掛けている。講義科目においては専門教科では毎回資料を作成し、教科書に代わってそれを説明している。教養科目の場合はパワーポイントを使用し興味を持たれる講義を心掛けている。

【研究活動の自己評価】

江戸幕府直臣である八王子千人同心に関する研究を推進した。当該分野はその身分的存在規定さえ明らかになってはおらず、それを明確に規定するとともに、その社会集団の社会的変容、具体的によれば平同心の地位向上に伴う自治的傾向を考察した。また渋谷学についての研究も進めた。具体的には現在の青山学院大学の地に上屋敷があった伊予西条藩に関する研究や、千駄ヶ谷五丁目遺跡に関わる考古学的考察を行なった。

【職・氏名】教授 吉田 恵二 YOSHIDA Eiji
 【学 位】文学士
 【本学就任】昭和55年
 【略 歴】京都大学文学部史学科卒業
 奈良国立文化財研究所平城宮跡発掘調査部(文部技官)
 【専門分野】日本古代及び中国古代の考古学

【最近5年間の主な研究業績等】 [平成22～26年度] (10点まで)					
種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または 該当ページ	発行年月
編著	共	『富士山:その景観と信仰・芸術』	國學院大學博物館		平26. 9
編著	共	『長野県安曇野市穂高古墳群2013年度発掘調査報告書』	『國學院大學文学部考古学実習報告』第50集 國學院大學考古学研究室		平26. 7
その他	単	講演「古代の鏡」	あげお歴史セミナー「古代鏡の世界」 上尾市教育委員会		平26. 6
編著	共	『長野県安曇野市穂高古墳群2012年度発掘調査報告書』	『國學院大學文学部考古学実習報告』第48集 國學院大學考古学研究室		平25. 7
編著	共	『長野県安曇野市穂高古墳群2011年度発掘調査報告書』	『國學院大學文学部考古学実習報告』第48集 國學院大學考古学研究室		平25. 7
編著	共	『長野県安曇野市穂高古墳群2010年度発掘調査報告書』	『國學院大學文学部考古学実習報告』第46集 國學院大學考古学研究室		平24. 7
論文	共	「祭祀考古学の方法と実践-伊豆半島・諸島における基層文化と神社の展開」	『モノと心に学ぶ伝統の知恵と実践』文部科学省私立大学学術研究高度化推進事業オープン・リサーチ・センター整備事業成果論集 國學院大學研究開発推進機構伝統文化リサーチセンター	pp.51-62	平24. 3
論文	単	「漢唐時期中国における儀礼・祭祀」	『祭祀儀礼と景観の考古学(「祭祀遺跡に見るモノと心」プロジェクト)』 國學院大學伝統文化リサーチセンター	pp.269-274	平24. 3
論文	単	「祭祀遺跡に見るモノと心-伝統文化リサーチセンター5年間の取り組み-」	『祭祀儀礼と景観の考古学(「祭祀遺跡に見るモノと心」プロジェクト)』 國學院大學伝統文化リサーチセンター	pp.349-353	平24. 3

【平成21年度以前の主な研究業績等】 (5点まで)					
種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または 該当ページ	発行年月
論文	単	「中国古代俗信遺物と我が国への波及」	『日本文化と神道』第2号(國學院大學21世紀COEプログラム「神道と日本文化の国学的研究発信の拠点形成」成果論文集) 國學院大學21世紀COEプログラム研究センター	全35p	平18. 2
論文	単	「土器製作技法から見た東アジア」	『國學院雑誌』第103巻第11号 國學院大學	全365p中 18p	平14. 11
論文	単	「漢長方形板石硯考」	『論苑考古学』 天山舎	pp.781-816	平5. 4
論文	単	「中国古代に於ける円形硯の成立と展開」	『國學院大學紀要』第30巻 國學院大學	pp.155-201	平4. 3
著書	共	『須恵器以後の窯業生産』	『岩波講座日本考古学』第3巻 岩波書店	pp.197-236	昭61. 3

【所属学会】考古学研究会、日本考古学協会、日本中国考古学会

【最近5年間の学会等および社会における主な活動】

多摩市文化財保護審議委員会委員(平元. 4～現在)、中国社会科学院考古研究所海外研究員(平12. 11～現在)

【教育活動の自己評価】

(逝去のため割愛)

【研究活動の自己評価】

(逝去のため割愛)

【職・氏名】教授 吉田敏弘 YOSHIDA Toshihiro

【学 位】文学修士

【本学就任】平成4年

【略 歴】京都大学文学部史学科(人文地理学専攻)卒業
京都大学大学院文学研究科(地理学専攻)修士課程修了
京都大学文学部助手(地理学教室)
大阪学院大学教養部助教(地理学担当)

【専門分野】人文地理学、歴史地理学、地図史

【最近5年間の主な研究業績等】 [平成22～26年度] (10点まで)					
種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または該当ページ	発行年月
論文	単	「絵図に描かれた荘園景観とその保全に向けて」	荘園の景観と絵図(2014年夏季特別展図録)和歌山市立博物館	全96p中 pp.84-8	平26. 7
評論・書評等	単	「『正保寺社絵図』という仮説—國學院大學図書館蔵『山門大絵図』によせて」	『國學院雑誌』第115巻第6号 國學院大學	全68p中 pp.32-33	平26. 6
調査・研究報告等	単	「伝統的農村景観の保全と活用の実践と課題」	平成24年度ふるさと・水と土保全対策事業『本寺地区小区画水田保全手法検討業務委託 報告書』 一関市・國學院大學歴史地理学教室	全218p中 pp.204-218	平24. 12
調査・研究報告等	単	「磐井川流域の伝統的農村景観と農業遺産—その保全に向けて」	平成23年度ふるさと・水と土保全対策事業『本寺地区小区画水田保全手法検討業務委託 報告書』 一関市・國學院大學歴史地理学教室	全109p中 pp.8-16	平24. 3
論文	単	「天正末年の中尊寺と骨寺村絵図—寺崎屋敷平山家文書について」	『國學院雑誌』第112巻第2号 國學院大學	全20p	平23. 2

【平成21年度以前の主な研究業績等】 (5点まで)					
種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または該当ページ	発行年月
著書	共	『歴史地理調査ハンドブック』	古今書院	pp.1-16, 152-156	平13. 5
論文	単	「中世地図史料と絵図」	石井正敏ほか編『今日の古文書学 第3巻中世』 雄山閣出版	pp.288-309	平12. 1
著書	共	『中世荘園絵図大成』	河出書房新社	pp.39-50, 106-114, 115-120, 157-161, 162-171, 31-48	平9. 5
論文	単	「中世絵図のランゲージ研究にむけて—その空間表現を中心に」	水津一朗先生退官記念事業会編『人文地理学の視圏』 大明堂	pp.233-244	昭61. 4
論文	単	「中世村落の構造とその変容過程—「小村=散居型村落」論の歴史地理学的再検討」	『史林』66巻3号 史学研究会	pp.80-146	昭58. 5

【所属学会】人文地理学会、歴史地理学会、国史学会、日本地理学会、史学研究会(京都)、日本国際地図学会

【最近5年間の学会等および社会における主な活動】

中世骨寺村荘園遺跡指導委員(平12. 10～現在)

【教育活動の自己評価】

学科再編に伴い歴史地理学専攻は「地域文化と景観」コースに統合された。これに伴い、従来の教育内容を多少拡充し、歴史的な観点から見た地域文化に関する関心を高めるための取り組みを行った。先ず1年次性に対する「史学導入演習」においては、近世における雪国の生活を著述した鈴木牧之『北越雪譜』をテキストに取り上げ、そこに語られているさまざまなトピックスに関する文献研究を指導し、学生に発表させている。文献研究に際しては、雑誌論文の検索とコピーを重視し、学術論文に接する機会を与えると共に、Powerpointを用いさせ、本格的な研究発表の手順を指導している。さらに新コースで新設された講義科目「環境史・災害史」では、通俗的な「気候と文明」論を論理的に批判し、受講生に科学的な環境史研究の重要性をアピールするとともに、過去においては日常的であった災害と復興のあり方が現代に至るまで大きく変化していることを印象づけるように考慮した。

その他の科目に関しては以前と同様であるが、東京近在の博物館における絵図展見学や、岩手県一関市における農業体験・地域調査実習など、校外での学習指導に力を入れ、教室のみでは実践できない研究指導の導入を心がけてきた。しかし、アルバイトなどで多忙な学生も少なくない中、こうした校外学習の参加率を高めてゆくための工夫も必要である。また卒業論文作成に関しても、就職活動との両立が困難な学生も少なくない。これらの学生に対し、適切な卒論指導を行うことにさらに努力する必要がある。

【研究活動の自己評価】

従来から引き続き実践している一関市本寺地区および磐井川流域の伝統的農村景観保全に関しては、平成24年度でひとまず完了し、報告書に成果と課題を総括することができた。現在では、①岩手県三陸地方における近代津波災害の復興過程に関する実証的研究、②近江国・尾張国における天正・寛文地震の被害と影響の実証的研究、などの災害史研究や、③紀伊国井上荘・?田荘絵図の地域史研究・景観保全への活用に関する研究、④山門大繪圖と近世寺社の幕府指図絵図に関する研究、などの絵図研究を併行して取り組んでいる。このうち、①と④に関しては研究成果がまとまりつつあり、論文発表が目前の状況である。②と③に関しては、今後も現地調査などを重ね、成果の公表に努める所存である。

文学部

【哲学科】

栗田義彦教授	……………	89
金杉武司准教授	……………	90
木原志乃准教授	……………	91
小池寿子教授	……………	92
小手川正二郎助教	……………	93
西村清和教授	……………	94
宮元啓一教授	……………	95

【職・氏名】教授 栗田 義彦 AWATA Yoshihiko

【学 位】文学修士

【本学就任】平成10年

【略 歴】國學院大學文学部哲学科卒業

東京都立大学大学院人文科学研究科哲学専攻博士課程単位取得満期退学

國學院女子短期大学(現・國學院大學北海道短期大学部) 助教授

山村女子短期大学(現・山村学園短期大学) 国際文化科教授

【専門分野】哲学、倫理学

【最近5年間の主な研究業績等】 [平成22～26年度] (10点まで)					
種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または該当ページ	発行年月
論文	単	「カント倫理学における道徳法則の妥当性」	『國學院雑誌』第111巻第11号 國學院大學	pp.282-291	平22. 11

【平成21年度以前の主な研究業績等】 (5点まで)					
種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または該当ページ	発行年月
論文	単	「臓器移植法の改正に関する一提言」	『國學院雑誌』第105巻第6号 國學院大學	全70p中 pp.1-16	平16. 6
論文	単	「普遍と個別－哲学概論の試み－」	『山村女子短期大学紀要』第3号	全302p中 pp.43-141	平3. 12
論文	単	「生命倫理学序説」	『國學院女子短期大学紀要』第6巻 國學院女子短期大学	全480p中 pp.157-224	昭63. 3
著書	共	『ドイツ観念論哲学の原理』	高文堂出版社	全198p中 pp.9-70	昭58. 4
著書	単	『習俗と倫理』	高文堂出版社	全189p	昭57. 2

【所属学会】日本哲学会、日本倫理学会、國學院大學哲学会、日本生命倫理学会

【最近5年間の学会等および社会における主な活動】

【教育活動の自己評価】

私の教育活動の中心は、言うまでもなく、本学における授業、つまり講義と演習である。

講義については、極力新しい知識を取り入れ、講義内容を充実させつつ、学生が理解しやすいように方策を模索している。その際見過ごせない重要な要素は話術である。しかし学生が理解しやすいように話すということは実に難しい。高度なテクニックが要求される。工夫と研鑽の日々である。

演習に関しては、学生の積極的参加を原則としている。まず次週に取り上げる課題を前以て提示し、一人の学生を指定しておいて演習時に調べてきた内容を発表してもらおう。その後、その発表に即して受講生全員で討論する。このような方法によって学生の哲学的・倫理的な問題意識を涵養し、合わせて論理的討論能力を高めようとしている。その際、特徴的なのは、学生たちに与えている課題が、最先端の研究者たちの論文であるということだ。これによって学生たちは、「今」の研究状況に直接的に触れるとともに、当該学問領域に関する前向きな関心を自らの内に喚起できているように思う。

【研究活動の自己評価】

現在、私自身の研究活動も終局に迫りつつあり、今まで獲得してきた幾多の知見を体系的に整理・統合する時期に来ている。いずれ一冊の書に集大成したく思っている。

【職・氏名】准教授 金 杉 武 司 KANASUGI Takeshi
 【学 位】博士(学術)(平成15年2月 東京大学 博総合第403号)
 【本学就任】平成25年
 【略 歴】東京大学大学院 総合文化研究科 広域科学専攻 科学技術基礎論大講座 博士課程 修了
 日本学術振興会特別研究員(PD)
 高千穂大学人間科学部人間科学科准教授
 【専門分野】西洋現代哲学、心の哲学

【最近5年間の主な研究業績等】 [平成22～26年度] (10点まで)

種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または該当ページ	発行年月
著書	共	『シリーズ新・心の哲学 I 認知篇』	勁草書房	全268p中 pp.167-206	平26. 5
著書	単	『解釈主義の心の哲学—合理性の観点から—』	勁草書房	全241p	平26. 4
論文	単	「クオリアの問題を物理主義は解決できるのか」	『國學院雑誌』 第115巻第2号 國學院大學	pp.1-15	平26. 2
論文	単	「行動科学の哲学—行動科学の多様性とインターフェース問題—」	『行動科学』 第51巻2号 日本行動科学学会	pp.135-142	平25. 3
論文	単	「自己欺瞞のパラドクスと自己概念の多面性」	『科学哲学』 第45巻第2号 日本科学哲学会	pp.47-63	平24. 12
論文	単	「行為の反因果説の可能性—意志の弱さの問題と行為の合理的説明—」	『哲学』 第63号 日本哲学会	pp.201-216	平24. 4
翻訳・翻刻書	共	『科学・技術・倫理百科事典』	丸善出版	全2656p	平24. 1
論文	単	「自己知・合理性・コミットメント—英語圏の心の哲学における自己知論の現在—」(特集 シンポジウム 現象学と一人称的経験の問題)	『現象学年報』 第27号 日本現象学会	pp.11-21	平23. 11
学会発表等	単	「反ヒューム主義的な信念・欲求モデルの可能性—意志の弱さの問題を手掛かりに—」	「信念／欲求」心理モデル研究会(平成21年-22年度科学研究費補助金「現代倫理学における「ヒューム主義」に関する哲学的研究」に基づく研究集会) 於:南山大学		平23. 3
学会発表等	単	「自己知への合理的実践的アプローチ—英語圏の心の哲学における自己知論の現在—」	日本現象学会研究大会シンポジウム 「現象学と一人称的経験の問題」 於:東京大学		平22. 11

【平成21年度以前の主な研究業績等】 (5点まで)

種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または該当ページ	発行年月
論文	単	「心的因果の問題とシューメイカーの性質の形而上学」	『科学基礎論研究』 第112号 科学基礎論学会	pp.39-48	平21. 11
著書	共	『岩波講座哲学05 心／脳の哲学』	岩波書店	全275p	平20. 5
著書	単	『心の哲学入門』	勁草書房	全220p	平19. 8
著書	共	『シリーズ心の哲学 I 人間篇』	勁草書房	全283p	平16. 7
論文	単	「心の哲学における解釈主義—命題的態度とは何か?—」(博士学位論文)	東京大学大学院総合文化研究科広域科学専攻		平14. 12

【所属学会】科学基礎論学会、日本科学哲学会、日本哲学会、哲学会(東京大学文学部哲学研究室)

【最近5年間の学会等および社会における主な活動】

科学基礎論学会 企画委員(平17. 6～平23. 3)、日本科学哲学会 評議員(平21. 11～現在)、
 日本科学哲学会 監事(平21. 11～現在)、日本科学哲学会 編集委員(平21. 12～現在)、
 日本科学哲学会 大会実行委員(平22. 1～現在)、科学基礎論学会 評議員・監事(平26. 4～現在)
 日本哲学会編集委員(平25. 6～現在)

【教育活動の自己評価】

授業は、演習2科目と講義3科目を担当している。1年生対象の演習科目「基礎演習 I」では、学生が哲学という学問領域への第一歩目をスムーズに踏み出せるように、さまざまな哲学的問題について対話形式で議論する入門書をテキストとしている。3・4年生対象の演習科目「哲学演習」では、専門的な哲学的議論を読み解き、また自ら構築する力を身につけるべく、現代英米哲学(分析哲学)の哲学者の専門的著作をテキストとしている。どちらの演習科目でも、学生が主体的に授業に臨むように、毎回の報告担当者を決めるだけでなく、履修者全員に「予習課題」に対する回答を事前提出させ、それを成績評価の対象の一つとしている。2年生以上対象の講義科目「哲学概論AB」では、「基礎演習 I」で議論したようなさまざまな哲学的問題について、入門レベルから中級レベルの内容を概説している。1年生以上対象の講義科目「倫理学AB」では、倫理学の入門レベルから中級レベルの内容を概説している。3・4年生対象の講義科目「哲学特殊講義IVAB」では、心の哲学や言語哲学の中級レベル以上の内容を掘り下げて解説している。いずれの講義科目でも、内容の区切りでの発言やリアクション・ペーパーの提出を成績評価の対象の一つとすることで学生の積極的な参加を促すと同時に、発言に回答するだけでなく、リアクション・ペーパーに対する回答プリントも作成し、双方向的な授業となることを目指している。

【研究活動の自己評価】

これまで現代英米哲学(分析哲学)における心の哲学を研究領域として、主に、信念や欲求など「命題的態度」と呼ばれる心的状態を、概ね合理的であることをその本質とするものとして理解する「解釈主義」の擁護を試みてきた。特に過去5年間は、博士論文「心の哲学における解釈主義」(2002年提出)で扱った「自己知」や「不合理性」などの問題について改めて考察し、それを単著『解釈主義の心の哲学—合理性の観点から—』(2014年刊行)にまとめた。また最近では、「クオリア」と呼ばれる心の特徴を物理主義的世界のうちに位置づけることができるかという「クオリア(意識)の問題」について、先行研究を整理し、自らの考えを定めるべく考察している。

【職・氏名】准教授 木原志乃 KIHARA Shino

【学 位】博士(文学)(平成15年7月 京都大学 第257号)

【本学就任】平成17年

【略 歴】関西大学文学部哲学科卒業

京都大学大学院文学研究科修士課程哲学専攻(西洋哲学史)修了

京都大学大学院文学研究科博士後期課程思想文化学専攻(西洋哲学史)研究指導認定退学

【専門分野】西洋古代哲学、古代ギリシア医学思想史

【最近5年間の主な研究業績等】 [平成22～26年度] (10点まで)

種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または該当ページ	発行年月
論文	単	「医学の祖ヒポクラテスと患者の予後の洞察」	『環境と健康』27 (公財)体質研究会(公財)ひと・健康・未来研究財団	pp.150-160	平26.6
翻訳・翻刻書	共	『新版 アリストテレス全集』第七巻所収「氣息について」	岩波書店	全560p中 pp.427-474, 519-530	平26.2
学会発表等	単	「氣息について」(<i>De spiritu</i>)におけるプネウマ概念	日本精神医学史学会		平25.11
学会発表等	単	「医学の祖 ヒポクラテスと患者の予後の洞察」	いのちの科学フォーラム(公財)体質研究会(公財)ひと・健康・未来研究財団		平25.6
学会発表等	単	「ヒポクラテス医学における「精神の病い」」	日本精神医学史学会		平24.10
著書	共	『西洋哲学史I——「ある」の衝撃からはじまる』所収「エンペドクレスとアナクサゴラス」	講談社選書メチエ	全456p中 pp.91-140	平23.10
論文	単	「ヘラクレイトスのダイモーンと魂」	『國學院雑誌』第111巻第11号 國學院大學	pp.76-89	平22.11
著書	単	『流転のロゴス——ヘラクレイトスとギリシア医学』	昭和堂	全330p	平22.3

【平成21年度以前の主な研究業績等】 (5点まで)

	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または該当ページ	発行年月
翻訳・翻刻書	共	『古代ギリシア・ローマの哲学 ケンブリッジ・コンパニオン』所収「哲学と科学」	京都大学学術出版会	全546p中 pp.389-428	平21.7
翻訳・翻刻書	共	『ソクラテス以前の哲学者たち』所収「ヘラクレイトス」	京都大学学術出版会	全628p中 pp.237-278	平18.11
翻訳・翻刻書	共	『ヒポクラテスとプラトンの学説』1	京都大学学術出版会	全321p中 pp.114-317	平17.10
論文	単	「ヘラクレイトスの魂論—断片36における魂概念の生理学的解釈をめぐって—」	『西洋古典学研究』50 日本西洋古典学会	pp.12-23	平14.3
論文	単	「プネウマの生理学—アリストテレスとギリシア医学の関連から—」	『アルケー・関西哲学会年報』8 関西哲学会	pp.35-46	平12.7

【所属学会】古代哲学会、関西哲学会、日本西洋古典学会、日本科学史会、日本精神医学史学会、ギリシャ哲学セミナー、日本哲学会、日本医学哲学・倫理学会

【最近5年間の学会等および社会における主な活動】

ギリシャ哲学セミナー会計監査(平22.4～平23.3)

【教育活動の自己評価】

西洋古代哲学・古典学に関するこれまでの教育の実践において心掛けてきたのは、原典研究や文献学に重きを置きつつも、歴史や言語の狭隘な理解にとどまることがないように、様々な文化的・社会的背景との繋がり、および現代的な諸問題との繋がりにも配慮しながら、西洋古代の思想家たちによる根本洞察を読み解くということである。今後もそのような哲学教育を通して、学び手が自らの立ち位置を再確認し、さらに現代社会が抱える環境倫理や生命倫理などの深刻な問題を、より根源的および鳥瞰的に考察する力を養っていけるように力を注ぎたい。

教育活動における具体的な工夫としては、学生が各自関心を持った点を再確認できるように、また豊富な資料に基づいて知見を広められるように、教材用のレジュメプリントを丁寧に作成して配布し、それに即して講義を進めるように努め、さらに時にはレポート添削など学生の個々の理解度に応じてインタラクティブな授業形式を取り入れ、とりわけ改善すべき点については、学生の声に真摯に耳を傾けるよう努めた。講義科目や導入教育科目に関しては板書や映像資料を効果的に用いつつ、学習の手助けになるものを意識的に取り入れてきた。演習形式の授業では、学生たちの活発な討論を導き、自由な発言の場を通しての学びの相乗効果をサポートした。

【研究活動の自己評価】

古代ギリシア哲学と医学の対立・連携関係の中で魂概念の成立と変容の歴史を探究することを研究目的としてきた。とりわけ魂の物質的基盤を説明するための「四体液理論」および「プネウマ理論」の輪郭を描き出すことを目指した。

具体的活動としては、博士論文およびそれ以降の研究論文をとりまとめて単著として出版した。また、ガレノスの翻訳を引き続き行いながら、アリストテレス哲学と医学思想史との関連において重要な文書『氣息について』を翻訳した。さらに、精神医学思想および健康や科学についての国内外の学会・フォーラム等に積極的に参加し、専門分野の視野を広げて様々な研究分野の人々との意見交換を通して自らの研究を深めてきた。

【職・氏名】教授 小池 寿子 KOIKE Hisako

【学 位】文学修士

【本学就任】平成10年

【略 歴】お茶の水女子大学文教育学部哲学科卒業

お茶の水女子大学大学院人間文化研究科博士課程単位取得満期退学

文化女子大学家政学部生活造形学科講師、助教授

【専門分野】西洋中世美術、死の図像学

【受賞歴等】平成11年度 文化庁芸術選奨文部大臣新人賞『死をみつめる美術史』

(ポーラ文化研究所平11・10、ちくま学芸文庫平18・10)

【最近5年間の主な研究業績等】 [平成22～26年度] (10点まで)

種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または 該当ページ	発行年月
論文	単	「ヨーロッパ中世に響く死者の声」	『人文知2死者との対話』 東京大学出版会	全227p中 pp.63-90	平26. 11
論文	単	「ラ・シェーズ・ディユ修道院聖堂壁画「死の舞踏」についての考察」	『國學院雑誌』第115巻第11号 國學院大學	全376p中 pp.55-78	平26. 11
その他	単	監修「ヒエロニムス・ボ斯特集」	『芸術新潮』9月号 新潮社	全175p中 pp.12-87	平26. 9
評論・ 書評等	単	「2013年展覧会レビュー」	『宗教と現代がわかる本2014』 平凡社	全291p中 pp.253-259	平26. 3
その他	共	座談会「中世における記憶と忘却」	『西洋美術研究 記憶と忘却』 No.17 三元社	全251p中 pp.8-28	平25. 11
評論・ 書評等	単	「2012年展覧会レビュー」	『宗教と現代がわかる本2013』 平凡社	全293p中 pp.254-263	平25. 3
論文	単	「身体をめぐる断章 その17 心臓という墓」	Spazio No.70	(WEB)	平23. 9
著書	単	『内臓の発見』	ちくま選書	全269p	平23. 5
論文	単	「生と死の邂逅-「三人の死者と三人の生者」初期作品の伝播をめぐって」	『國學院雑誌』第111巻第11号 國學院大學	全363p中 pp.103-121	平22. 11
翻訳・ 翻刻書	共	エリー・フォール『美術史2 中世美術』	国書刊行会	全433p.中 pp.241-433	平22. 5

【平成21年度以前の主な研究業績等】 (5点まで)

種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または 該当ページ	発行年月
著書	単	『死の舞踏への旅-踊る骸骨たちをたずねて』	中央公論新社	全219p	平22. 2
論文	単	「死の舞踏の成立と伝播」	『死生学年報2009』 東洋英和女子学院大学死生学研究 所編	全230p中 pp.97-127	平21
編著	共	「週刊 世界の美術館」	講談社	全80冊	平21・4～ 22・3
解説・ 解題等	共	「特集ヴィーナス百選」	『芸術新潮』4月 新潮社	全256p.中 pp.16-148	平20. 4
論文	単	「キリスト教美術に見る靈魂観-古代世界からキリスト教中世へ」	『明治聖徳記念学会紀要』特集号 復刊第44号 明治聖徳記念学会	全510p中 pp.240-257	平19. 11

【所属学会】美術史学会、日仏美術学会、地中海学会、西洋中世学会、美学会

【最近5年間の学会等および社会における主な活動】

美術史学会常任委員(平24～現在)、地中海学会常任委員(平11～現在、平24. 6～平26. 6、事務局局長)、西洋中世学会常任委員(平21～現在、平24. 6～平25. 6 副会長)、日仏美術学会常任委員(平11～現在)、公益財団法人吉野石膏美術財団理事(平20. 4～現在)、一般財団法人大塚美術財団評議員(平25. 12～現在)、日本学術会議会員(平26. 8～現在)

【教育活動の自己評価】

学部では、美術史という未経験の分野について学生の関心を促すために基礎的な知識を講義する一方、実際の展覧会活動への積極的な参加を求め、レポートによる評価を行っている。演習においては各自の選んだテーマを卒業論文へと発展させるために発表とその文章化を徹底的に指導している。大学院史学専攻美学美術史コースは立ち上がってから5年経過し、美術史学会、地中海学会大会の國學院での開催、各種研究会、海外招聘教授講演会などを開催し、大学院生の自覚を促すとともに、積極的な学会発表を勧めている。國學院大學に美学美術史あり、との評価は定着し、修了生の就職率も7割となっており、今後は美術館への就職をより推進する所存である。

【研究活動の自己評価】

大学院が立ち上がってからは、大学院生指導とその口頭発表および論文指導に相応の時間を要している一方、学会での責務、美術財団等の役職に多忙を極めているが、ようやく一段階を経たと考えている。自身の研究テーマである美術を通じた死生学研究の集大成に向けて、各種出版活動の再開を進めている。来年度は美術全集2種の刊行、歴史叢書の刊行などを控え、その中で死生学研究の完成を目指している。

【職・氏名】助教 小手川正二郎 KOTEGAWA Shojiro

【学 位】博士(哲学)(平成24年11月 慶應義塾大学 甲第3759号)

【本学就任】平成26年

【略 歴】慶應義塾大学大学院文学研究科哲学倫理学専攻(哲学)後期博士単位取得退学
日本学術振興会特別研究員(PD)
慶應義塾大学文学部人文社会学科非常勤講師

【専門分野】フランス近現代哲学、現象学

【最近5年間の主な研究業績等】 [平成22～26年度] (10点まで)

種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または該当ページ	発行年月
論文	単	「レヴィナスにおける他人 (autrui) と〈他者〉 (l'Autre) ——『全体性と無限』による「暴力と形而上学」への応答」	『哲学』第65号 日本哲学会	pp.167-181	平26. 4
論文	単	「他人を「理解」すること——レヴィナスの理性論序説」	『人文』第12号 学習院大学	pp.25-39	平26. 3
著書	共	『顔とその彼方——レヴィナス『全体性と無限』のプリズム』	知泉書館	全234p	平26. 2
学会発表等	単	「レヴィナス『全体性と無限』における現象学的方法と存在論的言語——「転回」解釈への一批判——」	日本現象学会 名古屋大学		平25. 11
学会発表等	単	「レヴィナスにおける「倫理」の意味——レヴィナスは「他者への暴力」を批判したのか」	日本倫理学会 愛媛大学		平25. 10
論文	単	「レヴィナスの「知覚の現象学」——『全体性と無限』におけるメルロ＝ポンティとの対話」	『メルロ＝ポンティ研究』第17号 メルロ＝ポンティサークル	pp.66-77	平25. 9
学会発表等	単	「いかにして自己の内なる良心に目覚めるのか——ハイデガーのカント解釈の射程と問題」	ハイデガーフォーラム 関西大学		平25. 9
学会発表等	単	「レヴィナスにおける他人 (autrui) と〈他者〉 (l'Autre) ——『全体性と無限』による「暴力と形而上学」への応答」	日本哲学会 お茶の水女子大学		平25. 5
学会発表等	単	「人格と理性——レヴィナスの人間主義」	日本哲学会公募ワークショップ「理性をもつ動物」とは誰か？——人格概念への現象学のアプローチ」提題 お茶の水女子大学		平25. 5
学会発表等	単	« Le tiers me regarde dans les yeux d'autrui » : qui est le « tiers » chez Emmanuel Levinas ?	ASPLF		平25. 4

【平成21年度以前の主な研究業績等】 (5点まで)

種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または該当ページ	発行年月
論文	単	L'interiorité et la choseité du sujet : le cartésianisme lévinassien	『フランス哲学思想研究』第15号 日仏哲学会	pp.113-122	平22
論文	単	「偶因的表現と無意義性——『論理学研究』における〈私〉をめぐる一考察——」	『現象学年報』第25号 日本現象学会	pp.79-88	平21
翻訳・翻刻書	単	エドワード・S・ケイシー、小手川正二郎訳、「境界線と境界地帯——環境のうちへ切り込む——」	『現代思想 総特集メルロ＝ポンティ』 青土社	pp.322-346	平20. 12
論文	単	Epoché and Teleology : The Idea of Philosophy as 'Infinite Task' in Husserl	慶應義塾大学グローバルCOE成果報告書 vol. 1	pp.441-450	平20. 3
論文	単	「顔と偶像——レヴィナスにおける哲学と芸術(序論)——」	『フランス哲学・思想研究』第13号 日仏哲学会	pp.108-117	平20

【所属学会】日本哲学会、日本現象学会、日仏哲学会、新プラトン主義協会、メルロ＝ポンティサークル

【最近5年間の学会等および社会における主な活動】

【教育活動の自己評価】

演習科目ではデカルト『省察』、ハイデガー『存在と時間』を取り上げ、個々の学生の理解力・発表能力の向上に努めた。その際、『省察』の「反論と答弁」等を手掛かりに、反論を想定したうえで議論の水準を高めることを目指した。また「応用倫理学」では、現代において問題となっている様々な事柄(中絶、フェミニズム、動物の権利等)を取り上げ、具体的問題に対する哲学的議論の意義について学生自身が考えられる形での講義を試みた。「心性と思想」では、現象学的観点から自らが体験した事象や感情を分析する手法を学生に学んでもらい、体験に根ざしつつより厳密な議論ができるよう指導した。

【研究活動の自己評価】

E・レヴィナスをはじめとするフランス現象学の研究を中心に進めた。特に、レヴィナスの議論を他者論として読む従来の支配的読解に対して、他人 (autrui) と〈他者〉 (l'Autre) という概念の相違を綿密に検討し、レヴィナスの他人論に光をあてる研究を試み、日本哲学会等で発表した。また、恥や共感といった感情についての現象学的研究に着手し、「フランス現象学の新局面とその展開可能性」(若手研究B)の研究代表者として、フランス現象学の具体的な検討可能性を探ることに努めた。

【職・氏名】教授 西村清和 NISHIMURA Kiyokazu
 【学 位】博士(文学)(平成22年10月 東京大学 第17419号)
 【本学就任】平成25年
 【略 歴】東京大学大学院人文科学研究科美学芸術学専攻 博士課程単位取得退学
 埼玉大学教養学部教授
 東京大学大学院人文社会系研究科教授
 【専門分野】美学芸術学／芸術哲学、フィクション論、イメージ論、環境美学
 【受賞歴等】サントリー学芸賞(平成2年)

【最近5年間の主な研究業績等】 [平成22～26年度] (10点まで)					
種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または該当ページ	発行年月
論文	単	「感情のトポグラフィー」	『國學院雑誌』第115巻第6号 國學院大學	pp.1-16	平26. 6
論文	単	「美的義務論——〈美的〉と〈倫理的〉をめぐって——」	『哲学』第132集 慶應義塾大学・三田哲学会	pp.63-91	平26. 3
論文	単	「プラスチックの木でなにが悪いのか」	『シェリング年報』第21号 日本シェリング協会	pp.55-65	平25. 11
論文	単	「広告ポスターのレトリック」	『美術フォーラム21』Vol. 27	pp.28-33	平25. 5
論文	単	「〈美学＝感性学〉における快と感情」	『美学芸術学研究』30 東京大学美学芸術学研究室	pp.295-322	平24. 3
論文	単	The Aesthetics of Smell and Taste for the Appreciation of Landscape	JTLA(Journal of the Faculty of Letters, The University of Tokyo. Aesthetics) vol.36	pp.27-40	平24. 3
編著	共	『日常性の環境美学』	勁草書房	pp.3-24	平24. 3
著書	単	『プラスチックの木でなにが悪いのか』	勁草書房	全432p	平23. 12
論文	単	The Aesthetics of Abject Art	JTLA vol.35	pp.13-25	平23. 3
論文	単	「〈内なる自然〉の美学—醜をめぐって」	『美学芸術学研究』29 東京大学美学芸術学研究室	pp.85-116	平23. 3

【平成21年度以前の主な研究業績等】 (5点まで)					
種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または該当ページ	発行年月
著書	単	『イメージの修辞学—ことばと形象の交叉』	三元社	全542p	平21. 11
著書	単	『視線の物語・写真の哲学』	講談社	全282p	平9. 6
著書	単	『現代アートの哲学』	産業図書	全266p	平7. 10
著書	単	『フィクションの美学』	勁草書房	全329p	平5. 3
著書	単	『遊びの現象学』	勁草書房	全354p	平元.5

【最近5年間の学会等および社会における主な活動】

美学会 会長(平19. 10～平22. 10)、大学評価・学位授与機構学位審査委員(美術部会)(平12. 4～平24. 3)、
 日本学術会議連携会員(哲学委員会)(平17. 10～平23. 9)、藝術学関連学会連合会会長(平21. 7～現在)、
 日本学術会議会員(哲学委員会)(平23. 10～現在)

【教育活動の自己評価】

学部では「基礎演習II」、「美学芸術学演習」、「美学」、「美学芸術学特殊講義」を担当し、また大学院では「美学研究・美学特殊研究」を担当している。また学部では「演習・卒業論文」、大学院では「論文指導演習」を担当している。

【研究活動の自己評価】

これまでは、現代アートの哲学、フィクション論、写真の哲学、イメージの修辞学、環境美学などを論じてきたが、近年は感情の哲学をテーマに、科研費「〈美学＝感性学〉における快と感情」の交付をえて、感情の分析哲学から現象学への架橋をめざしてあらたな研究領域を開拓している。

【職・氏名】教授 宮元 啓一 MIYAMOTO Keiichi

【学 位】博士(文学)(平成9年9月8日 東京大学 第13488号)

【本学就任】昭和61年

【略 歴】東京大学文学部印度哲学印度文学科卒業

東京大学大学院人文科学研究科印度哲学専攻課程博士課程単位取得満期退学

日本学術振興会奨励研究員

【専門分野】インド哲学、仏教学、武士道研究

【受賞歴等】日本印度学仏教学会賞(昭和58年6月)

【最近5年間の主な研究業績等】 [平成22～26年度] (10点まで)					
種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または 該当ページ	発行年月
著書	単	『ことばの力と語り得ぬもの—インド思想史仏教史の根底的理解のために』	RINDAS伝統思想シリーズ22 龍谷大学現代インド研究センター	全20p	平26. 12
著書	単	『インドにおける唯名論の基本構造』	RINDAS伝統思想シリーズ19 龍谷大学現代インド研究センター	全17p	平26. 8
論文	単	「インドの言霊思想—ヴェーダから初期大乘仏教まで」	『國學院雑誌』第114巻第4号 國學院大學	pp.15-25	平25. 4
論文	単	「一元論は可能か?—ヴェーダーンタ学派とヴァイシェーシカ学派の論争」	『國學院雑誌』第113巻第1号 國學院大學	pp.1-7	平24. 1
著書	単	『インド最古の二大哲人 ウッターラカ・アールニとヤージュニャヴァルキヤ』	春秋社	全160p	平23. 3
論文	単	「一切空は論証できるか?—龍樹の場合」	『國學院雑誌』第111巻第11号 國學院大學	pp.185-190	平22. 11

【平成21年度以前の主な研究業績等】 (5点まで)					
種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または 該当ページ	発行年月
著書	単	『ブッダのことば』	春秋社	全232p	平21. 10
著書	単	『ヴァイシェーシカ・スートラ』	臨川書店	全260p	平21. 7
著書	単	『インドの「多元論哲学」を読む—プラシヤスタパーダ『パダールタダルマ・サンクラハ』』	春秋社	全214p	平20. 5
著書	単	『インドの「二元論哲学」を読む—イーシュヴァラクリシュナ『サーンキヤ・カーリカー』』	春秋社	全203p	平20. 4
著書	単	『インドの「一元論哲学」を読む—シャンカラ『ウパデーシャサーハスリー』散文篇』	春秋社	全204p	平20. 3

【所属学会】日本印度学仏教学会、インド思想史学会、日本仏教学会、仏教思想学会

【最近5年間の学会等および社会における主な活動】

【教育活動の自己評価】

学生たちによくわかるように手を換え品を換え説明に努力している。

【研究活動の自己評価】

学界の最先端を切り拓いてきたことに自信を持っている。

文学部

【教職課程】

柿沼秀雄	教授	99
斉藤こずゑ	教授	100
齋藤智哉	准教授	101
高橋大助	教授	102
高山実佐	准教授	103
田嶋一	教授	104

【職・氏名】教授 柿沼秀雄 KAKINUMA Hideo

【学 位】文学修士

【本学就任】平成3年

【略 歴】東京都立大学人文学部人文科学科卒業

東京都立大学人文科学研究科教育学専攻博士課程単位取得満期退学

東京都立大学人文学部助手

【専門分野】国際教育、比較教育

【受賞歴等】佐藤謙三先生記念賞(平成7年)

【最近5年間の主な研究業績等】 [平成22～26年度] (10点まで)

種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または該当ページ	発行年月
論文	単	「教科書を使うとはどういうことかー中学社会・歴史分野の事例から」	『國學院大學教育学研究室紀要』第48号 國學院大學文学部教育学研究室	全92p中 pp.13-25	平26. 2
辞書・事典等	共	アパルトヘイトapartheid、フレイレFreire, Paulo	日本比較教育学会編『比較教育学事典』 東信堂	全424p	平24. 6
論文	単	「藍染めが開く教育の世界ータイ・教育ワークショップ2011ー」	『國學院大學教育学研究室紀要』第46号 國學院大學文学部教育学研究室	全210p中 pp.137-146	平24. 2
翻訳・翻刻書	単	「タイ森林管理史の分水嶺」	『國學院大學教育学研究室紀要』第45号 國學院大學文学部教育学研究室	全179p中 pp.157-177	平23. 2

【平成21年度以前の主な研究業績等】 (5点まで)

種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または該当ページ	発行年月
論文	単	「読み書きの風景と教育の原理ー里山づくりプロジェクトのフィールドからー」	『國學院大學教育学研究室紀要』43号 國學院大學文学部教育学研究室	全313p中 pp.185-195	平21. 2
論文	単	「森の教育学序論」	『國學院大學教育学研究室紀要』第41号 國學院大學文学部教育学研究室	全222p中 pp.117-130	平19. 2
論文	単	「シンポジウム:国際教育研究の課題と展望ー第三世界教育研究の立場から」	『国際教育』第11号 日本国際教育学会	pp.13-22	平17. 11
論文	単	「タイ東北地方スタディーツアーの14年」	『國學院雑誌』第103巻第11号 國學院大學	pp.58-71	平14. 11
論文	単	「イギリス委任統治期タンガニーカの植民地学校史」(1)(2)	『國學院大學教育学研究室紀要』第26、27号 國學院大學教育学研究室	26号; pp.21-37 27号; pp.56-66	平4.2 平5.2

【所属学会】日本教育学会、日本比較教育学会、日本国際教育学会、日本植民地教育史研究会

【最近5年間の学会等および社会における主な活動】

岩手県紫波町森林ボランティア・ツアー(平16. 9～現在)、日タイ草の根教育交流(平18. 8～現在)、

調布市西部公民館主催 講座:人間塾(9.19)に参加(平22. 9)

【教育活動の自己評価】

フィールドワークおよび直接体験を組み込んだ教育活動を展開した。この教育方法は、環境と地域をテーマとする総合演習ではH24年度まで、社会・地理歴史科教育法などでは現在に至るまで続けている。知識伝達型授業が形骸化する大学教育の現在にあって人間と社会と歴史の現場に降り立った学びを組織し直すことは、たんなる「授業技術の開発」の彼方を見据えるFDの根幹を形づくるものである。その意味から、正規の授業時間外で計画立案する「里山づくり」プロジェクトや東北タイでの「教育ワークショップ」の活動に毎年継続的に取り組んでおり、その成果は各年度ごとの報告文集にまとめられている。

【研究活動の自己評価】

環境循環型社会をつくる今日的課題ならびに環境教育と文化に関する論考と翻訳などに取り組み、その成果をH23年、24年に発表してきた。それらはこの10数年来進めてきたアグロフォレストと森を主題とする文化・教育論研究の一部である。そのまとめにはなお数年は要する。タンガニーカを中心とする植民地学校史の比較研究は中断が続いており、さらに10年を見込んだライフワークになる見込みである。それに代わり、中等学校での歴史の授業をいかに創るか、という関心から、主たる教材としての教科書の批判的検討を改めて行い、そのはじめの一歩を論文化した。

【職・氏名】教授 齊藤 こずゑ SAITO Kozue

【学 位】教育学修士

【本学就任】昭和56年

【略 歴】東京女子大学文理学部心理学科卒業

東京大学大学院教育学研究科教育心理学専攻博士課程単位取得満期退学

【専門分野】発達心理学(コミュニケーション発達、映像発達研究、研究倫理)

【最近5年間の主な研究業績等】 [平成22～26年度] (10点まで)

種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または 該当ページ	発行年月
論文	単	「子どものフィールド参与観察における倫理」	『質的心理学フォーラム』第6号 日本質的心理学会	pp.26-33	平26. 10
学会発表等	単	「映像メディアにおける発達表象の構成」	日本発達心理学会大25回大会 於 京都大学	p.289	平26. 3
論文	単	「子どもの発達と記述メディア」	『國學院雑誌』第115巻第1号 國學院大學	全62p中 pp.1-17	平26. 1
学会発表等	単	「発達記述メディアの構成する育児支援距離の機能」	日本発達心理学会第24回大会 於 明治学院大学	p.91	平25. 3
学会発表等	単	「倫理意識向上に関する一具体策～倫理規程作成～」倫理委員会企画講習会Eシンポジウム 音楽療法における「倫理意識とリスクマネジメント力」の向上を目指して	講習会E シンポジウム倫理委員会企画 日本音楽療法学会近畿支部第11回近畿学術大会 於 大阪音楽大学	全200p中 pp.23-40	平25. 3
学会発表等	単	「発達ナラティブにおける表象媒体と場の変容の効果」	日本発達心理学会第23回大会 於 名古屋大学	p.160	平24. 3
著書	共	「第18章 発達研究における倫理」	発達科学ハンドブックシリーズ2研究法と尺度 日本発達心理学会[編] 岩立志津夫・西野泰広[責任編集]新曜社	全330p中 pp.230-246	平23. 11
学会発表等	単	「育児ブログにおける映像とブロガーの発達観」	日本心理学会第75回大会発表論文 於 日本大学	p.995	平23. 9
著書	共	「4、多文化・多言語の保護者への支援」	藤崎真知代・大日向雅美 編著「シリーズ 臨床発達心理学・理論と実践」2 育児のなかでの臨床発達支援 第5章 保護者の特性に応じた育児支援 ミネルヴァ書房	全246p中 pp.197-205	平23. 3
学会発表等	単	「映像ナラティブとしての映像実践の特性分析」	日本発達心理学会第22回大会発表論文集 22 於 東京学芸大学	全694p中 p.134	平23. 3

【平成21年度以前の主な研究業績等】 (5点まで)

種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または 該当ページ	発行年月
論文	単	「映像発達研究法の可能性：フィールドにおける洞察を観る」	日本発達心理学研究 第20巻第1号 日本発達心理学会	pp.42-54	平21. 4
論文	単	「発達研究・教育の質的技法としての映像メディア・リテラシー(1)」	『國學院大學教育学研究室紀要』第42号 國學院大學教育学研究室	pp.155-185	平20. 2
論文	単	「『倫理的展開』に心理学を活かすには?—研究者倫理の表裏」	『國學院大學教育学研究室紀要』第43号 國學院大學教育学研究室	pp.229-239	平20. 2
論文	単	「子ども主体の言語発達研究」	日本児童研究所編『児童心理学の進歩』2003年版vol.42「特別論文」 金子書房	全338p中 pp.253-285	平15. 6
論文	単	「実践のための研究、研究のための実践：実践者と研究者の共同研究を可能にする媒介手段としてのAV機器」	石黒広昭編『AV機器をもってフィールドへ：保育・教育・社会的実践の理解と研究のために』 新曜社	全199p中 pp.145-171	平13. 9

【所属学会】日本教育心理学会、日本心理学会、日本保育学会、日本発達心理学会、日本質的心理学会、

Society for Research in Child Development、Society for the Study of Childhood in the Past、

法と心理学会、アメリカ文化人類学会、日本臨床発達心理士会、Royal Anthropological Institute Of Great Britain And Ireland

【最近5年間の学会等および社会における主な活動】

日本質的心理学会機関紙編集委員(平22. 4～現在)、法と心理学会機関紙編集委員(平19. 4～現在)

日本心理学会 倫理規定検討委員(平19. 10～平24. 6)、

臨床発達心理士Certificate of Clinical Developmental Psychologist(第00418号)(平15. 4～現在)

【教育活動の自己評価】

教育内容・方法に関しては、今日の大学生の資質の多様化の中で、教育の高い質を確保するために教育内容・方法の工夫に積極的に取り組んでいる。特に生涯発達心理学という専門分野の観点から、教職課程の「発達と学習」、「教育実習事前事後指導」、「介護等体験実習」などの指導において、学生自体の生涯発達の省察と重ねながら、学生が主体的・自律的学習を実践できるような教育方法をデザインしている。それは個別領域の知識修得に加え、学生の日常や将来の職業に活用できる教養と総合的な判断力を培い、人間性を育むことを目標としている。そのために、第一に、受動的な教授学習型のデザインではなく学生のグループ活動による課題解決型デザインを採用しており、その活動に参加する中で「教職」に欠かせない知識修得と他者との協同などの資質の養成をクラス全体で推進していく。第二に、このような学生のアクティブ・ラーニングは、本授業実践にも回帰的に適用され、毎回の学生による授業評価は本授業内容・方法の改善のために採用される。第三に、大学教育に求められている、授業時間外の学修時間、すなわち授業の事前の準備・事後の復習が伴うデザインによって、学生が教室外での自主的な学修を自律的に行う工夫している。授業各回の詳細な授業内容や授業外の学修に関する具体的な指示と学生によるフィードバックは、K.SMAPPYの各種機能を有効活用することにより果たされている。

【研究活動の自己評価】

時代や社会の要請に対応した研究活動の発展として、以下の二点がある。第一に「研究倫理」の研究や実践活動である。従来日本発達心理学会や、日本心理学会で倫理規定に関わってきたが、さらに近年、研究テーマとして掘り下げる機会を得ることができた(質的研究における「子どものフィールド参与観察における倫理」論文(2014)、音楽療法学会におけるシンポジウム参加(2013)、「発達研究における倫理」論文(2011))。第二に、映像メディアによる知識表現・修得の観点から発達研究を推進する研究機会に恵まれ成果を得ている。今後この二つを融合し現在問題となっている映像と個人情報、研究の関係についてさらに検討していく。

【職・氏名】准教授 齋藤 智哉 SAITO Tomoya

【学 位】修士(教育学)

【本学就任】平成21年

【略 歴】東京大学大学院教育学研究科総合教育科学専攻学校教育開発学コース修士課程修了
東京大学大学院教育学研究科総合教育科学専攻学校教育開発学コース博士課程単位取得退学
國學院大學文学部兼任講師

【専門分野】教育方法学・教師論

【最近5年間の主な研究業績等】 [平成22～26年度] (10点まで)

種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または 該当ページ	発行年月
論文	単	「読書を通して新たな世界に出会う経験と自己形成—『教育の原理』における『おすすめブックリストの交換』の実践—」	『國學院大學教育学研究室紀要』第47号 國學院大學文学部教育学研究室	pp.131-141	平25. 2
著書	共	「指導過程の構造—集団指導と個別指導の関係に着目して」	『現代日本の少年院教育 質的調査を通して』 名古屋大学出版会	全371p中 pp.225-235	平24. 9
評論・ 書評等	単	「教育を考える視座としての身体」	『國學院雑誌』第113巻第1号 國學院大學	pp.22-23	平24. 1
論文	単	「澤柳政太郎の『學修』における『修養』」	『國學院雑誌』第112巻第7号 國學院大學	pp.1-11	平23. 7
論文	共	「中堅期男性教師が抱いた授業に対する危機感と授業スタイルの変更—技術的熟達者から反省的実践家へ—」	『國學院大學教育学研究室紀要』第45号 國學院大學文学部教育学研究室	全18p中 pp.125-131	平23. 2

【平成21年度以前の主な研究業績等】 (5点まで)

種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または 該当ページ	発行年月
論文	単	「一九二〇年代の木下竹次の学習法における『修養』—自律と協同・道徳的判断・身体—」	『國學院雑誌』第110巻第12号 國學院大學	pp.1-14	平21. 12
論文	単	「授業研究のディレンマ」	『明治大学教職課程年報』No.30 明治大学	pp.11-19	平20. 3
論文	単	「西尾実の国語教育観の転換—植民地視察を通じた「話しことば」の再発見—」	『国語科教育』第61集 全国大学国語教育学会	pp.11-18	平19. 3
論文	単	「折口信夫の師弟関係—「かたる」行為と聴く構え—」	『東京大学大学院教育学研究科紀要』第44巻 東京大学	pp.271-279	平17. 3
論文	単	「女教員の修養における身体の表象—後藤静香の希望社運動—」	『日本教師教育学会年報』第13号 日本教師教育学会	pp.74-83	平16. 9

【所属学会】日本教育学会、日本教育方法学会、日本教師教育学会、全国大学国語教育学会、日本学校教育学会

【最近5年間の学会等および社会における主な活動】

山梨県身延町立久那土小学校指導助言者(平19～現在)、三重県尾鷲市立尾鷲中学校スーパーバイザー(平22～現在)、公益財団法人野間教育研究所兼任研究員(平24. 9～現在)

【教育活動の自己評価】

①平成21年度から担当している「教育学特殊講義Ⅱ」において、本来であれば大学院で行っている授業のフィールドノート(エピソード記述)作成を、授業中の生徒たちの様子を見る眼を養う試みとして、学部学生に対する課題として設定した。実際の教室を参観することは条件的に不可能であったため、ビデオ記録の視聴によるノートの作成であったが、回を重ねるごとに学生の記述はよりの確になっていったことが明らかになった。②本年度から担当をした「社会科教育法」において、模擬授業を行う際に、教員がビデオ撮影を行った。模擬授業後の振り返りの時間に、撮影したビデオ映像をもとにコメントを行うことによって、学生たちが視覚的に自分たちの授業を振り返ることが可能になり、おおむね好評であった。

【研究活動の自己評価】

①平成24年度に採択された科学研究費補助金(若手研究B)「明治期から昭和初期の学校教育における子どもと教師の『修養』に関する歴史的研究(研究課題番号:247300667)」(研究代表者:齋藤智哉)の資料調査ならびに研究を遂行した。また、当研究の成果の一部を、日本教育方法学会において口頭発表した。②「協同的学び」を中心に据えた学校改革を推進するにあたり、全国約30校の小・中・高(東京、山梨、静岡、三重、愛知、兵庫、岩手、茨城、高知)の各学校において、校内研修の指導助言者(スーパーバイザー)として現職の教師との協同研究を継続している。次年度も校務に支障が出ない限りにおいて継続していく予定である。

【職・氏名】教授 高橋 大助 TAKAHASHI Daisuke

【学 位】文学修士

【本学就任】平成13年

【略 歴】國學院大學文学部文学科卒業

國學院大學大学院文学研究科日本文学専攻博士課程後期単位取得満期退学

國學院大學文学部教職課程兼任講師

【専門分野】国語教育論

【最近5年間の主な研究業績等】 [平成22～26年度] (10点まで)					
種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または該当ページ	発行年月
論文	単	「教室を古典の享受の場とするために―「仁和寺にある法師」(徒然草52段)を手掛かりに―」	『國學院大學教育学研究室紀要』第48号 國學院大學教育学研究室	全92p中 pp.1-12	平26. 2
論文	単	「「フツ一人」のための国語教育」	『國學院大學教育学研究室紀要』第47号 國學院大學教育学研究室	全146p中 pp.91-97	平25. 2
論文	単	「対話としての古典教育」	『國學院大學教育学研究室紀要』第46号 國學院大學教育学研究室	全210p中 pp.13-20	平24. 2
論文	単	「「伝え合う」ために「書くこと」のレッスン」	『國學院大學教育学研究室紀要』第45号 國學院大學 教育学研究室	全180p中 pp.15-27	平23. 2

【平成21年度以前の主な研究業績等】 (5点まで)					
種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または該当ページ	発行年月
評論・書評等	単	熱き息づかいから、たおやかな空間へ	『住宅建築8月号』 no.412 編集・建築思潮研究所 発行・建築資料研究社	全119p中 pp.29-32	平21. 8
論文	単	「身体の想像力、身体への想像力―学校という空間を考える手がかりとして―」	『國學院大學教育学研究室紀要』第43号 國學院大學教育学研究室	pp.119-128	平21. 2
論文	単	「国語教育とリテラシー―池田晶子「言葉の力」に向けて―」	『國學院大學教育学研究室紀要』第42号 國學院大學教育学研究室	pp.93-103	平20. 3
論文	単	「生徒の身体とコンテンポラリーダンス―いまどきの身体に関する覚え書き―」	『國學院大學教育学研究室紀要』第41号 國學院大學教育学研究室	全222p中 pp.173-184	平19. 2
論文	単	「「握手」―ルロイのダンス―」	『國學院大學教育学研究室紀要』第38号 國學院大學教育学研究室	pp.21-32	平16. 3

【所属学会】日本近代文学会、國學院大學国文学会

【最近5年間の学会等および社会における主な活動】

住み継ぎネットワークコア・スタッフ(平2. 4～現在)、教育・国語教育の会世話人(平7. 10～現在)、

NPO法人 Japan Contemporary Dance Network 会員(平16. 9～現在)、

財団法人アサヒビル芸術文化財団 舞台芸術部門助成選考委員(平20. 4～平22. 3)

【教育活動の自己評価】

教科に強い教員の育成を目指し、国語科教育法Ⅰにおいては、現場で使用されているテキスト(現代文、古典問わず)を、受講者と徹底して読みあい、また、言葉への興味関心を育むよう、映像教材なども用いながら講座を運営している。また、同講座では、教材分析のレポートを添削・返却して、受講者の読み書き力の向上に努めている。国語科教育法Ⅱにおいては、学習指導案の作成・模擬授業を中心として授業実践の力を養うよう心がけており、指導案は講座の時間外でも個別に指導し、また、受講者数の関係で、全員にフルタイムの模擬授業の機会を提供できないため、希望を募って、特別補講を行うなどしている。さらには、開放性の教員養成のメリットを活かすべく、日本文学科・中国文学科の教員と情報の交換を行い、それを講座の運営に反映させている。また、教職論、教職実践演習、教育実習1Aでは、教育現場のリアルな状況を踏まえたものとするために新聞等の報道だけでなく、卒業生を中心とした現場教員と定期的に連絡を取り、最新事情を得られるよう試みている。

【研究活動の自己評価】

「文学」の教育ではなく、普通教育の基盤としての「文学教育」とは何か、本学に赴任して以来、このテーマを考え続けているが、生徒間で「読み」の能力と機会との「格差」がますます広がりつつある状況下で、このことはますます重要な課題となってきた。また、教育基本法および現行の学習指導要領における「古典」重視の傾向を鑑み、ここ数年、古典教育の批判検討を行い、授業等に活かしている。さらには、学校とは異なる、地域に根差したオルタナティブな教育空間の可能性について、実例の調査検討を少しずつ始めている。

【職・氏名】准教授 高山実佐 TAKAYAMA Misa

【学 位】修士(教育学)

【本学就任】平成24年

【略 歴】学習院大学文学部国文学科卒業

早稲田大学大学院教育学研究科国語教育専攻 博士後期課程単位取得退学

東京都立墨田川高等学校 主任教諭

【専門分野】国語教育学

【最近5年間の主な研究業績等】 [平成22～26年度] (10点まで)

種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または 該当ページ	発行年月
学会発表 等	単	「中等教育段階における言語教材—『国文鑑』 (垣内松三)、『国語女子用』(岩波編集部)の概 観から—」	全国大学国語教育学会第125回 広島大会・自由研究発表		平25. 10
論文	単	「授業で身に付く力が分かる国語科学習指導」	『中等教育資料』平成25年6月号 925 学事出版	全119p中 pp.12-17	平25. 6
編著	共	『中学校・高等学校 国語科教育法研究』	東洋館出版社	全206p中 pp.63-68	平25. 3
編著	共	『明解現代文B』	三省堂		平25. 3
論文	単	高等学校教科書における採録多数作品—「羅 生門」「山月記」「こころ」について—	月刊国語教育研究 NO.489	全70p中 pp.22-27	平25. 1
論文	単	読本におけることばの教育—『純正国語読本』 (五十嵐力)より—	『國學院雑誌』第113巻第12号 國學院大學	全66p中 pp.1-18	平24. 12
論文	単	「センター試験で測りたい国語学力—高等学校 の授業から—	日本語学 連巻403号、第31巻15 号 明治書院	全85p中 pp.46-55	平24. 12
教科書・ 参考書	共	『明解国語総合』	三省堂		平24. 4
学会発表 等	単	「人物を考える、人間を追究する—「こころ」(夏 目漱石)を読む—」	日本国語教育学会高校部会第60 回研究会 於 東京学芸大学附属高等学校		平23. 5
著書	共	『高等学校学習指導要領解説 国語編』	教育出版	全131p	平22. 6

【平成21年度以前の主な研究業績等】 (5点まで)

種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または 該当ページ	発行年月
著書	共	『文学の授業づくりハンドブック—授業実践史を ふまえて—』	溪水社	全280p中 pp.139-163	平22. 3
論文	単	「『赤い繭』(安部公房)を読む—現実を超えた世 界から自己を照射する—」	『国語教育を国際社会へひらく—浜 本純逸先生退任記念論文集—』 溪水社	全371p中 pp.323-354	平20. 3
論文	単	「『こころ』の授業再考」	『日本語学』 Vol.23	pp.24-38	平16. 7
著書	共	『子どものコミュニケーション意識—こころ、ことば からかかわり合いをひらく—』	学文社	全174p中 pp.86-101	平14. 3
著書	共	『ジェンダー・フリー教材の試み—国語にでき ること—』	学文社	全190p中 pp.132-160	平13. 3

【所属学会】全国大学国語教育学会、日本国語教育学会、日本文学協会、国語教育史学会、早稲田大学国語教育学会

【最近5年間の学会等および社会における主な活動】

全国高等学校国語教育研究連合会 広報部副部長(平22. 4～平24. 3)、

文部科学省高等学校学習指導要領作成協力委員(平18. 4～平22. 3)、

社団法人全国高等学校文化連盟文芸コンクール小説部門審査委員(平10. 4～平24. 3)、

三省堂 高等学校国語教科書編集委員(平17. 4～現在)、

国語教育史学会『国語教育史研究』編集委員(平19～現在)、日本国語教育学会 高等学校部会副部会長(平25～現在)、

國學院大學国語教育研究会顧問(平24. 4～現在)

【教育活動の自己評価】

学部の教科教育法では、国語科教育における目標・指導内容・指導方法・評価および教材について、理論のみならず、実際の事例を紹介しながら理解できるよう指導した。その後、実際に学習指導案の作成や模擬授業を行わせ、実践を省察しながら技能を身につけられるようにしている。授業外での準備が多くなるので個々に指導をし、学生の積極的な学びを支援した。また、教育実習に関して、授業科目「教育実習1A」では実習準備に必要な知識・技能・姿勢等について指導し、実際の実習期間・直前では、学校・学級に応じた学生の事例に即し、その準備・授業等について個々に指導した。大学院では、それぞれの研究テーマが中学・高校の国語科学習指導でどのように生かせるのかを基本に置き指導している。「國學院大學国語教育研究会」の顧問を務め、現職教員と共に学び合える例会を実施したり、夏期集中ゼミ合宿を行ったりしている。

【研究活動の自己評価】

中学・高校での国語科学習指導について、実際の授業や実践報告研究会に参加し、学習者・教師・学習材の関係性から、どのような学習指導を構想していくべきか、事例研究を行っている。また、近代の中等段階における国語科講読の教科書、読本について文献研究を行っている。読本を通して、ことばの意義や価値、その運用等について、生徒たちにどのように考えさせたかったのか、言語教材を中心に『国文鑑』(垣内松三)、『純正国語読本』(五十嵐力)、『国語女子用』(西尾実)を分析・考察した。

【職・氏名】教授 田 嶋 一 TAJIMA Hajime

【学 位】教育学修士

【本学就任】昭和56年

【略 歴】東京大学教育学部卒業

東京大学大学院教育学研究科教育学専門課程修士課程修了

東京大学大学院教育学研究科博士課程単位取得満期退学

【専門分野】教育学、教育社会史

【最近5年間の主な研究業績等】 [平成22～26年度] (10点まで)

種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または該当ページ	発行年月
論文	単	『『少年』概念の成立と少年期の出現－雑誌『少年世界』の分析を通して』(論集に再録)	論集現代日本の教育史4『子ども・家族と教育』 日本図書センター	全17p	平25. 6
その他	単	「学ぶことは変わること－大学生の学習と教養」(平成24年度國學院大學入学式記念講演の記録)	『國學院大學教育学研究室紀要』第47号 國學院大學教育学研究室	全10p	平25. 2
調査・研究報告等	単	学び方の転換を目指して－伝達収集型の学びから参加・獲得型、探求・理解型の学びへ(シリーズ大学授業最前線6)	『教育開発ニュース』第6号 國學院大學教育開発推進機構	全6p	平24. 7
評論・書評等	単	書評・宮澤康人『<教育関係>の歴史人類学』	『教育学研究』第79巻第2号 日本教育学会	全3p	平24. 6
著書	共	『人間形成と修養に関する総合的研究』	野間教育研究所	全179p	平24. 5
調査・研究報告等	単	高校と大学を結ぶ学力	平成23年度県立大和高校研究発表会・研修会報告書 神奈川県立大和高校	全17p	平24. 3
評論・書評等	単	二井仁美著『留岡幸助と家庭学校－近代日本感化教育史序説』	『日本の教育史学』第54集 教育史学会	全3p	平23. 10
辞書・事典等	単	「教育勅語」「教育令」「教化」「国定教科書」「子ども組」「こやらい」「小砂丘忠義」「佐々木昂」「産育」「修養」「成人式」「福沢諭吉」「若者組」「わらべうた」	寺崎昌男・平原春好編『新版 教育小事典 第3版』 学陽書房		平23. 4
著書	共	『やさしい教育原理 新版補訂版』	有斐閣	全119p	平23. 2
論文	単	「明治初期から大正期にかけての地域社会を生きた若者と青年たち－若者と青年の教育・形成史(2)」	『國學院大學教育学研究室紀要』第45号 國學院大學教育学研究室	全23p	平23. 2

【平成21年度以前の主な研究業績等】 (5点まで)

種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または該当ページ	発行年月
著書	共	『教育科学の誕生』	大月書店	全564p中 pp.17-27, 51-76, 79-90, 179-203	平9. 1
論文	単	「1920-30年代における児童文化論・児童文化運動の展開」	歴史学会『史潮』23号 弘文堂	全111p中 pp.31-47	昭63. 6
著書	共	『教育の世紀社の総合的研究』	一光社	全763p中 pp.103-147, 189-290, 625-646	昭59. 10
著書	共	『自由民権運動と教育』	草土文化	全383p中 pp.104-158, 351-378	昭59. 1
著書	共	『講座子どもの発達と教育』第2巻	岩波書店	pp.2-34	昭54. 8

【所属学会】日本教師教育学会、日本教育学会、教育史学会、日本教育史学会、教育目標・評価学会

【最近5年間の学会等および社会における主な活動】

大学評価・学位授与機構学位審査会専門委員(平12～現在)、

飯田市歴史研究所顧問研究員(平16～現在)、野間教育研究所評議員・兼任研究員(平19～現在)、

学校法人國學院大學評議員(平17～現在)、バルマーク教育助成財団評議員(平20～現在)

【教育活動の自己評価】

双方向型、探求型の授業づくりを追求している。授業では「知の森の探究」と名付けたコメントペーパーを履修者に毎回提出してもらい、学修成果を確認し、また、履修者の知的な好奇心を次の授業につなげることを試みている。また、グループワークを積極的に取り込み、履修者の主体的な学習とその成果の発表を組織している。これらについては、『教育開発ニュース』第6号(平成24年7月、國學院大學教育開発推進機構)に掲載された「大学授業最前線－教員の努力、学生のまなざし(6)」で、「学び方の転換をめざして－伝達収集型の学びから参加・獲得型、探求・理解型の学びへ」を執筆して詳しく紹介した。教科書として『やさしい教育原理(新版補訂版)』(有斐閣、2011年)を刊行。

【研究活動の自己評価】

主として教育の社会史的研究に従事。教育の思想、制度、方法等、歴史的に解明しようとしてきた。現在は、野間教育研究所の兼任研究員として、同研究所の社会教育部門に属し、「青年の自立と教育」をテーマとする共同研究に携わっている。また、飯田市歴史研究所の顧問研究員として、地域の教育の歴史的研究をすすめている。科学研究費基盤研究(B)「飯田下伊那における学校史料と地域社会に関する基盤的研究」(平成22年度～26年度)では、研究代表者を務めた。

経 済 学 部

【経済学科／経済ネットワーク学科／経営学科】

大坂	健	教	授	107	
小木曾	道夫	教	授	108	
尾近	裕幸	教	授	109	
尾崎	麻弥子	准	教	授	110
金子	良太	教	授	111	
木下	順	教	授	112	
久保田	裕子	教	授	113	
小宮山	隆	教	授	114	
紺井	博則	教	授	115	
東海林	孝一	准	教	授	116
菅井	益郎	教	授	117	
高木	康順	准	教	授	118
高橋	克秀	教	授	119	
高橋	尚子	教	授	120	
田原	裕子	教	授	121	
茅野	信行	教	授	122	
中馬	祥子	教	授	123	
土田	壽孝	教	授	124	
中泉	真樹	教	授	125	
中田	有祐	助	教	126	
根岸	毅宏	教	授	127	
野田	隆夫	准	教	授	128
野村	一夫	教	授	129	
橋元	秀一	教	授	130	
秦	信行	教	授	131	
古沢	広祐	教	授	132	
星野	広和	教	授	133	
細井	長	准	教	授	134
本田	一成	教	授	135	
宮下	雄治	准	教	授	136
山本	健太	准	教	授	137

【職・氏名】教授 大坂 健 OSAKA Takeshi
 【学 位】博士(経済学)(平成5年3月 立教大学 乙第116号)
 【本学就任】平成8年
 【略 歴】立教大学大学院経済学研究科修士課程修了
 埼玉県社会経済総合調査会研究員、東京市政調査会研究員
 愛知大学経済学部経済学科助教授
 【専門分野】地方財政論
 【受賞歴等】第11回藤田賞(東京市政調査会、昭和60年5月)、
 1992年度公益事業学会奨励賞(平成5年6月、公益事業学会)

【最近5年間の主な研究業績等】 [平成22～26年度] (10点まで)					
種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または 該当ページ	発行年月
論文	単	「地方交付税の成立と改革論」	『國學院経済学』第60巻第3・4合併号 国学院大学経済学会	全67p	平24.3

【平成21年度以前の主な研究業績等】 (5点まで)					
種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または 該当ページ	発行年月
論文	単	「地方交付税改革論と「新型交付税」」	『國學院大學経済学研究』第39輯 國學院大學経済学研究科	pp.1-53	平20.3
著書	単	『首都移転論』	日本経済評論社	全266p	平14.4
著書	単	『地方公営企業の独立採算制』	昭和堂	全326p	平4.6
著書	単	『都市財政構造の変容』	東京市政調査会	全258p	平3.1
著書	単	『地方公営企業の財政改革』	東京市政調査会	全102p	平2.3

【所属学会】日本財政学会、日本地方財政学会

【最近5年間の学会等および社会における主な活動】

埼玉自治体問題研究所理事長(平20.6～現在)、三郷市障がい者地域生活支援協議会委員(平24.4～現在)

【教育活動の自己評価】

- 1) 授業時に必ず質問時間をとり、質問を受けている。
- 2) レジュメ、資料を配布している。

【研究活動の自己評価】

「地方交付税改革論」の研究は、予定どおり進展していない。

【職・氏名】教授 小木曾道夫 OGISO Michio
 【学 位】文学博士(平成元年3月 上智大学 甲87号)
 【本学就任】平成8年
 【略 歴】上智大学文学部社会学科卒業
 上智大学大学院文学研究科社会学専攻博士前期課程修了
 上智大学大学院文学研究科社会学専攻博士後期課程修了
 【専門分野】組織社会学、産業社会学

【最近5年間の主な研究業績等】 [平成22～26年度] (10点まで)					
種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または該当ページ	発行年月
論文	単	「コミュニケーション理論と自己生産」	『國學院大學経済学研究』第45輯 國學院大學大学院経済学研究科	pp.1-18	平26. 3
著書	単	『SPSSによるやさしいアンケート分析 第2版』	オーム社	全164p	平24. 5
論文	単	「情報エントロピーの濃縮過程～原子力村の事例」	『國學院大學経済学研究』第43輯 國學院大學大学院経済学研究科	pp.1-31	平24. 3

【平成21年度以前の主な研究業績等】 (5点まで)					
種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または該当ページ	発行年月
著書	単	『自己生産する組織～組織の環境、公式構造、課業特性、能率、および有効性の関係』	夢窓庵	全190p	平19. 11
著書	単	『ネットワーキングとは何か？[増補改訂版]』	夢窓庵	全124p	平17. 7
論文	単	「(第3章)年功型人材管理の終焉～能力・成果主義的人資源管理の模索」	大塚先編『あたらしい産業社会学 [改訂版]』 有斐閣	全310p中 pp.55-76	平15. 12
著書	単	『組織の自己革新～知識集約的部門の現場から』	夢窓庵	全285p	平9. 4
論文	単	「ネットワーク概念の再検討」	『國學院経済学』第45巻第1号 國學院大學経済学会	全273p中 pp.1-20	平9. 3

【所属学会】日本社会学会、東北社会学会、組織学会、関東社会学会

【最近5年間の学会等および社会における主な活動】

【教育活動の自己評価】

「授業についてのアンケート」の結果を踏まえて授業の改善に努めるとともに、「授業についてのアンケート」の単純集計結果を公表している。担当科目のうち、「ネットワーキングの基礎」は『ネットワーキングとは何か？[増補改訂版]』、「ネットワーク型組織」は『自己生産する組織』というテキストを刊行しており、「アンケート調査」は『SPSSの使い方』などの教材を作成し、「アンケート調査入門」は未刊行のテキストをK-SMAPYにて配布している。また、「アンケート調査」(およびその読替科目)の調査報告書をインターネットにて公表している。

【研究活動の自己評価】

組織や集合行動の自己生産(オートポイエシス)について研究している。

【職・氏名】教授 尾 近 裕 幸 OKON Hiroyuki

【学 位】修士(経済学)

【本学就任】平成10年

【略 歴】中央大学経済学部経済学科卒業

大阪市立大学大学院経済学研究科後期博士課程単位取得満期退学

和歌山大学経済学部経済学科助教授

【専門分野】理論経済学、オーストリア学派経済学、比較経済システム論

【最近5年間の主な研究業績等】 [平成22～26年度] (10点まで)

種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または 該当ページ	発行年月
翻訳・ 翻刻書	単	イスラエル・カーズナー『ルートヴィヒ・フォン・ミーゼス: 生涯とその思想』	春秋社	全263p	平25. 6
その他	単	LA ECONOMIA AUSTRIACA EN JAPON	La Escuela Austriaca desde adentro Union Editorial	pp. 317-342	平25. 5
学会発表 等	単	International transmission of the ideas of the impossibility of rational economic calculation under socialism to Japan: K. Yamamoto's Keizai Keisan (1932) and Japanese way of acceptance	Colloquium on Market Institutions & Economic Processes, Department of Economics, New York University	全29p	平25. 3
論文	単	Ludwig von Mises as a Pure Subjectivist	K. Yagi and Y. Ikeda (ed.), Subjectivism and Objectivism in the History of Economic Thought Routledge	pp. 126-143	平24. 6
学会発表 等	単	An Early Study of the Possibility of Rational Economic Calculation in the Socialist Society in Japan: K. Yamamoto's Economic Calculation	The 15th annual meeting of the European Society for the History of Economic Thought (ESHET 2011), University, Istanbul, Turkey, 19th to 21st May 2011.		平23. 5
翻訳・ 翻刻書	単	F.A.ハイエク『社会主義と戦争』(ハイエク全集 第II期 第10巻)	春秋社	全228p	平22. 8
解説・ 解題等	単	「解説」『社会主義と戦争』の時代が生み出したハイエク	F.A. ハイエク『社会主義と戦争』(ハイエク全集 第II期 第10巻) 春秋社	pp.201-210	平22. 8

【平成21年度以前の主な研究業績等】 (5点まで)

種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または 該当ページ	発行年月
学会発表 等	単	Mises and Kantorovich on Economic Calculation	The 14th Annual Conference of ESHET (The European Society for the History of Economic Thought), The Amsterdam School of Economics, University of Amsterdam, Amsterdam, The Netherlands, 25th-27th, March, 2010.		平22. 3
その他	単	「ゲーム理論からみる参議院の構造－パワー指数による評価－」	『院友経済』2010 國學院大學院友経済会	pp.16-18	平22. 3
学会発表 等	単	A Japanese Contribution to the Calculation Debate: K. Yamamoto's Economic Calculation	The 22nd conference of the History of Economic Thought Society of Australia, The University of Notre Dome Australia, Fremantle, 14-17 July 2009.		平21. 7
翻訳・ 翻刻書	共	デビッド・M・クレプス『MBAのためのマイクロ経済学入門II ゲーム・情報と経営戦略』	東洋経済新報社	全402p	平21. 3
翻訳・ 翻刻書	共	デビッド・M・クレプス『MBAのためのマイクロ経済学入門I 価格と市場』	東洋経済新報社	全480p	平20. 4

【所属学会】比較経済体制学会、進化経済学会、経済学史学会

【最近5年間の学会等および社会における主な活動】

Member of Academic Council at Institut Constant de Rebecque Switzerland(平19. 12～現在)、Member of Editorial Board of The Quarterly Journal of Austrian Economics(平10～現在)、Adjunct Faculty, The Ludwig von Mises Institute USA(平3～現在)、Associate Editor of The Review of Austrian Economics(平24～現在)

【教育活動の自己評価】

経済学への入門科目である「経済理論入門」では、「理論的思考能力」の向上を目標に、マイクロ経済学とマクロ経済学の基礎概念と分析方法を教授した。専門科目の「マイクロ経済学」では、論理的思考のより一層の向上を目標に、消費者行動の理論および生産者行動の理論を中心とした古典的理論を説明した。いずれの授業においても、説明においてはパワーポイントスライドを用い、理論を「ストーリーとして理解」させることに重点を置き、説明を繰り返すように努めた。また、学生自身が授業内容の理解度を把握できるように授業内容に関わる練習問題を解かせ、その解説を通じて学生の授業内容の理解を深めるようにした。2年次後期から始まる「演習」では、マルチエージェントシミュレーション技法の修得と、それを用いて様々な問題を分析する授業を行い、発展著しい新たな分析手法を学生に教授することに努めた。演習では、プレゼンテーション技法の向上など、社会人基礎力を高めることを意識した授業を行った。

【研究活動の自己評価】

オーストリア学派経済学における市場プロセスの微細構造をマルチエージェント・シミュレーションにより分析する研究を行った。具体的には、平成25年度「國學院大學特別推進研究助成」により、「企業家的市場プロセスのマルチエージェント・シミュレーション分析」の課題の下で、利潤機会に対する起業家の機敏性により作動する「カーズナー・プロセス」について、その理論の再検討、数理モデル化、およびマルチエージェント・シミュレーション分析に関する研究を実施した。

【職・氏名】准教授 尾崎麻弥子 OZAKI Mayako
 【学 位】修士(経済学)
 【本学就任】平成22年
 【略 歴】早稲田大学大学院経済学研究科修士課程 修了
 ジュネーヴ大学社会経済学部経済史学科DEA課程修了
 早稲田大学大学院経済学研究科博士課程満期退学
 【専門分野】西洋経済史

【最近5年間の主な研究業績等】 [平成22～26年度] (10点まで)					
種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または該当ページ	発行年月
論文	単	「19世紀におけるスイスーフランス国境地域のナショナル・アイデンティティと経済的実態」	『地域と越境―「共生」の社会経済史』春風社	pp.135-161	平26. 5
論文	単	「近代スイスの時計産業と部品製造業―18、19世紀のジュネーヴと周辺地域の事例」	『スイス史研究の新地平―都市・農村・国家』昭和堂	pp.96-119	平23. 3
翻訳・翻刻書	共	中立国スイスとナチズム 第二次大戦と歴史認識	京都大学出版会	全719p	平22. 11
論文	単	「第二次大戦期におけるスイス・フランス国境地域―国境のコントロールが国境館の移動におよぼした影響について―」	『國學院大學経済学』第59巻第1号 國學院大學経済学会	全18p	平22. 10

【平成21年度以前の主な研究業績等】 (5点まで)					
種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または該当ページ	発行年月
論文	単	「18世紀後半ジュネーヴ市の移入民における出身地・職業構成の転換と連続―アピタンの記録と滞在許可証の分析を中心として」	『社会経済史学』第71巻2号 社会経済史学会	pp.197-211	平17. 7
翻訳・翻刻書	共	「ポール・ギシヨネ著『フランス・スイス国境の政治経済史―越境、中立、フリー・ゾーン』」	昭和堂	全232p	平17. 5
論文	単	L'immigration à Genève durant les cinq premières années de l'Occupation française. Une analyse de deux mille permis de séjour	ジュネーヴ大学社会経済学部DEA 取得論文		平14. 12
論文	単	「山岳地帯と移民―18世紀サヴォイア地方フォシニー地域の事例」	『早稲田大学経済学研究』第50号 早稲田大学大学院経済学研究科 経済学研究会	pp.83-94	平12. 5

【所属学会】スイス史研究会、社会経済史学会、フランス経済史研究会、ドイツ資本主義研究会

【最近5年間の学会等および社会における主な活動】

【教育活動の自己評価】

毎回授業後コメントペーパーを配付し、コメント内容に基づいて授業の改善を図っている。

【研究活動の自己評価】

史料調査に基づいて分析を進めているが、もう少し論文の本数を出せるようにしたい。

【職・氏名】教授 金子良太 KANEKO Ryota

【学 位】修士(商学)

【本学就任】平成16年

【略 歴】早稲田大学商学部卒業

公認会計士(日本)・米国公認会計士(USCPA)試験合格

早稲田大学大学院商学研究科博士課程単位取得退学

【専門分野】財務会計、非営利法人会計、公会計

【最近5年間の主な研究業績等】 [平成22～26年度] (10点まで)

種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または 該当ページ	発行年月
論文	単	「政府会計における繰延資源流入と繰延資源流出の意義」	『会計』第185巻第4号 森山書店	全129p中 pp.86-97	平26. 4
調査・研究報告等	共	「日本及び諸外国における非営利法人制度に関する研究」	非営利法人研究学会 東日本部会 最終報告 非営利法人研究学会	全134p	平25. 9
学会発表等	単	「政府会計における Deferred inflows(繰延資源流入)と Deferred outflows(繰延資源流出)の意義」	日本会計研究学会第72回大会(中部大学)		平25. 9
教科書・参考書	共	『テキスト入門会計学 第2版』	中央経済社	全220p	平25. 2
論文	単	「非営利組織におけるボランティアの会計」	『早稲田商学』第434号 早稲田商学同攻会	全735p中 pp.667-684	平25. 1
学会発表等	単	「非営利組織におけるボランティアの会計」	日本会計研究学会全国大会 第71回		平24. 9
著書	共	『財政の悪化を顕在化させる政府会計』	『体系現代会計学』第9巻 中央経済社	全478p中 pp.219-238	平24. 4
学会発表等	単	「公会計における企業会計的手法適用に伴う問題点」	会計検査院テクニカルセミナー		平23. 3
論文	単	「制約の付された寄付の会計処理」	『非営利法人』第790号 全国公益法人協会	pp.15-24	平22. 12
論文	単	「アメリカNPOの実情(後編)ーワシントンDC日米協会の事例にみるー」	『非営利法人』第786号 全国公益法人協会	pp.22-29	平22. 8

【平成21年度以前の主な研究業績等】 (5点まで)

種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または 該当ページ	発行年月
論文	単	「非営利組織における純資産と負債の区分」	日本銀行金融研究所 ディスカッションペーパーシリーズ 2009-J-11 日本銀行金融研究所	全27p	平21. 7
翻訳・翻刻書	共	『米国ホテル会計基準Ⅱ』	税務経理協会	全346p	平21. 2
論文	単	「特別会計財務書類の法定化に当たってー企業会計及び歳入歳出決定計算書に添付される財務諸表との比較を中心にー」	『会計・監査ジャーナル』642号 日本公認会計士協会	pp.137-146	平21. 1
論文	単	「非営利組織体における非交換取引の会計」	『会計』第170巻第2号 森山書店	pp.52-67	平18. 8
論文	単	「非営利法人における補助金等の会計処理の検討」	『國學院経済学』第53巻第2号 國學院大學経済学会	pp.1-20	平17. 3

【所属学会】日本会計研究学会、国際会計研究学会、日本簿記学会、国際公会計学会、アメリカ会計研究学会(AAA)
Japan Association of Governmental Accounting (JAGA)、非営利法人研究学会

【最近5年間の学会等および社会における主な活動】

日本公認会計士協会正会員(平9. 9～現在)、日本ファイナンシャルプランナーズ協会会員(平11. 9～現在)、早稲田大学産業経営研究所研究協力員(平14. 4～現在)、会計検査院特別調査職(平23. 4～現在)、内閣府公益法人の会計に関する研究会委員(平25. 5～現在)、経済産業省契約評価監視委員会委員(平25. 8～現在)

【教育活動の自己評価】

専門科目では教科書の出版、多くのゲスト講師の招へい、映像教材の積極的な使用を行った。今後は教養科目における対話型授業の推進、e-learningの導入を積極的に行っていきたい。

【研究活動の自己評価】

米国留学後は、我が国及び米国の政府会計・非営利組織会計に焦点を当てて研究活動を行っている。科学研究費補助金等、外部の研究資金を積極的に活用して研究を続けていく。

【職・氏名】教授 木下 順 KINOSHITA Jun

【学 位】博士(経済学)(平成13年3月 大阪市立大学)

【本学就任】昭和56年

【略 歴】大阪市立大学経済学部経済学科卒業

大阪市立大学大学院経済学研究科経済学専攻修士課程修了

大阪市立大学大学院経済学研究科経済学専攻博士課程単位取得満期退学

【専門分野】1. アメリカ合衆国マサチューセッツ州の技能養成と労資関係を中心とする社会史(アメリカ革命から第一次大戦まで)

2. 日本における社会政策の成立過程と、その人事管理(日本的経営)への影響

【最近5年間の主な研究業績等】 [平成22～26年度] (10点まで)					
種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または該当ページ	発行年月
論文	共	「会社徒弟制のトランスナショナル・ヒストリー——ゼネラル・エレクトリック社リン事業所からトヨタ自動車へ:1903～70年」	『労務管理の生成と終焉』 日本経済評論社	pp.243-279	平26. 3
論文	共	「日本労務管理史研究の射程」	『労務管理の生成と終焉』 日本経済評論社	pp.29-72	平26. 3
学会発表等	単	A Transnational History of Corporate Apprenticeship -- From G. E. Lynn to Toyota, 1903-1970--	New England Historical Association, Fall Meeting held at Albertus Magnus College, New Haven, Conn.		平25. 10
論文	単	書評:玉井金五「共助の稜線」	『経済学雑誌(大阪市立大学)』第114巻第2号 大阪市立大学経済学会	pp.89-92	平25. 9
論文	単	富澤克美『アメリカ労使関係の精神史』をめぐって	『福島大学商学論集』第81巻第3号 福島大学経済学会	全14p	平25. 2
論文	単	「井上雅雄氏の人と学問」	『立教経済学研究』第65巻第3号 立教大学経済学部	全26p	平24. 1
学会発表等	単	The Rise and Fall of Mechanic Education: Worcester Polytechnic Institute, 1865-1900	Fall Conference, New England Historical Association		平23. 10
論文	単	「養成工制度と労務管理の生成——「大河内仮説」の射程」	『大原社会問題研究所雑誌』619号 大原社会問題研究所	全17p	平22. 5

【平成21年度以前の主な研究業績等】 (5点まで)					
種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または該当ページ	発行年月
論文	単	「井上友一の欧米視察——『列国ノ形勢ト民政』(1901年)をめぐって」	『國學院大學紀要』第48巻 國學院大學	全33p	平22. 2
翻訳・翻刻書	共	「井上友一『列国ノ形勢ト民政』校注(一)」	『国学院経済学』57-3・4 国学院大学経済学会	全31p	平21. 3
論文	単	「折口少年の通学路—大阪日本橋・長町裏からの問題提起」	『折口博士記念古代研究所紀要』第8輯	pp.151-224	平17. 3
著書	単	『アメリカ技能養成と労資関係—メカニックからマンパワーへ』	ミネルヴァ書房	xiv + 432p	平12. 5
論文	単	「1950年代日本の採用管理—『養成工』制度の意義をめぐって」	『國學院経済学』第31巻第3・4号 國學院大學経済学会	pp.59-81	昭59. 3

【所属学会】社会政策学会、経営史学会、アメリカ学会

【最近5年間の学会等および社会における主な活動】

【教育活動の自己評価】

講義「人事管理」は、数年前までは教科書スタイルを取っていたが、グローバル化のなかで日本的経営が曲がり角に来ていると考え、これを歴史的に相対化する講義に変えた。これは下記の「研究活動の自己評価」で書いた「米日人事管理史」の教育における実践でもある。講義のあと、その内容を現行用紙30枚ほどに文章化して、翌週に配布している。同じ時代をともに生きる者として、教える・教えられるという固定的関係を外し、柔軟に学び合うことが目標である。演習においては、精確な日本語訳が刊行されていないドラッカーの名著『マネジメント・改訂版』を、一字一句もゆるがせにしないで訳すという、英文解釈の修行をゼミ生と行っている。ゼミ活動は業務なのであり、その内容は知識労働者を養成する職業教育なのだという構えで、学生たちに接している。

【研究活動の自己評価】

2010年度(平成22年度)の後期、大学から海外留学に派遣され、アメリカ史の動向調査と資料収集を行うとともに、研究者との交流を深めた。帰国後、年来のテーマであったアメリカにおける人事管理の成立と、日本における人事管理の成立・発展を統一的に描き出す「米日人事管理史」を構想した。そのため、海外留学の当初の目的であったアメリカ研究を英語で発信するプロジェクトは後回しになってしまった。これから数年かけて、日米人事管理史という新たな研究分野の開拓に専心してゆく。また、その一環として、内務官僚の井上友一についての共同研究を2012年から組織している。

【職・氏名】教授 久保田 裕子 KUBOTA Hiroko

【学 位】家政学学士

【本学就任】平成8年

【略 歴】お茶の水女子大学家政学部家庭経営学科卒業
国民生活センター情報管理室、普及部、調査研究部

【専門分野】消費者問題、消費者運動、有機農業運動、食料・農業問題

【最近5年間の主な研究業績等】 [平成22～26年度] (10点まで)

種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または 該当ページ	発行年月
評論・書評等	単	「有機農業の推進、第二期へ向け「基本方針」を策定(下)」	『週刊農林』 2210号 農林出版社	全18p中 p.1	平26. 3
評論・書評等	単	「有機農業の推進、第二期へ向け「基本方針」を策定(上)」	『週刊農林』 2209号 農林出版社	全18p中 p.1	平26. 2
学会発表等	単	「IFOAMのPGS(参加型保証システム)とその可能性」	第14回日本有機農業学会大会 日本有機農業学会	全138p中 pp.68-70	平25. 12
解説・解題等	単	「消費者問題」	『現代用語の基礎知識2014年版』 自由国民社	全1580p中 pp.989-998	平25. 11
調査・研究報告等	共	「福島第一原発事故が有機農業「提携」活動に与えた調査報告」	『國學院大學経済学研究』 第44輯 國學院大學大学院	pp.73-113	平25. 3
解説・解題等	単	「有機農業研究会の活動と「提携」」	第13回有機農業公開セミナー in 東京 有機農業参入促進協議会	全6p	平25. 2
学会発表等	共	「福島第一原発事故による有機農業「提携」活動への影響」	第14回日本有機農業学会大会資料 日本有機農業学会		平24. 12
論文	単	「グローバル経済下の有機農業「提携」運動—IFOAMにおけるPGSとCSAの出会い—」	『社会科学論集』 第136号 埼玉大学経済学会	全172p中 pp.47-60	平24. 6
調査・研究報告等	共	「有機農業への消費者の理解増進調査報告—消費者意識アンケートと生産者・消費者の交流事例」	特定非営利活動法人 日本有機農業研究会	全144p	平24. 3
学会発表等	共	「有機農業推進の鍵にぎる消費者」	第12回日本有機農業学会大会資料 日本有機農業学会		平23. 12

【平成21年度以前の主な研究業績等】 (5点まで)

種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または 該当ページ	発行年月
調査・研究報告等	共	「有機農業に使う種苗に関する生産・流通・利用実態調査報告(2)—自家採種を中心として—」	日本有機農業研究会	全119p中 pp.1-5, pp.78-82	平22. 3
調査・研究報告等	共	「有機農業への消費者の理解促進と「提携」に関する調査報告」	日本有機農業研究会	全208p中 pp.1-7, 48-57, 63-67, 70-71	平22. 3
教科書・参考書	共	『食の安全基礎知識』	アドスリー(発行)、丸善(発売)	全196p中 pp.165-195	平22. 2
翻訳・翻刻書	共	『食の安全—政治が繰るアメリカの食卓』	岩波書店	全320p	平21. 7
論文	単	「「天地有機」と東西の有機農業運動の源流—日本有機農業研究会の結成と「有機農業」という言葉めぐって—」	『國學院経済学』 第56巻第3・4合併号 國學院大學経済学会	pp.179-215	平20. 11

【所属学会】日本村落社会研究学会、日本家政学会、日本消費生活学会、日本有機農業学会

【最近5年間の学会等および社会における主な活動】

日本有機農業研究会理事(平13～現在)、大竹財団評議員(昭63. 6～現在)、実教出版「高等学校家庭科用教科書」編集委員(平3. 4～現在)

【教育活動の自己評価】

消費者問題については、毎年、さまざまな動きがあるが、そうした最新の動向を受業に採り入れることで、課題を身近に捉えられるようにするとともに、問題への関心をより強く抱くことができるようにしている。教材については、従来から、基本的なもの、たとえば、関連する政策であれば、行政機関が出した資料など、及び、応用的なもの、たとえば、新聞記事、市民消費者団体のニュースレターなどの記事を取りまぜたものを使用するようにしている。また、ドキュメンタリー映像についても、適宜、採り入れて、理解を助けるようにしている。

【研究活動の自己評価】

食品安全問題に大きな影響を与えた大震災福島原発事故による放射能汚染の影響について、特に有機農業運動やその「提携」活動に与えた影響について、継続的に研究を続けている。また、生産者消費者の「提携」活動に国際有機農業運動連盟(IFOAM)の参加型保証システム(Participatory Guarantee Systems)の導入について、実践的な研究を続けている。特に、PGSは、近年、国際的な有機農業運動においてきわめて活発な動きが起きており、資料翻訳も含め、国内外の動向把握に努めている。

【職・氏名】教授 小宮山 隆 KOMIYAMA Takashi

【学 位】商学士

【本学就任】平成22年

【略 歴】中央大学商学部会計学科卒業
東京国税局課税第一部主任訟務官
大和税務署長(神奈川県)

【専門分野】税務会計(個人所得税務会計)

【最近5年間の主な研究業績等】 [平成22～26年度] (10点まで)

種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または 該当ページ	発行年月
調査・研究報告等	単	「必要経費概念」の税務会計学的研究(Ⅰ)	『國學院經濟學』第62巻第1号 國學院大學經濟学会	全160p中 pp.89-133	平25. 12
評論・書評等	単	「マイナンバー制度導入と税理士が果たすべき役割」	『東京税理士界』683 東京税理士会	全20p中 p.4	平25. 12
解説・解題等	単	「修士論文による税法二科目免除」	『桜友』457 税理士桜友会	全20p中 pp.5-6	平25. 3
その他	単	「「マルサ」低迷不況影響。昨年度、摘発脱税額70年代の水準(取材にたいするコメント掲載)」	東京新聞朝刊		平24. 10
その他	単	税務調査の実例(連載中)	『旬刊税務会計』 税務経営研究会		平24. 1
その他	共	税務調査との付き合い方(連載28回)	『旬刊税務会計』 税務経営研究会		平22. 11
その他	単	「民主党政権で、税制はどのように変わるのか?—「平成22年度税制改正大綱」から読み取る—」	『SQUET』通巻251号 三菱UFJリサーチ&コンサルティング	全40p中 pp.4-6	平22. 11
著書	共	『六代目円楽と税を考える』	法令出版 企画編集(株)タックス・コム	全288p	平22. 7

【平成21年度以前の主な研究業績等】 (5点まで)

種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または 該当ページ	発行年月
その他	共	税務署との付き合い方(連載24回)	『旬刊税務会計』 税務経営研究会		平22. 1
著書	共	『楽太郎と法人税を語る』	税務研究会出版局	全204p	平11. 1
著書	共	『楽太郎と税を語る』	星雲社	全228p	平9. 2

【所属学会】日本税務会計学会、日本租税研究協会、東京税理士会、税務会計研究学会

【最近5年間の学会等および社会における主な活動】

【教育活動の自己評価】

講義科目は税務会計(税法)であるが、法人税・所得税及び消費税を講義している。講義では、まず租税法及び税務会計の位置付け(隣接科学との関係)を講義し、税務会計は様々な分野からアプローチできる総合科学であることを理解させ関心を高め、次に租税及び租税法の意義と特質並びに租税の基本原則・租税法の法源と効力及び租税法の解釈と適用を理解させ、税法条文そのものを解釈する基礎知識が会得できるよう配慮している。その後、各税法の課税所得計算構造とその考え方について事例を盛り込みながら順次講義しつつ、新聞報道を題材に税務会計的ものの見方・考え方を実践させ、有能な社会人として活躍して行くために必要な税知識の習得及びこれからの税制を正しく選択できる能力の滋養に努めている。また、受講生は簿記と財務報告を履修済みの者であることから、特に法人税においては、企業会計と税務会計の会計的異同を仕訳等で示すなど具体的に理解させるよう努めている。また、大学院においては、講義及び修士論文指導に当たり、院生が「現行制度の解明・その理論的根拠ないし背景(沿革)の理解・判例と学説の研究・実態や実務の分析・他分野の研究と国際比較からの検証・問題点の指摘(抽出)及び見解(改革意見)」を盛り込んだ修士論文が作成できるよう配慮している。その際、自己の見解が現行制度から遊離した立法政策論的見解にならないよう特に留意している。そもそも院生は修士論文を作成することで税理士試験の税法科目2科目免除を目的としていることから、試験科目免除にふさわしい修士論文であるために、その作成過程において現行制度そのものを体系的かつ専門的に理解したうえで、自己の見解も単に公正性だけでなく実現可能性をも考慮した職業会計人らしい展開をするよう求めている。

【研究活動の自己評価】

この社会で暮らしていく限り税金と無縁な生活を送ることはできない。このため、私たちは税制や税法の仕組みに関心があるのに、納税者の目線に立った解説等は極めて少ない。そこで、「一読難解、二読誤解、三読不可解、四読不愉快」といわれる税法や税金をめぐる問題について、国民目線で分かりやすく平易に解説することを研究活動の主眼としている。また、その際、税務行政に携わった経験を活かし、現実を踏まえたものになるよう心掛けている

【職・氏名】教授 紺井博則 KONI Hironori
 【学 位】経済学修士
 【本学就任】昭和55年
 【略 歴】北海道大学経済学部卒業
 北海道大学大学院経済学研究科博士課程単位取得満期退学
 北海道大学経済学部助手
 【専門分野】金融論、国際金融論

【最近5年間の主な研究業績等】 [平成22～26年度] (10点まで)					
種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または該当ページ	発行年月
論文	単	「変動為替相場制の40年」	『商学論纂』第55巻第5・6号 中央大学商学研究会	pp.157-192	平26. 3
論文	単	「現代資本主義と過剰貨幣資本」	『経済論集』第61巻第4号 北海学園大学経済学会	pp.1-11	平26. 3
著書	共	『現代国際金融論(第4版)』第18章「金融グローバル化と国際通貨体制」	有斐閣	全459p中 pp.386-408	平24. 10
論文	単	「現在の『円高』問題を考える」	『経済』2011年1月号 No.184 新日本出版社	全164p中 pp.127-137	平22. 12
著書	共	「転換点に立つ国際通貨・金融システムとアジア」『世界金融危機 日中の対話』	春風社	全415p中 pp.368-396	平22. 4

【平成21年度以前の主な研究業績等】 (5点まで)					
種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または該当ページ	発行年月
論文	単	「信用創造の変容と世界的金融・経済危機一過剰貨幣資本の形成要因に関連して一」	『國學院大學経済学研究』第41号 國學院大學大学院経済学研究科	全99p中 pp.1-20	平22. 3
学会発表等	単	「転換点に立つ金融の国際化・証券化と基軸通貨ドル体制」	『信用理論研究』第27号 信用理論研究学会	全104p中 pp.19-34	平21. 8
著書	共	『ドル体制とグローバリゼーション』(第1章「金融グローバル化とドル体制」)	駿河台出版社	全279p中 pp.1-35	平20. 5
論文	単	「通貨バスケット論考」	『國學院経済学』第54巻第3・4合併号 國學院大學経済学会	全305p中 pp.51-70	平18. 3
著書	共	『金融グローバル化の理論』(「金ドル交換停止と多国間平価調整」)	大月書店	全336p中 pp.37-45	平18. 2

【所属学会】日本金融学会、信用理論研究学会

【最近5年間の学会等および社会における主な活動】

信用理論研究学会理事(平20. 4～現在)

【教育活動の自己評価】

毎年、すべての授業時に配布するレジュメに上書きして、データの更新、表現の透明性を高める工夫を行っている。そのレジュメには、毎回できるだけ練習問題を載せて復習や試験勉強に役立てるようにしている。授業アンケートで指摘されたマイク音量の適正化を試みたので改善されたと思う。

【研究活動の自己評価】

その前の5年間に比べると、論文・書評の執筆、研究発表等の活動に精力的に取り組んだといえるのではないかと。テーマは、変動相場制の40年についての評価、リーマンショックに至る過剰貨幣資本の動向とその後の影響を実体経済と金融経済との乖離という視点から捉え直すということである。

【職・氏名】准教授 東海林 孝一 SHOJI Koichi
 【学 位】経営学修士
 【本学就任】平成3年
 【略 歴】國學院大學経済学部卒業
 横浜市立大学大学院経営学研究科修了
 青山学院大学大学院経営学研究科博士後期課程単位取得満期退学
 【専門分野】会計学

【最近5年間の主な研究業績等】 [平成22～26年度] (10点まで)					
種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または該当ページ	発行年月
論文	単	「ローソンの事例に見る統合報告書の可能性と課題」	『國學院経済学』第62巻3・4合併号 國學院大學経済学会	全14p	平26. 3
著書	共	「呼び出し対応における学生との関わりから見えてきたもの及び学生対応の今後の展望」	『國學院大學教育開発推移新機構紀要』第5号 國學院大學教育開発推進機構	全9p	平26. 3

【平成21年度以前の主な研究業績等】 (5点まで)					
種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または該当ページ	発行年月
論文	単	「会計基準の変更が業績評価会計に与える影響の考察－予算管理を行っている事業部制組織を中心に－」	『國學院経済学』第56巻第2号 國學院大學経済学会	pp.107-122	平20. 2
論文	単	「コミットドコストのコントロールのための長期予算の活用－短期予算重視の企業経営の問題点と解決の指針－」	『國學院大學経済学研究』 國學院大學大学院経済学研究科	pp.1-17	平6. 3
論文	単	「予算管理における予算教育の意義－予算管理の構造的特質からのアプローチ－」	『國學院経済学』第39巻第3・4合併号 國學院大學経済学会	pp.27-44	平5. 11

【所属学会】国際会計研究学会、日本会計研究学会

【最近5年間の学会等および社会における主な活動】

【教育活動の自己評価】

専門基礎科目、専門応用科目の全て授業科目をプリント教材にし、授業進捗度に応じて適宜調整しながら授業を進め、学生からの評価を得ている。また質問をにそなえて履修者全てにメールアドレスを開示し、予約不要のオフィスアワーも行っている。学生に実践的な企業経営とその結果がどのように財務諸表に結びつかを具体的に教育するために、年2回の合宿での集中講義では自分で開発したビジネスゲームを利用している。このビジネスゲームは中小企業診断士協会東京支会所属の中小企業診断士によって、企業社員脅威気宇にも利用されている。

【研究活動の自己評価】

会計情報の中でも、予算管理情報は将来情報であるため企業外部利害関係者に開示されない情報である。しかし証券取引所が適時開示ルールによって開示を求めている「決算短信」には売上高、営業利益、経常利益、当期純利益、1株あたり当期純利益および配当などの将来情報が含まれている。また「統合報告書」は決算短信と同内容の将来情報が任意開示されている。会計情報の開示は、比較可能性の確保や利害関係者の意思決定をミスリードしないように、一定のルールを持って行われるべきであり、このルールの策定に向けての研究を行っている。

【職・氏名】教授 菅井 益郎 SUGAI Masuro
 【学 位】経済学修士
 【本学就任】昭和55年
 【略 歴】早稲田大学第一政治経済学部経済学科卒業
 一橋大学大学院経済学研究科博士課程単位取得満期退学
 東京大学社会科学研究所助手
 【専門分野】日本経済史(近現代)、日本公害史、エネルギー・環境問題

【最近5年間の主な研究業績等】 [平成22～26年度] (10点まで)

種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または 該当ページ	発行年月
評論・ 書評等	単	Three Years Since the TEPCO Fukushima Daiichi Nuclear Accident: Situation Not Under Control, Evacuees Out of Options	HUMAN No.19 the Ohdake Foundation	全20p中 pp.11-15	平26. 3
論文	単	「日本の近代化と公害・原発災害」	『共存学2:災害後の人と文化、ゆらぐ世界』 弘文堂	全264p中 pp.161-182	平26. 2
著書	単	「日本における産銅業の発達と鉱害問題」(第9章第1節)	『鉱毒史』(下巻) 鉱毒史編纂委員会(太田市只上)	全14p	平25. 12
論文	単	「原発事故調査報告が取り扱わなかったことなど」	『えんとろぴい』第74号 エントロピー学会	全93p中 pp.50-54	平25. 4
論文	単	「日本近代化の問題点を露にした東電福島原発震災」	『社会政策』4-3 ミネルヴァ書房	pp.51-63	平25. 3
評論・ 書評等	単	Two Years Since the TEPCO Fukushima Daiichi Accident: Still Not Under Control	HUMAN No.18 the Ohdake Foundation	全20p中 pp.13-16	平25. 3
論文	単	「飯館村の放射能汚染調査に参加して一足尾一水俣一福島:日本の公害の歴史から見えてくるもの」	エントロピー学会編『原発廃炉に向けて一福島原発同時多発事故の原因と影響を総合的に考える』 日本評論社	全238p中 pp.144-155	平23. 8
評論・ 書評等	単	「人々を難民化する文明とは一田中正造の警鐘」	『東京新聞』 中日新聞東京本社	全1p	平23. 7
論文	単	「公害史」	『日本経済史』5「高度成長期」 東京大学出版会	全381p中 pp.125-134	平22. 9
論文	単	「足尾鉱毒問題と民衆環境運動」	『公共する人間4 田中正造』 東京大学出版会	全294p中 pp.23-38	平22. 9

【平成21年度以前の主な研究業績等】 (5点まで)

種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または 該当ページ	発行年月
論文	単	「日本における住民に運動の現段階—反原発運動を中心として」上・下	『労働法律旬報』No.1564、 No.1566 旬報社	全70p中 pp.56-60、 全74p中 pp.50-56	平15. 11
論文	単	「公害の社会史—足尾鉱毒事件を中心として—」	『講座 環境社会学』第2巻(船橋晴俊編「加害・被害と解決過程」) 有斐閣	全271p中 pp.29-60	平13. 4
論文	単	“The Anti-Nuclear Power Movement in Japan” (ed.Helmar Krupp, Energy Politics and Schumpeter Dynamics)	ed.Helmar Krupp, Energy Politics and Schumpeter Dynamics — Japan’s Policy Between Short-Term Wealth and Long Term Global Welfare — [Berlin:Springer Verlag]	pp.286-306	平4. 5
著書	共	『通史足尾鉱毒事件1877-1984』	新曜社	pp.179-294	昭59. 4
論文	単	「日本資本主義の公害問題—四大銅山鉱毒・煙害事件—(一)・(二)」	『社会科学研究』30-No.4,6	No.4;pp.94-162, No.6;pp.75-150	昭54. 2

【所属学会】環境社会学会、金属鉱山研究会、社会政策学会、社会経済史学会、経営史学会、エントロピー学会

【最近5年間の学会等および社会における主な活動】

田中正造の生家の保存及び正造の思想の普及に関わる活動(平2～現在)、金属鉱山研究会運営委員(平4～平25)、渡良瀬川研究会副代表(平18. 12～平22. 11)、渡良瀬川鉱毒根絶太田期成同盟会『鉱毒史』編纂助言者(平8～現在)、渡良瀬川研究会代表幹事(平22. 12～現在)

【教育活動の自己評価】

つねに現場的発想を忘れず、また実際に現地に出かけての教育を心がけている。普段の講義でも現場の感覚を養うために映像やドキュメンタリーフィルムを用いている。とくに環境問題の講義では毎回自分で編集したビデオ教材や写真を使っている。演習は夏休みに2泊3日、もしくは3泊4日で各地のごみ問題について調査し報告書を作成する。環境教育研究プロジェクトの一員として総合講座を2コマ担当しているほか、11月の連休には1年おきに足尾銅山鉱毒事件と新潟水俣病の被害地を訪ねるバスツアーを行なっている。

【研究活動の自己評価】

鉱山公害の研究はライフワークで引き続き行なっている。他方原子力開発の問題点の研究についても継続しているが、3・11東電福島第一原発事故の衝撃はきわめて大きく、事故分析を行なうとともに、背景となっている社会組織と歴史的経緯の研究にいつそう力を入れていきたい。

【職・氏名】准教授 高木 康 順 TAKAGI Yasunobu

【学 位】経済学修士

【本学就任】平成4年

【略 歴】慶應義塾大学経済学部卒業

日本酸素株式会社

慶應義塾大学大学院経済学研究科経済学専攻博士課程後期単位取得満期退学

【専門分野】マクロ経済学理論、計量経済学

【最近5年間の主な研究業績等】 [平成22～26年度] (10点まで)					
種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または該当ページ	発行年月

【平成21年度以前の主な研究業績等】 (5点まで)					
種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または該当ページ	発行年月
論文	単	「投資オプションモデルの耐久消費財支出行動への応用」	『計量経済学のフロンティア』第5章 慶應義塾大学出版会	全194p中 pp.147-163	平18. 3
著書	共	『応用計量経済学I』	多賀出版	全394p中 p.1-152	平9. 9
論文	単	「アジアにおける国際産業連関構造の変化—日米との構造パターン比較」	『國學院経済学』第43巻第3号 國學院大學経済学会	pp.1-28	平7. 5
論文	単	「耐久消費財支出における流動性制約」	『國學院経済学』第43巻第1・2合併号 國學院大學経済学会	pp.1-27	平7. 3
調査・研究報告等	共	『環太平洋諸国における為替レート調整と関税引き下げの効果』	財団法人 国際交流財団	全199p	平2. 3

【所属学会】Royal Economic Society、Econometric Society

【最近5年間の学会等および社会における主な活動】

【教育活動の自己評価】

理論における数学表現を文系学生になじませるため、Excelによるグラフ表現の利用を追求している。現在の課題は方程式の解となるグラフの交点の効果的な設定方法である。統計学、計量経済学におけるデータ処理に関して、背景の数学的な理論を学生に理解させる手段としてのExcelの効果的な利用法を模索している。これまでのところ、Excelの操作自体について学生の抵抗は低いが、数学表現の直接的なExcel関数の利用や乱数シミュレーションは、グラフ表現を伴ったとしても学生から見た難易度を上げているように見える。

【研究活動の自己評価】

耐久消費財や投資における支出タイミングの決定モデルの構築を続けている。労働組合による労働供給に関する研究会を通じて、企業の資本・労働統合的な投資モデルの構築と実証にも研究対象を広げることになった。これまで内部労働市場における労働者の職務能力の自己評価と企業評価の差から長時間労働をモデル化しているが、付加的な条件が多く普遍性に欠けるなど課題が多い。

【職・氏名】教授 高橋 克秀 TAKAHASHI Katsuhide

【学 位】修士(学術)

【本学就任】平成20年

【略 歴】早稲田大学大学院社会科学部博士後期課程単位取得満期退学
日本経済新聞記者
神戸大学大学院経済学研究科准教授

【専門分野】アジア経済論、グローバル経済論

【受賞歴等】日本関税協会優秀論文賞(平成24年度)

【最近5年間の主な研究業績等】 [平成22～26年度] (10点まで)					
種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または該当ページ	発行年月
論文	共	Hubs and Authorities in the World Trade Network Using a Weighted HITS Algorithm	PLOS ONE		平26. 7
論文	単	「東日本大震災義援金の研究—なぜ被災者に届かなかったのか—」	『國學院経済学』第61巻第3・4合併号 國學院大學経済学会	pp.427-496	平26. 3
学会発表等	共	「討議記録(特集「東アジア地域の共存を考える」)」	『國學院大學研究開発推進センター研究紀要』7 國學院大學研究開発推進センター	pp.226-210	平25. 3
解説・解題等	単	「今、なぜ「東アジア地域の共存を考える」のか?」(特集「東アジア地域の共存を考える」)	『國學院大學研究開発推進センター研究紀要』7 國學院大學研究開発推進センター	pp.208-204	平25. 3
論文	共	「日本企業の輸出におけるFTA利用の実態：統計的特性と特定企業への集中」	『國學院経済学』第61巻第1号 國學院大學経済学会	pp.1-17	平24. 11
評論・書評等	単	書評 Asia 2050 : Realizing the Asian Century Asian Development Bank (アジア開発銀行)	『國學院経済学』第60巻第3・4号 國學院大學経済学会	pp.957-964	平24. 4
論文	単	「日本企業はFTA特恵関税を活用しているのか?：原産地証明書発給データとアンケート調査から」	『國學院経済学』第59巻第3・4号 國學院大學経済学会	pp.303-336	平23. 3
論文	単	「インドの主要経済統計と行政機構」	『國學院経済学』第59巻第2号 國學院大學経済学会	pp.231-253	平23. 2

【平成21年度以前の主な研究業績等】 (5点まで)					
種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または該当ページ	発行年月
論文	単	On the Use of Free Trade Agreement by Japanese Firms (with Shujiro Urata)	World Scientific 2010 chapter7	pp.241-257	平21. 10
著書	単	『アジア経済動態論—景気サイクルの連関と地域経済統合』(神戸大学経済学叢書 第14輯)	勁草書房	全240p	平19. 4
論文	単	「通貨金融危機と東アジアの景気サイクル」	『国民経済雑誌』第193巻第6号 神戸大学経済経営学会	pp.47-59	平18. 12
論文	単	「FTAと日本企業の行動：対メキシコ特恵関税の利用状況」	『国民経済雑誌』第193巻第3号 神戸大学経済経営学会	pp.77-92	平18. 3

【所属学会】東京経済研究センター(TCER)、日本経済研究センター(JCER)、国際開発学会、中国経済学会

【最近5年間の学会等および社会における主な活動】

北京大学国際関係学院国際政治経済研究センター リサーチ・フェロー(平14. 10～現在)、大阪商工会議所・京阪神FTA研究会コーディネーター(平16. 10～現在)

【教育活動の自己評価】

可能な限り、ひとりひとりの学生と対話するソクラテス・メソッドを実践している。

【研究活動の自己評価】

可能な限り、海外の専門誌に発表するよう努力している。

【職・氏名】教授 高橋 尚子 TAKAHASHI Naoko

【学 位】理学士

【本学就任】平成19年

【略 歴】東京女子大学文理学部数理学科卒業

富士通株式会社

ナウハウス有限会社代表取締役

【専門分野】情報教育、コンピュータ利活用、テクニカルコミュニケーション

【最近5年間の主な研究業績等】 [平成22～26年度] (10点まで)

種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または 該当ページ	発行年月
調査・研究報告等	共	「女子大学理系学科の意義について」	『研究報告』35 東京女子大学女性学研究所		平26. 3
調査・研究報告等	単	「大学向けTC専門課程の開始」	『Frontier』第8号 テクニカルコミュニケーター協会	全84p中 pp.50-59	平26. 2
その他	単	「技術情報を伝える際に注意すること」 「テクニカルコミュニケーターとしての人材育成」	月刊誌『標準化と品質管理』2014年1月号 日本規格協会	pp.11-17	平26. 1
学会発表等	単	「Considering the Technical Communicator Skills that Are Being Required for a New Era」	tcworld conference 2013 (独) tekcom		平25. 11
著書	共	『コンピューター入門演習(第3版)』	文化書房博文社	全160p中 pp.1-84	平25. 4
その他	単	講演『『日本語スタイルガイド』とTC技術検定』	「第4回産業日本語研究会・シンポジウム」予稿集 高度言語融合フォーラム(産業日本語研究会研究会・シンポジウム事務局)		平25. 3
学会発表等	単	研究発表「経済学部情報教育の10年～情報科教職課程開始から今日まで～」	國學院大學経済学会		平25. 2
学会発表等	単	発表「大学向けTC専門課程の開始」	第2回テクニカルコミュニケーション学術研究会資料集 テクニカルコミュニケーション学術研究会	全32p中 pp.13-21	平24. 10
調査・研究報告等	共	「TC専門教育カリキュラムの検討」	『Frontier』2011特別号 テクニカルコミュニケーター協会	全85p中 pp.54-58	平23. 12
著書	共	『トリセツのつくりかた:制作実務編』	テクニカルコミュニケーター協会	全777p	平22. 9

【平成21年度以前の主な研究業績等】 (5点まで)

種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または 該当ページ	発行年月
著書	共	よくわかるマスター『ITパスポート試験 対策テキスト&問題集』平成22年度版	FOM出版	425	平21. 12
学会発表等	単	「理系女子にIT産業はどう写っているのかー「情報と職業」の授業を通してー」	情報システムと社会環境研究会 研究報告 2009-IS-109 情報処理学会		平21. 9
著書	共	『日本語スタイルガイド』	テクニカルコミュニケーター協会	全262p	平21. 7
学会発表等	単	「グループウェアでのディスカッションと成果物作成時の役割の持たせ方」	コンピュータと教育研究会 研究報告 2008-CE-94 情報処理学会	全7p	平20. 5
教科書・参考書	共	高校教科書『新・情報C』	日本文教出版		平19. 4

【所属学会】情報処理学会、情報システムと社会環境研究会、日本テスト学会、テクニカルコミュニケーション学術研究会

【最近5年間の学会等および社会における主な活動】

一般財団法人 テクニカルコミュニケーター協会 専務理事(平21. 1～現在)、
情報処理学会 情報システムと社会環境研究会 幹事(平成24.4～現在)

【教育活動の自己評価】

情報系の講義科目『情報システム』『情報通信ネットワーク』では、激変する情報通信社会に対応し、最新の技術動向を含め、毎年授業内容とレジュメを更新した。便利になる情報社会を支える情報技術はだんだんと複雑になるため、その仕組みをできるだけわかりやすく解説するよう心掛けた。さらに、授業のはじめに、日々発生するIT関連の事象や事件を取り上げ、学生が身近に感じるよう仕向けた。コンピューターの実習科目『コンピュータと情報A/B』では、普通科高校「情報科」の指導要綱が改訂されたことで、PCがきちんと使えない学生が現れてきた。これに対し、商業科で資格まで取得し使いこなせる学生もいるため、技能は二分している。そこで、使えない学生に合わせ、基礎からきちんと実習を構成し直した。『コンピュータと情報C2』では、授業範囲であるネットワーク活用やネットワークコミュニケーションについて、学生は十分使えるようになっている。そこで、実習内容をさらに高度な活用方法にシフトし、情報の評価、より適切な情報検索力、さまざまな場面における説明技術、情報伝達力、表現力などを養うようにした。2013年度から学内のメールシステム・グループウェアサイトが変更になり、最新のグループウェアシステムを利用するなど、新しいことにも挑戦を続けている。授業外のオフィスアワーでは、講義に欠席した学生へのフォロー、パソコンのトラブル対応から購入相談、IT系企業へ就活する学生の相談にもなった。

【研究活動の自己評価】

「コンピュータ利活用」では、学部共同研究を通して、1年生の必須科目「コンピュータと情報A」、学部選択必須科目の「コンピュータと情報B」のテキスト『コンピュータ入門演習』を実習環境の変化に伴い、2回改訂した。「情報教育」では、情報処理学会「情報システムと社会環境研究会」の運営委員として情報システム教育の研究および、大学入試に「情報科」を導入する活動「情報入試WG」に参加している。また、「テクニカルコミュニケーション」は、業務で培われた知識と技術の集大成を行い、高等教育におけるカリキュラムの策定、課程制度の創設を行った。さらに、国内シンポジウムだけでなく、海外団体の活動に参加し、ドイツや中国において活動成果の発表を行った。

【職・氏名】教授 田原裕子 TAHARA Yuko
 【学 位】博士(学術)(平成8年3月 東京大学 博総合第75号)
 【本学就任】平成14年
 【略 歴】お茶の水女子大学文教育学部地理学科卒業
 東京大学大学院総合文化研究科広域科学専攻博士課程修了
 東京大学大学院総合文化研究科・教養学部助手
 【専門分野】地域社会問題、高齢社会と社会保障

【最近5年間の主な研究業績等】 [平成22～26年度] (10点まで)					
種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または該当ページ	発行年月
評論・書評等	単	井上孝・渡辺真知子編著『首都圏の高齢化 人口学ライブラリー14』	『地理学評論』87巻6号	pp. 463-464	平26. 11
学会発表等	単	「引退移動の勝者と敗者-2010年国勢調査にもとづく市町村別の分析-」	『日本地理学会発表要旨集』84 日本地理学会	全44p	平25. 9
編著	共	『地域と人口からみる日本の姿』	古今書院	全126p	平23. 3
調査・研究報告等	共	『高齢化及び人口移動に伴う地域社会の変動と今後の対策に関する学際的研究報告書』	全労災協会	pp.37-40	平22. 11
論文	単	「高齢者の居住地選択と大都市圏」	『新都市』10 都市計画協会	pp.18-22	平22. 10

【平成21年度以前の主な研究業績等】 (5点まで)					
種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または該当ページ	発行年月
論文	単	「高齢者の居住地移動と地域の経済・財政に関する考察」	『人口減少社会の家族と地域』 日本評論社	全407p中 pp.127-155	平20. 3
編著	共	『中国都市の生活空間 社会構造・ジェンダー・高齢者』	ナカニシヤ出版	全192p中 pp.140-188	2008年
論文	単	「引退移動の動向と展望」	『人口減少と地域』 京都大学学術出版会	pp.129-147	平19. 9
論文	単	「合衆国におけるリタイアメントコミュニティ産業の展開ーデル・ウェブのサンシティ・アリゾナを中心にー」	『國學院経済學』第55巻第2号 國學院大學経済学会	pp.209-230	平19. 3
論文	共	「高齢者の地理学ー研究動向と今後の課題ー」	『人文地理』55巻5号 人文地理学会	pp.46-67	平15. 10

【所属学会】日本地理学会、人文地理学会、日本老年社会科学会、都市計画学会

【最近5年間の学会等および社会における主な活動】

東京商工会議所渋谷支部「代官山スタイル研究会」委員(平21. 4～平23. 3)
 公益社団法人日本地理学会集会専門委員(平26.4～現在)

【教育活動の自己評価】

講義科目(社会保障の基礎、少子高齢社会と社会保障)については、履修者の内容の理解度の向上と、ノートテイクの効率化、精度の向上のために、パワーポイントを使用する授業スタイルに切り替える。演習科目については、グループワークを増やし、学びあう体制をつくる。加えて、専門演習については現地調査の割合を増やし、教育の現場化を進める。

【研究活動の自己評価】

第一に、高齢人口移動について引き続き研究を進める。第二に、本学が推進する研究プロジェクト(「渋谷学」)の一環として経済学部が中心となって叢書を出版するため、その執筆と編集のための研究を進める。

【職・氏名】教授 茅野 信行 CHINO Nobuyuki

【学 位】商学修士

【本学就任】平成19年

【略 歴】中央大学大学院商学研究科修士課程修了
コンチネンタル・グレイン・カンパニー
ユニパック・グレイン・リミティッド

【専門分野】グローバル企業とその経営戦略、ビジネスリスク・マネジメント

【最近5年間の主な研究業績等】 [平成22～26年度] (10点まで)

種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または 該当ページ	発行年月
その他	単	講演「日本への飼料穀物供給と今後の展望」、パネルディスカッション「TPPと日本の飼料業界の将来展望」	コーン・カンファレンス 於 キャピトルホテル東急		平26. 1
その他	単	「中国の大豆輸入と世界の需給」	『農業と経済』臨時増刊号 食のシステムクライシス 昭和堂		平25. 4
著書	単	『東西冷戦終結後の世界穀物市場』	中央大学出版部	全288p	平25. 2
論文	単	「米国の作物保険を考える」	『Feed Trade』 ①2012年11-12月号、②2013年1-2月号、③2013年3-4月号 飼料輸出入協議会		平24. 11
論文	単	「穀物自給のカギを握る中国のGM種子開発」	『Feed Trade』 ①2011年11-12月号、②2012年1-2月号、③2012年3-4月号 飼料輸出入協議会		平24. 11
その他	単	「減らない需要で価格高騰 国内外の経済を直撃か」	『週刊エコノミスト』		平24. 9
その他	単	「巨人カーギル、追走するADM、バンゲ……5分でわかる『5大穀物メジャーの実力&勢力図』」	『SAPIO』		平23. 3
著書	共	『エコリーダー公式テキスト<食・農>エコリーダーになろう 食育編』	中央経済社		平23. 3
その他	単	「ニュース深読み: 穀物高騰の背景」(NHK総合テレビ)			平23. 2
その他	単	「視点論点: 食料価格高騰」(NHK教育テレビ)			平23. 2

【平成21年度以前の主な研究業績等】 (5点まで)

種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または 該当ページ	発行年月
論文	単	「主要国の穀物輸出規制: コメと小麦の価格関係から考える」	『國學院経済学』 第58巻第1号 國學院大學経済学会	pp.1-42	平22. 3
著書	単	『食糧格差社会』	ビジネス社	全238p	平21. 12
その他	単	「世界シェア7割超 穀物市場の真の主役 穀物メジャー」	『週刊東洋経済』		平21. 10
論文	単	「穀物高騰と穀物メジャー」	『明日の食品産業』 平成21年第7・8号 通巻398号 財団法人食品産業センター	pp.13-21	平21. 7
著書	単	『アメリカの穀物輸出と穀物メジャーの発展』(3訂版)	中央大学出版部	全304p	平21. 3

【所属学会】日本フードシステム学会、国際戦略経営研究学会

【最近5年間の学会等および社会における主な活動】

大阪堂島商品取引所関東コメ委員会委員長(平25. 8～現在)

【教育活動の自己評価】

グローバル時代の世界共通語は英語である。国際教養の授業で留学生諸君に経営学を中心に英語で授業を行っているが、近年日本人学生の受講者が増えてきた。日本人学生も手ほどき次第で、英語の授業に興味を持ってくれることがわかり、心強く思っている。

【研究活動の自己評価】

ヘッジファンドのレバレッジ比率の拡大と投資リスクの巨大化に対し、メディア(日経CNBC、共同通信など)を通じて警告を発してきた。2014年9月中旬、アメリカ最大の年金基金カルパースが、高い利回りをねらうヘッジファンドへの投資を停止することを発表した。損失リスクの大きいヘッジファンドからの投資資金の引き上げは、レバレッジ至上主義のデリバティブ投資の見直しにつながるから、金融の健全化に資することになり、むしろ好ましいと考える。国際金融の健全化についてさらに研究を深めたい。

【職・氏名】教授 中馬祥子 CHUMA Shoko

【学 位】社会学修士

【本学就任】平成14年

【略 歴】ロンドン大学大学院(ワイ・カレッジ)農業経済学コース修士課程修了

東京大学大学院人文社会系研究科社会文化研究専攻社会学専門分野博士課程満期退学

日本学術振興会特別研究員

【専門分野】発展途上国、国際経済、環境・開発問題、女性労働論

【最近5年間の主な研究業績等】 [平成22～26年度] (10点まで)

種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または 該当ページ	発行年月
学会発表等	単	「現代日本の動態からみた国際不等価交換論」	南開大学日本研究院、南開大学世界近代史研究センター共催「日本近代化過程における改革・社会変動とガバナンス 国際シンポジウム」		平26. 9
学会発表等	単	Attempts at Monetary Relations beyond Market Order: towards More Egalitarian Estimation of Labour	The 15th AHE (Association of Heterodox Economics) Conference		平25. 7
学会発表等	単	The Unhappy Divorce of Feminism and Marxian Economics: a Critique of Dichotomy between Productive and Reproductive Labour	Political Economy and the Outlook for Capitalism Congress, Joint Conference AHE/IIPPE/FAPE		平24. 7
論文	単	人間関係構築型労働が抱える「コスト病」問題	『國學院経済学』第59巻第3・4合併号 国学院大学経済学会	全37p	平23. 3

【平成21年度以前の主な研究業績等】 (5点まで)

種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または 該当ページ	発行年月
論文	単	「異種労働における『同一の価値』とは何か? : 同一価値労働同一賃金論についての一検討」	『國學院経済学』第58巻第1号 國學院大學経済学会	pp.43-73	平21. 12
著書	共	「現代資本主義におけるインフォーマル経済の位相」	小幡道昭他編『マルクス理論研究』 御茶の水書房		平19. 3
論文	単	「マルクス経済学とフェミニズムの不幸な離婚: ケアワーク特殊論への批判を中心に」	『國學院経済学』第55巻第1号 國學院大學経済学会	pp.1-48	平18. 11
論文	単	「開発経済における非市場労働の位置づけ: ジェンダー統計整備の歩みから」	『國學院経済学』第53巻第1号 國學院大學経済学会	pp.75-101	平17. 2
著書	共	『現代社会学における歴史と批判(上巻): グローバル化の社会学』	東信堂	全240p中 pp.13-44	平15. 3

【所属学会】日本社会学会、経済理論学会

【最近5年間の学会等および社会における主な活動】

【教育活動の自己評価】

講義系科目、学外調査実習、及び演習を担当している。このうち講義系科目については、多くの場合、キーワードや主要ポイントを書き込ませる形のレジュメを配布し、それに沿って授業を行っている。この形式の授業では、板書や口頭説明がわかりやすいという評価を得る割合が高く、反対に、臨時に担当し、レジュメを準備しなかった科目は、これらの評価が相対的に低かった。レジュメがない分を板書で補おうとして、板書の情報が過多になってしまったものと反省している。実習系授業については、福島県中山間地域でむらおこし活動を行っているNPOや地域の方々との人間関係を育みながら、夏冬2回ずつ学生を受け入れて頂く土台を固めてきた。演習については、学生が自分の力で「なぜ?」と問い、その問いに対して自分で答えを導き出すために文献調査や聞き取りを適切に行えるようにすることを目標に、私自身が「教え過ぎない」よう、常に心がけてきた。代わりに、文献講読を多めに行うと共に、学生報告に対しては、学生が立てる「問い」と「答え」(勉強を基に学生自らが導いた結論)が整合的につながっているか徹底的にチェックし、また学生相互でもこの点を中心に評価をさせるよう試みた。結果として、2年半私の演習を履修して来た学生たちは、程度の差こそあれ、論理的にものを考え、目的に沿って情報収集する能力、相手に過不足なく伝える能力が身についたのではないかと考えている。

【研究活動の自己評価】

過去5年間は、大学の事務的業務の方に意識が向き、若干、研究活動が疎かになっていた点を反省している。そんな中でも、最近3年間は海外での学会報告を年に1回ずつ行うことを自らに義務づけ、実行してきた。報告内容はいずれも、介護労働など、社会貢献を伴う様々な経済活動が、社会的必要の大きさにもかかわらず、市場では低い評価を得ざるを得ないのはなぜか、という問題に関わるもので、近いうちに論文の形で発表することを予定している。来年度は国内留学の機会を頂くことが出来そうなので、これを機に、これまで書きためた研究成果を一冊の著作の形にとりまとめた。

【職・氏名】教授 土田 壽孝 TSUCHIDA Toshinori

【学 位】経済学修士

【本学就任】昭和62年

【略 歴】同志社大学大学院経済学研究科経済政策専攻博士後期課程年限満了退学

【専門分野】金融論、現代ファイナンス、ファイナンシャル・エンジニアリング、マクロ経済学、ミクロ経済学

【最近5年間の主な研究業績等】 [平成22～26年度] (10点まで)

種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または 該当ページ	発行年月
解説・ 解題等	単	「総合取引所は実現するのか」	『週刊先物ジャーナル』1219 先物ジャーナル社		平26. 2
翻訳・ 翻刻書	共	「連邦預金保険公社2012年次報告書」	農村金融研究会		平26. 2
翻訳・ 翻刻書	共	「連邦クレジット・ユニオン2011年 年次報告書」	農村金融研究会	全90p	平25. 3
翻訳・ 翻刻書	共	「連邦預金保険公社2011年次報告書」	農村金融研究会	全208p	平25. 1
翻訳・ 翻刻書	共	『全米クレジット・ユニオン・ハンドブック』	農村金融研究会	全150p	平24. 3
翻訳・ 翻刻書	共	『連邦預金保険公社 2010年次 報告書』及び 関連資料	農村金融研究会	全225p	平24. 1
辞書・ 事典等	単	「CPM -Credit Portfolio Management-」	『2011年版 金融時事用語集』 金融ジャーナル社	全300p中 pp.151-152	平22. 12

【平成21年度以前の主な研究業績等】 (5点まで)

種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または 該当ページ	発行年月
解説・解 題等	単	「サブプライム問題と金融市場の混乱－日本 経済への影響と今後の展望－」	『院友会報』335号 國學院大学院友会	p.9	平21. 1
学会発表 等	単	The Home Bias Puzzle: Evidence From Australia Speaker: Xuan Vinh VO University of New South Wales, Australia Discussant: Toshinori TSUCHIDA Kokugakuin University, Japan	The 6th International Conference of the Japan Economic Policy Association December 8 ~ 9, 2007 at Hosei University, Tokyo, Japan 6th Conference Japan Economic Policy Association	全11p	平19. 12
論文	単	「我が国のCPMの展望－信用リスクはどこま で排除可能か－」	『月刊 金融ジャーナル』通巻607号 株式会社 金融ジャーナル社	pp.33-38	平19. 10
論文	単	「年金基金ALMにおけるPIとデュアレーショ ン・ギャップ分析の応用」	『生命保険に関する調査研究報告』 第6号 簡易保険文化財団	pp.34-39	平6. 9
論文	単	「ポートフォリオ・インシュアランスの性質につ いて」	『インベストメント』第45巻第4号 大阪証券取引所	pp.2-16	平4. 8

【所属学会】日本証券経済学会、日本経済学会、日本財政学会、日本経済政策学会、金融学会、日本ファイナンス学会

【最近5年間の学会等および社会における主な活動】

デリバティブズ投資組合研究会代表幹事(平2. 6～現在)、私的年金システム開発研究会共同主催(平3. 5～現在)、「身近な出来事についての地道なボランティア・救援活動を発見・実践するネットワーク」代表(平5. 8～現在)、進化経済学研究会会員(平5. 9～現在)、『日本国家と民族の新しい存在根源認識を探究する会』代表世話人(平8. 8～現在)

【教育活動の自己評価】

証券分析の講義では、先物・オプション等のデリバティブズの理解を向上させるために従来の二次元グラフに加えて、三次元の立体図式を開発し、経時的に作動する形式にして、価格変化と経時的価値変化を同時に表現できる教材を開発した。これにより、直感的にデリバティブズの収益特性と危険性を認識できるようになり、学生たちの理解力は大きく進歩した。

金融理論の講義では、文献検索と読了を進歩させるために、タブレット端末の利用を導入した。講義資料をPDF化して、学生にダウンロードさせることにより、モバイル機器の特性を生かして、いつでも気軽に文献を読めるようにした。このことは学生の基礎知識の習得水準を著しく向上させたという実績を生んだ。

【研究活動の自己評価】

ここ数年のFDICの機能研究により、ドッド・フランク法の制定による安全網の変質が確認できた。このドッド・フランク法と金融監督システムとの関連が、新しい金融安全網の本質の理解につながると思われる。ドッド・フランク法に含まれる施策がもつ未解明の機能を分析することにより、金融監督のもっと深い本質的変化を理解していくことができるだろう。

【職・氏名】教授 中 泉 真 樹 NAKAIZUMI Maki

【学 位】経済学士

【本学就任】昭和62年

【略 歴】東京都立大学経済学部経済学科卒業

東京大学大学院経済学研究科(第2種)博士課程単位取得満期退学

東京都立大学経済学部助手

【専門分野】応用ミクロ経済学、産業組織論、公共経済学、医療経済学

【最近5年間の主な研究業績等】 [平成22～26年度] (10点まで)					
種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または該当ページ	発行年月
著書	共	『平成26年度 國學院大学経済学部 日本の経済』	國學院大学経済学部	全145p	平26. 3
著書	共	『医療経済学講義』	東京大学出版会	全330p	平23. 9

【平成21年度以前の主な研究業績等】 (5点まで)					
種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または該当ページ	発行年月
論文	共	「保険の経済理論からみた「混合診療」」	田近栄治・佐藤主光編『医療と介護の世代間格差 現状と改革』東洋経済新報社	全342p中 pp.117-144	平17. 9
論文	単	「情報の非対称性のもとでの医療技術の選択と最適医療保険」	『医療と社会』 Vol. 14 医療科学研究所	pp.111-125	平16. 12
論文	単	「垂直的事業展開から水平的事業展開へ」	『國學院経済学』 第50巻第2号 國學院大學経済学会	pp.248-296	平14. 6
論文	単	「社会保険と保険者機能」	一橋大学経済研究所 ディスカッションペーパー	全32p	平14. 3
著書	共	『ミクロ経済学 理論と応用』	東洋経済新報社	全440p	平12. 6

【所属学会】日本経済学会(旧理論計量経済学会)

【最近5年間の学会等および社会における主な活動】

東京経済研究センター(TCER)研究員(平8. 4～現在)

【教育活動の自己評価】

経済学部必修科目「日本の経済」のテキストの執筆に参加し、また、授業を担当した。教養総合主題講座「情報の科学」では、「数学再入門 講義ノート」を執筆し、また、講義を担当した(平成26年度は別の教員が担当)。「日本の経済」のような基礎科目や理論系の科目では、学生の授業評価が分かれ、その一方の極にある「わかりにくかった」等の評価をする学生への対応が課題となっている。「医療の経済」など、CP教室を利用した授業では、双方型・学生参加型・最近でいうところのアクティブラーニングの手法をかなり前から取り入れ、学生の授業評価は高い。よって、今後とも、その質を維持する努力を重ねたい。

【研究活動の自己評価】

ここ数年の研究テーマは、医療保険等の制度設計、「医療関連の様々な何か」(たとえば、臓器など)の市場化に関する、理論的かつ哲学的な考察である。まだ、十分な研究成果の発表にはいたっていないが、これまでの経済学が概して無視してきた「選好の内生化」や、最近発展しつつある行動経済学の知見を取り入れるなど、新たな洞察のための作業を行いつつある。そうした取り組みのため、平成25年10月から平成26年9月までの期間、国内派遣研究の機会を大学から付与された。

【職・氏名】助教 中 田 有 祐 NAKATA Yusuke

【学 位】修士(商学)

【本学就任】平成25年

【略 歴】早稲田大学大学院商学研究科修士課程 修了
早稲田大学大学院商学研究科博士後期課程 満期退学
早稲田大学大学院ファイナンス研究科 講師

【専門分野】財務会計、国際会計

【最近5年間の主な研究業績等】 [平成22～26年度] (10点まで)					
種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または 該当ページ	発行年月
論文	単	「公正価値測定とその適用—金融商品会計を めぐる国際的な動向を中心として—」	『税経通信』第67巻第8号 税務経理協会	pp.184-192	平24. 7
論文	単	「会計上の認識および測定に関する考察— Unit of Accountの視点から—」	『會計』第158巻第1号 森山書店	pp.127-138	平24. 7
学会発表 等	単	「会計上の認識および測定に関する考察— Unit of Accountの視点から—」	日本会計研究学会第70回大会(於 久留米大学)		平23. 9
論文	単	「資産の会計処理単位に関する考察」	『商学研究科紀要(早稲田大学)』 第71号 早稲田大学大学院商学研究科	pp.303-324	平22. 11

【平成21年度以前の主な研究業績等】 (5点まで)					
種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または 該当ページ	発行年月

【所属学会】日本会計研究学会、国際会計研究学会

【最近5年間の学会等および社会における主な活動】

【教育活動の自己評価】

1年次の基礎科目である基礎演習において、グループワーク中心の授業を展開し、学生が主体的に学ぶ意識を身に付けることができるよう努めている。また、同授業において、グループワークのなかで、他の学生に対する客観評価や振り返りシートによる自己評価を行わせている。このことにより、知識・関心・意欲等について人より優れている点・至らない点を学生自らが自覚する効果、学生同士が刺激し合い高め合う関係を築く効果が期待される。また、専門科目においては、初回の授業時にアンケートを行い学生の知識レベルに応じた授業展開を行う、小テストを行い理解レベルを適宜把握し授業レベルの調整を行う等の工夫を行っている。

【研究活動の自己評価】

ここ数年は、財務会計のなかでも、会計処理単位に関する研究を中心に行っている。財務会計のなかできわめて重要な領域であり、概念分析等の基礎研究が活発になされるべき領域であるが、先行研究が国際的にも僅少な領域でもある。先行研究が少ない領域であることも原因の一つであるが、論文自体は、2010年に1本、2012年に2本執筆したのみであり、最近では成果を出すまでの時間がかかりかかっている。良質な研究成果を出すことが何より求められるところではあるものの、今後は、成果物の公表により力点を置くよう意識する心算である。

【職・氏名】教授 根岸毅宏 NEGISHI Takehiro
 【学 位】博士(経済学)(平成13年3月 國學院大學 経甲第5号)
 【本学就任】平成15年
 【略 歴】國學院大學経済学部第二部経済学科卒業
 國學院大學大学院経済学研究科博士課程後期単位取得満期退学
 北星学園大学社会福祉学部福祉計画学科専任講師
 【専門分野】財政学

【最近5年間の主な研究業績等】 [平成22～26年度] (10点まで)					
種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または 該当ページ	発行年月
著書	共	『日本の経済』	國學院大學経済学部	全146p中 pp.120-131	平26. 3
著書	共	『アメリカ経済とグローバル化(第2版)』	学文社	全153p中 pp.100-114	平26. 1
学会発表 等	単	書評 吉田健三著『アメリカの年金システム』 日本経済評論社、2012年	社会政策学会 第127回大会		平25. 10
著書	共	『アメリカ経済とグローバル化』	学文社	全153p中 pp.100-114	平25. 4
編著	共	『アメリカの分権と民間活用』	日本経済評論社	全239p中 pp.27-71	平24. 8
論文	単	「バージニア州の1995年州福祉改革と分権 システム」	『國學院経済学』第60巻第3・4合併号 國學院大学経済学会	全31p	平24. 3
論文	単	「日米の政府間財政関係ーアメリカの1996 年福祉改革からの示唆ー」	『國學院経済学』第60巻第1・2合併号 國學院大学経済学会	全44p中 pp.113-156	平23. 5
論文	単	A Comparative Study of Intergovernmental Fiscal Relations in Japan and the United States	The Kokugakuin University Economic Review Vol. 60 No. 1・2 Kokugakuin Daigaku Keizai Gakkai	全52p中 pp.443-494	平23. 5
著書	共	『アメリカ・モデル 福祉国家Ⅰ』(シリーズ アメリカ・モデル経済社会 第4巻)	昭和堂	全254p中 pp.19-65	平22. 6

【平成21年度以前の主な研究業績等】 (5点まで)					
種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または 該当ページ	発行年月
編著	共	『社会保障と地域』(シリーズ 福祉国家と地 域)	学文社	全214p中 pp.30-59(第 2章の一部を 担当)	平20. 4
著書	単	『アメリカの福祉改革』	日本経済評論社	全229p	平18. 11
著書	共	『福祉の市場化を見る眼』(講座・福祉社会第 11巻)	ミネルヴァ書房	全319p中 pp.185-210	平16. 10
著書	共	『地方財政権』(財政法叢書18)	龍星出版	全194p中 pp.56-84	平14. 3
著書	共	『消費税法施行10年』(租税理論研究叢書 10)	法律文化社	全188p中 pp.137-160	平12. 11

【所属学会】日本財政学会、日本租税理論学会、社会政策学会、日本社会福祉学会、日本財政法学会、日本地方財政学会、アメリカ学会

【最近5年間の学会等および社会における主な活動】

【教育活動の自己評価】

学部の必修科目である「日本の経済」では、3つの工夫を実施した。第1に、担当教員5名とイラストを取り入れたテキストを作成した。第2に、テキストのページを指定して時間外の学習時間を明示した。第3に、学習の定着と出席率の向上を意図して授業開始時に練習問題を実施した。その結果、第1に、遅刻者が減少するとともに、出席率が向上した。第2に、学期末試験を難しくしたにもかかわらず平均点は前年を維持できた。「財政の基礎」では、3つの工夫を実施した。第1に、授業への興味を引くために、第1回目の講義で収入と家族構成を想定させて所得税・住民税、社会保険料の計算を実施した。第2に、授業で学んだことに関連するニュースを見せることで、大学での学びを実感させた。第3に、受講者数が50人程度であった場合は、授業を2回実施した後に1回のグループワークを取り入れて、学習の定着と理解を促した。その結果、授業内容に学生の興味を引きつけるとともに、授業での学びを実感させることができた。「演習」では、学生が主体的に学習に取り組めるように、3年次にはグループ論文を作成して他大学との討論会に参加することを課し、4年次に卒業論文を作成して発表することを課した。これらの課題を毎年、学生は達成していることで、主体的に学習する姿勢が身につけていると思われる。

【研究活動の自己評価】

アメリカ福祉国家を中心に研究を進めている。アメリカ福祉国家は「分権的な小さな政府」という特長を持つので、これを成り立たせている基本構造、すなわち①NPO等の民間の組織と活動、②市場メカニズムの活用、③これらを促進するための租税優遇措置、の3つ領域の具体的な仕組みを明らかにすることを、主たる課題としている。この研究では、公的部門と私的部門を研究対象にすることで、それぞれを別々に論じられることが多いアメリカ福祉国家システムについて、より正確な全体像を示すを試みる。

【職・氏名】准教授 野田 隆夫 NODA Takao
 【学 位】経済学修士
 【本学就任】昭和54年
 【略 歴】京都大学経済学部経済学科卒業
 大阪大学大学院経済学研究科博士課程単位取得満期退学
 【専門分野】理論経済学

【最近5年間の主な研究業績等】 [平成22～26年度] (10点まで)					
種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または 該当ページ	発行年月

【平成21年度以前の主な研究業績等】 (5点まで)					
種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または 該当ページ	発行年月
論文	単	「技術革新と過剰設備」	『國學院経済学』第43巻第4号 國學院大學経済学会	pp.17-23	平7.4
論文	単	「固定資本とその寿命」	『國學院経済学』第34巻第1号 國學院大學経済学会	pp.72-86	昭63.4
著書	共	『マクロエコノミクス』	昭和堂	pp.255-284	昭61.6
論文	単	「固定資本と結合生産」	『國學院経済学』第29巻第3号 國學院大學経済学会	pp.393-410	昭59.4
翻訳・ 翻刻書	共	『エイドリアン・ウッド利潤の理論』	ミネルヴァ書房	全206p	昭54.4

【所属学会】

【最近5年間の学会等および社会における主な活動】

【教育活動の自己評価】

1年次必修科目「日本の経済」では、担当で教科書を作成し(第8、9章を担当)、毎年改訂しているが、平成25年度より毎回授業開始前に小テストをすることによって理解度と授業への出席率を上がったように思われる。「経済理論入門」「マクロ経済学」では、「ノートの素」の配布や6回以上レポート課すことなどによって、物事を論理的にきちんと説明する力をつけさせるように努力しているが、試験結果を見るかぎり効果が上がっているとは言い難い。

【研究活動の自己評価】

(コメント無し)

【職・氏名】教授 野村 一夫 NOMURA Kazuo

【学 位】文学修士

【本学就任】平成13年

【略 歴】創価大学文学部社会学科卒業

創価大学大学院文学研究科社会学専攻博士後期課程単位取得満期退学

【専門分野】メディア文化論、社会理論、医療文化論、情報倫理

【最近5年間の主な研究業績等】 [平成22～26年度] (10点まで)					
種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または 該当ページ	発行年月
著書	単	『ゼミ入門－大学生の知的生活第一歩』	文化書房博文社	全162p	平26. 12
著書	共	『よくわかる社会学史』	ミネルヴァ書房	全218p中 pp.60-71	平23. 4

【平成21年度以前の主な研究業績等】 (5点まで)					
種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または 該当ページ	発行年月
論文	単	「社会学を伝えるメディアの刷新」	『社会学評論』 232号 日本社会学会(発売 有斐閣)	pp.506-523	平20. 3
著書	単	『インフォアーツ論－ネットワーク的知性とは なにか?』	洋泉社	全192p	平15. 1
編著	共	『健康論の誘惑』	文化書房博文社	全244p中 pp. iii - v , 27-101, 203-229	平12. 10
著書	共	『文化現象としての癒し』	メディカ出版	全224p中 pp.77-141	平12. 10
著書	単	『リフレクション－社会学的な感受性へ』	文化書房博文社	全304p	平6. 7

【所属学会】日本社会学会、情報通信学会、日本社会情報学会、日本マスコミュニケーション学会、情報メディア学会

【最近5年間の学会等および社会における主な活動】

社会学専門ウェブサイト「ソキウス」を制作公開(平7～現在)、

法政大学大原社会問題研究所公式サイトOISR.ORG企画制作担当(平11～平23)

【教育活動の自己評価】

500人教室での授業がなくなり、250人以下になったため、教室管理が楽になり、講義に専念できるようになった。チャイムとほぼ同時に授業をするよう心がけた(当たり前のことではあるが)。少人数授業はかなりトレーニング的にしている。かなり手ごたえがある。

【研究活動の自己評価】

この5年間、家族の病気、自分の病気の治療、自宅の建築等、手のかかることが重なり、ほとんど論文・著作にまとめることはできなかった。しかし、それらの下準備となる研究はかなり進んだ。これから2冊の本を出版することになっているので、着実に形にしていきたい。

【職・氏名】教授 橋元 秀一 HASHIMOTO Shuichi

【学 位】経済学士

【本学就任】平成4年

【略 歴】横浜国立大学経済学部経済学科卒業

東京大学大学院経済学研究科第2種博士課程理論経済学経済史学専攻単位取得満期退学
財団法人労働科学研究所社会科学部主任研究員

【専門分野】労働経済学、社会政策、労務管理論

【最近5年間の主な研究業績等】 [平成22～26年度] (10点まで)

種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または該当ページ	発行年月
教科書・参考書	共	『日本の経済』	國學院大學経済学部	全145p	平26. 3
評論・書評等	単	BOOK REVIEWS 岩崎馨・田口和雄編著『賃金・人事制度改革の軌跡－再編過程とその影響の実態分析－』	『日本労働研究雑誌』 No.627 独立行政法人 労働政策研究・研修機構	全107p中 pp.83-85	平24. 9
学会発表等	単	「労働組合による労働者供給事業の可能性－非正規労働問題の解決に向けて」	『労働法律旬報』 No.1772 旬報社	全81p中 pp.24-29	平24. 7
論文	単	「労働組合による労働者供給事業の諸類型と可能性」	『國學院経済学』 第60巻第3・4合併号 國學院大學経済学会	全374p中 pp.165-184	平24. 3
調査・研究報告等	共	『労働組合による労働者供給事業に関する調査研究報告書』	國學院大學労供研究会		平24. 2
論文	単	「第6章 非正規従業員の組織化の動き」	『講座 現代の社会政策 第5巻 新しい公共と市民運動・労働運動』 明石書店	全233p中 pp.144-169	平23. 9
その他	単	「組合機能の点検と改革」 (Rengoアカデミー・マスターコース講義録 No.15)	(社)教育文化協会	全85p中 pp.1-43	平22. 9
論文	単	「非正規雇用問題と企業別組合の役割およびその展望」	社会政策学会誌『社会政策』 第2巻第1号 社会政策学会本部	全140p中 pp.27-37	平22. 6

【平成21年度以前の主な研究業績等】 (5点まで)

種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または該当ページ	発行年月
論文	単	「企業別組合における非正規従業員の組織化事例の示すこと」	『日本労働研究雑誌』 No.591 独立行政法人 労働政策研究・研修機構	全92p中 pp.41-50	平21. 10
調査・研究報告等	単	「成果主義の実態は「能力主義管理」の整備・徹底化－真の能力主義を求めて」	『賃金制度と労働組合の取り組みに関する調査研究報告書』 財団法人 連合総合生活開発研究所	全184p中 pp.79-101	平18. 7
論文	単	「社会政策学における賃金問題研究の視角と課題－大会報告を素材に」	『社会政策学会誌』 第12号 社会政策学会	全308p中 pp.3-23	平16. 9
著書	共	『人事労務管理の歴史分析』	ミネルヴァ書房	全454p中 pp.1-11, 63-108, 443-448	平15. 3
著書	共	『現代日本の労使関係－効率性のバランスシート－』	労働科学研究所出版部	全365p中 pp.203-228	平4. 8

【所属学会】社会政策学会、日本労務学会

【最近5年間の学会等および社会における主な活動】

総務省:行政の生産性向上についての人的資源管理の研究会外部委員(平22. 3～平22. 10)

連合総合生活開発研究所: 21世紀の日本の労働組合活動研究IV「労働組合の職場活動」研究委員会主査(平24. 12～平26. 3)

連合総合生活開発研究所: 労働組合の基礎的な活動実態に関する研究委員会副主査(平26. 9～現在)

【教育活動の自己評価】

学部専門教育においては、平成25年度に学部共通必修科目である「日本の経済」テキストの大幅改訂作業を進め、イラストを新たに付加することを含め、よりわかりやすい内容とし、平成26年度の授業に活用した。また、授業の冒頭に数分の練習問題を毎週実施し、自主的復習の気風を醸成した。専門基本科目「現代日本経済」「日本経済と政策」では、講義事項の厳選・削減を行い、映像資料を積極的に利用し、よりわかりやすい授業へと改善した。これを通じて、日本経済の発展要因を理解し、継承すべき長所と今後の発展方向を考察できる思考力の育成に力点を置くように努めた。専門演習では、日本経済の基本的文献を輪読し、日本経済の現状と課題に関する理解を深め、課題解決に必要なものは何か、今後の日本経済の発展方向としてどうあるべきかを考察し、自分の意見を持てるようにする能力養成を重視した。それに資することを意識しつつ、ディスカッションやディベートをほぼ毎週行い、論理力やコミュニケーション能力の育成に努めた。大学院においては、平成22～26年度の履修者は各年1名ないし2名であったので、履修者の問題意識や研究課題、修士論文テーマに即した日本経済の諸問題を教材に設定し、修論作成により結びつく問題への認識を深める授業、研究指導を行った。

【研究活動の自己評価】

平成21年度より國學院大學労供研究会座長として「労働者供給事業に関する調査研究」に取り組み、労働組合による労供事業について、我が国では初めての本格的な実態調査を進めてきた。3年間の研究成果を踏まえ、24年2月にシンポジウムを開催し、労供事業による非正規雇用問題の解決の可能性を明らかにした。25年度にはさらに事例調査や個人アンケート調査を実施し、26年度にそれらの分析と取りまとめを進めている。また、24年度に派遣研究として「島嶼部における地域振興の展開と課題に関する調査研究－1990年代以降の奄美群島における地域経済の構造と地域振興政策を中心に－」、25年度～26年度には労働組合の職場活動の実態調査に取り組んだ。

【職・氏名】教授 秦 信 行 HATA Nobuyuki

【学 位】経済学修士

【本学就任】平成6年

【略 歴】早稲田大学政治経済学部経済学科卒業
早稲田大学大学院経済学研究科修士課程修了
株式会社 野村総合研究所(株式会社 ジャフコ出向)
スタンフォード大学客員研究員

【専門分野】コーポレートファイナンス、ベンチャーファイナンス、アントレプレナーシップ

【最近5年間の主な研究業績等】 [平成22～26年度] (10点まで)

種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または 該当ページ	発行年月
評論・書評等	単	書評:小野正人『起業家と投資家の軌跡—アメリカにおけるベンチャーファイナンスの200年』	『国学院経済学』第63巻第1号 國學院大學経済学会		平26. 10
調査・研究報告等	共	「事例研究 地域産業の活性化戦略:ハレとケの融合した企業支援」	『日本ベンチャー学会会報』Vol.67	全8p中 pp.2-6	平26. 9
調査・研究報告等	共	「ケース 起業の軌跡(奇跡!?)と農業ビジネスの現状 株式会社エムスクエア・ラボ」	『日本ベンチャー学会会報』Vol.66	全8p中 pp.2-6	平26. 6
調査・研究報告等	共	「日本ベンチャー学会制度委員会報告書 企業家を取り巻く創業環境とその改善策—イノベティブなベンチャーが生まれ育つための社会変革と提言—」	日本ベンチャー学会	全178p中 pp.1-150	平26. 4
調査・研究報告等	共	「ケース 子ども達の未来のために～保育事業者のキャリアプラン～ 株式会社グローバルキッズ」	『日本ベンチャー学会会報』Vol.65	全8p中 pp.3-7	平26. 3
調査・研究報告等	共	「ケース 経営理念が成長とイノベーションの原点 株式会社ジェイアイエヌ」	『日本ベンチャー学会会報』Vol.64	全12p中 pp.6-11	平25. 12
調査・研究報告等	単	「ケース 最新技術によるネット広告配信サービス事業 Kauli株式会社」	『日本ベンチャー学会会報』Vol.63 日本ベンチャー学会	全7p	平25. 9
調査・研究報告等	共	「ケース バイオベンチャー天国と地獄～バイオベンチャーへの期待と誤解～ ペプチドリーム株式会社」	『日本ベンチャー学会会報』Vol.62 日本ベンチャー学会	全6p	平25. 6
論文	単	「枯渇するリスクマネー—日本のVC投資の現状」	『FUND MANAGEMENT (ファンドマネジメント)』2011年夏季号 NO.67 野村アセットマネジメント株式会社	全95p中 pp.18-25	平23. 6
論文	単	「新たなイノベーションへの挑戦」	『ベンチャーレビュー』 March 2011 JASVE 日本ベンチャー学会	pp.3-11	平23. 3

【平成21年度以前の主な研究業績等】 (5点まで)

種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または 該当ページ	発行年月
論文	単	「日本のベンチャーキャピタルと会社の組織形態と雇用システム, 雇用体制管理」	『日本ベンチャー学会誌』第10号 日本ベンチャー学会	全108p中 pp.3-10	平19. 9
論文	単	「ベンチャーキャピタルの役割と現状」	『都市問題研究』第57巻第9号 都市問題研究会	pp.51-69	平17. 10
論文	単	「企業家の意義とハイテクベンチャーの創出」	『国学院経済学』第52巻第1号 國學院大學経済学会	全107p中 pp.29-67	平16. 3
論文	単	「シリコンバレーとベンチャーキャピタル」	証券アナリストジャーナル	全158p中 pp.65-84	平13. 3
著書	共	『ベンチャー企業の経営と支援(新版)』	日本経済新聞社	全384p中 pp.136-151	平12. 4

【所属学会】日本ファイナンス学会、日本ベンチャー学会、経営史学会、NPOフェア・レーティング

【最近5年間の学会等および社会における主な活動】

日本ベンチャー学会理事(平22～現在)、日本ベンチャー学会制度委員会委員長(平24～現在)、一般財団法人ベンチャーエンタープライズセンター理事(平21～現在)、独立行政法人中小企業基盤整備機構「ファンド出資先候補評価委員会」委員及び「ファンド事業評価委員会」委員(平成20～現在)、経済産業省「特定研究成果活用支援事業計画の認定に関する外部審査委員会」委員(平成26～現在)、経済産業省「研究開発型ベンチャーへの投資判断に関する調査研究委員会」委員長(平26～現在)

【教育活動の自己評価】

最近5年間の教育活動について注力してきた点は、①初年次教育である1年生対象の「基礎演習」については、ノートテイクやレポートの書き方といった大学で学ぶ基礎的スキルの教育と同時に、個々の学生とのコミュニケーションを重視し、彼らの大学での居場所を作ってあげること、②専門ゼミにおいて、自らが問題意識を持ち、自主的に学ぶ姿勢を涵養するために、課題報告・発表を中心としたゼミ運営、③専門講義科目については、学生の理解を深めるために、複数の課題レポート作成を課すこと、④同時に、出来るだけ丁寧に話し、授業冒頭にその日の講義のテーマを明確に述べること、及び授業の最後にその日の講義の要約を簡潔に述べること、などである。その成果は、成績評価において、落第する学生の比率が小さくなっていることに現れている。

【研究活動の自己評価】

最近5年間は、教育活動への注力、加えて学校法人理事として大学経営への関与、更には入学部長としての業務などに忙しく、研究活動が疎かになってしまっていることは否めない。ただ、平成24年度以降、所属する日本ベンチャー学会の制度委員会委員長として、「起業家育成のための制度改革」をテーマにした月1回の研究会を主宰し、昨年度末には報告書をまとめた。制度委員会は今年度も継続し、今年度からは「起業家育成に向けた支援活動」をテーマにした研究会を立ち上げている。そこでの議論を2年間に亘って行う予定で、2年後には報告書ないしは研究書の出版を考えている。同時に、個人的には、「戦後日本の起業家」をテーマに、世界との比較を軸にした研究を計画している。

【職・氏名】教授 古沢 広祐 FURUSAWA Koyu

【学 位】農学博士(平成元年3月 京都大学 論農博第1472号)

【本学就任】平成8年

【略 歴】大阪大学理学部生物学科卒業

京都大学大学院農学研究科農林経済学専攻修士課程修了、同博士課程満期退学
目白学園女子短期大学生活科学科助教授等

【専門分野】環境社会経済学、地球環境・エコロジー問題、農業経済学、NGO・NPO・協同組合論

【最近5年間の主な研究業績等】 [平成22～26年度] (10点まで)

種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または該当ページ	発行年月
論文	単	「3・11震災復興が問う人間・社会・未来—伝統文化の力、地域再編をめぐる相克:持続可能な社会を考えるために」	『総合人間学 8 人間関係の新しい紡ぎ方-3・11を受けとめて』 学文社	全168p中 pp.52-66	平26. 6
論文	単	「地球とともに生きる食と農の世界—揺れるグローバル社会」	『食と農の社会学-生命と地域の視点から』 ミネルヴァ書房	全328p中 pp.10-18	平26. 5
論文	単	「自然共生・循環型社会と協同の可能性:食・農・環境・エネルギーに基づく持続可能な社会」	『にじ』協同組合経営研究誌 (645号) 2014.春	pp.4-18	平26. 3
編著	共	『共存学2:災害後の人と文化、ゆらぐ世界』	弘文堂	全264p	平26. 2
評論・書評等	単	『リオ+20』への失望とかすかな希望」	『世界』(月刊) 2012-8 岩波書店	pp.29-32	平24. 8
論文	単	「食・農・環境をめぐる世界枠組みとグローバルゼーション:パラダイム・レジーム抗争の視点から」	『社会科学論集』136 埼玉大学経済学会	pp.35-46	平24. 6
論文	単	「自然・生命産業としての農業再生:自然資本・生態系サービスにもとづくグリーンエコノミー」	『農業と経済』Vol.78 No.7 昭和堂	pp.5-15	平24. 6
編著	共	『共存学:文化・社会の多様性』	弘文堂	全288p	平24. 3
論文	単	「10. グローバルとローカルを結び直す—日本・アジア・世界の食と農を考える」	『食と農のいま』 ナカニシヤ出版	全404p中 pp.240-254	平23. 5
論文	単	「転機に立つ世界と地球環境政策:「カーボン・レジーム」形成の今後」	『カーボン・レジーム 地球温暖化と国際国防』 オルタナ	全108p中 pp.4-24	平22. 11

【平成21年度以前の主な研究業績等】 (5点まで)

種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または該当ページ	発行年月
論文	単	「グローバルゼーションと地球温暖化—環境・経済・社会・文化からみた持続可能・共生社会」	『共生社会システム研究』Vol.3 No.1 農林統計協会	全327p中 pp.28-47	平21. 7
論文	単	「世界が低炭素社会に向かう道筋とは?」「CDMと持続可能な発展」	『カーボン・マーケットとCDM』 築地書館	pp.1-14, 44-77	平21. 4
論文	単	「持続可能な社会を展望する—食・農・環境からのパラダイム転換」	木村武史編著『サステナブルな社会を目指して』 春風社	全310p中 pp.29-45	平20. 3
論文	単	「共生社会システムへの道—持続可能な社会の形成」	共生社会システム研究『共生社会へのみちすじ』Vol.1, No.1 農林統計協会	全270p中 pp.15-32	平19. 6
著書	単	『地球文明ビジョン—環境が語る脱成長社会』	日本放送出版協会	全245p	平7. 2

【所属学会】日本有機農業学会、地域農林経済学会、International Society for Ecological Economics、アントロピー学会、日本協同組合学会、環境経済・政策学会、日本農業経済学会、環境社会学会、共生社会システム学会、総合人間学会、日本平和学会、国際開発学会

【最近5年間の学会等および社会における主な活動】

共生社会システム学会 理事(平18. 10～現在)、総合人間学会 理事(平22. 5～現在)、「環境・持続社会」研究センター代表理事(平16～現在)、国際協力NGOセンター理事(平9. 4～平22. 3)、日本国際ボランティアセンター理事(平23. 3. ～現在)、市民セクター政策機構理事・運営委員(平9. 4～現在)

【教育活動の自己評価】

授業内容の補足資料をパブリックホルダーやK-smapyなどにて提供した。とくにK-smapy の小テスト、アンケート機能を活用して、授業内容の理解や応用発展理解などを確認し、平常点評価に役立てた。授業に関連する実社会でのイベントやセミナー等を紹介し、参加しての学習活動を平常点プラス評価した(感想レポート評価)。高校教科書、実教出版『家庭基礎21』(平成24、25、26年度)の編修、執筆に加わった。

【研究活動の自己評価】

学部共同研究「3.11震災・原発事故を契機とした地域対応についての動向研究」(平成23年度)で研究代表をつとめた。大学院での特定課題研究「地球環境問題への地域的対応に関する学際的研究」(平成21、22年度)、「3.11東日本大震災・原発事故を契機とした地域対応に関する学際的総合研究」(平成24、25年度)研究代表を務めた。本学21世紀研究教育計画委員会研究事業「地域・渋谷から発信する共生社会の構築」の共存学プロジェクトリーダーを務める(平成23年度～現在) 科研「自然共生型農業への転換・形成に関する総合的研究」(基盤B、代表茨城大学中島紀一、平成21～23年度)でのサブテーマ(海外における有機農業の研究)チームを務めた。

【職・氏名】教授 **星野 広和** HOSHINO Hirokazu
 【学 位】博士(経営学)(平成15年3月 東北大学 経博(経営)第7号)
 【本学就任】平成20年
 【略 歴】東北大学大学院経済学研究科博士課程前期(経営学専攻)修了
 東北大学大学院経済学研究科博士課程後期(経営学専攻)修了
 宮崎産業経営大学経営学部准教授
 【専門分野】経営管理論、経営組織論、経営戦略論

【最近5年間の主な研究業績等】 [平成22～26年度] (10点まで)					
種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または該当ページ	発行年月
論文	単	「管理サイクルの本質的理解に向けてー Demingの「深遠なる知識」とPDSAサイクルに関する一考察ー」	『国学院経済学』第61巻第3・4合併号 国学院大学経済学会	pp.309-348	平26. 3
辞書・事典等	共	『有斐閣経済辞典』(第5版)	有斐閣	p.1407	平25. 12
論文	単	「PDCAサイクルはデミング・サイクルか?ー W.E.Demingの管理サイクル論の基本的特質に関する一考察ー」	日本経営学会編『リーマン・ショック後の企業経営と経営学』経営学論集82集 千倉書房	pp.136-137	平24. 9
論文	単	「P.F.Druckerの最高経営層論に関する一考察ートップ・マネジメントと取締役会の相互作用ー」	『国学院経済学』第60巻第3・4合併号 国学院大学経済学会	全990p中 pp.185-229	平24. 3
学会発表等	単	「PDCAサイクルはデミング・サイクルか?ー W.E.Demingの管理サイクル論の基本的特質に関する一考察ー」	日本経営学会第85回大会(甲南大学)		平23. 9
論文	単	「有効的な取締役会の構造と機能に関する一考察ーNadler et al.[2006]の所論を踏まえて」	『国学院経済学』第59巻第3・4合併号 国学院大学経済学会	全214p中 pp.115-165	平23. 3
論文	単	「PDCAサイクルはデミング・サイクルか?ー Deming, Shewhart, Juranの管理サイクル論に関する一考察ー」	『国学院経済学』第59巻第1号 国学院大学経済学会	全154p中 pp.39-83	平22. 10

【平成21年度以前の主な研究業績等】 (5点まで)					
種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または該当ページ	発行年月
著書	共	『経営学の基本視座ー河野昭三先生還暦記念論文集ー』	まほろば書房	全483p中 pp.57-91	平20. 6
学会発表等	単	「品質管理に関する経営戦略的考察ーCSR戦略の中核としてー」	日本経営学会第81回大会(追手門学院大学)		平19. 9
論文	単	「品質管理に関する経営戦略的考察ーCSR戦略の中核としてー」	研究年報『経済学』第68巻第4号 東北大学経済学会	pp.143-158	平19. 3
学会発表等	単	「品質管理諸学説に関する比較論的考察」	日本経営学会第77回大会(愛知学院大学)		平15. 9
論文	単	「品質管理の理論的展開に関する研究」	博士(経営学)学位請求論文 東北大学	全195p	平14. 11

【所属学会】日本経営学会、経営学史学会、Academy of Management

【最近5年間の学会等および社会における主な活動】

【教育活動の自己評価】

教育活動において、特に以下の3点に留意しながら講義・演習を実施している。(1)「基礎的な知識や用語を理解・徹底させる」ことであり、毎講義において穴埋め型のレジュメや小テストの実施を通じてこれを実践している。(2)「基礎的な知識・用語をできるかぎり具体的な問題として考える態度・姿勢を身につけさせる」ことであり、講義における質問・回答および演習におけるグループ・ディスカッションの実施を通じてこれを実践している。(3)「テクニカルなことを理解するだけでなく、その法則を道具として使って、頭を動かす方法やモノの考え方を身につけさせる」ことであり、演習におけるグループ・ディスカッション、プレゼンテーション、学外プレゼン大会への参加を通じてこれを実践している。

【研究活動の自己評価】

現在、以下の3テーマについて研究活動を進めている。(1)「品質管理の理論的考察」であり、現在特にDemingの品質管理論および管理サイクル論について研究を行っている。(2)「最高経営層に関する研究」であり、CEO(最高経営責任者)を含めた取締役(会)・執行役員を中心とした集団の構造・機能・ダイナミクスについて研究を行うだけでなく、この視点を組み入れて(1)の理論的展開を行っている。(3)「組織学習と組織変革に関する研究」であり、C.Argyris『Organizational Traps』(組織陥穽)の邦訳を行いながら研究を進めている。

【職・氏名】准教授 細井 長 HOSOI Takeru

【学 位】博士(経営学)(平成16年3月 立命館大学 博甲第308号)

【本学就任】平成18年

【略 歴】立命館大学国際関係学部国際関係学科中退(飛び級のため)

立命館大学大学院国際関係研究科国際関係学専攻博士課程前期課程修了【修士(国際関係学)】

立命館大学大学院経営学研究科企業経営専攻博士課程後期課程修了

【専門分野】国際経済学、中東地域経済

【最近5年間の主な研究業績等】 [平成22～26年度] (10点まで)					
種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または該当ページ	発行年月
著書	共	「石油市場政策」	『ユーラシア地域大国の持続的発展』 ミネルヴァ書房	全254ページ 中pp.165-186 第7章	平25. 4
著書	共	「ドバイDP World社の国際事業展開」	『中東アラブ企業の海外進出(アジア 経済研究所叢書9)』 岩波書店	全262p中 pp.117-144	平25. 2
著書	共	「経済政策・援助外交による予防外交に関する一考察」	『中東の予防外交』 信山社	全365p中 pp.101-121	平24. 7
論文	単	「サウジアラビア:「レンティア国家型資本主義」についての一考察」	『比較経済研究』 第49巻第2号 比較経済体制学会	pp.15-26	平24. 6
調査・研究報告等	単	「UAE経済-制度的制約要因としてのイラン問題と債務問題」	機動研究成果報告『アラブの春とアラビア半島の将来』 日本貿易振興機構アジア経済研究所	全15p	平24. 3
論文	単	「中国と湾岸諸国の経済関係」	『中東研究』 No.512 中東調査会	pp.92-103	平23. 9
その他	単	『アラブ首長国連邦(UAE)を知るための60章』出版について	『日本アラブ首長国連邦協会誌』 No.50 日本アラブ首長国連邦協会	pp.30-32	平23. 7
学会発表等	単	「サウジアラビア-レンティア国家型資本主義についての一考察」	第51回比較経済体制学会全国大会 (神戸大学)		平23. 6
編著	単	『アラブ首長国連邦(UAE)を知るための60章』	明石書店	全337p	平23. 3
調査・研究報告等	単	「紛争予防と経済援助-中東における援助外交の可能性-」	平成19年度～平成21年度科学研究費補助金基盤研究(A)(課題番号119203009)研究成果報告書『湾岸産油国を中心とした中東における予防外交の可能性に関する研究』	全500p中 pp.108-125	平22. 5

【平成21年度以前の主な研究業績等】 (5点まで)					
種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または該当ページ	発行年月
論文	単	「世界金融危機とドバイ経済-ドバイ経済の課題と中継貿易型開発路線への視座-」	『立命館経営学』 第48巻第4号 立命館大学経営学会	pp.99-119	平21. 11
論文	単	「原油価格高騰下におけるドバイの経済開発戦略」	『國學院経済学』 第57巻第1号 國學院大學経済学会	全44p	平20. 12
論文	単	「湾岸諸国における自由貿易協定-対米FTAを中心-」	『國學院経済学』 第56巻第2号 國學院大學経済学会	pp.63-96	平20. 2
著書	共	『サウジアラビアを知るための65章』	明石書店	全378p	平19. 7
著書	単	『中東の経済開発戦略-新時代へ向かう湾岸諸国-』(MINERVA現代経済学叢書75)	ミネルヴァ書房	全234p	平17. 3

【所属学会】日本中東学会、日本国際経済学会

【最近5年間の学会等および社会における主な活動】

【教育活動の自己評価】

国際経済関係の科目を担当している。大学進学率の向上で入学してくる学生の志向性や学力が多様化しているが、「昔ながらの大学の授業」を是としているため、多くの学生にとって小職が担当する授業は酷なものになっていよう。しかしながら、当該分野に関心を持ち意欲的に学ぼうとする少数の学生にとっては、静謐な教室環境で知的好奇心を満たす場になっていると自負している。残念ながら大多数の意欲・関心をもたない学生に対する教育はおおざなりになっている。そうした学生にどのように向き合うべきか、意欲ある学生に迷惑をかけない範囲でいかにして教育活動を行うべきか、今後の課題といえる。

【研究活動の自己評価】

中東湾岸地域の経済発展について、国家主導の産業育成策をとくに物流業の育成、インフラ整備などを中心に、現地調査を交えつつ研究を進めている。また、専門分野の研究とは別に、同地域の一般向け書籍の刊行を進めるなど、社会への還元も行っている。

【職・氏名】教授 **本田 一成** HONDA Kazunari

【学 位】博士(経営学)(平成13年3月 法政大学 経営学博士第224号)

【本学就任】平成16年

【略 歴】法政大学経営学部卒業

法政大学大学院社会科学部研究科経済学専攻修士課程修了

東京都立労働研究所

労働政策研究・研修機構

【専門分野】労働経済、人的資源管理、社会調査

【受賞歴等】沖永賞(論文賞)(平成4年)、多田幸正賞(最優秀賞)(平成13年)、日本商業学会賞(優秀賞)(平成14年)

【最近5年間の主な研究業績等】 [平成22～26年度] (10点まで)

種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または該当ページ	発行年月
論文	単	「日本の主要チェーンストア労働組合の結成(2)全織同盟の組織化戦略と流通部会の創設」	『國學院経済学』第62巻第3・4号 國學院大學経済学会	pp.355-417	平26. 3
解説・ 解題等	単	「史料:五十嵐政男『流通小売業における産業別組織の記』」	『國學院経済学』第62巻第3・4号 國學院大學経済学会	pp.559-574	平26. 3
論文	単	「日本の主要チェーンストア労働組合の結成(1)黎明期の産別再編」	『國學院経済学』第62巻第2号 國學院大學経済学会	pp.161-199	平26. 2
論文	単	「労組労供の実態」	『労働法律旬報』第1772号 旬報社	pp.7-15	平24. 7
調査・研究 報告等	共	『労働組合による労働者供給事業に関する調査研究報告書』	國學院大學労供研究会	全145p	平24. 2
評論・ 書評等	単	「主婦の就労ーパートタイマーの基幹労働力時代の仕事と家庭ー」	『生活経済政策』第174号 生活経済政策研究所	pp.11-15	平23. 6
論文	単	「非正社員の活用リスクに関するノート」	『國學院経済学』第59巻第1号 國學院大學経済学会	pp.105-140	平22. 10
評論・ 書評等	単	「民間企業で創設されつつあるパートタイム社員」	『月刊自治研』第52巻第612号 自治労出版センター	pp.61-67	平22. 9
論文	単	「短時間正社員の動向と企業ニーズ」	『國學院経済学』第58巻第3・4合併号 國學院大學経済学会	pp.393-448	平22. 5
論文	単	「パートタイマーの雇用管理の課題に関するノート」	『國學院経済学』第58巻第3・4合併号 國學院大學経済学会	pp.533-578	平22. 5

【平成21年度以前の主な研究業績等】 (5点まで)

種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または該当ページ	発行年月
著書	単	『主婦パート 最大の非正規雇用』	集英社新書	全188p	平22. 1
著書	単	『チェーンストアのパートタイマー 基幹化と新しい労使関係』	白桃書房	全213p	平19. 9
著書	単	『チェーンストアの人材開発ー日本と西欧ー』	千倉書房	全305p	平14. 10
著書	共	『ホワイトカラーの人材形成ー日米英独の比較』	東洋経済新報社	pp.107-131	平14. 1
著書	共	『店長の仕事 競争力を生みだす人材活用』	中央経済社	①pp.25-42 ②pp.115-134	平12. 10

【所属学会】日本労務学会、日本商業学会、組織学会、国際ビジネス研究学会、日本フードサービス学会、社会政策学会

【最近5年間の学会等および社会における主な活動】

情報労連「社会貢献活動共同プロジェクト」運営委員(平20～現在)、NPO法人人財育成ネットワーク推進機構理事(平21～現在)、厚生労働省「子育て家庭の状況等に係る調査検討会」座長(平21～平22)、厚生労働省「パートタイム労働者キャリアアップ事業運営委員会」委員(平26～現在)

【教育活動の自己評価】

学部の専門教育において「専門演習」では、少人数授業の利点を最大に利用し、定期的な購読と並行して、プロジェクト研究を行った。また合宿においてプロジェクト研究を深め、報告書を作成して一定の結論を導くことで学生の主体的な能力の発揮を促した。また、フィールドスタディでは、台北に立地する日系サービス企業や、渋谷の商業施設「渋谷109」「渋谷パルコ」などを訪問調査し、学生が設計した調査項目に沿って実証研究ができる機会をつくり、報告書作成を通じた綿密な指導を行った。「基礎演習」では、問題関心の喚起や資料作り、発表経験などの機会を多くとり、専門科目に進む前の総点検を行った。

【研究活動の自己評価】

経済学部の主要研究の一つである労働組合による労働者供給事業の実態把握に関する研究を進めるとともに、日本のチェーンストア労働組合の結成過程や初期活動の歴史的な分析に着手した。あわせて、渋谷109を中心とする調査結果に基づいて、渋谷学の経済学部担当著作の原稿執筆活動に入っている。

【職・氏名】准教授 宮下雄治 MIYASHITA Yuji

【学 位】修士(経営学)

【本学就任】平成25年

【略 歴】東京大学大学院総合文化研究科広域科学専攻 博士後期課程満期退学

財団法人流通経済研究所 非常勤研究員

城西国際大学経営情報学部助教

【専門分野】マーケティング

【最近5年間の主な研究業績等】 [平成22～26年度] (10点まで)

種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または該当ページ	発行年月
論文	単	「技術の市場化に向けたマーケティングの進化」	『産業経済研究』第14号 日本産業経済学会	全108p中 pp.63-76	平26.4
著書	共	『情報通信社会における企業経営(上)ストラテジ・マネジメント編』	日科技連出版社	全147p pp.62-84, 139-146	平25.3
論文	単	「PBの知覚品質と購買意思決定」	『産業経済研究』第13号 日本産業経済学会	全187p中 pp.137-147	平25.3
論文	共	「マーケティング・ミックスの動態的变化とプロモーション戦略-日本企業(製造業)の戦略手段管理に関する実証分析」	『日経広告研究所報』第263号 日経広告研究所	全78p中 pp.15-22	平24.6
論文	単	「中国EC市場の動向とプロモーション戦略」	『流通とシステム』No.150 財団法人流通システム開発センター	全80p中 pp.66-73	平24.3
論文	単	「アジア新興国におけるグローバル・マーケティング-新興国市場の特徴と市場開拓の課題-」	『流通情報』No.491 財団法人流通経済研究所	全90p中 pp.62-71	平23.7
論文	単	「PBに対する消費者の知覚リスクと商品評価」	『季刊マーケティングジャーナル』第121号 公益社団法人日本マーケティング協会	全154p中 pp.80-96	平23.6
論文	単	「卸売業におけるPB開発の動向と戦略課題」	『産業経済研究』第11号 日本産業経済学会	全206p中 pp.155-170	平23.3
論文	単	「日本におけるPB商品の開発動向と発展可能性-国際比較の観点から-」	『城西国際大学紀要』第19巻 第1号 城西国際大学	全145p中 pp.117-135	平23.3
論文	単	「創造的競争と製品戦略」	『流通情報』No.485 財団法人流通経済研究所	全102p中 pp.66-78	平22.7

【平成21年度以前の主な研究業績等】 (5点まで)

種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または該当ページ	発行年月
著書	共	『情報通信技術と経営-情報社会へのパスポート』	日科技連出版社	全286p中 pp.244-272	平21.4
論文	共	「チラシ研究の体系的整理と今後の研究課題」	『プロモーション・マーケティング研究』 社団法人日本POP広告協会		平20.9
著書	共	『フランチャイズ・システム講座書(第2巻 経営戦略)』	一般社団法人日本フランチャイズチェーン協会	全167p中 pp.55-64	平19.8
論文	共	「Improved Market-Creation R&D Management through Researcher-Consultant Collaboration」	『Proceedings of PICMET'06』 PICMET		平18.10
論文	共	「ドラッグストアにおけるチラシ広告の効果分析-店舗立地に応じたストアマネジメントの考察-」	『流通情報』No.442 財団法人流通経済研究所	全48p中 pp.36-41	平18.4

【所属学会】日本産業経済学会、日本商業学会、日本ダイレクトマーケティング学会

【最近5年間の学会等および社会における主な活動】

日本産業経済学会 理事(平25.5～現在)、千葉県東金市「中心市街地活性化委員会」委員長(平22.10～平25.3)、日本フランチャイズチェーン協会スーパーバイザー学校講師(経営士講座講師兼、マーケティング担当)(平24.4～現在)

【教育活動の自己評価】

講義科目の授業評価は、担当科目すべてにおいてアンケートの各項目の平均値を上回る結果となった。講義科目は、1科目を除き履修上限の250名の大教室での講義であり、対話型の授業を採用することはできないものの、毎回の授業において学生一人ひとりに考えさせる機会を設け、自分の考えや意見を持ち、それを発信する(コメントペーパーで毎回提出)スタイルを大切にすることが結果につながったのではないかと考える。一方で、大教室授業の弊害も学生のコメントから読み取ることができ、配布資料の迅速化やときに授業が騒がしくなることなど、今後も改善していくべき事項を工夫していきたい。また、演習においては、課題解決型授業を取り入れ、グループワークを中心に学生に主体的に学ぶスタイルを採用している。演習の勉強の成果は、他大学との合同演習(マーケティングゼミディベート大会、東洋大学、明治大学、専修大学、愛知淑徳大学のマーケティングゼミとのディベート大会)への参加と日経BPが主催するインナー大会(学生ビジネスプレゼン大会)に参加し、他大学の学生と競う機会を設け、学生の学びへのモチベーションを高め、論理的思考と批判的思考を養っている。このような教育方法を導入したことで、学生の主体的な学びを促進し、専門的知識の習得に貢献していると考えられる。

【研究活動の自己評価】

ここ数年の研究では大きく次の3つをテーマとしてきた。第一に、日本のマーケットで存在感を高めるPB(プライベートブランド)の動向である。流通業の寡占化が進む日本市場において流通業が開発するPBは日本の消費者にどのように受け入れられているのか、消費意識の視点からも動向を追っている。また、第二にPBの台頭に対するメーカーが開発するNB(ナショナルブランド)の対抗戦略である。メーカーと巨大化する小売業のパワー関係が大きく変わりつつある今日において、メーカーが取るべき戦略についての方向性を研究している。第一と第二のテーマについては、マーケティング業界の論文誌や本学の紀要、所属学会の論文誌でそれぞれ研究内容を発表することができた点は評価できる。そして第三の研究テーマは消費増税後(2014年4月以降)の日本の消費市場の変化についてである。5%から8%への引き上げで日本の消費者の意識・購買行動にどのような変化が生じているか、という点の解明を行っている。第三のテーマでは、消費増税前後の日本経済の動向について業界紙『日経MJ』に2回インタビュー記事として掲載いただいた。また、本学広報課にご協力いただき、消費増税後の大学生の意識調査を行い、NHKをはじめ毎日新聞、大学新聞等のマスコミで記事を扱っていただき、広く研究成果を発信することができた。

【職・氏名】准教授 山本 健太 YAMAMOTO Kenta
 【学 位】博士(理学)(平成21年3月 東北大学 理博第2516号)
 【本学就任】平成26年
 【略 歴】東北大学大学院理学研究科地学専攻博士課程後期課程修了
 九州国際大学経済学部経済学科 助教
 九州国際大学経済学部経済学科 准教授
 【専門分野】経済地理学、都市地理学
 【受賞歴等】平成20年度東北大学総長賞(平20)、東北地理学会研究奨励賞(平21)、
 日本国際地図学会特別賞(「外邦図研究グループ」の一員として)(平22)、
 2011年度地理空間学会学会奨励賞(平23)

【最近5年間の主な研究業績等】 [平成22～26年度] (10点まで)					
種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または該当ページ	発行年月
著書	単	The Agglomeration of the Animation Industry in East Asia.	Springer	全152p	平26. 8
論文	共	「地方に活動拠点を置くプロ芸能集団の存立基盤—佐渡「鼓童」の事例—」	『地理学報告』第115号 愛知教育大学地理学会	pp.59-66	平25. 12
辞書・事典等	単	「文化産業」	『人文地理学事典』 丸善出版	pp.486-487	平25. 10
論文	単	「地方におけるアニメーション産業振興の可能性—沖縄スタジオの事例—」	『地理科学』68-3号 地理科学学会	pp.202-208	平25. 7
論文	共	「東京における小劇場演劇の空間構造」	『都市地理学』8巻 日本都市地理学会	pp.27-39	平25. 3
論文	単	「アニメーション産業の分業関係と地域政策」	『産業集積の変貌と地域政策—グローバル時代の地域産業研究—』 ミネルヴァ書房		平24. 11
論文	単	Changes to the Consumption Space of Small Theater Performances in Tokyo	Science Reports of Tohoku University 7th Series(Geography) 58巻 東北大学大学院理学研究科	pp.27-38	平24. 2
論文	単	International Production Allocation Strategies of Japanese Animation Studios	Spaces of International Economy and Management – Launching a new perspective on management and geography Palgrave-MacMillan	pp239-253	平24. 1
論文	単	「静岡におけるプラモデル産業の分業構造と集積メカニズム」	『経済地理学年報』57巻 経済地理学会	pp.203-220	平23. 9
論文	共	「東京大都市圏における都市型文化産業の消費空間—現代演劇の劇場公演の空間的特徴に着目して—」	『日本都市学会年報』44巻 日本都市学会	pp.99-107	平23. 5

【平成21年度以前の主な研究業績等】 (5点まで)					
種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または該当ページ	発行年月
論文	単	「上海地域におけるアニメーション産業の集積構造—海外依存型企業の事例を中心に—」	『地理科学』64巻 地理科学学会	pp.228-249	平21. 10
論文	単	「ソウルにおけるアニメーション産業の集積と特質—国際分業および労働市場に着目して—」	『季刊地理学』60巻 地理科学学会	pp.185-206	平21. 1
論文	単	「東京におけるアニメーション産業の集積メカニズム—企業間取引と労働市場に着目して—」	『地理学評論』80巻 日本地理学会	pp.442-458	平19. 6

【所属学会】東北地理学会、日本地理学会、経済地理学会、地理科学学会、日本都市学会、地理空間学会、人文地理学会、日本都市地理学会、日本地理教育学会

【最近5年間の学会等および社会における主な活動】

5th Japan-Korea-China Joint Conference on Geography 事務局長(平21. 12～平22. 10)、
 6th Korea-China-Japan Joint Conference on Geography 実行委員(平23. 6～平23. 11)、
 Regional Conference of the International Geographical Union 2013 Kyoto プログラム出版委員会委員(平24. 1～平25. 8)、
 7th China-Japan-Korea Joint Conference on Geography 実行委員(平24. 3～平24. 8)
 8th Japan-Korea-China Joint Conference on Geography 実行委員(平24. 3～平25. 8)、
 日本都市学会第59回大会実行委員(平24. 4～平24. 10)、
 9th Korea-China-Japan Joint Conference on Geography 実行委員(平25. 1～現在)、
 日本地理学会企画委員(平26. 4～現在)、日本地理学会集会委員(平26. 4～現在)

【教育活動の自己評価】

本年度着任である。着任に当たって、パワーポイントおよび講義資料を作成した。また講義資料については、pdfファイルとして、学生支援システムK-smapyを通じて受講生に配信している。今後は、授業アンケートやミニッツペーパーなどを活用し、授業改善を継続させたい。

【研究活動の自己評価】

2013年度は、2つの科研に分担者として参加した。国内外の学会に積極的に参加し、発表した。単独、共同を合わせて、8本の学会発表をした。論文では、科研分担者となっている研究やその他の研究について、4本の和論文を発表した。加えて、事典の編纂にも携わり、1項目について執筆した。2013年度の成果は研究計画に従って十分に達成された。今後も研究計画に則り、研究を継続したい。

法 学 部

【法律学科】

甘利航司	准教授	141
磯村早苗	教授	142
一木孝之	教授	143
植村勝慶	教授	144
大江毅	准教授	145
小原薫	准教授	146
門広乃里子	教授	147
荏田真司	教授	148
川合敏樹	准教授	149
坂本一登	教授	150
佐古田真紀子	准教授	151
捧剛	教授	152
佐藤秀勝	准教授	153
鈴木達次	教授	154
関哲夫	教授	155
高塩博	教授	156
高橋信行	准教授	157
田中和子	教授	158
中川孝博	教授	159
永森誠一	教授	160
長谷川光一	教授	161
姫野学郎	准教授	162
平地秀哉	准教授	163
藤嶋亮	准教授	164
水谷三公	教授	165
宮内靖彦	教授	166
宮下大志	准教授	167
本久洋一	教授	168
森川隆	教授	169
横山謙一	教授	170

【職・氏名】准教授 甘利航司 AMARI Kohji

【学 位】博士(法学)(平成19年3月 一橋大学 甲第371号)

【本学就任】平成22年

【略 歴】一橋大学大学院法学研究科法学・国際関係専攻博士後期課程修了
一橋大学大学院法学研究科特任講師(ジュニア・フェロー)
北海学園大学法学部法律学科専任講師

【専門分野】刑法、刑事政策

【最近5年間の主な研究業績等】 [平成22～26年度] (10点まで)

種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または 該当ページ	発行年月
論文	単	「性犯罪者に対するサンクション—GPS型電子監視、居住制限、そして登録・通知制度」	『國學院法学』 第51巻第4号 國學院大學法学会	pp.403-458	平26. 3
学会発表等	単	「性犯罪者に対するサンクション—GPS型電子監視、居住制限、登録・通知制度—」	第40回犯罪社会学会(テーマセッション)		平25. 10
判例評釈	単	「間接正犯の訴因に対して教唆犯の成立が認められた事例」	『新・判例解説watch』 12号 日本評論社		平25. 4
論文	単	「「電子監視(Electronic Monitoring)」研究序説」	『國學院法学』 第50巻第4号 國學院大學法学会	pp.470-504	平25. 3
著書	共	『非拘禁的措置と社会内処遇の課題と展開』	現代人文社	全416p	平24. 3
論文	単	「中間的刑罰・社会内刑罰」	刑事立法研究会編『非拘禁的措置と社会内処遇の課題と展望』 現代人文社	第2章	平24. 3
論文	単	「電子監視による保護観察？」	刑事立法研究会編『非拘禁的措置と社会内処遇の課題と展望』 現代人文社	第7章	平24. 3
判例評釈	単	「葛飾マンション立入事件」	『速報判例解説』 Vol.9 日本評論社		平23. 10
判例評釈	単	「公務員退職後に私企業の非常勤顧問となり、顧問料として金員の供与を受けたことについて、事後収賄罪が成立するとされた事例」	『速報判例解説』 Vol.7 日本評論社		平22. 10
論文	単	「電子監視と保護観察の在り方」	『龍谷法学』 43巻1号 龍谷大学法学会	pp.129-146	平22. 6

【平成21年度以前の主な研究業績等】 (5点まで)

種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または 該当ページ	発行年月
著書	共	『更生保護制度改革のゆくえ—犯罪をした人の社会復帰のために—』	現代人文社	全368p	平19. 6
論文	単	「過失犯の共同正犯」	博士論文 一橋大学大学院法学研究科	全219p	平19. 3
論文	単	「過失犯の共同正犯についての一考察」	『一橋論叢』 第134巻第1号 日本評論社	pp.22-40	平17. 7
論文	単	「犯罪の抑止と犯罪者の更正」	『罪と罰』 第42巻第2号 日本刑事政策研究会	pp.83-84	平17. 3
論文	単	「薬害エイズ帝京大学ルートについての検討」	『一橋研究』 第29巻第4号 情報研究社	pp.37-51	平17. 1

【所属学会】日本刑法学会、刑事立法研究会(龍谷大学)、一橋大学刑事判例研究会、現代刑事法研究会(青山学院大学)、北海道大学刑事法研究会、犯罪社会学会

【最近5年間の学会等および社会における主な活動】

【教育活動の自己評価】

刑法を担当しているが、刑法は学説の対立が激しい場面が多い。それらを授業で紹介することはできるだけ控え、一般的にはどのように考えられているかという視点を重視して、授業を行っている。また、そのことと重なるが、判例を非常に重視しており、判例を正確に理解できるような授業を行っている(つもりである)。

授業時には、必ずレジュメ(A3両面コピーのものを1枚)を配布しているが、同時に黒板への板書も行うようにしている。特に、行為者が複数いる場合や事案が複雑な場合は、必ず板書して、学生が整理できるようにしている。

また、学生において、90分間の集中力を維持することが(年々)困難になっているので、授業が半分ほど経過したところで、小テストをはさむようにしている。

【研究活動の自己評価】

もともと刑法と刑事政策の研究を行ってきたが、しだいに(科研費の取得も合わせて)後者への比重が増してきた。研究業績もほとんど刑事政策である。特に、電子監視による犯罪者の監視の問題は、世界的にアクチュアルな問題であるため、ここ3年ほどかなりのエネルギーを注いで関わってきた。

2014年10月からミンスター大学にて在外研究を行っているため、以後、比重を刑法の方に(再度)傾けていきたいと考えている。特に、正犯と共犯の区別はもともと何故できたのかを詳らかにしたうえで、近時の議論を適切に捕捉したうえで、正犯と共犯の議論が「過失犯」においてはどのようになるのかを明らかにしていきたい。

【職・氏名】教授 磯村早苗 ISOMURA Sanae

【学 位】法学修士

【本学就任】平成9年

【略 歴】国際基督教大学教養学部社会科学科卒業

東京大学大学院法学政治学研究科国際政治学専攻博士課程単位取得満期退学

恵泉女学園短期大学英文学科専任講師

【専門分野】政治学、国際政治学

【最近5年間の主な研究業績等】 [平成22～26年度] (10点まで)					
種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または該当ページ	発行年月
評論・書評等	共	『平和を考えるための100冊+α』	日本平和学会 編 法律文化社	全285p中 pp.82-83	平26. 1

【平成21年度以前の主な研究業績等】 (5点まで)					
種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または該当ページ	発行年月
著書	共	『地球社会の変容とガバナンス』	中央大学出版部	全352p中 pp.157-209	平22. 2
著書	共	『いま戦争を問う』	法律文化社	全301p中 pp.1-22	平16. 7
論文	単	「冷戦後欧州地域秩序形成とデモクラシー」	『國學院法學』第38巻第4号 國學院大學法学会	全221p中 pp.1-36	平13. 3
著書	共	『ヨーロッパ新秩序と民族問題』	中央大学出版部	pp.11-51	平10. 3
著書	共	『グローバル・デモクラシーの政治世界』	有信堂	pp.38-60	平9. 4

【所属学会】日本平和学会、日本国際政治学会、日本政治学会、日本EU学会、日本比較政治学会、日本国連学会、国際平和研究学会

【最近5年間の学会等および社会における主な活動】

日本平和学会監事(平26～現在に至る)、中央大学社会科学研究所客員研究員(平22～24、平26～現在に至る)

【教育活動の自己評価】

国際政治の講義においては、理論的な問題説明を具体的な文脈に転換して理解を得るように、学生に様々な質問を投げかけながら授業を進めるように心がけている。

学生がこれに対応するには、歴史的事実や現実の情報に関心を持ち、基礎的知識を習得している必要があるが、残念ながら現状ではこの点は未だ不十分である。基礎的知識を予習させるためには、参考文献や多様な情報へのアプローチ方法を、これまで以上に学生に教育しておく必要があるのではないかと考える。

「基礎演習」で、学生が基本的な知識や関心を意識するように方向づけ、講義科目においては、問題を理論的・論理的に把握し論じる枠組みを提示し、「演習」において、具体的問題を体系的・理論的な思考と繋いでいく。特に、演習における、ゼミ論文の執筆とそれに対する指導過程は、学生の自主的思考を刺激する貴重な媒介となっている。日々の教育活動をこのような全体的構造に構成できればよいのではないかと考えている。

【研究活動の自己評価】

グローバル化する政治におけるデモクラシーの形態、その制度化と意味を、グローバル・デモクラシーの問題として研究・分析することが、現在の研究の目的である。一国内市民社会論として論じられてきたデモクラシーが、越境的政治空間においてどのようなデモクラシーの可能性を持つのか。国内政治・国際政治における伝統的な主体と政治過程とは異なる形で、そのような新しいデモクラシーの可能性はどのような条件と場の設定において、機能しうるのか。

研究の主たる対象はヨーロッパとEUである。関心は上述のグローバル・デモクラシーの議論にあり、それをEU・ヨーロッパ地域の政治過程の中で論じてきた。また、EUにおける多様なレベルのNGOが、EUの課題において行動しつつ、同時に、類似の課題において、グローバル主体と協働して政策に影響を与えている活動状況なども、グローバル・デモクラシーの一局面として研究対象に取り上げた。

国民国家の国家形態自体が、人のグローバルな移動や地域のあり方によって動揺し、個々の主体のアイデンティティのあり方の変化がその動揺を加速する。この中で、新しい理念や規範が選択される可能性があるとしたら、誰がどのような方法で、どのような制度に依拠して、どのような正統性をもって物事を決めるのか。予想できるのは、肯定的な側面だけではない。否定的な側面を伴う厳しいプロセスも展開されるであろうと予想している。

【職・氏名】教授 一木孝之 ICHIKI Takayuki

【学 位】法学修士

【本学就任】平成18年

【略 歴】早稲田大学大学院法学研究科博士後期課程単位取得退学

早稲田大学法学部助手

北九州市立大学法学部法律学科助教授

【専門分野】民法

【最近5年間の主な研究業績等】 [平成22～26年度] (10点まで)					
種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または該当ページ	発行年月
解説・ 解題等	共	『新基本法コンメンタル借地借家法』	『別冊法学セミナー』 no.230 日本評論社	全359p中 pp.190-194, 322	平26. 5
解説・ 解題等	共	『論点体系 判例民法(第2版) 8 不法行為II』	第一法規	全617p中 pp.231-307	平25. 12
翻訳・ 翻刻書	共	『ヨーロッパ私法の原則・定義・モデル準則— 共通参照枠草案(DCFR)』	法律文化社	全498p中 pp.201-212	平25. 11
判例評釈	単	「銀行業務システム開発契約に関して、開発者(ベンダ)のプロジェクト・マネジメント義務違反を根拠に、発注者(ユーザ)に対する損害賠償責任が肯定された事例」	『法学セミナー増刊速報判例解説』 vol.12 新・判例解説Watch/2013年4月 日本評論社	全333p中 pp.87-90	平25. 4
学会発表 等	単	Dienstvertrag, Auftrag und Geschäftsbesorgungsvertrag im japanischen Zivilgesetz – unter besonderer Beruecksichtigung der Frage des Schadensersatzes und der japanischen Schuldrechtsreform	ZEITSCHRIFT FUER JAPANISCHES RECHT (ZJAPANR) JOURNAL OF JAPANESE LAW (J.JAPAN.L.) Nr./ No. 33	全13p	平24. 10
判例評釈	単	判例紹介「共有不動産賃料収入に係る税納付と事務管理の成否[最高裁第三小法廷平成22.1.19判決]」	『民商法雑誌』 142巻 4=5号 有斐閣	pp.478-484	平22. 7
教科書・ 参考書	共	『判例プラクティス民法II 債権』	信山社	全415p中 pp.250-252	平22. 6

【平成21年度以前の主な研究業績等】 (5点まで)					
種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または該当ページ	発行年月
論文	単	「事務管理者に生じた経済的不利益等の填補をめぐる史的素描—『事務処理法としての不利益填補責任』考察のための基礎的作業として—」	『早稲田法学』 第84巻第3号 早稲田大学法学会	全40p	平21. 3
論文	単	「受任者の経済的不利益等に対する委任者の填補責任(2)—民法650条および『無過失損害賠償責任』に関する一試論—」	『國學院法学』 第46巻第1号 國學院大学法学会	全93p	平20. 7
論文	単	「受任者の経済的不利益等に対する委任者の填補責任(1)—民法650条および『無過失損害賠償責任』に関する一試論—」	『國學院法学』 第45巻第2号 國學院大学法学会	全89p	平19. 9
学会発表 等	単	「無償委任の法的性質—好意給付を目的とする契約成立および当事者の責任との関連性において」	日本私法学会第67回大会(於 関西大学)／『私法』第66号	pp.129-135	平17. 10

【所属学会】日本私法学会、比較法学会

【最近5年間の学会等および社会における主な活動】

【教育活動の自己評価】

学部講義科目としては、「民法・債権各論」(法律専攻)、並びに「(専)民法・債権各論」及び「(専)民法・物権」(以上法律専門職専攻)を担当し、学生数と年次構成等を顧慮しつつ、「予習—講義—復習」のサイクルを習慣づけることを目標に、従来からのレジュメ及び「知識確認小テスト」に加えて、「感想レポート」を新たに導入した。また、「基礎演習」(法律専門職専攻)では、六法の使い方をはじめとして、一般的な文章や下級審判決の読み方やまとめ方など、4年間の法学部における学習の作法を習得させる一方で、「演習」(法律専攻)、並びに「判例演習」及び「民法応用演習」(以上法律専門職専攻)では、判例学習を中心に据え、資料収集と整理に基づく報告を目指した継続的訓練を行った。

【研究活動の自己評価】

2010年10月から2012年3月までの国外派遣研究(マンハイム<ドイツ>)をはさみ、国内外の民法財産法研究、とりわけ民法(債権法)改正に関する研究を行っている。この点に関連して、近時のヨーロッパでは、民法典起草を目指したグループの手からなる重要な業績のひとつである「共通参照枠草案」(略称DCFR)の共同翻訳作業に参加するとともに、ドイツ労働法学会において、「日本民法典における雇用契約、委任及び事務処理契約—損害賠償及び日本の債権法改正問題に関して」と題する報告を行い、また、その後もドイツで開催された学会や国際会議に出席した。さらに、これと前後して、国内民法をめぐると判例評釈、並びに不法行為法及び借地借家法のコンメンタルを共同執筆した。なお、2014年7月現在、前述の在外研究の成果を刊行すべく準備中である。

【職・氏名】教授 植村 勝 慶 UEMURA Katsuyoshi
 【学 位】法学修士
 【本学就任】平成2年
 【略 歴】岡山大学法文学部法学科卒業
 名古屋大学大学院法学研究科博士課程単位取得満期退学
 名古屋大学法学部助手
 【専門分野】憲法

【最近5年間の主な研究業績等】 [平成22～26年度] (10点まで)					
種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または該当ページ	発行年月
判例評釈	単	「公安条例と集団示威運動—新潟県公安条例事件」	『憲法判例百選 I [第6版](別冊ジュリスト217号)』 有斐閣	全242p中 pp.184-185	平25. 11
著書	共	『事例研究憲法(第2版)』	日本評論社	全583p	平25. 7
著書	単	『憲法Ⅱ—基本的人権—[第4版]』	尚学社	全242p	平25. 4
論文	単	「イギリスにおける庶民院解散権の廃止」	『國學院法學』50巻4号 國學院大學法学会	pp.1-28	平25. 3
著書	共	『戦後法学と憲法』	日本評論社	全1276p中 pp.1022-1039	平24. 5
編著	共	『現代憲法入門講義(新3版)』	北樹出版	全343p中 pp.123-136, 311-320	平23. 3

【平成21年度以前の主な研究業績等】 (5点まで)					
種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または該当ページ	発行年月
著書	共	『現代憲法における安全』	日本評論社	全845p中 pp.263-286	平21. 2
著書	共	『日本国憲法の多角的検証』	日本評論社	pp.190-205	平18. 4
著書	共	『いまなぜ憲法改正国民投票法なのか』	蒼天社出版	pp.91-96	平18. 3
著書	共	『変化するイギリス憲法』	敬文堂	pp.277-300	平17. 2
著書	単	『Q&A 日本国憲法を読む』	桐原書店	全64p	平15. 1

【所属学会】日本公法学会、全国憲法研究会、憲法理論研究会、民科法律部会

【最近5年間の学会等および社会における主な活動】

東京都市町村職員研修所の公務員研修講師(平22、平25、平26)

【教育活動の自己評価】

憲法の講義においては、問題提起的なものとするように心がけ、学生に考えさせるようにしている。昨今は憲法改正論議がさかんであるが、そこで議論されている論点について言及しながら、背景の紹介や解釈論的な検討を行い、社会を動的にみることができるようにしている。講義ノートを別途用意するとともに、講義中に配布するレジュメについては、講義内容のポイントを明確にし、考え方の分岐や概念について図式化したものを掲載し、学生の理解を助けるための工夫をしている。空欄を設け、重要なポイントを自ら確認できるようにもしている。

演習では、ディベート方式で行い、学生自身が主体的に議論の場をつくりあげることができるようにしている。

【研究活動の自己評価】

イギリス憲法の研究では、イギリス憲法研究会の一員として、現在イギリス憲法改革の諸相を検討する共同作業に加わってきた。王政改革や議会解散権の廃止(任期固定制議会の導入)などについて現在検討を行いつつ、成果の一端を公開している。

日本の憲法研究では、この間、いくつかのテキスト作成に参加しており、天皇制や経済的自由権の解釈論的な検討と判例研究を行っており、また、憲法改正論議に関わり、改正手続や集団的自衛権に関する検討を引き続き行いたいと考えている。

【職・氏名】准教授 大江 毅 OE Tsuyoshi

【学 位】修士(法学)

【本学就任】平成22年

【略 歴】大阪大学大学院法学研究科博士後期課程 単位取得満期退学
大阪経済法科大学法学部法律学科専任講師

【専門分野】民事訴訟法、民事執行法、倒産法

【最近5年間の主な研究業績等】 [平成22～26年度] (10点まで)					
種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または 該当ページ	発行年月
教科書・ 参考書	共	『Next 教科書シリーズ 民事訴訟法』	弘文堂	全284p中 pp.189-228	平24. 10
教科書・ 参考書	共	『アクチュアル民事訴訟法』	法律文化社	全290p中 pp.243-248	平24. 9
論文	単	「民法上の組合の残余財産の分割と共有物 分割訴訟」	『國學院法學』49巻1号 國學院大學法学会	全45p	平23. 7

【平成21年度以前の主な研究業績等】 (5点まで)					
種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または 該当ページ	発行年月
著書	共	『条解民事再生法〔第2版〕』	弘文堂	全1232p	平19. 12
論文	単	「民法二五九条に関する一考察—法典調査 会における議論を手がかりとして—」	『大阪経済法科大学法学論集』65 号	pp.1-34	平19. 3
論文	単	「共有物分割訴訟に関する史的考察—民法 二五八条制定過程を中心にして—」	『阪大法学』53巻2号 大阪大学大学院法学研究科	pp.467-488	平15. 8
解説・ 解題等	共	「判例回顧と展望2002 民事訴訟法」	『法律時報』75巻6号 日本評論社	全208p	平15. 5
解説・ 解題等	共	「判例回顧と展望2001 民事訴訟法」	『法律時報』74巻5号 日本評論社	全208p	平14. 4

【所属学会】日本民事訴訟法学会

【最近5年間の学会等および社会における主な活動】

日本民事訴訟法学会理事(平25. 5～現在)

【教育活動の自己評価】

いわゆる「講義」科目に関しては、事前に講義案を配布し、学生がそれを閲読してきたことを前提に、授業ではその内容確認・定着をはかるとともにより展開的な課題にも取り組むことで学修の向上を図った。「演習」科目に関しては、学生の自主性・自律性を重んじ、課題設定・授業運営にも学生に主体的に参加させることを心掛けた。

【研究活動の自己評価】

共有物分割訴訟に関する研究を継続するとともに、新たな研究課題にも取り組みたい。

【職・氏名】准教授 小原 薫 OHARA Kaoru
 【学 位】法学修士
 【本学就任】平成5年
 【略 歴】北海道大学法学部卒業
 北海道大学大学院法学研究科修士課程修了
 北海道大学大学院法学研究科博士課程単位取得満期退学
 北海道大学法学部助手
 【専門分野】日本政治思想史

【最近5年間の主な研究業績等】 [平成22～26年度] (10点まで)					
種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または該当ページ	発行年月
教科書・参考書	共	『日本思想史入門』	外研社(北京)	全346p中 pp.181-189	平25. 2

【平成21年度以前の主な研究業績等】 (5点まで)					
種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または該当ページ	発行年月
教科書・参考書	共	『日本思想史ハンドブック』	新書館	全256p中 pp.128-133	平20. 2
論文	単	The Japanese Socialists and Anarchists in the San Francisco Bay Area, from 1900 to 1910	『國學院法學』第40巻第1号 國學院大學法学会	全128p中 pp.108-128	平14. 7
論文	単	「中江兆民と討論」(2・完)	『國學院法學』第33巻第4号 國學院大學法学会	pp.89-108	平8. 3
論文	単	「中江兆民と討論」(1)	『國學院法學』第32巻第4号 國學院大學法学会	pp.271-296	平7. 3
論文	単	「あるべき政治社会の「理義」を求めて」	『北大法学論集』40巻5・6号	pp.2449-2484	平2. 9

【所属学会】日本政治学会、政治思想学会

【最近5年間の学会等および社会における主な活動】

【教育活動の自己評価】

大学で行われている授業評価アンケートでの個別記載を元に、授業方法の修正を試みている。授業では、学期冒頭に講義計画を示した上で、毎回授業の概要を示したレジュメを配布し、学生の授業理解を高めている。

また、教養科目の授業では、アクティブ・ラーニングの手法を取り入れ、学生からの発言を促し、学生間の積極的な討論を授業に組み入れている。

【研究活動の自己評価】

梧陰文庫研究会を主催し、大学の枠を超えて他大学の教員、院生を交えた研究会を行っている。また、幕末から昭和前期までを主要な講義範囲としているが、江戸期についても、主要な講義範囲とすべく研究に打ち込んでいる。

【職・氏名】教授 門 広 乃 里 子 KADOHIRO Noriko

【学 位】法学修士

【本学就任】平成17年

【略 歴】上智大学法学部法律学科卒業

上智大学大学院法学研究科法律学専攻博士後期課程単位取得満期退学

実践女子大学人間学部社会学科教授

【専門分野】民法

【最近5年間の主な研究業績等】 [平成22～26年度] (10点まで)

種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または 該当ページ	発行年月
判例評釈		「財産を全てまかせる」旨の遺言について、包括遺贈する趣旨のものであると解された事例	判例時報(判例評論) 2226号(667号) 判例時報社	pp.159-164	平26. 8
論文	単	「未成年者の「婚姻の自由」-婚姻適齢とパターンリズム」	『國學院法学』第50巻第4号 國學院大學法学会	pp.413-440	平25. 3
論文	単	「婚姻適齢—未成年者の婚姻について—」	『戸籍時報』688号 日本加除出版	pp.9-19	平24. 10
学会発表等		「婚姻適齢—未成年者の婚姻について—」	家族法改正研究会第3回シンポジウム 「婚姻法グループ中間報告会をかねて」		平24. 7
論文	単	「子ども・親・国家—「子の利益」を中心として 子どもと親に関わる最近の法状況を契機として」	『法律時報』83巻12号 日本評論社	pp.4-9	平23. 11
判例評釈	単	「痴呆による自筆証書遺言と遺言能力の欠如」	私法判例リマークス 42号 日本評論社	pp.62-65	平23. 2
論文	単	「相続と財産法理論」	『法律時報』83巻1号 日本評論社	pp.4-6	平23. 1
著書	単	『判例プラクティス 民法Ⅲ』	信山社	pp.106-108	平22. 8

【平成21年度以前の主な研究業績等】 (5点まで)

種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または 該当ページ	発行年月
翻訳・翻刻書	単	速報・資料/フランス民法典第2編「財産」法改正準備草案の紹介と試訳	『國學院法学』第47巻第1号 國學院大學法学会	pp.84-130	平21. 7
論文	単	「遺言の撤回と復活」	『新家族法実務大系④相続Ⅱ』 新日本法規	pp.172-188	平20. 2
論文	単	「相続による債務の承継と熟慮期間の起算点に関する一考察—二〇〇二年のフランス相続法改正草案を参考として—」	『上智法学論集』第48巻3・4合併号	pp.35-101	平17. 3
著書	単	『相続回復請求権 叢書民法総合判例研究』	一粒社	全219p	平12. 10
論文	単	「相続と取得時効—相続と新権原」	『私法』60号 日本私法学会	pp.233-239, 272-273	平10. 4

【所属学会】日本私法学会、比較法学会、日本家族＜社会と法＞学会

【最近5年間の学会等および社会における主な活動】

日本評論社法律時報編集委員(平22. 5～平24. 6)

【教育活動の自己評価】

平成22年度から法律専門職専攻において「民法・総則」を担当している。民法は教授する内容自体は定まっているので、教育について自己点検・評価しようとする場合、カリキュラムと教育方法が主な検討対象となる。カリキュラムは、学部教務に関わる問題であるから、ここで各教員が点検・評価すべきは教育方法(教材の開発も含め)であると考えられ、以下でも教育方法の点検・評価という観点から記す。

法律専門職専攻は少人数教育を特色としており、授業でも比較的きめ細かな教育を行っている。また、事前・事後学習を習慣づけることによって、専門的知識の定着を図り、主体的学習に繋げる工夫を行っている。講義では、K-SMAPYを利用して予めレジュメや資料を配布する。学生には、レジュメに明示している到達目標を意識しながら条文・教科書を読んで穴埋めを行ない、また、レジュメ掲載の基本事例にも目を通すことによって、疑問点を明確にして授業に臨むように指導している。授業はレジュメにそって双方向的(教員と学生との間の質疑応答)・多方向的(グループワークの導入等)に進め、基本を確認しつつ、事例問題を解かせることによって、法的三段論法を修得することができるように指導している。事後学習を促すために適宜課題を与えているが、課題につき、教員が授業外に個別指導を行うことは少人数といえども難しく、サンプル解答を選んで添削し配布する方式をとっている。平成26年度に試行したフェロー制度の継続と拡充が望まれる。双方向型・多方向型授業は、議論を通して疑問点を明確にし、基本知識を定着させるとともに、思考過程を「見える化」することによって法的思考力を養うことができるように思われるが、このような教育効果が安定的に得られるかどうかを検証するためにも、引き続き行うつもりである。

専門職専攻の「民法・親族」「民法・相続」についても上に述べたことが基本的にはあてはまるが、3・4年次開講で、受講生はすでに法的思考力のある程度身に着けていると考えられるので、平成25年度より、事前学習を前提として、授業では事例問題を受講生に解答させることに重点を置くようにした。

事前・事後の学習を促し主体的な学びを習慣づけるためにも、学修支援体制の整備がより一層求められる。

法律専攻の演習科目については、平成23年度より、学生による家族法改正案の作成を試みている。社会における問題を発見し(問題発見能力)、法的専門知識を活用して(専門知識の活用)、いかに解決していくのか(問題解決能力)、議論と共同作業を通してこれら能力を修得するよう、教育・指導している。

研究科大学院では、平成23年度より、「面会交流と子の意思」に関する研究指導を行っている。

【研究活動の自己評価】

これまでの研究対象は、大きく三つに分けられる。第一に、法定相続と財産法が交錯する場面に関する研究である。「相続回復請求権」、「占有(権)の相続」、「相続と取得時効」、「債務の相続と相続人の選択権」等に関する研究がこれにあたる。第二は、遺言であり、「遺言の撤回と復活」、「遺言能力」、「遺言の解釈」等に関する研究である。第三は、夫婦、子どもに関する研究であり、「親権」、「代理母」、「婚姻適齢」等について論じてきた。これらの研究に共通してその底辺にあるのは、現代社会、とりわけ現代家族(法)(親密圏に関する法制度)における「私的自治」と「公序」との関係。「公序」とは何かもあわせて問うことであった。研究成果の一端は、論文や判例評釈という形で、あるいは学会やシンポジウムでの報告という形で発表している(業績一覧参照)。研究を進めるうえで研究会に参加することは有益である。平成22年度より新たに、「相続と財産法理論」に関する研究会と家族法改正研究会(婚姻法グループ)に参加している。前者では相続法と財産法の関係に関する知見を深めることができ、また、後者では、家族法の改正に関する最新の知見を得ることができた。平成20年10月から1年間パリ第2大学に留学する機会に恵まれたが、帰国後、フランス改正相続法の研究が頓挫している。その間、平成26年1月には法務省が相続法制検討ワーキングチームによる第1回会議を開催し、相続法の見直しに関する議論に入り、同年の私法学会でも相続法改正がシンポジウムのテーマとして取り上げられている。今後の議論の動向を注視しつつ、フランス相続法の研究を進め、相続法制に関する議論を深めていきたいと考えている。

【職・氏名】 教授 荻田真司 KARITA Shinji

【学 位】 修士(法学)

【本学就任】 平成9年

【略 歴】 東京大学法学部第3類卒業

東京大学大学院法学政治学研究科政治専攻修士課程修了

東京大学大学院法学政治学研究科政治専攻博士課程退学

東京大学社会科学研究所助手

【専門分野】 政治思想史、政治哲学、政治理論

【最近5年間の主な研究業績等】 [平成22～26年度] (10点まで)

種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または 該当ページ	発行年月
論文	単	「宗教と公共性 「境界」から「空間」へ」	島藺進・磯前順一(編)『宗教と公共空間』	全294p中 pp.141-166	平26. 7
翻訳・ 翻刻書	単	ルシアン・ヘルシア「世俗化時代のヨーロッパ」	島藺進・磯前順一(編)『宗教と公共空間』	全294p中 pp.121-140	平26. 7
翻訳・ 翻刻書	共	タラル・アサド「宗教と政治の間で 我が父、ムハンマド・アサド」	島藺進・磯前順一(編)『宗教と公共空間』	全294p中 pp.169-186	平26. 7
論文	単	「「共存」について－政治哲学的考察－」	國學院大学研究開発推進センター編、『共存学2 災害後の人と文化 ゆらぐ世界』 弘文堂	全259p中 pp.219-234	平26. 2
学会発表 等	単	「宗教と公共性－政治学の視点から」	日本宗教学会第71回学術大会 パネル『ポスト世俗社会と公共性』		平24. 9
学会発表 等	単	「宗教と公共性－政治学の視点から」	京都大学国際日本文化研究センター シンポジウム『ポスト世俗社会と公共性』		平24. 7
翻訳・ 翻刻書	共	タラル・アサド、「我が父、ムハンマド・アサド」	『みすず』第53巻第9号 みすず書房	全75p中 pp.6-13	平23. 10
翻訳・ 翻刻書	共	ジャック・デリダ、「信仰と知－理性のみの境界における「宗教」の二源泉」	磯前順一・山本達也編、『宗教概念の彼方へ』 法蔵館	全445p中 pp.109-147	平23. 9
翻訳・ 翻刻書	単	タラル・アサド、「世俗主義を超えて」	磯前順一・山本達也編、『宗教概念の彼方へ』 法蔵館	全445p中 pp.373-403	平23. 9
論文	単	「社会科学的知識の実践性をめぐって－「社会動向に関する大統領特別委員会」と1920年代の社会科学」	『國學院法学』第48巻第4号 國學院大学法学会	全300p中 pp.1-17	平23. 3

【平成21年度以前の主な研究業績等】 (5点まで)

種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または 該当ページ	発行年月
論文	単	「ジョン・デューイの欧州大戦」	『國學院法学』第46巻第2号 國學院大学法学会	pp.1-33	平20. 9
翻訳・ 翻刻書	単	『自爆テロ』	青土社	全261p	平20. 7
論文	単	「戦間期アメリカ社会科学の一断面－社会的知識の位置づけをめぐって」	『政治思想研究』第6号 風行社	全454p中 pp.61-81	平18. 5
論文	単	「社会科学における『科学』と『技術』－ジョン・デューイの社会科学論をめぐって－」	『國學院法学』第40巻第4号 國學院大学法学会	pp.311-332	平15. 3
論文	単	「科学」	福田有広・谷口将紀編『デモクラシーの政治学』 東京大学出版会	pp.162-178	平14. 8

【所属学会】 政治思想学会、日本政治学会、米国政治学会

【最近5年間の学会等および社会における主な活動】

【教育活動の自己評価】

西洋政治思想史Aでは、西洋政治思想に関する概論を行った。予習プリントや小テスト等を取り入れて、学生の学修の便宜を図った。西洋政治思想史Bでは、「政治と経済」(H23・24年度)、「人権」(H25年度)をテーマとしたテーマ別の講義を行い、西洋政治思想に対する学生の理解を深めた。現代社会論では、1年生を対象に、高校の政治経済と大学の政治学を接続するための基礎知識の講義をおこなった。学生に時事問題についての発言や小レポートを課すことで、より主体的な関心を生み出すことができるよう心がけた。演習では、新書のテキストを年間6冊程度読むことと、そこで得た知識を元にして、ゼミ論文に取り組むことを義務づけた。読解と表現の両面にわたって、学生の理解を促進することを心がけた。

【研究活動の自己評価】

この間、以下のような研究活動を行った。

- (1) 科研費・基盤研究(C)の助成を得て、「パウル・ラザスフェルドの社会科学論」についての研究を行った。研究成果は、平成26年度に論文として発表される予定である。
- (2) 科研費・基盤研究(B)の助成を得て、「グローバル・シティーの比較研究」を行った。
- (3) 科研費・基盤研究(B)の助成を得て、「専門性の政治学」についての研究を行った。
- (4) 宗教と公共性をめぐる共同研究に参加した。
- (5) 本学研究開発推進機構の「共存学」研究に参加した。

【職・氏名】准教授 川合敏樹 KAWAI Toshiki

【学 位】修士(法学)

【本学就任】平成20年

【略 歴】東京都立大学大学院社会科学研究所修士課程基礎法学専攻修了
一橋大学大学院法学研究科博士後期課程単位修得退学
明治学院大学法学部特別TA(副助手)

【専門分野】行政法、環境法

【最近5年間の主な研究業績等】 [平成22～26年度] (10点まで)

種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または該当ページ	発行年月
論文	単	「ドイツにおける原発規制の動向」	『原発の安全と行政・司法・学会の責任』 法律文化社	pp.177-195	平25. 7
判例評釈	単	「違法性の承継」(最高裁平成21年12月17日第一小法廷判決)	『行政判例百選 I [第6版]』 有斐閣	pp.176-177	平24. 9
解説・ 解題等	単	「252条の17の5～252条の18の2」	村上順ほか編『新基本法コンメンタール 地方自治法[第5版]』 日本評論社	pp.458-466	平23. 11
判例評釈	単	「藤沢市ごみ収集義務確認訴訟——ごみ処理有料化と手数料」(横浜地裁平成21年10月14日判決)	『環境法判例百選[第2版]』 有斐閣	pp.162-163	平23. 9
論文	単	「東日本大震災にみる原子力発電所の耐震安全性の確保の在り方について」	『法律時報』 83巻5号 日本評論社	pp.79-83	平23. 5
論文	単	「『新成長戦略2011』に見る自治体運営の方向性」	『政策法務Facilitator』 30号 第一法規	pp.2-8	平23. 4
論文	単	「ドイツ都市計画法制における広場の位置付けの一側面」	『新都市』 65巻3号 (社)都市計画協会	pp.90-94	平23. 3
論文	単	「ドイツにおける排出枠取引制度に関する裁判例の一側面」	『環境管理』 第46巻第12号 (社)産業環境管理協会	pp.25-31	平22. 12
解説・ 解題等	単	「ドイツにおける温室効果ガス排出枠オークションの制度化について」	『國學院法学』 第48巻第1号 國學院大學法学会	pp.59-79	平22. 7

【平成21年度以前の主な研究業績等】 (5点まで)

種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または該当ページ	発行年月
論文	単	「ドイツ原子力法における既存の原子力発電所に対するバックフィットの在り方について」	『立教法学』 第80号 立教法学会	pp.280-327	平22. 3
論文	単	「原子力発電所の安全規制の在り方に関するノート——既存の原子力発電所に対するバックチェックおよびバックフィットの現状と課題——」	『國學院法学』 第47巻第3号 國學院大學法学会	pp.133-153	平21. 12
論文	単	「原子力発電所をめぐる防災・リスク対策法制の現状と課題」	『法律時報』 第81巻第9号 日本評論社	pp.32-35	平21. 8
論文	単	「廃棄物処理法7条1項の一般廃棄物収集・運搬業の不許可処分の取消請求事件」	『自治研究』 第83巻第2号 第一法規	pp.112-124	平19
論文	単	「ドイツ環境法における『統合的環境保護』論の展開(1)(2)(3・完)—連邦イミッション防止法の施設許可制度を素材として—」	『一橋法学』 (1)第5巻第3号、(2)第6巻第1号、(3・完)第6巻第2号 一橋大学大学院法学研究科	(1)pp.351-375, (2)pp.223-248, (3)pp.223-244	平18. 11

【所属学会】環境法政策学会

【最近5年間の学会等および社会における主な活動】

茅ヶ崎市公務員研修担当講師(平21. 8～現在)

【教育活動の自己評価】

講義系科目については、大教室での講義(履修者150名前後～200名強)および小教室での講義(同20名強～50名前後)を担当したが、講義で扱うべき内容が多岐に渡るため、特に大教室での授業は一方的な講義スタイルをとらざるを得なかった。そのため、履修者がより主体的に講義内容に触れられるよう、講義用資料や復習用資料に設問を設けるなどしたが、働きかけとしては十分ではなかった。単位取得の実質化、アクティブラーニングの位置付けなどに鑑み、履修者個々に講義内容を伝え、履修者個々人が講義内容を学び取り、その成果を中間試験や定期試験に反映できるような体系的方法を探りたい。また、この点との関連で、現在、共著による行政法テキストの執筆作業を進めている。授業への出席のさらなる動機付け、レポートや答案の適切な執筆の方法の指導なども課題である。

【研究活動の自己評価】

①環境法上の許可法制・計画法制の研究は、在外研究(2011年度後期～2012年度)を機に発展させることができ、成果公表の準備中である。②東日本大震災発生前より取り組んできていた原子力法制の研究(バックフィット・存続保護・許可法制、残存リスク規制、最終処分場の立地選定手続など)を発展させる機会が多かった。現在、単著公刊のための加筆修正・書下ろし作業を行っている。③最近では災害予防法制の研究(クライシスマネジメント、水害予防の都市計画的対応など)にも取り組んでいる。

【職・氏名】教授 坂本 一登 SAKAMOTO Kazuto
 【学 位】法学博士(平成元年3月 東京都立大学 乙第686号)
 【本学就任】平成5年
 【略 歴】東京都立大学法学部卒業
 東京都立大学大学院社会科学研究所博士課程単位取得満期退学
 北海学園大学教養部助教授
 【専門分野】日本政治史
 【受賞歴等】サントリー学芸賞(平成4年)

【最近5年間の主な研究業績等】 [平成22～26年度] (10点まで)					
種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または 該当ページ	発行年月
論文	単	「明治憲法体制の成立」	『講座日本史』16巻 岩波書店	全314p中 pp.1-34	平26. 6
論文	単	「若き日の明治天皇」	『明治聖徳記念学会紀要』第50巻 明治聖徳記念学会	全749p中 pp.570-587	平25. 11
評論・ 書評等	単	「初代内閣総理大臣伊藤博文の政治手腕」	『歴史人』38号 KKベストセラーズ	全145p中 pp.100-103	平25. 10
論文	単	「明治初年の立憲政をめぐる」	『日本政治史の新地平』 吉田書店	pp.3-42	平25. 1
評論・ 書評等	単	「明治天皇:憲法の守護者としての使命感」	『歴史読本』第57巻12号 新人物往来社	全336p中 pp.76-81	平24. 12
論文	単	「明治天皇の形成」	『講座明治維新』4 有志舎	pp.234-267	平24. 5
著書	単	「伊藤博文と明治国家形成」	講談社	全423p	平24. 3
評論・ 書評等	単	書評:伊藤之雄・李盛煥編著『伊藤博文と韓 国統治』	Social Science Japan Journal Vol.14 Oxford University Press	全314p中 pp.259-261	平23. 8
論文	単	「伊東巳代治日記」	『近現代日本を史料で読む』 中央公論社	全291p中 pp.38-41	平23. 4

【平成21年度以前の主な研究業績等】 (5点まで)					
種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または 該当ページ	発行年月
論文	単	「伊藤博文と山県有朋」	伊藤隆他編『山県有朋と近代日本』 吉川弘文館	全350p中 計35p	平20. 3
論文	単	「明治二十二年の内閣官制についての一考 察」	犬塚孝明編『明治国家の政策と思想』 吉川弘文館	全284p中 pp.141-171	平17. 10
論文	単	「井上毅と官吏任用制度」	『國學院法學 40周年記念号』第 40巻第4号 國學院大学法学会	全596p中 pp.333-374	平15. 3
論文	単	「伊藤博文と『行政国家』の発見—明治十四 年政変と憲法調査をめぐる—」	沼田哲編『明治天皇と政治家群像』 吉川弘文館	全286p中 pp.194-234	平14. 6
著書	単	『伊藤博文と明治国家形成』	吉川弘文館	全306p	平3. 12

【所属学会】日本政治学会

【最近5年間の学会等および社会における主な活動】

【教育活動の自己評価】

法学部のFD活動の一環として、授業ポートフォリオを作成し、そのポートフォリオの結果を基礎に、教育内容および教授方法の改善を試みた。とりわけ、一方的に講義するだけでなく、いかに学生に主体的に学修させるかという点に意を用いるようになった。また、授業の狙いを学生がどの程度理解しているのか、いかにすればそれを客観的に測定可能となるかという点についても、意識的になった。その具体例として、まず、講義科目については、一部アクティブ・ラーニングを試行して、学生の主体性の喚起を促した。次に評価方法についても、学生の基礎的な知識の習得と主体的学修を促すため小テストを導入するとともに、期間内試験では講義の意図および講義の全範囲を理解しているかどうかを測定できるような問題作成を意識した。

【研究活動の自己評価】

研究活動については、この5年間は学部長や大学執行部など学内行政業務に追われ、十分な研究時間がとれなかったが、いくつか論文を執筆した。研究テーマとしては、従来の伊藤博文研究の延長線上にあるが、とくにいわゆる明治零年代とよばれる時期の宮中および立憲制の問題を中心に研究を進めた。2014年に岩波講座に発表した「明治憲法体制の成立」は、こうした従来から行ってきた明治立憲制研究の一つの集大成という意味をもっている。また研究成果の社会への還元という立場から、一般読者むけの歴史雑誌にも少し協力した。

【職・氏名】准教授 佐古田真紀子 SAKOTA Makiko
 【学 位】修士(法学)
 【本学就任】平成26年
 【略 歴】早稲田大学大学院法学研究科博士後期課程 単位取得退学
 ハンブルク大学法学部 客員研究員
 旭川大学経済学部経営経済学科 准教授
 【専門分野】民事訴訟法

【最近5年間の主な研究業績等】 [平成22～26年度] (10点まで)					
種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または該当ページ	発行年月
論文	単	「ドイツにおける将来の給付の訴えの適法性について(2)」	『旭川大学経済学部紀要』第72号 旭川大学	pp.33-72	平25. 3
その他	共	「法学教育における法律討論会の効用と社会人基礎力の関係」	『北星学園大学経済学部北星論集』第52巻第1号 北星学園大学	pp.53-88	平24. 9
論文	単	「ドイツにおける将来の給付の訴えの適法性について(1)」	『旭川大学経済学部紀要』第69号 旭川大学	pp.27-56	平22. 12

【平成21年度以前の主な研究業績等】 (5点まで)					
種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または該当ページ	発行年月
論文	単	「オーストリア法における将来の給付の訴えの適法性について」	『旭川大学経済学部紀要』第67・68 合併号 旭川大学	pp.1-29	平21. 12
論文	単	「法人格否認の法理の訴訟法上の効果」	『旭川大学経済学部紀要』第61号 旭川大学	pp.89-112	平18. 6
その他	共	「新民事訴訟法研究(第2回)控訴手続の改正」	『早稲田法学』第74巻3号 早稲田大学	pp.539-585	平11. 2
論文	単	「身分関係訴訟における訴訟承継について」	『早稲田大学大学院法研論集』第81号 早稲田大学	pp.111-134	平9. 4
辞書・事典等	共	『フランス法律用語辞典』	三省堂	全371p	平8. 3

【所属学会】民事訴訟法学会

【最近5年間の学会等および社会における主な活動】

旭川地方裁判所地方裁判所委員会委員(平23. 4～平26. 3)

【教育活動の自己評価】

演習では、単に知識の修得のみでなく、チームで働く力、計画性、主体的な行動力などのいわゆる社会人基礎力を養成するため、他大学と連携してゼミ対抗法律討論会を行った。他大学との対戦形式をとることで学生の学修意欲を高めることができ、また、討論会で自分たちと異なる意見に触れたり討論会後の懇親会で交流する経験を通して、学生に良い刺激を与えることができた。

講義科目では、学生の勉強が受け身に終始することなく、教える側も学生の理解度を把握しながら授業を進行するため、学生が授業に参加する手段をなるべく多く用意し、学生とのコミュニケーションを心がけた。

【研究活動の自己評価】

民事訴訟における権利の早期実現の観点から、「将来の給付の訴えの適法性」および「仮執行宣言の効果」について研究を進めた。前者については、オーストリア法およびドイツ法における判例・学説の状況の分析を行い、それぞれ論文として発表した。これを手がかりに、日本の判例の整理・分析を進め、日本法独自の適法性の判断基準の定立の可能性を探っている。後者については、ドイツ法の議論を参考にしつつ、体系的に調和のとれた妥当性ある解釈のあり方を模索した。

【職・氏名】教授 捧 剛 SASAGE Tsuyoshi
 【学 位】法学修士
 【本学就任】平成4年
 【略 歴】中央大学法学部法律学科卒業
 一橋大学大学院法学研究科公法専攻博士課程単位取得満期退学
 株式会社情報通信総合研究所
 【専門分野】英米法、イギリス法制史

【最近5年間の主な研究業績等】 [平成22～26年度] (10点まで)					
種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または 該当ページ	発行年月
論文	単	「イギリスにおけるたばこ規制(2・完)」	『國學院法學』第51巻第1号 國學院大學法学会	pp.146-396	平25. 7
論文	単	「イギリスにおけるたばこ規制(その1)」	『國學院法學』第50巻第4号 國學院大學法学会	pp.346-412	平25. 3
論文	単	「イギリスにおける裁判報道規制」	『國學院法學』第49巻第2号 國學院大學法学会	pp.121-190	平23. 9
論文	単	「イギリスにおける体罰禁止法制」	『國學院法學』第49巻第1号 國學院大學法学会	pp.161-232	平23. 7
論文	単	「イギリスにおける性転換者の法的性変更制度」	『國學院法學』第48巻第3号 國學院大學法学会	pp.114-160	平22. 12
論文	単	「イギリスにおける同性愛者差別の撤廃とシ ヴィル・パートナーシップ」	『國學院法學』第48巻第2号 國學院大學法学会	pp.56-92	平22. 9

【平成21年度以前の主な研究業績等】 (5点まで)					
種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または 該当ページ	発行年月
論文	単	「イギリスにおける陪審批判の系譜」	『刑事司法への市民参加』 現代人文社	pp.149-173	平16. 5
論文	単	「パンとエールと陪審」	『國學院法學』第39巻第3号 國學院大學法学会	pp.1-35	平14. 1
論文	単	「イギリスの情報公開制度」	『情報公開・プライバシーの比較法』 日本評論社	pp.115-152	平8. 12
論文	単	「イングランドにおける刑事審理陪審の成 立」	『國學院法學』第30巻第4号 國學院大學法学会	pp.41-73	平5. 3
論文	単	「19世紀イギリスにおける司法制度の改革」	『一橋研究』12巻1号	pp.99-111	昭62. 4

【所属学会】比較法学会、日米法学会、法とコンピュータ学会、情報通信学会、JAPAN SKEPTICS

【最近5年間の学会等および社会における主な活動】

【教育活動の自己評価】

2012年度後期および2013年度は、在外研究の機会を与えられていたため、本学における教育に携わることはなかった。帰国初年度の2014年は、法律専攻の「外国法A・B」と法律専門職専攻の「現代外国法事情A・B」の内容をきっちりと分け(従前は、一部重なるところがあった)、それぞれに、在外研究の成果を反映させていくつもりである。

【研究活動の自己評価】

2009年より、毎年、1～2本の論文を「研究ノート」という形で発表してきているので、今後も、それを継続していきたい。

【職・氏名】准教授 佐藤 秀勝 SATO Hidekatsu

【学 位】博士(法学)(平成15年3月 一橋大学 法第67号)

【本学就任】平成22年

【略 歴】横浜国立大学大学院国際経済法学研究科経済関係法専攻修士課程 修了(修士(国際経済法学))
一橋大学大学院法学研究科経済法・民事法専攻博士課程 修了
関東学園大学法学部法律学科准教授

【専門分野】民法

【最近5年間の主な研究業績等】 [平成22～26年度] (10点まで)

種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または該当ページ	発行年月
論文	単	「契約当事者の地位と形成権(二)」	『國學院法学』51巻4号	pp.33-64	平26. 3
論文	単	「契約当事者の地位と形成権(一)」	『國學院法学』51巻3号	pp.1-50	平25. 12
著書	共	Introducción al Derecho Japonés ActualIntroducción al Derecho Japonés Actual	Aranzdi	全33p	平25. 12
翻訳・ 翻刻書	共	「新オーストリア損害賠償法草案(5完)」	『大東法学』第23巻第1号 大東文化大学法政学会	pp.1-43	平25. 11
翻訳・ 翻刻書	共	「新オーストリア損害賠償法草案(4)」	『大東法学』第22巻第1・2号 大東文化大学法政学会	pp.1-42	平25. 3
論文	単	「契約上の地位の移転」	『民法改正案の検討』第2巻 成文堂	全396p中 pp.36-49	平25. 2
論文	単	「取消権者・取り消すことができる行為の追認・法定追認」	『民法改正案の検討』第3巻 成文堂	全492p中 pp.31-44	平25. 2
論文	単	「オーストリア企業法における企業譲渡と契約引受」	松本恒雄先生還暦記念『民事法の 現代的課題』 商事法務	全30p	平24. 12
翻訳・ 翻刻書	共	「新オーストリア損害賠償法草案(2)」	『大東法学』第20巻第2号 大東文化大学法政学会	pp.1-22	平23. 4

【平成21年度以前の主な研究業績等】 (5点まで)

種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または該当ページ	発行年月
論文	単	「契約当事者の地位といわゆる『契約に関連する形成権』の関係—ドイツにおける議論の動向—」	『関東学園大学法学紀要』19巻1号 関東学園大学法学部	全66p	平22. 3
論文	単	「契約上の地位の移転—立法化をめぐる諸問題の検討—」	『社会の変容と民法典』 成文堂	pp.274-292	平22. 3
論文	単	「オーストリア法における形成権の独立的譲渡」	『関東学園大学法学紀要』18巻1号 関東学園大学法学部	pp.53-112	平21. 3
論文	単	「ドイツ法・オーストリア法における相対的無効(relative Nichtigkeit)」(1)～(4・完)	『関東学園大学法学紀要』(1)14巻 2号・15巻1号合併号、(2)15巻2号・ 16巻1号合併号、(3)16巻2号、(4・ 完)17巻1号・2号合併号 関東学園大学法学部	(1)pp.125-187 (2)pp.149-228 (3)pp.35-104 (4・完)pp.69- 117	平17. 7
論文	単	「相対的無効(relative Nichtigkeit)に関する一考察—ドイツ法・オーストリア法を参考に—」	一橋大学学位論文		平15. 1

【所属学会】私法学会、比較法学会、消費者法学会

【最近5年間の学会等および社会における主な活動】

【教育活動の自己評価】

1. 講義 ここ数年、民法総則と債権総論を担当している。民法総則については、対象が1・2年生であることもあり、基礎的な事項をできる限り具体的に教えることを心がけている。また、債権総論についても、民法の規定が抽象的で分かりにくい面があるため、具体的な紛争事例を例として挙げ、イメージがわくように工夫しているつもりである。具体的な教育手法としては、教授する内容が受講生に伝わるようにするためにレジュメを配布し、これに基づいて話をするようにしている。また、適宜小テストや課題を出し、こまめに復習するような試みをしている。
2. 演習 ここ数年は1年生向けの基礎演習、2年生向けの判例演習、3・4年生向けの演習(4)、応用演習を担当している。基礎演習では、身近に生じる紛争を題材として、それを法的に解決するための情報の収集・分析等の技法を受講生に身につけてもらうことを目的としている。判例演習では、民法上の興味深い事案を題材として判例の読み方を学ぶとともに、法律学習における判例の重要性を学生が認識できるような教育をしている。演習(4)および応用演習では、判例研究や事例問題研究に取り組んでいる。

【研究活動の自己評価】

契約当事者の地位に関する諸問題を中心に研究をしている。現在取り組んでいるのは、①契約当事者の地位と形成権の関係、および②企業譲渡(事業譲渡)に伴う契約上の地位の移転に関する規律の在り方である。①については、従来契約当事者の地位と形成権(取消権・解除権その他)とは不可分の関係にあり、後者は、契約当事者の地位とともにのみ移転すると解されてきた。この点について、ドイツ・オーストリアにおける新しい動向を紹介しつつ、日本でも両者の関係を見直すべきではないかという点を研究している。②については、事業譲渡に伴う契約上の地位の移転については、現在、民法の一般的な理論によって規律されている。しかし、事業譲渡については事業移転の容易化等の要請があることから、この場面については民法理論の修正が必要ではないかと考えられる。そこでこのような視点から、近時この点に関する明文規定を設けたオーストリア企業法について検討を進めている。

【職・氏名】教授 鈴木 達次 SUZUKI Tatsuji

【学 位】法学修士

【本学就任】平成24年

【略 歴】愛媛大学法文学部総合政策学科助教授
桐蔭横浜大学法学部法律学科教授

【専門分野】商法

【最近5年間の主な研究業績等】 [平成22～26年度] (10点まで)					
種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または 該当ページ	発行年月
論文	単	「生命保険契約における現物給付」	『國學院法学』52巻1号 國學院大學法学会	pp.25-59	平26. 7
著書	共	『民法とつながる商法総則・商行為法』	商事法務	pp.79-103	平25. 4
判例評釈	単	「損害賠償金の支払と人身傷害補償保険金の算定基準」	『判例評論』650号 判例時報刊行会	pp.28-34	平25. 4
論文	単	「保険法における保険契約の概念」	『桐蔭法学』18巻2号 桐蔭法学会	pp.1-32	平24. 3
判例評釈	単	「傷害保険契約における外来性の要件と主張・立証責任」	『保険法判例百選』 有斐閣	pp.198-199	平22. 12

【平成21年度以前の主な研究業績等】 (5点まで)					
種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または 該当ページ	発行年月
論文	単	「失念株と株主の権利」	『法学研究』82巻12号	pp.403-435	平21. 12
論文	単	「新会社法における自己株式処分の法的性質に関する一考察」	『桐蔭論叢』17号 桐蔭横浜大学	pp.83-98	平19. 12
論文	単	「遺言による保険金受取人指定・変更の可否」	『商法の歴史と論理—倉沢康一郎 先生古稀記念』 新青出版	pp.617-648	平17. 7
論文	単	「損害賠償請求権の差押・転付と保険会社に対する直接請求権」	『愛媛法学会雑誌』28巻3・4号 愛媛大学法学会	pp.139-168	平14. 3
論文	単	「他人の死亡の保険契約における被保険者の同意—団体生命保険契約法論のために—」	『愛媛法学会雑誌』26巻3・4号 愛媛大学法学会	pp.189-217	平12. 3

【所属学会】日本私法学会、保険学会

【最近5年間の学会等および社会における主な活動】

【教育活動の自己評価】

講義では、WEB上であらかじめレジュメを配布し、これを使って予習・復習するよう学生に求めている。レジュメでは網羅的に解説を書くのではなく、ポイントを指摘することと、判例については年月日・出典のみを記載し、また、各回の最後に事例問題を附している。レジュメで詳しく解説を加えてしまえば、各自に自主的に予習してもらうことにはマイナスとなるし、また判例については原典に当たってもらうことが重要と考えているため年月日・出典のみの記載としている。最後の事例問題は復習用で、一読して出題の趣旨がわかれば、その回の学習内容が理解できたことになる。以上のやり方は、学習意欲の高い学生にとっては効果的な教育手法であると考えている。事例問題の解答を作成して質問に来る学生も少なくないが、最初はダメだった学生が、講義が進むにつれ、こちらの意図を正解した優れた答案を作成できるようになってくると、このやり方には効果があると実感できる(もっとも、あらゆる学生がそうではないが)。

【研究活動の自己評価】

研究テーマは商法・保険法である。とりわけ、近時は生命保険契約の意義・目的について中心的に研究している。最近書いたものでは、生命保険契約はなぜ定額保険契約であるのか、「定額」保険という範疇に現物給付は含まれるのかといった点を考察の対象とした。しかし、教育や校務等に時間を取られ、なかなか研究が進まず忸怩たる思いをしている。いままでもなく、大学教員の本分は研究にあり、これを教育にフィードバックし、さらに教育から研究に再びフィードバックすることが重要であると考えているので、基盤となる研究についてさらに精進したいと思う。

【職・氏名】教授 関 哲 夫 SEKI Tetsuo
 【学 位】博士(法学)(平成8年 早稲田大学 第2256号)
 【本学就任】平成22年
 【略 歴】早稲田大学法学部卒業
 早稲田大学法学研究科博士後期課程単位取得満期退学
 国士舘大学法学部法律学科教授
 【専門分野】刑事法(特に刑法、少年法)

【最近5年間の主な研究業績等】 [平成22～26年度] (10点まで)					
種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または 該当ページ	発行年月
著書	共	『川端博先生古希記念論文集上巻』	成文堂	全909p	平26. 10
著書	共	『曾根威彦先生・田口守一先生古稀祝賀論文集上巻』	成文堂	全940p	平26. 3
論文	単	「共謀共同正犯における『間接正犯類似説』の検討——共謀共同正犯の『正犯性』・『共犯性』に関する一考察(4)——」	『國學院法學』第51巻第4号 國學院大學法学会	pp.65-94	平26. 3
著書	単	『入門少年法』	学事出版	全146p	平25. 5
著書	共	『融資責任を巡る判例の分析と展開』	『金融・商事判例増刊』第1411号 経済法令研究会	全128p	平25. 3
論文	単	「刑法における因果関係に関する判例の見解について—行為後の介入事情をめぐって—」	『國學院法學』第50巻第4号 國學院大學法学会	全602p中 pp.43-122	平25. 3
判例評釈	単	警察署の塀の上部に上がった行為について 建造物侵入罪の成立が認められた事例	『判例評論』第646号 判例時報社	pp.189-194	平24. 12
著書	共	『判例特別刑法』	日本評論社	全532p	平24. 4
論文	単	「緊急避難の法的性質について」	『早稲田法学』第87巻第3号 早稲田大学	pp.415-457	平24. 3
著書	単	『続々・住居侵入罪の研究』	成文堂	全265p	平24. 3

【平成21年度以前の主な研究業績等】 (5点まで)					
種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または 該当ページ	発行年月
著書	単	『少年法の解説』(新訂版)	一橋出版	全165p	平20. 11
著書	単	『刑法解釈の研究』	成文堂	全328p	平18. 3
著書	単	『資料集・男女共同参画社会』	ミネルヴァ書房	全630p	平13. 7
著書	単	『続・住居侵入罪の研究』	成文堂	全270p	平13. 6
著書	単	『住居侵入罪の研究』	成文堂	全375p	平7. 3

【所属子云】日本刑法子云、氏土土義科子有協云法律部云、「法と精神医療」子云、日本教育者子云、瀬戸内刑事法研究会、

中四国法政学会

【最近5年間の学会等および社会における主な活動】

【教育活動の自己評価】

1) 教育内容・教育方法の工夫 教育内容を分かりやすく提供することと、しかし、難解な内容も教えることとの狭間で、試行錯誤・暗中摸索をしている。 2) 作成した教科書・教材 少年法の概説書、刑法総論・刑法各論のレジュメを作成。 3) その他小テストの実施、対話形式の導入などをやっているが、大学生にそのような勉強方法を強いることに疑問も感じている。

【研究活動の自己評価】

最近5年間の研究活動と今後の研究方針 1) 共謀共同正犯の研究を通じて、共謀共同正犯の理論を検討するとともに、「正犯性」の概念を解明する(継続)。 2) 体系的解釈を意識したときに、妥当性に疑問のある見解を批判的に検討していく(継続)。 3) 刑法総論・刑法各論の体系書を完成させる(継続)。

【職・氏名】教授 高 塩 博 TAKASHIO Hiroshi
 【学 位】法学博士(昭和63年7月 國學院大學 乙法第1号)
 【本学就任】平成3年
 【略 歴】國學院大學文学部史学科卒業
 國學院大學大学院法学研究科博士課程後期単位取得満期退学
 國學院大學日本文化研究所教授
 【専門分野】日本法制史

【最近5年間の主な研究業績等】 [平成22～26年度] (10点まで)					
種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または該当ページ	発行年月
論文	単	「丹後国田辺藩の「御仕置仕形之事」について―譜代藩における「公事方御定書」参酌の一事例―」	『國學院法學』第51巻第4号 國學院大學法学会	全475p中 pp.135-175	平26. 3
論文	単	「丹後国田辺藩の「敲」について」	『國學院法學』第51巻第3号 國學院大學法学会	全150p中 pp.51-74	平25. 12
論文	単	「「公事方御定書」の元文三年草案について―「元文三年御帳」の伝本紹介―」	『國學院法學』第51巻第2号 國學院大學法学会	全198p中 pp.27-167	平25. 9
著書	単	『近世刑罰制度論考―社会復帰をめざす自由刑―』	成文堂	全350p	平25. 3
編著	共	『北海道集治監勤務日記』	北海道新聞社	全960p	平24. 11
論文	単	「「敲」の刑具について―「敲箒」と「箒尻」―」	青木美智男・森謙二編『三くだり半の世界とその周縁』 日本経済評論社	pp.19-40	平24. 3
その他	単	「幕府人足寄場研究文献目録(稿)」	『法史学研究会会報』15号 明治大学法学部法史学研究室	全213p中 pp.140-150	平23. 3
論文	単	「「公事方御定書」の編纂過程と「元文五年草案」について」	『國學院法學』第48巻第4号 國學院大學法学会	全324p中 pp.19-125	平23. 3
論文	単	「「公事方御定書」下巻の奇妙な伝本」	椋山林継先生古稀記念論集刊行会編『日本基層文化論叢』 雄山閣	全647p中 pp.533-544	平22. 8
【平成21年度以前の主な研究業績等】 (5点まで)					
種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または該当ページ	発行年月
編著	単	『新編 荷田春満全集』第9巻律令	おうふう	全487p	平19. 11
著書	単	『江戸時代の法とその周縁―吉宗と重賢と定信と―』	汲古書院	全260p	平16. 8
編著	共	『唐令拾遺補』	東京大学出版会	全1514p	平9. 3
編著	共	『熊本藩法制史料集』	創文社	全1303p	平8. 3
著書	単	『日本律の基礎的研究』	汲古書院	全500p	昭62. 5

【所属学会】法制史学会、東方学会、法文化学会、国史学会

【最近5年間の学会等および社会における主な活動】

法制史学会理事(平18. 4～現在)、公益財団法人矯正協会理事(平19. 4～現在)、法文化学会理事(平21. 4～現在)、公益財団法人網走監獄保存財団参与(平24. 4～現在)

【教育活動の自己評価】

講義すべき内容をじゅうぶんに咀嚼したうえで教室に臨むことを心がけている。講義においては、発声が明瞭であること、板書は内容が系統的であり、かつ判読しやすい書体であることに努めている。毎回などかの質問を発し、自らの頭で考えることの重要性を学生に認識させるとともに、このことにより教師と学生との意志の疎通をはかっている。

【研究活動の自己評価】

近世刑事法を大テーマとし、この中から幕府および諸藩の法典編纂と刑罰制度とを二本柱として研究を進めている。前者については幕府「公事方御定書」の成立史に力点を置き、新出史料にも恵まれて順調に進捗している。後者については改善主義の考え方を含む徒刑制度およびムチ打ち刑について考察を加えている。共に体系的な著書にまとめることを目標としている。

【職・氏名】准教授 高橋 信行 TAKAHASHI Nobuyuki
 【学 位】博士(法学)(平成21年1月 東京大学 甲第24243号)
 【本学就任】平成17年
 【略 歴】東京大学法学部卒業
 東京大学大学院法学政治学研究科博士課程単位取得退学
 【専門分野】公法(行政法)

【最近5年間の主な研究業績等】 [平成22～26年度] (10点まで)					
種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または該当ページ	発行年月
論文	単	「行政組織編制権」	宇賀＝高木編『行政法の争点(第4版)』 有斐閣	pp.168-169	平26. 9
論文	単	「内閣と統治(65条)」(特集 条文からスタート 憲法2014)	『法学教室』 405号	pp.39-41	平26. 6
論文	単	震災復興と行政法理論:「上書き条例」の活用に関する試論	『自治研究』 90巻5号	pp.30-58	平26. 5
判例評釈	単	共有不動産の持分差押取消訴訟における原告適格の範囲	『平成25年度重要判例解説(ジュリスト臨時増刊)』 1466号		平26. 4
判例評釈	単	「住基ネットと住民のプライバシー」	『地方自治判例百選 第4版(別冊ジュリスト)』 215号 有斐閣		平25. 6
評論・書評等	単	「ルドルフ・スメント:「統合理論」事始め」	『書齋の窓』 624号 有斐閣	pp.2-5	平25. 5
論文	単	ルネ・カピタン: 共和国の崩壊と再生	『日仏法学』 27号 日仏法学会	pp.1-26	平25
著書	単	「統合と国家—国家嚮導行為の諸相」	有斐閣	全396p	平24. 12
判例評釈	単	「行政権の濫用」	『行政判例百選1 第6版(別冊ジュリスト)』 211号		平24. 10
判例評釈	単	判例解説 内閣官房報償費関連文書[大阪地裁平成24.3.23判決]	『季報情報公開・個人情報保護』 46号	pp.26-31	平24. 9

【平成21年度以前の主な研究業績等】 (5点まで)					
種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または該当ページ	発行年月
論文	単	鉄道事業法と原告適格——小田急高架化訴訟大法廷判決その後	『國學院法學』 第47巻第2号 國學院大學法学会	pp.83-106	平21. 9
判例評釈	単	鉄道施設工事施行認可取消訴訟(平成19. 10. 25大阪高判) <行政判例研究547>	『自治研究』 85巻7号 第一法規	pp.120-142	平21. 7
判例評釈	単	叔父一姪の近親婚関係であることを理由に遺族厚生年金の受給権が否定された例(平成17. 5. 31東京高判) <行政判例研究534>	『自治研究』 84巻6号 第一法規	pp.134-153	平20. 6
判例評釈	単	公正取引委員会審判事件記録閲覧謄写許可処分取消請求事件(平成14. 6. 5東京高判) <行政判例研究531>	『自治研究』 84巻3号 第一法規	pp.105-121	平20. 3
判例評釈	単	東京電力福島第二原子力発電所運転差止訴訟[東京高裁平成11. 3. 25判決] <行政判例研究531>	『自治研究』 84巻2号 第一法規	pp.120-146	平20. 2

【所属学会】日本公法学会、日仏法学会、行政判例研究会

【最近5年間の学会等および社会における主な活動】

一般社団法人モバイルコンテンツ審査・運用監視機構(EMA)委員(平20. 4～現在)、
 渋谷区個人情報の保護及び情報公開審査会委員(平24. 4～平26. 3)、行政書士試験委員(平24. 4～現在)

【教育活動の自己評価】

行政法1(総論)、行政法2A・2B(行政救済法)、行政法3A・3B(行政組織法・地方自治法)、演習を担当している。講義に際しては、行政法に関係するビデオ教材(ニュース等)を流した上で、学生にニュースの概要をまとめさせるという課題を提出している。これは、学生のヒアリング能力・要約執筆能力を高めると共に、行政法の知識が社会の出来事と密接に関係していることを認識させるためのものである。また、授業後には、K-SMAPYの「小テスト」機能を利用して確認小テストを実施している。これは、学習に自宅での復習を促すためのものである。このように、講義に際しては、一方的な説明に終始するのではなく、学生が自ら頭と手を使って考える習慣を身に付けさせるよう努めている。また、演習においては、判例を教材として、判決文を読み解く能力を身に付けると同時に、行政法に関する深い知識を得ることを学生に求めている。判決文を読み解くための基礎的な知識をまず説明することで、学生達が自ら判決文を読んで理解できる力を一から鍛えるようにしている。

【研究活動の自己評価】

研究活動においては、行政法に関する小論(判例評釈や入門用記事)を執筆すると共に、残りの時間で行政法の専門的な論稿を執筆するよう努めている。並行して、長期的な研究課題であるフランス第3共和制から第5共和制にかけての公法理論を分析しているが、思うように進展していないのが現状である。

【職・氏名】教授 田中和子 TANAKA Kazuko
 【学 位】社会学修士、Master of Arts in Sociology
 【本学就任】昭和56年
 【略 歴】東京女子大学文理学部英米文学科卒業
 ハワイ大学社会学部大学院修士課程修了
 東京都立大学大学院社会科学研究所社会学専攻博士課程単位取得満期退学
 【専門分野】女性社会学、ジェンダー論、女性学

【最近5年間の主な研究業績等】 [平成22～26年度] (10点まで)					
種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または該当ページ	発行年月
論文	共	「ミレニアムを通過した新聞ジェンダー表現の現在 (その4)」	『国学院法学』第50巻第3号 国学院大学法学会	pp.35-130	平24. 12
論文	共	「ミレニアムを通過した新聞ジェンダー表現の現在 (その3)」	『国学院法学』第48巻第4号 国学院大学法学会	pp.127-231	平23. 3

【平成21年度以前の主な研究業績等】 (5点まで)					
種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または該当ページ	発行年月
論文	単	「フェミニスト社会学のゆくえ」(一部修正して再録)	天野正子他編『新編日本のフェミニズム2—フェミニズム理論』岩波書店	全325p	平21.11
論文	単	「オーストラリアの女性政策と女性運動」	『社会政策学会年報』第42集社会政策学会 現代書館	pp.211-229	平10. 6
編著書	共	『ジェンダーからみた新聞のうら・おもて』	現代書館	全405p	平8、12
論文	単	“The New Feminist Movemint in Japan 1970-1990”	Japanese Women, The Feminist Press	全422p中 pp.343-352	平7.7.
編著書	共	『女性社会学をめざして』	垣内出版	全321p	昭56. 6

【所属学会】日本社会学会、日本女性学会

【最近5年間の学会等および社会における主な活動】

所属するNGOを通じて、日本学術会議に働きかけ、「災害・復興と男女共同参画 6.11シンポ実行委員会」を立ち上げて、東日本大震災から3ヶ月後に、日本学術会議主催学術フォーラム「(災害・復興と男女共同参画)6.11シンポ」の開催にこぎつけた。このシンポジウムでは、震災・復興に男女共同参画、ジェンダーの視点を取り入れることの緊急性と必要性について公開討論を行い、災害当事者、女性団体、研究者が知見を交換・共有し、政策提言に結び付けた。

福島県三春町の原発事故被災農業女性の支援(平24. 4～現在)

【教育活動の自己評価】

授業作りの留意点としては、科目により内容は異なっても、それぞれの局面で、社会の構造化要因としてのジェンダーの作用を読み解く方法を会得してもらおう試みている。その際、視聴覚教材や新聞記事等を活用すると同時に、中間課題レポートにおいて、関連の社会現象・社会問題を学生みずから調べ、考察する作業を通じて、社会の仕組みと現実をよりリアルに把握し、問題解決の糸口をつかんでもらうよう促している。また、各授業の最後に「クイズ」を出し、学生の理解度を確かめ、次の授業時に必要に応じて補足説明を行う。学期末には、授業内容・教授方法に関する1学期を通じた感想・論評を提出してもらい、次年度に向けた改善のための資料としている。

【研究活動の自己評価】

研究は、次の3本柱で行っている。① 女性学・ジェンダー研究を推進するための女性情報ソースの開発と普及② 女性運動と女性政策の国際比較研究——戦後日本の女性運動・女性政策の研究およびオセアニア、北欧、米国等との比較。また、3.11.東日本大震災以降は、女性運動が、同震災およびその復興にどのように取り組んでいるかについても、現地に足を運びながら、考察を続けている。③ 新聞メディアのジェンダー分析——定期的に全国紙を分析し、紙面や表現方法の時系列比較研究を行い、『国学院法学』等に発表している。

【職・氏名】教授 中川孝博 NAKAGAWA Takahiro
 【学位】博士(法学)(平成11年3月 一橋大学 甲第74号)
 【本学就任】平成20年
 【略歴】一橋大学法学部卒業
 一橋大学大学院法学研究科博士後期課程修了
 龍谷大学法学部法律学科教授
 【専門分野】刑事訴訟法

【最近5年間の主な研究業績等】 [平成22～26年度] (10点まで)

種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または該当ページ	発行年月
論文	単	「事実認定をめぐる破棄理由——最三小決平二五・四・一六を契機として」	『國學院法学』51巻4号 國學院大學法学会	pp.177-206	平26. 3
論文	単	「犯罪少年に対する未決拘禁」	武内謙治編著『少年事件の裁判員裁判』 現代人文社	全455p中 pp.357-377	平26. 1
論文	単	「勾留の相当性・序説」	浅田和茂＝葛野尋之＝後藤昭＝高田昭正＝中川孝博編『福井厚先生古稀祝賀論文集 改革期の刑事法理論』 法律文化社	全558p中 pp.43-64	平25. 6
著書	共	『コンメンタール少年法』	現代人文社	pp.313-320, 518-519	平24. 12
論文	単	「無罪判決に対する検察官上訴・序説——大阪高判平成24年3月2日の検討を中心に」	齊藤豊治先生古稀祝賀論文集『刑事法理論の探求と発見』 成文堂	pp.341-363	平24. 12
判例評釈	単	「最一小判平24・2・13の意義と射程」	季刊刑事弁護 71号 現代人文社	pp.129-136	平24. 7
著書	共	『刑事訴訟法講義案[第2版]』	法律文化社	全218p	平24. 3
論文	単	「布川事件最高裁決定の意義——最高裁判例における明白性判断の動的性格」	浅田和茂ほか編『村井敏邦先生古稀記念論文集——人権の刑事法学』 日本評論社	全965p中 pp.767-794	平23. 9
著書	共	『刑事法入門[第2版]』	法律文化社	全200p	平23. 4
編著	共	『判例学習・刑事訴訟法』	法律文化社	全338p	平22. 9

【平成21年度以前の主な研究業績等】 (5点まで)

種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または該当ページ	発行年月
論文	単	「受刑者の外部交通(一般面会・信書発受)」	『福田雅章先生古稀祝賀論文集』 成文堂		平22. 1
著書	単	『刑事裁判・少年審判における事実認定——証拠評価をめぐるコミュニケーションの適正化』	現代人文社	全302p	平20. 12
論文	単	「公判準備手続の構造と被告人の地位」	『刑法雑誌』46巻1号	pp.143-156	平18. 6
著書	共	『代用監獄・拘留所改革のゆくえ——監獄法改正をめぐる』	現代人文社	全255p	平17. 12
著書	単	『合理的疑いを超えた証明——刑事裁判における証明基準の機能』	現代人文社	全324p	平15. 2

【所属学会】日本刑法学会、法と心理学会

【最近5年間の学会等および社会における主な活動】

『季刊刑事弁護』編集委員(平16. 10～平25. 3)

【教育活動の自己評価】

近年の大学教育改革の動向に対応し、担当科目のアクティブラーニング化を進めてきた。2013年度には担当科目全てにおいて協働学習方式が定着した。また、1年生配当科目から3・4年生配当科目へと漸次的に学びを進めるスモールステップ方式のカリキュラム体系も、自身が担当する科目については完了した。授業アンケートにおける「1週間あたりの自習時間」は、担当科目すべてにおいて全体平均を上回り、かつ、理解度順位では法学部専任教員1位、満足度順位では2位となった(2012年度)。私の担当科目において「日本の学生は勉強しない」という言説は通用しない、と自信をもって言えるレベルに達している。2014年12月に、自らの教育実践を紹介する単著『法学部は甦る！(上)』を刊行した。

【研究活動の自己評価】

私のライフワークは、刑事裁判および少年審判における事実認定の適正化、および、刑事手続における身体拘束の適正化、の2点である。前者については、裁判員制度施行後にみられる実務の変化に対応して、さまざまな判決の評釈を行ってきた。後者については、少年の身体拘束に関する論文を公表したり、現行刑事訴訟法の勾留に関する諸規定を洗いなおす論文を公表したりするなどしてきた。そろそろこれら2つのテーマについて、ここ5年程度の成果をまとめる本を出版しようと考えている。

【職・氏名】教授 永 森 誠 一 NAGAMORI Seiichi
 【学 位】法学修士
 【本学就任】昭和54年
 【略 歴】東京大学法学部卒業
 東京大学大学院法学政治学研究科修士課程修了
 東京大学大学院法学政治学研究科博士課程単位取得満期退学
 【専門分野】政治学、現代政治

【最近5年間の主な研究業績等】 [平成22～26年度] (10点まで)					
種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または該当ページ	発行年月
論文	単	「政治という寓話」	『國學院法學』第50巻第4号 國學院大學法学会	pp.123-148	平25. 3

【平成21年度以前の主な研究業績等】 (5点まで)					
種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または該当ページ	発行年月
論文	単	「政党と政策」	『現代日本政党史録』第5巻 第一法規	pp.441-481	平成16年
著書	単	『派閥』	筑摩書房	全238p	平14. 1
論文	単	「関係の構成」	『國學院法學』第28巻第1号 國學院大學法学会	pp.45-86	平2. 9
論文	単	「産業社会の中の第三世界」	『國學院大學紀要』第28巻 國學院大學	pp.107-126	平2. 3
論文	単	「政策の構成(1)(2)」	『國學院法學』第27巻第3・4号 國學院大學法学会	(1)pp.61-77, (2)pp.87-122	平2. 2

【所属学会】日本政治学会、International Society of Political Psychology、International Society of Political Psychology、比較政治学会

【最近5年間の学会等および社会における主な活動】

【教育活動の自己評価】

多人数の講義が続き、いろいろと工夫はしてみたが、満足できる講義にはならなかった。

【研究活動の自己評価】

不作が続いているが、1点だけでも論文が書けて、多少の慰めにはなった。

【職・氏名】教授 長谷川 光 一 HASEGAWA Koichi

【学 位】法学修士

【本学就任】昭和54年

【略 歴】早稲田大学法学部卒業

早稲田大学大学院法学研究科民事法専攻博士課程単位取得満期退学

群馬大学教育学部教育学科非常勤講師

【専門分野】民法、比較法

【最近5年間の主な研究業績等】 [平成22～26年度] (10点まで)					
種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または 該当ページ	発行年月

【平成21年度以前の主な研究業績等】 (5点まで)					
種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または 該当ページ	発行年月
翻訳・ 翻刻書	共	J.P.ベルト『ナポレオン年代記』(Histoire du Consulat et d l'Empire)	日本評論社	全322p	平13. 4
論文	単	「問答契約の解釈準則—ローマ法」	『國學院法政論叢』第22輯 國學院大學大学院法学研究科	pp.1-25	平13. 3
著書	共	『民法演習Ⅲ』	成文堂	p285	平8. 3
著書	共	『民法総則』改訂版	青林書院	全272p中 pp.231-265	平4. 2
翻訳・ 翻刻書	共	ゴデシヨ『フランス革命年代記』	日本評論社	全302p中 pp.137-181	平1. 7

【所属学会】日本比較法学会、日本土地法学会

【最近5年間の学会等および社会における主な活動】

消費者団体役員(平15～現在)

【教育活動の自己評価】

学部では、ここ数年間、講義科目は一年生配当の科目を担当することが多いが、社会経験が乏しい学生にとって民法は、法律科目の中でも難しいようで、卑近な具体例を挙げて説明をするように努めている。演習科目では学生の自主性を涵養するために、事前に課題を与えて、判例や文献を探索させ、解答例をまとめさせて、発表させている。しかし、発表者以外のものは沈黙している学生が多く、白熱したとは言わないまでも、活発な議論を期待している当方にとっては隔靴搔痒の思いである。自分の意見を主張しないのは日本の学生の特質なのか。

【研究活動の自己評価】

現在の我が国の民法典の改正が、債権法を中心に準備されているが、債権編の条文のかなりの部分は大陸法を通じて、古代ローマ法にその起源を有していることはよく知られている。その原点に戻って、改めて古代ローマ法の、債権法、特に契約について研究を進めている。電子取引などの新たな契約関係が展開され、一般的に行われるようになった現代において、2000年前の法制度がどれほどの意義を持つのか、懐疑的見方がされようが、当時の言語契約、特に問答契約や文書契約(現在の要式行為に当たるだろう)の方式は電子契約の方式に応用できるのではないかと。しかし研究成果の発表にまでは至っていない。

【職・氏名】准教授 姫野学郎 HIMENO Gakuro

【学 位】修士(法学)

【本学就任】平成16年

【略 歴】京都大学法学部卒業

京都大学法学研究科博士後期課程研究指導認定

日本学術振興会特別研究員(PD)

大阪国際大学法政経学部法政経学科専任講師

【専門分野】民法

【最近5年間の主な研究業績等】 [平成22～26年度] (10点まで)					
種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または該当ページ	発行年月
論文	単	「エドゥアル・ランベールの比較法(1)―法の「社会化」と「国際化」	『國學院法学』第51巻第4号 國學院大學法学会	全70p	平26. 3
解説・ 解題等	共	『判例プラクティス民法II』	信山社		平22. 6

【平成21年度以前の主な研究業績等】 (5点まで)					
種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または該当ページ	発行年月
調査・研究報告等	単	『『ヨーロッパ民法典』の法思考―近年の比較法学による批判を通して―』	『比較法研究』69号 有斐閣	p.206	平20. 5
解説・解題等	共	前田達明編『史料・民法典』	成文堂	pp.611-612, 1216-1217, 1218-1219, 1221-1223, 1230-1231, 1232-1233, 1276-1277, 1279-1280, 1310-1314, 1432,1434, 1436, 1438-1439, 1441	平16. 1
調査・研究報告等	単	「債務不履行における債務者の追完権―国際条約・原則とアメリカ法の展開を手がかりにして」	『私法』66号	p.116-122	2004年
論文	単	「契約理論の現在―契約の再交渉論への序説―」	『大阪国際大学国際研究論叢』16巻2号 大阪国際大学	pp.195-219	平15. 3
調査・研究報告等	単	「契約不履行を追完する売主の権利―イングラント法とアメリカ法の比較の試み―」	『比較法研究』65号	pp.160-166	2003年

【所属学会】日本私法学会、比較法学会、日本法社会学会

【最近5年間の学会等および社会における主な活動】

【教育活動の自己評価】

大講義については、レジュメを作成配布し、時々小テストやコメントペーパーによるフィードバックを図っている。そのさい、①内容の追加と削減、②「ザックリ」と「砕いた」説明、一般の教科書の説明では自明視されていることがらにもあえて言及すること、に努めている。③期間内の試験は、問題の事前公開等、相当配慮をしたうえで、あえて記述式(解答用紙2枚程度)をおこなっている。

マイナス面は、①内容削減の帰結として、他の民法科目受講時に、私の担当科目について聞いていない部分や論点が多いであろうこと。②学問的正確さが犠牲にされること。③学生側も教員側も限られた時間でそれぞれの課題処理に忙殺されること。

プラス面は、①内容の追加により、とくに1年生対象科目については従来各自の学習にゆだねられていた民法財産法や民訴法につき、ある程度全体的なイメージがつかめるだろうということ。他方、内容削減により、追加によって加えられた負担のある程度の軽減が期待されること。②法律上の概念、制度は「ハエ取り壺」と化していることが多い。たしかに初学者向けの配慮は必要と思われる。だが、学習者が教師による説明を無批判に鵜呑みにし、厳密な定義等を軽視する傾向が強いのが大きな悩みである。③圧倒的多数の学生は、これまで客観問題に馴致されている。彼らに(乗り越え可能な)試練をあえて与え、社会に出たあとに必要な、文章(広く言語)による問題解決能力を付ける必要性を体感してもらう意図はある程度の学生には伝わっているようである。

【研究活動の自己評価】

2004-6年度以来、コモン・ローの「学問化」を中心に研究をおこなってきた。この場合念頭にあったのは、とくにドイツ学説のコモン・ローへの「継受」、その帰結としてのコモン・ローの「学問化」、コモン・ローの大陸法への接近、コモン・ロー、大陸法を通じた法統一条約等起草への機運の高まり、という図式である。この図式は、1932年のMax Rheinsteinによる論考によって先鞭をつけられ、次第に英米をも支配していったと言ってよいと思われる。この方向性に従って、未発表分を含め、いくつか個別研究を進めてきた(し、今後を進めるつもりである)。

けれども、この2～3年で、以上の方向性に対する根本的な疑問が強まった。そこで現在までに徐々に形をなしてきた図式を試論的にまとめたのが、2014年3月に公表した論文である。

【職・氏名】准教授 平地秀哉 HIRACHI Shuya

【学 位】修士(法学)

【本学就任】平成17年

【略 歴】早稲田大学法学部卒業

早稲田大学大学院法学研究科博士後期課程単位取得満期退学

早稲田大学法学部助手

【専門分野】憲法

【最近5年間の主な研究業績等】 [平成22～26年度] (10点まで)					
種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または該当ページ	発行年月
論文	単	『「格差」問題と「法の下」の平等』	『法学セミナー』712号 日本評論社	全5p	平26.5
判例評釈	単	「駅構内でのピラ配布と表現の自由」	長谷部恭男ほか編『憲法判例百選I【第6版】』 有斐閣	全2p	平25.11
学会発表等	単	「公務員の政治活動の自由」	全国憲法研究会 2013年度春季研究集会 於 新潟大学		平25.5
論文	単	「憲法裁判における外国法の参照:アメリカ合衆国における論争を素材に」	『法学新報』119巻9・10号 中央大学法学会	全21p	平25.3
論文	単	『「品格ある社会」と表現』	『表現の自由I—状況へ』 尚学社	全35p	平23.5
判例評釈	単	「公務員の政治活動の自由—堀越事件」	法学教室別冊付録『判例セレクト2010【I】』365号 有斐閣	全1p	平23.2
翻訳・翻刻書	共	『アメリカ憲法への招待』	三省堂	全335p	平22.8
判例評釈	単	「選挙運動資金の規制」	『ジュリスト』1401号 有斐閣	全9p	平22.6

【平成21年度以前の主な研究業績等】 (5点まで)					
種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または該当ページ	発行年月
論文	単	「ローレンス・H・トライブ——“No Theory”という名の“Grand Theory”」	『アメリカ憲法の群像 理論家編』 尚学社	全22p	平22.1
論文	単	「平等理論——『審査基準論』の行方」	『法律時報』81巻12号 日本評論社	全8p	平21.11
論文	単	「サイバースペース・公共圏・表現の自由(2・完)」	『國學院法學』45巻2号 國學院大學法学会	pp.1-42	平19.9
論文	単	「サイバースペース・公共圏・表現の自由(1)」	『國學院法學』45巻1号 國學院大學法学会	pp.55-93	平19.7
論文	単	「熟議民主政と社会福祉」	『早稲田法学』79巻4号 早稲田大学法学会	pp.153-192	平16.9

【所属学会】日本公法学会、日米法学会、憲法理論研究会、全国憲法研究会

【最近5年間の学会等および社会における主な活動】

【教育活動の自己評価】

担当する各講義の性質に応じて、教材および教授法に工夫を施した。具体的には、講義系の科目で受講者の多いものについては、教材に自作の図表をできる限り多く付して受講者の視覚にうたえることで理解を助ける工夫を施した。また、受講者が少人数の講義科目については、図表に加えて設問も付し、かつ事前に配布することで、予習+双方向型の授業を目指した。他方、演習系の科目については、受講者の主体的・積極的な参加を促すために、報告担当者とのプレゼミで論点をあらかじめ整理し、参考文献を指示するなど、受講者の問題関心を高めるような内容にするよう指導した。

【研究活動の自己評価】

主として表現の自由と法の下での平等についての研究を、日本およびアメリカ合衆国における判例や学説の読解を通じて重ねてきた。その成果は、国内の法律雑誌や大学紀要、単行本への寄稿を通じて、あるいは学会報告という形で公表することができた。また、アメリカ合衆国憲法を研究する若手研究者による「アメリカ憲法研究会」に引き続き参加し、アメリカ合衆国連邦最高裁判所裁判官の軌跡について研究を重ねてきた。この成果は、後日『アメリカ憲法の群像 裁判官編』として出版される予定である。

【職・氏名】准教授 藤 嶋 亮 FUJISHIMA Ryo
 【学 位】博士(法学)(平成22年3月 東京大学 第17325号)
 【本学就任】平成26年
 【略 歴】東京大学大学院法学政治学研究科博士課程単位取得退学
 日本学術振興会特別研究員(PD)
 同志社大学政策学部政策学科客員准教授
 【専門分野】比較政治

【最近5年間の主な研究業績等】 [平成22～26年度] (10点まで)

種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または該当ページ	発行年月
論文	単	「半大統領制の下位類型に関する一試論—ヨーロッパの事例を中心に」	『21世紀デモクラシーの課題』 吉田書店	pp.101-138	平26. 12
論文	単	「南東欧諸国における寡頭的議会制からの移行—ルーマニアとブルガリアの比較から—」	『日本比較政治学会年報第16号 体制転換／非転換の比較政治』 ミネルヴァ書房	全234p中 pp.129-155	平26. 6
論文	単	「ルーマニア・ブルガリア」及び「半大統領制」	『ヨーロッパのデモクラシー[改訂第2版]』 ナカニシヤ出版	pp.171-173, 501-544	平26. 3
論文	共	「政党間競合と有権者の選好分布:ルーマニアとブルガリアの事例」	日本比較政治学会研究大会ペーパー		平25. 6
論文	単	「『プレイヤーとしての大統領』トリアン・バセスク—比較の視座から見たルーマニアの半大統領制—」	『ロシア・東欧研究』 第41号 ロシア・東欧学会	pp.3-18	平25. 3
著書	単	『国王カール対大天使ミカエル軍団—ルーマニアの政治宗教と政治暴力』	彩流社	全446p	平24. 8
論文	単	「戦間期ルーマニア議会政治の隘路」	『国際学研究』 第39号 明治学院大学国際学部	pp.63-86	平23. 3
その他	単	「ルーマニア政党・選挙データ」	『ポスト社会主義諸国 政党・選挙ハンドブックⅢ』 京都大学地域研究統合情報センター	pp.79-106	平22. 12
論文	単	「ルーマニア」	『ヨーロッパ政治ハンドブック[第2版]』 東京大学出版会	pp.256-266, 335-336	平22. 5

【平成21年度以前の主な研究業績等】 (5点まで)

種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または該当ページ	発行年月
論文	単	「国王独裁対軍団運動—1930年代ルーマニアにおける権威主義体制とファシズム運動のダイナミクス—」	博士論文 東京大学大学院法学政治学研究科		平22. 3
論文	単	「ルーマニアのEU加盟と国内政治の変容—『欧州政党』と『姉妹政党』のダイナミクス—」	『国際学研究』 第37号 明治学院大学国際学部	pp.95-99	平22. 3
論文	単	「ルーマニア・ブルガリア」	『ヨーロッパのデモクラシー』 ナカニシヤ出版	pp.399-435	平21. 5
論文	単	「戦間期ルーマニアにおける軍団運動の興隆」	『国家学会雑誌』 第113巻5・6号 国家学会	pp.140-206	平12. 5
論文	単	「戦間期ルーマニアの軍団運動—その研究史に関する覚書—」	『東欧史研究』 第22号 東欧史研究会	pp.37-52	平12. 5

【所属学会】東欧史研究会、日本比較政治学会、日本政治学会、ロシア・東欧学会

【最近5年間の学会等および社会的における主な活動】

世田谷市民大学・政治ゼミ講師補佐(平22. 4～平23. 3、平24. 4～平25. 3)、日本比較政治学会・渉外委員(平26. 11～現在)

【教育活動の自己評価】

学部の専門演習では、「ナショナリズムの歴史と多様性」というテーマで、ナショナリズムに関する重要文献を輪読形式で読み進めた。理解を深めるために、毎回、詳細な疑問点・論点の事前提出を求めた。また、時事的な問題を中心に、地理的・時代的に多様な事例を取り上げることで、学生の関心を喚起するとともに、自ら問題設定を行い、早い段階で文献調査等を進めるように促した。全学共通科目の教養総合演習(中・東欧の歴史と社会)では、特定の地域の歴史と社会を主な題材としつつ、現代社会の諸問題について、学生が自ら頭を使って考え議論するような教育手法(アクティブ・ラーニング)の実践を試みた。具体的には、前提となる知識を講義した上で、課題・参考文献により授業外学習を促すとともに、グループ・ディスカッションを行い、グループ内での知識の共有や、意見の発表・すり合わせを通じて、多面的な理解・主体的に取り組む姿勢の向上を目指した。なお、学部専門科目「比較政治A・B」のテキストとして、(共著)『ヨーロッパのデモクラシー[改訂第2版]』(ナカニシヤ出版、2014年)が刊行された。

【研究活動の自己評価】

博士論文を加筆修正して公刊(『国王カール対大天使ミカエル軍団』)するとともに、科研費による以下のプロジェクトに分担者として参加。①基盤(B)「ヨーロッパにおける政党競合構造の変容と政党戦略」(平21～23年度)、②基盤(C)「旧東欧の新民主諸国における民主制の型」(平23～25年度)、③基盤(C)「南欧・ラミ諸国の政治変動に見る憲法体制と非公式制度の相互作用に関する比較研究」(平24～26年度)、④基盤(B)「中小国を中心とするヨーロッパ諸国と日本の政治発展の比較研究」(平25年度～)。①では南東欧の政党政治を分析し(共著)『ヨーロッパのデモクラシー』を公刊、②では中東欧の半大統領制について『プレイヤーとしての大統領』トリアン・バセスクを発表、③では南東欧の政治変動を比較し「南東欧諸国における寡頭的議会制からの移行」を発表、④では戦間期ルーマニアの選挙政治について実証研究を進めている。

【職・氏名】教授 水谷三公 MIZUTANI Mitsuhiro

【学位】政治学士

【本学就任】平成10年

【略歴】東京大学法学部政治学科卒業

東京大学法学部助手

東京都立大学法学部教授

【専門分野】日英近代統治論、江戸期以降の官僚制、王政・天皇制

【最近5年間の主な研究業績等】 [平成22～26年度] (10点まで)

種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または 該当ページ	発行年月

【平成21年度以前の主な研究業績等】 (5点まで)

種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または 該当ページ	発行年月
著書	単	『官僚の風貌－日本の近代13』	中央公論新社	全410p	平11. 8
著書	単	『ラスキとその仲間』	中央公論社	全376p	平6. 4
著書	単	『江戸は夢か』	筑摩書房	全253p	平4. 10
著書	単	『王室・貴族・大衆』	中央公論社	全256p	平3. 6
著書	単	『英国貴族と近代』	東京大学出版会	全343p	昭62. 9

【所属学会】

【最近5年間の学会等および社会における主な活動】

【研究活動の自己評価】

ここ10年ほど、日本国家の新たな通史的な理解を可能にする枠組みを求めて研究してきた。この目的のため、自由になる時間のほぼすべてを資料調査・読解や関連施設・現場の実地調査、草稿作成などに投入してきた。しかし、入り口だったはずの古代列島の再検討が予想以上に難航し、國學院在職中には結果を出すことができなかった。退職後も研究を継続し、できるだけ早い機会に論文として発表したいと期待している。

【職・氏名】教授 宮内靖彦 MIYAUCHI Yasuhiko

【学 位】法学修士

【本学就任】平成5年

【略 歴】早稲田大学法学部卒業

早稲田大学大学院法学研究科博士課程満期退学

【専門分野】国際法、国際組織法、安全保障

【最近5年間の主な研究業績等】 [平成22～26年度] (10点まで)					
種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または該当ページ	発行年月
著書	共	『国際法学入門』	成文堂	全304p中 pp.236-276	平23. 6

【平成21年度以前の主な研究業績等】 (5点まで)					
種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または該当ページ	発行年月
論文	単	「武力不行使原則から見た『対抗措置』概念の機能－国家責任条文と国際判例の比較検討－」	島田征夫＝古谷修一編『国際法の新展開と課題－林司宣先生古稀祝賀』 信山社出版	全436p中 pp.28-43	平21. 2
論文	単	「自衛の発動要件についての非国家的行為体の意味－国際判例の観点からの分析－」	村瀬信也編『自衛権の現代的展開』 東信堂	全308p中 pp.131-164	平19. 5
論文	単	「国際法および国内法上の対応措置－領土侵犯対処の法的根拠は？」	『軍事研究』2005年3月号(40巻3号) ジャパン・ミリタリー・レビュー	pp.200-209	平17. 2
論文	単	「国際テロ行為に対する報復爆撃の問題提起－国際法強制システム形成への胎動？－」	『國學院法學』第38巻第1号 國學院大學法学会	pp.75-136	平12. 7
論文	単	「武力行使の類型化の意義と問題点－『武力による対抗措置』の存在基盤－」	『國學院法學』第32巻第4号 國學院大學法学会	pp.109-158	平7. 3

【所属学会】国際法学会、世界法学会、米国国際法学会、ヨーロッパ国際法学会

【最近5年間の学会等および社会における主な活動】

【教育活動の自己評価】

学生が自ら当事者として国際法の知識・思考力を身に付けられるような学修を促すべく、近年は、アクティブ・ラーニングの方式の導入を試みている。講義科目においては、可能な限り、事例を素材とし、事前課題への準備を義務づけ、授業時間においては、当該事例に関する質疑応答による事例分析を通じて、各科目の内容を修得させるようにしている。演習科目においては、所定のテーマに関する各自の報告を踏まえ、特に、適用法規からの推論の技術の修得に重点を置いて指導している。

【研究活動の自己評価】

個人としては、国際法における武力行使の規制、および、国際法の強制に関する研究を継続している。2013年度からは、早稲田大学比較法研究所招聘研究員として、同研究所の国際責任法研究会に所属し、国家責任法の分析や国際法理論の研究に参加している。

【職・氏名】准教授 宮下大志 MIYASHITA Hiroshi

【学位】法学修士

【本学就任】昭和63年

【略歴】東京大学法学部卒業

東京大学大学院法学政治学研究科政治専攻博士課程単位取得満期退学

【専門分野】政治学、西洋政治史

【最近5年間の主な研究業績等】 [平成22～26年度] (10点まで)					
種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または 該当ページ	発行年月

【平成21年度以前の主な研究業績等】 (5点まで)					
種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または 該当ページ	発行年月
著書	共	『現代政治学の名著』	中央公論社	全218p中 pp.134-147 (新書版)	平元. 4
著書	共	『戦後デモクラシーの成立』	岩波書店	全342p中 pp.61-98	昭63. 12

【所属学会】日本政治学会

【最近5年間の学会等および社会における主な活動】

【教育活動の自己評価】

一方的に講義する授業ではなく、学生に答えさせる授業を展開している。

【研究活動の自己評価】

研究活動により力を入れ、業績を残したい。

【職・氏名】教授 本久洋一 MOTOHISA Yoichi

【学位】修士(法学)

【本学就任】平成22年

【略歴】早稲田大学大学院法学研究科修士課程修了
早稲田大学大学院法学研究科博士課程退学
小樽商科大学商学部企業法学科教授

【専門分野】労働法

【受賞歴等】小野梓記念賞(平成3年)

【最近5年間の主な研究業績等】 [平成22～26年度] (10点まで)					
種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または該当ページ	発行年月
論文	単	「使用者の概念」	土田道夫・山川隆一編『労働法の争点』ジュリスト増刊有斐閣	全260p中pp.7-9	平26. 3
著書	共	『判例ナビゲーション 労働法』	日本評論社	全292p	平26. 2
著書	共	『事業再構築における労働法の役割』	中央経済社	全560p中pp.234-256	平25. 10
論文	単	「規制改革会議の雇用制度改革は何をしようとしているのか」	『季刊労働者の権利』300号 日本労働弁護団	全16p	平25. 7
著書	共	『新基本法コンメンタール 労働基準法・労働契約法』	日本評論社	全576p	平24. 9
著書	共	『労働契約と法』	旬報社	全341p中pp.245-260	平23. 1
判例評釈	単	「会社分割にともなう労働契約承継に際しての分割会社の協議義務の法律構成」	『労働法律旬報』1732号 旬報社	pp.6-17	平22. 11
判例評釈	単	「労働者の個別同意ある就業規則の不利益変更の効力(大阪地判平21.3.19労判989号80頁)」	『法律時報』82巻12号 日本評論社	pp.140-143	平22. 11
著書	共	『企業組織再編における労働者保護』	中央経済社	全225p中pp.81-106	平22. 6
判例評釈	単	「現に雇用される組合員が存在なくなった組合との団体交渉等を命じる救済命令の拘束力―ネスレ日本島田工場事件(東京高判平20.11.12)」	ジュリスト臨時増刊『平成21年度重要判例解説』 有斐閣	pp.248-250	平22. 4

【平成21年度以前の主な研究業績等】 (5点まで)					
種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または該当ページ	発行年月
論文	単	「M&Aと労働問題」	大原社会問題研究所編『2009年版日本労働年鑑 第79集』旬報社	pp.72-101	平21. 6
論文	単	「企業組織・企業法制の変化と解雇法制―親子会社事案を中心に」	『日本労働法学会誌』113号 法律文化社	pp.7-22	平21. 5
論文	単	「企業間ネットワークと雇用責任―労働関係における法人格否認の法理の再検討」	『日本労働法学会誌』104号 法律文化社	pp.45-54	平16. 10
論文	単	「解雇制限の規範的根拠」	『日本労働法学会誌』99号 法律文化社	pp.12-31	平14. 5
著書	共	日本労働法学会編『労働契約(講座21世紀の労働法)第4巻』	有斐閣	pp.196-212	平12. 10

【所属学会】日本労働法学会

【最近5年間の学会等および社会における主な活動】

日本労働法学会監事(平24.7～平25.3)

【教育活動の自己評価】

法学部では、学部FD推進事業の一環として、各教員がティーチング・ポートフォリオを作成・提出しており、以下は、その要約を含む。学部講義においては、明快さと同時に体系性を重視し、判例を詳細に紹介することにより、現代の労働問題への関心を喚起した。法科大学院講義においては、規範の明確化と記憶に焦点を合わせ、高評価を得た。学部演習においては、ロールプレイングを取り入れ、労使双方の見地を体験してもらった。また、法科大学院演習においては、具体的事案への規範の適用を徹底的に訓練し、いずれも高評価を得た。日々変化する労働法の動向と基本的修養とのバランスが今後の課題である。

【研究活動の自己評価】

企業組織のネットワーク化、外部労働力利用の進展および就業形態の多様化と労働法の未来という研究テーマに即して、上記のようにコンスタントに研究業績を発表できた。とくに最新の論文である「使用者の概念」は、従前の自己の業績をコンパクトに集約した形となっている。現在は、上記のテーマについてのフランス法を対象とした比較法研究を深めるために、パリ西大学のエヴリン・セルブラン先生に師事して、在外研究を行なっている。従前の研究を総括し、比較法についても新展開を得た期間であったと評価するものである。

【職・氏名】教授 森川 隆 MORIKAWA Takashi

【学位】修士(法学)

【本学就任】平成23年

【略歴】慶應義塾大学大学院法学研究科民事法学専攻 博士課程単位取得満期退学
大阪経済法科大学法学部助教授
香川大学大学院香川大学・愛媛大学連合法務研究科助教授

【専門分野】商法・会社法

【最近5年間の主な研究業績等】 [平成22～26年度] (10点まで)					
種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または該当ページ	発行年月
論文	単	「原始産業に対する商法の適用—その沿革的考察—」	『國學院法学』51巻4号 國學院大學法学会	pp.207-238	平26. 3
教科書・参考書	共	『民法とつながる商法総則・商行為法』	商事法務	pp.16-46	平25. 4
論文	単	「商法522条の軌跡」	『國學院法学』50巻4号 國學院大學法学会	pp.149-187	平25. 3
判例評釈	単	「スポーツクラブの貴重品ボックスから客のキャッシュカードが窃取されたことに関する営業主の責任(東京地裁八王子支判平成17年5月19日・判例研究)」	『國學院法学』50巻1号 國學院大學法学会	pp.69-82	平24. 7
判例評釈	単	「ゴルフ場のクラブハウスの貴重品ロッカーから客のキャッシュカードと現金が窃取されたことに関する営業主の責任(東京地判平成16年5月24日・東京高判平成16年12月22日・判例研究)」	『國學院法學』49巻3号 國學院大學法学会	pp.89-102	平23. 12
判例評釈	単	「ホテルの利用客が従業員の指示により玄関前に駐車し鍵を預けていた自動車に関する営業主の寄託に基づく責任(大阪地判平成12年1月18日・大阪高判平成12年9月28日・判例研究)」	『大阪経済法科大学法学論集』69号 大阪経済法科大学		平23. 3
判例評釈	共	「対人賠償保険金支払債務の履行期(最判昭和54年5月31日・判例研究)」	『保険法判例百選』 有斐閣		平22. 12
教科書・参考書	共	『基本法コンメンタール新会社法(第1巻)』	日本評論社		平22. 10

【平成21年度以前の主な研究業績等】 (5点まで)					
種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または該当ページ	発行年月
論文	単	「会社法の成立に伴う商法の改正(上)(下)」	『税経通信』61巻6号, 7号 税務経理協会	pp.39-45, 51-59	平18. 5～ 平18. 6
論文	単	「引渡を受けない高価品に関する旅客運送人の責任」	倉沢康一郎先生古稀記念『商法の歴史と論理』 新青出版	pp.841-878	平17. 7
論文	単	「当座預金の預金者確定—出捐者説の適用とその問題点—」	『大阪経済法科大学法学論集』55号 大阪経済法科大学	pp.1-2	平14. 9
論文	単	「金銭に対する商人間留置権の成否—大阪高判平成11年4月30日を契機として—」	『大阪経済法科大学法学論集』51号 大阪経済法科大学	pp.61-97	平13. 7
論文	単	「商法504条小論」	奥島孝康教授還暦記念第2巻『近代企業法の形成と展開』 成文堂	pp.87-102	平11. 12

【所属学会】日本私法学会

【最近5年間の学会等および社会における主な活動】

香川県弁護士会懲戒委員会予備委員(平19. 4～平23. 3)

【教育活動の自己評価】

従来は、商法(総則・商行為)や手形法・小切手法の講義および演習を担当してきたが、最近5年間は、もっぱら会社法の講義および演習を担当した。そして、その受講生に使用させる教材として、『会社法講義用資料』(全35回分・約600頁)を作成した。当該資料は、基本的に条文→判例→解説→短答式問題→論述式問題の順で作成しており、受講生が必要な知識等を得られるだけでなく問題演習まで行えるよう工夫している。

【研究活動の自己評価】

従来より企業取引法(商行為法)を主要な研究領域として研究を進めており、その成果を論説または判例評釈の形で紀要等に順次発表してきた。今後も、このような方式で研究を進めていく予定である。

【職・氏名】教授 横山 謙一 YOKOYAMA Ken'ichi

【学 位】法学修士、DEA(Université de Paris-VIII-St-Denis)

【本学就任】昭和56年

【略 歴】早稲田大学第一政治経済学部政治学科卒業

東京都立大学大学院社会科学研究所博士課程政治学専攻単位取得満期退学

Université de Paris-VIII-St-Denis.Doctorat (DEA).

【専門分野】政治学、西洋政治史、フランス近現代政治史、フランス現代政治

【最近5年間の主な研究業績等】 [平成22～26年度] (10点まで)					
種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または該当ページ	発行年月
論文	単	「1901年のリヨン大会Congrès de Lyon(第3回フランス社会主義諸組織全体大会Troisième Congrès général des Organisations socialistes français)とジャン・ジョレーズ——1901年のジャン・ジョレーズとフランス社会主義運動——前篇:リヨン大会第1日第2回全体会議まで」	『國學院法政論叢』第35輯 國學院大學大学院	全18p中 pp.1-18	平26. 3
論文	単	「1898年総選挙とジャン・ジョレーズ——タルン県アルビ第2区の選挙結果と社会主義派代議士ジョレーズの落選——」	『國學院法學』第51巻第4号 國學院大學法学会	pp.287-308	平26. 3
論文	単	「レンヌ判決以降のドレーフス事件とジャン・ジョレーズ:1903年4月6日・7日の代議院Chambre des députésでの演説まで」	國學院法政論叢 第34輯 國學院大學大学院	全16p中 pp.1-16	平25. 3
論文	単	「レンヌ裁判とジャン・ジョレーズ:1899年のドレーフス事件とフランス社会主義運動」	『國學院法學』第50巻第4号 國學院大學法学会	全602p中 pp.273-296	平25. 3
論文	単	「1900年の社会主義インターナショナル・パリ大会とヴァグラム大会Congrès de Wagram(第2回フランス社会主義諸組織全体大会Deuxième Congrès général des Organisations socialistes français):1900年のジャン・ジョレーズとフランス社会主義運動(後篇)ヴァグラム大会とジャン・ジョレーズ」	『國學院法政論叢』第33輯 國學院大學大学院	全120p中 pp.1-24	平24. 3
論文	単	「1900年の労働者インターナショナル・パリ大会とヴァグラム大会Congrès de Wagram(第2回フランス社会主義諸組織全体大会Deuxième Congrès général des Organisations socialistes français)——1900年のジャン・ジョレーズとフランス社会主義運動——」	『國學院法政論叢』第32輯 國學院大學大学院	全19p中 pp.1-19	平23. 3

【平成21年度以前の主な研究業績等】 (5点まで)					
種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または該当ページ	発行年月
著書	共	Cambacérés, fondateur de la Justice moderne	Acte de colloque. Fondateur de la Justice Moderne — Cambacérés, Editions Monelle Hayot	pp.103-106	平13. 5
翻訳・翻刻書	共	『ナポレオン年代記』	日本評論社	計139p	平13. 4
翻訳・翻刻書	共	『性のプリズム』	勁草書房	全332p中 pp.49-86	昭62. 8
著書	共	清水望先生還暦記念論文集『憲法の制度と思想』収録論文題名「フランスの政教分離」	成文堂	全402p中 pp.141-158	昭59. 11
翻訳・翻刻書	単	アニー・クリエジェル著『フランス共産党の政治社会学 I』	お茶の水書房	全214p	昭57. 11

【所属学会】日本政治学会、Societe d'Etudes jauresiennes、Societe d'Etudes jauresiennes、フランス社会経済史学会、カンパセレス研究会、フランス革命研究会、パターナリズム研究会、日本比較政治学会、Societe internationales d'histoire d'affaire Dreyfus

【最近5年間の学会等および社会における主な活動】

【教育活動の自己評価】

(コメント無し)

【研究活動の自己評価】

(コメント無し)

神道文化学部

【神道文化学科】

嵐	義人	教授	173
石井	研士	教授	174
井上	順孝	教授	175
遠藤	潤	准教授	176
岡田	莊司	教授	177
加瀬	直弥	准教授	178
黒崎	浩行	准教授	179
阪本	是丸	教授	180
笹生	衛	教授	181
菅	浩二	准教授	182
武田	秀章	教授	183
中西	正幸	教授	184
西岡	和彦	教授	185
藤本	頼生	准教授	186
ハイヴンズ・ノルマン		教授	187
星野	光樹	助教	188
松本	久史	准教授	189
茂木	栄	教授	190
茂木	貞純	教授	191

【職・氏名】教授 嵐 義 人 ARASHI Yoshindo
 【学 位】法学士、文学修士
 【本学就任】平成17年
 【略 歴】國學院大學大学院文学研究科
 國學院大學日本文化研究所研究員
 文部科学省初等中等教育局主任教科書調査官
 【専門分野】律令学、比較文化史、国学

【最近5年間の主な研究業績等】 [平成22～26年度] (10点まで)					
種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または該当ページ	発行年月
評論・書評等	単	『「翰苑」の価値—太宰府天満宮所蔵国宝—』	神社新報 3211号 神社新報社	全6面のうち1面内に掲載	平26. 5
論文	単	「神祇令関係注釋書と明法家」	『皇學館大学研究開発推進センター 神道研究所紀要』30輯 皇學館大学研究開発推進センター 神道研究所	全440p中 26p	平26. 3
論文	単	「日向考—地名の神話性と史實性—」	『古事記年報』56号 古事記学会	全197p中 14p	平26. 1
論文	単	「延喜式神名帳に見る織物の神」	『季刊 第二次 悠久』133号 おうふう	全112p中 15p	平25. 10
評論・書評等	単	「上代におけるn・ηの発音」	『國學院雑誌』114巻8号 國學院大學	全89p中2p	平25. 8
論文	単	「臣、連、伴造・國造の文字選定をめぐって—その豫備的考察—」	『國學院雑誌』113巻11号 國學院大學	全256p中9p	平24. 11
評論・書評等	単	宮本誉士著『御歌所と国学者』	『神道宗教』226・227号 神道宗教学会	全154p中7p	平24. 7
解説・解題等	単	「古事記の伝来とひろがり」	『古事記の歩んできた道—古事記撰録 1300年—』 奈良国立博物館	全64p中4p	平24. 6
論文	単	「「訓云」についての—考察—古事記訓読への疑—」	『國學院雑誌』113巻1号 國學院大學	全41p中11p	平24. 1
論文	単	「奈良時代初期の『文選』に関する—考察—古事記上表文の典據としての『文選』についての疑—」	梶山林継先生古稀記念論集『日本基層文化論叢』 雄山閣	全648p中 10p	平22. 8
【平成21年度以前の主な研究業績等】 (5点まで)					
種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または該当ページ	発行年月
論文	単	「翰苑補考」	『古事記年報』52号 古事記学会	全269p中 pp.55-69	平22. 1
論文	単	「古事記上表文と進律疏表—進律疏表を典據とすることへの疑—」	『青木周平先生追悼 古代文芸論叢』 青木周平先生追悼論文集刊行会	全873p中 pp.64-74	平21. 11
論文	単	「筑後国風土記逸文についての—考察—磐井墓条「解部」に関する疑—」	『菅野雅雄博士喜寿記念 記紀・風土記論究』 おうふう	全689p中 pp.508-519	平21. 3
著書	共	『令集解私記の研究』	汲古書院	全363p中 pp.17-106	平9. 3
著書	共	『譯註日本律令(二・三) 律本文篇(上・下)』	東京堂出版(律令研究会編)	全969p	昭50. 3

【所属学会】国史学会、古事記学会、法制史学会、東方学会、温故学会、比較民俗学会、国書逸文研究会、日本歴史文化学会、日本古文書学会、国際アジア文化学会、神道宗教学会

【最近5年間の学会等および社会における主な活動】

日本国際客家文化協会会長補佐(平25. 7～現在)、国際アジア文化学会会長補佐(平25. 7～現在)

【教育活動の自己評価】

平成22年度より、担当授業数が減り、基幹演習(昼夜、3・4年合同、1コマ)と、全学部共通科目である古典講読Ⅱ(昼夜2コマ)、それに専攻科の神道史および神道概論(平成25年度迄、26年度は神道と文化)を担当している。

(共通シラバスの縛りのある神道と文化を除き)従来より図書館貴重書室の見学や温故学会所蔵の国指定重要文化財群書類従版木の実見など、貴重な経験となる事柄については実地見学や実習を授業に組み入れてきたが、更に発展的内容については成績と切離して授業時間外に実地体験学習を取入れてみたところ、自主参加者は2～3名のこともあり、30名を超えることもあるが、概して負担と捉える学生よりも歓迎する学生のいることに驚くと共に、それをきっかけとして学生との親近感が醸成されたことは予想外の収穫であった。学生のやる気を引出す試みは、実地教育、実物教育に蔵されていると考えてよいのではなかろうか。

【研究活動の自己評価】

定年退職の時期が近づくにつれ、これまで手がけた研究を纏めなければならないとの思いが湧いてくる。『令集解』論であり、『令義解』論である。講演を頼まれる折にと、依頼されたテーマに併せて律令論に言及するようにしている。私が國學院を離れている間に、研究内容などで便宜を図った2人が律令の授業を維持できず、日本文化研究所に關係した者の論考も皮相的なものに終わり、本格的な研究が國學院から消え、それは即吾国全体の研究の低下にと繋がることとなり、律令学の再生こそが私に課された急務であろうかと考えている。成果こそ殆んど発表に至っていないが、國學院を中心に、少しずつ研究の深化を図っているところである。

【職・氏名】教授 石井 研 士 ISHII Kenji
 【学 位】博士(宗教学)(平成11年1月 國學院大學 文乙第147号)
 【本学就任】平成3年
 【略 歴】東京大学文学部宗教学宗教史学科卒業
 東京大学大学院人文科学研究科宗教学宗教史学博士課程単位取得満期退学
 文化庁
 【専門分野】宗教学、宗教社会学
 【受賞歴等】平成6年度日本宗教学会賞、平成11年度神道宗教学会奨励賞

【最近5年間の主な研究業績等】 [平成22～26年度] (10点まで)					
種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または 該当ページ	発行年月
論文	単	「機械の中の幽霊」	『宗教研究』第377号 日本宗教学会	pp.55-79	平25. 9
調査・研究報告等	単	『宗教団体の社会的貢献活動に関する調査報告書(2012年4月実施)』	庭野平和財団	全41p	平25. 3
編著	単	『渋谷の神々』	雄山閣	全342p	平25. 2
論文	単	「現代における「よみがえり」考」	『國學院雑誌』第123号第8号 國學院大學	pp.1-16	平24. 8
論文	単	「日本人への宗教団体への関与・認知・評価に関する一考察」	『國學院大學大学院紀要』第42輯 國學院大學大学院	pp.167-182	平23. 11
編著	共	『プレステップ神道学』	弘文堂	全159p	平23. 4
調査・研究報告等	単	『世論調査による日本人の宗教性の調査研究』	科学研究費補助金研究成果報告書	全75p	平23. 2
編著	共	『神道はどこへいくか』	ペリかん社	全278p	平22. 11
編著	共	『バラエティ化する宗教』	青弓社	全186p	平22. 10
著書	単	『プレステップ宗教学』	弘文堂	全159p	平22. 4

【平成21年度以前の主な研究業績等】 (5点まで)					
種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または 該当ページ	発行年月
著書	単	『テレビと宗教 オウム以後を問い直す』	中央公論社	全253p	平20. 10
著書	単	『増補改訂版 データブック現代日本人の宗教』	新曜社	全271p	平19. 4
著書	単	『日本人の一年と一生 変わりゆく日本人の心性』	春秋社	全216p	平17. 1
著書	単	『戦後の社会変動と神社神道』	大明堂	全274p	平10. 6
著書	単	『銀座の神々ー都市に溶け込む宗教』	新曜社	全212p	平6. 3

【所属学会】日本宗教学会、神道宗教学会、「宗教と社会」学会、宗教学会、明治聖徳記念学会

【最近5年間の学会等および社会における主な活動】

精神文化映像社番組検討委員(平9～現在)、庭野平和財団評議員(平19～現在)、文部科学省・宗教法人制度の運用等に関する調査研究協力者(平18. 4～現在)、日本宗教連盟理事(平23. 4～現在)、宗教法人審議会委員(平24. 4～現在)、独立行政法人・大学評価・学位授与機構専門委員(平24. 4～現在)、公益財団法人WCRP評議員(平24. 4～現在)

【教育活動の自己評価】

担当科目については、全入学時代を想定したテキストブックを刊行し、ヴィジュアルな教材利用のための機器開発を行っている。演習では、少人数を前提にしたコミュニケーションの高い個人発表を開発している。大学院では博士論文作成指導を行い、獲得に至っている。学部長として、学部の全体的な教育活動の現状の把握と開発に努めている。

【研究活動の自己評価】

平成23年度に採択された科学研究費「戦後の宗務行政が実施した調査の実態解明と宗教団体に及ぼした影響の研究」を実施している。平成27年度に遷座400年を迎える神田明神を対象に、平成24年度より大学院において「地域社会の変容と都市祭りー神田祭を事例として」を実施している。

【職・氏名】教授 井上 順孝 INOUE Nobutaka
 【学 位】博士(宗教学)(平成4年5月 國學院大學 文乙第101号)
 【本学就任】昭和57年
 【略 歴】東京大学文学部卒業
 東京大学大学院人文科学研究科博士課程中退
 東京大学文学部助手
 【専門分野】宗教社会学、宗教教育、近代宗教運動の比較研究、認知宗教学
 【受賞歴等】昭和62年度神道宗教学会奨励賞

【最近5年間の主な研究業績等】 [平成22～26年度] (10点まで)					
種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または該当ページ	発行年月
編著	共	『21世紀の宗教研究—脳科学・進化生物学と宗教学の接点』	平凡社	全215p	平26. 8
論文	単	「“新宗教”研究の射程—新興宗教から近代新宗教へ」	市川裕編『世界の宗教といかに向き合うか 月本昭男先生退職記念献呈論文集 第1巻』聖公会出版	pp.19-37	平26. 3
論文	単	Religious Movement in Global Context	Paul Hedge ed., Controversies in Contemporary Religion: Education, Law, Politics, society, and Spirituality Volume 3: Specific Issues and Case Studies	pp.223-247	平26
論文	単	「宗教の境界線—学生に対する意識調査から」	『國學院大學研究開発推進機構 日本文化研究所年報』第6号 國學院大學研究開発推進機構 日本文化研究所	pp.40-66	平25. 9
論文	単	「情報時代の宗教教育を考える」	聖心女子大学キリスト教文化研究所編『宗教なしで教育はできるのか』春秋社	pp.29-56	平25. 3
編著	共	『世界宗教百科事典』	丸善出版株式会社	全891p	平24. 12
論文	単	「新宗教研究にとっての認知活動科学・ニューロサイエンス」	國學院大學研究開発推進機構 日本文化研究所年報』第5号 國學院大學研究開発推進機構	pp.21-48	平24. 9
論文	単	Media and New Religious Movements in Japan1	Journal of Religion in Japan Brill	pp.121-141	平24. 6
編著	共	『情報時代のオウム真理教』	春秋社	全463p	平23. 7
著書	単	『本当にわかる宗教学』	日本実業出版社	全254p	平23. 4

【平成21年度以前の主な研究業績等】 (5点まで)					
種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または該当ページ	発行年月
翻訳・翻刻書	共	『現代世界宗教事典』	悠書館	全621p	平21. 12
論文	単	Religious education in contemporary Japan	Religion Compass 3/4 Blackwell Publishing Ltd.	pp.580-594	2009年
著書	単	『神道入門—日本人にとって神とは何か』	平凡社	全271p	平18. 1
著書	単	『若者と現代宗教—失われた座標軸』	筑摩書房	全217p	平11. 12
著書	単	『教派神道の形成』	弘文堂	全422p	平3. 3

【所属学会】日本宗教学会、「宗教と社会」学会、神道宗教学会

【最近5年間の学会等および社会における主な活動】

(公財)国際宗教研究所常務理事(平成5.4～現在)、

(公財)国際宗教研究所・宗教情報リサーチセンター長(平成10.11～現在)、日本宗教学会会長(平成23.9～26.9)

【教育活動の自己評価】

学部教育においては講義2コマと演習を2コマ担当している。講義はパワーポイント、映像資料等、これまで収集した資料・データを用いて学生に分かりやすく説明している。また演習では学生たちがプレゼンテーション能力、質疑応答の能力が得られるよう細かく指導している。演習終了時には学生が能力を伸ばしたことが実感できている。大学院では演習1コマと論文指導を担当している。演習では日本語文献、英語文献を読みこなす力を養うと同時に、研究論文の作成を定期的に行っている。院生の学会での発表に際しては、事前に指導を行っている。

【研究活動の自己評価】

日本宗教学会、及び「宗教と社会」学会において、個人発表やパネル発表、コメント等を行い、研究の成果を公にしている。また学会誌、学内紀要等にも論文を継続的に発表している。英文の論文も国外の学術誌に発表している。多くの研究者に協力を依頼しての事典の作成(『世界宗教百科事典』)も行った。研究開発推進機構における研究活動では、国際フォーラムの開催などを通して国外の研究者との交流を深めている。また南カリフォルニア大学(平成24年)、ハーバード大学(平成25年)での講演も行い英語での研究成果の公表に努めた。

【職・氏名】准教授 遠藤 潤 ENDO Jun
 【学 位】博士(宗教学)(平成18年3月 國學院大學 文乙第217号)
 【本学就任】平成15年
 【略 歴】東京大学大学院人文科学研究科修士課程修了(文学修士)
 日本学術振興会特別研究員(PD)
 財団法人国際宗教研究所研究員
 【専門分野】宗教学、日本宗教史
 【受賞歴等】平成20年度神道宗教学会賞

【最近5年間の主な研究業績等】 [平成22～26年度] (10点まで)					
種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または該当ページ	発行年月
学会発表等	単	「古道の学びにおける言語、霊魂、コスモロジー—富士谷御杖の言霊説と神道説—」	Symposium on Early Modern Japanese Values and Individuality Asian Centre, University of British Columbia Bernhard Steinle (ed.), with Kate Winkler Nakai, Kami Ways in Nationalist Territory: Shinto Studies in Prewar Japan and the West		平25. 8
論文	単	Shinto Research and Administration in the First Half of the Twentieth Century: The Case of Miyaji Naokazu		pp.155-178	平25. 6
論文	単	「渋谷の寺院—近世を中心として—」	Austrian Academy of Sciences 國學院大學研究開発推進センター渋谷学研究会 石井研士編著『渋谷学叢書3 渋谷の神々』 雄山閣	pp.197-225	平25. 2
論文	単	「教祖論・教団論からみた平田国学—信仰・学問と組織—」	幡鎌一弘編『語られた教祖—近世・近現代の信仰史—』 法藏館	pp.241-265	平24. 4
論文	単	「平田国学における〈霊的なもの〉—霊魂とコスモロジーの近代—」	鶴岡賀雄・深澤英隆編『スピリチュアリティの宗教史』下 リト	pp.391-417	平24. 1
学会発表等	単	「平田国学における〈霊的なもの〉—霊魂と世界像の近代—」	日本思想史学会2010年度大会 日本思想史学会		平22. 10
学会発表等	単	「近世日本のスピリチュアリズム—文人の著述にみる—」	東洋英和女学院大学死生学研究所 2010年度第3回研究会 東洋英和女学院大学死生学研究所		平22. 10
学会発表等	単	「黄泉国論争—平田国学の他界像と近代—」	日本宗教学会第69回学術大会 日本宗教学会		平22. 9

【平成21年度以前の主な研究業績等】 (5点まで)					
種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または該当ページ	発行年月
論文	単	「宮地直一における神道研究と神社行政の接点—今後の研究のために—」	『國學院大學伝統文化リサーチセンター研究紀要』1 國學院大學研究開発推進機構伝統文化リサーチセンター	pp.163-172	平21. 3
学会発表等	単	「幕末における国学・仏教と国家—平田国学の仏教批判と仏教からの反批判—」	Tokugawa Conference Selwyn College, Cambridge University		平21. 3
著書	単	『平田国学と近世社会』	ぺりかん社	全358p	平20. 2
論文	単	「平田篤胤における〈異界的なもの〉の成立と展開—「幽冥界」の表象と各国の「古伝」の比較—」	渡辺和子・細田あや子編『異界の交錯』(上) リト	全412p中 pp.347-381	平18. 2
論文	単	「平田篤胤と吉田家—19世紀日本社会における国学の位置をめぐって—」	『日本文化と神道』第1号(國學院大學21世紀COEプログラム「神道と日本文化の国学的研究発信の拠点形成」成果論文集) 國學院大學21世紀COEプログラム研究センター	全328p中 pp.39-79	平17. 2

【所属学会】日本宗教学会、神道宗教学会、日本思想史学会

【最近5年間の学会等および社会における主な活動】

日本宗教学会評議員(平25. 9～現在)

【教育活動の自己評価】

平成24年度までは研究開発推進機構に所属し、神道文化学部では兼任教員として「宗教学」や導入教育である「神道文化基礎演習」を担当してきた。平成25年度に神道文化学部所属となり、従来担当していた科目に加え、学部の専門教育の一環として「神道思想史Ⅰ」、「神道思想史Ⅱ」、「宗教学演習」を担当することとなった。さらに平成26年度からは大学院の講義も担当している。教育内容の工夫としては、まず入門的な性格の講義では、学生に基本事項の範囲を意識させる教育を心がけている。学習範囲の曖昧さにかかる学生の困惑はこれまでの教育活動で痛感しており、学習内容の明示とそれに対して学生にいかなる具体的アクションを求めるのかを示すようつとめている。また、「宗教学」においてはその対象とする範囲が地域的にも時代的にも広範囲にわたっているため、まずは感覚的に近づきやすいよう視覚教材も用いている。また、古典や文献に関わる講義では、学生が一次文献に少しでも触れられるように工夫をしている。各科目の性格によって心を配るべき箇所もおのずと異なってくるが、それぞれ学生の受け止め方を見つ適切な方法を模索している。宗教学に不可欠な実地調査の充実、また今日求められることも多い「双方向型」授業の活用は、その効果を含めて、自分にとっては検討課題である。

【研究活動の自己評価】

平成24年度まで研究開発推進機構の専任教員として、平成25年度からは兼任教員として、日本文化研究所や研究開発推進センターに関わる研究事業に参画し、研究マネジメントを含め、組織的な研究活動を心がけてきた。研究者個人としての主たるテーマである平田篤胤および平田国学については、学外の研究会に参加するとともに、研究開発推進機構の研究事業においても、その研究の推進につとめている。近年は、平田篤胤ばかりでなく近世後期に特徴的な思想的営為にも関心を深め、富士谷御杖などの研究も開始した。また、近世末から近代にかけての国学者と神社・神職の関係についても基礎的な研究を開始しつつある。

【職・氏名】教授 岡田 莊司 OKADA Shoji
 【学 位】博士(歴史学)(平成7年6月 國學院大學 文乙第120号)
 【本学就任】昭和56年
 【略 歴】國學院大學文学部史学科卒業
 國學院大學大学院文学研究科神道学専攻修士課程修了
 【専門分野】古代中世神道史・神社史
 【受賞歴等】昭和59年度神道宗教学会奨励賞

【最近5年間の主な研究業績等】 [平成22～26年度] (10点まで)					
種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または 該当ページ	発行年月
著書	共	『古代のヤマトと三輪山の神』	学生社	全266p中 pp.99-123	平25. 7
論文	単	「神道的自然観と現代社会－歴史・制度の 観点から－」	『神社本庁総合研究所紀要』第18号 神社本庁総合研究所	pp.195-212	平25. 5
辞書・ 事典等	共	『事典 神社の歴史と祭り』	吉川弘文館	全395p	平25. 4
論文	単	「神道祭祀考－新・神道論」	『國學院雑誌』第113巻11号 國學院大學	pp.1-16	平24. 11
論文	単	「災害と神道を考える」	『礼典』第36号 礼典研究会	pp.1-12	平24. 7
論文	単	「地大震動時代における神国思想の萌芽」	『神社本庁総合研究所紀要』第17号 神社本庁総合研究所	pp.159-169	平24. 5
論文	単	「鎌倉幕府の将軍祭祀－源頼朝を中心に －」	『神道宗教』第225号 神道宗教学会	pp.3-31	平24. 1
論文	単	「古代の天皇祭祀と災い」	『國學院雑誌』第112巻9号 國學院大學	pp.1-13	平23. 9
論文	単	「中世における神社秩序の形成」	伊藤聰編『中世神話と神祇・神道世界』 竹林舎	全628p中 pp.54-64	平23. 4
著書	共	『日本神道史』	吉川弘文館	pp.2-43, 136-187	平22. 7

【平成21年度以前の主な研究業績等】 (5点まで)					
種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または 該当ページ	発行年月
著書	共	『古代諸国神社神階制の研究』	岩田書院	全434p中 pp.5-17	平14. 8
著書	単	『平安時代の国家と祭祀』	続群書類従完成会	全730p	平6. 1
著書	単	『神道大系・卜部神道(下)』	神道大系編纂会	研究89p, 資料608p	平3. 12
著書	単	『大嘗の祭り』	学生社	全222p	平2. 10
著書	単	『神道大系・中臣祓註釈』	神道大系編纂会	研究69p, 資料461p	昭60. 11

【所属学会】神道宗教学会、日本宗教文化史学会、神道史学会、明治聖徳記念学会、延喜式研究会

【最近5年間の学会等および社会における主な活動】

神社本庁教学委員(平5～現在)

【教育活動の自己評価】

本学建学の精神である神道精神を教育活動の基本に据えて、人材の育成に努めてきた。学部の神道史学Ⅰと基幹演習では、なぜ神道・神社が現在まで残りつづけてきたのかを論議し、この成果を『國學院雑誌』に「古代の天皇祭祀と災い」「神道祭祀考－新・神道論」2編掲載した。神道の神観念は、東日本大震災後、大きく変容しており、新たな視点による教育をすすめてきた。大学院では、多くの大学院生を育て、共同の成果として『事典・神社の歴史と祭り』を刊行したほか、神社の祭祀調査をすすめてきた。大學オープンカレッジ公開講座「神道を知る講座」は、10年を数え、毎年200名の受講があり、神道を外部へ発信するよい機会になっている。

【研究活動の自己評価】

長年にわたり、古代・中世の神道史研究をつづけてきた。その結果、古代と中世の神道史に新たな視点を導入することに努め、古代では神祇宗教統制論批判、中世では神祇顕密論批判について、一定の評価をいただけるような環境が整えられつつある。これを基礎に、中堅・若手研究者とともに、着実な研究活動を集大成させたい。

【職・氏名】准教授 加瀬直弥 KASE Naoya

【学 位】修士(神道学)

【本学就任】平成18年

【略 歴】慶應義塾大学法学部法律学科卒業

國學院大學大学院文学研究科神道学専攻博士課程後期単位取得満期退学

國學院大學21世紀研究教育計画嘱託研究員

【専門分野】古代・中世神道史

【最近5年間の主な研究業績等】 [平成22～26年度] (10点まで)

種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または該当ページ	発行年月
論文	単	「平安時代前中期における朝廷神祇制度と神仏関係の展開」	『國學院雑誌』第115巻第7号 國學院大學	pp.1-12	平26. 7
論文	単	「神道史から見た古代の神観—神まつりの場に注目して—」	『月刊考古学ジャーナル』657号 ニューサイエンス社	pp.21-25	平26. 6
論文	単	「古代の社殿作りと神宝奉獻の意義—奈良時代末期から平安時代前期を射程として—」	『明治聖徳記念学会紀要』復刊50号 明治聖徳記念学会	pp.128-138	平25. 11
著書	共	『事典 神社の歴史と祭り』	吉川弘文館	全395p中 pp.14-23, 59-66, 113-118, 181-184, 189-190, 253-266, 318-366	平25. 4
論文	単	「奈良時代前後の神社修造の実情について」	『國學院雑誌』第113巻第11号 國學院大學	pp.33-48	平24. 11
論文	単	「古代神社と仏教組織—奈良・平安初期の神宮寺等の実態を踏まえて」	『神道宗教』第228号 神道宗教学会	pp.4-24	平24. 10
論文	単	「古代朝廷と神宝との関係について」	『國學院大學伝統文化リサーチセンター研究紀要』第4号 國學院大學研究開発推進機構伝統文化リサーチセンター	pp.13-24	平24. 3
論文	単	「古代神祇祭祀制度の形成過程と宗像社」	『「宗像・沖ノ島と関連遺産群」研究報告』Ⅰ 「宗像・沖ノ島と関連遺産群」世界遺産推進会議・福岡県企画・地域振興部総合政策課世界遺産登録推進室	pp.397-406	平23. 3
著書	共	『日本神道史』	吉川弘文館	全388p中 pp.159-161, 275-326	平22. 7

【平成21年度以前の主な研究業績等】 (5点まで)

種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または該当ページ	発行年月
著書	共	『丹生都比賣神社史』	丹生都比賣神社	全326p中 pp.3-32, 34-48, 50-56	平21. 3
論文	単	「平安時代後期の神職補任に関する一考察—神祇官移の発給から分かること—」	『國學院大學研究開発推進センター研究紀要』第1号 國學院大學研究開発推進センター	pp.99-114	平19. 3
論文	単	「十・十一世紀前半の七道諸国における神社修造の実態—国司と神職との関わりを中心に—」	『神道宗教』第199・200合併号 神道宗教学会	pp.89-118	平17. 10
論文	単	「平安中期の賀茂社司—愛宕郡寄進の背景—」	『日本文化と神道』第1号 國學院大學21世紀COEプログラム研究センター	pp.1-38	平17. 2
論文	単	『「文徳実録」・『三代実録』に見られる神階奉授の意義』	『古代諸国神社神階制の研究』 岩田書院	全434p中 pp.43-65	平14. 8

【所属学会】神道宗教学会、皇學館大学神道史学会、国史学会、日本宗教学会、延喜式研究会

【最近5年間の学会等および社会における主な活動】

【教育活動の自己評価】

所属学部には転属間もないので、授業については、教材作りと、それに対応した授業計画の見直しに専ら注力した。したがって、所属学部でひとときわ留意される学生個々の基礎学力や習熟度の違いへの対応については、演習科目はある達成できたが、講義科目については一層の努力が必要と自省している。教育活動に伴う研究事務に関しては、インターネット上での広報を担当することがしばしばあり、今後も従事する予定だが、さらなる入試・教務等の情報の効果的な発信につとめていきたい。

【研究活動の自己評価】

本学に着任してからは、建学の精神である神道の一層の理解のため、古代・中世神道史の研究を進めている。近年は奈良時代・平安時代前期を中心とした研究を中心に行い、神社神職の動向や、それに関連する神まつりや神観念の実態を明らかにすることができた。当面は、平安時代中期以降も射程に置き、従来の研究を見直していく所存である。

【職・氏名】准教授 黒崎 浩行 KUROSAKI Hiroyuki

【学 位】修士(文学)

【本学就任】平成9年

【略 歴】東京大学文学部宗教学・宗教史学専修課程卒業
 東京大学大学院人文科学研究科宗教学・宗教史学専攻修士課程修了
 大正大学大学院文学研究科宗教学専攻博士後期課程単位取得満期退学

【専門分野】宗教学、近世近代日本宗教史、宗教と情報・コミュニケーション

【最近5年間の主な研究業績等】 [平成22～26年度] (10点まで)					
種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または該当ページ	発行年月
論文	単	「復興の困難さと神社神道」	『現代宗教2014』 国際宗教研究所	pp.227-248	平26. 3
論文	単	「宗教を越えた災害支援のネットワーク」	國學院大學研究開発推進センター編、古沢広祐責任編集『共存学2 災害後の人と文化 ゆらぐ世界』 弘文堂	pp.69-84	平26. 2
調査・研究報告等	単	(研究ノート)「災害と神社関係絵葉書: 仙台平野から相馬地方まで」	國學院大學研究開発推進機構学術資料センター編『学術資料センター絵葉書資料目録(青森・岩手・宮城・福島): 宮地直一旧蔵資料・神道資料館所蔵資料』 國學院大學研究開発推進機構学術資料センター	pp.167-169	平26. 2
編著	共	『叢書 宗教とソーシャル・キャピタル4 震災復興と宗教』	明石書店	全310p中 pp.63-87, 304-310	平25. 4
調査・研究報告等	共	(研究ノート)「宗教者災害救援マップの構築過程と今後の課題」	『宗教と社会貢献』3巻1号 「宗教と社会貢献」研究会	pp.65-74	平25. 4
論文	単	「渋谷の住宅地と神社祭祀」	石井研士/國學院大學研究開発推進センター 渋谷学研究会編著『渋谷学叢書3 渋谷の神々』 雄山閣	pp.117-143	平25. 3
論文	単	「宗教のインターネット活用が築くソーシャル・キャピタル」	大谷栄一・藤本頼生編『叢書 宗教とソーシャル・キャピタル2 地域社会をつくる宗教』 明石書店	pp.264-284	平24. 12
論文	単	「都市生活における共存と神社の関わり: 東京「大塚まちの灯り」の試み」	國學院大學研究開発推進センター編、古沢広祐責任編集『共存学: 文化・社会の多様性』 弘文堂	pp.89-105	平24. 3
論文	単	「宗教文化資源としての地域神社: そのコンテキストの現在」	『現代宗教 2011』 国際宗教研究所	pp.45-58	平23. 5
論文	単	Preserving the Dignity of Shinto Shrines in the Age of the Internet: A Social Context Analysis	Japanese Religions on the Internet, E. Baffelli, I. Reader and B. Staemmler (eds.), Routledge.	pp.62-79	平22. 12

【平成21年度以前の主な研究業績等】 (5点まで)					
種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または該当ページ	発行年月
著書	共	「情報化社会における宗教の社会貢献」	『社会貢献する宗教』 世界思想社	pp.135-157	平21. 12
論文	単	「ヴァーチャル参拝のゆくえ」	『現代宗教 2008』 国際宗教研究所	pp.107-119	平20. 8
調査・研究報告等	共	「写真資料デジタル化の手引き 保存と研究活用のために」	國學院大學研究開発推進機構日本文化研究所	全82p	平20. 3
論文	単	「インターネット文化のハイブリッド性と神社神道」	『日本文化と神道』第3号(國學院大學21世紀COEプログラム「神道と日本文化の国学的研究発信の拠点形成」成果論文集) 國學院大學21世紀COEプログラム研究センター	pp.59-79	平18. 12
著書	共	『宗教学キーワード』	有斐閣	全308p中 pp.64-65, 68-71,88-91	平18. 9

【所属学会】日本宗教学会、「宗教と社会」学会、仏教文化学会、日本近代仏教史研究会、神道宗教学会

【最近5年間の学会等および社会における主な活動】

宗教者災害支援連絡会 世話人(平23.4～現在)

【教育活動の自己評価】

担当科目「神社ネットワーク論1・2」では、地域社会における神社神道の役割に関する近年の研究動向と、自らの調査研究の成果を取り入れながら、内容の更新を図った。また、教育方法としては、グループ・ディスカッションを比較的大人数(100名程度)の授業でも行い、学習の振り返りと、学生同士の多様な経験・考えの相互交換を促しながら、問題意識の醸成を図っている。「宗教学演習1・2」では、調査・研究方法の手ほどきをよりきめ細かく行えるよう、オフィスアワーを活用している。東日本大震災における神社界の支援の現場に学生たちも関わられる機会をさぐり(境内整備、祭礼支援など)、活動への参加を通じての気づき、学びを重視している。

【研究活動の自己評価】

地域社会における神社神道の役割についての調査研究を継続的に行っている。東日本大震災においては、宗教者・宗教学者が連携しての支援活動の情報共有に携わり、そのなかでの神社神道のあり方、役割について論考を著した。これらの調査研究は、本学研究開発推進機構の「地域・渋谷から発信する共存社会の構築」事業に協力する形でも行っている。また、同機構では日本文化研究所の「デジタル・ミュージアムの運営および教育への展開」プロジェクト、学術資料センターの「近代学術資産産産化と地域連携活用に関する研究」プロジェクトにも参加している。

【職・氏名】教授 阪本 是丸 SAKAMOTO Koremaru

【学 位】博士(神道学)(平成7年5月 國學院大學 文乙第119号)

【本学就任】昭和56年

【略 歴】國學院大學文学部神道学科卒業

國學院大學大学院文学研究科神道学専攻修士課程修了

株式会社神社新報社記者

【専門分野】近代神道史、国学

【受賞歴等】昭和57年度神道宗教学会奨励賞

【最近5年間の主な研究業績等】 [平成22～26年度] (10点まで)					
種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または該当ページ	発行年月
解説・解題等	単	「昭憲皇太后と「明治」といふ時代」	『昭憲皇太后百年祭記念明治の皇后—明治天皇と歩まれた昭憲皇太后—』明治神宮	全89p中 pp.65-72	平26. 3
論文	単	「戦時下の「靖国思想」に関する一試論」	『皇學館大学研究開発推進センター神道研究所紀要』第30輯 皇學館大学研究開発推進センター神道研究所	全419p中 pp.247-270	平26. 3
論文	単	「折口信夫の戦争歌と国家神道—神・天皇・民族の戦ひ—」	『國學院大學研究開発推進センター研究紀要』第8号 國學院大學研究開発推進機構研究開発推進センター	全339p中 pp.1-54	平26. 3
その他	共	『明治天皇御年譜 改訂版』	明治神宮	全139p	平25. 7
著書	共	『靖国神社』	PHP研究所	全211p中 pp.116-135	平24. 8
その他	共	『新版 明治の聖代』	明治神宮	全394p	平24. 7
論文	単	「『日本ファシズム』と神社・神道に関する素描」	『國學院大學研究開発推進センター研究紀要』第6号 國學院大學研究開発推進機構研究開発推進センター	全254p中 pp.1-67	平24. 3
論文	単	「國學院の「国学」—非常時に於ける河野省三・折口信夫・武田祐吉の国学—」	『國學院大學校史・学術資産研究』第四号 國學院大學研究開発推進機構校史・学術資産研究センター	全421p中 pp.47-120	平24. 3
その他	単	「近代宗教法制度と国家神道—明治期を中心に—」	『宗教法』第29号 宗教学学会	全286p中 pp.55-69	平22. 9
評論・書評等	単	「『国家神道』研究の四〇年」	『日本思想史学』第42号 日本思想史学会	pp.46-58	平22. 9

【平成21年度以前の主な研究業績等】 (5点まで)					
種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または該当ページ	発行年月
論文	単	「安丸国家神道論から見えるもの・見えないもの」	『安丸思想史への対論—文明化・民衆・両義性—』ペリカン社	全374p中 pp.113-136	平22. 3
論文	単	「皇典講究所関係出版物に関する一考察」	『史料から見た神道—國學院大學の学術資産を中心に—』弘文堂	全365p中 pp.107-135	平21. 3
論文	単	「國學院の学問を貫徹するもの」	『國學院大學研究開発推進センター研究紀要』第2号 國學院大學研究開発推進センター	p1-14	平20. 3
著書	単	『近世・近代神道論考』	弘文堂	全510p	平19. 8
論文	単	『南朝公卿補任』と藤原貞幹」	『國學院大學研究開発推進センター研究紀要』第1号 國學院大學研究開発推進センター	全330p中 pp.1-30	平19. 3

【所属学会】神道宗教学会、日本宗教学会、日本史研究会、法制史学会、日本思想史学会、神道史学会、史学会、明治維新史学会、古事記学会、明治聖徳記念学会、比較法史学会

【最近5年間の学会等および社会における主な活動】

【教育活動の自己評価】

これまで学部では国学概論、神道神学、神道史学演習などを、また大学院では神道史研究2・同特殊研究2及び神社行政・管理研究などを担当してきた。これらの科目はいずれも近世・近現代の神道・国学を主たる内容とするものであり、その教育内容・方法等には、平成14年度に採択された文部科学省21世紀COEプログラム「神道と日本文化の国学的研究発信の拠点形成」の趣旨であり、本学の学問・教育の基本ともいべき伝統的な「国学的研究・教育」を採用し、学部・大学院での教育に応用・実践した。その直接的成果といえるかどうかは分からないが、神道文化学部や人間開発学部、研究開発推進機構等で活躍している若手教員の輩出にも少なからぬ影響はあったものと自負している。ただ、平成25年度は国内派遣研究であったため、昨年度の自己点検・評価は不可能であり、今年度は一昨年度の学部担当科目の神道神学及び神道史学演習とは異なり、またまた神道史学2を、そして新規に専攻科神道概論に変更されたため、正直いって戸惑いながらの授業を進めている。

【研究活動の自己評価】

平成14年度からの文部科学省COEプログラム、そして同19年度からの文部科学省ORC事業、あるいは本学21世紀研究教育委員会の各研究事業などの「研究事務」担当者として「研究のサポート」はしてきたが、この十余年の自分自身の研究活動は全く低調・不振のまま平成26年度に突入してしまった。この苦くて貴重な経験を活かして、残された余生を若い研究者たちが各自の研究を着実にこなしつつ、本学の共同研究の推進を遂行しうる研究実務能力を有した立派な研究者として育つよう、そのお手伝いさんとして過ごせれば本望と思うのである。

【職・氏名】教授 笹生 衛 SASOU Mamoru
 【学 位】博士(宗教学)(平成18年7月 國學院大學 文乙第221号)
 【本学就任】平成21年
 【略 歴】國學院大學文学部神道学科卒業
 國學院大學大学院文学研究科神道学専攻 修士課程修了
 千葉県教育庁教育振興部文化財課 主任文化財主事
 【専門分野】日本考古学、日本宗教史
 【受賞歴等】平成16年度神道宗教学会賞

【最近5年間の主な研究業績等】 [平成22～26年度] (10点まで)					
種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または該当ページ	発行年月
論文	単	「古代祭祀の形成と系譜－古墳時代から律令時代の祭具と祭式－」	『古代文化』第65巻第3号 公益財団法人古代学協会	全19p	平25. 12
論文	単	「神宝の成立－組成の意味と背景－」	『明治聖徳記念学会紀要』復刻第50号 明治聖徳記念学会	全24p	平25. 11
論文	単	「古代の富士山信仰－浅間神社の古代祭祀と中世への移行－」	『月刊考古学ジャーナル』 臨時増刊 No.648 ニューサイエンス社	全4p	平25. 10
編著	共	『事典 神社の歴史と祭り』	吉川弘文館	全395p	平25. 4
論文	単	「日本における古代祭祀研究と沖ノ島祭祀－主に祭祀遺跡研究の流れと沖ノ島祭祀遺跡の関係から－」	「宗像・沖ノ島と関連遺産群」研究報告Ⅱ-1 「宗像・沖ノ島と関連遺産群」世界遺産推進会議	全163p中 pp.43-61	平25. 3
論文	単	「人形と祓物－土製人形の系譜と祓の性格を中心に－」	『國學院雑誌』第113巻第10号 國學院大學	全19p	平24. 10
調査・研究報告等	単	「特論第3節 富士山の古代祭祀とその背景－火山活動・災害と古代の神観・祭祀－」	『山梨県山岳信仰遺跡詳細分布調査報告書－富士山信仰遺跡に関わる調査報告－』 山梨県教育委員会	全178p中 pp.142-147	平24. 3
著書	単	『日本古代の祭祀考古学』	吉川弘文館	全360p	平24. 3
学会発表等	単	「葬送と祭祀をめぐって－古墳時代から古代の様相、「祖(おや)」の観念と集落・墓域の景観－」	『日本考古学協会2011年度大会研究発表要旨』 日本考古学協会	全2p	平23. 10
著書	共	『日本神道史』	吉川弘文館	pp.46-91	平22. 7

【平成21年度以前の主な研究業績等】 (5点まで)					
種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または該当ページ	発行年月
論文	単	「古墳時代における祭具の再検討－千束台遺跡祭祀遺構の分析と鉄製品の評価を中心に－」	『國學院大學伝統文化リサーチセンター研究紀要』第2号 國學院大學伝統文化リサーチセンター	全225p中 pp.91-112	平22. 3
論文	単	「祭祀遺跡の分布と変遷から見た東国神郡の歴史的背景－安房国安房郡の事例を中」	『國學院雑誌』第111巻第3号 國學院大學	全46p中 pp.1-16	平22. 3
著書	共	『在地社会と仏教』	独立行政法人文化財研究所奈良文化財研究所	全195p	平18. 12
論文	単	「東国神郡内における古代の神仏関係」	『神道宗教』199・200号 神道宗教学会		平17. 10
著書	単	『神仏と村景観の考古学』	弘文堂	全363p	平17. 7

【所属学会】日本考古学協会、日本宗教学会、祭祀考古学会、神道宗教学会

【最近5年間の学会等および社会における主な活動】

富津市文化財保護審議会委員(平22. 4～現在)、財団法人印旛郡市文化財センター理事(平22. 4～現在)、千葉県文化財保護審議会委員(平24. 5～現在)

【教育活動の自己評価】

教育活動は、基本的に研究活動の成果を積極的に取り入れて行っている。
 講義は、基本的にはパワーポイントを使い行っているが、自身の最新の研究成果と調査・分析事例の画像等を、出来るだけ盛り込んで、講義資料は作成している。
 また、積極的に博物館の展示や資料も、講義・演習では活用している。特に、図像や写真資料に加え、博物館の実物資料を講義・演習の中で提示・解説し、学生の理解を促すだけでなく、興味関心を湧かせるよう心がけてきた。
 なお、現在、最近の研究をまとめ、教材に準ずる参考図書を執筆中である。

【研究活動の自己評価】

最近5年間の研究活動は、古墳時代から奈良・平安時代における祭祀の具体像の復元と、これと関連させて神観と祭祀の場との関係性の解明を行っている。
 その大きな成果としては、古墳時代、特に5世紀代の祭祀遺跡・遺物と律令期の祭祀・祭具との連続性を明らかにした。
 また、神観に関しては、宗像沖ノ島祭祀遺跡、富士山の古代祭祀などの分析を通じて、自然環境と古代の神観との関係性を明らかにした。古墳時代の祭祀の基底には、恵が多い反面、災害も多い日本列島の自然環境の働きに神を見る神観があり、これが、後の神祇祭祀へとつながったと推定した。
 以上により、従来の古墳時代の祭祀像や、神社の初限形態を再検討する必要性が明確となったと考えている。

【職・氏名】准教授 菅 浩 二 SUGA Koji
 【学 位】博士(宗教学)(平成16年3月 國學院大學 文甲第48号)
 【本学就任】平成20年
 【略 歴】國學院大學大学院文学研究科神道学専攻博士課程後期修了
 國學院大學日本文化研究所共同研究員
 ハーバード大学エドウィン・O・ライシャワー 日本研究所客員研究員
 國學院大學研究開発推進機構准教授
 【専門分野】宗教とナショナリズム論、近代神道史
 【受賞歴等】平成17年度神道宗教学会賞

【最近5年間の主な研究業績等】 [平成22～26年度] (10点まで)					
種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または該当ページ	発行年月
論文	単	「海外神社論」	岩波講座『日本歴史』20巻 地域論 岩波書店	全351p中 pp.321-351	平26. 10
論文	単	「海外神社の系譜にみる北海道神宮—総鎮守祭神と明治天皇御鎮座—」	北海道神宮・國學院大學研究開発推進センター編『北海道神宮研究論叢』 弘文堂	全395p中 pp.131-162	平26. 10
論文	単	「『国家神道』論と『ファシズム』論について—方法論的試みのために—」	『近現代日本の宗教とナショナリズム—国家神道論を軸にした学際的総合検討の試み—』(科学研究費補助金(基盤研究(C)研究成果報告書 課題番号23520079) 研究代表者 小島伸之(上越教育大学))	全157p中 pp.125-144	平26. 3
論文	単	「日韓同祖論と神社」	『동아시아문화연구(東アジア文化研究)』53 韓国 漢陽大學校 東アジア文化研究所	全398p中 pp.65-89	平25. 5
論文	単	「『国家による戦没者慰霊』という問題設定」	『招魂と慰霊の系譜—「靖国」の思想を問う』 錦正社	pp.296-331	平25. 3
論文	単	「戦時経済論と記紀神話解釈の一側面—難波田春夫の国体論について—」	『國學院大學研究開発推進センター研究紀要』第7号 國學院大學研究開発推進センター	pp.1-40	平25. 3
論文	単	「共存の困難さ—帝国と植民地、海外神社の経験が紡ぐもの」	『共存学 文化・社会の多様性』 弘文堂	全282p中 pp.173-192	平24. 3
論文	単	「日本の領土拡大と「天照大神」崇敬の変遷—朝鮮の事例から—」	『日本學』31 東國大學校文化學院日本學研究所	pp.132-159	平22. 11
学会発表等	単	Between Theocracy and Secular Mobilization: Placing the Concept of State Shinto in a New Light	Annual Meeting, American Academy of Religion		平22. 10
論文	単	A Concept of Overseas Shinto Shrines: A pantheistic Attempt by Ogasawara Shozo and Its Limitations	Japanese Journal of Religious Studies 37-1 Nanzan Institute for Religion and Culture	全184p中 pp.47-74	平22. 6

【平成21年度以前の主な研究業績等】 (5点まで)					
種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または該当ページ	発行年月
論文	単	「『神社跡地』とみたま送り—台湾と日本の狭間の、ある心霊主義的事例」	『現代宗教 2009』 国際宗教研究所編 (発行・秋山書店)	全379p中 pp.285-303	平21. 6
論文	単	「D.C.ホルトムの日本宗教学研究の性格について—その経歴の検討を通じて—」	『國學院大學研究開発推進センター研究紀要』第3号 國學院大學研究開発推進センター	pp.1-20	平21. 3
論文	単	「神権政治と世俗的動員の間に—「国家神道」と総力戦—」	『國學院大學研究開発推進センター研究紀要』第2号 國學院大學研究開発推進センター	pp.1-20	平20. 3
著書	共	『戦争と宗教』	天理大学出版部	全173p	平18. 8
著書	単	『日本統治下の海外神社—朝鮮神宮・台湾神社と祭神』	弘文堂	全381p	平16. 9

【所属学会】神道宗教学会、日本宗教学会、「宗教と社会」学会、American Academy of Religion

【最近5年間の学会等および社会における主な活動】

【教育活動の自己評価】

神道文化学部2年次の「神道英語Ⅰ・Ⅱ」については、平成20年以来これまでずっと担当し続けている。だがその他については、特に平成25年4月に研究開発推進機構より神道文化学部に移籍したこともあり、担当科目が一～二年間をもって変化する状況が続いている。このため、各科目における教育内容・方法に関する反省点や工夫を、継続的に次期以降に反映、展開させる、ということが、自身の教育活動としては中々できずにいる。しかし「総合演習(国際交流)」のように、その反省点を次の担当者への申し送りとし、参照してもらっている場合もある。

「神道英語Ⅰ・Ⅱ」については、同科目の教育上の重点は基礎英会話力の育成にあるが、必修科目であり、実際には英会話以前に、英語そのものに対する苦手意識を全く克服できないでいる段階の学生も、少なからず見受けられる。その一方で、逆に英語学習に対する積極的意欲を持った学生も存在する。このような状況を踏まえ、他の同科目担当教員とも協議を重ねた結果、比較的学習意欲の高い者をネイティブ教員が英語で行うクラスへ、それ以外の者を日本の中学校水準の英語力の定着と、会話への苦手意識克服をめざして日本人教員が日本語を用いて行うクラスへ、それぞれ誘導することなどを試行しつつある。この試みは、3年次以降に「神道と国際交流」の受講を希望する学生等に、総合的に判断して好ましい影響を与えるであろうことが僅かながら観測されており、今後さらに増進が期待される。

【研究活動の自己評価】

研究開発推進機構研究開発推進センターの「昭和前期における神道・国学と社会」研究、「地域・渋谷から発信する共存社会の構築」内の「共存学」プロジェクト、「北海道神宮の研究」、「神道・日本文化研究の国際比較と国内外の研究者間の連携強化」に関わり、神道文化学部に移籍の後、兼任教員として同様に研究活動を実施している。学外においては主に、「帝都東京における神社境内と「公共空間」に関する基礎的研究」および「近現代日本の宗教とナショナリズム」の二つの科研費共同研究事業において、近代神道史、宗教とナショナリズム論の立場から、新たな研究の枠組み提示等を試みた。また自身のこれまでの海外神社研究・戦没者慰霊追悼研究の成果を主たる土台としながら、米国、韓国、台湾、豪州等の研究者との交流を進めた。

【職・氏名】教授 武田 秀章 TAKEDA Hideaki

【学 位】博士(神道学)(平成9年11月 國學院大學 文乙第143号)

【本学就任】平成8年

【略 歴】國學院大學大学院文学研究科神道学専攻博士課程後期単位取得満期退学
神社新報社、神社本庁

【専門分野】神道史、国学史

【受賞歴等】平成2年度神道宗教学会奨励賞

神社本庁設立55周年記念大会において表彰<学術関係及び神職養成関係功労者>(平成13年5月)

【最近5年間の主な研究業績等】 [平成22~26年度] (10点まで)

種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または 該当ページ	発行年月
その他	共	「御製と神道文化」	『神道文化』第25号 神道文化会	全40p	平25. 6
論文	単	「伊勢神宮 悠久の歴史 一近現代 時代の試練を乗り越えて一」	『別冊太陽』208 平凡社	全8p	平25. 5
論文	単	「神道史から見た明治天皇」	『明治聖徳記念学会紀要』復刊第49号 明治聖徳記念学会	全21p	平24. 11
その他	単	「『皇室の家訓』と明治天皇」	『史』第95号 新しい歴史教科書を作る会		平24. 11
学会発表等	共	シンポジウム「明治天皇とその時代」	『明治聖徳記念学会紀要』復刊第49号 明治聖徳記念学会	全18p	平24. 11
論文	単	「維新时期における「造化神」観一門脇重綾の造化神論・幽顕論をめぐって」	『悠久』第128号 おうふう	全13p	平24. 8
著書	共	「国学から國學院へ」	『モノと心に学ぶ伝統の知恵と実践(文部科学省私立大学学術研究高度化推進事業オープン・リサーチセンタ整備事業成果論集)』 國學院大學	全23p	平24. 3
学会発表等	共	「討議「伝統」の形成、「伝統」の未来」	文部科学省オープン・リサーチ・センター整備事業「モノと心に学ぶ伝統の知恵と実践」成果公開企画総合シンポジウム「伝統文化の知恵と実践一「伝統」の形成、「伝統」の未来一」 國學院大學オープン・リサーチ・センター		平23. 12
著書	共	『プレステップ神道学』	弘文堂	全15p	平23. 5
著書	共	「小中村清矩文書・門脇重綾文書の皇霊祭祀関係資料」	『歴史のなかの天皇陵』 思文閣	pp.196-197	平22. 10

【平成21年度以前の主な研究業績等】 (5点まで)

種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または 該当ページ	発行年月
著書	共	「馬関戦争と下関招魂場の形成」	『靈魂・慰霊・顕彰一死者への記憶装置』 錦正社	全352p中 pp.30-73	平22. 3
論文	単	『『古事記』神話の一斑見一コトヨサシ・オヤ・コ一』	『明治聖徳記念学会紀要』復刊第36号 明治聖徳記念学会	pp.59-74	平14. 12
著書	単	『維新时期天皇祭祀の研究』	大明堂	全309p	平8. 10
論文	単	「文久・慶応期の大国隆正」	『國學院大學日本文化研究所紀要』 第64輯 國學院大學日本文化研究所	pp.105-139	平1. 9
著書	共	『日本型政教関係の誕生』	第一書房	全376p中 pp.83-144	昭62. 2

【所属学会】神道宗教学会、明治聖徳記念学会

【最近5年間の学会等および社会における主な活動】

神社本庁教学委員(平10~現在)

【教育活動の自己評価】

講義・演習に共通する問題点は、学生の学習意欲・基礎学力に大きな隔たりが見られることである。この傾向は、年々拡大の一途を辿っていると言わざるを得ない。問題の根は限りなく深い、まずは現場担当者として、教室の雰囲気作り・一体感の醸成から始めるほかないと考え、心理学に学んだ誘導法を試みる等、さまざまな試行錯誤を重ねている。

1年次の講義科目(「古典講読I」)においては、初年度の入門科目としての役割に鑑み、とりわけ学習意欲の乏しい学生に対して、古典への興味と関心を喚起することに努めてきた。毎回の授業に際しては、(1)授業冒頭で前回の復習を質問形式で行う、(2)授業冒頭で今回の授業のテーマとキーワードを確認する、(3)「見てわかる」ビジュアル資料をレイアウトしたレジュメを配布する(尚、資料は、学生の要望を承け、すべてA4サイズに統一した)、(4)授業中、教室内を巡回して学生との距離を縮める、(5)授業の要所では必ず学生に質問を投げかける(学生が答えやすい適切な問い掛けを常に吟味している)、(6)毎回、当日の課題に対するミニレポートを提出させ、授業の度ごとに学生の理解度・要望等をチェックする、等々、種々の工夫と改善策を講じてきた。近年は、この一方で、学習意欲の高い学生に対しても、知的刺激を与え得る手立てを模索している。例えば別途オフィスアワーで個別指導を行い、参考図書・研究課題を示す等々、そのための仕掛けを試みている。

3、4年次での演習科目では、各々が「探求と発見の醍醐味」を会得することは勿論、究極的には各自の「ライフワーク」への覚醒を目指している。受講者には、発表を全力投球のプレゼンテーションたらしめること、他人の発表・発言を的確に理解し、適切に回答する「対話」能力を培うべきことを、常時言い聞かせている。担当演習は、演習科目としては受講者が多い方なので、少人数のグループ別討議を行わせ、受け身の「お客様」が生じないように配慮している。今後も出来る限り「全員参加」のゼミ運営を目指していきたい。

【研究活動の自己評価】

学内の研究プロジェクトに関しては、平成25年以来、「モノと心に学ぶ伝統の知恵と実践」事業(文部科学省オープンリサーチセンター整備事業・平成19年度確定)の第3グループ(國學院の学術資産に見るモノと心)研究代表を務めた。26年度以降は、その後継プロジェクト「古事記の学際的・国際的研究」の研究代表を担当している。学会活動としては、神道宗教学会の副会長、明治聖徳記念学会の企画編集委員も拝命し、学会運営に従事している。

個人研究では、前著以来の課題である「維新前後の神道・国学」に関わる研究を継続し、従来の津和野系国学者に加え、長州系国学者、鳥取系国学者に関わる資料発掘と紹介にも漸次着手している。今後は、平成24年に発表した論稿「国学から國學院へ」(國學院大學オープンリサーチセンター刊)を第1着手として、わが国の「古典と和歌の振興史」、「国学の形成史・展開史」を、より巨視的な観点から展望する研究も進めていきたい。

【職・氏名】教授 中西正幸 NAKANISHI Masayuki
 【学 位】博士(神道学)(平成8年7月 國學院大學 文乙第136号)
 【本学就任】平成4年
 【略 歴】國學院大學大学院文学研究科神道学専攻博士課程単位取得満期退学
 宗教法人「神宮」
 【専門分野】神道祭祀学、神宮学

【最近5年間の主な研究業績等】 [平成22～26年度] (10点まで)					
種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または 該当ページ	発行年月
論文	単	「伊勢神宮の遷宮祭」	『儀礼文化学会紀要』1 儀礼文化学会	pp.98-108	平25. 3
論文	単	「伊勢の式年遷宮について」	『國學院大學大学院紀要－文学研究科－』第44輯 國學院大學大学院文学研究科	pp.1-39	平25. 3
論文	単	「神宮遷宮史の諸相」	『神道宗教』第229号 神道宗教学会	pp.1-20	平25. 1
論文	単	「伊勢の遷宮について」	『國學院雑誌』第113巻第11号 國學院大學	pp.104-117	平24. 11
論文	単	「神遷しの秘儀」	『國學院大學紀要』第49巻 國學院大學	pp.79-107	平23. 2
論文	単	「仮殿遷宮について」	『日本基層文化論集』 雄山閣	pp.408-429	平22. 8

【平成21年度以前の主な研究業績等】 (5点まで)					
種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または 該当ページ	発行年月
著書	単	『神宮祭祀の研究』	国書刊行会	全717p	平19. 7
論文	単	「神葭神事考」	『伝統と創造の人文科学－國學院大學大学院文学研究科創設50周年記念論文集』	pp.87-105	平14. 3
論文	単	「黒瀬益弘と神宮祭祀」	『皇学館大学神道研究所紀要』15 皇学館大学神道研究所	pp.211-232	平11. 3
著書	単	『神宮式年遷宮の歴史と祭儀』	大明堂	全322p	平7. 11
論文	単	「神宮の大物忌」	『神道宗教』第155・156号 神道宗教学会	pp.1-25, 95-118	平6. 6

【所属学会】神道宗教学会、神道史学会、明治聖徳記念学会

【最近5年間の学会等および社会における主な活動】

神社本庁評議員・教学委員(平4～現在)、神宮評議員・囑託(平4～現在)

【教育活動の自己評価】

祭祀学および祭祀演習に関する教育内容について、その内容をつとめて年毎に改めてきた。祭祀学は祭祀全般を概論風に説き及ぶもので、内容的にもやらなければならない事柄が多く、変化も少ない。祭祀演習は学生の興味と関心に応じて、分散的でなく地方から全国へと視野を広げ、特殊神事にも精力的に取り組んできた。従って方法については印刷物を配布して、ビデオを上映することが主体となったが、学生に対してなるべく新しい写真を多用しながら、資料を印刷・配布するよう努めてきた心算である。配布物の工夫は尽きないが、内容的な制約もあり、今の内容・配布に従っている所である。

【研究活動の自己評価】

祭祀の研究について、資料収集に努めて一応の成果が得られた。神饌の形態・数量などの資料を集め、所謂「特殊神饌」と称されるものを対象とし、ある程度の神饌について見通しを得た。今後は他の神供物ともいべき幣物へと範囲を広げ、同様の究明を努力してゆきたい。さらに現実的な状況では、伊勢神宮の式年遷宮を25年に迎えたため、その前後は研究活動や論文作成に追われたが、所期の成果を収めえたと思う。

【職・氏名】教授 西岡和彦 NISHIOKA Kazuhiko
 【学 位】博士(神道学)(平成16年11月 國學院大學 文乙第197号)
 【本学就任】平成14年
 【略 歴】國學院大學大学院文学研究科神道学専攻博士課程後期単位取得満期退学
 國學院大學文学部神道学科・専攻科・別科・日本文化研究所兼任講師
 【専門分野】神道思想史
 【受賞歴等】平成14年度神道宗教学会賞

【最近5年間の主な研究業績等】 [平成22～26年度] (10点まで)

種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または該当ページ	発行年月
著書	共	『文学研究の思想—儒学、神道そして国学—』	東海大学文学部叢書 東海大学出版会	全200p	平26. 4
評論・書評等	単	「天下無双の大厦、國中第一の靈神—出雲大社遷宮史—」	『大社の史話—出雲大社「平成の大遷宮」特集号—』第174号 大社史話会	全96p中 pp.22-34	平25. 3
調査・研究報告等	共	「出雲大社の寛文造宮について—大社御造宮日記の研究—」	『島根県古代文化センター調査研究報告書』48 島根県古代文化センター	全98p中 pp.1-59	平25. 3
調査・研究報告等	共	『国宝出雲大社本殿ほか22棟防災施設工事報告書』	宗教法人出雲大社	全165p中 pp.1-5	平25. 3
論文	単	「国学者の論じたムスヒ信仰」	『悠久』第128号 おうふう	全92p中 pp.23-36	平24. 8
学会発表等	共	「シンポジウム 近世神道史の新視点—垂加神道を軸として—」	『皇學館大学神道研究所紀要』第28輯 皇學館大学神道研究所	全290p中 pp.141-198	平24. 3
論文	単	「「天之益人」考—「大祓詞」の神道神学的考察の試み—」	『神道宗教』222・223号 神道宗教学会	全140p中 pp.1-23	平23. 7
教科書・参考書	共	『プレステップ神道学』	弘文堂	全166p中 pp.62-73	平23. 5
論文	単	「天御蔭日御蔭と天日隅宮と」	『國學院雑誌』第111巻第9号 國學院大學	全64p中 pp.1-15	平22. 9
著書	共	『日本神道史』	吉川弘文館	全382p中 pp.188-227	平22. 7

【平成21年度以前の主な研究業績等】 (5点まで)

種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または該当ページ	発行年月
編著	共	『大社町史』中巻・年表	出雲市	附、『年表』72頁	平20. 9
著書	共	『生田神社史』	国書刊行会	全803p	平19. 4
著書	共	『新編 荷田春満全集』第二巻(日本書紀・祝詞)	おうふう	全455p中 pp.351-419, 449-455	平16. 11
著書	単	『近世出雲大社の基礎的研究』	大明堂	全382p	平14. 9
著書	共	『『直毘靈』を読む—二十一世紀に贈る本居宣長の神道論』	右文書院	全207p	平13. 11

【所属学会】神道宗教学会、神道史学会、日本思想史学会、日本宗教学会

【最近5年間の学会等および社会における主な活動】

神道宗教学会理事(平14～現在)、神道史学会理事(平24. 4～現在)、日本宗教学会評議員(平22. 9～現在)
 国際宗教研究所理事(平25～現在)、公益財団法人いづも財団評議員(平25～現在)

【教育活動の自己評価】

学部での専門教育では、「神道神学Ⅰ・Ⅱ」(専攻科合同)で、『古事記』『日本書紀』の神代巻を中心とした神道古典を項目別にしたテキストを作成して神道神学を講じている。テキストの読解を通じて神道神学的な思考を身につけ、神道をより深く理解できるように努めている。また、入学生を対象にした『神道概論』では、神道や神社に興味や関心をもたせ、神道の基礎知識を中心に講じている。新入生には入学時に神社神道の基礎学力を見るテストを行い、後期最終日にも同様のテストを行って、神道の基礎知識の到達度を測っている。昨年度は平均で10点上昇したが、今年度は問題の正否を分析し、それに応じた教育を行うよう努めている。演習では、夏合宿を行い、親睦を深めるとともに、学問の厳しさが身につくよう、努めている。

【研究活動の自己評価】

出雲大社の遷宮に伴い、シンポジウムや講演会に参加し、また出雲大社修造遷宮に関する報告書メンバーとして、出雲大社全体(社殿や歴史など)の研究を行っている。一方で、東海大学での儒学や国学を対象とした研究会に参加し、シンポジウムや研究論集『文学研究の思想—儒学、神道そして国学—』を刊行し、それに関する講演会並びにシンポジウムの準備を行っている。

【職・氏名】准教授 藤本 頼生 FUJIMOTO Yorio
 【学 位】博士(神道学)(平成21年3月 國學院大學 文甲第116号)
 【本学就任】平成23年
 【略 歴】國學院大學大学院文学研究科神道学専攻博士後期課程修了
 神社本庁教学課
 神社本庁総合研究所研究員
 【専門分野】近代神道史、神道教化論、宗教社会学
 【受賞歴等】平成8年度皇學館大學人文学会奨励賞受賞
 平成22年度神道宗教学会賞

【最近5年間の主な研究業績等】 [平成22～26年度] (10点まで)

種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または該当ページ	発行年月
著書	単	『神社と神様がよ〜くわかる本』	秀和システム	全232p	平26. 3
論文	単	「自然災害との共存—自然災害伝承と神社由緒との関係性にみる—」	『共存学2 災害後の人と文化、ゆらぐ世界』弘文堂	全234p中 pp.103-120	平26. 2
論文	単	「判例の社会的受容と政教分離問題—司法試験・公務員試験参考書を手掛かりとして—」	『神道宗教』231号 神道宗教学会	全138p中 pp.1-32	平25. 7
論文	単	「ケアと伝統文化—祭りと講・地域文化—」	『ケアとは何だろうか 領域の壁を越えて』ミネルヴァ書房	全345p中 pp.190-201	平25. 6
編著	共	『地域社会をつくる宗教』	明石書店	全301p	平24. 12
論文	単	「無格社整理と神祇院—「国家ノ宗祀」と神社概念—」	『國學院雑誌』第113巻第11号 1267号 國學院大學	全249p中 pp.67-86	平24. 11
論文	単	「地方神職会会報にみられる神宮大麻頒布の諸相」	『明治聖徳記念学会紀要』第49号 明治聖徳記念学会	全510p中 pp.165-185	平24. 11
論文	単	「小盆地宇宙の神々と信仰—郷土史研究における神社の諸伝承の考証・再整理をめぐって—」	『郷土再考—新たな郷土研究を目指して』角川学芸出版	全284p中 pp.206-222	平24. 2
論文	単	「神職養成と宗教教育—戦後六十五年の歩みからみる現状と課題—」	『宗教研究』369号(第85巻2輯) 日本宗教学会	全386p中 pp.269-292	平23. 9
論文	単	「地域社会の変容と神社神道—無縁社会・ファスト風土化する社会のなかで—」	『神社本庁総合研究所紀要』第16号 神社本庁総合研究所	全388p中 pp.23-85	平23. 6

【平成21年度以前の主な研究業績等】 (5点まで)

種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または該当ページ	発行年月
論文	単	「神社の祭日変容をめぐる現状と課題—祭礼日の近現代—」	『國學院大學伝統文化リサーチセンター研究紀要』第2号	pp.47-61	平22. 3
著書	単	『神道と社会事業の近代史』	弘文堂	全615p	平21. 12
論文	単	「神社神道と社会貢献の関わりを考える」	『社会貢献する宗教』世界思想社	全248p中 pp.83-105	平21. 12
論文	単	「子育て支援と境内地の活用—神道の福祉実現の場としての神社の可能性—」	『國學院大學伝統文化リサーチセンター研究紀要』第1号	pp.113-128	平21. 3
論文	単	「近代の神社法令の整備過程と関係法令概説書にみられる「神社」概念—神社・氏子の意義を中心として—」	『神社本庁総合研究所紀要』第14号	pp.67-122	平21. 3

【所属学会】神道宗教学会、日本宗教学会、「宗教と社会」学会、日本都市社会学会、宗教法学会、神道史学会、岡山地方史研究会、社会事業史学会

【最近5年間の学会等および社会における主な活動】

神道宗教学会理事(平24. 4～現在)、『宗教と社会貢献』電子ジャーナル編集委員(平23. 2～現在)、政教関係を正す会幹事(平23. 7～現在)

【教育活動の自己評価】

教育活動については、着任以来、演習科目、講義科目の双方を担当しており、所属学科で担当している自身の現在、基幹となっている専門科目(とくに神道教化概論Ⅰ・Ⅱ)を中心に映像資料を用いたり、ゲスト講師などを招くなどして神社界の教化活動の実情などについても学生と神職との橋渡し、あるいは神社界の一端に触れてもらうような授業構成、授業改善を試みてきた。一方で全学部対象の教養総合科目(必修科目:神道と文化)も担当しているため(平成23年度～25年度)、大学入学直後の1年次生に対する教育手法についても神職装束の着体験や土俵祭の映像などを用い、興味関心をもたせるための授業改善を試みてきた。初年担当の教養総合科目については、とくに平成25年度に前期280名、後期300名以上の多数科目も担当したこともあり、多人数教室での静粛さを保つための学生への注意点の提示や修学意欲をもたせるための効果的な授業構成についても共通シラバスの範囲内でいかなる方法が可能か工夫を試みた。また着任初年度の平成23年度に日本私立大学連盟のFDワークショップに参加し、教員歴の浅い他大学の教員たちとともに研修を受けたが、翌年度は同連盟の招きにより、同ワークショップにて行われるパネルディスカッションに登壇者として出席し、FDの実践例や教育方法について具体的な問題意識等を発題した。また、学部以外に別科の授業科目を担当していることもあり、平成23年度～25年度に担当した神社神道概説の教科書として『神社と神様がよ〜くわかる本』(秀和システム)を平成26年3月に刊行した。

【研究活動の自己評価】

近代、現代における神社の在り方や教化活動に関わる問題、戦前の神社行政や現代の神社の護持や管理、あるいは神社と現代社会をめぐる課題などを中心に研究を進めてきた。については、平成23年度から26年度の4年間に科学研究費補助金研究「近代の宗教アーカイヴ構築に関する基礎研究」(基盤研究B)に研究分担者として参加し、戦前期の各府県神職会報の調査・分析などを進め、学会などでの報告、学術論文の執筆を行ったほか、平成24年度からの2年間、「延喜式内社を中心とした神社と自然災害伝承に関わる宗教史的研究」というテーマで公益財団法人三菱財団人文科学助成金研究に採択され、自然災害伝承と地域神社にかかわる調査および研究発表等を行ってきた。

【職・氏名】教授 **ヘイヴンズ, ノルマン** Norman HAVENS

【学 位】修士(Ph.D. 課程完了、ABD)

【本学就任】平成3年

【略 歴】プリンストン大学大学院宗教学部宗教史学専攻博士課程単位取得満期退学
神社新報社

【専門分野】日本宗教史、日本の民間信仰

【最近5年間の主な研究業績等】 [平成22～26年度] (10点まで)

種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または 該当ページ	発行年月
学会発表 等	単	"Multiculturalism, Coexistence, and Values: the Limits of Relativism"	[多様性と調和]第二回アジア未来会 議(渥美国際交流財団) Bali, Indonesia		平26. 8
論文	単	「文化多様性と共存の行方—欧米の動向を ふまえて—」	國學院大學研究開発推進センター 編・古沢広祐責任編集『共存学 文 化・社会の多様性』 弘文堂	pp.245-264	平24. 3
論文	単	「神道から見た沖ノ島」	“宗像・沖ノ島と関連遺産群” 世界遺 産推進会議編『宗像・沖ノ島と関連遺 産群世界遺産 研究報告』II・2	pp.75-83	平24. 3

【平成21年度以前の主な研究業績等】 (5点まで)

種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または 該当ページ	発行年月
論文	共	「国外における神道研究の現状と神道文献 の国際的研究」	神道と日本文化の国学的研究発信の 拠点形成 (國學院大學)	pp.69-112	平18. 10
論文	単	"Shinto"	Nanzan Guide to Japanese Religions (University of Hawai'i Press)	pp.14-37	平17. 1
翻訳・ 翻刻書	共	Encyclopedia of Shinto, Vol.1, *Kami*	Institute for Japanese Culture and Classics, Kokugakuin University, Tokyo	全153p	平13. 3
翻訳・ 翻刻書	単	"A Record of Divine Marvels of the Grand Shrine of Ise" (「出口延佳「伊勢大神宮神異 記」)	『國學院大學日本文化研究所紀要』 第74号 國學院大學日本文化研究所	pp.95-155	平6. 9

【所属学会】 American Academy of Religion、Association of Asian Studies、神道宗教学会

【最近5年間の学会等および社会における主な活動】

【教育活動の自己評価】

該当の期間を振り返ると、もっとも大きな進展はゼミなどのテーマとして「宗教とエコロジー」に加え「人権」や「多文化主義」の導入であろう。宗教とエコロジーに対する関心は1997のハーヴァード大学にて開催された「神道とエコロジー」なるフォーラムへ参加するチャンスに恵まれたからであるが、国学院では横山實教授のもとで開催されたオムニバス形式の総合講座「歴史・文化的視点からの自然との共生」に参加することで、具体的なかたちとして教育活動に反映することができた。他方「人権」や「多文化主義」を教育テーマとしているのは、本大学の古沢広祐教授がリードしている「共存学」プロジェクトに参加することがきっかけとなった。現在の日本の若者は「小児化」と「高齢化社会」に身近な問題として迫られるであろうので、その対応としてグローバルな範囲において移民や「帰化」国籍、アイデンティティなどの問題を取り上げたい。

【研究活動の自己評価】

教育活動と同様に、もっとも大きなフォーカスは「宗教とエコロジー」に加え「人権」や「多文化主義」としている。宗教とエコロジーに対する関心は1997のハーヴァード大学にて開催された「神道とエコロジー」なるフォーラムへ参加するチャンスに恵まれたからである。他方「人権」や「多文化主義」を研究テーマとしているのは、本大学の古沢広祐教授がリードしている「共存学」プロジェクトに参加することがきっかけとなった。宗教とエコロジーや人権、多文化主義はすべて「多様性」と関連するテーマとして研究に取り上げている。これからの日本は「小児化」や「高齢化社会」になおさら迫られるであろうので、その対応としてグローバルな範囲において移民や「帰化」、国籍とアイデンティティなどの問題との関連で取り上げたい。

【職・氏名】助教 星野光樹 HOSHINO Mitsushige

【学 位】修士(神道学)

【本学就任】平成22年

【略 歴】國學院大學大学院文学研究科博士課程前期神道学専攻 修了
國學院大學研究開発推進機構ポスドク研究員

【専門分野】神社祭祀、国学

【受賞歴等】神道宗教学会賞(平成25年)

【最近5年間の主な研究業績等】 [平成22～26年度] (10点まで)					
種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または該当ページ	発行年月
著書	単	『近代祭式と六人部是香』	弘文堂	全262p	平24.7

【平成21年度以前の主な研究業績等】 (5点まで)					
種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または該当ページ	発行年月
論文	単	「稻荷信仰と幕末期の国学者－六人部是香を中心に－」	『朱』52号 伏見稻荷大社		平21.3
論文	単	「六人部是香と向日社について」	『式内社の葉』78・79号 神社新報社	pp.28-42	平21.3
翻訳・翻刻書	単	岩崎長世著『神葬考』の翻刻と紹介	『史料からみた神道－國學院大學の学術資産を中心に－』 弘文堂	pp.329-365	平21.3
論文	単	「明治期における敬神思想と祝詞作文に関する小考」	『國學院大學研究開発推進センター研究紀要』第2号 國學院大學研究開発推進センター	pp.249-265	平20.3
論文	単	「近代における祈願祭祀の成立に関する一考察－六人部是香著『私祭要集』を中心に－」	『國學院大學研究開発推進センター研究紀要』第1号 國學院大學研究開発推進センター	pp.255-277	平19.3

【所属学会】神道宗教学会、明治聖徳記念学会

【最近5年間の学会等および社会における主な活動】

神道宗教学会総務委員会幹事(平14.4～現在)

【教育活動の自己評価】

講義科目については「神社祭式概論」を担当し、授業評価アンケートで寄せられた意見に基づき、板書の表記方法や配布物について改善に努めた。また、授業の始めに復習を行うことで、理解度の向上に努めるとともに、授業ごとにコメントペーパーを配布し、受講生の関心や理解度を把握することに努め、これを授業に反映することで、受講生の授業に対する問題意識の向上に一定の成果が得られたように思われる。

なお、本科目については、従来の祭祀学とは異なる、より授業の内容に即した教科書を作成中であり、現在3名の執筆者により編集を行っている。刊行は次年度の予定。

演習科目(実技)については、「神社祭祀演習Ⅰ・Ⅱ」を担当した。とくに「演習Ⅰ」では、祭式の技能を修得するうえでは、基礎作法の十分な理解と修得への意識が不可欠である。そのため、連帯責任制に基づく班ごとによる実技の小試験を実施し、細部にわたる問題点の指摘を行うほか、試験合格にむけて各人が相互に作法に関する指摘をしようとなり、全体で技能の向上がはかられたことは大きな収穫であったと考えている。

【研究活動の自己評価】

これまで幕末期から近代にかけて、神社の祭式がどのように提唱され、且つ継承・変容していったのか、という問題関心のもとに研究を行ってきたが、その集大成として平成24年7月に『近代祭式と六人部是香』を上梓した。

目下、「神社祭式概論」の教科書を執筆中であり、そのなかで神社の行事・作法に関する古例を調査中である。

【職・氏名】准教授 松本久史 MATSUMOTO Hisashi
 【学位】博士(神道学)(平成18年3月 國學院大學 文乙第216号)
 【本学就任】平成14年
 【略歴】國學院大學大学院文学研究科神道学専攻博士課程後期単位取得満期退学
 國學院大學21世紀研究教育計画嘱託研究員
 國學院大學研究開発推進機構准教授
 【専門分野】近世・近代の神道史・国学研究
 【受賞歴等】平成19年度神道宗教学会賞

【最近5年間の主な研究業績等】 [平成22～26年度] (10点まで)					
種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または該当ページ	発行年月
調査・研究報告等	単	「近世後期における江戸「神祇職」の集団移転」	渋谷学ブックレット4『結節点としての江戸—江戸から東京へ』 國學院大學研究開発推進センター	全134p中 pp.77-106	平26. 2
調査・研究報告等	共	第三十回神社本庁教学大会研究大会報告「神道的自然観と現代社会」	『神社本庁総合研究所紀要』18 神社本庁総合研究所	pp.159-268のうち 「発題Ⅰ「記紀・古典」の視点から」 pp.165-179, 237-247	平25. 5
論文	単	「篠崎東海と荷田春満—和学をめぐる一考察」	『國學院雑誌』第114巻第4号 國學院大學	全13p	平25. 4
著書	単	『古事記と国学』	東京都神社庁研修シリーズ 20 東京都神社庁	全57p	平25. 3
論文	単	「近世国学思想から見た共存の諸相」	『共存学:文化・社会の多様性』 弘文堂	全282p中 pp.139-154	平24. 3
著書	共	『プレステップ神道学』	弘文堂	全166p中 pp.26-37, 74-87	平23. 5

【平成21年度以前の主な研究業績等】 (5点まで)					
種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または該当ページ	発行年月
論文	単	「国学者の靈魂観 その思想と実践—荷田派を中心に—」	『國學院大學研究開発推進機構紀要』第1号 國學院大學研究開発推進機構	全35p	平21. 3
論文	単	「近世朝廷における祈祷の意義—七社祈祷を中心に—」	『国史学』第195号 国史学会	全134p中 pp.83-102	平20. 4
論文	単	「近世偽文書と神職の意識と行動—元和・天和の「神社条目」について」	『日本文化と神道』第2号(國學院大學21世紀COEプログラム「神道と日本文化の国学的研究発信の拠点形成」成果論文集) 國學院大學21世紀COEプログラム研究センター	全368p中 pp.219-260	平18. 2
著書	単	『荷田春満の国学と神道史』	弘文堂	全427p	平17. 10
著書	共	『新編荷田春満全集 第二巻 日本書紀・祝詞』	おうふう	全455p中 pp.9-349 420-448	平16. 11

【所属学会】神道宗教学会、日本宗教学会、「宗教と社会」学会、神道宗教学会、明治聖徳記念学会、国史学会

【最近5年間の学会等および社会における主な活動】

神社本庁研修委員(平成24.7～現在)、神社本庁教学委員(平成25.7～現在)、国際宗教研究所評議委員(平成26.4～現在)

【教育活動の自己評価】

平成22年～24年度は学部の教務委員として活動し、特に「神道文化基礎演習」および「神道文化演習」の科目担当として、共通シラバスの作成をはじめとする科目運営に当たった。また、平成22～24年度は学部選出の共通教育センター委員として、総合教養の神道科目「神道と文化」の科目運営を担当した。上記に関連して、神道文化基礎演習および「神道と文化」の共通テキストである『プレステップ神道学』の執筆と編集にも関わった。個別の担当授業においては、半期ごとの授業評価アンケートを分析することにより改善を図り、理解度・満足度の向上に努め、一定の成果が上がっていると認識している。

【研究活動の自己評価】

現在まで、21世紀研究教育計画委員会の研究事業である「地域・渋谷から発信する共存社会の構築」に参加し、近世における渋谷地域の神道、および日本における共存の歴史的諸相の研究にあたっている。また、平成22～25年度にかけては科学研究費補助金基盤研究(B)「近世における前期国学の総合研究」(研究代表:根岸茂夫文学部教授)に参画し、荷田春満の史料および神道思想研究をすすめた。研究開発推進機構日本文化研究所の事業「國學院大學国学研究プラットフォーム」の構築事業(平成23年～25年度)においては兼担教員として国学研究のネットワーク形成の基盤作りを行った。

【職・氏名】教授 茂木 栄 MOGI Sakae

【学 位】文学修士

【本学就任】昭和62年

【略 歴】成城大学大学院文学研究科日本常民文化専攻博士課程後期単位取得満期退学
日本学術振興会奨励研究員

【専門分野】祭祀学、日本民俗学、民俗芸能学

【最近5年間の主な研究業績等】 [平成22～26年度] (10点まで)					
種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または 該当ページ	発行年月
論文	単	「かくれキリシタンにみる人神信仰一殉教者 ガスパル様とダンジク様一」	『人神信仰の歴史民俗学的研究』 岩田書院	全300p中 pp.243-287	平26. 3
その他	単	「郷土芸能・祭りの復興と現状」シンポジウム 『災害と社叢文化』発題	『社叢学研究』第12号 NPO法人社叢学会	全91p中 pp.52-53	平26. 3
その他	単	「顕在化した民俗芸能・祭の力」	『民俗芸能研究』第55号 民俗芸能学会	pp.22-27	平25. 9
論文	単	「賀茂那備神社とその祭祀」	季刊『悠久』第132号 おうふう	全84p中 pp.57-65	平25. 8
調査・研究 報告等	単	「山田八幡宮神輿修復終了奉祝神輿渡御 祭及び八幡宮神幸祭復活を中心に」	『地球環境基金助成金事業報告書一東 日本大震災被災地における被災社叢 復興と復活への取り組み 社叢の現状と 減災に果たした役割』 NPO法人社叢学会	全106p中 pp.96-105	平25. 2
論文	単	「山・社(もり)・海をつなぐ神の道」	『共存学:文化・社会の多様性』 弘文堂	全282p	平24. 3
教科書・ 参考書	単	「第9章イエ・ムラ(サト)・マチの祭り一風土を 祭りで意味づける」	『プレステップ神道学』 弘文堂	全12p	平23. 3
学会発表 等	共	社叢学会第9回総会シンポジウム「大和の歴 史的風土をかえりみる」	『社叢学研究』9号 社叢学会	全3p	平23. 3
論文	単	「山車祭り源流考」	『國學院大學伝統文化リサーチセンター 研究紀要』第3号 國學院大學伝統文化リサーチセンター	全9p	平23. 3
解説・解 題等	単	「国指定重要無形民俗文化財 隠岐国分寺 蓮華会舞」	『国立劇場第一一七回民俗芸能公演』 独立行政法人日本芸術文化振興会	全5p	平23. 1

【平成21年度以前の主な研究業績等】 (5点まで)					
種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または 該当ページ	発行年月
論文	単	「柳田國男の神道研究」	『明治聖徳記念学会紀要』復刊第45号 明治聖徳記念学会	pp.186-195	平20. 11
論文	単	「[社](もり)の民俗宗教的意味と房総の社」	千葉県神社庁房総の社編纂委員会編 『房総の社』 おうふう	pp.26-34	平16. 9
論文	単	「国府総社の鳥瞰数量的解析一『神社明細 帳』の記述を中心として」	『國學院大學日本文化研究所紀要』 第85輯 國學院大學日本文化研究所	pp.1-103	平12. 3
著書	共	『北海道神社明細帳の分析』	國學院大學日本文化研究所編集・刊行	全191p	平9. 3
論文	単	「国府宮裸まつり一呪祭の伝承と変容一」	『国立歴史民俗博物館研究報告』第 33集	pp.129-170	平3. 3

【所属学会】日本民俗学会、民俗芸能学会、神道宗教学会、民俗芸能学会、神道宗教学会、情報文化学会、NPO法人社叢学会理事

【最近5年間の学会等および社会における主な活動】

埼玉県さいたま市文化財専門委員(平13. 5～現在)、財団法人伝統文化活性化国民協会「伝統文化こども教室」企画委員・選考委員(平13
～平22)、神道系文化雑誌『悠久』編集委員(昭63～現在)、NPO法人社叢学会理事(平15～現在)、神社本庁教学委員(平2～現在)、東京
都民俗芸能大会実行委員会(平10～現在)、ふるさと文化再興事業企画委員(平17. 4～平22)、全国神楽協議会理事(平22. 4～現在)

【教育活動の自己評価】

通常の教育活動においては、教材用の映像の制作、講義資料の作成更新を常に行なっている。その他特筆すべき活動として①平成23年3月
の東日本大震災後、私大ネット36のボランティア活動の國學院大學独自プログラムの企画と学生引率を行なってきた。②環境教育プログラムで
は、公益法人ポーラ伝統文化振興財団と共催で國學院大學学生及び一般市民を対象に「人・社・祭一文化風土の記録」と題した講演会＋上
映会を6年間続けている。昨年度は年間5回、本年度は年間4回開催の予定である。企業の財団と共同で行なう伝統文化と環境教育関係の映
画上映会と講演会の開催を長期にわたっての継続が可能であった背景には、國學院大學教育理念の支えあることは言うまでもない。

【研究活動の自己評価】

過去5年間の研究活動に関しては、①祭祀研究の一環で山車祭の(神戸芸術工科大学アジアデザイン研究所との)共同研究と成果の発表、
②平城宮建都1300年関連での大和の風土研究の成果の発表、③東日本大震災以後の民俗芸能・祭の復活と地域の復興に関わる研究と発
表、④天龍川中流域の狩猟儀礼の調査研究、⑤岩手県三陸地域活性化のための(公的機関の依頼による)民俗芸能の調査研究、信仰習俗
の調査研究を複数の町・地域で行なっている。さらに本学の共存学プロジェクトに参加し研究に取り組んでいる。順次研究成果を発表してい
るが、時間的に厳しい調査研究状況を少々改善しなければと考えている。

【職・氏名】教授 茂木貞純 MOTEGI Sadasumi

【学 位】文学修士

【本学就任】平成17年

【略 歴】國學院大學大学院文学研究科神道学専攻博士課程後期単位取得満期退学
神社本庁参事(教学研究室長、総務部長)

【専門分野】神道学、神社祭祀、戦後神道史

【最近5年間の主な研究業績等】 [平成22～26年度] (10点まで)					
種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または 該当ページ	発行年月
論文	単	「幣帛と祓えの料としてのヌサ」	『悠久』133号 鶴岡八幡宮	全12p	平25. 10
論文	単	「三島由紀夫と戦後神道」	『國學院雑誌』114巻5号 國學院大學	全17p	平25. 5
著書	共	『遷宮をめぐる歴史 全六十二回の伊勢神宮式年遷宮を語る』	明成社	全168p	平24. 11
著書	単	『知識ゼロからの伊勢神宮』	幻冬舎	全173p	平24. 1
編著	共	『新神社祭式行事作法教本』	戎光祥出版	全301p	平23. 2

【平成21年度以前の主な研究業績等】 (5点まで)					
種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または 該当ページ	発行年月
論文	単	「仙台東照宮の勧請—仙台藩の神社政策—」	『國學院大學伝統文化リサーチセンター研究紀要』第2号 國學院大學研究推進機構伝統文化リサーチセンター	全10p	平22. 3
論文	単	「仙台藩と神社 —伊達政宗の神社政策—」	『國學院大學伝統文化リサーチセンター研究紀要』第1号 國學院大學研究開発推進機構伝統文化リサーチセンター	全12p	平21. 3
論文	単	「神社本庁設立の原点への一考察」	神社本庁教学研究所紀要 12号 神社本庁教学研究所	全23p	平19. 3
論文	単	「「新日本建設に関する詔書」考」	『國學院雑誌』第107巻第1号 國學院大學	pp.1-16	平18. 1
論文	単	「折口信夫の戦後神道論」	『國學院雑誌』第87巻第11号 國學院大學	pp.409-425	昭61. 11

【所属学会】古事記学会、神道宗教学会

【最近5年間の学会等および社会における主な活動】

神社本庁教学委員(平17. 7～現在)、神社本庁祭式講師(平22. 7～現在)

【教育活動の自己評価】

神道学専攻科の祭祀演習Ⅰ・Ⅱ及び学部内の神社祭式概論を中心に担当しているため、國學院大學祭式教室の伝統を踏まえて沼部春友先生と共編著にて『新神社祭式行事作法教本』(平成23年)を出版した。多くの写真を活用して正しく美しい作法が身につく様工夫した。又、祭式行事については、学生の予復習の利便性を考慮して、各行事のビデオを作成(平成25年)し、K-SMAPY上に公開した。祭式作法の修得は、神職を目指す学生にとり不可欠の教科であり、神職としての自覚や精神性を深める機会であるので訓育に重点を置くようにしている。神道学演習では、一人一人が問題意識を持てるよう分担発表を重視して授業を運営している。

【研究活動の自己評価】

平成25年は第62回神宮式年遷宮が行われたので、これの啓蒙に資するため『遷宮をめぐる歴史』(明成社)及び『知識ゼロからの伊勢神宮』(幻冬舎)を出版した。また、戦後神道史に関して『三島由紀夫と戦後神道』を執筆し、GHQの神道政策とその影響について考察した。今後は神社本庁創立史や占領下のGHQの神道政策の実態について調査研究してゆきたい、と考えている。

人 間 開 発 学 部

【初等教育学科】

長 田 恵 理 講 師 ……	195
加 藤 季 夫 教 授 ……	196
近 藤 良 彦 教 授 ……	197
坂 本 正 徳 教 授 ……	198
猿 田 祐 嗣 教 授 ……	199
柴 崎 和 夫 教 授 ……	200
柴 田 保 之 教 授 ……	201
高 山 真 琴 准 教 授 ……	202
滝 井 章 教 授 ……	203
田 沼 茂 紀 教 授 ……	204
寺 本 貴 啓 准 教 授 ……	205
成 田 信 子 教 授 ……	206
藤 井 喜 一 教 授 ……	207
宮 川 八 岐 教 授 ……	208
安 野 功 教 授 ……	209
渡 邊 雅 俊 准 教 授 ……	210

【子ども支援学科】

池 田 行 伸 教 授 ……	224
石 川 清 明 准 教 授 ……	225
神 長 美 津 子 教 授 ……	226
笹 田 弥 生 准 教 授 ……	227
新 富 康 央 教 授 ……	228
筒 石 賢 昭 教 授 ……	229
夏 秋 英 房 教 授 ……	230
野 本 茂 夫 准 教 授 ……	231
廣 井 雄 一 助 教 ……	232
山 瀬 範 子 講 師 ……	233
結 城 孝 治 准 教 授 ……	234
吉 永 安 里 助 教 ……	235

【健康体育学科】

伊 藤 英 之 助 教 授 ……	211
上 口 孝 文 教 授 ……	212
植 原 吉 朗 教 授 ……	213
太 田 直 之 准 教 授 ……	214
大 森 俊 夫 教 授 ……	215
川 口 愛 子 准 教 授 ……	216
一 正 孝 教 授 ……	217
林 貢 一 郎 准 教 授 ……	218
原 英 喜 教 授 ……	219
藤 田 和 也 教 授 ……	220
藤 田 大 誠 准 教 授 ……	221
村 上 佳 司 教 授 ……	222
山 田 佳 弘 教 授 ……	223

【職・氏名】講師 長田 恵理 OSADA Eri

【学 位】修士(言語学)

【本学就任】平成25年

【略 歴】大阪外国語大学外国語学部イタリア語科卒業
上智大学大学院外国語学研究科言語学専攻 博士後期課程単位取得退学
神田外語大学児童英語教育研究センター(専任)

【専門分野】早期英語教育・外国語活動

【最近5年間の主な研究業績等】 [平成22～26年度] (10点まで)

種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または 該当ページ	発行年月
著書	共	『コミュニケーションな英語教育を考える—日本の教育現場に役立つ理論と実践』	アルク	全199p中 pp.30-33	平26. 3
論文	単	Education Major Students and English Major Students: Differences and Similarities in their Perceptions of English Language Activities in the Elementary Classroom	『國學院大學人間開発学研究』第5号 國學院大學人間開発学会	pp.27-42	平26. 2
論文	単	「小学校教員が望むALTの役割に関する一考察: 小学校外国語活動における円滑なティームティーチングを目指して」	『上智大学言語学会会報』第28号 上智大学言語学会	pp.1-16	平26. 1
論文	共	”Exploring Taiwanese primary English education: Teachers’ concerns and students’ perceptions.”	JALT2012 Conference Proceedings. JALT	pp.55-64	平25. 5
論文	共	「児童英語教員養成課程履修者の教師認知の考察から得られる指導者養成プログラム改善への示	KATE Journal Vol. 27 関東甲信越英語教育学会	pp.85-98	平25. 3
論文	共	「小学校5, 6年生の語彙知識: 音声, 意味, 文字の結びつきに関して」	JES Journal Vol.12 小学校英語教育学会	pp.90-101	平24. 3
学会発表等	単	Effects of reflective learning in university EFL classes	IATEFL 46th Annual Conference Glasgow 2012 (International Association of Teachers of English as a Foreign Language) 於: Glasgow, Scotland		平24. 3
学会発表等	共	How Teachers scaffold Children’s English Learning	全国語学教育学会 (JALT) 第37回大会 於: 東京		平23. 11
学会発表等	共	「英語活動における教師の発問—学習者の応答と教師のサポート—」	The 10th annual JALT Pan-SIG conference 2011 於: 信州大学		平23. 5
論文	単	Teachers’ Use of L1 in Elementary School EFL Classes	Scientific Approaches to Language No. 10 神田外語大学CLS	pp.105-117	平23. 3

【平成21年度以前の主な研究業績等】 (5点まで)

種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または 該当ページ	発行年月
学会発表等	単	The Roles of Assistant Language Teachers in Elementary School EFL context	American Association of Applied Linguistics (AAAL) 於: Atlanta, Georgia		平22. 3
学会発表等	単	Teachers’ use of L1 in primary school EFL classes	IATEFL 43rd Annual Conference Cardiff 2009(International Association of Teachers of English as a Foreign Language) 於: Cardiff, Wales		平21. 4
論文	単	「担任教師と英語専任講師のギャップをどう埋めるか」	『ARCLE紀要』第3号 ベネッセ	pp.64-73	平21. 3
学会発表等	単	「アンケート調査から見える小学校英語活動の実態」	小学校英語教育学会 (JES) 第8回福島大会		平20. 7
論文	単	Examining the characteristics of primary school EFL classes	JALT Conference Proceedings 全国語学教育学会 (JALT)	pp.400-408	平20. 5

【所属学会】 大学英語教育学会、関東甲信越英語教育学会、小学校英語教育学会、日本児童英語教育学会、全国語学教育学会、TESOL、IATEFL

【最近5年間の学会等および社会における主な活動】

浦安市教育委員会主催 小学校外国語活動実践セミナー講師(平23. 6)、江戸川区外国語活動研修講師(平23. 10、平23. 11)、小学校英語教育学会千葉大会実行委員(平23. 6～平24. 7)、浦安市教育委員会主催 小学校外国語活動実践セミナー講師(平24. 8)、栃木県大田原市市内英語教育担当教員等研修会(平25. 6)、小学校英語教育セミナー講演講師(平25. 8)
大学英語教育学会関東支部企画委員(平25. 10～現在)

【教育活動の自己評価】

初等教育学科1年生の必修科目である『児童英語基礎指導論』を担当し、現在、小学校5, 6年生で必修となっている外国語活動についての基礎知識を学生に身につけてもらうとともに、講義科目ではあるが、歌やチャンツ、アクティビティを紹介し、実際に体験してもらうようにした。また、現在の大学生は実際に経験したことのない「外国語活動」であるため、複数の授業ビデオを視聴させ、イメージをつかませた。選択科目である『外国語活動指導法』においては、より多くの活動内容を紹介し、それらを参考にして学生自ら活動案・授業案・教材を作成、模擬授業を実施する場を設けたり、小学校で行われる公開授業に希望者を引率したりした。課外活動では、近隣小学校等で読み聞かせを行っている『絵本キャラバン』の支援をしており、今後、英語絵本の読み聞かせ指導も行う予定である。

【研究活動の自己評価】

平成23年度～25年度の3年間に、「小学校外国語活動における児童のコミュニケーション能力向上と教師の意思決定プロセス」(基盤研究(C))の研究代表者として、小学校外国語(英語)活動における教室談話や(教員養成課程にいる学生も含めた)教師認知についての研究を行った。この教師認知研究から得られた知見を教員養成学部で活かし、平成26年度は学内の特別推進研究助成を受け、「小学校教員養成課程における、異文化理解力を育てる英語指導教員養成プログラム開発」のための予備調査を進行中である。

【職・氏名】教授 加藤 季夫 KATO Sueo
 【学 位】理学博士(昭和56年3月 東京都立大学 理博第408号)
 【本学就任】昭和61年
 【略 歴】東京教育大学理学部生物学科卒業
 東京都立大学理学研究科生物学専攻博士課程修了
 筑波大学研究協力部準研究員(生物科学系担当)
 【専門分野】生物学

【最近5年間の主な研究業績等】 [平成22～26年度] (10点まで)					
種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または 該当ページ	発行年月
論文	単	「タマミジンコに摂食される植物プランクトン」	『國學院大學人間開発学研究』第5号 國學院大學人間開発学会	全4p	平26. 2
論文	単	「植物プランクトンの簡易培養液」	『國學院大學人間開発学研究』第4号 國學院大學人間開発学会	全5p	平25. 2
論文	単	「水田におけるアオミドロとホシミドロの分布を決める一要因」	『國學院大學人間開発学研究』3号 國學院大學人間開発学会	全6p	平24. 2
論文	単	「発芽実験への脱酸素剤の導入」	『國學院大學 人間開発研究』第2号 國學院大學人間開発学会	全4p	平23. 2

【平成21年度以前の主な研究業績等】 (5点まで)					
種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または 該当ページ	発行年月
論文	単	「日本の汽水産ユーグレナ属の分類学的研究」	『植物研究雑誌』83巻4号 津村研究所	全5p	平20. 8
論文	単	「棚田の糸状緑藻の生活史戦略」	『國學院雑誌』第109巻第4号 國學院大學	全12p	平20. 4
論文	共	「いくつかのユーグレナによる硝酸態窒素の利用」	『藻類』50巻 日本藻類学会	pp.79-82	平14. 6
特許	共	「ユーグレナとその深層水による培養方法」(公開番号 特開2001-190271)			平13. 7
著書	共	『日本淡水動物プランクトン検索図説』改訂新版	東海大学出版会	全551p中 pp.394-429	平12. 3

【所属学会】日本珪藻学会、日本藻類学会、日本棚田学会

【最近5年間の学会等および社会における主な活動】

教員免許状更新講習講師(小学校理科)(平23. 8)、神奈川県生命・地球・エネルギー教育推進事業実施者(平25. 5～現在)

【教育活動の自己評価】

人間開発学部の卒論生に対し、早淵川の生物・水質分析、ゴーヤ等における緑のカーテン、ミツバチが運ぶ花粉の分析等、生物・環境関係の指導を続けている。また、理科実験の授業では、学生が小学校教員になった時にすぐ利用できる内容を選び、実施している。さらに、系列の高校では環境・生物環境の出張授業を行い、生徒の学習意欲を高めることに努めている。

【研究活動の自己評価】

最近は理科教育に関係する実験を行い、その論文を発表してきたが、以前から研究してきたユーグレナの分類学的研究は不十分としか言えない状況にある。今後はユーグレナの分類学的研究にシフトし、論文を発表していくつもりである。

【職・氏名】教授 近藤 良彦 KONDO Yoshihiko
 【学 位】理学博士(平成3年3月 名古屋大学 理博第618号)
 【本学就任】平成8年
 【略 歴】高知大学理学部物理学卒業
 高知大学大学院理学研究科物理学専攻修士課程修了
 名古屋大学大学院理学研究科物理学専攻博士課程修了
 鈴鹿医療科学技術大学医用工学部医用情報工学科助手
 【専門分野】物理学、理科教育

【最近5年間の主な研究業績等】 [平成22～26年度] (10点まで)					
種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または該当ページ	発行年月
論文	共	「授業改善のための情報処理科目におけるアンケート調査法」	『國學院大學人間開発学研究』第5号 國學院大學人間開発学会	pp.119-133	平26. 2
論文	単	「QCD和則における1重項バリオンの一考察」	『國學院大學人間開発学研究』第5号 國學院大學人間開発学会	pp.5-16	平26. 2
論文	単	「電気の流れと力をイメージしよう ―電流と電圧をイメージする効果―」	『國學院大學人間開発学研究』第4号 國學院大學人間開発学会	pp.19-30	平25. 2
著書	共	『わかりやすいVisual Basicグラフィックとカオスシミュレーション』	ムイスリ出版	全151p	平25. 2
著書	共	『Office2010によるコンピューター活用入門』	ムイスリ出版	全151p	平24. 3
論文	単	「情報処理教育における対話方式導入の効果」	『國學院大學 教育開発推進機構紀要』第3号 國學院大學教育開発推進機構	pp.23-36	平24. 3
論文	単	「電圧を通して電池の直列つなぎと並列つなぎを理解しよう」	『國學院大學 人間開発学研究』第3号 國學院大學人間開発学会	pp.7-24	平24. 2
論文	単	「実験用てこを利用した力のベクトルの授業に関する一考察」	『國學院大學 人間開発学研究』第2号 國學院大學人間開発学会	pp.24-38	平23. 2

【平成21年度以前の主な研究業績等】 (5点まで)					
種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または該当ページ	発行年月
論文	共	K ⁻ pp bound states from Skyrmions	Physical Review, C 77	p055202-1 ~11	平20. 3
論文	共	Positive and negative-parity flavor-octet baryons in coupled QCD sum rules	Physical Review, D75	p034010-1 ~7	平19. 2
論文	共	QCD Sum Rules for Hyperon-Nucleon Interactions	Physical Review, C69	p055201-1 ~10	平16. 5
論文	共	New Approach to Axial Coupling Constants in the QCD Sum Rule	Physical Review Letters, 84	pp.2326- 2329	平12. 3
論文	共	Nucleon-Nucleon Scattering Lengths in QCD Sum Rules	Physical Review Letters,71	pp.2855- 2858	平5. 11

【所属学会】日本物理学会

【最近5年間の学会等および社会における主な活動】

横浜青葉消防団団員(平18. 4～現在)、生命・地球・エネルギー教育推進事業実行委員会委員長(平25. 4～現在)

【教育活動の自己評価】

自然科学をテーマとする自然の見方03・04と人間と自然003・004の授業において講義ノートを学生向けに作り直して電子化した。この講義ノートは学修支援システム(K-SMAPY)を通して受講生に公開している。同様に、学修支援システムの電子掲示板を利用して双方向型授業を自然の見方03・04の授業で試験的に試みた。これをコンピュータ技術演習の授業で実施してノウハウを蓄積し、物理学概説の授業では本格的に実施している。それに加えて物理学概説では、パワーポイントのスライドに沿ったサブノートを配布して進めている。これによりノートテイクに気を取られなくなり授業に集中しやすくなった。さらに、WEB上で公開することにより授業の予習復習に役立てられるようにしている。物理学概説の授業では実験も取り入れているため、サブノートにはその手順も収められている。さらに、コンピュータ技術演習の教科書として、活用入門用の「Office2010によるコンピューター活用入門」とシミュレーション用の「わかりやすいVisual Basicグラフィックとカオスシミュレーション」などを作成した。また、理科実験・観察基礎論では手引書を作成した。この手引書に沿って行えば実験ができるように構成し、確認のための練習問題も収録して理解が進むように工夫している。平成21年9月に初版を作成し、毎年前年の授業実績を踏まえて改定している。

【研究活動の自己評価】

物理に関する研究では量子色力学(QCD)を基に基本粒子の研究を進めている。最近ではQCDを基に分散関係を利用して1重項バリオンのQCD和則を導出して、パリティが正と負の状態を調べて質量を実験結果と比較分析した。正パリティの粒子は未発見であり負パリティの粒子は $\Lambda(1800)$ が候補となることを見出し、 $\Lambda(1405)$ は1重項バリオンではなくエキゾチックな粒子である可能性を指摘した。理科教育に関する研究では、力のベクトルの合成と分解をテーマにした授業を仮説実験の手法を用いて構成した。この授業のアンケート分析から、驚きのような情緒的反応が学習をより促進させる可能性を見出した。さらに、電流電圧の概念をイメージできるような教授法を考案した。この教授では電池の直列つなぎと並列つなぎの実験結果を視覚的なモデルで理解できるように構成した。この比喩的な説明は思考力・判断力・表現力を向上させ、抽象化を促進させることがアンケート分析から得られた。同時に、比喩的な表現法の有用性に加えその限界や問題点も明らかにした。

【職・氏名】教授 坂本正徳 SAKAMOTO Masanori

【学 位】博士(理学)(平成5年6月 大阪市立大学 第2796号)

【本学就任】平成6年

【略 歴】大阪市立大学理学部地学科卒業

大阪市立大学大学院理学研究科地質学専攻後期博士課程単位取得満期退学

【専門分野】情報地質学

【受賞歴等】資源・素材学会探査工学部門委員会奨励賞(平6. 10)

【最近5年間の主な研究業績等】 [平成22～26年度] (10点まで)					
種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または該当ページ	発行年月
著書	共	『わかりやすいVisual Basicグラフィックとカオスシミュレーション』	ムイスリ出版	全151p	平25. 2
論文	共	「Terramod-BS:BS-Horizonを組み込んだ地層境界面推定・表示Visual Basicプログラム」	『情報地質』 Vol.23, No.4 日本情報地質学会	pp.169-178	平24. 12
著書	共	『Office2010によるコンピュータ活用入門』	ムイスリ出版	全160p	平24. 3
論文	単	「コンピュータ技術演習(活用入門)」の10年と情報基礎教育の展望」	『人間開発学研究』 3 國學院大學人間開発学会	pp.25-35	平24. 2
学会発表等	共	「Terramod-BS:曲面推定プログラムBS-Horizonを組み込んだ地層面推定ソフトウェア」	『情報地質』Vol.21, No.2 日本情報地質学会	pp.88-89	平22. 6

【平成21年度以前の主な研究業績等】 (5点まで)					
種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または該当ページ	発行年月
調査・研究報告等	共	「K-SMAPYにおけるフォーラムの投稿状況の変化と要因ー自然の見方03と04を例としてー」	『人間開発学研究』 1 國學院大學人間開発学会	pp.85-99	平22. 2
著書	共	『Office2007によるコンピュータ活用入門』	ムイスリ出版	全160p	平21. 4
著書	共	「Visual BasicグラフィックスとカオスシミュレーションーVB2005, VB2008対応ー」	ムイスリ出版	全160p	平20. 3
学会発表等	単	「Terramod2005の計算処理の拡張とその表現」	『日本地質学会第114年学術大会講演要旨』 日本地質学会	p307	平19. 9
学会発表等	単	「Visual Basic 2005 Express EditionによるTerramod2005の開発」	『情報地質』 Vol.17, No.2 日本情報地質学会	pp.136-137	平18. 6

【所属学会】日本情報地質学会、日本地質学会、International Association Mathematical Geology

【最近5年間の学会等および社会における主な活動】

日本情報地質学会 評議員(平13～現在)

【教育活動の自己評価】

全学的には、コンピュータ実習の教育に携わっている。基礎的な入門授業から応用的なメディアを利用した発信方法、プログラミングなど、多岐にわたっている。特に、入門教育「コンピュータ技術演習(活用入門)」では科目の代表として、同科目を担当されている先生方の意見を伺いつつ、自身も授業での指導を通して学生のリテラシー習熟度の把握および授業内容の向上を継続的に検討している。

人間開発学部の中では、地質学分野の実習を担当している。研究成果である地質図の3次元可視化プログラムを用いて、学生の理解を助けるなどの工夫を行っている。

【研究活動の自己評価】

コンピュータを用いた地質図の作成に関するアルゴリズムの分析やソフトウェアの構築を研究対象としている。近年はその研究成果を授業に活用して学生の反応を分析することによって、3次元に可視化された地質図の教育現場利用に関する研究も行なっている。

さらに、日本情報地質学会の評議員となり、広報委員長として学会ホームページの更新、行事委員として講演会などの運営に携わっている。

【職・氏名】教授 猿田 祐嗣 SARUTA Yuji
 【学 位】博士(教育学)(平成22年3月 広島大学 乙第4100号)
 【本学就任】平成25年
 【略 歴】広島大学理学部物性学科卒業
 広島大学大学院教育学研究科教科教育学専攻(理科)博士課程後期第2学年修了
 国立教育政策研究所教育課程研究センター総合研究官(命・基礎研究部副部長)
 【専門分野】科学教育、教科教育学(理科)、非金属物性論
 【受賞歴等】日本理科教育学会、学会賞(平成26年)

【最近5年間の主な研究業績等】 [平成22～26年度] (10点まで)

種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または 該当ページ	発行年月
論文	単	「小学校教員志望学生の化学分野の実験・観察の経験や自信について」	『國學院大學教育開発推進機構紀要』第5号 國學院大學教育開発推進機構	pp.81-87	平26. 3
編著	共	『TIMSS2011理科教育の国際比較－国際数学・理科教育動向調査の2011年調査報告書－』	明石書店	全308p	平25. 8
学会 発表等	共	Differences in types of questioning terms by inquiry stage in the science textbooks of lower secondary school in Japan	44th Annual Australasian Science Education Research Association Conference (ASERA2013)		平25. 7
著書	共	『新しい学びを拓く 理科 授業の理論と実践 中学校編』	ミネルヴァ書房	全253p中 pp.198-205	平25. 2
論文	共	「理科教員養成のコア・カリキュラムのあり方に関する一考察－教職専門と教科専門の架橋を中心に－」	『日本教科教育学会誌』 第35巻, 第2号	pp.11-18	平24. 9
著書	単	『論理的思考に基づいた科学的表現力に関する研究－TIMSS及びPISA調査の分析を中心に－』	東洋館出版社	全214p	平24. 2
編著	共	『思考と表現を一体化させる理科授業』	東洋館出版社	全218p	平23. 12
論文	単	「ESD教材としてのマイクロスケール化学実験」	『日本理科教育学会関東支部大会発表論文集』	p.52	平23. 12
著書	共	『新しい学びを拓く 理科 授業の理論と実践 小学校編』	ミネルヴァ書房	全229p中 pp.34-40	平23. 4
著書	共	『生きるための知識と技能4 OECD生徒の学習到達度調査(PISA)2009年調査国際結果報告書』	明石書店	全320p中 pp.148-184	平22. 12

【平成21年度以前の主な研究業績等】 (5点まで)

種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または 該当ページ	発行年月
著書	共	Japan	TIMSS 2007 Encyclopedia: A Guide to Mathematics and Science Education Around the World Volume 1 Lynch School of Education, Boston College	全722p中 pp.297-307	平20. 12
論文	単	「わが国の理科の教育課程の特徴と科学的リテラシー」	『国立教育政策研究所紀要』 第137集	pp.27-45	平20. 3
論文	単	「理科の学力とそれに影響を与える諸因子の経年変化」	『国立教育政策研究所紀要』 第136集	pp.19-42	平19. 3
翻訳・ 翻刻書	共	「キー・コンピテンシー 国際標準の学力をめざして」	明石書店	全248p中 pp.151-173	平18. 5
論文	共	Static and Kinetic Studies of Adsorption-Desorption of Metal Ions on a γ -Al ₂ O ₃ Surface 1. Static Study of Adsorption-Desorption	The Journal of Physical Chemistry Vol.88 No.1	pp.23-27	昭59. 1

【所属学会】日本科学教育学会、日本理科教育学会、日本化学会、日本教科教育学会

【最近5年間の学会等および社会における主な活動】

日本科学教育学会 理事(平22.7～平26.6)・代議員(平26. 7～現在)、日本理科教育学会 理事(平24.4～平26.3)、文部科学省所管独立行政法人科学技術振興機構(JST)理科支援員等配置事業推進委員会委員(平20.2～平25.3)、文部科学省 全国学力・学習状況調査教科別検討チーム(理科)委員(平22.4～平25.3)、スーパーサイエンスハイスクール(SSH)運営指導委員会委員(岡山県立倉敷天城高等学校)(平17.4～現在)、経済開発協力機構(OECD)生徒の学習到達度調査(PISA)調査班・科学的リテラシー 班主任(平21.4～平25.3)、国際教育到達度評価学会(IEA)国際数学・理科教育動向調査(TIMSS)国内調査代表者(平22.4～平25.3)、国立教育政策研究所 学習指導要領実施状況調査(小学校理科)結果分析委員(平25.4～現在)

【教育活動の自己評価】

「教育実習」や「教職実践演習」等の教職科目を担当し、国立教育政策研究所時代に作成した小・中学校の理科授業ビデオ89本を用い、授業の導入・展開・まとめ等の実際を観察させることで、授業のあり方を実践的かつ具体的に分かりやすく伝えている。また、学力の国際比較調査であるTIMSS(国際数学・理科教育動向調査)やPISA(生徒の学習到達度調査)の国内調査代表者・責任者を歴任した経験を生かし、全国の教育関係者(教育委員会指導主事、小・中・高・大学教員、大学院生、大学生)や教科書・教材作成者に対して、調査結果の詳細や我が国の教育政策への影響だけでなく、データ処理・分析の手法を含めて、大学の授業や研修講座・研究会・学会シンポジウム・講演会を通して普及させる活動を行っている。

【研究活動の自己評価】

過去に実施した科学研究費補助金・基金による研究は、76件(研究代表者:17件, 研究分担者・連携研究者:59件)である。現在は、研究代表者として「国際比較の観点からみた論理的思考力や科学的表現力に関する分析的研究」(平成25～28年度基盤研究B, 課題番号25282047)を推進し、我が国の児童生徒の論理的思考に基づいた科学的表現力の実態と課題を明らかにし、カリキュラムや指導法の改善に生かす知見を得ようとしている。また、国際共同研究のTIMSSやPISAに国内専門委員として携わり、文部科学省と国立教育政策研究所に協力してプロジェクトを推進し、国の教育政策に資する視点からデータの解釈・分析を行っている。

【職・氏名】教授 **柴 崎 和 夫** SHIBASAKI Kazuo
 【学 位】理学博士(昭和56年3月 東京大学 博理第1277号)
 【本学就任】昭和60年
 【略 歴】東京大学理学部物理学科卒業
 東京大学大学院理学系研究科地球物理学専攻博士課程修了(理学博士)
 国立極地研究所文部技官(第24次南極地域観測隊越冬隊員)
 【専門分野】地球大気物理・化学

【最近5年間の主な研究業績等】 [平成22～26年度] (10点まで)					
種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または該当ページ	発行年月
解説・解題等	共	「国際オゾンシンポジウム2012報告」	『天気』第60巻7号 日本気象学会	pp.19-20	平25. 3
調査・研究報告等	共	「『たまプラーザ宇宙の学校2012』報告－学生の動きを中心に」	『國學院大學人間開発学研究』第4号 國學院大學人間開発学会	pp.111-121	平25. 2
調査・研究報告等	共	「初等教育学科新入生の地球温暖化に対する知識と理解－アンケート結果から」	『國學院大學人間開発学研究』第3号 國學院大學人間開発学会	pp.131-137	平24. 2
調査・研究報告等	共	「『たまプラーザ宇宙の学校2011』を実施して」	『國學院大學人間開発学研究』第3号 國學院大學人間開発学会	pp.83-98	平24. 2
調査・研究報告等	共	「たまプラーザ宇宙の学校を実施して」	『國學院大學人間開発学研究』第2号 國學院大學人間開発学会	pp.83-98	平23. 2

【平成21年度以前の主な研究業績等】 (5点まで)					
種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または該当ページ	発行年月
解説・解題等	共	『衛星からの大気環境監視』	宇宙開発事業団 地球観測利用研究センター	全280p中 22p	平15. 8
論文	共	「宇宙からの地球大気化学観測」	地球環境観測委員会「成層圏・対流圏化学サイエンスチーム」編 (社)資源協会、地球科学技術フォーラム刊	pp.50-62	平8. 3
論文	共	Balloon Measurements of Stratospheric HCl and HF by far Infrared Emission Spectroscopy	Ozone in the Troposphere and Stratosphere (Proceedings of the Quadrennial Ozone Symposium, Charlottesville), ed.R.Hudson, USA:NASA Conf.Pub.3266 International Ozone Commission	pp.831-834	平6. 4
論文	共	Stratospheric Nitrogen Dioxide Observed by Ground-based and Balloon-borne Techniques at Syowa Station (69.0° S, 39.6° E)	Geophysical Research Letters 第13巻 American Geophysical Union	pp.1268-1271	昭61. 12
論文	共	「首都圏近郊における大気NO ₂ 全量の測定」	『天気』第29巻 日本気象学会	pp.721-727	昭57. 7

【所属学会】地球電磁気・地球惑星圏学会、日本気象学会、American Geophysical Union (AGU)、日本地球惑星科学連合

【最近5年間の学会等および社会における主な活動】

埼玉県立浦和高等学校 学校評議員(平19～平25)、大学基準協会大学分科会評価委員(平22～現在)

【教育活動の自己評価】

一方的な講義型の授業にならないように、毎回受講学生にコメントペーパーを書いてもらい、授業の理解度を確認している。同時に、学生が持つ疑問点や理解の間違いに関しては、次回の講義の冒頭で答えたり、訂正したりしている。主題別の講義では、ときに簡単なグループワークを試みている。もう少し、学生に主体的に学修を促すための講義方法がないか、試行錯誤が必要と考えている。

新任教員研修において、「シラバス」の書き方の講師をしている。自らも、学生に誤りなく、授業の内容、到達目標などを伝えるシラバスを心がけている。

【研究活動の自己評価】

初等教育学科の学生達が、地球環境問題に関してどの程度の正確な知識を持っているか、小学校教員を希望する学生にどのような知識、体験が必要か、を調査・分析・実践していきたいと考えているが、ほとんど手つかずの状態である。

【職・氏名】教授 柴田保之 SHIBATA Yasuyuki

【学 位】教育学修士

【本学就任】昭和62年

【略 歴】東京大学教育学部教育心理学卒業

東京大学大学院教育学研究科教育心理学専門課程博士課程単位取得満期退学

【専門分野】重度・重複障害児の教育、知的障害者の社会教育

【最近5年間の主な研究業績等】 [平成22～26年度] (10点まで)					
種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または該当ページ	発行年月
評論・書評等	単	楠原彰著『学ぶ、向き合う、生きる 大学での「学びほぐし」—精神の地動説の方へ』	『國學院雑誌』第115巻第1号 國學院大學	全52p中 pp.26-29	平26. 1
論文	単	『「自閉症」の新しい理解を旨として』	『國學院大學人間開発学研究』第4号 國學院大學人間開発学会	pp.71-84	平25. 2
著書	単	『みんな言葉を持っていた—障害の重い人たちの心の世界—』	オクムラ書店	全215p	平24. 3
論文	単	「秘められた内的言語の表現を旨として ～その方法の発展と対象の広がりへの歩み～」	研究報告書 平成24年3月 公益財団法人重複障害教育研究所	全105p中 pp.93-105	平24. 3
論文	単	「重度・重複障害者のとらえた東日本大震災」	『國學院大學人間開発学研究』第3号 國學院大學人間開発学会	全232p中 pp.53-87	平24. 2
論文	単	「言語の生成に関する知的障害の新しいモデルの構築に向けて」	『國學院大學人間開発学研究』第2号 國學院大學人間開発学会	全230p中 pp.5-23	平23. 2
論文	単	「ちいさいころからはな(したかった)」井上神恵さんの言葉の発見と見えてきた心の世界	重複障害教育研究会第38回全国大会発表論集<第1日目> 財団法人重複障害教育研究所	全50p中 pp.29-38	平22. 8

【平成21年度以前の主な研究業績等】 (5点まで)					
種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または該当ページ	発行年月
論文	単	「ある障害の重い子どもの言葉の世界の発見とその展開—三瓶はるなさんのとの関わり合い—」	『國學院大學人間開発学研究』第1号 國學院大學人間開発学会	全200p中 pp.10-16	平22. 2
論文	単	「一人一人が輝く授業をつくるために」	『肢体不自由教育』第169号 日本肢体不自由教育研究会	全66p中 pp.4-10	平17. 3
論文	単	「重度・重複障害児の空間の構成と学習の過程」	『國學院大學教育学研究室紀要』第37号 國學院大學教育学研究室	全194p中 pp.95-141	平15. 3
論文	単	「「知的障害」という言葉の成立のかげに—ある知的障害者のリーダーの死—」	『國學院雑誌』第102巻第7号 國學院大學	pp.1-12	平13. 7
論文	単	「少年は特異な存在か」	『ひと』	pp.29-36	平9. 10

【所属学会】日本教育心理学会、日本発達心理学会、日本特殊教育学会

【最近5年間の学会等および社会における主な活動】

公益財団法人重複障害教育研究所評議員(平12～現在)

【教育活動の自己評価】

教職課程の専任から人間開発学部の専任になって6年が経過したが、教育や保育の専門家を目指す学生たちに対して、一見周辺の領域に見える障害児の教育に関する講義等を行うことによって、実はそうした教育が教育の原点としての重要な意味を持つことを学生たちに伝えてきた。講義においては、リアリティを大切にするため、当事者のゲストを積極的に招いたり、関わりの現場の映像や生の声等を紹介することを重視し、結果として学生たちには机上の空論に終わらない障害児教育の理解を促すことができた。そこで用いた映像等の教材は、ほとんど自分自身の実践研究の現場で得られたものである。

また、渋谷キャンパスにおける中高の教員養成の経験を生かし、本学部においては、初等教育学科の教員ではあるが、健康体育学科の学生の教育実習に関わる科目を担当し、中高の保健体育の教員養成にも努めてきた。

小中学校の教員免許取得に必要な介護等体験に関しては、その準備のための講義や授業外の事前指導等を担当してきた。

【研究活動の自己評価】

長年にわたって重度重複障害児の教育と知的障害者の社会教育の分野において研究を進めてきたが、この10年あまりの研究の中で、これまで発達の遅れとして理解されてきた知的な障害が、実は、表現のプロセスに関わる障害であって、その内面の認識の世界はけっして遅れているわけではないことを明らかにするとともに、自作のソフトやスイッチによってパソコンでそうした人々の言葉を表現する方法を開発してきた。これは、障害に関する医療や福祉、教育の世界の常識を根本から覆す研究を進めている。一挙に理解を得られているわけではないが、徐々にその考えを社会に浸透させているところである。

【職・氏名】准教授 高山真琴 TAKAYAMA Makoto
 【学 位】芸術学修士
 【本学就任】平成21年
 【略 歴】武蔵野音楽大学大学院音楽研究科器楽専攻修士課程修了
 ドレスデン カール・マリア・フォン・ウェーバー音楽大学留学
 國學院大學幼児教育専門学校 専任教員
 【専門分野】芸術学(演奏表現)・音楽教育

【最近5年間の主な研究業績等】 [平成22～26年度] (10点まで)					
種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または該当ページ	発行年月
学会発表等	単	「子どもの歌の弾き歌いを通しての読譜指導—音楽表現に結びつく読譜についての一考察—」	全国大学音楽教育学会・創立30周年記念大会・第30回全国大会《東京大会》プログラム	2p	平26. 8
論文	単	「教員養成課程の学生に対する読譜の指導について—読譜力を獲得するための実践的手法2—」	『國學院大學 人間開発学研究』第5号 國學院大學人間開発学会	全302p中 pp.17-25	平26. 2
編著	共	『ピアノ曲集Ⅱ 保育者・教諭になるために』	共同音楽出版社	全117p	平25. 10
著書	共	『明日へ歌い継ぐ 日本の子どもの歌 一唱歌童謡140年の歩み』	音楽之友社	全245p中 p74	平25. 5
その他	共	Mube'88 第17回 結成25周年記念コンサート	すみだトリフォニーホール 小ホール		平25. 5
論文	単	「教員養成課程の学生に対する読譜の指導について—読譜力を獲得するための実践的手法1—」	『國學院大學 人間開発学研究』第4号 國學院大學人間開発学会	全197p中 pp.51-59	平25. 2
その他	共	Mube'88 第16回 名曲コンサート2	すみだトリフォニーホール 小ホール		平24. 6
論文	単	「歌唱共通教材簡易伴奏作成の試み—実践的歌唱指導のために—」	『國學院大學 人間開発学研究』第2号 國學院大學人間開発学会	全230p中 pp.39-48	平23. 2
その他	共	山内小学校個別支援学級音楽会「ふゆをたのしく」	横浜市立山内小学校		平23. 2
その他	共	Mube'88 第15回 コンサート「B」	すみだトリフォニーホール 小ホール		平22. 11

【平成21年度以前の主な研究業績等】 (5点まで)					
種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または該当ページ	発行年月
その他	共	Mube'88 第14回 結成20周年コンサート	すみだトリフォニーホール 小ホール		平20. 10
論文	単	「ピアノ学習初期の段階に必要な学びに関する一考察」	『國學院大學幼児教育専門学校紀要』第17輯 國學院大學幼児教育専門学校	pp.15-29	平16. 3
その他	単	「野尻真琴ピアノのタペ」	ルーテル市ヶ谷センター		平5. 3
その他	共	「IDDDR国営ラジオ放送のための録音」	ドレスデン放送局(ドレスデン)		昭61. 1
その他	共	「ウィルヘルム・ヒューブナー生誕70年を祝う演奏会」	クルップ デア インテリゲンツ(ドレスデン)		昭60. 11

【所属学会】日本音楽教育学会、日本保育学会、全国大学音楽教育学会関東地区学会

【最近5年間の学会等および社会における主な活動】

【教育活動の自己評価】

専門教育においては、何れの科目についても「音楽の理解は音楽を以て」を信条に、「音楽を読み解く力」と「音楽を表現する力」の育成をねらいに授業を構成している。『音楽基礎指導法』においては、小学校音楽の表現および鑑賞の活動を体験する中で、教科・音楽の意義と「音楽とはなにか」という根源的問いについて学生の思考を促している。『音楽概説』においては、楽典的な学びを、常に音による体験を以て行えるよう心がけている。『ピアノ実技』においては、楽譜を読み解くことが演奏表現に繋がることを、常に具体的な音を以て学生に伝え、学生の演奏表現力の向上を図っている。学部活性化事業のひとつであるミュージックキャラバン活動においては、子どもたちの音楽体験の担い手となる初等教育や幼児教育に携わる者に必要な音楽力の土台を育むことを念頭に、学生指導にあたっている。

【研究活動の自己評価】

①教員養成課程の学生の読譜力を育成するための具体的なトレーニング方法について、継続研究中である。現在までに考案したトレーニングを授業内で実践しながら、改善点や新たなトレーニングについて研究を進めている。②自身のピアノ演奏表現については、ドイツ語圏の作曲家の作品を中心に、それぞれの作品の時代及び作曲家個人の様式を踏まえた演奏表現について研究している。現在の研究課題は「シューベルトの連弾曲について」である。平成27年6月に開催するコンサートにおいて、連弾曲《幻想曲 へ短調 Op.103 D940》を演奏として表現する。

【職・氏名】教授 滝井 章 TAKII Akira
 【学 位】教育学士
 【本学就任】平成21年
 【略 歴】都留文科大学文学部初等教育学科卒業
 東京都世田谷区立八幡小学校 教諭
 東京都府中市立小柳小学校 教諭
 【専門分野】教科教育学(算数)・数学

【最近5年間の主な研究業績等】 [平成22～26年度] (10点まで)					
種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または該当ページ	発行年月
その他	単	講演演題「算数授業を通して育てる力」	東京都教育委員会研修会「算数」		平25. 7
その他	単	研究発表会記念講演「算数授業を通して育てる力」	練馬区立練馬東小学校		平25. 1
その他	単	研究発表会記念講演「算数授業を通して育てる力」	江東区立第二辰巳小学校		平24. 11
その他	単	講演演題「算数授業を通して育てる力」	東京都教育委員会研修会「算数」		平24. 7
その他	単	講演演題「新学習指導要領の趣旨を生かした算数授業」	東京都教育委員会研修会「算数」		平23. 7
その他	単	講演演題「新学習指導要領の趣旨を生かした算数授業」	横須賀市教育研究所		平22. 8
その他	単	講演演題「新学習指導要領の趣旨を生かした算数授業」	川崎市教育研究所		平22. 8
その他	単	講演演題「新学習指導要領の趣旨を生かした算数授業」	東京都教育委員会研修会「算数」		平22. 7
その他	単	十年経験者研修(大学講座)講師	山梨県総合教育センター		平22. 7
著書	単	『考える力をのばすオープンエンドの算数授業』	日本標準	全199p	平22. 4

【平成21年度以前の主な研究業績等】 (5点まで)					
種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または該当ページ	発行年月
その他	単	師範授業、講演演題「新学習指導要領の趣旨を生かした算数授業」	神奈川県小学校教育研究会算数部会		平22. 3
その他	単	研究発表会講演 演題「基礎・基本の確かな定着とその活用を目指す算数科指導法の在り方」	茨城県常陸太田市立佐竹小学校		平21. 10
編著	共	『小学校新学習指導要領 ポイントと授業づくり 算数』	東洋館出版社	全274p	平20. 11
編著	共	『算数の力を育てる授業』	東洋館出版社	全171p	平20. 8
論文	共	「算数・数学の内容とその配列「戦後の教育課程と児童・生徒の達成度」I」	科学研究費補助金	全199p	平17. 3

【所属学会】日本数学教育学会

【最近5年間の学会等および社会における主な活動】

日本数学教育学会教育課程特別委員会委員(平18. 2～現在)、国際数学・理科教育動向調査国内委員(平19. 9～現在)、文部科学省「評価基準、評価方法等の工夫改善に関する調査研究」協力者(平21. 10～現在)、教科書・教材のデジタル化に関する調査研究委員会算数・数学部会(平22. 9～現在)

【教育活動の自己評価】

①小学校教員を志望する学生が、学校現場に立つときに求められる資質・能力の基礎となる力をもてるよう、研究授業を参観する機会、小学校現場の先生方の研究会に参加する機会、さらには他大学の教育学部の学生とディスカッションする機会などを設定する取り組みを行っている。
 ②小学校に勤務しているゼミの卒業生の授業参観などに出向き、ゼミでの指導が有効に作用しているかを検証することにより、ゼミ生への指導のあり方を見直し、指導にあたっている。
 ③ゼミ生が飛び込む小学校現場の学校教育力を高めるよう、教育委員会の講演、学校現場の研究会の講師などを引き受け、貢献している。

【研究活動の自己評価】

今後の小学校教育現場で取り組むことになると予想されるデジタル教科書、教材について、諸外国での取り組みを調査したり、国内で取り組んでいる学校の取り組みを調査したりすることにより、その有効性、留意点を明らかにし、小学校現場における取り組みへの具体的方向性を示す研究活動を行っている。

【職・氏名】教授 田沼茂紀 TANUMA Shigeki

【学 位】修士(教育学)

【本学就任】平成21年

【略 歴】上越教育大学大学院学校教育研究科修士課程修了

川崎市立学校教諭

高知大学教育学部助教授、同学部教授、教育学部附属教育実践総合センター長

【専門分野】道徳教育・教育カリキュラム論

【受賞歴等】日本道徳教育学会賞優秀賞(平成8年)、日本教育研究連合会教育研究賞(平成19年)

【最近5年間の主な研究業績等】 [平成22～26年度] (10点まで)

種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または該当ページ	発行年月
編著	共	『やってみよう！新しい道徳授業～教科化時代の『私たちの道徳』の活用例～』	学研	全120p	平26. 7
論文	単	「子どもの自己評価を基盤にした道徳授業評価についての一考察」	日本道徳教育学会神奈川支部研究紀要『道徳』第1号	全69p中 pp.6-13	平26. 3
論文	単	「PBL方式による教員養成支援プログラムの実践とその課題」	日本道徳教育学会神奈川支部『國學院大學人間開発学研究』第5号	全305p中 pp.19-35	平26. 2
論文	共	「教育実習と関連科目の有機的運用～教職関連科目で育つ資質能力についてのアンケート調査分析から～」	『國學院大學人間開発学研究』第5号 國學院大學人間開発学会	全304p中 pp.161-179	平26. 2
著書	単	『心の教育と特別活動』	北樹出版	全192p	平25. 4
論文	単	「国際理解教育としての道徳教育展開の視点」	月刊『道徳と特別活動』 Vol.29 NO.9 文溪堂	全64p中 pp.10-11	平24. 12
著書	共	『道徳教育への招待』	ミネルヴァ書房	全210p中 pp.88-108	平24. 10
著書	単	『豊かな学びを育む教育課程の理論と方法』	北樹出版	全223p	平24. 10
著書	共	『戦後道徳教育を築いた人々と21世紀の課題』	教育出版	全334p中 pp.179-188	平24. 6
著書	単	『人間力を育む道徳教育の理論と方法』	北樹出版	全253p	平23. 4

【平成21年度以前の主な研究業績等】 (5点まで)

種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または該当ページ	発行年月
学会発表等	単	学際領域としての「人間開発学」の定立に向けて	『國學院大學人間開発学研究』第1号(2010.2刊行)に所収 國學院大學人間開発学会第1回大会公開シンポジウム	全116p中 pp.14-20	平21. 11
論文	単	「義務教育段階における生命尊重カリキュラム構想の課題」	高知大学附属教育実践総合センター紀要『教育実践研究』第21号	pp.97-104	平19. 3
著書	単	『再考－田島体験学校～大正末期－昭和初期新教育運動の検証～』	川崎教育文化研究所	全396p	平14. 8
著書	単	『子どもの価値意識を育む』	川崎教育文化研究所	全240p	平11. 3
著書	単	『表現構想論で展開する道徳授業』	川崎教育文化研究所	全244p	平6. 3

【所属学会】日本道徳教育学会、日本教育心理学会、日本道徳教育方法学会、日本学校教育学会、日本カリキュラム学会、日本教師教育学会、日本教育学会

【最近5年間の学会等および社会における主な活動】

横浜市立鴨志田第一小学校町づくり委員(平22～平23. 3)、文部科学省・教員研修センター 近畿ブロック 平成22年度道徳教育指導者養成研修講師(平22)、横浜市立鴨志田第一小学校学校評議員(平24. 4～平25. 3)、全国教育研究組織「みらいの道徳をつくる会」発起人(平23. 5～平25. 8)、日本道徳教育方法学会第18回大会研究発表大会運営委員長(平24. 6)、日本道徳教育学会神奈川支部支部長(平25. 4～現在)、日本道徳教育学会第81回大会運営委員長(平25. 6)、千葉県教育委員会「光り輝く『教育立県ちば』を推進する懇話会委員」(平25. 9～現在)、全国教育研究組織「第2期 みらいの道徳をつくる会」会長(平25. 9～平26. 9)

【教育活動の自己評価】

本学に赴任してから一貫して取り組んできたのは、担当科目授業の充実である。この3年間に担当している以下の科目について講義内容を網羅したテキストを作成した。

①科目「道徳教育の理論と方法」⇒単著『人間力を育む道徳教育の理論と方法』北樹出版社 平成23年 全254ページ

②科目「教育課程論」⇒単著『豊かな学びを育む教育課程の理論と方法』北樹出版社 平成24年 全223ページ

③科目「特別活動の理論と方法」⇒単著『心の教育と特別活動』北樹出版社 平成25年 全192ページ

また、各科目授業において本時のテーマを明示し、論点の明確な授業展開に心がけた。そして、授業末のリアクションペーパーで講義内容理解を確認し、質問も含めて次時で補足するようにした。また、予習・復習を促すことを目的に、次時テーマの予告を必ず行うようにした。

【研究活動の自己評価】

平成24年度には全国学会である日本道徳教育方法学会第18回大会の大会運営委員長として本学たまプラーザキャンパスにて開催した。また、平成25年度は同様に全国学会である日本道徳教育学会第81回大会を大会運営委員長として本学たまプラーザキャンパスにて開催した。

さらに、道徳教育全国研究組織である「みらいの道徳をつくる会」会長として、本学生も巻き込みながら、これからの道徳教育の望ましい在り方について定例研究会や研究大会等を開催してきた。その成果は平成26年7月に学研より『やってみよう！新しい道徳授業』という書籍となって刊行した。同様に、日本道徳教育学会神奈川支部事務局を本学に置き、支部長として首都圏の学会関係者、本学学生を集めて定例学習会、研究総会、研究発表大会の開催、研究紀要『道徳』の刊行等も行ってきた。なお、本年度より科学研究費助成金の採択を受け、全国の道徳教育実践研究家を巻き込んで「道徳授業評価研究会」を立ち上げ、研究課題「道徳「教科化」を視座した授業評価の基礎的研究」の推進に取り組んでいる。

【職・氏名】准教授 寺本貴啓 TERAMOTO Takahiro

【学位】博士(教育学)(平成22年3月 広島大学 第5134号)

【本学就任】平成22年

【略歴】広島大学大学院教育学研究科学習開発専攻博士課程後期修了

熱海市立第一小学校 教諭

熱海市立熱海中学校 教諭

【専門分野】理科教育学、教科教育学、教育方法学

【受賞歴等】第5回「児童教育実践についての研究助成事業」優秀賞(博報財団 平23)

【最近5年間の主な研究業績等】 [平成22～26年度] (10点まで)

種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または該当ページ	発行年月
著書	共	『0歳～12歳児の発達と学び 保幼小の連携と接続に向けて』	北大路書房	全206p中 pp.150-162	平25. 5
調査・研究報告等	共	「理科における「活用する力」の育成」	調査研究シリーズ55 『理科の「活用する力」の育成と評価に関する研究』公益財団法人日本教材文化研究財団	全169p中 pp.9-14	平24. 9
論文	共	「理科における観察・実験結果の考察に関する子どもの学習実態と要因構造の分析—小学生と中学生との比較の視点から—」	『理科教育学研究』 Vol.53 No.1 日本理科教育学会	pp.29-38	平24. 7
著書	共	『言語力の育成を重視したみんながわかる理科教育法』	学校図書	全199p中 pp.9-24, 81-133	平24. 4
論文	共	「生徒の学習に対する必要性の認識を高める指導法に関する研究—高等学校化学における教育実践を通して—」	『臨床教科教育学会誌』 第12巻第1号 臨床教科教育学会	pp.75-83	平24. 4
著書	共	『わかる！小学校理科授業入門講座』	文溪堂	全215p	平24. 1
調査・研究報告等	単	フロントライン教育研究『『ダイナミック・アセスメント』導入の教育的意義～言語活動を重視する個に応じた指導と評価～』	『初等教育資料』 2011年8月号 東洋館出版社	全120p中 pp.82-85	平23. 8
論文	共	「調査レポートの考察を論述する力を育成するための指導法に関する研究—高等学校生物における授業実践を通して—」	『臨床教科教育学会誌』 11-1 臨床教科教育学会	全89p中 pp.31-41	平23. 5
著書	共	『改訂 実践教育評価事典』	文溪堂	全264p中 pp.186-187	平22. 8
著書	共	『「ことば」で伸ばす子どもの学力』	ぎょうせい	全201p中 pp.26-27	平22. 8

【平成21年度以前の主な研究業績等】 (5点まで)

種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または該当ページ	発行年月
論文	単	「授業実践場面におけるダイナミック・アセスメントの効果に関する研究：小学校第6学年「水溶液の性質」における知識再生力、知識表現力の育成について」	『広島大学大学院教育学研究科紀要』, 第一部, 学習開発関連領域) 第58号 広島大学大学院教育学研究科	全173p中 pp.57-64	平21. 12
著書	共	『新理科の考え方と授業展開』	文溪堂	全272p	平21. 10
著書	共	『言語力を育てる授業づくり 小学校』	図書文化社	全236p	平21. 9
著書	共	『学習科学ハンドブック』	培風館	全491p	平21. 7
論文	共	「理科教育におけるダイナミック・アセスメントに関する研究—小学校第6学年「水溶液の性質」単元におけるヒントカードの効果について—」	『日本教科教育学会誌』 第31巻第2号 日本教科教育学会	全92p中 pp.65-74	平20. 9

【所属学会】日本理科教育学会、日本教科教育学会、日本教育心理学会、日本教育工学会、日本科学教育学会、臨床教科教育学会、日本教授学習心理学会

【最近5年間の学会等および社会における主な活動】

世田谷区立深沢小学校 学校運営委員長(平24. 4～現在)、各種理科教育研究会・研修会指導

【教育活動の自己評価】

学部の専門教育では、理科教育法を担当し机上の学習だけではなく、実験等の演習を多く入れることで体験し、実感する授業展開になるように工夫した。また、指導案作成においては、書かせて終わりではなく、一度は赤を入れ修正をさせる活動を入れることで、指導案作成の問題点が明確になると共に個々の間違いに応じた対応をするようにした。授業外活動では、「科学まつり」を運営、近隣の小学生や未就学児、保護者を対象とした実験教室を開催し、近隣に対する社会貢献を絡めた教育活動を実施した就職対策においては、教員採用試験対策の指導はもとより、早い学年からの意識づけを行った。

【研究活動の自己評価】

メイン研究としては、ダイナミック・アセスメントを中心とした教師の指導と評価の関係性に関する研究を続けている。本研究に関連し、平成23年度より、科研費・基盤研究(B)「初等理科教育におけるデジタルペンを導入した言語力育成システムの開発」(研究課題番号:23330266;総額:11440千円)を実施。理科教育を中心にICT機器を活用した指導方法を検証を行った。本研究ではさらに、デジタルペンとタブレットを活用した機器を使ったときの指導法とその効果についても検証を行っている。また、教員養成課程に関する研究としては、教職を志望している学生の理解度とその指導に関する研究、ならびに、学生の教師観に関する研究をおこなった。これらの研究は、教員の育成や指導力の向上に関して意義があると考える。

【職・氏名】教授 成田 信子 NARITA Nobuko

【学 位】修士(人文科学)

【本学就任】平成21年

【略 歴】お茶の水女子大学大学院人文科学研究科日本文学専攻修了

お茶の水女子大学附属小学校 教諭

関西国際大学教育学部教育福祉学科准教授

【専門分野】国語教育

【最近5年間の主な研究業績等】 [平成22～26年度] (10点まで)					
種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または該当ページ	発行年月
論文	単	「教職関連科目で育つ資質能力についてのアンケート調査分析」	平成25年度國學院大學「特色ある教育研究」報告書 國學院大學人間開発学部	全49p	平26. 3
論文	共	「教育実習と関連科目の有機的運用 I—教職関連科目で育つ資質能力についてのアンケート調査分析から—」	『國學院大學人間開発学研究』第5号 國學院大學人間開発学会	全19p	平26. 2
学会発表等	単	「教室で読むということ—『ちいちゃんのかげおくり』『ちいちゃんは幸せ』をめぐって—」	日本文学協会国語教育部会夏期研究会 集會 日本文学協会		平25. 8
論文	単	「初等科教育法(国語)」における模擬授業に関する考察—学生の振り返りに着目して—	『國學院大學人間開発学研究』第4号 國學院大學人間開発学会	全12p	平25. 2
調査・研究報告等	単	「認め合い、響き合う授業」	『実践国語研究』2012年5月 明治図書	全2p	平24. 5
その他	単	「学びの場をひらく「絵本キャラバン」」	『國學院大學人間開発学研究』第3号 國學院大學人間開発学会	全6p	平24. 2
学会発表等	単	「伝統・文化教育の実践と教師に求められるもの」	『國學院大學人間開発学研究』第2号 國學院大學人間開発学会	全7p	平23. 2

【平成21年度以前の主な研究業績等】 (5点まで)					
種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または該当ページ	発行年月
論文	単	「<物語>の<文脈>、<小説>の<文脈>—小学校四年「白いぼうし」・「ごんぎつね」を読む」	『日本文学』 vol.58 No8 日本文学協会	全10p	平21. 8
論文	単	「学習者の学びをとらえる学習指導案へ」	『月刊国語教育研究』 No.431 日本国語教育学会	pp.34-37	平20. 3
論文	単	「共にあることをいかに支援できるか」	『幼児の教育』 第107巻第2号 日本幼稚園協会	pp.8-15	平20. 2
論文	単	「子どもの表現の向こうにある概念について話そう、そして問い直そう」	『月刊国語教育研究』 No.401 日本国語教育学会	pp.10-15	平17. 9
論文	単	「『おにた』になれない子どもたち—プロット主義からの脱却は可能か—」	『日文協国語教育』 32号 日本文学協会国語教育部会	pp.14-25	平14. 3

【所属学会】全国大学国語教育学会、日本国語教育学会、日本文学協会

【最近5年間の学会等および社会における主な活動】

日本国語教師の会(昭57. 4～現在)、日本文学協会会務委員(平22. 12～平25. 11)

特定非営利活動法人日本伝統芸能教育普及協会むすびの会会員・理事(平14. 10～平25. 5)

【教育活動の自己評価】

人間開発学部の初年次教育では、1年生のルーム指導に取り組み、将来の進路を見据えながら学生の意欲を喚起できるよう内容や方法を工夫している。3年生の演習、4年生の卒論指導においては、一人ひとりが自らの課題意識に基づいて学習が進められるよう、発表討議を積極的に取り入れて進めている。人間開発学部では課外に国語力アップ講座を立ち上げて、外部講師を招いて共に教材研究、授業研究を行っている。

【研究活動の自己評価】

国語科教育研究、特に文学の授業について研究している。1980年代以降の文学研究の状況をふまえ、文学教材の価値について学会、研究会等で発表し追究している。また、大学生の国語力について、科研費「初年次におけるクリティカルリーディング」の研究分担者として診断テストの開発等を行っている。26年度は学部共同研究として「国語力育成に関する基礎的研究」に取り組み、高等学校の授業視察、学生の小論文分析等に取り組む。

【職・氏名】教授 藤 井 喜 一 FUJII Kiichi
 【学 位】教育学士
 【本学就任】平成25年
 【略 歴】東京学芸大学中等教育課程保健体育科卒業
 東京学芸大学附属世田谷小学校教諭
 有明教育芸術短期大学教育部長、子ども教育学科教授
 【専門分野】体育科教育学

【最近5年間の主な研究業績等】 [平成22～26年度] (10点まで)					
種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または該当ページ	発行年月
辞書・事典等	共	日本教材学会編 『教材事典』	東京堂出版		平25. 9
その他	単	「プロフェッショナルと呼ばれる体育教師となるために」	『体育科教育』 大修館書店	pp.10-13	平24. 4
論文	共	「都市と農村の保育・子育て支援システムの比較(1)－江東区と木島平村の「前期次世代育成支援行動計画」の分析－」	『有明教育芸術短期大学紀要』 vol.3 有明教育芸術短期大学	pp.41-54	平24. 3
その他	単	「体育授業の基礎基本」とびこみ授業でのことから」	『楽しい体育の授業』 明治図書	pp.5-7	平22. 8
その他	単	「体育の学習規律に思う」	『体育科教育』 大修館書店	pp.17-20	平22. 4

【平成21年度以前の主な研究業績等】 (5点まで)					
種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または該当ページ	発行年月
論文	単	「鉄棒運動での教材づくり－(こうもりふりおり)の授業実践からの報告」	『「教材学」現状と展望』 日本教材学会	pp.302-310	平20. 11
編著	共	『新 絵で見るとび箱指導のポイント』	日本標準	全135p	平20. 4
論文	共	「小学校における子どもの体育授業評価と学級集団意識との関係」	『体育学研究』 第45巻第5号 日本体育学会	pp.596-610	平12. 9
その他	単	「新しい学力観に立った器械運動の授業－鉄棒大好きな子どもを育てる鉄棒運動－」	『指導と評価』 日本教育評価研究会	pp.13-17	平8. 10
編著	共	『水泳の授業』	大修館書店	全121p	平7. 5

【所属学会】日本体育学会、身体運動文化学会、日本教材学会、体育授業研究会

【最近5年間の学会等および社会における主な活動】

日本教材学会編集委員 (平17～現在)、体育授業研究会会長(平19. 8～現在)
 山梨県教育研究集会体育部共同研究者(昭54. 11～現在)、東京都新島村立新島小学校校内研究会講師(平22. 4)、
 東京都江東区立千南小学校校内研究会講師(平22. 6)、有明教育芸術短期大学公開講座講師(平22. 8)、
 日野市教育研究会体育部会研究会講師(平22. 9)、東京都江東区立千南小学校校内研究会講師(平22. 10)、
 東京都新島村立新島小学校校内研究会講師(平23. 2)、香川県体育指導者研修会講師(平23. 3)、
 東京都新宿区立早稲田小学校校内研究会年間講師(平23)、教員免許更新講習講師(平23. 8)、
 東京都江東区立千南小学校校内研究会講師(平23. 9)、日野市教育研究会体育部会研究会講師(平23. 10)、
 東京都新宿区立早稲田小学校研究発表会講師(平23. 10)、東京都新宿区立鶴巻小学校校内研究会講師(平24. 5)、
 東京都新宿区立早稲田小学校校内研究会年間講師(平24)、日本ハンドボール協会第15回研究集会講師(平24. 8)、
 教員免許更新講習講師(平24. 8)、東京都江東区立東砂小学校校内研究会講師(平24. 10)
 東京都江東区立東砂小学校校内研究会講師(平25. 9)、身体運動文化学会18回大会シンポジウムシンポジスト(平25. 12)
 東京都八王子市立みなみ野小中学校校内研究会講師(平25. 10～平26. 1)

【教育活動の自己評価】

教育実習に行く前、多くの学生たちは体育の授業を行うことに対して不安感を持っている。その不安感を少しでも軽減できるように初等科指導法(体育)の授業では初めに作成する学習指導案はグループでディスカッションをして作成するようにした。その後、個人で学習指導案を作成し数名の学生に模擬授業を行ってもらい全員で振り返りの時間を持つようにした。模擬授業の行い方、授業記録のとり方など今後解決しなくてはならない課題もある。

【研究活動の自己評価】

小学校での体育授業をVTRに収録し、その授業をまずALT法で分析している。そして、教師の逐語記録、授業内容の記録、児童の授業の評価記録等その授業を様々な手法で分析しどのような観察方法を取ると授業を的確に評価できるかを追及している。このような取り組みから学生たちが授業をどのように観察・評価すればよいかを伝えられるのではないかと考えている。

【職・氏名】教授 宮川 八岐 MIYAKAWA Yaki
 【学 位】文学士
 【本学就任】平成21年
 【略 歴】東洋大学文学部国文学科 卒業
 埼玉県草加市立氷川小学校 校長
 文部省初等中等教育局小学校課教科調査官・同局視学官
 国立行政法人少年自然の家 国立妙高少年自然の家 所長
 日本体育大学体育学部教授
 【専門分野】教育方法学、特別活動、体験活動

【最近5年間の主な研究業績等】 [平成22～26年度] (10点まで)					
種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または該当ページ	発行年月
論文	単	「学級活動の授業力の向上を一魅力ある学校・学級生活づくりを目指して」	『信濃教育』巻頭言 1535号	pp.1-11	平26. 10
編著	共	特別活動に関する指導資料「楽しく豊かな学級・学校生活をつくる特別活動(小学校編)」	国立教育政策研究所	全103p	平26. 7
論文	単	「豊かな学校・学級生活を創造する特別活動の展開」	埼玉県特別活動研究会研究集録	pp.14-20	平26. 1
論文	単	「年度当初の学習環境づくりの基礎」	月刊誌『道徳と特別活動』2013年4月号 文溪堂	pp.4-7	平25. 3
論文	単	「体験活動の意義と教育課程の位置付け」	全日中会報機関誌『中学校』No.711 全日本中学校長会	pp.4-7	平24. 12
著書	単	『学級会で子どもを育てる』	文溪堂	全183p	平24. 12
論文	単	「特別活動の意義と内容」「部活動」	『よくわかる教育学原論』ミネルヴァ書房		平24. 4
論文	単	「自治的活動の充実を図る特別活動の推進」	『日本特別活動学会紀要』第20号 日本特別活動学会		平24. 3
論文	単	「係活動の特質と指導充実の課題」	月刊誌『道徳と特別活動』2011年12月号 文溪堂		平23. 11
論文	単	「特別活動における生徒指導」	『生徒指導提要』文部科学省	pp.29-39	平22. 4

【平成21年度以前の主な研究業績等】 (5点まで)					
種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または該当ページ	発行年月
論文	単	長期宿泊活動の教育的意義と課題	『初等教育資料』3月号 文部科学省	pp.6-11	平22. 3
論文	単	特別活動における体験活動の充実への期待	日本特別活動学会 紀要(第16)	pp.21-26	平20. 3
著書	単	21世紀型特別活動の実践構想	明治図書	全143p	平13. 8
著書	単	新小学校教育課程講座:特別活動	ぎょうせい	全169p	平11. 7
著書	単	個を生かす集団活動と学級文化の創造	東洋館出版	全227p	平9. 8

【所属学会】日本特別活動学会、日本生徒指導学会、野外文化教育学会、全国特別活動研究会

【最近5年間の学会等および社会における主な活動】

日本特別活動学会常任理事(平26～現在)、文部科学省「言語活動の充実に関する実践研究」審査委員委員(平26)、国立教育政策研究所「特別活動リーフレット及び指導資料作成協力者会(委員長)」(平24～26)、埼玉県教育委員会長期研修教員受入(平20～現在)、文部科学省「道徳教育指導者養成講座講師」(平24～現在)、文部科学省「平成25年度教育課程研究協議会講師」(平25)、国立中央青少年交流の家「施設業務運営委員会委員長」(平24～現在)、国立教員研修センター「生徒指導指導者養成研修講座講師」(平25)、さいたま市小・中一貫教育推進検討委員会委員(平24～現在)、埼玉県教育委員会「教員養成セミナー講師」(平24～25)(財)東京海上日動教育振興基金「学校教育研究助成応募論文」中央審査選考委員(平21～現在)、埼玉県教育委員会「教科書採択検討委員会委員」(平24～25)、横浜市教育委員会「横浜市立元石川小学校学校運営協議会委員」(平21～現在)、(財)総合初等教育研究所「道徳・特別活動研究賞中央審査委員」(平18～現在)、本学及び国立教育振興機構各施設「教員免許状更新講習講座講師」(平23～現在)、(独)国立青少年教育施設主催「自然体験活動指導者養成講座講師」(平16～現在)、埼玉県所沢市立教育センター「研究員専任講師」(平23～現在)

【教育活動の自己評価】

学部の教職科目『教職論』『特別活動の理論と方法』『学校・学級経営論』『導入基礎演習』では、経験談や多くの事例をもとに授業をつくり、テキスト以外の関係図書も紹介して個々の学生の学修を深めるよう工夫した。『演習』においては、底本を活用するとともに近隣の学校等の研究会に引率するなどして実践的な研究の機会を多く設定するようにした。いずれの科目の授業アンケートでも概ねよい評価が得られた。また、例えば、文字指導、教員採用試験対策の論文、面接指導等について学生からの依頼を受け個別的に指導した。

【研究活動の自己評価】

特別活動、学校・学級経営等に関する指導法について各県の教育委員会、学校、研究会に指導者として参加し研究を深める。また、国立教育政策研究所の指導資料作成に主査として関わったり、教育雑誌や日本特別活動学会「紀要」に研究論文を寄稿したりし、学生の指導に生かす著書を著すなどにも取り組んだ。

【職・氏名】教授 安野 功 YASUNO Isao
 【学 位】経済学士
 【本学就任】平成21年
 【略 歴】埼玉大学経済学部 卒業
 文部科学省初等中等教育局 教科調査官
 国立教育政策研究所教育課程研究センター 教育課程調査官
 【専門分野】教科教育学(社会)・教育方法学

【最近5年間の主な研究業績等】 [平成22～26年度] (10点まで)					
種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または該当ページ	発行年月
著書	単	『これでわかる板書&ノート指導』	成美堂出版	全175p	平26. 4
著書	共	『社会科の新しい使命』	日本文教出版	全195p中 pp.140-195	平25. 11
著書	共	『小学社会/授業で使える全単元・全時間の学習カード』(3年～6年全4冊)	東洋館出版社	3・4年上:全178p, 3・4年下:全192p, 5年:全236p,6年:全246p	平25. 3
論文	単	「社会的な見方や考え方とは」	『初等教育資料』No.886 東洋館出版社	全4p	平24. 5
編著	単	『社会科全時間の授業プラン』(3年～6年全6冊)	日本標準	3年:全163p,4年:全219p, 5年①:全143p,5年②:全141p, 6年①:全165p,6年②:全139p	平23. 5
編著	単	『小学社会/板書で見る全単元・全時間のすべて』(3年～6年全4冊)	東洋館出版社	3・4年上:全188p,3・4年下:全216p, 5年:全248p,6年:全258p	平23. 3
論文	単	「伝統・文化に関する教育を充実させるポイント」	『初等教育資料』No.866 東洋館出版社	全6p	平22. 11
その他	単	「今求められる伝統・文化教育～社会科教育の立場から～」	『明治聖徳記念学会紀要』 復刊第47号 明治聖徳記念学会	全19p	平22. 11
著書	単	『安野功の授業実践ナビ社会』	文溪堂	全127p	平22. 11
学会発表等	単	「小学校においてPISA型学力観「キーコンピテンシー」をどのようにとらえ、発展させていけばいいか」	第59回全国社会科教育学会		平22. 10

【平成21年度以前の主な研究業績等】 (5点まで)					
種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または該当ページ	発行年月
著書	単	『ヤング感覚”ザ・社会科授業Ⅱ”指導要領”解説”でつくる新授業モデル』	明治図書	全176p	平21. 10
著書	単	「ことばの力が育つ対話型学級経営」	日本標準	全172p	平21. 3
著書	単	『ヤング感覚”ザ・社会科授業”単元ストーリー化で子どもノリノリ』	明治図書	全190p	平21. 3
著書	単	『社会科授業力向上5つの戦略』	東洋館出版	全225p	平18. 11
著書	単	『社会科授業が対話型になっていますか』	明治図書	全166p	平17. 9

【所属学会】全国社会科教育学会、社会系教育学会、日本社会科教育学会、和文化教育学会

【最近5年間の学会等および社会における主な活動】

和文化教育学会理事(平25. 4～現在)、東京都教育委員会評価方法検討部会委員(平25. 4～現在)、
 国立教育政策研究所教育課程実施状況調査委員(平24. 4～現在)、
 全国小学校社会科教育研究協議大会会場校講師(平13. 4～現在)

【教育活動の自己評価】

「初等科教育法社会」では、教育実習及び大学卒業後の学校現場において小学校社会科の実践的指導力が発揮できるように、①教員による社会科の模範模擬授業、②教科書分析及び教材研究の実際、③その成果を活用した「板書型指導案」作成演習を中心に授業を展開した。「伝統文化授業論」では、同様の目的で、①教員による国語科の模範授業、②学生による自作教材の作成、③その教材を活用した「板書型指導案」作成と模擬授業演習を中心に授業を展開した。

【研究活動の自己評価】

2008年に改訂された小学校社会科学習指導要領に新たに加えられた内容及び改善の具体的事項に示された授業改善の方向性を受けた教材及び指導方法の開発を行い、その成果を「小学社会/板書で見る全単元・全時間のすべて(3年～6年全4冊)」等14冊の本にまとめ発刊した。また、今求められる言語活動について、板書とノートに焦点を絞り、具体的な改善策を考案し、その成果を「これでわかる板書&ノート」にまとめ発刊した。

【職・氏名】准教授 渡邊 雅俊 WATANABE Masatoshi
 【学 位】博士(教育学)(平成14年3月 東京学芸大学 博甲第31号)
 【本学就任】平成26年
 【略 歴】東京学芸大学大学院連合学校教育学研究科発達支援講座 修了
 静岡英和大学人間社会学部人間社会学科 講師
 山梨大学大学院教育学研究科教育支援科学講座 准教授
 【専門分野】知的障害・発達障害のある子どもの心理と支援
 【受賞歴等】第21回日本特殊教育学会研究奨励賞(平成21年)

【最近5年間の主な研究業績等】 [平成22～26年度] (10点まで)

種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または該当ページ	発行年月
論文	単	「プランニングの調整に外的評価の予告が及ぼす影響」	『教育心理学研究』第62号 一般社団法人 日本教育心理学会	p87～p100	平26. 6
論文	単	「知的障害のある児童生徒における協同学習の可能性―仲間との協同活動支援の視座―」	『教育実践学研究』山梨大学教育人間科学部附属教育実践総合センター研究紀要 第19号	pp.37-46	平26. 3
著書	共	『Q & Aで学ぶ障害児支援のベーシック』	コレール社	全220p中 pp.37-50	平25. 4
論文	共	「発話に困難を示す知的障害のある高等部生徒における伝達スキルの習得過程」	『教育実践学研究』山梨大学教育人間科学部附属教育実践総合センター研究紀要 第18号	pp.48-56	平25. 3
論文	単	「不本意入学に至った発達障害のある中学生における進路決定過程に関する事例研究」	『教育実践学研究』山梨大学教育人間科学部附属教育実践総合センター研究紀要 第18号	pp.40-47	平25. 3
論文	単	Change process of external memory strategies in individuals with moderate mental retardation	Bulletin of the Faculty of Education & Human Sciences The University of Yamanashi, 14	pp.172-177	平25. 3
論文	単	「知的障害児の造形表現における見立ての援助方法に関する研究」	『教育実践学研究』山梨大学教育人間科学部附属教育実践総合センター研究紀要 第17号	pp.75-82	平24. 3
論文	単	「子どもの構成活動における相互観察の発達」	『山梨大学教育人間科学部紀要』第13巻	pp.192-199	平24. 3
論文	単	Cognitive Processes in Formative Activity Containing Symbolic Use: Students with Mild to Moderate Intellectual Disabilities	The Japanese Journal of Special Education, 48(6)	pp.581-591	平23. 3
論文	単	「対戦ゲーム場面における知的障害児の方略変化過程」	『山梨大学教育人間科学部紀要』第12巻	pp.161-167	平23. 3

【平成21年度以前の主な研究業績等】 (5点まで)

種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または該当ページ	発行年月
論文	単	「通常学級に在籍する発達障害が疑われる児童生徒における仲間関係の実態」	『教育実践学研究』山梨大学教育人間科学部附属教育実践総合センター研究紀要 第15号	pp.173-183	平22. 3
著書	共	『知的・発達障害児の学習』	田研出版	全253p中 pp.21-37	平21. 2
論文	単	「構造化されていない問題における知的障害児のプランニングに関する研究」	『特殊教育学研究』第46巻第3号 日本特殊教育学会	pp.149-161	平20. 9
著書	共	『発達障害児の自己を育てる』	ナカニシヤ出版	全214p中 pp.134-148	平19. 3
著書	共	『特別支援児の心理学』	北大路書房	全204p中 pp.160-166	平18. 3

【所属学会】日本特殊教育学会、日本発達心理学会、日本発達障害学会、日本職業リハビリテーション学会、日本教育心理学会

【最近5年間の学会等および社会における主な活動】

日本発達心理学会 ニュースレター委員会委員(平22. 4～平24. 3)、
 独立行政法人 高齢・障害・求職者雇用支援機構 障害者職業カウンセラー採用試験委員会 委員(平24. 3～現在)、
 山梨県教育委員会免許法講習会 特別支援学校教員免許状認定講習 講師「知的障害児教育総論」(平21. 4～現在)、
 山梨県教育委員会免許法講習会 特別支援学校教員免許状認定講習 講師「特別支援教育総論」(平22. 4～現在)、
 山梨県教育委員会10年経験者研修山梨大学講座 講師「発達の遅れや偏りをどう支えればよいか」(平21. 4～現在)、
 山梨県発達障害者支援センター運営協議会 協議委員(平21. 4～現在)、
 山梨県発達障害者支援体制整備検討委員会 委員(平21. 4～現在)、
 山梨県こころの発達総合支援センター 発達障害者サポーター事業 事例検討会アドバイザー及び養成研修会講師(平22. 4～現在)、
 山梨県立盲学校 学校評議会 評議委員 (平21. 4～平25. 3)、山梨県立かえで特別支 学校 学校評議会 評議委員(平23. 4～現在)、
 山梨県立甲府支援学校 学校評議会 評議委員(平25. 4～現在)、
 山梨大学教員免許状更新講習 講師「障害児の認知発達とその支援」(平23. 4～現在)、
 山梨大学教育人間科学部附属特別支援学校 高等部公開研究会 研究協力員(平21. 4～現在)

【教育活動の自己評価】

演習科目の「導入基礎演習」は、「教師を目指す人のための心理学的導入―こころを探り、こころを支えよう―」を主題として、「①自己理解を促す活動」「②こころのしくみを知る活動」「③こころを調べる活動」「④こころを支える活動」を実践した。具体的には、毎回、心理テストや心理実験、初歩的な心理学的支援技法を用いた実習を行い、その結果を用いて、学生同士の討論や、教員の解説を通して学びを深めた。毎回、実習と発表、ふり返りが行われるので、学生の負担も少ないが、概ね好評であったと思われる。講義科目の「教育相談」や「障害者の理解と支援」はインクルーシブ教育や共生社会を推進できる社会人を育成するという主題を設定し、障害者の特性ばかりでなく、具体的な関わり方や同級生や同僚の障害理解を促す方法まで講義した。本来、グループ討論を入ると効果的な内容も多いのであるが、予想に反して受講生が多く、実現できなかった点が課題である。なお、インクルーシブ教育を学生に理解して貰うプログラムの作成は、科研費(平成25-28年度科学研究補助金基盤研究(C)課題番号25381302)を受けて研究を進めているところである。

【研究活動の自己評価】

現在、科研費のテーマである「知的障害児の問題解決における仲間との相互作用の特徴とその援助に関する基礎的研究(平成25-27年度科学研究補助金基盤研究(C)課題番号25381303)を進めている。平成25年度内に文献研究と予備実験を終え、平成26年度に本実験を実施する予定であり、計画通りの進捗状況となっている。また、山梨県障害福祉課との共同で平成26年度から「思春期の発達障害児における進路支援プログラムの作成」と題した研究プロジェクトを開始する。地域社会に寄与する研究成果を出すために尽力したい。

【職・氏名】助教 伊藤英之 ITO Hideyuki
 【学 位】修士(教育学)
 【本学就任】平成20年
 【略 歴】日本大学大学院 文学研究科教育学専攻 修了
 國學院大學人間開発学部 助手
 國學院大學教育開発推進機構 助手(兼担)
 【専門分野】スポーツ心理学

【最近5年間の主な研究業績等】 [平成22～26年度] (10点まで)					
種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または該当ページ	発行年月
論文	単	「競技スポーツ経験は日常行動に影響を与えるのか?: 間隙通過課題による基礎的検討」	『國學院大學 人間開発学研究』第5号 國學院大學人間開発学会	pp.43-51	平26. 2
論文	単	「運動制限を抱える学生を対象とした体育授業の心理的効果」	『國學院大學 教育開発推進機構 紀要』第4号 國學院大學教育開発推進機構	pp.83-92	平25. 3
論文	単	「大学生女子卓球選手における不合理な信念と試合前の心理的コンディションの関係」	『國學院大學 人間開発学研究』第3号 國學院大學人間開発学会	pp.89-96	平24. 2
学会発表等	共	Mental Imagery Ability of Junior Alpine Skiers and The Effects of Imagery Training	5th International Congress of Science and Skiing	135p	平22. 12
学会発表等	共	「ジュニアアルペンスキー選手のイメージ想起能力およびイメージトレーニングの効果」	桜門体育学会	17p	平22. 12

【平成21年度以前の主な研究業績等】 (5点まで)					
種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または該当ページ	発行年月
論文	単	「運動制限のある大学生における体育実技授業の心理的効果」	『國學院大學紀要』第48巻 國學院大學	pp.17-26	平22. 2
論文	単	「スポーツ版不合理な信念テストにおける妥当性の検討」	『國學院大學人間開発学研究』第1号 國學院大學人間開発学会	pp.31-38	平22. 2
論文	単	「一過性運動が運動制限を持つ大学生の感情に及ぼす影響-大学体育実技の授業場面による基礎的検討-」	『國學院大學スポーツ・身体文化研究室紀要』第41巻 國學院大學スポーツ・身体文化研究室	pp.27-30	平21. 3
論文	共	「スポーツ場面における不合理な信念尺度作成の試み-性差および信頼性, 妥当性の検討-」	『桜門体育学研究』第42集 日本大学文理学部体育学科	pp.69-77	平成19年
学会発表等	共	Approach to Make Scale of Irrational Belief for Sports among University Student Athletes	The 5th ASPASP International Congress of Sport Psychology	p.591	平成19年

【所属学会】日本体育学会、日本スポーツ心理学会、日本コーチング学会、日本スキー学会、日本応用心理学会

【最近5年間の学会等および社会における主な活動】

神奈川県スキー連盟ジュニアアルペンスキー メンタルトレーニング講師(平20. 4～平25. 3)

【教育活動の自己評価】

講義系の授業では、穴埋め式のノートを作成・配布したり、学生自身が体験しながら学べるように授業の教材や展開方法に工夫をしている。

体育実技の授業では、授業ノートを作成・配布し毎回の記録を残させることで、自身の心身の変化への気づきを促す工夫をしている。また、運動学習への理解を深めさせるために関連の講義を実施し、半期間継続して取り組む単純な運動スキル課題を設定し毎回取り組む時間を設け、運動スキル向上の過程をわかりやすく体験させるなどの工夫をしている。

教育インターンシップの受講生や教育実習生の実習先への訪問を実施し、教育現場への実習へ学生を送り出すに当たっての要望などの聞き取りや実際の学生の取り組みの参観などを行い、大学の授業への参考にしていく。

【研究活動の自己評価】

基礎的な研究は、大まかには3つの課題について取り組んでいる。1つ目は、認知行動療法の理論を競技スポーツの実力発揮のためのメンタルトレーニングに応用するという課題である。2つ目は、スポーツで向上された運動技能は日常生活行動(特に歩行中の行動)に影響を与えるのかという課題である。3つ目は、体育教科の教育的意義を心理学的な観点から検討するという課題である。3つの課題を解決するために少しずつであるが毎年研究を進めており、関連の論文を執筆し発表している。

実践的な研究は、競技スポーツ選手に対するスポーツメンタルトレーニングの実践を通して、その効果の検討やより効果的な介入方法の検討を行い、その成果を学会や研究会で発表している。

【職・氏名】教授 上 口 孝 文 UEGUCHI Takafumi

【学 位】経済学士

【本学就任】昭和60年

【略 歴】日本大学経済学部経済学科卒業

私立出水学園高等学校

警視庁

【専門分野】体育方法、柔道選手の競技力

【最近5年間の主な研究業績等】 [平成22～26年度] (10点まで)					
種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または 該当ページ	発行年月

【平成21年度以前の主な研究業績等】 (5点まで)					
種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または 該当ページ	発行年月
著書	共	『教養としてのスポーツ・身体文化』	大修館書店	全169p中 計31p	平17.5
論文	共	「柔道の指導に関する一考察―「組み手」・ 「位置取り」―	『國學院大學スポーツ・身体文化研 究室紀要』第35巻 國學院大學スポーツ・身体文化研 究室	全40p中 pp.1-11	平15.3
論文	共	「柔道の指導法―背負投―	『國學院大學スポーツ・身体文化研 究室紀要』第33巻 國學院大學スポーツ・身体文化研 究室	pp.1-14	平13.1
著書	共	『道術一如・柔道の基本』	蒼風社	全212p中 pp.52-205	平11.6
論文	共	「柔道選手の基礎体力診断のための組テス ト―大学柔道選手を対象にして―	『大東文化大学紀要(自然科学)』 第31号 大東文化大学	pp.153-169	平5.3

【所属学会】日本武道学会、日本体育学会

【最近5年間の学会等および社会における主な活動】

【教育活動の自己評価】

担当している授業科目では、それぞれ明確な到達目標を設定して授業を展開している。導入基礎演習科目では、個別に課題を設定し、その課題に対して、調べる、調べた情報の選択、文章としてまとめる、発表することを徹底して指導している。実習系授業では、保健体育教員としての基礎的知識、基礎的技能の習得を目標に、双方向の授業を実施するよう努めている。特に、運動方法基礎実習では、勘違いをした動きをすると危険が伴うため、適切な動きをしているか確認しあいながら授業を進めている。正規の授業以外では、教育実践総合センターの未来塾の講座で、柔道の昇段を希望している学生を指導し、教員採用試験を受ける学生には、年間を通して実技を指導している。

【研究活動の自己評価】

これまでは、大学柔道選手の基礎体力の構造、大学柔道選手の階級別による基礎体力の構造、柔道選手の体格と競技力との関連、柔道選手の基礎体力の構造と競技力との関連、基礎体力の構成要素と競技力との関連、柔道選手の基礎体力診断のための組テストの作成、投げ技の指導方法、柔道選手の練習・試合における外傷の好発部位などを中心に研究を進めてきた。中学校学習指導要領の改訂に伴い、平成24年度から武道が必修となり、柔道の安全な指導方法の確立が必要となった。現在は指導対象者の、年齢別、性別、体力別の指導方法について、調査研究中である。

【職・氏名】教授 植原吉朗 UEHARA Kichio
 【学 位】博士(医学)(平成16年2月 昭和大学 乙第2300号)、体育学修士
 【本学就任】昭和62年
 【略 歴】筑波大学体育専門学群卒業
 筑波大学大学院体育研究科コーチ学専攻修士課程修了
 財団法人余暇開発センター
 【専門分野】摂食科学、スポーツ心理学、教育武道学(剣道教士七段)
 【受賞歴等】葛飾区スポーツ賞(昭和61年)、葛飾区剣道連盟功労賞(平成10年)

【最近5年間の主な研究業績等】 [平成22～26年度] (10点まで)					
種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または該当ページ	発行年月
論文	共	「剣道の国際的普及に関する意識調査」の、因子分析による項目精査の試み	『國學院大學 人間開発学研究』第5号 國學院大學人間開発学会	全302p中 pp.135-144	平26. 2
論文	単	「剣道の国際普及に伴う身体文化性認識の比較—フランスでの調査から—」	『國學院大學 人間開発学研究』第4号 國學院大學人間開発学会	全197p中 pp.85-102	平25. 2
調査・研究報告等	単	「平成23年度 國學院大學人間開発学会第3回大会 公開シンポジウム「現代武道の人間開発力—日本の身体文化から何を学ぶべきか—」 発題①「“不便の効用”と『形武道』の再評価—剣道・杖道にみる—」	『國學院大學 人間開発学研究』第3号 國學院大學人間開発学会	全232p中 pp.37-44	平24. 2
調査・研究報告等	共	「武道授業における教育効果の検証 —稽古着着用の意義—」	『國學院大學 人間開発学研究』第2号 國學院大學人間開発学会	全230p中 pp.99-110	平23. 2
学会発表等	単	「杖道の学校体育への導入可能性について—指導事例の報告より—」	『武道学研究』第43巻別冊 日本武道学会第43回大会研究発表抄録 日本武道学会	全88p中 p39	平22. 9

【平成21年度以前の主な研究業績等】 (5点まで)					
種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または該当ページ	発行年月
編著	共	『剣道を知る事典』	東京堂出版	全297p	平21. 5
学会発表等	共	学会フォーラム:武道の国際化—その光と影—パネリストとして「剣道の国際化の視点から」	日本武道学会第40回大会 学会企画		平19. 8
著書	共	『宮本武蔵・剣と心 絶対必勝の心理学』	日本放送出版協会	全254p中 pp.151-254	平15. 1
論文	共	「視床下部外側野(LH)における摂食調節因子の働き—オレキシンニューロンとMCHニューロンの相互作用について—」	International Journal of Obesity Vol.26, No.12	pp.1523-1532	平14. 12
辞書・事典等	共	『日本史小百科—武道—』	東京堂出版	全306p	平6. 3

【所属学会】日本武道学会、日本スポーツ心理学会、日本体力医学会

【最近5年間の学会等および社会における主な活動】

関東学生剣道連盟審判員(昭59. 4～現在)、東京都剣道連盟会員(昭59. 4～現在)、東京都学校剣道連盟会員(昭62. 4～現在)、東京都学校剣道連盟 理事(平14. 4～現在)、日本武道学会 評議員(平23. 4～現在)、日本武道学会剣道専門分科会 幹事(平17. 4～現在)

【教育活動の自己評価】

- ・武道系実技授業(剣道、杖道)に道着・袴の着用を導入し(教材として貸出用を準備)、修得意欲向上に効果を上げた。
- ・3・4年次演習(ゼミ)において、卒論抄録・レポート集を含めた雑誌を独自に編集・発行し、ゼミ生および協力者、学内資料室等へ配布、下級生の学修指針書・手引きとしても奏功した。
- ・オープンキャンパス時に人間開発学部が主宰する「共育フェスティバル」にゼミとして参加出展し、卒業研究データ収集も兼ねて地域住民・子どもたちと積極的に交流する機会を得た。
- ・ゼミ内に、特に専門性を問わない各種勉強会を学生主導で企画。語学力向上や実験手法、質問紙調査法、統計解析法の修得などに効果を見せつつある。
- ・交換留学生の武道体験授業をコーディネートし、授業にはサポート役として武道有段者の学生を参加させ、文化交流やコミュニケーションの機会を設けることができた。

【研究活動の自己評価】

- ・人間開発学部が主宰する人間開発学会大会のシンポジウム「現代武道の人間開発力—日本の身体文化から何を学ぶべきか」において、公開演武(日本剣道形、杖道形)を披露、またパネリストとして発題に登壇し、効果的なディスカッションを展開できた。
- ・人間開発学会誌に、主として教育剣道に関わる論文投稿を毎年継続した。特に、剣道が国際的に普及することに伴い、剣道に内在する身体文化的価値や精神性は変容することなく海外で理解されるのか否か、あるいは武道に備わる精神性の変質を恐れるならば、むしろ積極的な普及は不要なのか、などの議論を深めている。

【職・氏名】准教授 太田直之 OHTA Naoyuki
 【学 位】博士(歴史学)(平成18年3月 國學院大學 文甲第83号)
 【本学就任】平成18年
 【略 歴】立命館大学文学部卒業
 國學院大學文学研究科日本史学専攻博士課程後期修了
 國學院大學COE研究員
 【専門分野】日本中世史

【最近5年間の主な研究業績等】 [平成22～26年度] (10点まで)					
種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または該当ページ	発行年月
論文	単	「中世の神社と勸進」	『神道宗教』228号 神道宗教学会	pp.25-36	平24. 10
論文	単	「東寺の大黒天札と勸進聖」	千々和到編『日本の護符文化』 弘文堂	pp.211-220	平22. 7

【平成21年度以前の主な研究業績等】 (5点まで)					
種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または該当ページ	発行年月
論文	単	「近世初頭における神仏関係の変容—賀茂別雷神社の社家・供僧相論を事例に—」	『國學院大學研究開発推進センター研究紀要』4 國學院大學研究開発推進機構研究開発推進センター	pp.103-132	平22. 2
論文	単	「中世後期の勸進聖と地域社会—高野山寂靜院増進上人の活動を事例として—」	『民衆史研究』77 民衆史研究会	pp.3-15	平21. 5
著書	共	「中世における神仏関係の一形態—賀茂別雷神社の御読経所供僧について—」	『史料から見た神道—國學院大學の学術資産を中心に—』 弘文堂	pp.37-75	平21. 3
翻訳・翻刻書	単	「上賀茂神社における神仏関係の具体像—『今原和千代家文書』『京都両奉行所上申候訴訟之留メ日記』の翻刻と解題—」	『國學院大學研究開発推進センター研究紀要』3 國學院大學研究開発推進機構研究開発推進センター	pp.201-230	平21. 3
著書	単	『中世の社寺と信仰—勸進と勸進聖の時代』	弘文堂	全407p	平20. 5

【所属学会】国史学会、日本歴史学会、日本史研究会、神道宗教学会、日本古文書学会、日本山岳修験学会

【最近5年間の学会等および社会における主な活動】

【教育活動の自己評価】

学部専門教育科目では、「日本の伝統文化Ⅰ」「伝統文化と生活論Ⅰ」「演習」「演習・卒業論文」を担当した。「日本の伝統文化Ⅰ」は必修の学部コア科目に位置づけられているが、歴史的内容を苦手とする学生も多くいることから、図表を多用した授業資料の準備など、分かり易く興味を引きやすい授業内容の構築に努めた。また、「伝統文化と生活論Ⅰ」では「日本の伝統文化Ⅰ」の内容を踏まえ、より専門的な内容を講義することで、学生の発展的な学修を促した。教養科目では「導入基礎演習」「神道と文化」などを担当した。「導入基礎演習」では個人発表とこれに基づく討論の機会を複数回設定し、大学における修学の基礎的スキルを獲得することができるよう努めた。

【研究活動の自己評価】

お札に関する研究を継続し、フランスで実施された国際シンポジウム「おふだー日本の神仏の御影」(Ofuda—The Japanese Pantheon in Miniature 主催:フランス国立科学研究センター、コレージュ・ド・フランス他)において研究発表を行った。さらに、平成24年度より科学研究費補助金による「拓本調査を基礎とする日本金石文の情報資源化と歴史叙述への応用的研究(23320134)」の研究分担者として、中世石造物の資料利用に関する調査・研究を実施している。

【職・氏名】教授 **大森俊夫** OHMORI Toshio
 【学 位】教育学修士
 【本学就任】昭和48年
 【略 歴】横浜国立大学教育学部保健体育科卒業
 東京学芸大学大学院教育学研究科運動学第一講座修士課程修了
 【専門分野】運動生理学、呼吸循環、トレーニング、陸上競技

【最近5年間の主な研究業績等】 [平成22～26年度] (10点まで)					
種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または該当ページ	発行年月
その他	共	「体罰防止ガイドライン～神奈川からすべての体罰を根絶するために～」	神奈川県教育委員会	全43p中 pp.14-15	平25. 7
翻訳・翻刻書	共	『スポーツ・コーチング学』	西村書店	全362p	平25. 4
論文	共	EQUILIBRIUM ENERGY INTAKE ESTIMATED BY DIETARY ENAERGY INTAKE AND BODY WEIGHT CHANGE IN JAPANESE YOUNG MALES	Japanese Journal of Physical Fitness and Sports Medicine vol60 no4 日本体力医学会	pp.379-474	平23. 8

【平成21年度以前の主な研究業績等】 (5点まで)					
種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または該当ページ	発行年月
論文	単	排便技術の指導効果について	『國學院大學スポーツ・身体文化研究室紀要』第41巻 國學院大學スポーツ・身体文化研究室	全53p中 pp.18-22	平21. 3
論文	共	「長距離選手の指導における研究成果の利用と問題点」	『國學院大學スポーツ・身体文化研究室紀要』第40巻 國學院大學スポーツ・身体文化研究室	pp.9-16	平20. 3
論文	単	「箱根駅伝を目指す長距離選手の指導法に関する研究－記録を伸ばした選手の4年間の形態変化－」	『國學院大學スポーツ・身体文化研究室紀要』第36巻 國學院大學スポーツ・身体文化研究室	全42p中 pp.17-22	平16. 3
論文	単	「陸上長距離選手の強化法に関する研究」	『國學院大學スポーツ・身体文化研究室紀要』第35巻 國學院大學スポーツ・身体文化研究室	全40p中 pp.13-18	平15. 3
論文	共	「大学生男子長距離陸上選手の亜鉛出納」	『体力科学』第47巻第3号 日本体力医学会	pp.280-286	平10. 6

【所属学会】日本体育学会、日本体力医学会、日本ゴルフ学会、運動生理学会、バイオメカニクス学会、ランニング学会

【最近5年間の学会等および社会における主な活動】

日本体力医学会 評議員(昭56. 4～現在)、関東学生陸上競技連盟駅伝対策委員(平15～現在)
 神奈川県立荏田高等学校評議員(平26. 6～)

【教育活動の自己評価】

健康体育学科教授として、1年生の導入基礎演習、1, 2年主体の陸上競技基礎実習、3, 4年主体の陸上競技指導法実習、2年生前期の呼吸循環系演習などの実技、演習系の授業を通して、教育現場で役立つ実践力の付く指導を行っている。レポート提出についてはk-smapyを活用し、パワーポイントによるプレゼンテーションなどを行った。また人間開発学会内の学生企画委員を指導する支援委員会の委員長として学部内の活性化に努め、学部の新入生歓迎会、オープンキャンパスでの学部紹介などの指導を行った。

【研究活動の自己評価】

健康体育学科の学生の指導に役立つという立場から、スポーツ先進国のアメリカの大学で多く使われているコーチングの指導書「Successful Coaching」を監訳者として翻訳した。また最近問題になっている体罰の問題についてアメリカの課外活動の形態等を調査研究し、日本のクラブ活動・課外活動との違いを明確にし、その結果を神奈川県の体罰防止ガイドラインに執筆し、また実際に指導をしている課外活動指導者へ問題点の提言やその解決等の指導を行った。

【職・氏名】准教授 川口愛子 KAWAGUCHI Aiko
 【学 位】体育学士
 【本学就任】平成25年
 【略 歴】日本体育大学体育学部卒業
 川口愛子体操教室主宰
 國學院大學幼児教育専門学校専任教員
 【専門分野】体育方法、身体表現

【最近5年間の主な研究業績等】 [平成22～26年度] (10点まで)					
種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または該当ページ	発行年月
学会発表等	単	「保育者志望学生の「身体表現」について(4) - 質を考える -」	日本保育学会第65回大会論文集 於:東京家政大学	p.708	平24. 5
学会発表等	共	「保育者志望学生の「身体表現」について(3)」	日本保育学会第64回大会論文集 於:玉川大学	p.688	平23. 5
学会発表等	共	「保育者志望学生の「身体表現」について(2)」	日本保育学会第63回大会論文集 於:松山東雲女子大学	p.684	平22. 5

【平成21年度以前の主な研究業績等】 (5点まで)					
種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または該当ページ	発行年月
論文	共	「保育者志望学生の健康に関する調査」	『國學院大学幼児教育専門学校紀要』 第22輯 國學院大学幼児教育専門学校	pp.47-52	平20. 1
論文	共	「保育者志望学生の姿勢に関する調査と教育実践のあり方」	『國學院大学幼児教育専門学校紀要』 第21輯 國學院大学幼児教育専門学校	pp.35-40	平19. 1
論文	共	「『気を付け』の姿勢にかかわる意識調査および足の置き方の一考察」	『國學院大学幼児教育専門学校紀要』 第19輯 國學院大学幼児教育専門学校	pp.1-11	平17. 1
論文	共	「男子学生の体力測定および生活実態調査報告」	『國學院大学幼児教育専門学校紀要』 第18輯 國學院大学幼児教育専門学校	pp.9-20	平16. 1
著書	共	『のびのびパフォーマンス』	ひかりのくに社	全163p中 pp.10-64, pp.116-152	平2. 11

【所属学会】日本保育学会、日本体力医学会、日本女性スポーツ学会、舞踊学会

【最近5年間の学会等および社会における主な活動】

國學院幼稚園「家庭教育講座」講師(平25～平26)、東京都女子体育連盟役員(平25. 4～現在)

第48回全国女子体育研究会(東京)役員(平26)、地域ヘルスプロモーションセンター「健康教室」講師(平26. 6～平26. 7)

【教育活動の自己評価】

スポーツ・身体文化系の科目を通じて高校までに体験した運動方法、知識、実践を踏まえながら、日常生活に役に立つ内容を提案した。穏やかに落ち着いた心を導くために、自分と向き合い、精神状態や体調を観察しながら、自分の内面と静かに向き合う自然体を呼吸法、姿勢から体験する。実際に動いた結果を体感する。又心肺機能の強化として、音楽とステップを組み合わせる縄跳びを跳ぶ。表現系IV(ダンス)では指導要領改訂に伴い、ダンスの授業が必修となった。しかし学生は人前で言葉、表情、行動、身体で表現することに苦手意識を持っている。授業の積み重ねから表現する楽しさ、仲間とコミュニケーションを取りながら踊る一体感を得られる。基礎から指導法へと研究学習を重ねることでダンスを学んだことが社会で貢献できるように指導する。課外活動ではラグビーフットボール部の部長を務め、社会人としての人間形成を目標として指導を行っている。

【研究活動の自己評価】

幼稚園教諭、保育士を志望する学生の身体表現における現状と問題点、また指導法について継続的に研究を行ってきた。又保健体育の教員を志望する学生の身体表現の現状に着目しながら、表現運動授業研究に取り組んでいる。

【職・氏名】教授 一 正 孝 HAJIME Masataka

【学 位】体育学修士

【本学就任】昭和56年

【略 歴】日本体育大学体育学部体育学科卒業
日本体育大学体育学専攻科修了
日本体育大学大学院体育学研究科修士課程修了
日本女子大学一般教育課程(体育)助手

【専門分野】体育学、スポーツ哲学、スポーツ社会学

【最近5年間の主な研究業績等】 [平成22～26年度] (10点まで)					
種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または該当ページ	発行年月
評論・書評等	単	「発育発達と身体運動」	『ビタミンママ』50号 VM「ビタミンママ」編集部	全1p	平25. 12
評論・書評等	単	「たかがスポーツ、されどスポーツ」	『ビタミンママ』52号 VM「ビタミンママ」編集部	全1p	平25. 12
調査・研究報告等	共	「身体運動の指導法に関する研究」	『特色ある教育研究費成果報告書』 國學院大學人間開発学部	全21p	平24. 3
著書	共	改訂第二版『教養としてのスポーツ・身体文化』	大修館書店	全214p	平23. 4
評論・書評等	単	「子どもとスポーツ」	『ビタミンママ』38号 VM「ビタミンママ」編集部	全2p	平23. 3
調査・研究報告等	共	「身体に関する一考察」	『学部研究報告書』 國學院大學人間開発学部	全30p	平23. 2
学会発表等	共	「大学体育における合気道が生理・心理的諸側面に及ぼす影響について」	日本武道学会第43回大会 日本武道学会事務局	全1p	平22. 9

【平成21年度以前の主な研究業績等】 (5点まで)					
種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または該当ページ	発行年月
論文	単	「スポーツの指導者を考える」	『國學院雑誌』第109巻第1号 國學院大學	pp.1-13	平20. 1
著書	共	改訂『教養としてのスポーツ・身体文化』	大修館書店	全208p	平19. 4
論文	単	「スポーツでの審判について」	『國學院大學スポーツ・身体文化研究室紀要』第39巻 國學院大學スポーツ・身体文化研究室	pp.17-20	平19. 3
論文	単	「スポーツの概念について」	『國學院雑誌』第103巻第9号 國學院大學	全40p中 pp.1-10	平14. 9
論文	単	「スポーツの倫理基準に関して」	『國學院大學スポーツ・身体文化研究室紀要』第34巻 國學院大學スポーツ・身体文化研究室	全39p中 pp.27-31	平14. 3

【所属学会】日本体育学会、テニス学会、日本体力医学会、日本武道学会、大学教育学会

【最近5年間の学会等および社会における主な活動】

県立市ヶ尾高等学校評議員(平22. 4～現在)、FM横浜すくすくスクール(平25. 10～現在)

【教育活動の自己評価】

講義系の科目については、新しい資料などを積極的に活用するように心がけている。なるべく学生個々のニーズに対応できるようにすることが目標である。実技実習系の科目については「実技」と「理論」の一体化を心がけている。演習系科目については、学生のそれぞれのテーマに関連することを学生自身が独り立ちして学ぶ事ができるように指導している。全般的には、視聴覚等の教材を適宜取り入れながら対応している。

【研究活動の自己評価】

人間開発学部が立ち上がって、「人間開発」と「体育・スポーツ・健康」に関してのテーマを設定して研究を進めている。特にこの分野に関しては、多様な面を持っているのでバランスを崩さないように心がけている。基本的には「身体」に関する研究が中心である。特に、指導者としての視点を大切にしている。「健康」の「価値」や「well-being」との関係を絶えず考えながら文献研究を継続している。

【職・氏名】准教授 林 貢一郎 HAYASHI Koichiro

【学 位】博士(体育科学)(平成15年3月 筑波大学 博甲第3244号)

【本学就任】平成22年

【略 歴】筑波大学大学院博士課程体育科学研究科体育科学専攻修了
(独)産業技術総合研究所 人間福祉医工学研究部門 特別研究員
札幌大谷大学音楽学部音楽学科専任講師

【専門分野】運動生理学、健康科学、スポーツ医学

【受賞歴等】第2回日本臨床スポーツ医学会学会賞(平成15年)、第22回女性スポーツ医学研究会優秀演題賞(平成20年)

第68回日本体力医学会大会 大塚スポーツ・医科学賞 奨励賞(平成25年)

第22回日本運動生理学会大会 アワードⅢ(平成26年)

【最近5年間の主な研究業績等】 [平成22～26年度] (10点まで)					
種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または該当ページ	発行年月
学会発表等	共	Estrogen receptor-beta gene polymorphism affects carotid arterial elasticity and wall mass in Japanese women	The 61st annual meeting of the American College of Sport Medicine (Florida, USA)		平26. 5
論文	共	Arterial path length estimation on brachial-ankle pulse wave velocity: validity of height-based formulas	Journal of Hypertension, 32(4)	pp.881-889	平26. 4
論文	共	Effects of regular aerobic exercise on post-exercise vagal reactivation in young female.	European Journal of Sport Science 13(6)	pp.674-680	平25. 11
学会発表等	共	「日本人女性におけるエストロゲン受容体β遺伝子多型と頸動脈コンプライアンスの関連」	第68回日本体力医学会大会(東京)		平25. 9
学会発表等	共	Higher cardiorespiratory fitness attenuates arterial stiffening associated with the estrogen receptor-beta polymorphism in healthy women.	18th Annual Meeting of the European College of Sport Science (Barcelona, Spain)		平25. 6
論文	単	「女性の動脈硬化と運動」	『臨床スポーツ医学』第28巻第12号 文光堂	pp.1353-1359	平23. 12
論文	共	Relationship between the change in daily step count and brachial-ankle wave velocity during a pedometer-based physical activity program for older adults	Anti-aging Medicine, vol8, No4	pp.35-40	平23. 7
論文	共	Distal Shift of arterial pressure wave reflection sites with aging	Hypertension, Vol56, No5	pp.920-925	平22. 9
論文	共	「集団による能動的音楽療法の実践が中高齢女性の動脈硬化指数に及ぼす影響」	『日本音楽療法学会誌』第10巻第1号 日本音楽療法学会	pp.110-117	平22. 6
論文	共	Carotid femoral pulse wave velocity: Impact of different arterial path length measurements	Artery Research. 4(1)	pp.27-31	平22. 5

【平成21年度以前の主な研究業績等】 (5点まで)					
種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または該当ページ	発行年月
論文	共	Regular endurance exercise in young men increases arterial baroreflex sensitivity through neural alteration of baroreflex arc	J Appl Physiol Vol.106, No.5 American Physiological Society	pp.1499-1505	平21. 3
論文	共	Age-associated elongation of the ascending aorta in adults	JACC: Cardiovascular Imaging Vol.1 The American College of Cardiology	pp.739-748	平20. 11
論文	共	Arterial elastic property in young aerobic and resistance trained women	Eur J Appl Physiol Vol.104. No.5 Springer	pp.763-768	平20. 11
論文	共	Estrogen receptor α polymorphism affects exercise-related reduction of arterial stiffness	Med Sci Sports Exer Vol.40. No.2 American college of sports medicine	pp.252-257	平20. 2
論文	共	Sex differences in the relationship between estrogen receptor alpha gene polymorphisms and arterial stiffness in older humans	Am J Hypertens Vol.20. No.6 American journal of Hypertension Ltd.	pp.650-656	平19. 6

【所属学会】日本体力医学会、日本運動生理学会、日本臨床スポーツ医学会、日本音楽療法学会

【最近5年間の学会等および社会における主な活動】日本体力医学会評議員(平20. 9～現在)

【教育活動の自己評価】

人間開発学部における専門教育では、主に、ヒト生体の生理機能やその機能不全(疾病等)に及ぼす身体活動の有益性に関する事柄について教授している(「運動処方論」「青年期以降の健康と運動」「地域社会と健康指導」「神経筋系演習」など)。健康体育学科を卒業する学生たちがより質の高い運動指導・健康指導ができるようになるよう、学問的要素だけでなく実学的な部分を大切にしている。演習(卒業論文)においては、より専門的にこの点を様々な測定などを通して深化させている。その中には、地域在住の中高齢者を対象とした運動・健康教室の開催や効果のアセスメント等も含まれており、実践的なゼミ活動を行っている。

【研究活動の自己評価】

中高齢者において、循環器系指標、内分泌指標、体力、認知機能、QOLなどの健康関連指標に及ぼす身体活動の影響を縦断的に検討している。ここ3年間で延べ約1000名の対象者に測定を行い、データを集積している。さらに、この研究を継続しながら、國學院大學発のエビデンスを発信していきたい。なお、この研究は人間開発学部地域ヘルスプロモーションセンターの事業として、多くの先生方と共同で進めているものである。

また、科学研究費補助金の助成を受け、女性ホルモンであるエストロゲンが循環器系疾患発症リスク(特に動脈硬化指数)に及ぼす影響についての研究を行っている。これらの研究は、他大学・研究機関との共同研究として進行中である。

【職・氏名】教授 原 英 喜 HARA Hideki
 【学 位】博士(医学)(平成11年3月 昭和大学 乙第1892号)
 【本学就任】昭和60年
 【略 歴】東京学芸大学教育学部中等教育教員養成課程保健体育専攻卒業
 東京学芸大学大学院教育学研究科修士課程修了
 東京学芸大学教育学部保健体育学科非常勤講師
 【専門分野】運動生理学、健康科学、発育発達

【最近5年間の主な研究業績等】 [平成22～26年度] (10点まで)

種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または該当ページ	発行年月
論文	共	Changes in heart rate during headstand in water	Biomechanics and Medicine in Swimming XII Australia Institute of Sport	全594p中 pp.458-462	平26. 4
論文	共	Observation of the soft palate while breathing in a simulated swimming situation	Biomechanics and Medicine in Swimming XII Australian Institute of Sport	全594p中 pp.421-426	平26. 4
論文	共	Water exercise and health promotion	The journal of physical fitness and sports medicine Vol.2, No.4 日本体力医学会	pp.393-400	平25. 11
学会発表等	共	「発達性協調運動障害児に対する指導の実践」	日本発育発達学会第11回大会		平25. 3
著書	共	『遠泳学事始 今こそ、子どもたちに遠泳を!』	フリースペース	全165p中 pp.110-113	平25. 2
論文	単	「運動の苦手な子どもへの対応の工夫」	『子どもの健康科学』13巻1号 日本子ども健康科学会	pp.23-28	平24. 12
学会発表等	共	「子どもの放課後活動における〇都市部自然環境の活用事例報告」	日本発育発達学会第10回記念大会		平24. 3
学会発表等	共	「ドルフィンスイムプログラムに参加した障がいを持った子どもたちへの影響観察」	『日本水泳・水中運動学会 2010年次大会 論文集』	全110p中 pp.90-93	平22. 11
学会発表等	共	The comparison of two predictive formulae for the spirometric parameters in Japanese children.	29th Congress of the European Academy of Allergy and Clinical Immunology The British Society for Allergy & Clinical Immunology		平22. 6
論文	共	Analyses of Instruction for Breath Control While Swimming the Breaststroke	Biomechanics and Medicine in Swimming XI Norwegian School of Sport Science	全390p中 pp.319-320	平22. 6

【平成21年度以前の主な研究業績等】 (5点まで)

種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または該当ページ	発行年月
学会発表等	共	The dolphin assisted activity effects relaxation and healing	1st International Scientific Conference of Aquatic Space Activities	On Line Journal	平20. 3
論文	共	The effect of touching a dolphin on respiration and brain activity in children	The International Journal of Healing and Caring Vol.8, No.1 Wholistic healing publications		平20. 1
学会発表等	共	「息継ぎ指導につながる口呼吸と鼻呼吸の使い方に関する分析」	2007年日本水泳・水中運動学会年次大会		平19. 11
論文	共	The function of nasal pressure for breathing in the breaststroke	The Biomechanics and Medicine in Swimming, No.X Faculdade de Desporto Universidade do Port	全357p中 pp.137-139	平18. 6
論文	共	「「ぎこちない子どもの動き」に関する調査研究」	『身体運動文化研究』11巻1号 身体運動文化学会	pp.57-70	平16. 9

【所属学会】日本体力医学会、日本体育学会、日本温泉気候物理医学会、日本宇宙航空環境医学会、小児アレルギー学会、日本運動生理学、身体運動文化学会、日本水泳・水中運動学会、日本発育発達学会

【最近5年間の学会等および社会における主な活動】

東京体育館健康体力相談室相談員(平3～現在)、東京都台東区喘息児水泳教室主任指導員(平3～現在)、日本赤十字社医療センター治験審査委員(平19. 4～現在)

【教育活動の自己評価】

講義については、机間巡視をしながら書かれたノートの記述を確認することや、質問の投げかけに対する応答、また小テストの結果、さらには学生からの授業評価のコメントなどを参考に、1回ごとの授業の内容で焦点を絞って理解を求めている。あるいは、前回の授業で理解できていない点の復習からのスタートや、①資料映像の提示、②教室で行う実験、③学生自身の持つ録画や撮影可能なスマートフォンや携帯電話で自分たちの動作を撮影したものを活用するなど、理論的な考察を身近に起こっている運動場面などの現象と結び付けやすい教材の工夫に努めている。できるだけシラバスに従い、授業時間の終わりに次回の授業までに予習して欲しい箇所を伝えている。小テストや簡易レポートについては、漢字の点検や文章の添削をして返却している。演習では文章だけにとどまらず、図やイラストを用いての表現で考えを伝えることや、パワーポイントなどで資料作成をすることを積極的に取り入れている。卒業研究に向けての演習では、学生の発想による実験に殆んど全てに立ち会い、データ取得の正確性や得られたデータを考察するなど方法を指導している。実技では、規定の回数だけでは習得できない技能について、学外のプールへ行き補習し、学生自身のパフォーマンスの向上と指導時の観点が判るよう補っている。

【研究活動の自己評価】

科学研究費申請や、学内の特別推進研究に応募しながら、学部の目的にも沿う子どもの発育発達に関わる運動能力の獲得や大脳前頭葉の機能と関わるgo/no-go課題などのテーマでフィールドを学外にも求めて、長期的な研究を進めている。さらに、これまでのライフワークともいえる呼吸と水泳・水中環境に関わる実験的研究を続け、数年先までの計画を立てて、論文にまとめ、国際的な学会の場で発表し論文の掲載も行っている。学外の研究者からの共同研究についても、実験方法が応用できるものについては研究を継続している。

【職・氏名】教授 藤田 和也 FUJITA Kazuya
 【学 位】体育学修士
 【本学就任】平成22年
 【略 歴】東京教育大学大学院体育学研究科健康教育学専攻修了
 一橋大学社会学研究科人間・社会形成研究大講座教授
 【専門分野】健康教育学、教育保健学、発達社会学
 【受賞歴等】教育科学研究会賞(昭和60年)

【最近5年間の主な研究業績等】 [平成22～26年度] (10点まで)					
種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または 該当ページ	発行年月
論文	単	「保健だより」に何を託して発行するのか」	『保健室』 No.168 農文協	全7p	平25. 10
著書	共	『書くことと分析・批評しあうこと——教育実践記録の意義——』	『講座・教育実践と教育学の再生 第2巻・教育実践と教師 その困難 と希望』 かもがわ出版	全20p	平25. 6
論文	単	「子ども把握と教育実践——その積極性、子ども把握・省察との関連——」	『教育』 No.800 かもがわ出版	全11p	平24. 9
論文	単	「被災地訪問を通して教育と教育研究のあり方を考える」	『教育』 Vol.792 かもがわ出版	全7p	平24. 1
論文	単	「養護教諭の子ども把握と教育実践——子ども把握と教育実践・教育研究の関係を考える——」	教育 No.783 国土社	全9p	平23. 4
論文	単	「養護教諭が実践記録を書くということ——実践力量の向上と実践理論の構築のために——」	『日本養護教諭教育学会誌』 Vol.14 No.1 日本養護教諭教育学会	全6p	平23. 3
論文	単	「先達と仲間が築き上げてきた何を継承すべきか」	『全養サ40年のあゆみ』 全国養護教諭サークル協議会	全110p中 pp.21-23	平22. 8
論文	単	「中学校における「保健の学力」とは？——教科書と授業のあり方を考える」	『教育ジャーナル』 2010年8月号 学習研究社	pp.34-38	平22. 8
論文	単	「戦後の養護教諭実践の充実・発展と養護教諭研究サークル——「芽の会」の役割と遺産——」	『保健室』 No.148 農山村漁村文化協会	pp.3-10	平22. 6

【平成21年度以前の主な研究業績等】 (5点まで)					
種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または 該当ページ	発行年月
編著	共	『現実と向きあう教育学』	大月書店	全269p	平22. 2
著書	単	『養護教諭が担う「教育」とは何か』	農山漁村文化協会	全238p	平20. 5
著書	共	『教師教育テキストシリーズ14 教育相談』	学文社	全189p中 pp.134-151	平20. 3
編著	共	『保健室と養護教諭——その存在と役割』	国土社	全189p	平20. 2
著書	共	『なくならない「いじめ」を考える』	国土社	全190p中 pp.44-52	平20. 1

【所属学会】日本教育学会、日本体育学会、日本学校保健学会、日本教育保健学会

【最近5年間の学会等および社会における主な活動】

日本体育学会評議員(平25)、日本学校保健学会評議員(平10～平23)、
 日本教育保健学会常任理事(平15～平26)・副理事長(平21～平24)

【教育活動の自己評価】

教職必修の教科教育法(保健科教育法1・2)では、教科としての目標論・内容論を軸にしつつ、学習指導要領の目標観、内容観を検討しつつ、教科保健としてどのような目標と内容であるべきかを受講者たちが自らの受教体験をふまえながら考えることに重点を置いた授業(講義よりも受講者相互のディスカッションに重きを置いた授業)を試みた。その結果、前年より個々の学生の主体的な思考が促されたことがレポート等から手応えを感じることができた。1年前期の導入基礎演習では、これを高校教育から大学教育への転換教育と位置づけ、自らの学問的探求の入口として、文献購読、レポート作成、プレゼンテーション、ディスカッション等の要領を身につけることに重点を置いてゼミスタイルの少人数講義を行い、毎回、そのノウハウを細かく指導することに力を入れた。3、4年ゼミでは、子どもの発達(今日的育ち)への教育学的・社会学的アプローチを共通のテーマにして、各自の問題関心からの研究的作業に基づくレポート報告と討論を積み重ねながら、卒論研究につなぐゼミ運営を行った。卒論作成では、子どもの発達・子育て・教育に関わる問題についての教育学的・社会学的アプローチによる論文作成を求め、学部全体の目標字数2万字を超える4万字を目標に取り組みさせて、ゼミ員はいずれも4万字弱の論文を作成して卒業していった。

【研究活動の自己評価】

2011年3月11日以来、日本教育学会の「東日本大震災と教育」をテーマにした共同研究プロジェクトの立ち上げに参加し、この3年間、被災地の学校・教師と子どもたち、その他、地域の保育と教育に携わる行政関係者・住民・保護者等々を対象にした様々な調査に取り組んできた。その中で、私は主として小・中・高等学校の養護教諭が体験した被災体験・避難所活動や学校再開に向けての取り組み、再開後の子どもたちへのケアと教育の取り組み、などについてのインタビュー調査を続けてきた。3県(岩手、宮城、福島)の被災地養護教諭50余名のインタビュー記録をもとに、その体験と果たした役割を明らかにしてその教訓をまとめるべく、現在、整理作業中である。近くその成果を公表しようと考えている。

【職・氏名】准教授 藤田大誠 FUDITA Hiromasa

【学 位】博士(神道学)(平成19年3月 國學院大學 文甲第93号)

【本学就任】平成19年

【略 歴】國學院大學法学部第一部法律学科卒業

國學院大學大学院文学研究科神道学専攻博士課程後期修了

國學院大學研究開発推進機構助教

【専門分野】近代神道史、国学、日本教育史・体育史

【受賞歴等】平成20年度神道宗教学会賞

【最近5年間の主な研究業績等】〔平成22～26年度〕(10点まで)

種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または 該当ページ	発行年月
論文	単	「近代神職の葬儀関与をめぐる論議と仏式公葬批判」	『國學院大學研究開発推進センター研究紀要』第8号 國學院大學研究開発推進機構研究開発推進センター	全339p中 pp.89-124	平26. 3
論文	単	「鎮守の森」の近現代」	『國學院大學 人間開発学研究』第5号 國學院大學人間開発学会	全302p中 pp.83-96	平26. 2
論文	単	「神社対宗教問題に関する一考察—神社参拝の公共性と宗教性—」	『國學院大學研究開発推進センター研究紀要』第7号 國學院大學研究開発推進機構研究開発推進センター	全273p中 pp.41-66	平25. 3
著書	共	國學院大學研究開発推進センター編『招魂と慰霊の系譜—「靖國」の思想を問う—』	錦正社	全343p中 pp.115-167	平25. 3
著書	共	國學院大學研究開発推進センター渋谷学研究会・石井研士編著『渋谷学叢書第3巻 渋谷の神々』	雄山閣	全342p中 pp.13-106	平25. 2
論文	単	「明治神宮外苑造営と体育・スポーツ施設構想—「明治神宮体育大会」研究序説—」	『國學院大學 人間開発学研究』第4号 國學院大學人間開発学会	全198p中 pp.57-76	平25. 2
論文	単	「青山葬場殿から明治神宮外苑へ—明治天皇大喪儀の空間的意義—」	『明治聖徳記念学会紀要』復刊第49号 明治聖徳記念学会	全510p中 pp.96-126	平24. 11
論文	単	「近代日本の高等教育機関における「国学」と「神道」」	『國學院大學 人間開発学研究』第3号 國學院大學人間開発学会	全232p中 pp.71-95	平24. 2
論文	単	「近代国学と日本法制史」	『國學院大學紀要』第50巻 國學院大學	全343p中 pp.105-132	平24. 2
論文	単	「慰霊の「公共空間」としての靖國神社」	『軍事史学』第47巻第3号 軍事史学会	全192p中 pp.56-74	平23. 12

【平成21年度以前の主な研究業績等】(5点まで)

種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または 該当ページ	発行年月
著書	共	由谷裕哉・時枝務編著『郷土史と近代日本』	角川学芸出版	全315p中 pp.104-124	平22. 3
著書	共	國學院大學研究開発推進センター編『靈魂・慰霊・顕彰—死者への記憶装置—』	錦正社	全352p中 pp.299-340他	平22. 3
著書	共	國學院大學研究開発推進センター編『史料から見た神道—國學院大學の学術遺産を中心に—』	弘文堂	全365p中 pp.265-290	平21. 3
著書	共	國學院大學研究開発推進センター編『慰霊と追悼の間—近現代日本の戦死者観をめぐって—』	錦正社	全315p中 pp.3-34,39-71, 281-302他	平20. 7
著書	単	『近代国学の研究』	弘文堂	全500p	平19. 12

【所属学会】神道宗教学会、「宗教と社会」学会、明治維新史学会、神道史学会、日本宗教学会、日本歴史学会、明治聖徳記念学会、日本思想史学会、国史学会、日本近代仏教史研究会、大学史研究会、公益財団法人無窮会、日本史研究会、教育史学会、國學院大學人間開発学会、軍事史学会、法制史学会、日本教育史学会

【最近5年間の学会等および社会における主な活動】

一般財団法人大阪国学院通信教育部講師(平20. 4～現在)、神社本庁総合研究所教学委員(平25. 8～現在)、株式会社神社新報社論説委員(平26. 4～現在)

【教育活動の自己評価】

講義型授業においては、毎回受講生に提出を求めてあるリアクションペーパーなどの意見を参考に、内容の難易度、構成、表現方法などに日々修正を加えている。具体的には、毎回自身が作成したハンドアウトを配布して、全体構成の中で配置したテーマを一回の講義で完結するやうに努め、適宜、音声・画像・映像資料などを用いたり、部分的に演習型授業を組み入れるなどの工夫をしてある。但し、受講生に馴染みの無い高度な内容であっても、高等教育機関である大学であり、「神道」を建学の精神とする國學院大學で教授すべきことは絶対に欠かさないという姿勢は保持し、なるべく噛み砕いた説明を行ふことに努めている。また、授業時に小テストを行ったり、レポート課題などを与へることによって、受講生の学力チェックにも気を配ってきた。ただ、受講生各自の関心の程度や学力に大きな開きがあるため、難易度設定や語り方に苦心してあるが、まだまだ改善の余地があることは否めない。演習型授業では、各自の問題関心を尊重しつつ、社会人となつても基盤となるやうな、アカデミックな文章の書き方や発表方法の体得に重点を置いて指導を行つてある。なほ、人間開発学部「鎮守の森子ども・子育て支援」プロジェクト(寒川神社少年館への学生ボランティア派遣)などの取組みも行つてあるが、ここの二年は希望者が少なく、十分な成果を挙げられていない。

【研究活動の自己評価】

兼担で参加する本学研究開発推進センターの「昭和前期における神道・国学と社会」や「地域・渋谷から発信する共存社会の構築」研究事業、また、平成22～24年度科学研究費補助金基盤研究(C)「帝都東京における神社境内と「公共空間」に関する基礎的研究」(研究課題番号:22520063、研究代表者:藤田大誠)や連携研究者として参加した平成23～25年度科学研究費助成事業基盤研究(C)「近現代日本の宗教とナショナリズム—国家神道論を軸にした学際的総合検討の試み—」(研究課題番号:23520079、研究代表者:小島伸之)では、平成26年度までにそれなりの成果を発表することができた。さらに日本教育史・体育史的研究についても漸く成果を発表しつつある。

【職・氏名】教授 村上佳司 MURAKAMI Keishi

【学 位】修士(教育学)

【本学就任】平成26年

【略 歴】兵庫教育大学大学院 学校教育研究科教科領域教育専攻 修士課程修了
大阪府教育委員会教育振興室保健体育課 指導主事
天理大学体育学部体育学科 准教授

【専門分野】安全教育学、体育方法学、体育科教育学

【最近5年間の主な研究業績等】 [平成22～26年度] (10点まで)

種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または 該当ページ	発行年月
論文	共	「発達障害を持つ子への防災に関する教員の意識」	『日本教育保健学会年報』第21号 日本教育保健学会	pp.29-38	平26. 3
論文	共	「日本のバスケットボールにおけるゲーム様相に関する比較研究—大学と実業団のカテゴリー間比較—」	『Journal of Physical Exercise and Sports Science』vol.19 No.1 日本運動・スポーツ科学学会	pp.133-144	平25. 12
学会発表等	共	Contributing factors of the motivation for receiving therapy about acupuncture in athletes	17th annual congress of ECSS(EUROPEAN COLLEGE OF SPORT SCIENCE) イタリア, パルセロナ		平25. 6
論文	共	「ハンドボール型ゲーム導入の検討—小学校の技能レベル別ゲーム分析から—」	『大阪体育学研究』No50 大阪体育学会	pp.35-45	平24. 3
論文	共	「女子大学生スポーツ選手の静的および動的平衡能と競技特性の関係について」	『Journal of Physical Exercise and Sports Science』vol.17 No.1 日本運動・スポーツ科学学会	pp.107-114	平23. 12
論文	共	Grade and sex differences in safety consciousness, knowledge and behavior in primary school students	『日本健康教育学会誌』Vol.19 No4 日本健康教育学会	pp.289-301	平23. 11
著書	共	『スポーツファシリティマネジメント』(スポーツビジネス叢書)	大修館書店	全295p中 pp.139-162	平23. 7
論文	共	「小学生の安全と防犯教育の関連」	『日本教育保健学会年報』2010年度18号 日本教育保健学会	pp.15-32	平23. 3
その他	単	第62回全日本大学バスケットボール選手権大会 天理大学女子バスケットボール部, 7位	尼崎総合公園体育館		平22. 11
論文	共	「小学生を対象とした安全に関する調査の分析」	『安全教育学研究』第10巻第1号 日本安全教育学会	pp.44-55	平22. 9

【平成21年度以前の主な研究業績等】 (5点まで)

種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または 該当ページ	発行年月
学会発表等	共	Safe Behavior Awareness Survey For Primary School Children	The First Asia-Pacific Conference on Health Promotion and Education (Makuhari Messe)		平21. 6
論文	共	「安全教育のためのeラーニング教材開発に関する基礎研究」	『安全教育学研究』第9巻第1号 日本安全教育学会	pp.49-56	平21. 4
論文	共	「バスケットボールにおける集団的戦術の実践研究」	『Journal of Physical Exercise and Sports Science』Vol.13 日本運動・スポーツ科学学会	pp.81-90	平19. 12
その他	単	第57回西日本学生バスケットボール選手権大会 浜松大学, 優勝	大阪府立体育館		平19. 5
翻訳・翻刻書	共	『トライアングル・オフense』(テックス・ウインター)	大修館書店	全163p中 pp.1-107	平19. 7

【所属学会】日本安全教育学会、日本健康教育学会、日本教育保健学会、日本体育学会、日本体力医学会、日本コーチング学会、日本運動・スポーツ科学学会、ECSS (European College of Sport Science)

【最近5年間の学会等および社会における主な活動】

日本バスケットボール協会 エンデバー委員、科学サポート委員会プロジェクトメンバー(平成25.5～現在)、指導者委員会(平成26.5～現在)、大阪教育大学学校危機メンタルサポートセンター共同研究員(平成24.4～現在)、静岡県教育委員会 通学路推進委員会アドバイザー(平成26.4～現在)、インターナショナルセーフスクール推進委員(平成24.4～現在)、関西女子学生バスケットボール連盟常任理事 強化副部長(平成21.4～26.4)、大阪体育協会 普及員(平成21.4～26.4)、静岡県工業技術研究所 共同研究員(平成21.4～26.4)、八尾市教育委員 中学校給食あり方検討委員会 副座長(平成23.6～24.3)、浜松市スポーツ振興審議会(平成19.4～22.3)

【教育活動の自己評価】

保健体育科教員養成について教育活動の実践の軸として取組んでいる。具体的には、変化の激しい現代社会において保護者、生徒たちも価値観が大きく変化してきた。一方、新設高校、伝統校、教育困難校と様々な教育現場があり、そこでは生徒層、校風が全く異なる。これらの現状や環境等を踏まえ、現在どのような教員が求められているのかを十分検討し教科教育を実践している。

保健体育科教員の養成の目標は、学生たちを教育現場に導くことであり、そのためには、教員採用試験に合格するための指導は不可欠である。大阪府教育委員会保健体育課指導主事として教員採用試験官に携わっていた経験を生かし、面接、模擬授業等の具体的な採用試験対策を実践し、一人でも多くの合格者を輩出させたいと考えている。

前任校では、これらの教育実践を通して教員採用試験合格に繋がったと考えており、本学においても、成果が上がるように継続して取組みたいと考えている。

【研究活動の自己評価】

学校保健の一環として安全教育についての研究にも取り組んでいる。これまで日本は、安心安全な社会とされていたが、近年急速に子どもへの犯罪の急増、自然環境の変動による子どもへの被害が多発している。そこで、子どもの防犯教育、防災教育の研究を実践している。

現在、障害のため災害発生時に危機を察知できない子どもや助けを求められない子どもなど災害弱者となりやすい子どもたちのための防災教育、防災対策の充実を図ることを目的とした研究に取り組んでいる。これらを研究テーマとした内容で科学研究費を獲得した。

また、日本バスケットボール協会科学サポート委員として、日本のバスケットボールが国際大会で活躍するための競技力向上を目指すことを目標に活動している。そこで日本代表チームを含む各国の代表チームや国内トップレベルチームのゲーム映像を基にデータ分析を行い、戦略・戦術策定のための資料作成に取り組んでいる。アンダーカテゴリーの女子日本代表は、世界で上位の成績を収めることができたが、フル代表も含め、また顕著な成績を残すことができていない。継続的にプロジェクトを遂行し日本代表が躍進するように取組みたい。

【職・氏名】教授 山田佳弘 YAMADA Yoshihiro
 【学 位】体育学修士
 【本学就任】平成元年
 【略 歴】東海大学体育学部社会体育学科卒
 東海大学大学院体育学研究科体育学専攻修士課程修了
 【専門分野】運動生理学、体育方法学(弓道)

【最近5年間の主な研究業績等】 [平成22～26年度] (10点まで)					
種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または該当ページ	発行年月
調査・研究報告等	単	「各種授業における視覚的フィードバック法を活かした指導法の開発」	平成24年度國學院大學「特色ある教育研究」成果報告 國學院大學人間開発学部	全19p	平25. 3
学会発表等	単	「弓射動作の呼吸—パフォーマンスに及ぼす活用—」	第152回 日本体力医学会関東地方会		平23. 7
調査・研究報告等	共	「武道授業による教育効果の検証—稽古着使用の意義—」	『國學院大學人間開発学研究』第2号 國學院大學人間開発学会	全230p中 pp.99-110	平23. 2

【平成21年度以前の主な研究業績等】 (5点まで)					
種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または該当ページ	発行年月
調査・研究報告等	単	「大学授業における弓道の初心者一斉指導法の開発—矢束紐装着の実射による「会」形成の有効性—」	『身体運動文化研究』 第14・15巻合併号 第1号 身体運動文化学会	全62p中 pp.47-59	平21. 9
論文	共	「スポーツ場面における動作分析の視覚的フィードバックの有効性について」	平成19年度國學院大學「特色ある教育研究」研究成果報告書 國學院大學人間開発学部		平20. 3
論文	共	「弓道における初心者一斉指導の新しい試み」	『國學院大學スポーツ・身体文化研究室紀要』 第39巻 國學院大學スポーツ・身体文化研究室	全60p中 pp.1-10	平19. 3
論文	共	「弓道の離れにおける呼吸の測定方法について」	『國學院大學スポーツ・身体文化研究室紀要』 第34巻 國學院大學スポーツ・身体文化研究室	全39p中 pp.15-25	平14. 3
調査・研究報告等	共	「長期練習が弓射動作中における呼吸様相に与える影響」(研究資料)	『身体運動文化研究』 第8巻第1号 身体運動文化学会	全56p中 pp.39-53	平13. 3

【所属学会】日本体力医学会、日本体育学会、日本武道学会、運動生理学会、身体運動文化学会

【最近5年間の学会等および社会における主な活動】

日本武道学会評議委員(平17. 4～平22. 3)、國學院大學体育連合会弓道部 監督(平10. 10～現在)

【教育活動の自己評価】

学科の専門教育では、武道実技科目と動作分析演習、導入基礎演習、卒業論文演習などを担当した。各科目に共通して受講学生へ心掛けた事は、能動的に授業へ参加させることであった。ただし、理解できる能力には個人差があり、与えられたテーマに対して学習の方法や進める方向を見失う学生も存在するため、諦めさせないように助言を続けることを続けた。

また、教員をはじめとする指導者養成を目的とする学部であるので、常に指導者としての思考力と実践力の養成を意識させる授業を心掛けた。

さらに、正課授業外においては、体育会弓道部の指導を監督として勤め、技術指導のみに囚われないように、組織運営、指導力の育成、学内外の交渉など、ジェネリックスキルの向上も視野に入れて指導を行った。

【研究活動の自己評価】

弓道を中心に各種運動技能の指導法の開発をテーマに研究を継続している。特に学習者の実践イメージと実際の動作パフォーマンスのズレについて映像を用いて情報提供する。さらに外部測定機器測定データを映像にリンクさせる視覚的フィードバック法を用いることで学習効果を検討している。

【職・氏名】教授 池田 行伸 IKEDA Yukinobu
 【学 位】博士(心理学)(平成6年5月 上智大学 乙第99号)
 【本学就任】平成25年
 【略 歴】上智大学大学院文学研究科教育学専攻博士課程単位取得満期退学
 佐賀大学文化教育学部学校教育課程教授
 佐賀大学大学院医学系研究科博士課程指導教員(併任)
 【専門分野】発達神経心理学、教育相談
 【受賞歴等】日本生理心理学会優秀論文賞(平成13年)

【最近5年間の主な研究業績等】 [平成22～26年度] (10点まで)					
種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または該当ページ	発行年月
学会発表等	共	「自閉症児の身体的側面について」	九州心理学会第74回大会		平25. 11
学会発表等	共	「学童期から青年期にかけての子どもたちの睡眠について」	日本心理学会第77回大会		平25. 9
論文	共	「自閉症児の睡眠についての研究」	『佐賀大学文化教育学部研究論文集』第18集第1号	全5p	平25. 8
論文	共	「児童・生徒が抱えるストレスとその対処法に関する研究」	『子どもの発達と支援研究』第4号 佐賀大学文化教育学部	全4p	平25. 3
編著	共	『子どもの発達と支援—医療、心理、教育、福祉の観点から—』	ナカニシヤ出版	全238p	平24. 4
論文	共	「発達障害が疑われる不登校児についての研究」	『子どもの発達と支援研究』第3号 佐賀大学文化教育学部	全7p	平24. 3
論文	共	「複合パターン刺激に対する空間的情報処理について」	『佐賀女子短期大学研究紀要』第46集 佐賀女子短期大学	全9p	平24. 3
学会発表等	共	「自閉症児と腸障害との関係」	日本心理学会第75回大会		平23. 9
学会発表等	共	「幾何学図形を用いた複合パターン刺激による視覚的大域一局部処理処理の特徴」	日本心理学会第75回大会		平23. 9
論文	共	「育て直し療法を重視して対応した不登校症例の検討」	『子どもの心とからだ』第19巻1号 日本小児心身医学会	pp.52-58	平22. 6

【平成21年度以前の主な研究業績等】 (5点まで)					
種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または該当ページ	発行年月
著書	単	『心を見る心理学』	ナカニシヤ出版	全99p	平20. 4
論文	単	「カナダ・ウィニペグ市の教育視察記」	文部科学省専門職大学院等教育推進プログラム「発達障害と心身症への支援に強い教員の養成」	pp.176-179	平20. 3
その他	単	「スクールカウンセラーから小児科医に伝えたいこと」	『佐賀県小児科医報』第15号	pp.26-28	平18. 11
論文	共	Long-term callosal lesions and learning of a black-white discrimination by one-eyed	Physiology and Behavior Vol 52	全8p	平4
論文	共	Effects of superior colliculus lesion upon a black-white discrimination learning in the albino rat with one eye removed at birth.	Physiology and Behavior Vol 43	全7p	昭63

【所属学会】日本心理学会、日本LD学会、日本小児心身医学会、日本学生相談学会、日本教育心理学会、日本生理心理学会、日本基礎心理学会、日本動物心理学会、日本行動科学学会、九州心理学会

【最近5年間の学会等および社会における主な活動】

佐賀県青少年健全育成審議会委員(平9. 9～平25. 3)、同審議会会長(平13. 8～平25. 3)
 佐賀県情報公開・個人情報保護審査会委員(平13. 9～平23. 6)、佐賀市生活安全推進協議会委員(会長)(平14. 7～平25. 8)、
 佐賀県教科用図書選定審議会委員(平15. 4～平24. 8)、同審議会会長(平15. 4～平24. 8)
 佐賀県発達障害児教育支援事業専門家チーム(平17. 9～平25. 3)
 教員免許更新講習講師(必修科目:佐賀大学(平21. 8～平24. 8))、(選択科目:國學院大學(平26. 8))

【教育活動の自己評価】

最近の研究テーマは発達障害児の理解と支援である。不登校や問題行動の奥には周囲に理解されず反抗的に対処している発達障害児が関与していると言われている。このようなテーマを論じ教育するために2012年4月に「子どもの発達と支援—医療、心理、教育、福祉の観点から—」(ナカニシヤ出版)を編集責任者として刊行した。小児科医を含めそれぞれの専門家が執筆した。子どもを扱う職業を目指す学生の授業に広く用いられている。2008年に一般心理学の講義のために作成した「心を見る心理学」(ナカニシヤ出版)を用いて脳の機能から心を探る講義を行っているが、法学部、文学部等の学生が聴講に来ている。

【研究活動の自己評価】

かつては視覚系の可塑性をテーマにネズミを使った実験的研究を行っていた。幼若時に片眼を摘出したり、脳の一部を破壊すると、残った神経機構が補償的に機能することがネズミの行動観察から分かった。これらは国際誌に掲載された。このような研究をベースに神経系の発達上の問題と考えられる発達障害児への研究に移行した。その一環として近年自閉症児の腸障害や睡眠障害について親にアンケート調査を行った。その結果は日本心理学会等で発表している。

【職・氏名】准教授 石川 清明 ISHIKAWA Kiyooki
 【学 位】教育学修士
 【本学就任】平成23年
 【略 歴】東京学芸大学大学院教育学研究科修士課程障害児教育専攻 修了
 全国療育相談センター聴覚言語相談室室長
 國學院大學幼児教育専門学校専任教員
 【専門分野】幼児教育、特別支援教育・保育、幼児の言語発達

【最近5年間の主な研究業績等】 [平成22～26年度] (10点まで)					
種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または該当ページ	発行年月
学会発表等	単	「保育系学生の伝承遊具作成力について」	『日本保育学会第67回大会発表要旨集』於：大阪総合保育大学・大阪城南女子短期大学	pp.433-433	平26. 5
論文	単	「幼児ならびに伝達障がい児に対する樹木画テストの教示に関する基礎的研究」	『國學院大學人間開発学研究』第5号 國學院大學人間開発学会	pp.53-64	平26. 2
学会発表等	単	「『保育内容』の理解について(3)－伝承遊びを考える－」	『日本保育学会第66回大会発表要旨集』於：中村学園大学・中村学園大学短期大学部	pp.843-843	平25. 5
学会発表等	単	「『保育内容』の理解について(2)－特別支援保育の内容－」	『日本保育学会第65回大会発表要旨集』於：東京家政大学	pp.495-495	平24. 5
論文	単	「長期教育実習の成績評価について(2)」	『國學院大學幼児教育専門学校紀要』第25輯 國學院大學幼児教育専門学校	全127p中 pp.69-77	平23. 12
学会発表等	単	「『保育内容』の理解について」	『日本保育学会第64回大会発表要旨集』於：玉川大学	pp.578-578	平23. 5
論文	単	「長期教育実習の成績評価について」	『國學院大學幼児教育専門学校紀要』第24輯 國學院大學幼児教育専門学校	全42p中 pp.13-19	平22. 12
学会発表等	単	「保育者養成における学習支援について(第2報)」	『日本保育学会第63回大会発表要旨集』於：松山東雲女子大学	pp.259-259	平22. 5

【平成21年度以前の主な研究業績等】 (5点まで)					
種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または該当ページ	発行年月
論文	単	「『保育内容「言葉」の教授内容について」	『國學院大學幼児教育専門学校紀要』第23輯 國學院大學幼児教育専門学校	pp.15-21	平21. 12
学会発表等	単	「保育者養成における学習支援について」	『日本保育学会第62回大会発表論文集』於：千葉大学	pp.374-374	平21. 5
論文	単	「『保育内容』関連教科目における教授内容の検討－『保育内容総論』を中心に－」	『國學院大學幼児教育専門学校紀要』第22輯 國學院大學幼児教育専門学校	pp.23-30	平20. 12
論文	単	「『放課後子どもプラン』における保育活動の検討」	『國學院大學幼児教育専門学校紀要』第21輯 國學院大學幼児教育専門学校	pp.29-33	平19. 12
論文	単	「教育実習での障害児とのかかわり」	『國學院大學幼児教育専門学校紀要』第16輯 國學院大學幼児教育専門学校	pp.1-5	平14. 12

【所属学会】日本音声言語医学会、日本特殊教育学会、日本聴覚医学会、日本耳鼻咽喉科学会、日本保育学会、日本コミュニケーション障害学会

【最近5年間の学会等および社会における主な活動】

全国療育相談センター聴覚言語相談員(平7. 4～現在)、
 青梅市立河辺小学校きこえとことばの教室通級支援委員会講師(平21. 9～現在)、
 江戸川区立鹿本中学校難聴学級専門家診断講師(平22. 3～現在)、
 港区立御成門小学校難聴・言語障害特別支援学級判定委員会講師(平22. 7～現在)、
 神奈川県保育士養成施設協会理事(平15. 5～現在)、
 横浜市立保育所の民間移管にかかる法人選考委員会委員(平19. 4～現在;平21より委員長)、
 日本言語障害児教育研究会理事(平22. 8～現在)、
 全国保育士養成協議会「平成22年度全国保育士養成セミナー・第49回研究大会」実行委員(平22. 1～平23. 3)、
 横浜市子育て支援事業運営事業者選定委員会委員(平24. 4～現在)、
 大田区立入新井第一小学校きこえとことばの教室専門家診断講師(平25. 12～現在)

【教育活動の自己評価】

幼稚園教諭ならびに保育士の資格関連科目を担当し、それぞれ習得しなければならない内容を厳選し、基礎的事項について確実な理解を得ることに重点を置いた。できるだけ保育の具体的場面を紹介して学生が興味を持ちやすく、また、わかりやすい授業を行うことを心がけた。パワーポイントを中心に視聴覚教材の活用と学生の授業参加を積極的に促すために演習形態を取り入れる工夫をした。また、K-SMAPY内の「教材」を積極的に活用したことで授業のポイントが整理されたようであり、その成果は、授業内で適宜実施した小テストや学期末テストの成績向上に現れていると考えられる。

しかし、その一方で、一部の学生にとっては、授業中に集中を欠いたりノートをしっかりと取らなくても授業内容のポイントが把握できなかつたり、内容の理解が不十分であつても困ることが少なかつたようである。これらの対策として、情報の提示期間を限定したり、提示内容の量と回数などを変えたりなど、より効果的な利用法について検討を試みる予定である。

【研究活動の自己評価】

保育者養成において、保育者志望学生の保育者としての成長と「保育内容の理解」を深める過程との関連に焦点を当て、視点を変えて検討することによっていくつかの知見を得、成果の一部を関連学会等で報告した。また、特別な支援や援助を必要とする子どもに対する評価と保育方法に関する研究では、これまであまり取り扱われていながつた投影法に分類される心理テストから描画テストを取り上げ、新たな視点を持って基礎的事項について検討を加え、テストの有効活用の幅を広げようとした。

【職・氏名】教授 神 長 美 津 子 KAMINAGA Mitsuko
 【学 位】教育学修士
 【本学就任】平成25年
 【略 歴】宇都宮大学大学院教育学研究科修了
 文部科学省初等中等教育局幼児教育課教科調査官
 東京成徳大学子ども学部子ども学科教授
 【専門分野】幼児教育学、保育学

【最近5年間の主な研究業績等】 [平成22～26年度] (10点まで)					
種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または 該当ページ	発行年月
論文	単	「これからの『幼保小の連携』に期待すること」	『子ども研究』 Vol.5 大阪樟蔭女子大学子ども研究所	pp. 3-8	平26. 8
論文	単	「幼児の生活を豊かにする行事」	『幼稚園じほう』 第42巻第3号 全国国公立幼稚園長会	pp. 5-11	平26. 6
編著	共	『子どもと楽しむ自然体験活動～保育力をみがくネイチャーゲーム』	光生館	全119p	平25. 3
編著	共	『保育・教職実践演習』	光生館	全181p	平25. 3
編著	共	『3・4・5歳児の指導計画』	小学館	全98p	平25. 2
論文	単	「幼児期の教育と小学校教育との滑らかな接続」	『幼稚園じほう』 第39巻第9号 全国国公立幼稚園長会	pp.5-11	平23. 12
著書	共	『保育の質を高める 園評価の実践ガイド』	ぎょうせい	全178p	平23. 7
著書	共	『地域における保育臨床相談のあり方』	ミネルヴァ書房	全195p	平23. 7
著書	共	『幼児教育の世界』	学文社	全175p	平23. 3
著書	共	『教育課程・保育課程論』	光生館	全169p	平23. 1

【平成21年度以前の主な研究業績等】 (5点まで)					
種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または 該当ページ	発行年月
著書	共	『幼稚園幼児指導要録・保育所児童保育要録記入ハンドブック』	ぎょうせい	全138p	平21. 12
著書	単	『はじめよう 幼稚園・保育所と小学校との連携』	フレーベル館	全159p	平21. 7
著書	共	『保育内容総論』	光生館	全169p	平21. 3
著書	共	『教育課程総論』	北大路書房	全169p	平21. 3
著書	単	『保育のレベルアップ講座』	ひかりのくに	全175p	平15. 11

【所属学会】関東教育学会、日本保育学会、日本子ども社会、日本乳幼児教育学会

【最近5年間の学会等および社会における主な活動】

日本乳幼児教育学会常任理事・保育臨床にかかる資格検討委員会委員長(平成21. 11～現在)、
 日本保育学会編集常任委員(平成23. 9～現在)、
 中央教育審議会教育課程部会専門委員(幼保連携型認定こども園教育・保育要領検討委員)(平成25. 6～現在)、
 保育教諭養成課程研究会理事(平成26. 6～現在)、
 横浜市子ども子育て会議委員・児童福祉審議会委員(平成26. 11～現在)

【教育活動の自己評価】

講義は子ども支援学科の1, 2年生を対象とした教職にかかわる科目であり、まだ保育実践にかかわっての具体的なイメージをもつことができにくい学生たちなので、ビデオや写真等の映像資料を作成し、学生たちの興味や関心、意欲的な学習態度を引き出している。学年が進行するにつれて、最近、学生たちの関心が、「認定こども園」や「保育教諭」の役割や専門性に広がってきているので、今後は、「幼保連携型認定こども園教育・保育要領」の検討委員等での資料を活用し、新たな教材をつくっていきたいと考えている。

【研究活動の自己評価】

日本保育学会、日本乳幼児教育学会、保育教諭養成課程研究会等の委員会活動が増え、なかなか論文執筆等ができないでいる。平成26年度から科学研究費による研究「保育相談力向上を目指す園内研修システムの開発について」に取り掛かったところである。今後は学会発表等を重ね、このテーマについての論文をまとめていきたいと考えている。また、学会での諸活動も「保育者の専門性」に焦点を当て展開しながら、これまでの研究をまとめていきたいと考えている。

【職・氏名】准教授 笹田 弥生 SASADA Yayoi
 【学 位】体育学修士
 【本学就任】平成25年
 【略 歴】日本体育大学大学院体育学研究科体育学専攻修了
 共立女子大学兼任講師
 国士舘大学兼任講師
 【専門分野】体操競技(器械運動)、体育方法、コーチング

【最近5年間の主な研究業績等】 [平成22～26年度] (10点まで)					
種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または該当ページ	発行年月
調査・研究報告等	共	「幼児の基礎運動能力における性差の経年変化—岡山県A幼稚園の1993年2012年の調査より—」	『幼児体育学研究』第5巻 第1号 日本幼児体育学会	全77p.中 pp.65-70	平25. 9
論文	単	採点規則の観点から見たこの4年間の女子の世界のトップの変遷	体操競技・器械運動研究 21号 日本体操競技・器械運動学会	pp.55-58	平25. 3
著書	共	『女子ジュニア選手のためのトレーニングのてびき』	公益財団法人日本体操協会	全117p	平25. 3
著書	共	『体操競技教本』	(財)日本体操協会コーチ育成委員会	pp.38-41, 93-103	平23. 12
その他	共	「中学・高等学校自由演技サンプル集」平成23年～体操競技女子(DVD/CD付き)	(財)日本体操協会	全10p	平23. 5
論文	共	「国際動向 第42回世界体操競技選手権大会報告」	『研究部報』第106号 (財)日本体操協会	pp.12-21	平23. 3
論文	単	「2010 第1回ユースオリンピックシンガポール大会観戦記」	『研究部報』第106号 (財)日本体操協会	pp.22-36	平23. 3
論文	単	「体操競技女子の<オープンエンド採点方式>における得点の変化の一考察」	『体操競技・器械運動学会研究』19号 日本体操競技・器械運動学会	pp.41-43	平23. 3
論文	共	「国際動向 2010アジアジュニア体操競技選手権大会報告女子」	『研究部報』第105号 (財)日本体操協会	pp.12-15	平22. 10
論文	共	「体操JAPAN CUP 2010大会報告女子」	『研究部報』第105号 (財)日本体操協会	pp.43-48	平22. 10

【平成21年度以前の主な研究業績等】 (5点まで)					
種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または該当ページ	発行年月
論文	共	「国際動向2009 国際ジュニア体操競技大会報告女子」	『研究部報』第104号 (財)日本体操協会	pp.56-63	平22. 3
論文	共	「トレーナー資料 女子体操競技における国際競技力比較」	『研究部報』第104号 (財)日本体操協会	pp.124-126	平22. 3
論文	単	「女子における新採点規則の施行と問題点」	『体操競技・器械運動学会研究』18号 日本体操競技・器械運動学会	pp.57-60	平22. 3
論文	共	「国際動向2009 ジャパンカップ大会報告女子」	『研究部報』第103号 (財)日本体操協会	pp.14-28	平21. 9
論文	共	「2006年版採点規則への対応についての一考察」	『研究部報』第95・96合併号 (財)日本体操協会	pp.41-44	平21. 3

【所属学会】体操競技・器械運動学会、日本幼児体育学会

【最近5年間の学会等および社会における主な活動】

独立行政法人日本スポーツ振興センター・スポーツ振興事業助成審査委員(第二部会)(平22. 11～平24. 10)、
 (財)日本体操協会開催、(財)日本体育協会公認コーチ専門講習会(体操競技)講師(平22. 12～現在)、
 (財)日本体操協会コーチ育成委員(平23. 4～現在。現指導者育成委員会)、
 (財)日本体育協会スポーツ選手活用体力向上事業
 葛飾区水元幼稚園体操実技指導(平22. 10)、足立区上沼田小学校体操実技指導(平22. 11)、千代田区立番町幼稚園体操実技指導(平22. 12)、中央区立阪本小学校体操実技指導(平23. 6)、葛飾区立北野小学校講話及び体操実技指導(平23. 6)、連雀学園三鷹市立第四小学校体操講話及び実技指導(平23. 6)、厚木市立依知南小学校講話及び体操実技指導(平23. 6)、墨田区立東吾嬬小学校講話及び体操実技指導(平23. 10)、山口市立大殿小学校体操実技指導(平23. 11)、練馬区立開進第一小学校講話及び体操実技指導(平24. 1)、東京都江東区立第五大島小学校講話及び実技指導(平24. 9)、埼玉県川口市立桜町小学校(講話及び実技指導)(平24. 9)、東京都墨田区立小梅小学校(講話及び実技指導)(平24. 10)、神奈川県鎌倉市立大船小学校(講話及び実技指導)(平24. 11)、東京都江戸川区立南篠崎小学校(講話及び実技指導)(平25. 1)

【教育活動の自己評価】

学科の基幹科目必修「体育概説」を担当。現代の子どもたちの体力低下が危惧される中、幼保小連携につながるであろう「運動遊び」に注目し、身体を動かすことの重要性を実体験や、自らの生活チェックを通して理解を深めた。子どもの誕生から身体の発育発達と運動能力の発達の仕方は座学で知識を得ながら、将来自分たちがどのように子どもたちに接して保育に携わっていかなければならないかの基本的心構えを構築した。学部必修「スポーツ・身体文化IAB」、選択必修「導入基礎実習」「指導法実習」では器械運動を中心に、非日常的な運動が体力の向上に役に立つことを、身体づくり運動も含めて実践し、柔軟性、姿勢等にも影響を与えることを学んだ。3年次演習でもテーマに姿勢を取り上げ、実体験を通して現代社会の生活が、身体を動かす機会を減らし我々の健康や体力を脅かすものであるかを知り、学科での学びの集大成となるようきっかけづくりを行った。正課の授業だけでなく、教員採用試験対策では、器械運動の希望者に体づくり運動、及び身体ほぐしの運動につながる基礎的な運動からの実技練習を行い、技の表面的な出来ばえだけでなく運動の奥の深さや質についても理解と知識を深めるよう指導を行った。

【研究活動の自己評価】

専任教任2年目により、特に担当科目「体育概説」に関してはまだ十分でないため、教材を充実出来るよう努めた。具体的には最新学習指導要領の狙いや、現代の子どもたちが抱える体力低下問題の現況を把握するため、最近の書籍、インターネットサイト等を利用し情報を多く集め、自身の知識の補完をしながら授業に役立てた。特に文科省から出された「幼児期運動指針」に関して、幼児期に重要な運動体験と遊びの関係をこれまで以上に追究してゆくことを心がけ、実授業に還元できる有効な様々な遊びは、実際に学生たちにも遊んでもらい、その重要性を自らの感性で学べるよう努めた。また、今まで競技性の強い器械運動の研究が多かったが、徐々に体力向上のため・健康や姿勢に良い器械運動の研究にシフト出来るよう基盤づくりを行っている。また、固定遊具等で育つ運動能力の開発に関して研究の幅を増やす努力をした。そして、体育の側面から見た自身の保育感の確立に今後も努力していきたい。

【職・氏名】教授 新 富 康 央 SHINTOMI Yasuhisa

【学 位】教育学修士

【本学就任】平成19年

【略 歴】広島大学大学院教育学研究科博士課程教育学専攻科単位取得満期退学
佐賀大学副学長(教育・学生担当)、インディアナ大学客員教授、佐賀大学名誉教授
東京純心女子大学副学長、國學院大學教育系新学部設置室長

【専門分野】教育社会学、臨床教育学、学校教育学

【受賞歴等】佐賀文化賞[学術・文化部門](平成16年)、佐賀大学功労賞(平成20年)

【最近5年間の主な研究業績等】 [平成22～26年度] (10点まで)					
種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または 該当ページ	発行年月
論文	単	「どの子ども安心できる学級—『支持的風土』づくりのポイント」	『児童心理』第68巻第5号 金子書房	pp.1-11	平26. 4
論文	単	「日本における不易と流行～二つの喫緊の課題と提言」	日本教育会編『日本教育』No.422	pp.14-17	平25. 4
論文	単	「いじめ問題の本質は何か—違いから本質を問う、ijime対bullying—」	『教育展望』第59巻第2号 教育調査研究所	pp.4-6	平25. 3
論文	単	「『子どもの目線に立つ』ことの難しさ—『教育』の持つ構造的、内在的困難性」	『児童心理』第66巻第13号 金子書房	pp.1-12	平24. 9
論文	単	「学校において豊かな人間関係を深めることの意義」	文部科学省教育課程課編『初等教育資料』No.890号 東洋館出版	pp.2-7	平24. 9
論文	単	「向上心と教育—『自己価値力』の育成」	『児童心理』第65巻第13号 金子書房	pp.1-13	平23. 9
論文	共	「特別活動における道徳的実践の指導ポイント」	文部科学省教育課程課編『初等教育資料』No.861号 東洋館出版	pp.136-138	平22. 6
論文	単	「魅力ある教師とは」	『児童心理』第64巻6号 金子書房	pp.1-11	平22. 4
論文	単	「総合的な学習と特別活動～4つの基本原理からの関連付け～」	『日本生活科・総合的学習教育学会誌』第17号 初教出版	pp.28-35	平22. 4
論文	単	「特別活動と総合的な学習の時間」	相原・新富・南本編『新しい時代の特別活動』 ミネルヴァ書房	全202p中 pp.92-106	平22. 4

【平成21年度以前の主な研究業績等】 (5点まで)					
種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または 該当ページ	発行年月
論文	単	「特別活動の改訂のねらいと基本方針」	新富康央編『小学校 新学習指導要領の展開・特別活動編』 明治図書	全173p中 pp.11-18	平20. 12
論文	単	「『子ども発・子ども着』の単元開発」	『日本生活科・総合的学習教育学会誌』第8号 初教出版	pp.54-63	平13. 2
論文	単	「学校教育のエートスに関する比較研究—ブルーミントン・レポート—」	日本子ども社会学会編『子ども社会学研究』第1号 ハーベスト社	pp.48-55	平7. 6
論文	単	「教育学の学問構造の一分析—T.S.クーンのパラダイム論に関する一考察—」	日本教育社会学会編『教育社会学研究』第33集	pp.153-164	昭53. 9
論文	単	「頭脳流出—その社会学的分析—」	日本教育社会学会編『教育社会学研究』第29集	pp.108-121	昭49. 11

【所属学会】日本教育社会学会、日本子ども社会学会、日本生活科・総合的学習教育学会、日本臨床教育学会、日本高等教育学会、日本特別活動学会

【最近5年間の学会等および社会における主な活動】

NPO法人スチューデント・サポート・フェイス理事(平14～現在、平22 内閣総理大臣賞受賞)、
全国特別活動研究会顧問(平11～現在)、博報児童教育振興会専門委員会委員長(平25～現在)・専門委員(平21～現在)、
特色ある大学教育支援プロジェクト(特色GP)審査会専門委員(平26)、
全国個を生かし集団を育てる学習研究協議会 会長(平24～現在)、
文部科学省平成20年度学習指導要領実施状況調査結果分析委員会委員長(平25～平26)、
日本子ども社会学会常務理事(平8～現在)、日本生活科総合的学習教育学会常務理事(平4～平24)

【教育活動の自己評価】

配布資料に基づく討論、授業終了時のリアクションレポート等を用い、①既得知識の活用力及び②「問題解決的」ないし「問題研究的」能力の育成を図ろうとした。

【研究活動の自己評価】

新学部設置、新学部新学科の運営で手一杯。従って、学会から期待されていた中範囲理論、解釈論的アプローチに基づく「臨床教育学」の確立に向けての研究は遅れた。しかし、新学習指導要領への対応という教育現場の今日的課題に応える研究(学校教育学)は、進めてきた。

【職・氏名】教授 筒石賢昭 TAKESHI Kensho

【学 位】Ph.D.(平成8年1月 イリノイ大学)

【本学就任】平成26年

【略 歴】東京学芸大学大学院教育学研究科音楽教育学専攻修士課程 修了
 イリノイ大学アーバナ・シャンペーン校(米国)音楽研究科音楽教育学専攻博士課程 単位取得退学
 佐賀大学文化教育学部 教授・佐賀大学文化教育学部附属中学校長
 東京学芸大学大学院教育学研究科 教授・東京学芸大学名誉教授・東京学芸大学附属大泉小学校長

【専門分野】音楽教育のカリキュラム研究、日本伝統音楽教育の研究(尺八の理論と応用的研究)

【受賞歴等】佐賀県音楽協会賞(平成8年)

【最近5年間の主な研究業績等】 [平成22～26年度] (10点まで)

種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または 該当ページ	発行年月
その他	単	尺八演奏:五味政人作曲「萌ゆる春」菊岡檢校作曲「ながらの春」宮田耕八朗作曲「山の朝」牧野由多可「荒城の月幻想」	第31回尺八都山流尺八楽多摩演奏会 国分寺市いずみホール		平26. 7
論文	共	「中国における伝統音楽教育改革の試み」	『東京学芸大学教員養成カリキュラム開発研究センター紀要』第13集	pp.7-18	平26. 4
調査・研究報告等	単	「東アジア(中国・日本)における伝統音楽教育の実態とカリキュラムの比較研究」	「平成25年度広域科学教科教育研究経費究報告書」東京学芸大学	全50p	平26. 4
論文	共	「明治時代における邦楽と洋楽の音楽指導の関わり:中尾都山に見る尺八とヴァイオリン楽譜出版の経緯とその背景」	『東京学芸大学紀要 芸術・スポーツ科学系』第65集	pp.1-14	平25. 10
その他	単	講演:「日本の伝統音楽の歴史-中国との関連性から一尺八のワークショップ」	「南京師範大学音楽教育招待講演会」中国南京師範大学音楽ホール		平25. 9
調査・研究報告等	単	「東アジア(中国)とフィンランドにおける伝統音楽教育カリキュラムの開発」	「平成24年度広域科学教科教育研究報告書」東京学芸大学	全92p	平25. 4
教科書・参考書	共	「初等科楽典 音楽の要素」	初等科音楽教育研究会編「小学校教員養成課程用最新 初等科音楽教育法[改訂版]」音楽之友社	全256p中 pp. 242-245	平23. 2
教科書・参考書	共	「中等科・高等科音楽表現」	中等科音楽教育研究会編「中学校・高等学校教員養成課程用最新 中等科音楽教育法[改訂版]」音楽之友社	全232p中 p.216	平23. 2
その他	共	尺八演奏:唯是震一作曲「合竹の賦」中尾美都子作曲「星・月・花」	「第27回都山流尺八楽多摩演奏会」国分寺市いずみホール		平22. 7
調査・研究報告等	単	「東アジア「中国・韓国・台湾」における伝統音楽教育のカリキュラムと教員養成の研究(1)」	「平成21年度広域科学教科教育研究報告書」東京学芸大学	全51p	平22. 4

【平成21年度以前の主な研究業績等】 (5点まで)

種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または 該当ページ	発行年月
論文	単	「日本伝統音楽の基礎的教授法について一尺八の音楽教育導入への基礎的アプローチ」	『東京学芸大学紀要 芸術・スポーツ科学系』第60集 東京学芸大学	pp.11-30	平20. 10
論文	単	「日中の音楽教育における文化の交流史」	『東京学芸大学紀要 芸術・スポーツ科学系』第59集 東京学芸大学	pp.1-10	平19. 10
調査・研究報告等	共	「日米中の音楽教育における学際的カリキュラムの国際比較研究」	「科学研究費補助金(基盤研究C)研究成果報告書」平成12～13年度	全81p	平14. 4
調査・研究報告等	単	「アメリカ合衆国における音楽標準カリキュラム成立・実施過程の研究」	「科学研究費補助金(基盤研究C)研究成果報告書」平成9～10年度	全56p	平11. 4
論文	単	「American educational influences on Japanese elementary music education from after World War II through the Showa period 1945-1989」	(博士論文) University of Illinois at Urbana-Champaign	全 221p	平8. 1

【所属学会】日本音楽教育学会、日本民俗音楽学会、ISME(International Society for Music Education)、MENC(Music Education National Conference)、音楽教育史学会、日本学校音楽教育実践学会

【最近5年間の学会等および社会における主な活動】

東京学芸大学出版会理事(平20. 4～平26. 3)、日本イリノイクラブ(JIC)理事(平20. 4～平26. 3)

【教育活動の自己評価】

学部の専門教育において、「音楽科教育法」では音楽教育の初等と中等音楽科教育法を担当し、現行の初等・中等教育カリキュラムの問題点や専門性と教育実践との関わりについての基礎力と応用力について実践した。特に内容として伝統音楽に焦点をあて、文化的、歴史的観点から尺八を取り扱った。また「音楽科カリキュラム論」では日本を含む世界の特色ある音楽カリキュラムについて分析的に教育活動を行った。大学院の修士課程において、「音楽教育研究法」では、修士論文の作成にあたり論文の作成方法、研究方法、引用文献のあげ方等細分に至る方法を各自の論文テーマに基づいて実践的に指導した。博士課程では修士論文を元にして、さらなる学問的発展を目指して論文を指導した。大学院レベルではまた常時アメリカやフィンランドなどの欧米や中国、韓国等のアジアからの留学生を迎えて国際的環境の中で音楽教育の研究に取り組み、複数の博士号所得者を輩出した。その他生涯学習に資する大学の公開講座として尺八の研究を10年間行った。

【研究活動の自己評価】

専門に関わる音楽の国際的カリキュラム研究者として、各国において学会発表やフィールドワークを行ったり、また国内外において音楽教育の講演会や尺八の演奏会を多数行ったりした他、音楽を通じた国際交流にも力を注いだ。音楽教育以外でも全国共同利用施設としての東京学芸大学教員養成カリキュラム開発研究センター長として、海外からのカリキュラム研究者を受け入れたり、日本国内外のカリキュラム研究の纏め役として、公開研究会を企画実施した。

【職・氏名】教授 夏 秋 英 房 NATSUAKI Hidefusa

【学 位】文学修士

【本学就任】平成19年

【略 歴】上智大学大学院文学研究科教育学専攻博士前期課程修了
上智大学大学院文学研究科教育学専攻博士後期課程単位取得満期退学
放送大学客員教授

【専門分野】教育社会学・児童社会学・地域社会学

【最近5年間の主な研究業績等】 [平成22～26年度] (10点まで)

種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または 該当ページ	発行年月
論文	単	「教員の「質保証」システムの一環としての教育インターンシップ～往還的な学びによる人間開発をめぐる一考察～」	『國學院大學人間開発学研究』第5号 國學院大學人間開発学会	pp.36-44	平26. 2
評論・ 書評等	単	三木英、櫻井義秀編著『日本に生きる移民たちの宗教生活～ニューカマーのもたらす宗教多元化～』	『カトリック教育研究』第30号 日本カトリック教育学会	pp.100-101	平25. 8
教科書・ 参考書	共	『地域社会の教育的再編～地域教育社会学～』	放送大学教育振興会	全269p中、 pp.62-94、 115-130,145-159, 177-214,233-250	平24. 3
その他	共	『地域社会の教育的再編(テレビ放送教材)』	放送大学教育振興会	全15回出演 (うち7回を主任講師 として担当)	平24. 3
教科書・ 参考書	共	『子どもの教育の原理～保育の明日をひらくために』	萌文書林	全262p中 pp.226-237	平23. 10
論文	共	『地域芸能の継承様式の変容に関する社会学的研究～長野県小海町の人形三番叟をめぐる～』	『國學院大學紀要』第49巻 國學院大學	pp.17-40	平23. 3
著書	共	『子どもの発達社会学--教育社会学入門』	北樹出版	全180p中 pp.78-90	平23. 1
評論・ 書評等	単	『生きる活力の源である「子どもの頃の体験」を補償するには[データで読む教育の今]』	『教室の窓』 vol.31 東京書籍	pp.34-35	平22. 9
評論・ 書評等	単	書評:武藤孝典・新井浅浩編『ヨーロッパの学校における市民的社会的教育の発展』	『カトリック教育研究』第27号 日本カトリック教育学会	pp.62-63	平22. 8
評論・ 書評等	単	『私立大学教員による「リテラシー」養成への挑戦』(書評:井上健ほか編『世界を読み解くリテラシー』)	『図書新聞』 第2974号 図書新聞	p.6	平22. 7

【平成21年度以前の主な研究業績等】 (5点まで)

種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または 該当ページ	発行年月
論文	共	『学生の集団・自然体験に関する一考察～2009年度総合講座の学生アンケートの分析を中心に～』	『國學院大學人間開発学研究』 第1号 國學院大學人間開発学会	pp.78-84	平22. 2
著書	共	『中山間地における地域社会の変容と子どもの生活～長野県・組合立小海中学校区における調査から～(学術フロンティア推進事業第2部門「少子社会における青少年の健全育成」平成19年度研究成果報告書)』	平成15年度～19年度学術フロンティア 推進事業『少子・高齢社会の活性化』に 関する総合的な研究』 聖徳大学生涯学習研究所	全112p	平20. 3
著書	共	『地域教育の創造と展開～地域教育社会学～』	放送大学教育振興会	全310p	平20. 3
著書	共	『教職入門～未来の教師に向けて～』	萌文書林	全201p	平19. 4
著書	共	『福祉コミュニティの研究』	多賀出版	全457p	平8. 2

【所属学会】日本教育社会学会、日本カトリック教育学会、日本子ども社会学会、日本特別活動学会、日本生涯学習学会、こども環境学会、日本地域社会学会

【最近5年間の学会等および社会における主な活動】

特定非営利活動法人 サポートネットほっとピア 理事(平18. 11～現在)、三郷市立丹後小学校PTA副会長・会長・顧問(平22. 4～現在)、子ども若者育成・子育て支援功労者表彰等選考委員(内閣府)(平22. 8～平22. 11)

川崎市立土橋小学校学校運営協議会委員(川崎市教育委員会)(平23～現在)、

千葉市市民自主講座企画選考委員(千葉市教育委員会)(平26. 1～現在)、

東京都生涯学習審議会委員(東京都教育委員会)(平26. 7～現在)

【教育活動の自己評価】

〔ルームおよびゼミの指導について〕2013年度より初等教育学科から子ども支援学科に所属と研究室が異動した。そのため、2つの分野にまたがって指導を充実させる必要がある。ルームとゼミのいずれにおいても、初等・子ども支援双方の学生にとって十分に指導できているのかどうか、とくに初等教育学科生にはルーム生の半数分しか実習訪問指導を割り当てられないこともあり、以前よりもルーム担任との距離を感じさせていることと思う。また、ゼミと教職実践演習はこれまで初等教育学科生中心であったが来年度以降は混在することが予想され、論文指導とともに就職・進路支援などにより一層、気を配らねばならない。

〔講義について〕授業アンケートに示される講義科目の課題は、受講生との双方向性の充実である。現在、どの講義においても毎回リアクションペーパーを書かせているがそれを活用すること、授業内でのワークの導入などの工夫が課題である。これからは初等と子ども支援学科生合同の授業が増えることが見込まれ、双方にとって適切な内容を考えねばならない。

【研究活動の自己評価】

地域社会における住民の学習活動と教育事業に焦点をあてて研究を進めている。長野県南佐久郡小海町をフィールドにした研究については、國學院大學特別研究推進助成を受け、その成果を各年度の報告書にまとめるとともに、國學院大學紀要第49号に共同研究者と共著論文を投稿した。また、学部共同研究助成を受けて教員養成における「質保証」をテーマにした共同研究とシンポジウムを実施し、その成果を國學院大學人間開発学研究第5号に掲載した。さらに、これまでの研究成果を反映させた著作をテキストと放送教材の形で上梓できたので、今後は新たな対象や歴史研究についても成果を重ねてゆきたい。

【職・氏名】准教授 野本茂夫 NOMOTO Shigeo

【学 位】教育学修士

【本学就任】平成23年

【略 歴】東京学芸大学教育学部特殊教育教員養成課程言語障害児教育専攻 卒業
東京学芸大学大学院教育学研究科学校教育専攻幼児教育第一講座 修了
國學院大學幼児教育専門学校 主事

【専門分野】保育臨床相談、保育・幼児教育

【受賞歴等】日本保育学会研究奨励賞(平成2年)

【最近5年間の主な研究業績等】 [平成22～26年度] (10点まで)

種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または該当ページ	発行年月
著書	共	「園の保育相談力向上のための人材育成に関する研究 ―保育臨床をコーディネートする教師の資質向上を目指して―」報告書	平成25年度文部科学省委託「幼児教育の改善・充実調査研究」 國學院大學	全143p中 pp.20-24, 31-42,92-94	平26. 3
著書	共	『「保育臨床をコーディネートする教師」のためのワークショップ研修ガイドブック ―園の保育相談力向上につながる園内研修をめざして―』	平成25年度文部科学省委託「幼児教育の改善・充実調査研究」 國學院大學	全58p中 pp.27-42	平26. 3
論文	単	『『子ども支援』における保育臨床相談の視座』	『國學院大學人間開発学研究』第5号 國學院大學人間開発学会	pp.65-79	平26. 2
その他	単	「幼児のこぼが育つ指導」	『日本語障害児教育研究会第46回大会資料集』 日本語障害児教育研究会	全10p	平25. 8
著書	共	『保育用語辞典(第7版) ―子どもと保育を見つめるキーワード～』	ミネルヴァ書房	全431p 中 pp.189-197	平25. 4
論文	単	「障がいのある子どもの受け入れについて学ぶ」	『保育・教職実践演習』 光生館	全13p	平25. 3
その他	単	「こぼの育ちと子どもの育ち―こぼが育つ支援・指導のあり方を考える―」	『日本語障害児教育研究会第45回大会資料集』 日本語障害児教育研究会	全12p	平24. 8
論文	単	「保育園・幼稚園での特別支援の実情―どの子にもうれしい保育になるために―」	『教育と医学』第60巻第5号 慶応義塾大学出版会	全9p	平24. 5
論文	共	「旧たちばな幼稚園紙芝居文庫」の保育文化史的意義	『國學院大學幼児教育専門学校紀要』第25号 國學院大學幼児教育専門学校	全56p	平23. 12
編著	共	『地域における保育臨床相談のあり方 ―協働的な保育支援をめざして―』	ミネルヴァ書房	全197p	平23. 7

【平成21年度以前の主な研究業績等】 (5点まで)

種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または該当ページ	発行年月
著書	共	『遊び・生活・学びを培う教育保育の方法と技術 ―実践力の向上をめざして―』	北大路書房	全204p	平21. 6
論文	単	「保育者が保育のゆきづまりを乗り越えるとき―保育実践における保育者相互の支え合いの意味―」	『保育学研究』第46巻第2号 日本保育学会	pp.53-64	平20. 12
論文	共	「地域の保育者集団での支え合い」	『発達』No.116, Vol.29 ミネルヴァ書房	pp.78-85	平20. 10
その他	単	「保育の中で気になる子どもたち」	月刊「保育とカリキュラム」連載 フレーベル館		平18.4～ 平19.3
著書	共	『障害児保育入門―どの子にもうれしい保育をめざして―』	ミネルヴァ書房	全231p	平17. 8

【所属学会】日本保育学会、日本教育心理学会、日本発達心理学会

【最近5年間の学会等および社会における主な活動】

日本保育学会 保育臨床相談研修企画委員会 委員長(平23. 10～現在)、日本保育学会 監事(平24. 5～現在)、日本保育学会「保育学研究」編集常任委員(平18. 9～平23. 8)、学校法人渡辺学園(港北幼稚園、認定子ども園 ゆうゆうのもり幼保園)理事(平13. 12～現在)、新宿区幼保連携・一元化事業における特別助言者(平20. 6～平22. 2)、幼保連携型認定子ども園保育要領(仮称)の策定に関する合同検討会議(社会保障審議会児童部会認定子ども園保育専門委員会)委員(平25. 6～平26. 1)

【教育活動の自己評価】

幼児教育・保育の理論と実践を背景に置きながら、学生にとって具体的にわかりやすい授業を工夫してきた。学生にイメージしにくい具体的な幼児の姿や保育実践については、市販の教材だけでなく自作の視聴覚教材を作成しより適切な教材になるよう工夫し準備した。授業では、必ず講義と映像と話し合いを組み合わせ、学生の主体的な学びを支援し、多角的な視点を持って幼児理解や保育実践方法の理解が深められるようにした。加えて、受講学生に体験的な学びが特に必要な分野では、遊び体験や模擬保育体験を取り入れ、講義内容を実感をもって理解できるようにした。そのため、授業評価では、受講学生の理解度や満足度で高い評価を得た。

演習・卒業論文指導では、保育現場を研究フィールドとする研究を推進し、保育現場に学生が入りながら保育実践の中から課題を見つけ出し保育研究としてまとめられるように支援指導した。

対話を中心としたワークショップ研修の方法について研究し、保育者を対象とした研修会で指導するとともに、その経験を授業での学生指導方法として活用し、授業方法の改善に取り組んだ。

【研究活動の自己評価】

幼稚園・保育所・認定こども園における保育臨床相談のあり方について、実践的な研究を継続して行ってきた。障害のある子どもや気になる子ども等、多様な子どもを受け入れている保育施設においてどのような保育を目指したら良いのか、そこでの課題は何か、そして、その課題にどのように取り組むのかといったことをテーマに「どの子にもうれしい保育の研究」を継続して行ってきた。また、そのどの子にもうれしい保育になるための保育実践をどのように支援したら良いのかを「保育臨床相談研修」として現職の保育者を対象としたワークショップ研修会を開催しその研修方法について継続して研究してきた。

加えて、今年度は、幼稚園における園内研修のあり方について研究を進めている。

【職・氏名】助教 廣井 雄一 HIROI Yuichi

【学 位】修士(社会福祉学)

【本学就任】平成25年

【略 歴】東洋大学大学院福祉社会デザイン研究科福祉社会システム専攻修士課程 修了
(社福)日本肢体不自由児協会 心身障害児総合医療療育センター むらさき愛育園 保育士
國學院大學幼児教育専門学校 専任教員

【専門分野】児童福祉、子育て支援、実習教育

【最近5年間の主な研究業績等】 [平成22～26年度] (10点まで)					
種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または該当ページ	発行年月
学会発表等	単	「医療型障害児入所施設で働く保育士の専門性についての一考察」	『一般社団法人日本保育学会第67回大会発表要旨集 2014』	p.472	平26. 4
学会発表等	共	「絵本の読み聞かせの自己学習支援システムの構築と学習効果Ⅰ」	『一般社団法人日本保育学会第67回大会発表要旨集 2014』	p.662	平26. 4
学会発表等	共	「絵本の読み聞かせの自己学習支援システムの構築と学習効果Ⅱ」	『一般社団法人日本保育学会第67回大会発表要旨集 2014』	p.663	平26. 4
論文	共	「昭和三十年代の幼稚園における紙芝居の位置づけ—たちばな幼稚園の使用記録を手がかりとして—」	『國學院大學 人間開発学研究』第5号 國學院大學人間開発学会	pp.147～159	平26. 2
学会発表等	単	「福祉施設における保育士の専門性に関する一考察—実習を終えた学生の記述を中心として—」	『一般社団法人日本保育学会第66回大会発表要旨集 2013』	p.908	平25. 4
論文	共	「『旧たちばな幼稚園紙芝居文庫』の保育文化史的意義」	『國學院大學幼児教育専門学校紀要』第25輯 國學院大學幼児教育専門学校		平23. 12
調査・研究報告等	共	『子育て支援等の実態と政策的展開に関する研究』	平成22年度厚生労働科学研究費補助金(成育疾患克服等次世代育成基盤研究事業)仕事と子育ての両立を支援するサービスの連続性と整合性並びに質の評価に関する基礎的研究(H22-次世代一般-009)総括・分担報告書		平23. 3
学会発表等	共	「保育実習指導における保育所機能理解の取り組み」	日本保育学会第63回大会 於 松山市・松山東雲短期大学		平22. 5
学会発表等	共	「保育所長の資格要件及び責務に関する調査研究」	日本保育学会第63回大会 於 松山市・松山東雲短期大学		平22. 5

【平成21年度以前の主な研究業績等】 (5点まで)					
種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または該当ページ	発行年月
論文	単	『保育実習における相談業務に関する指導の諸課題—実習生の意識調査を中心として—』(修士論文)	東洋大学大学院 福祉社会デザイン研究科		平22. 3
調査・研究報告等	共	平成21年度児童関連サービス調査研究等事業報告書『保育所長の資格要件及び責務に関する調査研究』	財団法人こども未来財団		平22. 3
学会発表等	単	「保育士養成の学生のソーシャルワークに関する意識について」	日本保育学会第62回大会 於 千葉市・千葉大学		平21. 5
論文	共	「保育士養成における福祉系科目の教授内容について」	『國學院大學幼児教育専門学校紀要』第21輯 國學院大學幼児教育専門学校		平19. 12
学会発表等	共	「保育士養成における福祉系科目の相互関連について」	全国保育士養成協議会第46回研究会 (鹿児島市)		平19. 9

【所属学会】日本保育学会、日本重症心身障害学会、日本社会福祉教育学会、日本乳幼児教育学会

【最近5年間の学会等および社会における主な活動】

【教育活動の自己評価】

テーマ別講義科目では、子どもの福祉をテーマに展開した。専門外の学生についても身近に考えられるよう、視聴覚教材を多く取り入れ、グループ討議や発表を中心に進めた。専門教育では、毎週授業外での課題を出し、社会福祉の時事問題に対し、関心を高めるように促した。「教育インターンシップ」担当として、各種団体等への協力依頼、配当を行った。所定の時間外に学内指導を行い、進捗状況の確認と履修学生相互の意見交換を行う機会を設けた。

【研究活動の自己評価】

福祉施設で働く保育士について研究を行った。特に医療型障害児入所施設(旧重症心身障害児施設)で働く保育士にインタビューを行い、その独自性を検討した。学科の共同研究として、絵本の読み聞かせ場面の映像を通じた自己学習支援プログラムの開発を行った。また、学外の共同研究としては、國學院大學で所蔵する旧たちばな幼稚園紙芝居文庫について、当時の幼稚園での使用記録を手がかりにして、幼稚園における紙芝居の位置づけの検討を行った。

【職・氏名】講師 山瀬 範子 YAMASE Noriko

【学 位】修士(教育学)

【本学就任】平成25年

【略 歴】九州大学教育学部卒業

九州大学大学院人間環境学府発達・社会システム専攻教育学コース博士課程単位取得後退学

四国大学短期大学部幼児教育保育科専任講師

【専門分野】教育学、教育社会学

【最近5年間の主な研究業績等】 [平成22～26年度] (10点まで)					
種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または該当ページ	発行年月
学会発表等	共	「社会運動としての保育所民営化反対裁判」	日本子ども社会学会第21回大会		平26. 6
評論・書評等	単	住田正樹著『家庭教育論』	『子ども社会研究』第19号 日本子ども社会学会	pp.178-180	平25. 6
学会発表等	共	「幼児期の子どもの育ち—家庭、地域、幼保、幼児教育産業—」	日本保育学会第66回大会		平25. 5
論文	単	「育児書にみる<父親>像」	『四国大学紀要人文・社会科学編』第39号 四国大学	pp.63-71	平25. 3
論文	単	「育児雑誌にみる<父親>像」	『発達社会学研究』第4号 放送大学大学院文化科学研究科人間発達科学プログラム発達社会学研究室	pp.65-72	平24. 12
その他	共	「幼児の生活実態と保育に対する保護者の意識」	『日本保育学会第65回大会発表要旨集』	pp.435-435	平24. 5
論文	単	「戦後の家族の機能と幼児教育・保育の役割の変遷—育児観と子育て支援—」	『四国大学紀要人文・社会科学編』第37号 四国大学	pp.41-46	平24. 3
著書	共	『子ども社会シリーズ1]子どもと家族』	学文社	全180p中 pp.48-65	平22. 8

【平成21年度以前の主な研究業績等】 (5点まで)					
種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または該当ページ	発行年月
論文	単	「保育士養成における「専門性」の検討—保育士養成課程等検討委員会議事録の分析を通して—」	『四国大学生生活科学研究所年報』第2号 四国大学	pp.47-57	平21. 12
論文	共	「教育者の「子ども観」に関する研究—教師・保育者を中心に—」	『放送大学研究年報』第26号 放送大学	pp.15-24	平21. 3
論文	単	「「育児」概念の捉えなおしの試み—<父親の育児参加>をめぐって」	『九州教育社会学会研究紀要』創刊号 九州教育社会学会	pp.43-51	平20. 3
著書	共	『子どもへの現代的視点』	北樹出版	全238p pp.160-178	平18. 12
論文	共	「「少子化社会対策基本法」立法過程にみる子ども観」	『保育学研究』第44巻第2号 日本保育学会	pp.39-48	平18. 12

【所属学会】日本教育学会、日本保育学会、日本教育社会学会、日本子ども社会学会、日本乳幼児教育学会、子ども環境学会、九州教育学会、九州教育社会学会

【最近5年間の学会等および社会における主な活動】

日本子ども社会学会 事務局員(平21. 7～平23. 7)

【教育活動の自己評価】

保育者養成における初年次教育として、前任校より多様な学生への支援や保育体験学習の指導をおこなってきた。本学着任後は、「特色ある教育研究」に参加し、遊び体験を通じた初年次教育のカリキュラム開発に関わっている。

また、人間開発学部教育実践総合センターにおいて、子ども支援学科の学生を中心に教育ボランティアや教育インターンシップのコーディネートを行っている。特に教育インターンシップにおいては、実習受入先の開拓・調整、学生に対する事前指導や個別指導を行っている。

【研究活動の自己評価】

「父親」をめぐる育児に関する意識の形成・変容に関する研究を行った。父親の育児行為の具体的内容についての定義を試み、育児観の形成過程を明らかにするため、育児雑誌・育児書を基にした分析を行い、父親の独自性を強調した関わりが「父親の育児行為」として捉えられる傾向があること、また、その中で、育児とは「楽しむこと」や「父親の自己の成長の機会であること」が強調されていることを明らかとした。

また、平成25年度文部科学省委託「幼児教育の改善・充実調査研究」に研究協力者として参加し、保育相談力向上のための人材育成に関する研究に関わった。平成26年度においても、保育者の専門性や幼稚園教員の効果的な現職研修のあり方に関する研究に継続して参与している。

【職・氏名】准教授 結城孝治 YUUKI Takaharu
 【学 位】修士(教育学)
 【本学就任】平成25年
 【略 歴】北海道大学大学院教育学研究科博士後期課程単位取得退学
 北海道浅井学園大学北方圏生活福祉研究所 研究員
 國學院短期大学幼児・児童教育学科幼児保育コース 准教授
 【専門分野】臨床発達心理学、保育心理学

【最近5年間の主な研究業績等】 [平成22～26年度] (10点まで)					
種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または該当ページ	発行年月
学会発表等	共	「絵本の読み聞かせの自己学習支援システムの構築と学習効果Ⅰ」	『日本保育学会第67回大会発表要旨集』	p.622	平26. 6
学会発表等	共	「絵本の読み聞かせの自己学習支援システムの構築と学習効果Ⅱ」	『日本保育学会第67回大会発表要旨集』	p.623	平26. 6
学会発表等	共	「ワイヤレスマイク付きビデオを用いた保育実践研究の意義とその可能性」	『日本保育学会第67回大会発表要旨集』	p.30	平26. 6
教科書・参考書	共	『保育・教育課程総論』	大学図書出版	全168p中 pp.54-63	平26. 3
学会発表等	単	「1歳児クラスの集団形成過程における起点となる遊具の配置 -外遊びにおける遊具の配置と保育士のかかわり-」	『日本発達心理学会第25回大会発表論文集』	p314	平26. 3
編著	共	『子どもの育ちを支える発達心理学』	朝倉書店	全160p中 pp.11-21	平25. 1
論文	単	「障害児保育巡回指導における保育士と巡回員との連携」	『乳幼児療育研究』 25 北海道乳幼児療育研究会	pp.88-93	平24. 11
学会発表等	共	「幼稚園・保育所における学童保育研究(1) -5つの都道府県におけるの質問紙による実態調査-」	『日本教育心理学会第53回総会発表論文集』	pp.392-392	平23. 9

【平成21年度以前の主な研究業績等】 (5点まで)					
種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または該当ページ	発行年月
論文	単	「学齢期における異年齢集団の形成について(1) -札幌市における「放課後子どもプラン」の取り組み-」	『國學院大學北海道短期大学部紀要』 第27巻	pp.161-180	平22. 3
学会発表等	共	「生きる力を育む場としての放課後子ども教室の可能性(2) -札幌市における「放課後子どもプラン」の実態調査:札幌市ミニ児童会館を例に-」	『日本子ども社会学会第16回大会発表要旨集録』	pp.60-61	平21. 7
学会発表等	共	「生きる力を育む場としての放課後子ども教室の可能性(1) -放課後子ども教室の課題と“遊び”の可能性-」	『日本子ども社会学会第15回大会発表要旨集録』	pp.107-108	平20. 5
論文	単	「広汎性発達障害をもつ幼児の療育過程におけるラポール形成の問題 -本児を巡る周囲の人々の解釈枠組みのすり合わせ-」	『國學院短期大学紀要』 第25巻 國學院短期大学	pp.117-134	平20. 3
論文	単	「「気になる子ども」の発達支援に向けて -障害児保育巡回指導における保育的観点からのアドバイス」	『國學院短期大学紀要』 第23巻 國學院短期大学	pp.115-136	平18. 3

【所属学会】日本発達心理学会、日本教育心理学会、日本保育学会、日本子ども社会学会、日本臨床発達心理学会

【最近5年間の学会等および社会における主な活動】

社会福祉法人 光星子どもの家福祉会 理事(平20. 4～平25. 3)、日本臨床発達心理士会 資格認定委員(平25. 4～現在)

【教育活動の自己評価】

前任校においては、専門教育として「保育相談支援」を担当し、保育上の困難ケースおよび、家庭支援が必要なケースを模擬事例とし、保護者の視点にたった支援および相談のあり方をテーマに、子どもの発達の現状とその問題点について、保護者とのラポール形成の方法、保護者が抱える自身の問題への気づきを促す方法、保護者と共通理解を結ぶための保護者の子ども理解への促し方など、現場で即時対応可能な実践力育成をめざし、PBL方式で学習支援を行ってきた。

【研究活動の自己評価】

保育所において発達障害を抱える子どもたちの保育のあり方について、個別支援の方法とともに、クラスの中での参加支援のあり方について、保育現場と連携しながら研究を進めてきた。また、放課後子どもプランの全国的な実施に伴い、放課後の児童の交友関係、異年齢集団の中での子ども文化の生成・伝播について研究を進めてきた。

【職・氏名】助教 吉 永 安 里 YOSHINAGA Asato

【学 位】修士(教育学)

【本学就任】平成25年

【略 歴】東京女子大学文理学部心理学科 卒業

東京学芸大学大学院教育学研究科修士課程国語教育専攻国語科教育コース 修了

東京学芸大学附属小金井小学校 教諭

【専門分野】幼児期のことばの発達、小学校国語科教育

【最近5年間の主な研究業績等】 [平成22～26年度] (10点まで)

種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または 該当ページ	発行年月
学会発表 等	共	「絵本の読み聞かせの自己学習支援システムの構築」	日本保育学会大阪大会	ポスター1枚	平26. 5
論文	単	「幼稚園・小学校における「おおきなかぶ」の教授スタイルの様相—自覚的な学びを促す教師の関わりに着目して—」	『國學院大學人間開発学研究』第5号 國學院大學人間開発学会	pp.81-98	平26. 3
著書	共	「1年 ふしぎな動物の世界で遊ぼう」	『「書くこと」の言語活動25の方略』 教育出版	全173p中 pp.8-13	平26. 2
学会発表 等	単	「幼稚園・小学校における「おおきなかぶ」の教授スタイルの様相:「自覚的な学び」の観点から」	第125回広島大会研究発表要旨集 全国大学国語教育学会	全468p中 pp.361-364	平25. 10
著書	単	『ダイヤモンドチャート法—読みを可視化する方略』	東洋館出版社	全107p	平25. 8
論文	単	「子どもの生活に根ざした読書単元の開発—「1年1くみ え本の森へようこそ!」の実践—」	『東京学芸大学附属小金井小学校研究紀要』第35号 東京学芸大学附属小金井小学校	全180p中 pp.19-24	平25. 3
論文	単	「幼稚園における「言葉」の教授スタイルの研究—グラウンデッド・セオリー・アプローチで「おおきなかぶ」の実践を分析する—」	『学芸国語教育研究』第30号 東京学芸大学国語科教育学研究室	全182p中 pp.55-66	平24. 12
論文	単	「特集論文/日々の育ちをとらえてつながりのある指導をつくる」	『月刊国語教育研究』 3月号 日本国語教育学会	pp.10-15	平24. 3
その他	共	国語科指導技術シリーズ4『言語活動を活かす読むことの授業 第5学年「注文の多い料理店」 宮沢賢治』(DVD)	ジャパンライム		平23. 11
論文	単	「私の学習室/読む力・表現力を高める読みの新聞作り—「ごん中山かわらばんを作ろう!」の実践—」	『月刊国語教育研究』 8月号No460 日本国語教育学会	pp.42-43	平22. 8

【平成21年度以前の主な研究業績等】 (5点まで)

種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または 該当ページ	発行年月
論文	単	「つなげ合って学びが生まれる授業づくり—第4学年「一つの花」実践—」	『東京学芸大学附属小金井小学校研究紀要』第32号 東京学芸大学附属小金井小学校	pp.37-40	平22. 3
その他	単	公開授業 4年「ごんぎつね」	KOGANEI授業セミナー		平22. 2
教科書・ 参考書	共	デジタル教科書『新しい国語/書写』	東京書籍		平21. 12
著書	共	『新版 教えて考えさせる授業 小学校』	図書出版	全148p	平21. 11
著書	共	『小学校言語活動の授業をつくる1・2年』	学事出版	全115p	平21. 5

【所属学会】東京学芸大学国語教育学会、日本国語教育学会、全国大学国語教育学会、日本保育学会

【最近5年間の学会等および社会における主な活動】

平成26年度目黒区駒場小学校学校評議員

【教育活動の自己評価】

導入基礎演習では、ルームの学生との関係づくりを大切にしながら、大学で必要とされるリテラシーについて十分な指導を行うことができ、成果があったと考える。また、総合講座では野外炊事の担当となり、学生を丁寧に指導し、充実した活動を行うことができた。総合教養では、アクティブラーニングを意識した授業展開をし、学生の授業へのコミットメントも高かった。またオリエンテーション時に明確な評価規準を提示し、学生の自己評価・相互評価も取り入れて、学生に納得のいく評価を行うことができた。授業者に対しても一定程度の評価を得たものと感じている。

【研究活動の自己評価】

平成25年度に関しては、単著1冊の出版、論文(査読付き)1本の執筆、学会発表1本、科研費の獲得、共著による実践本の執筆を含め、研究活動を充実させることができ、一定程度の成果を上げることができたと思う。

法科大学院

《 研究者教員 》

磯 部	力	教 授	239
小 澤	直 子	講 師	240
佐 藤	彰 一	教 授	241
高 内	寿 夫	教 授	242
武 田	誠	教 授	243
中曾根	玲 子	教 授	244
中 山	一 郎	教 授	245
平 林	勝 政	教 授	246
廣 瀬	美 佳	教 授	247
福 岡	英 明	教 授	248
村 井	のり子	准 教 授	249

《 実務家教員 》

今 井	秀 智	教 授	250
河 合	繁 昭	准 教 授	251
四 宮	啓	教 授	252
中 川	徹 也	教 授	253
村	和 男	教 授	254

【職・氏名】教授 磯 部 力 ISOBE Tsutomu
 【学 位】法学士
 【本学就任】平成22年
 【略 歴】東京大学法学部卒業
 東京都立大学法学部教授、法学部長・社会科学研究科長
 立教大学法学部法学科教授
 【専門分野】行政法

【最近5年間の主な研究業績等】 [平成22～26年度] (10点まで)					
種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または 該当ページ	発行年月
編著	共	『地方自治判例百選』(第4版)	『別冊ジュリスト』215 有斐閣	全232p	平25. 5
著書	単	『新訂 行政法』	放送大学教育振興会	全240p	平24. 3
論文	単	「エリアマネジメントの法的課題」	『ジュリスト』1429 有斐閣	全4p	平23. 9

【平成21年度以前の主な研究業績等】 (5点まで)					
種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または 該当ページ	発行年月
論文	単	「行政システムの構造変化と行政法学の方法」	小早川光郎・宇賀克也編『行政法の発展と変革(上)』 有斐閣	pp.47-67	平成13年
論文	単	「都市空間の公共性と都市法秩序の可能性」	日本法哲学会編『都市と法哲学』 有斐閣	pp.51-63	平成12年
論文	単	「自治体行政の特質と現代法治主義の課題」	『公法研究』第57号 有斐閣	pp.147-177	平成7年
編著	共	『自治体行政手続法』	学陽書房	全339p中 pp.161-228	平成5年
著書	共	『フランス行政法学史』	岩波書店	全436p中 pp.211-436	平成2年

【所属学会】日本公法学会、日本自治学会、警察政策学会、環境法政策学会

【最近5年間の学会等および社会における主な活動】

環境省:中央環境審議会 臨時委員(平13. 2～平26. 1)、総務省:公害等調整委員会 委員(平13. 7～平23. 7)、
 国土交通省:社会資本整備審議会 委員(平15. 2～平26. 1)、総務省:国地方係争処理委員会委員長(平21. 4～現在)、
 (一財)行政書士試験研究センター理事長(平23. 7～現在)

【教育活動の自己評価】

法科大学院で担当する講義科目及び各種演習科目については、とすれば高水準かつ多量になりがちな点を反省し、基礎知識の定着を主眼として、内容を精選した授業になるように心がけている。また定期的に行われている「学生による授業評価」をはじめ、受講生の種々の意見、期末試験結果、教員の相互授業参観などを参考に、授業内容の改善に努めている。

【研究活動の自己評価】

引き続き行政法基礎理論の体系化を研究課題としつつ、とりあえず行政法のコンパクトな教科書を執筆した。また継続的にフランス行政法の理論史研究に取り組んでいる。

【職・氏名】講師 小澤直子 OZAWA Naoko

【学 位】修士(法学)

【本学就任】平成19年

【略 歴】明治大学大学院法学研究科(民事法)博士前期課程修了
明治大学大学院法学研究科(民事法)博士後期課程単位取得退学
明治大学図書館嘱託職員

【専門分野】民法、法情報学

【最近5年間の主な研究業績等】 [平成22～26年度] (10点まで)					
種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または該当ページ	発行年月
論文	単	「研究・実務に役立つ！リーガル・リサーチ入門 第7回 判例を探す」	『情報管理』56巻1号 独立行政法人 科学技術振興機構	pp.36-42	平25. 4

【平成21年度以前の主な研究業績等】 (5点まで)					
種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または該当ページ	発行年月
論文	単	「第二部権利消滅期間の長さ 26 財産管理における親子間の債権、後見に関する債権(民法八三二条・八七五条)」	『権利消滅期間の研究』 信山社		平18. 3
論文	単	「第三部権利消滅期間の起算点 24財産管理における親子間の債権、後見に関する債権(民法八三二条・八七五条)」	『権利消滅期間の研究』 信山社		平18. 3
論文	単	「祭祀財産の承継規定」	『法学研究論集』第2号 明治大学大学院法学研究科	pp.69-85	平7. 3

【所属学会】家族と法研究会、比較家族史学会、日本家族＜社会と法＞学会、日本私法学会、日本ローエイシア家族法部会、法律図書館連絡会、情報ネットワーク法学会

【最近5年間の学会等および社会における主な活動】

ローライブラリアン研究会(平19. 11～現在)、矯正と図書館サービス連絡会(平22. 9～現在)

【教育活動の自己評価】

法学部演習では、1996年法制審議会民法改正要綱の課題を発端として各自報告を行い、議論を通して問題を深めている。併せてリーガル・リサーチの基本を学び、報告を行うに際しアドヴァイスしている。演習の冒頭で新聞記事から家族と法に関連するものを報告し合い、現時点の問題や法改正、裁判にも注意している。夏の合宿では3つのテーマを決めてグループ報告を行い、相互に協力し、意見交換する中で学修の幅を広げている。法科大学院では、リーガル・リサーチを学びつつ学修が深まる様に支援している。

【研究活動の自己評価】

ローライブラリアン研究会に参加し、リーガル・リサーチの研究を進めた。大学だけでなく、公共図書館へもリーガル・リサーチを広めていくことに取り組んでいる。矯正と図書館サービス連絡会では、受刑者や入所者に読書環境が整い社会復帰に役立つ道を探っている。

【職・氏名】教授 佐藤 彰 一 SATO Shoichi
 【学 位】法学修士
 【本学就任】平成24年
 【略 歴】立命館大学大学院法学研究科博士後期課程修了
 立教大学法学部教授
 法政大学大学院法務研究科教授
 【専門分野】民事訴訟法、紛争解決、権利擁護

【最近5年間の主な研究業績等】 [平成22～26年度] (10点まで)					
種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または該当ページ	発行年月
論文	単	「海外での意思決定支援2 パラダイム転換の様子」	『手をつなぐ』2014年12月号 全国手をつなぐ育成会連合会	pp.42-45	平26. 12
学会発表等	単	「日本の障害者の権利擁護 特に民事司法のアクセスと選挙権について」	韓国成年後見学会		平26. 12
論文	単	「海外での意思決定支援1 ジェニーハッチの物語」	『手をつなぐ』2014年11月号 全国手をつなぐ育成会連合会	pp.42-44	平26. 11
論文	単	「虐待事件の検証と防止に向けた取り組み後編」	『手をつなぐ』2014年11月号 全国手をつなぐ育成会連合会	pp.30-32	平26. 11
論文	単	「虐待事件の検証と防止に向けた取り組み前編」	『手をつなぐ』2014年10月号 全国手をつなぐ育成会連合会	pp.32-34	平26. 10
論文	単	「市民後見人養成の課題」	『発達障害社白書』2014年版	p.115	平25. 9
学会発表等	単	「権利擁護と意思決定支援」	日本医療社会福祉学会		平26. 8
論文	単	「範囲が不明確な遺産の分割」	『事例研究 民事法 第2版Ⅱ』 日本評論社	pp.741-768	平25. 4
論文	単	「権利擁護実践における福祉職と法律職の連携について」	国際高等研究所研究プロジェクト報告書『法と倫理のコラボレーションー活気ある社会への規範形成』	pp.99-112	平25. 3
論文	単	「地域権利擁護支援ネットワークと法律家の役割」	司法アクセス学会第5回学術大会報告書	pp.3-17	平24. 10

【平成21年度以前の主な研究業績等】 (5点まで)					
種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または該当ページ	発行年月
著書	単	『その人らしく生きるー成年後見、自己決定からコミュニティフレンドまで』	Sプランニング	全140p	平21. 7
著書	共	現代の法曹倫理	法律文化社	全297p	平19. 10
著書	共	『弁護士活動を問い直す』	商事法務研究会	全300p	平16. 10
著書	共	『現代調停の技法』	判例タイムズ社	全614p	平11. 9

【所属学会】日本法社会学会、民事訴訟法学会、司法アクセス学会、日本成年後見法学会、日本医事法学会、臨床法学教育学会

【最近5年間の学会等および社会における主な活動】

弁護士活動(平12. 9～現在)、調停委員(東京地裁)(平20. 4～現在)、
 原子力損害賠償紛争解決センター仲介委員(平23. 11～現在)、全国権利擁護支援ネットワーク代表(平21. 9～現在)

【教育活動の自己評価】

法科大学院における民事訴訟法の講義と演習、ならびにリーガルクリニックを担当している。いずれの科目も社会実践としての弁護士活動ならびにADR(代替的紛争解決)の調停者の経験を活かしている。講義と演習は、双方向に留意している。基本的には実践活動の中で培った基本問題を素材にして、さまざまな質問を参加学生に投げかけることで、学生の発言を促している。他者評価において成果を上げているとのコメントを頂いているところである。講義教材としての事前配布資料は、A4版で総ページ数300頁を超えるものであり、毎年、学生の理解度に応じて改定を加えている。また演習素材は、民事訴訟法関連の研究者・実務家の討議を経たものであり、一つ一つの質問が原理的な面から考察を加えられている。私自身にとっても、毎回、刺激を受けるものである。

【研究活動の自己評価】

法律家の社会的役割につき研究を続けているが、最近5年間は、知的障害・発達障害者と本人とご家族の支援、いわゆる権利擁護支援の分野の実践を通じて、法、社会、法律家の役割を検討し続けている。福祉領域と法律領域の連携をめぐることは、福祉職、法律職の双方の知見を理論と実践の両面から掛け合わせることで、法と社会の理論について新しい豊かな知見を生み出している。10年ほど前に、こうした研究に着手した時は、福祉職にも法律職にも、民事手続についてのそうした考察を行う人が少なかったが、現在ではかなり人が増えつつある。現実の実定的な制度としては、成年後見と裁判所の民事手続を扱っている。社会的にかなりのインパクトを与える研究であると自己評価している。

【職・氏名】教授 **高内 寿夫** TAKAUCHI Hisao
 【学 位】法学博士(平成2年3月 國學院大學 乙法第2号)
 【本学就任】平成17年
 【略 歴】新潟大学法文学部法学科卒業
 國學院大學大学院法学研究科博士課程後期単位取得満期退学
 立教大学法学部助手
 白鷗大学法学部法律学科教授
 【専門分野】刑事訴訟法、少年法

【最近5年間の主な研究業績等】 [平成22～26年度] (10点まで)					
種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または該当ページ	発行年月
評論・書評等	単	山口直也著『少年司法と国際準則』	『犯罪社会学研究』第39号 現代人文社	pp.110-112	平26. 10
論文	単	「参考人取調べの録音・録画について」	『國學院法學』第51巻第4号 國學院大學法学会	pp.95-133	平26. 3
判例評釈	単	「前科証拠の証拠能力」	『國學院法學』第51巻第1号 國學院大學法学会	pp.83-100	平25. 7
論文	単	「検察官送致後の勾留少年に対する働きかけについて」	『國學院法學』第50巻第3号 國學院大學法学会	pp.1-34	平24. 12
学会発表等	共	「少年院法改正と少年院の処遇」	日本犯罪社会学会第39回大会 (一橋大学)		平24. 10
論文	単	「子どもの権利条約からみる少年院法の改正について」	『國學院法學』第49巻第3号 國學院大學法学会	pp.43-87	平23. 12
論文	単	「子どもの権利条約からみる少年院在院少年の人権」	『國學院法學』第48巻第3号 國學院大學法学会	pp.1-65	平22. 12
判例評釈	単	「犯人の一時的な海外渡航と公訴時効停止の効力」	『速報判例解説』第7号 日本評論社	pp.189-192	平22. 10
判例評釈	単	「上告審における事実誤認の審査方法を示した上で、満員電車内の強制わいせつ事件について、被害者供述の信用性を全面的に肯定した第1審判決及び原判決の認定を是認できないとした事例」	『速報判例解説』第6号 日本評論社	pp.193-196	平22. 4
著書	共	『少年法の理念』	現代人文社	pp.45-61	平22. 4

【平成21年度以前の主な研究業績等】 (5点まで)					
種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または該当ページ	発行年月
論文	単	「裁判員裁判における検察官面前調書の取扱い」	『國學院法學』第46巻第4号 國學院大學法学会	pp.1-54	平21. 3
論文	単	「少年保護観察の課題—『保護観察中の者に対する措置』をめぐって—」	『刑事政策の体系—前野育三先生 古稀祝賀論文集—』 法律文化社	pp.152-168	平20. 4
論文	単	「裁判員制度の構造をいかに理解すべきか」	『國學院法學』第45巻第1号 國學院大學法学会	pp.25-54	平19. 7
著書	共	『刑事司法改革と刑事訴訟法 上巻』	日本評論社	pp.454-488	平19. 5
著書	共	『立法の実務と理論』	信山社	pp.435-470	平17. 3

【所属学会】日本刑法学会、日本犯罪社会学会、日本法社会学会、法と心理学会

【最近5年間の学会等および社会における主な活動】

【教育活動の自己評価】

法科大学院では、実務に必要な知識および法的思考を学生が身に付けることが必要であることから、講義科目では、事前に配付したレジュメで単元のポイントを明示し、授業の終わりに留意事項を示すペーパーを配付し、定期的に小テスト、レポートを実施するなど、知識の定着および法的思考の訓練に配慮した。また、演習科目では、隔週で学生に課題レポートを課した上でレポートに対してコメントをし、学生の弱点を見極めたうえで議論を進めるなど法的思考の涵養に努めた。また、学生の予習、復習のために、基本論点、留意事項、要点テスト、重要判例などをK-SMAPYにアップし、学生の用に供している。なお、ブラッシュアップ委員会の委員長として、専任教員による授業検討会の開催、教員による相互授業見学、学生との懇談会、学生・修了生アンケートなどを実施し、法科大学院全体の教育のあり方を検討した。

【研究活動の自己評価】

刑事訴訟法分野では、裁判員裁判を念頭に置き、参考人取調べの録音・録画、被疑者取調べの適法性、検察官送致後の勾留少年の取扱い、関連する近時の重要判例について分析、提言を行った。また、少年法分野では、少年院法の改正を契機として、関連する国際準則の分析、少年の権利とその制約についての構造分析などを行った。

【職・氏名】教授 武田 誠 TAKEDA Makoto

【学 位】法学修士

【本学就任】平成16年

【略 歴】関西大学法学部法律学科卒業

関西大学大学院法学研究科博士課程(公法学専攻)単位取得満期退学

北陸大学法学部法律学科助教授

【専門分野】刑法

【最近5年間の主な研究業績等】 [平成22～26年度] (10点まで)					
種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または 該当ページ	発行年月
論文	単	「危険犯・小論」	『自由と安全の刑事法学』生田勝義先生古希祝賀論文集 法律文化社	全745p中 pp.65-78	平26. 9
判例評釈	単	「名誉棄損罪における公然性の意義」	『刑法判例百選Ⅱ』各論[第7判] 有斐閣	全255p中 pp.40-41	平26. 8
著書	共	『新・コンメンタール 刑法』	日本評論社	全499p中 pp.306-316	平25. 3
論文	単	「不能犯論」再論	國學院法學 50巻2号 國學院大學法学会	全36p	平24. 9

【平成21年度以前の主な研究業績等】 (5点まで)					
種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または 該当ページ	発行年月
著書	共	『学習コンメンタール 刑法』	日本評論社	全455p中 pp.272-282	平19. 4
論文	単	「「不能犯論」序説」	『國學院法學』第43巻第4号 國學院大學法学会	pp.29-68	平18. 3
論文	単	「遺棄罪の基本問題」	『北陸法学』9巻2号 北陸大学法学会	pp.91-119	平14. 3
著書	単	『放火罪の研究』	成文堂	全163p	平13. 3
著書	単	『わいせつ規制の限界』	成文堂	全175p	平7. 10

【所属学会】日本刑法学会、刑法読書会、判例研究会、日本医事法学会

【最近5年間の学会等および社会における主な活動】

【教育活動の自己評価】

標準コース1年次配当の刑法Ⅰ(各論)、刑法Ⅱ(総論)、標準コース2年次、短縮コース1年次配当の刑事法演習Ⅰ(刑法)を担当している。刑法Ⅰ、Ⅱは講義科目であるが、法科大学院の理念にのっとり、双方向での授業を行っている。受講生の理解度の確認のためには有効な方法である。さらに、彼らの理解度の確認のため、随時、小テストを実施している。刑事法演習Ⅰは、実務家教員との協同によって、理論と実務の両観点から、討論を通じて、学生諸君に具体的な問題の解決策を考えさせている。

【研究活動の自己評価】

研究テーマは「刑法における危険概念」である。その中心的内容は、「危険の実体」ならびにその「認定方法」である。研究の出発点は拙著『放火罪の研究』であるが、その後の論文、「遺棄罪の基本問題」、「「不能犯論」序説」、「「不能犯論」再論」は、この研究テーマの一環として書いたものである。現在、このテーマの集大成としての論文「実行の着手」を執筆中である。

【職・氏名】教授 中曾根 玲子 NAKASONE Reiko

【学 位】法学修士

【本学就任】平成16年

【略 歴】中央大学法学部法律学科卒業

早稲田大学大学院法学研究科博士後期課程(民事法専攻)退学

千葉経済大学経済学部経営学科教授

【専門分野】会社法、金融商品取引法(資本市場法)

【最近5年間の主な研究業績等】 [平成22～26年度] (10点まで)					
種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または該当ページ	発行年月
判例評釈	共	『会社法重要判例』	成文堂	全184p	平25. 10
判例評釈	単	「県の要請の基づき追加融資を決議した銀行の取締役の善管注意義務違反の存否」	『金融・商事判例 融資責任を巡る判例の分析と展開』1411号 経済法令研究会	pp.34-37	平25. 3
判例評釈	単	「ワラントと説明義務」	『別冊ジュリスト214 金融商品取引法判例百選』 有斐閣	pp.52-53	平25. 2
解説・ 解題等	共	『新基本法コンメンタール会社法 I』	日本評論社	pp.501-509	平22. 10

【平成21年度以前の主な研究業績等】 (5点まで)					
種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または該当ページ	発行年月
論文	単	「株式併合・株式分割と正当の理由」	『法学新報』114巻7・8号 中央大学	pp.411-443	平20. 3
論文	単	「フロントランニングに対する規制」	『ジュリスト』1256号 有斐閣	pp.142-148	平15. 11
論文	単	「ストック・オプションの付与と理由の開示」	『酒巻俊雄先生古希記念論文集 21世紀の企業法制』 商事法務研究会	pp.519-536	平15. 3
論文	単	「フロントランニングと自主規制ルールについてーアメリカ証券市場における自主規制機関取組みー」	『奥島孝康先生還暦記念論文集 第一巻 比較会社法研究』 成文堂	pp.259-278	平11. 12
論文	単	「アメリカ商品取引所法におけるインサイダー取引規制についてーインサイド情報の定義と規制の限界ー」	『商品取引所論体系10』 全国商品取引所連合会	pp.45-65	平10. 12

【所属学会】日本私法学会、日仏法学会、証券経済学会、早稲田大学商法研究会、東京商事法研究会、早稲田大学金融商品取引法研究会、中央大学商法研究者の会

【最近5年間の学会等および社会における主な活動】

千葉市情報公開・個人情報保護審議会委員(平18. 4～現在)、千葉市入札適正化・苦情検討委員会委員(平18. 3～現在)、行政書士試験委員(商法)(平18. 4～現在)、市原市入札監視委員会委員(平21. 5～現在)、千葉県がんセンター治験審査会委員(平23. 4～現在)、市原市中高層建築物等紛争調整委員会委員(平23. 4～現在)、千葉県個人情報保護審議会委員(平23. 6～現在)、内閣府情報公開・個人情報審査会委員(平23. 10～現在)、公認会計士試験試験委員(企業法)(平23. 12～現在)、千葉県選挙管理委員会委員(平24. 12～)

【教育活動の自己評価】

法曹養成の教育機関として、2年次後期および3年次前期の演習科目においては、企業社会を巡るさまざまなケースを取り上げ、判例理論が個々の事例の法的解決として一定の意義をもつ一方で、他の類似の事例でも同様の法的解決が可能かどうかについて、判例理論が内在する欠点を浮き彫りにしつつ、法制度に対する理解を深めていくような指導を心掛けている。多様な概念が錯綜している会社法の基礎知識は、2年次前期の講義において、条文に徹した講義を通じて修得することとしている。会社法という法分野は、変化の著しい経済社会に対応すべく、法理論の構築が重要であるが、そうした法状況は、演習における具体的な事例で注意を喚起している。授業で使用するレジュメは、いずれも以上の観点から独自に作ったものである。なお、平成26年に成立した法改正の動向については、適宜、情報を提供している。金融商品取引法は、司法試験の対象科目ではないが、主として上場会社を対象としており、会社法の理解に資するように、企業情報の収集方法を実践し(PC教室での実践)、生の企業情報に触れるなどの授業を試みている。

【研究活動の自己評価】

最近5年間の研究活動は、主として、会社法の法的問題点を中心に論文や判例評釈、解説という形で集約されている。これは、平成17年の会社法の改正により、旧商法時代の法制度が大きく変わったため、関心が、外国法(アメリカ資本市場法)の研究から、わが国の会社法制度の整合性や解釈上の問題点などに移ったためといえる。平成20年に上梓した論文で指摘した株式の併合・分割については、平成26年に改正がされている。平成26年の改正による新たな法的疑問点については、現在論文とすべく検討中である。

【職・氏名】教授 中山 一郎 NAKAYAMA Ichiro
 【学 位】法学修士(LL.M)
 【本学就任】平成21年
 【略 歴】ワシントン大学法科大学院修了(法学修士LL.M)
 コロンビア大学国際関係大学院修了(国際関係学修士MIA)
 信州大学大学院法曹法務研究科准教授
 【専門分野】知的財産法

【最近5年間の主な研究業績等】 [平成22～26年度] (10点まで)					
種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または該当ページ	発行年月
判例評釈	単	「医薬の組合せに関する特許権と間接侵害規定の「物の生産」」	『新・判例解説Watch』2014年4月 日本評論社	pp.269-272	平26. 4
判例評釈	単	「FRAND宣言した標準必須特許の特許権に基づく損害賠償請求」	『平成25年度重要判例解説』 有斐閣	pp.276-277	平26. 4
論文	単	「特許取引市場の機能と差止請求権制限の政策論的当否」	『日本工業所有権法学会年報』36号 有斐閣	pp.121-148	平25. 5
判例評釈	単	「特許発明を実施しない用途が存在する場合の客観的(「にのみ型」)間接侵害の成否」	『新・判例解説Watch』12号 日本評論社	pp.245-248	平25. 4
論文	単	「発明の実施をめぐる共有特許権者間の規律の在り方」	『日本知財学会誌』9巻2号	pp.4-15	平24. 12
判例評釈	単	「無効理由が存在することが明らかな特許権に基づく請求と権利の濫用」	『特許判例百選』第4版 有斐閣	pp.150-151	平24. 4
判例評釈	単	「進歩性判断において、出願後に補充された実験結果を参酌して顕著な効果を認めた事例」	『法学セミナー増刊速報判例解説』9号 日本評論社	pp.281-284	平23. 11
判例評釈	単	「サポート要件と実施可能要件の関係」	『法学セミナー増刊速報判例解説』8号 日本評論社	pp.305-308	平23. 4
判例評釈	単	「均等侵害の成立を肯定した事例(中空ゴルフクラブヘッド事件控訴審中間判決)」	『法学セミナー増刊速報判例解説』7号 日本評論社	pp.251-254	平22. 10
論文	単	「オープン・イノベーションと特許制度」	『日本工業所有権法学会年報』33号 有斐閣	pp.135-160	平22. 5

【平成21年度以前の主な研究業績等】 (5点まで)					
種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または該当ページ	発行年月
論文	単	「保護および利用のバランスと特許権の排他性に関する若干の考察」	隅藏康一編著『知的財産政策とマネジメント』 白桃書房	pp.211-231	平20. 3
論文	単	「大学特許の意義の再検討と研究コモンズ」	知的財産研究所編『特許の経営・経済分析』 雄松堂	pp.301-343	平19. 7
論文	単	「日米バイドール制度と大学発明の特許化・ライセンス」	椋山敬士＝高林龍＝小川憲久＝平嶋竜太編『ビジネス法務大系 I ライセンス契約』 日本評論社	pp.125-162	平19. 2
論文	単	「日米比較からみた特許権と「実験の自由」の関係-「試験・研究の例外」の変遷と課題-」	『社団法人日本国際知的財産保護協会月報』48巻6号 AIPPI	pp.2-38	平15. 6
論文	単	「『プロパテント』と『アンチコモンズ』-特許とイノベーションに関する研究が示唆する『プロパテント』の意義・効果・課題-」	経済産業研究所ディスカッションペーパー	全41p	平14. 11

【所属学会】日本工業所有権法学会、著作権法学会

【最近5年間の学会等および社会における主な活動】

防衛省開発航空機の民間転用に関する検討会委員(平22)、
 新型インフルエンザワクチン開発・生産体制整備事業評価委員会新型インフルエンザワクチン開発・生産体制整備事業評価委員会委員(平22～現在)

【教育活動の自己評価】

法科大学院の講義では、レジュメ及び教科書の該当箇所を1週間前に配布し、予習を促して、双方向授業を心がけた。また、毎回の講義冒頭に、前回の復習を指名しながら行うとともに、講義3回毎に1回の小テストを行い、15回の講義では計4回の小テストを行い、知識の定着を図った。演習では、ほぼ毎回、事前に課題を課し、受講生の起案を基に議論を行うとともに、添削も行った。学部向け講義では、講義冒頭に、身近なニュース等から講義内容に関連する内容を紹介し、スムーズに講義に入っていくように工夫するとともに、具体的な事例を数多く取り上げ、よりイメージがつかみやすいようにしている。

【研究活動の自己評価】

イノベーションの変化に適合した特許制度の在り方を中心に研究を進めた。具体的なテーマとしては、差止請求権制限の可否、特許権の共有、オープン・イノベーションと特許制度との関係などであるが、これらの研究においては、方法論としても、比較法や法と経済学的アプローチを試みている。同時に、特許法の解釈論上の論点についても検討を行い、その成果は判例評釈等の形で公表している。

【職・氏名】教授 平林 勝政 HIRABAYASHI Katsumasa

【学 位】法学修士

【本学就任】昭和53年

【略 歴】東京教育大学文学部社会科学科法律政治専攻卒業

東京都立大学大学院社会科学部基礎法学専攻博士課程単位取得満期退学

東京都立大学法学部助手

【専門分野】医事法、民法

【最近5年間の主な研究業績等】 [平成22～26年度] (10点まで)					
種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または該当ページ	発行年月
その他	単	「医行為をめぐる介護福祉の動向と課題」	『介護福祉学事典』 ミネルヴァ書房	pp.770-771	平26. 10
その他	単	「保健医療に関する制度」・「医行為に関する法律」	『介護職員 実務者研修テキスト 別巻 医療的ケア』 長寿社会開発センター	全349p中 pp.21-30	平25. 6
その他	共	「シンポジウム『医療安全とプロフェッション』 の趣旨と基本的枠組み」	『年報医事法学』26号 日本医事法学会	pp.151-153	平23. 8
その他	単	「討論に向けての論点整理」	『年報医事法学』26号 日本医事法学会	pp.180-183	平23. 8
論文	共	「誤嚥の裁判例を読み直す 1～6」	『訪問看護と介護』 2010年10月号 ～2011年3月号 医学書院	①pp.816-819 ②pp.904-909 ③pp.1015-1019 ④pp.60-63 ⑤pp.152-156 ⑥pp.244-249	平22. 10
その他	単	「巻頭言 チーム医療と薬剤師の業務」	『年報医事法学』 25号 日本医事法学会	pp.5-9	平22. 7
その他	単	「巻頭言 利他主義と法曹倫理」	『受験新報』 2010年7月 法学書院	p.5	平22. 7

【平成21年度以前の主な研究業績等】 (5点まで)					
種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または該当ページ	発行年月
論文	単	「在宅で死を迎える患者への対応をめぐる法的諸問題」	『シリーズ明日の在宅医療 第2巻 在宅医療の諸相と方法 第11章』 中央法規出版	全387p中 pp.235-270	平21. 4
論文	単	「医行為をめぐる業務の分担」	『人の法と医の倫理』 信山社	全768p中 pp.573-619	平16. 3
論文	単	「インフォームド・コンセント;各国の法状況－ 日本」	『年報医事法学』 第8号 日本医事法学会	pp.58-77	平5. 6
論文	単	「医療過誤訴訟における「過失の推定」理論 についての一考察」	『國學院法學』第17巻第4号 國學院大學法学会	pp.1-42	昭55. 3
論文	単	「プロフェッショナル・ネグリジェンスとしての 医療過誤」	『現代損害賠償法講座第四巻:医 療事故・製造物責任』 日本評論社	全494p中 pp.41-70	昭49. 11

【所属学会】日本医事法学会、世界医事法学会

【最近5年間の学会等および社会における主な活動】

日本医事法学会 理事(平3. 1～現在)・代表理事(平16. 1～平22. 1)、
日本さい帯血バンクネットワーク正会員(平12. 1～平26. 8)、骨髄移植推進財団評議員(平15～平25)、
東京都「医療審議会」委員・同「法人部会」委員(平19～現在)、日本看護協会「業務委員会」委員(平23. 11～平25. 11)、
厚生労働省「医道審議会」薬剤師分科会委員・同分科会倫理委員会委員(部会長代理)(平20. 6～現在)、
厚生労働省「介護職等によるたんの吸引等の実施のための制度の在り方に関する検討会」委員(平22. 7～平23. 6)、
厚生労働省「専門医のあり方に関する検討会」委員(平24. 6～平25. 3)

【教育活動の自己評価】

授業においては、毎時間講義レジュメをあらかじめ配布し、学生の予習の便を図るとともに、その理解度の向上と授業の効率化に努めてきた。民法については、具体的事例の検討を通して、法と解釈と適用を学生が会得することができるよう努めている。また、医事法については、民法・民事訴訟法に関する学生の基礎的な知識を確認するとともに、それを具体的事案の解決において、いかに活用しうるかという点に意を用いている。

【研究活動の自己評価】

ここ十数年来、十分な研究活動ができずにいるが、「在宅医療と訪問看護をめぐる法的諸問題」を追究する中で、「医行為」をめぐる現行法の構造をふまえつつ、タスク・シフティングとスキル・ミックスをキーワードに、医療スタッフの業務の分担と連携の在り方に関する将来像を明らかにするべく研究を続けている。

【職・氏名】教授 廣瀬 美佳 HIROSE Mika

【学 位】法学修士

【本学就任】平成17年

【略 歴】早稲田大学大学院法学研究科修士課程(民事法学専攻・民法専修)修了
早稲田大学法学部助手
都留文科大学文学部社会学科助教授

【専門分野】民法、医事法、環境法

【最近5年間の主な研究業績等】 [平成22～26年度] (10点まで)

種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または 該当ページ	発行年月
判例評釈	単	「美容整形術についての術前説明義務(2) —豊胸(東京地裁平成17年1月20日判決)」	甲斐克則=手嶋豊編『別冊ジュリスト 医事法判例百選[第2版]』 有斐閣	pp.74-75	平26. 3
論文	単	「平成25年法律第47号による精神保健福祉法改正と成年後見制度 —医療における代諾の観点から—」	五十嵐敬喜=近江幸治=棚澤能生『民事法学の歴史と未来 田山輝明先生古稀記念論文集』 成文堂	pp.513-530	平26. 3
論文	単	「認知症高齢者への人工的水分・栄養補給をめぐる法的問題」	実践 成年後見 No.42 民事法研究会	pp.70-79	平24. 7
判例評釈	単	「チーム医療における総責任者と説明義務 最一判平成20年4月24日(民集62巻5号1178頁)」	『法の支配』第163号 財団法人 日本法律家協会	全15p	平23. 10
判例評釈	単	「渡良瀬川沿岸鉍毒農作物被害事件 —1970年代の足尾鉍毒事件(公害等調整委員会昭和49年5月11日調停)」	淡路剛久=大塚直=北村喜宣編『別冊ジュリスト 環境法判例百選[第2版]』 有斐閣	全2p	平23. 9
翻訳・ 翻刻書	単	「8.『EU廃棄物法令の実施状況報告書』に関する調査」	『環境省請負調査 平成22年度 国際環境法制情報収集分析業務報告書 各論編 Part-2 自然保護と物質循環—』 社団法人商事法務研究会	pp.127-157	平23. 3
論文	単	「医療における代諾の観点からみた成年後見制度に関する覚書」	『高齢社会における法的諸問題 —須永醇先生傘寿記念論文集—』 酒井書店	pp.253-271	平22. 9

【平成21年度以前の主な研究業績等】 (5点まで)

種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または 該当ページ	発行年月
判例評釈	単	「第1の基本契約に基づく金銭の貸付けに対する利息制限法所定の制限を超える利息の弁済により発生した過払金を、過払金発生後に締結された第2の基本契約に基づく後発債務へ充当することの可否等(最二判平成20年1月18日金判1284号20頁)」	『法の支配』第150号 財団法人 日本法律家協会	pp.82-91	平20. 7
判例評釈	単	「保存された男性の精子を用いて当該男性の死亡後に行われた人工生殖により女性が懐胎し出産した子と当該男性との間における法律上の親子関係の形成の可否(最高裁平成18年9月4日第二小法廷判決時1419号384頁)」	『法律のひろば』第60巻第6号 ぎょうせい	pp.47-53	平19. 6
論文	単	「制限利息超過貸金(いわゆるグレーゾーン金利)をめぐる期限の利益喪失と支払いの任意性 —最二判平成十八年一月十三日民集六〇巻一号一頁とこれに続く一連の最高裁判決の研究を中心に—」	『國學院法學』44巻4号 國學院大學法学会	pp.157-205	平19. 3
判例評釈	単	「中絶胎児を『廃棄物』として処理した事例(横浜地判平17・5・12)」	宇都木伸・町野朔・平林勝政・甲斐克則編『別冊ジュリスト 医事法判例百選』 有斐閣	pp.102-103	平18. 9
論文	単	「土壌汚染対策法施行から3年が経過して —その果たしてきた役割とみえてきた課題」	『環境管理』第42巻第6号 (社)産業環境管理協会	pp.66-76	平18. 6

【所属学会】日本精神神経学会、日本医事法学会、法と精神医療学会、日本私法学会、日本農業法学会、環境経済・政策学会、日本法社会学会、環境法政策学会、日本成年後見法学会、日本政治学会

【最近5年間の学会等および社会における主な活動】

西東京市保健福祉サービス苦情調整委員会委員(平20. 8～平26. 7)、同委員会副委員長(平20. 8～平25. 3)

【教育活動の自己評価】

(1)法科大学院における教育活動:

環境政策(前期)においては、現在の我が国の環境法体系の全体像を図式化して示した上で、個別のテーマごとに、当該分野をめぐる事件の経緯や判例・立法の動向を、それらの社会的・経済的・政治的背景とともに年表化したものや当該分野に関する各種データ等の資料などの教材を担当教員が独自に開発・作成し、判例解説等の他の資料と併せて事前に配布しておくことで、予め当該分野の全体像を把握した上で授業に臨めるよう工夫するとともに、これら教材に当該テーマに関する参考文献等を明記することで、より深く学びたいと考える学生の予習・復習に資するよう、配慮している。また、ビデオ教材を用いるなどして、実際の生の事件がどのようなものであったか具体的にイメージさせるよう、心懸けている。そして、後期の環境法においては、演習形式の授業で判例の検討・研究や事例問題に取り組みさせる(随時、〇×式や論述式の試験も行なっている)中で、より実践的な能力を養うことができるよう、工夫している。民法V(事務管理・不当利得・不法行為)については、毎回、事前の予習用に配布する教材レジュメに事例問題を盛り込んだり関連する資料等を添付したりすることにより、学生が法解釈論を具体的事案の中でイメージし理解するための一助となるよう、工夫している。また、随時、授業時に〇×式や論述式の小テスト等を行なうことにより、各学生に当該時点での自らの理解度を自覚させるよう、心懸けている。

(2)学部における教育活動:

医事法(2013年度まで後期/2014年度より前期)において、まず、主として民法の観点から、患者が診療ないし医療を受ける場合の法律関係の基礎について説明した上で、患者の承諾と医師の説明義務(いわゆるインフォームド・コンセント)の理論と、患者に承諾能力がない場合の代諾をめぐる諸問題につき、法学部以外からの履修者がいることにも留意しつつ、判例百選のコピーや関連省庁等が公表している資料をプリント・アウトしたもののみならず、担当教員が独自に開発・作成した教材をも配布、これらに基づいた講義をすることにより、当該問題を学生自身にも起こり得る身近なものとして意識しながら学んでもらうよう、工夫している。

【研究活動の自己評価】

「主な研究業績」においても示したように、近年は、従来専門としてきた環境法や医事法、いわゆるグレーゾーン金利ないし過払金をめぐる問題につき、論文・判例評釈・翻訳を発表してきた。また、現役の実務法曹が多く出席している(財)日本法律家協会・民事法判例研究会に参加し、ときに報告を担当することにより、自身の研究活動についても「理論と実務の架け橋」を意識したものとなるよう、心懸けている(なお、これら判例研究報告をはじめ、今後、雑誌等で発表する予定の論稿が数本ある)。

【職・氏名】教授 福岡 英明 FUKUOKA Hideaki
 【学 位】博士(法学)(平成14年3月 中央大学 法博乙第63号)
 【本学就任】平成16年
 【略 歴】中央大学法学部法律学科卒業
 中央大学大学院法学研究科博士後期課程公法専攻単位取得満期退学
 松山大学法学部法学科教授
 【専門分野】憲法

【最近5年間の主な研究業績等】 [平成22～26年度] (10点まで)					
種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または該当ページ	発行年月
著書	共	『フランスの憲法判例Ⅱ』	信山社	全426p中 pp.220-224	平25. 3
著書	共	『フランス憲法と統治構造』	中央大学出版部	全319p中 pp.35-55	平23. 9
著書	共	『企業の憲法的基礎』	日本評論社	全218p	平22. 7

【平成21年度以前の主な研究業績等】 (5点まで)					
種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または該当ページ	発行年月
著書	共	『議会の役割と憲法原理』	信山社	全262p中 pp.243-262	平20. 12
著書	共	『日本の男女共同参画政策』	東北大学出版会	pp.212-222	平17. 3
著書	共	『世界のポジティブ・アクションと男女共同参画』	東北大学出版会	pp.167-184	平16. 3
著書	共	『フランスの憲法判例』	信山社	pp.302-305, 312-317	平14. 9
著書	単	『現代フランス議会制の研究』	信山社	全303p	平13. 3

【所属学会】日本公法学会、全国憲法研究会、憲法理論研究会

【最近5年間の学会等および社会における主な活動】

日弁連法務研究財団法科大学院認証評価事業評価員(平22～現在)

【教育活動の自己評価】

1年生向けの授業では最高裁判例の論理とこれを批判する学説の論理を理解することに重点を置き、基本的知識が定着するように小テストや事例問題の論述を求める宿題レポートを複数回課している。2年生、3年生向けの授業では、判例をベースにした事例問題や司法試験の過去問題を素材にして、事案の分析能力、基本的知識の運用能力、文書の作成能力を高めるべく指導している。1年生と同様に小テスト、宿題レポートを複数回課している。

【研究活動の自己評価】

停滞している。フランス憲法における大統領制について若干の進展があったにとどまる。現在、憲法上の人権規定の私人間効力の問題と公務員の政治活動規制について研究を進めているところであるが、公表するに至っていない。

【職・氏名】准教授 村井のり子 MURAI Noriko
 【学位】商学士
 【本学就任】昭和63年
 【略歴】小樽商科大学商学部卒業
 一橋大学法学部助手
 カリフォルニア大学バークレー校 東アジア図書館ライブラリアン
 【専門分野】法情報学、法律文献学

【最近5年間の主な研究業績等】 [平成22～26年度] (10点まで)					
種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または該当ページ	発行年月
学会発表等	共	「法律系データベース利用の現状と展望～どう使われ、そしてどう使われていないか～」	『情報ネットワーク・ローレビュー』第12巻 商事法務	全325p中 pp.209-240	平25. 11
その他	共	『龍谷大学法情報研究会の歩み 2001年～2013年』	日本評論社	pp.49-53	平. 25
論文	単	研究・実務に役立つ！リーガル・リサーチ入門 第4回 法令の解説	『情報管理』第55巻第10号 科学技術振興機構	pp.754-759	平25. 1
著書	共	『リーガル・リサーチ』第4版	日本評論社	全435p中 pp.241-377	平24. 4

【平成21年度以前の主な研究業績等】 (5点まで)					
種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または該当ページ	発行年月
著書	共	『リーガル・リサーチ』第3版	日本評論社	全407p中 pp.227-351	平20. 3
その他	共	DVD:『わかりやすい法情報の調べ方』	商事法務		平19. 10
論文	単	パネル・ディスカッション 「Beyond リーガル・リサーチ」	『情報ネットワーク・ローレビュー』6号 商事法務	pp.259-287	平18. 8
論文	単	「公共図書館におけるリーガル・リサーチ」	『みんなの図書館』345号 教育資料出版会	pp.2-20	平18. 1
翻訳・翻刻書	共	『疑わしきは… ベルシヨー教授夫人殺人事件』	日本評論社	全341p	平7. 4

【所属学会】情報ネットワーク法学会、法律図書館連絡会、ロー・ライブラリアン研究会

【最近5年間の学会等および社会における主な活動】

【教育活動の自己評価】

法科大学院生(未修・既修共)必修の実務基礎科目であるリーガルリサーチの授業を実務家教員とともに担当しており、教材は拙著『リーガルリサーチ』第4版を使用している。リーガル・リサーチはほかの講義科目すべての履修に不可欠な学問として位置づけられるため、基本的な法情報収集のスキルを獲得させるべく、重要な資料への認識、多角的なメディアを駆使しての先端的なリサーチ実践をさせるための努力をしてきた。分析能力、判断能力を深めるための事例研究を継続的に行ってきた。平成23年度まではリーガル・ライティングの講義も担当し、法科大学院を卒業し、実務についてからこそ発揮できる文書能力の涵養のために、演習課題の吟味、模索を重ねてきた。

【研究活動の自己評価】

2003年初版の『リーガルリサーチ』は10年を経て2012年には第4版を刊行し、類書を見ない総合的な法情報調査書として定着をしたと評価を得ている。2014年には電子書籍として刊行され、現代的なメディアにも対応することとなった。研究会活動としてはローライブラリアン研究会(研究会場、会員数など事務局の中心部分を裏方としても支えている)、龍谷大学法情報研究会に参加し、論文執筆や公開研究会での発表、ディスカッションに積極的な参加をしてきた。法情報学については先駆的な役割を果たしていきたいと思っている。

【職・氏名】教授 今井 秀智 IMAI Hidenori
 【学 位】法学士
 【本学就任】平成16年
 【略 歴】中央大学法学部政治学科卒業
 司法研修所司法修習生(43期)
 東京地方検察庁検事ほか
 弁護士登録(東京弁護士会)
 【専門分野】刑事訴訟法、刑事訴訟実務

【主な研究業績等】

種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または 該当ページ	発行年月
著書	単	『kenpo! map』(憲法マップ)	一般社団法人リーガルパーク	全8p	平25. 12
論文	単	「臨床法学教育としての『法教育』授業の実践」	『法学セミナー』690号 日本評論社	全3p	平24. 7
著書	単	『実録！法教育』/『実録！模擬裁』	一般社団法人リーガルパーク	全94p/全4 0p	平23.4/ 平24.3
論文	単	「臨床法学教育としての『法教育』授業の実践」	『法学セミナー』690号 日本評論社	全3p	平24. 7
著書	単	『ごご検事件簿 罪作りな人々』	小学館	全191p	平14. 10
著書	共	『弁護実務シリーズ1・刑事編』	東京法令出版社	pp.96-126	平14. 4
著書	共	『みんなの陪審裁判』	現代人文社	全158p	平13. 2
著書	単	『ごご検事件簿』	共同通信社/小学館(文庫本)	全237p	平14. 2
論文	単	「平成事件捕物帳(1～24)」	『法学セミナー』532号～555号 日本評論社	計48p	平11. 4
著書	共	『検察官の仕事が分かる本』	法学書院	pp.125-143	平10. 4
論文	単	「保険金詐欺事案の捜査手順について」	『捜査実務セミナー』 東京法令出版	全10p	平7. 7

【主な実務・社会的活動等】

PL訴訟(スバル車部品の欠陥認める 富士重工業に30万円賠償命令)(平成19. 4)
米国捜査共助に基づく起訴前証人尋問の実施
逃亡被告人に対する勾引状執行(検事現職時代)
東京弁護士会司法改革推進センター・陪参審部会(現・裁判員制度刑事手続部会)(平成10～16年)
まちかど・法律ネットワーク(通称「まちネット」)事務局長(平成14～現在)
法教育普及発展を目的とする一般社団法人「リーガルパーク」設立・代表理事就任(平成22年11月)
井戸地下水利用権に関する行政訴訟(旧戸田村・沼津市の過失責任を認め600万円の賠償を命じる 平成24年5月9日控訴審判決・上告棄却確定)
立憲主義教育教材「kenpo! map(憲法マップ)」を利用した小中学校における出張講義

【所属学会】刑事政策学会、臨床法学教育学会、法と教育学会

【教育活動の自己評価】

実務家教員(検察官、弁護士)としての実務経験を活かし、理論と実務の架橋をめざして多くの事例を用いた双方向性型授業を行い、また、法科大学院生による小・中学校での法教育授業の実践を通じて、法の基礎にある思想や価値の理解を深め、学生の多面的かつ統一のとれた実務能力開発を支援している。

【研究活動の自己評価】

法科大学院生による法教育授業の正課科目への導入を目指し、3年にわたり共同研究を実施して研究を進め、平成26年度より、2年次後期後半選択科目2単位の「リーガルクリニック(法教育)」という科目名で、全国初の正課導入を実現させた。他方、自らも独自に開発した立憲主義教材(「kenpo! map(憲法マップ)」)を用いて、小・中学校のみならず、一般向けにも講義・講演を行い、法律専門家ではない一般人を対象として法の価値や意義を教える「法教育」の全国的な普及発展に努めた。

【職・氏名】准教授 河合 繁 昭 KAWAI Shigeaki
 【学 位】学士(法学)
 【本学就任】平成26年
 【略 歴】司法研修所修了
 弁護士として志澤綜合法律事務所入所
 弁護士法人渋谷パブリック法律事務所入所
 【専門分野】弁護士(一般民事・家事・刑事他)、登録政治資金監査人

【主な研究業績等】					
種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または 該当ページ	発行年月
著書	共	『社会生活トラブル合意書・示談書等作成マニュアル』	新日本法規出版	(加除式)	平26. 2
著書	共	『一番わかりやすい就業規則の改定方法』	税務経理協会	全177p	平24. 3
著書	共	『派遣トラブル相談ハンドブック』	新日本法規出版	全385p	平20. 9

【主な実務・社会的活動等】
弁護士登録(東京弁護士会) (平成16年10月)
東京弁護士会常議員・同入退会審査調査会(平成20年4月～平成21年3月)
日本弁護士連合会代議員(平成20年3月～平成21年2月)
東京弁護士会法曹養成センター(平成21年7月～現在)
東京弁護士会公設事務所運営特別委員会(平成21年9月～現在)
東京司法修習生個別指導担当者(平成23年4月～平成25年3月)
渋谷パブリック法律事務所 所長(平成26年4月～現在)

【所属学会】

【教育活動の自己評価】

春のリーガルクリニック刑事では、実際の事件の傍聴のみでなく、若手弁護士向けの勉強会に学生を参加させてより実践的な議論に触れる機会を設けた。4月からのリーガルクリニック上級では、出来るだけ依頼者との打合せや法的手続きに立ち会う機会を多く設けるようにし、学生に実務家として思考し行動する機会を与えるようにした。同じく4月からの応用演習では、やや複雑な事例問題を素材に、法的思考力だけでなく表現力を伸ばすことにも配慮した授業を心がけた。

【研究活動の自己評価】

弁護士として実際の事件に即して判例・文献等の調査を行っています。

【職・氏名】教授 四 宮 啓 SHINOMIYA Satoru

【学 位】法学士

【本学就任】平成21年

【略 歴】早稲田大学法学部卒業

日本弁護士連合会司法改革調査室長

早稲田大学大学院法務研究科客員教授

【専門分野】刑事訴訟、刑事弁護、司法制度

【主な研究業績等】

種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または 該当ページ	発行年月
学会発表 等	単	“Saiban-in System and Japan’s Capital Punishment: How Capital Punishment is Going under Lay Judge System”と題して報告	2014 Law and Society Association Annual Meeting (Minneapolis, MN)		平26. 5
学会発表 等	単	「法曹養成制度の現状と課題」と題して国立国会図書館、調査及び立法考査局において講演	『国立国会図書館 国政の論点』 国立国会図書館	全19p	平26. 5
論文	単	「日本における死刑量刑手続について—その公正性・倫理性そして憲法適合性」	曾根威彦先生・田口守一先生古稀祝賀 論文集[下巻] 成文堂	全60p	平26. 3
調査・研 究報告等	単	“Japan’s Judicial Apprenticeship: Is it a Post-Graduate Training Model, a Mold or Something Else?”と題して報告	The 2013 Sho Sato Conference (University of California, Berkeley)		平25. 12
学会発表 等	単	「裁判員裁判—裁判員制度は刑事実務をどのように変えているか—」と題して報告	International Workshop, “Citizen Participation in Criminal Justice—New Experiences, Achievements, and Problems” (専修大学)		平25. 11
論文	単	「裁判員時代の刑事弁護実務教育—法科大学院における臨床教育の視点から」	『法曹養成と臨床教育』6号 日本加除出版	全5p	平25. 11
論文	単	「手続二分の可能性と弁護実践」	『実務体系 現代の刑事弁護2 刑事弁護の現代的課題』 第一法規	全21p	平25. 9
判例評釈	単	「最高裁平成24年1月13日第二小法廷判決」	『刑事法ジャーナル』36 イウス出版	全6p	平25. 5
学会発表 等	単	”The Saiban-in System: What Is The Two-Year-Old-Baby Doing For Japanese Society? —Is It Crying, Getting Fretful, or Doing Something Else?—”と題して報告	2011 Law and Society Annual Meeting (San Francisco, CA)		平23. 6
判例評釈	単	「否認事件における公判前整理手続が実質的に終了している段階での保釈の許否(最高裁平成22年7月2日第二小法廷決定)」	『ジュリスト』1420号 有斐閣	全2p	平23. 4

【主な実務・社会的活動等】

千葉県弁護士会副会長(平9～平10)、日本弁護士連合会司法改革調査室長(平13～平16)

司法制度改革推進本部「裁判員制度・刑事検討会」委員(平13～平16)

法務省「裁判員制度に関する検討会」委員(平21～平25)

【所属学会】日本刑法学会、日本法社会学会、法と心理学会、臨床法学教育学会、日米法学会

【教育活動の自己評価】

法科大学院においては、リーガルクリニック初級、同上級、刑事法演習IIを担当している。リーガルクリニック初級においては、新しい模擬記録を用い、学生が法律家として事案を分析し、法廷活動を自ら考えて、新しい法廷技術を用いて実践するメソッドを採り入れている。リーガルクリニック上級では、実際の刑事事件を受任し、主に捜査段階において刑事弁護人として、理論・技術・倫理を統合して考え、決断し、行動することを学生に求めている。刑事法演習IIIにおいては、高内寿夫教授とともに、法律実務家として必要な法的思考方法が身につくように指導している。また学部では、「社会構造と市民生活」を担当し、主として法律の知識のない学生がわが国の司法制度の概況と問題点を理解できるよう、考えさせる授業を行っている。

【研究活動の自己評価】

研究のテーマは、主として、裁判員制度、刑事司法制度、法曹養成制度である。近時では、裁判員制度に関する講演、国際学会での報告、判例評釈などを実践している。また刑事司法制度に関しては、死刑量刑手続に関する論文をまとめ、また事実に争いのある刑事裁判手続が事実認定手続と量刑手続とに二分されるべきことについても論文をまとめた。法曹養成制度については臨床法学教育学会の活動を中心に、学会報告、国際会議での研究報告等を行った。

【職・氏名】教授 中川 徹也 NAKAGAWA Tetsuya

【学 位】法学士

【本学就任】平成16年

【略 歴】東京大学法学部卒業

司法研修所司法修習生(29期)

弁護士登録(第一東京弁護士会)

國學院大学法学部教授(特別専任)

【専門分野】民事弁護実務

【主な研究業績等】

種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または 該当ページ	発行年月
論文	単	「民事弁護活動と要件事実」	『伊藤滋夫先生喜寿記念 要件事実・事実認定論と基礎法学の新たな展開』 青林書院	pp.146-163	平21. 2
論文	単	「企業活動をめぐる紛争予防と要件事実」	『民事要件事実講座5 企業活動と要件事実』 青林書院	pp.66-76	平20. 8
評論・ 書評等	単	山本和彦編『民事訴訟の過去・未来・現在 —あるべき理論と実務を求めて』	『ジュリスト』1307号 有斐閣	p.7	平18. 3
著書	共	『判例にみる親族・相続法の時効と期間制限』	新日本法規	全332p	平16. 11
論文	単	「不動産工事の先取特権と登記」	『民事弁護と裁判実務(1)不動産登記』 ぎょうせい	全694p中 pp.599-606	平8. 3
著書	共	『債権の保全と回収の手引』	新日本法規	全2060p(全2 巻)	平5. 4
論文	単	「民事訴訟における弁護士の役割」	『変革の中の弁護士(下)』 有斐閣	全378p中 pp.113-138	平5. 3
著書	共	『土地・建物担保の実務』	新日本法規		昭60. 7

【主な実務・社会的活動等】

東京高等裁判所既定 昭和54年9月19日(昭和54年(ワ)第636号 債権差押取立命令申請却下決定に対する即時抗告事件)『判例時報』944号60頁
東京地方裁判所判決 昭和57年9月30日(昭和56年(ワ)第70750号 約束手形金請求事件)『判例時報』1047号149頁
東京地方裁判所判決 昭和60年10月30日(昭和59年(ワ)第2343号 損害賠償請求事件)『判例時報』1168号148頁
東京地方裁判所判決 昭和62年7月29日(昭和56年(行ウ)第145号 保育科変更処分取消請求事件)『判例時報』1243号16頁
最高裁判所判決 平成元年9月8日(昭和61年(オ)第943号 建物明渡、代表役員等地位請求上告事件)『最高裁判所民事判例集』43巻8号889頁
東京高等裁判所判決 平成11年2月24日(平成10年(ネ)第3754号 ゴルフ会員権確認等請求控訴事件)『金融商事判例』1063号25頁
東京高等裁判所判決 平成13年4月25日(平成10年(ウ)第360号 斡旋贈賄、斡旋収賄各被告控訴事件)『判例タイムズ』1068号248頁
司法研修所所付(民事弁護担当)(昭和58～62年)
司法研修所教官(民事弁護担当)(平成8～11年)
司法試験(第二次試験)考査委員(民法担当)(平成13～15年)
最高裁判所公平委員(平成13年7月～現在)
㈱三菱東京UFJ銀行監査役(平成16年6月～現在)
日本民事訴訟法学会理事(平成19年5月～23年5月)

【所属学会】日本民事訴訟法学会

【教育活動の自己評価】

司法研修所教官として司法修習生の教育を経験したが、法科大学院における大学院生に対する教育は、司法研修所での教育と内容や対象者を異にしても、自主的・能動的に学習しようとする姿勢が生まれるように「触媒」の作用を果たすという役割に変わるところはないと考えている。また、法科大学院での教育には、理論と実務との架橋が求められており、実務家教員として、この点に留意し、寄与できるように取り組んでいる。さらに、平成25年度から、法学部での演習を担当し、学部学生に対して、判例の学習を通して民事訴訟の構造の理解を図るとともに「法的な考え方」の体得を目指している。

【研究活動の自己評価】

自らが弁護士として携わっている民事弁護実務の向上・発展に寄与することを目標として、実務家の間での研究会や実務家による啓蒙書の著作に関与してきた。法科大学院の開設以降、研究者と実務家との交流が増してきており、実務家教員であることによって得られる機会を生かし、関与の内容や範囲を広げたい。

【職・氏名】教授 村 和 男 MURA Kazuo

【学 位】法学士

【本学就任】平成17年

【略 歴】東京大学法学部卒業

司法研修所司法修習生(30期)

弁護士登録(東京弁護士会)

株式会社整理回収機構常務取締役

【専門分野】民事事件、司法制度

【主な研究業績等】

種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または該当ページ	発行年月
著書	共	『裁判のしくみ絵事典』	PHP研究所	全63p	平24. 6
著書	共	『マンガで丸わかり！ 親子で覚える日本国憲法』	ブティック社	全96p	平22. 11
著書	共	『裁判を変えようー市民がつくる司法改革』	日本評論社	pp.166-173	平11. 10
著書	共	『よくわかる相続・贈与Q&A』	資産法律税務研究会著 家の光協会	1～3章、7章 pp.105-251	平8. 7
著書	共	『よくわかる土地・建物Q&A』	資産法律税務研究会著 家の光協会	1章pp.10-23、2 章、4章、6章、 8章、9章	平8. 7
論文	単	「日弁連の新提案と改革協意見書の採択」	『自由と正義』47巻1号 日本弁護士連合会	pp.118-121	平8. 1
論文	単	「司法試験改革問題の現状と今後の展望」	『自由と正義』46巻9号 日本弁護士連合会	pp.115-118	平7. 9
論文	単	「司法試験改革問題の歴史的経緯」	『自由と正義』45巻12号 日本弁護士連合会	pp.6-12	平6. 12
著書	共	『法曹資格に関する試験制度の研究』	東京弁護士会法友全期会政策研究会 編 東京弁護士会法友全期会	pp.9-34	平1. 3
著書	共	『西欧諸国の法曹養成制度ーフランス・西ドイツ・イギリス視察団報告書』	日本弁護士連合会編 日本評論社	pp.20-43	昭62. 11

【主な実務・社会的活動等】

民事

損害賠償請求事件

・ 地方自治体が管理する歩道に、安全策がとられず放置された大きな穴に、深夜自転車で帰宅途中の会社員が転落して死亡。遺族の代理人として国家賠償請求訴訟を提起し、和解金を支払わせる。

・ 破産した北海道拓殖銀行の旧経営陣の法的責任を問う整理回収機構の代理人団事務局長として5件提訴。

損害賠償等請求事件

・ 著名スポーツ選手の写真を無断掲載。写真家・出版社との交渉により謝罪と今後の写真不使用約束を得る。

・ 殺人事件被害者の女性を売春婦のごとく記載。掲載誌と交渉し1ページの訂正・謝罪記事を掲載させる。

東京弁護士会クレジットサラ金法律相談

・ 100名以上の相談者の任意整理・自己破産を担当

社会的活動

東京弁護士会司法問題対策委員会委員(昭和56～57年)、日弁連司法問題対策委員会幹事(昭和60～63年)、

日弁連司法問題対策委員会委員(昭和63～平成2年)、日弁連第12回司法シンポジウム運営委員(昭和63～平成2年)、

日弁連代議員・東京弁護士会常議員(平成元～2年)、東京弁護士会入退会営業許可審査特別委員(平成元～2年)、

日弁連三者協議に関する合同会議幹事(平成2～4年)、日弁連法曹養成問題委員会委員(平成2～8年)、日弁連司法問題対策委員会委員(平成2～8年)、

日弁連司法改革推進センター事務局次長(平成8～12年)、法曹養成制度等改革協議会幹事(平成3～7年)、

日弁連常務理事・日弁連三者協議に関する合同会議委員(平成9～10年)、東京弁護士会司法改革推進センター事務局長(平成10～15年)、

日弁連法曹養成センター委員会委員(平成10～12年)、日弁連創立50周年記念行事実行委員会委員(平成11～12年)、

日弁連司法改革実現本部委員(平成11～13年)、三菱自動車工業株式会社企業倫理委員(平成16年～現在)

【所属学会】

【教育活動の自己評価】

リーガルクリニック(上級)を受講した二人の学生と、事務所用賃貸借契約における原状回復の範囲を巡る事件に取り組んだ。事案は、ビルの一室を事務所として使用していた依頼者が契約を解消して退室したあと、高額な原状回復費用を請求されて困っている、というものであった。賃貸借契約における原状回復の範囲については、民法にも借地借家法にも規程はなく、従ってトラブルも多い。学生は国土交通省が23年8月に発行した「原状回復を巡るトラブルとガイドライン」(再改訂版)、居住用のマンションに関するものであるが、最高裁判所平成17年12月16日第二小法廷判決を発見した。これらは居住用賃貸借契約における原状回復の範囲について、経年劣化や通常損耗部分は賃貸人の責任である事を明記している。学生とともに、これらの考え方は事務所用の賃貸借契約にも適用されるべきと主張する準備書面を裁判所に提出した。学生にとっても、私にとってもとても有益な活動であった。

【研究活動の自己評価】

平成22年11月に「マンガで丸わかり！ 親子で覚える日本国憲法」がブティック社から刊行された。企画・編集に監修者として関わり、主として小学校高学年の生徒に日本国憲法の大切な理念をわかりやすく伝える取組を行った。平成24年6月に「裁判のしくみ絵事典 基本の流れから裁判員裁判まで」がPHP研究所から刊行された。企画・編集に監修者として関わり、主として小学校高学年・中学生の生徒に、我が国の司法制度の仕組みをわかりやすく伝える取組を行った。この本の中で、当法科大学院が毎年秋に開催している「模擬裁判員裁判」を詳しく紹介した。

研究開発推進機構

内川隆志	准教授	257
上西亘	助教	258
齊藤智朗	准教授	259
鈴木聡子	助教	260
大東敬明	助教	261
塚田穂高	助教	262
平藤喜久子	准教授	263
深澤太郎	助教	264
星野靖二	准教授	265
宮本誉士	准教授	266
渡邊卓	助教	267

【職・氏名】准教授 内川隆志 UCHIKAWA Takashi
 【学 位】文学士
 【本学就任】昭和62年
 【略 歴】國學院大學文学部史学科卒業
 國學院大學文学部助手(博物館学研究室)
 【専門分野】考古学・博物館学
 【受賞歴等】平成17年度加藤有次博士記念賞(國學院大學)

【最近5年間の主な研究業績等】 [平成22～26年度] (10点まで)

種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または 該当ページ	発行年月
編著	共	「地域文化遺産の再生に関する総合的研究の学術的意義」	『地域文化の再生に関する総合的研究(一)千葉県香取市佐原 紀の国屋大蔵の保存と活用』	全100p中 pp.1-7	平26. 6
解説・ 解題等	単	「静嘉堂所蔵の松浦武四郎蒐集古物について」	『静嘉堂蔵松浦武四郎コレクション』 静嘉堂		平25. 10
著書	共	「資料保存史」、「土器・陶磁器の修理復元」	『人文系博物館資料保存論』 雄山閣	全220p中 24p	平25. 5
調査・研究 報告等	共	『静嘉堂文庫松浦武四郎蒐集古物目録』	科学研究費基盤研究C「博物館における人文資料形成史の研究-静嘉堂文庫所蔵松浦武四郎旧蔵史料の研究と公開」平成22年～24年度の成果報告	全248p	平25. 3
著書	共	「博物館資料の収集史」	『人文系博物館資料論』 雄山閣	全238p中 pp.39-78	平24. 8
学会発表 等	共	「近代初期における人文資料形成史の研究-松浦武四郎と柏木貨一郎-」	学会発表 全日本博物館学会		平24. 6
論文	単	「今に生きる八丈島のカミ祭り」	『祭祀儀礼と景観の考古学』 國學院大學研究開発推進機構伝統文化リサーチセンター	全520p中 pp.225-238	平24. 3
調査・研究 報告等	共	「祭祀考古学の方法と実践 - 伊豆半島・諸島における基層文化と神社の展開 -」	『モノと心に学ぶ伝統の知恵と実践』 國學院大學研究開発推進機構伝統文化リサーチセンター	全342p中 pp.51-62	平24. 3
論文	共	「中近世の祭祀考古学の学史と展望」	『祭祀儀礼と景観の考古学』 國學院大學研究開発推進機構伝統文化リサーチセンター	全520p中 pp.47-56	平24. 3
論文	共	「静嘉堂文庫所蔵 松浦武四郎旧蔵資料の人文的研究(古墳時代金属器編)」	『國學院大學考古学資料館紀要』第27輯 國學院大學研究開発推進機構学術資料館考古学資料館部門	全134p中 pp.39-70	平24. 3

【平成21年度以前の主な研究業績等】 (5点まで)

種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または 該当ページ	発行年月
著書	共	『史跡整備と博物館』	雄山閣出版	全278p中 pp.28-53	平18. 4
著書	単	『博物館資料の修復と製作』	雄山閣出版	全211p	平16. 11
論文	単	「和鏡の型式と変遷」	『考古学ジャーナル』No.507 ニュー・サイエンス社	全36p中 pp.6-10	平15. 3
著書	共	『新版博物館学講座1 博物館概論』	雄山閣出版	全257p中 pp.146-150、190-	平12. 10
著書	共	『新版博物館学講座5 博物館資論』	雄山閣出版	全243p中 pp.105-158	平11. 6

【所属学会】全日本博物館学会、日本考古学協会、日本展示学会

【最近5年間の学会等および社会における主な活動】

全日本博物館学会役員(平16. 4～現在)、相模原市市史編さん委員(平17. 4～現在)、武蔵野市文化財保護委員(平10. 4～現在)、相模原市文化財保護審議会委員(平24. 10～現在)、小原本陣保存整備協議会委員(平25. 3～現在)

【教育活動の自己評価】

國學院大學学術資料センターにおける平成25年度プロジェクト「考古学資料館蔵資料の再整理・修復・研究・公開」にかかげた「大学ミュージアム活動の実践教育」や「文化財研究拠点の構築」によって受託した外部研究事業に大学院、学部学生を参画させ実践的な研究実務を取得させた。平成26年度の3つのプロジェクト「大学ミュージアムにおける「学芸研究(考古学)」基盤の整備」「大学ミュージアムにおける「学芸情報」基盤の整備」「大学ミュージアムにおける「文化財研究」基盤の整備」においても、同様に学生を組み入れ実践的教育活動をおこなってゆく予定である。さらに、大学院博物館学コースの学生をインターンシップとして受け入れ、博物館学芸員としてのスキルアップに貢献したいと考えている。

【研究活動の自己評価】

現在重点的に行っている研究活動としては、「近代における人文資料形成史の研究」、「地域文化資源の保全と活用に関する総合的研究」があげられる。前者は、日本学術振興会科学研究費助成事業基盤研究(C)(22601009)の助成「博物館における人文資料形成史の研究-静嘉堂文庫所蔵松浦武四郎旧蔵資料の研究と公開」(2010?2012)を受けたもので、その成果としては『松浦武四郎蒐集古物目録』の刊行、平成25年10月に静嘉堂文庫美術館で開催された「松浦武四郎コレクション展」において公にされた。現在は静嘉堂に収蔵されている松浦武四郎蒐集古物を軸に研究を継続しており、新たな展開をみている。後者に関しては、博物館学的発想論と博物館学的方法論に基づく地域史研究グループ「歴史と文化再生研究会」を立ち上げ、日本学術振興会科学研究費助成事業基盤研究(C)(25350395)「地域文化の再生に関する総合的研究-紀の国屋大蔵の保存と活用」を推進中(2013?2015)である。(HPhttp://hcr.sakura.ne.jp/wp/) 研究対象としている陶器商「紀の国屋」を経営している佐山家は、千葉県香取市佐原に所在し、同家の所持する大蔵は、「重要伝統的建造物群保存地区」の対象地区から僅かに外れているものの、水郷佐原の町並みを形成する重要な歴史的建造物である。その規模は全長約10軒を測り、当該地域に現存する蔵では最大規模を誇るものである。規模の大きさはもとより、蔵内には、陶器商として明治15(1882)年に佐原に移住した当時の文書類、陶磁器など同家の歴史的背景を精査するに充分な物証が多数残されていることから、建築史学・歴史学・考古学・文化財学・博物館学の各分野によって総合的な研究を実施し、地域文化資源としての大蔵の歴史的価値を高めることを目標とするものである。最終的には、保存と活用に着地点を求めたいと考えている。また、伊豆諸島に於ける考古学的研究や和鏡の編年の研究に関しても継続的に取り組んでいる。

【職・氏名】助教 上 西 亘 KAMINISHI Wataru

【学 位】修士(神道学)

【本学就任】平成25年

【略 歴】國學院大學神道文化学部神道文化学科卒業
國學院大學大学院文学研究科神道学・宗教学専攻博士課程後期満期取得修了
國學院大學研究開発推進機構伝統文化リサーチセンター資料館嘱託学芸員

【専門分野】近世・近代の国学、博物館学

【最近5年間の主な研究業績等】 [平成22～26年度] (10点まで)					
種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または該当ページ	発行年月
論文	単	「大國隆正の神観念についての一試論」	『國學院大學研究開発推進機構紀要』第6号 國學院大學研究開発推進機構	全180p中 pp.55-84	平26. 3
論文	単	「北海道における開拓功労者顕彰について -開拓神社創立背景と御祭神に関する一考察-」	『國學院大學研究開発推進センター紀要』第8号 國學院大學研究開発推進機構研究開発推進センター	全339p中 pp.201-233	平26. 3
著書	共	『神社博物館事典』	雄山閣	全306p	平25. 12
その他	共	書評:宮本誉士『御歌所と国学者』	『明治聖徳記念学会紀要』復刊第49号 明治聖徳記念学会		平24. 11
その他	共	「皇典講究所・國學院大學の刊行物一覧」	『國學院大學伝統文化リサーチセンター研究紀要』第4号 國學院大學研究開発推進機構伝統文化リサーチセンター		平24. 3
論文	単	「神社博物館史について」	『神社博物館事典』		平23. 3
著書	共	『神社博物館事典(中間報告)』	國學院大學大学院高度博物館学教育プログラムの研究成果の一部として、博物館学教育研究情報センターが発行		平23. 3
その他	単	史料紹介:「大國隆正著『音図神解』の翻刻と紹介」	『明治聖徳記念学会紀要』復刊第47号 明治聖徳記念学会		平22. 11

【平成21年度以前の主な研究業績等】 (5点まで)					
種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または該当ページ	発行年月
論文	単	「大國隆正の言語学研究序説」	『神道宗教』第217号 神道宗教学会		平22. 1
その他	共	『『日本文学』『國文學』『皇典講究所講演』総目録』	『國學院大學伝統文化リサーチセンター研究紀要』第1号 國學院大學研究開発推進機構伝統文化リサーチセンター		平21. 3

【所属学会】神道宗教学会、明治聖徳記念学会

【最近5年間の学会等および社会における主な活動】

【教育活動の自己評価】

本学で講義を担当するのは、平成26年度後期からであるため、現時点では直接本学学生との教育に関わってはいませんが、他大学ではパワーポイントと授業時配布の資料を用意し、講義後に小テストを行うなど、学生の理解度を促進するためにいろいろな方法を試みている。なお、本学教育開発推進機構主催のFDワークショップに参加し、新しい教育手法を積極的にシラバス・講義に展開できるように心がけている。

【研究活動の自己評価】

近世・近代の国学、特に大國隆正の言語研究から見る世界観や神観念などに着目して研究しており、論文2本と翻刻論文1本を投稿した。隆正の研究であまり重視されていなかった言語学と著作の関連性を明らかにすることによって、ライフヒストリーを多少なりとも明示することができたと考えている。今後の方針としては、隆正の学説が近代に至ってどのように受容され展開されたのかを明らかにしたい。時代としては、昭和前期に焦点を絞って、当時の時代背景や思想と結び付け、研究しようと考えている。

【職・氏名】准教授 齊藤智朗 SAITO Tomoo
 【学 位】博士(宗教学)(平成17年3月 國學院大學 文甲第63号)
 【本学就任】平成17年
 【略 歴】國學院大學文学部哲学科卒業
 國學院大學大学院文学研究科神道学専攻博士課程後期修了
 【専門分野】宗教学、近代神道史、近代日本宗教史

【最近5年間の主な研究業績等】 [平成22～26年度] (10点まで)					
種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または該当ページ	発行年月
著書	共	『事典 神社の歴史と祭り』	吉川弘文館	全395p中 pp.290-316	平25. 4
論文	共	「近代人文学の形成と皇典講究所・國學院—國學院の学術資産に見る伝統文化研究発の現代的意義—」	文部科学省 私立大学学術研究高度化推進事業 オープン・リサーチ・センター整備事業 成果論集『モノと心に学ぶ伝統の知恵と実践』 國學院大學研究開発推進機構伝統文化リサーチセンター	pp.39-68	平24. 3
論文	単	「高山昇と皇典講究所」	『朱』 第55号 伏見稲荷大社	pp.212-230	平23. 12
論文	単	「松野勇雄と皇典講究所・國學院大學」	『大学史資料センター報告 大学史活動』 第32集 明治大学史資料センター	pp.53-85	平22. 12
編著	共	『日本神道史』	吉川弘文館	全342p中 pp.228-273	平22. 7
論文	単	「井上毅と明治典憲体制」	『藝林』 第59巻第1号〔通巻263号〕 藝林会	pp.96-123	平22. 4

【平成21年度以前の主な研究業績等】 (5点まで)					
種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または該当ページ	発行年月
論文	単	「井上毅と明治国学」	『國學院大學研究開発推進機構紀要』 第1号 國學院大學研究開発推進機構	pp.93-115	平21. 3
編著	共	『大社町史 中巻』	出雲市	全873p中 pp.641-686,827-834	平20. 9
編著	共	『生田神社史』	国書刊行会	全803p中 pp.463-570	平19. 4
論文	単	「帝国憲法成立期における祭教分離論」	阪本は丸編『国家神道再考—祭政一致国家の形成と展開—』 弘文堂	全412p中 pp.223-265	平18. 10
著書	単	『井上毅と宗教—明治国家形成と世俗主義—』	弘文堂	目次・凡例7p, 本文332p, 人名索引5p	平18. 4

【所属学会】 明治聖徳記念学会、神道宗教学会、日本宗教学会

【最近5年間の学会等および社会における主な活動】

【教育活動の自己評価】

所属機関である校史・学術資産研究センターの業務を通じた組織的な教育活動としては、本学の学士課程教育実施方針(3つのポリシー)を踏まえ、その前提となる本学の歴史に基づく建学の精神を学生に周知するよう努めることを、また個人的な教育活動としては、歴史や現代社会の事柄について、一面的な評価で判断するのではなく、複眼的に見ることの大切さを教え養うことを教育・授業に対する理念に据えている。

具体的な活動内容として、組織的な活動では、平成20年度以降、教養総合「神道科目」(平成25年度より「神道と文化」)において共通で行う本学の歴史に関するサブテキストを関連学部や機関と共同で作成ないし改訂を行ってきている。殊に本学創立130周年に当たる平成24年度には、新訂版となる『國學院大學の130年』を作成し、現在も使用されている。個人的な活動においては、学生の理解度がより深まるよう、説明の仕方やプリント作成、K-Smapyの活用方法などの改善を随時行い、各年度の目標を達成できるよう努めている。

【研究活動の自己評価】

近代の神道・国学に関する研究を、本学の歴史や関連人物を中心に行っており、今後も引き続き進めていく。その際、本学所蔵の史資料をはじめとする学術資産についても、さらに活用していきたいと考えている。

【職・氏名】助教 鈴木 聡子 SUZUKI Satoko

【学 位】修士(神道学)

【本学就任】平成25年

【略 歴】國學院大學文学部神道学科卒業

國學院大學大学院文学研究科博士課程後期神道学専攻単位取得満期退学

國學院大學伝統文化リサーチセンター ポスドク研究員

【専門分野】古代・中世神社史

【最近5年間の主な研究業績等】 [平成22～26年度] (10点まで)					
種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または該当ページ	発行年月
論文	単	「神社年中行事の成立過程について—二十二社・一宮の農耕行事に焦点をあてて—」	『國學院大學研究開発推進機構 日本文化研究所年報』第6号 國學院大學研究開発推進機構 日本文化研究所	pp.84-96	平25. 9
著書	共	『房総の伊勢信仰』	雄山閣	全316p中 pp.66-72, p97-106	平25. 9
著書	共	『事典 神社の歴史と祭り』	『事典 神社の歴史と祭り』 吉川弘文館	全395p中 pp.119-126, 139-146, 367-393	平25. 4
論文	単	「神社年中行事の成立過程と宮中行事に関する一考察——相撲行事を事例として——」	『モノと心に学ぶ伝統の知恵と実践』 文部科学省 私立大学学術研究高度化推進事業オープン・リサーチ・センター整備事業 成果論集	pp.241-254	平24. 3
調査・研究報告等	共	「山車祭データベース報告」	『國學院大學伝統文化リサーチセンター研究紀要』4号 國學院大學伝統文化リサーチセンター	pp.133-135	平24. 3
論文	単	「ヤマ(山車)祭り成立の背景—神の移動と「山」—」	『國學院大學伝統文化リサーチセンター研究紀要』3号第2分冊 國學院大學伝統文化リサーチセンター	pp.109-121	平23. 3

【平成21年度以前の主な研究業績等】 (5点まで)					
種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または該当ページ	発行年月
論文	単	「宇佐宮神社年中行事の成立過程に関する一考察—節日行事と大幸権帥との関わりに焦点をあてて—」	『國學院大學伝統文化リサーチセンター研究紀要』2号 國學院大學伝統文化リサーチセンター	pp.87-97	平22. 3
調査・研究報告等	共	「群馬県富岡市一之宮貫前神社「御戸開祭」調査報告—國學院大學伝統文化リサーチセンター神社祭礼調査報告—」	『國學院大學伝統文化リサーチセンター研究紀要』2号 國學院大學伝統文化リサーチセンター	pp.120-130	平22. 3
論文	共	「石川県金沢市波自加彌神社における「はじかみ大祭」の儀礼構成と信仰圏」	『秋田地理』30号 秋田地理学会	pp.15-20	平22. 3
論文	単	「中世春日社年中行事の成立過程と藤原摂関家—節日行事を中心に—」	『國學院大學伝統文化リサーチセンター研究紀要』1号 國學院大學伝統文化リサーチセンター	pp.81-89	平21. 3
論文	単	「神社年中行事における基礎的考察」	『國學院大學大学院紀要—文学研究科—』第38輯 國學院大學大学院	pp.111-128	平19. 3

【所属学会】神道宗教学会、日本宗教学会、「宗教と社会」学会

【最近5年間の学会等および社会における主な活動】

【教育活動の自己評価】

平成25年度より担当している神道古典Ⅲでは、「延喜式祝詞」についての解釈を深めることを目的としている。テキストとなるプリント資料を作成して、毎回の授業時に配り、その資料にそって授業をおこなう形式をとっている。学生の理解度にあわせたテキスト作りをつとめている。

今年(平成26年度)より「神道と文化」の講義を担当している。学生が神道と日本文化について親しめるように、共通のテキスト以外にも画像資料を中心としたパワーポイントを用いながら視覚的に見せることで、より理解が深められるように努めた。

【研究活動の自己評価】

神社における古代から中世を対象とした祭礼の研究を主として取り組んでいる。

本学研究開発推進機構伝統文化リサーチセンター「神社祭礼に見るモノと心」プロジェクト(平成20年度～23年度)では、各地の神社祭礼調査や、神社祭礼に登場する「山車」についての研究をおこなった。

平成25年より研究開発推進機構の日本文化研究所において、「デジタルミュージアムの運営および教育への展開」プロジェクトに参加し、今年度より学術資料センターにおいても「祭祀・祭礼の変遷に関する研究と関連資料の整理分析」に関する研究に取り組んでいる。また、文化庁支援事業「東京・渋谷から日本の文化を発信するミュージアム連携事業」にも携わり神道に関する日本文化の発信を研究面より進めている。

【職・氏名】助教 **大東 敬明** DAITO Takaaki
 【学 位】博士(神道学)(平成22年3月 國學院大學 文甲第123号)
 【本学就任】平成23年
 【略 歴】國學院大學大学院文学研究科博士課程後期神道学専攻 単位取得退学
 國學院大學研究開発推進機構研究開発推進センター ポスドク研究員
 ハーバード大学エドウィン・O・ライシャワー日本研究所客員研究員
 【専門分野】神道史学、神祇に関連する儀礼の研究

【最近5年間の主な研究業績等】 [平成22～26年度] (10点まで)					
種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または該当ページ	発行年月
論文	単	「神道切紙と寺社圏—國學院大學図書館所蔵『諸大事』を通路として—」	アジア遊学 174 『中世寺社の空間・テキスト・芸芸』 勉誠出版	pp.155-168	平26. 7
論文	単	『『諸国大明神名帳』と修正会・修二会の伝播』	『國學院雑誌』 第114巻第11号 國學院大學	pp.138-152	平25. 11
論文	単	「萩原龍夫の二十代：国民精神文化研究所・教学錬成所での活動に注目して」	『國學院大學研究開発推進センター研究紀要』第7号 國學院大學研究開発推進機構研究開発推進センター 編	pp.83-116	平25. 3
論文	単	「宮地直一の事績と宮地直一コレクション」	『モノと心に学ぶ伝統の知恵と実践』 國學院大學研究開発推進機構伝統文化リサーチセンター	pp.69-82	平24. 3
その他	単	書評と紹介「千々和到編『日本の護符文化』」	『国史学』 204号 国史学会	pp.105-111	平23. 8
論文	単	「鎌倉・南北朝時代における中臣祓注釈—『中臣祓注抄』と称名寺聖教『大中臣祭文』との比較から—」	『中世神話と神祇・神道世界』(単行本) 竹林舎	pp.379-400	平23. 4
論文	単	「二十世紀前半の中臣祓研究—企画展「おほらいの文化史」余滴—」	『國學院大學伝統文化リサーチセンター研究紀要』 3号 第2分冊 國學院大學研究開発推進機構伝統文化リサーチセンター	pp.241-250	平23. 3
その他	単	「真福寺大須文庫所蔵『中堂咒師作法』考—法咒師研究の一助として—」	『芸能史研究』 192号 芸能史研究会	pp.32-47	平23. 1
論文	単	「『八十通印信』と南都」	『巡礼記研究』 第7集 巡礼記研究会	pp.1-18	平22. 10

【平成21年度以前の主な研究業績等】 (5点まで)					
種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または該当ページ	発行年月
調査・研究報告等	共	「大頭祭・頭人行事の現況」	千曲市教育委員会生涯学習文化課文化財係編『長野県千曲市 武水別神社大頭祭民俗文化財調査報告書』 千曲市教育委員会	pp.133-226	平22. 3
著書	共	『言説・儀礼・参詣—(場)と(いとなみ)の神道研究』	弘文堂	pp.113-237	平21. 3
論文	単	「素盞烏流(出雲流)神道について—日御碕神社宮司家・小野家所蔵文書を中心にして—」	『國學院大學研究開発推進センター研究紀要』 第2号 國學院大學研究開発推進機構研究開発推進センター	pp.67-95	平20. 3
論文	単	「東大寺二月堂修二会「中臣祓」の典拠と構成—南都寺院における中臣祓の一例として—」	『国立歴史民俗博物館研究報告』 第142集 国立歴史民俗博物館	pp.193-208	平20. 3
論文	単	「蓮乗院寅清の諸活動—東大寺二月堂修二会「中臣祓」研究の一助として—」	『日本文化と神道』 第3号 國學院大學21世紀COEプログラム	pp.259-291	平18. 12

【所属学会】神道宗教学会、日本神道史学会、中世文学会、芸能史研究会、駒沢大学宗教学研究會、京都民俗学会

【最近5年間の学会等および社会における主な活動】

国立歴史民俗博物館共同研究員(平成24～26年度)

【教育活動の自己評価】

平成24年度、26年度前期に教養総合科目(神道科目)を担当した。ここでは、学生の理解度や自身の説明が不足していた部分を把握する為に、毎回、復習のためのクイズを出題した。このクイズの解説を次の回の冒頭に行い、前回の復習と、説明不足の補充を行った。また、各回の講義内容をまとめたプリントを作成した。平成24年度後期・26年度前期は、プリントの重要語彙を空欄にし、これをうめながら授業を行うなどの取り組みを行った。

【研究活動の自己評価】

本学が所蔵する諸資料を研究利用し、その価値を見出すことに留意しつつ、①昭和前期の神道・祭祀研究者の研究、②中世における中臣祓や神道に関する秘説、神道切紙についての研究をすすめている。これは、研究開発推進センターですすめている「昭和前期における神道・国学と社会」についての研究や、平成23年度まで行われていたオープン・リサーチ・センター整備事業での研究とも関連している。また、研究開発推進センターですすめている北海道神宮の研究では、明治・大正時代の札幌まつりの研究を行った。

【職・氏名】助教 塚田穂高 TSUKADA Hotaka

【学 位】博士(文学)(平成25年4月 東京大学大学院人文社会系研究科 博人社第913号)

【本学就任】平成22年

【略 歴】東京大学大学院人文社会系研究科基礎文化研究専攻宗教学宗教学史学専門分野博士課程修了
財団法人国際宗教研究所 宗教情報リサーチセンター研究員(平成18～24年度)
独立行政法人日本学術振興会 特別研究員(DC)(平成20～21年度)

【専門分野】宗教社会学、近現代日本の宗教運動

【最近5年間の主な研究業績等】 [平成22～26年度] (10点まで)					
種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または該当ページ	発行年月
論文	単	「大学におけるカルト問題教育の実践と学生の反応」	『全国弁連通信』155 全国霊感商法対策弁護士連絡会	pp.40-55	平26. 4
論文	単	「戦後保守合同運動の展開—日本会議の事例を中心に—」	小島伸之編『平成23年度～平成25年度 科学研究費補助金(基盤研究(C))研究成果報告書 近現代日本の宗教とナショナリズム—国家神道論を軸にした学際的総合検討の試み—』	pp.62-76	平26. 3
論文	単	「公有地上宗教施設の全国調査を実施して—砂川市有地上神社問題との関連から—」	『政教関係を正す会会報』43 政教関係を正す会	pp.15-24	平26. 3
その他	単	「偽装・虚勢・無反省—「新新宗教」に蔓延する諸問題—」	『中央公論』2014年1月(1562)号 中央公論新社	pp.40-47	平26. 1
論文	単	「宗教文化教育の到達目標に関する一考察—第1～4回宗教文化士試験問題の分析から—」	『國學院大學研究開発推進機構日本文化研究所年報』6 國學院大學研究開発推進機構日本文化研究所	pp.67-83	平25. 9
その他	単	『現代日本における公有地上宗教施設の実態把握のための基礎的研究』	平成24年度國學院大學特別推進研究助成金 研究成果報告書	全76p	平25. 3
編著	共	『宗教と社会のフロンティア—宗教社会学からみる現代日本—』	勁草書房	全303p	平24. 8
論文	単	「Cultural Nationalism in Japanese Neo-New Religions : A Comparative Study of Mahikari and Kōfuku no Kagaku」	Monumenta Nipponica 67-1 上智大学	pp.133-157	平24. 7
論文	単	「【国内の宗教動向】日本社会と「宗教」をめぐる区切りと兆し—オウム裁判終結、「君が代」起立問題、「宗教情報ブーム」のゆくえから—」	財団法人国際宗教研究所編『現代宗教2012』 秋山書店	pp.310-326	平24. 7
著書	共	『情報時代のオウム真理教』	春秋社	全463p	平23. 7

【平成21年度以前の主な研究業績等】 (5点まで)					
種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または該当ページ	発行年月
論文	単	「研究ノート『幸福実現党』とは何だったのか—宗教記事データベース所収記事と選挙データからの分析—」	『ラク便利』第45号 宗教情報リサーチセンター	pp.42-58	平22. 2
論文	単	「変貌する「幸福の科学」の今昔—政治進出までの二三年間とその国家観—」	『世界』2009年9月号(795) 岩波書店	pp.129-138	平21. 8
論文	単	「新新宗教における文化的ナショナリズムの諸相—真光と幸福の科学における日本・日本人観の論理と変遷—」	『宗教と社会』第15号 「宗教と社会」学会	pp.67-90	平21. 6
論文	単	「【国内の宗教動向】現代日本における宗教性の行方—社会問題化する宗教、靖国神社問題、宗教の「社会貢献」の一年から—」	財団法人国際宗教研究所編『現代宗教2009』 秋山書店	pp.340-359	平21. 6
著書	共	『ライフヒストリーの宗教社会学—紡がれる信仰と人生—』	ハーベスト社		平18. 6

【所属学会】日本社会学会、日本宗教学会、「宗教と社会」学会、生活史研究会、日本近代仏教史研究会、北海道社会学会

【最近5年間の学会等および社会における主な活動】

宗教情報リサーチセンター(RIRC)研究員(平18. 10～平24. 3)、「宗教と社会」学会 機関紙『宗教と社会』編集スタッフ(平19. 3～平22. 6)、「宗教と社会」学会 常任委員(平成23. 6～現在)

【教育活動の自己評価】

現代日本宗教論を講じる授業では、初回授業時に受講者へ行った質問紙調査の結果を、各回の授業時に示すことで、受講者の宗教に対する自己認識を確認させ、授業内容に入りやすいように工夫を行っている。配布レジュメや紙資料、パワーポイント資料も、受講者の意見を取り入れながら改良を重ねるとともに、写真・動画資料等の充実化もはかっている。平成24年8月には、大学生向けの宗教社会学のテキスト『宗教と社会のフロンティア—宗教社会学からみる現代日本—』を編者の一人として刊行し、本学を始め複数の大学で教科書として採用されている。また、授業のなかではいわゆるカルト問題・社会問題化する宗教についての教育にも力を注いでおり、授業での経験を踏まえながら、市民向けの講演「カルト問題を大学で教える—オウム真理教はなぜ蔓延するか—」(平成25年5月11日)・「大学におけるカルト問題教育の実践と学生の反応」(平成25年10月18日)を行っている。

【研究活動の自己評価】

東京大学大学院人文社会系研究科に博士論文「戦後日本宗教の国家意識と政治活動に関する宗教社会学的研究—新宗教運動のナショナリズムを中心に—」を提出し、平成25年4月に博士号(文学)を取得した。「宗教と社会」学会・日本宗教学会・日本社会学会を中心に、年3回以上の学会報告を心がけている。また、編者の一人として、大学生向けの宗教社会学のテキスト『宗教と社会のフロンティア—宗教社会学からみる現代日本—』(平成24年8月)を刊行した。新宗教運動研究・戦後日本の政教問題研究・カルト問題研究の3つを柱に、精力的に研究を展開している。

【職・氏名】准教授 平藤喜久子 HIRAFUJI Kikuko
 【学 位】博士(日本語日本文学)(平成13年3月 学習院大学 甲第117号)
 【本学就任】平成17年
 【略 歴】学習院大学大学院人文科学研究科日本語日本文学専攻博士後期課程単位取得退学
 日本学術振興会特別研究員
 國學院大學21世紀COEプログラムCOE研究員
 【専門分野】神話学

【最近5年間の主な研究業績等】 [平成22～26年度] (10点まで)					
種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または該当ページ	発行年月
論文	単	Deities in Japanese popular culture	Sources of Mythology LIT Verlag	全376p中 pp.71-80	平26. 6
その他	単	監修:『開運! 神社さんぽ2』	泰文堂	全144p	平25. 8
論文	単	「外国人が見た古事記—130年目の古事記—」	『國學院大學研究開発推進機構紀要』 第5号 國學院大學研究開発推進機構	pp.78-92	平25. 3
論文	単	「岡正雄を読み直す—現代の神話学から—」	『日本民族学の戦前と戦後』 東京堂出版	全507p中 pp.211-224	平25. 3
その他	単	「ゲーム世代と神話」	『宗教と現代がわかる本2013』 平凡社	全293p中 pp.142-145	平25. 3
論文	単	Colonial Empire and Mythology Studies: Research on Japanese Myth in the Early Showa Period	Kami Ways in Nationalist Territory Shinto Studies in Prewar Japan and the West Verlag der Österreichischen Akademie der Wissenschaften	全277p中 pp.75-107	平25. 3
編著	共	『神の文化史事典』	白水社	全620p	平25. 2
その他	単	監修:『開運! 神社さんぽ』	泰文堂	全143p	平23. 12
論文	単	「植民地帝国日本の神話学 昭和前期の日本神話研究を中心に」	竹沢尚一郎編『宗教とフェシズム』 水声社		平22. 6

【平成21年度以前の主な研究業績等】 (5点まで)					
種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または該当ページ	発行年月
論文	単	A New Perspective on Japanese Myth Education	『國學院大學研究開発推進機構紀要』 第2号 國學院大學研究開発推進機構		平22. 3
著書	共	『すぐわかる日本の神社—『古事記』『日本書紀』で読み解く』	東京書籍	全240p	平20. 12
著書	単	『神話学と日本の神々』	弘文堂	全242p	平16. 3
著書	共	吉田敦彦 編『世界の神話101』	新書館	全254p	平12. 6
著書	共	井上順孝監修『神社と神々』	実業之日本社	pp.160-217	平11. 4

【所属学会】古事記学会、神道宗教学会、日本宗教学会、日本文化人類学会、「宗教と社会」学会、国際理解教育学会

【最近5年間の学会等および社会における主な活動】

NHK文化センター講師(平18. 4～現在)、朝日カルチャーセンター講師(平22. 4～現在)

【教育活動の自己評価】

2009年より宗教学関連の研究者とともに「宗教文化の授業研究会」を立ち上げ、研究会を開催し、各自の授業内容の報告や、宗教を取り上げる上での問題点についての検討、教材の作成や共有などについての相談などを行い、授業実践に生かしている。またデジタルコンテンツの作成や教材としての神話の可能性などについて学会発表を行った。

【研究活動の自己評価】

神話学の歴史や海外の日本神話研究などの研究をすすめ、複数の科研費の研究課題に分担者として参加し、研究活動を行っている。論文執筆や国内の学会での発表だけでなく、国際学会や海外でのシンポジウムでも研究成果を公開してきた。神話と神社についての概説書の監修を行い、研究成果の社会還元にもつとめている。

【職・氏名】助教 深澤太郎 FUKASAWA Taro

【学位】修士(歴史学)

【本学就任】平成19年

【略歴】國學院大學文学部第一部史学科(考古学専攻)卒業

國學院大學大学院文学研究科博士課程前期(日本史学専攻考古学コース)修了

國學院大學大学院文学研究科博士課程後期(日本史学専攻考古学コース)単位取得満期退学

【専門分野】祭祀考古学・古代学・人類学

【最近5年間の主な研究業績等】 [平成22～26年度] (10点まで)

種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または該当ページ	発行年月
調査・研究報告等	単	「小菅山伝来の聖教」	『文化的景観「小菅の里」』 飯山市教育委員会	全403p中 pp.194-197	平26. 3
編著	共	『伊豆修験の考古学的研究－基礎的史資料の再検証と「伊豆峯」の踏査Ⅱ－(國特推助53号)』	平成23年度國學院大學特別推進研究助成金 研究成果報告書	全158p	平25. 3
論文	単	「東日本の弥生-古墳時代移行期—シナノにおける初期古墳と副葬鏡の様相から」	『東日本弥生時代青銅器祭祀の研究』 雄山閣	全239p中 pp.223-229	平24. 5
論文	単	「「神社」起源論覚書-神社境内遺跡から「祭祀遺跡」を再考する-」	『土壁』特集 米澤容一氏追悼号 第12号 考古学を楽しむ会	全110p中 pp.69-78	平24. 3
編著	共	『伊豆修験の考古学的研究－基礎的史資料の再検証と「伊豆峯」の踏査－(國特推助46号)』	平成23年度國學院大學特別推進研究助成金 研究成果報告書	全109p	平24. 3
論文	単	「メタ「神道考古学」序論－『日本書紀』と神不滅論から紐解く道慈の「神道」観－」	『日本基層文化論叢 相山林継先生古希記念論集』 雄山閣	全647p中 pp.430-439	平22. 8

【平成21年度以前の主な研究業績等】 (5点まで)

種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または該当ページ	発行年月
論文	単	「三嶋大明神と「薬師堂」のジオグラフィ－東京利島堂ノ山神社境内祭祀遺跡の性格をめぐって－」	『國學院大學伝統文化リサーチセンター紀要』第2号 國學院大學伝統文化リサーチセンター	全478p中 pp.113-123	平22. 3
論文	単	「三嶋神と『三宅記』のアルケオロジー－中世積石塚と石神信仰－」	『國學院大學伝統文化リサーチセンター研究紀要』第1号 國學院大學伝統文化リサーチセンター	全542p中 pp.115-123	平21. 3
論文	単	「出雲「額田部臣」再考－古墳群の動向と地域的社会的階層の再編成－」	『國學院雑誌』第109巻第11号 國學院大學	全324p中 pp.38-53	平20. 11
論文	単	「はじまりのアイドル?鈴木春信が描いた「笠森お仙」と稲荷・ダキニのイコノロジー?」	『画像資料と人文科学』第4集 國學院大學学術フロンティア事業実行委員会	全148p中 pp.107-127	平19. 3
論文	単	「前・中期古墳の墳頂部葬送儀礼-埋葬施設・方形壇・埴輪列-」	『上代文化』第39輯 國學院大學考古學會	全79p中 pp.33-52	平17. 11

【所属学会】考古学研究会、祭祀考古学会、日本山岳修験学会

【最近5年間の学会等および社会における主な活動】

山梨県立甲府第一高等学校資料館策定委員(平22. 5～平23. 3)

須坂市「米子瀑布群」学術調査委員会特別委員(平25. 6～現在)

【教育活動の自己評価】

考古学は、遺跡・遺構・遺物といった実物資料を調査研究するところに特徴がある。従って、授業時には博物館収蔵資料を用いたり、課外時には希望者に遺跡発掘現場を紹介したりするなど、実物・実地で学ぶことを促している。

【研究活動の自己評価】

最近では、創唱宗教と自然宗教の比較研究や、神道をはじめとする日本宗教の考古学的検討を行っている。特に、神社起源論、祭祀遺物出土状態論など、遺跡・遺物の評価を重点的なテーマとする。また、山岳信仰・修験道考古学研究については、伊豆半島をフィールドとしており、現在科研費の補助を受けた研究活動を実施している。

【職・氏名】准教授 星野 靖二 HOSHINO Seiji
 【学 位】博士(文学)(平成18年9月 東京大学 博人社第548号)
 【本学就任】平成19年
 【略 歴】早稲田大学第一文学部人文専修卒業
 東京大学人文社会系研究科宗教学宗教学史学専門分野博士課程単位取得退学
 日本学術振興会特別研究員(PD)
 【専門分野】宗教学、近代日本宗教史

【最近5年間の主な研究業績等】 [平成22～26年度] (10点まで)					
種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または該当ページ	発行年月
著書	共	『将軍と天皇・シリーズ日本人と宗教・第1巻』	春秋社		平26. 9
評論・書評等	単	「書評——赤江達也『紙上の教会』と日本近代」	『宗教研究』第88巻第2輯(380号) 日本宗教学会	pp.243-249	平26. 9
評論・書評等	単	「書評——オリオン・クラウタウ『近代日本思想としての仏教史学』」	『近代仏教』第21号 日本近代仏教史学会	pp.176-182	平26. 8
論文	単	「北米の日本宗教研究について(特集 日本文化研究再考)」	『國學院大學研究開発推進機構紀要』第6号 國學院大學研究開発推進機構	pp.1-29	平26. 3
辞書・事典等	共	『世界宗教百科事典』	丸善出版		平24. 12
著書	単	『近代日本の宗教概念——宗教者の言葉と近代』	有志舎	全311p	平24. 2
著書	共	『スピリチュアリティの宗教史・下巻』	リトン	pp.419-446	平24. 1
その他	共	『日本の宗教教育論第二回』全七巻	クレス出版		平22. 7
評論・書評等	単	「新刊紹介——坂本慎一『ラジオの戦争責任』」	『近代仏教』第17号 日本近代仏教史学会	pp.114-117	平22. 5

【平成21年度以前の主な研究業績等】 (5点まで)					
種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または該当ページ	発行年月
論文	単	「明治中期における「仏教」と「信仰」——中西牛郎の「新仏教」論を中心に——」	『宗教学論集』29輯 駒沢宗教学研究会	pp.33-60	平22. 3
著書	共	『宗教史とは何か』下巻	リトン		平21. 12
論文	単	Reconfiguring Buddhism as a Religion: Nakanishi Ushirō and His Shin Bukkyō	Japanese Religions Vol.34 No. 2 NCC Center for the Study of Japanese Religions		平21. 7
論文	単	「明治十年代におけるある仏基論争の位相——高橋五郎と蘆津実全を中心に」	『宗教学論集』26輯 駒沢宗教学研究会	pp.37-65	平19. 1
著書	共	『〈宗教〉再考』	ペリかん社		平15. 12

【所属学会】日本宗教学会、「宗教と社会」学会、キリスト教史学会、日本思想史学会、駒沢宗教学研究会、日本近代仏教史研究会、American Academy of Religion、Association for Asian Studies

【最近5年間の学会等および社会における主な活動】

【教育活動の自己評価】

教育活動としては、兼任教員として神道文化学部の講義と交換留学生対象の講義を担当した。どの授業でも、文字資料に加えて、可能な限り画像や動画資料を用いて受講生の理解を助けるようにしている。英語学習に関わる講義については、一方では神道にまつわる語彙など基本的な知識の獲得を図り、他方では発話について、基本パターンを学習した上で、その場で構文を完成させ、実際に発声させるようにした。英語を用いて日本文化を学ぶ講義については、講師の講義に加えて、事前に課した課題文書についてグループディスカッションを行い、日本人学生と留学生が積極的にコミュニケーションを取るよう方向付けをした。また選択したテーマについてグループ発表を行わせ、授業外でも協働して調査学習を進めるよう促した。関連して、研究開発推進機構・日本文化研究所のプロジェクトとしてデジタル・ミュージアムの企画・運営に関わっており、そこでデジタル・ミュージアムをどのように教育活動に活用していくことができるのかについて検討してきた。

【研究活動の自己評価】

研究活動としては、研究開発推進機構全体と日本文化研究所の研究業務に関わりながら、近代日本宗教史についての研究を進めている。平成23年度から24年度にかけて、ハーバード大学ライシャワー日本研究所に客員研究員として派遣され、北米の日本研究について調査し、また明治期の日本人留学生について調査・研究を行った。帰国後、渡米のために中断していた科研費基盤(B)「近代宗教のアーカイブ構築のための基礎研究」(代表:大谷栄一)に再び研究分担者として加わり(平成25～26年度)、また平成25年度は國學院大學特別推進研究助成金を得て「世紀転換期の米国における日本宗教の提示についての研究」を行い、また平成26年度は國學院大學特別推進研究助成金を得て「宗教学」以前の宗教学的知:『日本之教学』を焦点としてを進めている。

【職・氏名】准教授 宮本 誉士 MIYAMOTO Takashi
 【学 位】博士(神道学)(平成22年3月 國學院大學 文甲第124号)
 【本学就任】平成22年
 【略 歴】國學院大學大学院文学研究科神道学専攻博士課程後期修了
 明治聖徳記念学会研究嘱託
 國學院大學21世紀COEプログラム研究員
 【専門分野】近代神道史、国学

【最近5年間の主な研究業績等】 [平成22～26年度] (10点まで)					
種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または該当ページ	発行年月
論文	単	「官幣大社札幌神社の明治天皇増祀運動-北海道会及び帝国議会の動向を中心に-」	『國學院大學研究開発推進センター研究紀要』第8号 國學院大學研究開発推進センター	pp.125-161	平26. 3
その他	共	「座談会 御製と神道文化」	『神道文化』25 神道文化会	pp.10-48	平25. 6
論文	単	「南洲墓地・南洲神社における薩軍戦死者の慰霊と祭祀」	國學院大學研究開発推進センター編 『招魂と慰霊の系譜 -「靖國」の思想を問う-』 錦正社		平25. 3
その他	単	「講演 明治の御歌所歌人：明治短歌史における旧派と新派」	『明治聖徳記念学会紀要』復刊第四十九号 明治聖徳記念学会	pp.380-391	平24. 11
論文	単	「「旧派」「新派」共存の背景—明治期和歌の伝統継承と革新運動—」	國學院大學研究開発推進センター編 『共存学 —文化・社会の多様性—』 弘文堂	pp.155-172	平24. 3
学会発表等	単	「近代心学史の一断面-高崎正風と一徳会-」	『宗教研究』第84巻第4輯 日本宗教学会	pp.400-401	平23. 3
著書	単	『御歌所と国学者』	弘文堂	全345p	平22. 12

【平成21年度以前の主な研究業績等】 (5点まで)					
種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または該当ページ	発行年月
論文	単	「文学御用掛としての福羽美静と近藤芳樹」	『國學院大學研究開発推進センター研究紀要』第4号 國學院大學研究開発推進センター	pp.133-176	平22. 3
論文	単	「御歌所長高崎正風の教育勅語実践運動—彰善会と一徳会—」	『明治聖徳記念学会紀要』 復刊第四十六号 明治聖徳記念学会	pp.214-236	平21. 11
論文	単	「八田知紀の尊皇思想と学問観」	國學院大學研究開発推進センター編 『史料から見た神道—國學院大學の学術資産を中心に』 弘文堂	pp.193-223	平21. 3
論文	単	「明治聖徳記念学会と加藤玄智—学会創立前後を中心として」	『明治聖徳記念学会紀要』 復刊第四十三号 明治聖徳記念学会	pp.327-342	平18. 11
論文	単	「国家的神道と国民道徳論の交錯—加藤玄智の「国体神道」の意味—」	阪本是丸編『国家神道再考—祭政一致国家の形成と展開—』 弘文堂	pp.317-354	平18. 10

【所属学会】神道宗教学会、明治聖徳記念学会、日本宗教学会

【最近5年間の学会等および社会における主な活動】

【教育活動の自己評価】

神道文化学部の兼任教員として、「神道と文化」を担当している。教養総合科目として他分野を専攻する学生が理解しやすく、「神道と文化」の基礎知識を着実に習得できるよう解説することを目途として、授業評価アンケートの結果や、講義内容に対する意見・感想(授業時実施コメントペーパー)等を参照し、説明方法、レジュメの作成などに留意した。その他、学生の理解を助ける方法としては、受講者それぞれが理解度を確かめられるよう小テストを随時実施し、知識定着の道標とすることができる授業サイクルを心掛けた。

【研究活動の自己評価】

研究開発推進センターにおいて実施する「昭和前期の神道・国学と社会」、「北海道神宮の研究」、21世紀研究教育計画委員会研究事業「地域・渋谷から発信する共存社会の構築」の渋谷学プロジェクト、共存学プロジェクトなどに関わりながら、それぞれの事業に参画する専任教員、研究員、関連する外部研究者との研究交流を推進している。また、建学の精神に基づく神道・国学の研究を中心として、研究開発推進機構の事業運営に留意しながら、それぞれのプロジェクトに関連する自らの研究対象を設定し、研究活動を進めていくことが当面の課題である。

【職・氏名】助教 渡邊 卓 WATANABE Takashi

【学 位】博士(文学)(平成23年3月 國學院大學 文甲第142号)

【本学就任】平成25年

【略 歴】國學院大學大学院文学研究科日本文学専攻博士課程後期 単位取得満期退学
國學院大學伝統文化リサーチセンター ポスドク研究員
國學院大學文学部兼任講師

【専門分野】日本上代文学・国学

【最近5年間の主な研究業績等】 [平成22～26年度] (10点まで)					
種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または該当ページ	発行年月
論文	単	「札幌神社月報「北海だより」の発刊とその背景」	『國學院大學研究開発推進センター研究紀要』第8号	全342p中 pp.163-199	平26. 3
論文	単	「大山為起『味酒講記』の成立過程とその注釈法」	『朱』57号 伏見稲荷大社	全278p中 pp.2-17	平26. 2
解説・ 解題等	共	『ことわざ資料叢書 第四輯第1巻』	クレス出版	全228p	平25. 4
論文	単	「国民精神作興にみる武田祐吉の立場—昭和十二年、台湾における『万葉集』講義から—」	『國學院大學 校史・学術資産研究』第5号 國學院大學研究開発推進機構校史・学術資産研究センター	全393p中 pp.69-95	平25. 3
論文	単	「国学者の業績展示と社会的意義—昭和初期における荷田春満遺墨展を中心に—」	『國學院大學博物館學紀要』第36輯	全178p中 pp.13-20	平24. 3
著書	単	『『日本書紀』受容史研究—国学における方法』	笠間書院	全274p	平24. 2
論文	単	「青年期における荷田春満の『日本書紀』研究—東丸神社蔵『神代聞書』翻刻を通して—」	『新国学』復刊第3号(通巻7号) 國學院大學院友学術振興会	全204p中 pp.33-52	平23. 10
論文	単	「清原宣賢「日本書紀抄」の注釈法と伝播—諸本の比較を通して—」	『神道宗教』第222・223号 神道宗教学会	全140p中 pp.73-97	平23. 7
論文	単	「橘守部手沢本『先代旧事本紀』と『旧事紀直日』」	『國學院雑誌』第112巻第4号 國學院大學	全58p中 pp.15-28	平23. 4
論文	単	「折口信夫の「日本紀の会」と『日本書紀』研究」	『國學院大學伝統文化リサーチセンター研究紀要』第3号第2分冊 國學院大學伝統文化リサーチセンター	全286p中 pp.265-274	平23. 3

【平成21年度以前の主な研究業績等】 (5点まで)					
種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または該当ページ	発行年月
論文	単	「武田祐吉の『日本書紀』研究—新出資料と著作を通して—」	『國學院大學伝統文化リサーチセンター研究紀要』第2号 國學院大學伝統文化リサーチセンター	全508p中 pp.215-223	平22. 3
論文	単	「橘守部の『先代旧事本紀』研究—『稜威道別』との関わりを通して—」	『青木周平先生追悼 古代文芸論叢』おうふう	全870p中 pp.501-511	平21. 11
論文	単	「三矢重松と武田祐吉の関係—武田来簡を中心として—」	『國學院大學伝統文化リサーチセンター研究紀要』第1号 國學院大學伝統文化リサーチセンター	全544p中 pp.327-337	平21. 3
論文	単	「『先代旧事本紀』偽書説の歴史」	『歴史読本』53巻12月号 新人物往来社	全344p中 pp.74-79	平20. 12
論文	単	「荷田春満の『日本書紀』研究とト部家との関わり」	『古事記年報』50号 古事記学会	全257p中 pp.114-134	平20. 1

【所属学会】古事記学会、神道宗教学会、上代文学会、全国大学国語国文学会、古代文学会、萬葉学会、風土記研究会、無窮会、國學院大學国文学会、國學院大學院友学術振興会

【最近5年間の学会等および社会における主な活動】

古事記学会 編集委員(平18. 7～平22. 7)、古事記学会 理事(平24. 6～現在)、神道宗教学会幹事(平21.4～現在)、国文学研究資料館共同研究員(平26.4～現在)

【教育活動の自己評価】

授業は教養総合科目のうち人間総合科目群のテーマ別講義科目およびキャリア形成支援科目を担当している。前者においては『日本書紀』について取り扱っているが、なるべく複製本・画像など視覚効果の高い教材を用いることで、古典に対して興味関心を抱いてもらえるよう努めている。また、専門としない様々な学部・学年の学生たちが履修しているため、授業の難易を検討しながら取り組んでいる。一方、後者は小論文を実践する講座であり、履修者にはより質の高い小論文が書けるよう、フィードバックを重視した指導を心掛けている。また複数の教員によって同一科目を担当するため、内容が均一になるよう教員同士での情報共有を行っている。

【研究活動の自己評価】

研究開発推進機構において、研究開発推進センターが遂行する「昭和前期における神道・国学と社会」、「北海道神宮研究」、21世紀研究教育計画に含まれる「『古事記』の学際的・国際的研究」プロジェクト、また校史・学術資産研究センターが遂行する「國學院大學における古典学の展開に関する研究と公開」、「國學院大學における日本史学を中心とする学術資産研究の発展と公開」にそれぞれ参画し研究活動を行っている。個人研究としては、平成26年度より国文学研究資料館の共同研究員となり、学外の研究者と交流を持ちながら、自身の専門である日本上代文学・国学の研究を進めている。

教育開発推進機構

新井大祐	准教授	……………	271
小濱 步	助教	……………	272
佐川 繭子	准教授	……………	273
鈴木 崇義	助教	……………	274
中山 郁	准教授	……………	275
松岡 弥生子	准教授	……………	276

【職・氏名】准教授 新井大祐 ARAI Daisuke

【学位】修士(神道学)

【本学就任】平成18年

【略歴】國學院大學大学院文学研究科神道学専攻博士課程後期単位取得満期退学
國學院大學21世紀COEプログラム研究支援者(COE研究員)
國學院大學研究開発推進機構・教育開発推進機構助教

【専門分野】中・近世神道思想史、社寺縁起

【最近5年間の主な研究業績等】 [平成22～26年度] (10点まで)

種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または 該当ページ	発行年月
解説・ 解題等	共	『教員カステップアップ講座—あなたの授業を豊かにする究極の一冊—』	國學院大學教育開発推進機構	全87p中 pp.21-31, 44-46	平26. 4
解説・ 解題等	単	「中世伊勢神宮の歴史と信仰」	『伊勢神宮と日本人—式年遷宮が伝える日本のこころ—』 河出書房新社	全253p中 pp.58-84	平25. 8
学会発表 等	単	「中世日本の神話世界—語り直される神々の物語—」(講演)	駒沢宗教学研究会 第170回研究例会		平25. 7
論文	共	「FD活動における「教員評価」の可能性に関する一視点—國學院大學における「K-TeaD」の構築を事例として—」	『國學院大學 教育開発推進機構紀要』 第4号 國學院大學 教育開発推進機構	pp.39-71	平25. 3
論文	単	「吉田家の諸社研究における家記利用について—『諸神根源抄』と『吉田家日次記』の関わりを中心に—」	『明治聖徳記念学会紀要』復刊第49号 明治聖徳記念学会	pp.186-205	平24. 11
論文	単	「中世後期における吉田家の神社研究と『延喜式』『神名帳』—梵舜自筆『諸神記』を通路として—」	『中世神話と神祇・神道世界』 竹林舎	全638p中 pp.464-494	平23. 4
調査・研究 報告等	単	「K-SMAPYを利用した「神社・神道に関する知識・感情アンケート」について」	『國學院大學 教育開発推進機構紀要』 第2号 國學院大學 教育開発推進機構	pp.79-103	平23. 3
学会発表 等	単	「吉田家における諸社の縁起等の集成について—「神名帳」研究と神社研究—」	神道宗教学会第64回学術大会		平22. 12

【平成21年度以前の主な研究業績等】 (5点まで)

種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または 該当ページ	発行年月
論文	単	「中世の『日本書紀』講釈にみる古典教授の知恵と実践」	『國學院大學 教育開発推進機構紀要』 第1号 國學院大學 教育開発推進機構	pp.19-30	平22. 3
論文	単	「『本朝寺社物語』成立私考—『本朝神社考』・『京童』との比較を通して—」	『史料から見た神道—國學院大學の学術資産を中心に—』 弘文堂	全365p中 pp.3-36	平21. 3
著書	共	『言説・儀礼・参詣—(場)と(いとなみ)の神道研究—』	弘文堂	全361p中 pp.1-112	平21. 3
論文	単	「『山王神道秘要集』の成立に関する一試論—『神道雑々集』研究のための覚書としての—」	『神道宗教』第212号 神道宗教学会	pp.49-82	平20. 10
論文	単	「近世初頭における日御碕神社点描—別当恵光院順式の活動と寛永の造営、そして林羅山との交流に至る—」	『國學院大學研究開発推進センター研究紀要』第2号 國學院大學研究開発推進機構研究開発推進センター	pp.15-44	平20. 3

【所属学会】神道宗教学会、日本宗教学会、日本思想史学会、明治聖徳記念学会、駒沢宗教学研究会、説話文学会、大学教育学会、初年次教育学会

【最近5年間の学会等および社会における主な活動】

神道宗教学会 幹事(編集委員会)(平15～現在)

【教育活動の自己評価】

平成21年度より教育開発推進機構の教員として、全学的な教育力向上を目指した事業展開に取り組んでいる。とくにFD活動の活性化・実質化を担当する教育開発センター委員として「教員自己評価」等に関する研究開発事業に従事し、教員の教育活動に関する情報公開システム『K-TeaD』を開発・リリースした。加えて、教授法に関する研究・開発については、その成果として『教員カステップアップ講座』を刊行している。また、教育実践面では、全学共通科目である「神道と文化」及び別科の授業を担当している。とくに前者においては、クリックカーを使用した小テストによる内容定着度測定など、新たな試みに取り組んでいる。

【研究活動の自己評価】

平成22年度は、前年度に採択された文部科学省科学研究費補助金(若手研究(B))による「中世後期から近世初頭における吉田家の神社研究に関する基礎的研究」に従事した。これについては、補助期間終了後も継続して研究を進めており、得られた知見等に基づく論文を発表するなど、その成果公開に努めている。また、学内研究会及び学外研究会に参加して中世期の神祇関係の記録(日記)・文献等についての研究を行い、その成果発表の準備を進めている。

【職・氏名】助教 小濱 歩 KOHAMA Ayumu
 【学 位】博士(神道学)(平成21年3月 國學院大學 文甲第115号)
 【本学就任】平成21年
 【略 歴】東京大学文学部思想文化学科倫理学専修課程卒業
 國學院大學大学院文学研究科神道学専攻博士課程前期修了
 國學院大學大学院文学研究科神道学専攻博士課程後期修了
 【専門分野】神道古典

【最近5年間の主な研究業績等】 [平成22～26年度] (10点まで)

種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または 該当ページ	発行年 月
学会発表等	単	「二神誓約伝承解釈における「詔直」について」	日本宗教学会第72回学術大会研究発表第6部会 於國學院大學		平25. 9
学会発表等	単	「國學院大學における授業評価アンケートの実施と活用状況」	2013年度私立大学FD連携フォーラムパネル ディスカッション 於立命館大学		平25. 6
論文	単	『古事記』大宜津比売伝承の特色—海外神話及び『紀』所伝との対照において—	『神道宗教』第230号 神道宗教学会	全114p中 pp.31-56	平25. 4
論文	共	「FD活動における「教員評価」の可能性に関する一視点—國學院大學における「K-TeaD」の構築を事例として—」	『國學院大學教育開発推進機構紀要』第4号 國學院大學教育開発推進機構	pp.39-71	平25. 3
その他	単	「ケータイ「×」からケータイ「◎」へ—中部大学におけるモバイル・ラーニングの試み—」	『教育開発ニュース』第6号 國學院大學教育開発推進機構	全4p	平24. 7
学会発表等	単	「〈殺す神〉としての須佐之男命」	日本宗教学会第70回学術大会研究発表第9部会 於関西学院大学		平23. 9
論文	単	「〈教養〉の捉え方に関する一試論」	『國學院大學教育開発推進機構紀要』第2号 國學院大學教育開発推進機構	全171p中 pp.33-48	平23. 3
学会発表等	単	「大宜津比売を殺すということ—『古事記』の中の須佐之男命—」	日本宗教学会第69回学術大会研究発表第8部会 於東洋大学		平22. 9

【平成21年度以前の主な研究業績等】 (5点まで)

種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または 該当ページ	発行年 月
論文	単	「大学の理念と「3つのポリシー」—学外への「発信」という視点から—」	『國學院大學教育開発推進機構紀要』第1号 國學院大學教育開発推進機構	全129p中 pp.49-64	平22. 3
論文	単	『古事記』須佐之男命像の特色 —ウケヒ伝承を手がかりとして—	『國學院大學紀要』第48号 國學院大學	pp.211-235	平22. 2
論文	単	『古事記』神代における大物主神像についての一考察」	『國學院大學大学院紀要—文学研究科—』第40輯 國學院大學大学院文学研究科	pp.15-35	平21. 3
論文	単	「大國主神の研究」	國學院大學大学院文学研究科神道学専攻 提出学位申請論文(神道学博士)		平21. 2
論文	単	「大物主神の神名と神格の関わりについて」	『神道宗教』第207号 神道宗教学会	pp.81-102	平19. 7

【所属学会】神道宗教学会、古事記学会、明治聖徳記念学会、日本宗教学会、上代文学会、古代文学会、大学教育学会

【最近5年間の学会等および社会における主な活動】

神道宗教学会総務委員会幹事(平17. 4～現在)

【教育活動の自己評価】

平成21年度着任以来、教育開発推進機構に所属してFD(ファカルティ・ディベロップメント)支援業務に従事した。同時に、学内外のFD講演会・ワークショップへの参加も行っている。また、神道文化学部兼担教員として、教養総合科目「神道と文化」と、別科「神道古典Ⅰ」「神道文献」の授業を担当した。授業運営に関しては、当初はパワーポイント・映像教材・配布資料を用いつつ、様々なトピックを取り上げて学生の興味を喚起することを心がけたが、授業評価アンケート結果等を参照したところ(1)パワーポイントによる講義は、講義のスピードや情報量の調整が難しいこと、(2)様々なトピックを教授することは、学生の興味を喚起する一方で情報量過多や講義時間の不足を招くことがある、等の問題点が判明した。そのため、(1)板書でキーワードと要点を筆記し、繰り返し説明する、(2)予備知識等の教授は最低限簡潔に行い、話題も絞り込む、(3)質問に対する回答を適宜行い、前回の授業の復習も行う、といった手段を取ったところ、授業評価アンケート・コメントペーパーのいずれにおいても、学生からの苦情・不満等を相当数減らすことができた。一定の効果が得られたようである。ただ、依然として、講義スピードや情報量の絞り込みについては改善の余地があり、映像資料等の活用も十分に出来ていない点が反省点としてある。今後も自己改善のための工夫を行ってゆきたい。

【研究活動の自己評価】

専門分野である神道古典関連の業績としては、平成21年度以前の『古事記』大國主神の神格に関する研究を踏まえ、その延長として須佐之男命関連伝承に関する論文執筆・学会発表を行っている。ここ5年間の業績においては、『古事記』における須佐之男命の神格分析の一環として、大宜津比売伝承・天岩戸伝承のそれぞれに於ける同神の行動を『日本書紀』『延喜式祝詞』の所伝と比較しつつ分析し、『古事記』の叙述の特徴と、そこから見てとれる『古事記』の須佐之男命観をあぶり出す試みを行ってきた。また『教育開発推進機構紀要』に高等教育関連の論文を掲載するとともに、同紀要及び機関誌(ニューズレター)に、学内及び他大学のFD支援活動に関する報告も執筆した。

【職・氏名】准教授 佐川 蘭子 SAGAWA Mayuko

【学 位】修士(文学)

【本学就任】平成22年

【略 歴】二松学舎大学文学部中国文学科卒業

二松学舎大学大学院文学研究科博士後期課程(中国学専攻)単位取得退学

二松学舎大学文学部中国学科兼任講師

【専門分野】中国古典文献学、中国古代思想

【最近5年間の主な研究業績等】 [平成22～26年度] (10点まで)

種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または 該当ページ	発行年月
学会発表 等	単	「班彪、班固の漢火徳堯後説について」	國學院大學中國學會大会 第54回		平26. 6
その他	単	「障害のある学生の学修支援に関する覚え書き—基本的概念について—」	『國學院大學教育開発推進機構紀要』第5号 國學院大學教育開発推進機構	pp.73-80	平26. 3
辞書・ 事典等	共	『世界人名大辞典』	岩波書店	p.436, 485, 558, 894, 1162, 1326, 1355, 2215, 2347, 2892, 2973,3190	平25. 12
論文	単	「劉歆「世経」における王朝交替について」	『國學院雑誌』第114巻第9号 國學院大學	pp.17-29	平25. 9
その他	単	「南開大学の校訓について」	『國學院大學教育開発推進機構紀要』第3号 國學院大學教育開発推進機構	pp.37-43	平24. 3
論文	単	「劉歆の三統説について」	『二松学舎大学人文論叢』第86輯 二松学舎大学人文学会	pp.56-76	平23. 3

【平成21年度以前の主な研究業績等】 (5点まで)

種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または 該当ページ	発行年月
論文	単	「關於漢代“二王之後”問題—漢家与経学(刁小龍訳)」	方光華・彭林主編『中国経学論集』 中国・陝西人民出版社	pp.498-515	平21. 10
論文	単	「光武帝による火徳堯後の漢再興について」	『後漢経学研究会論集』第二号 後漢経学研究会	pp.89-109	平17. 3
論文	単	「『史記』に見える循環史観」	『二松学舎大学論集』第47号 二松学舎大学	pp.225-246	平16. 3
論文	単	「後漢時代における社稷祭祀をめぐって—経学史観の造成—」	『後漢経学研究会論集』創刊号 後漢経学研究会	pp.31-48	平14. 3
論文	単	「郭店楚簡『茲衣』と『礼記』緇衣篇の關係に就いて—先秦儒家文献の成立に関する—考察—」	『日本中国学会報』第52集 日本中国学会	pp.14-27	平12. 10

【所属学会】日本中国学会会員、中国出土資料学会会員、東方学会会員

【最近5年間の学会等および社会における主な活動】

【教育活動の自己評価】

教養総合科目を担当しているが、科目の性質や受講生の学力を考慮して教材を作成している。前期担当科目ではほぼ毎回小テストを行い、添削して返却している。後期担当科目は中国セメスター留学現地科目であるため、中国語資料を教材にしている。やや高度な文章であるが、適宜解説を加えて学生が理解できるように努めている。また、現地では内容要約等のレポートを数回課し、添削して返却している。小テストやレポート課題には、手書きで文章を書く機会を提供して漢字や日本語能力を衰退させないという意味もある。

【研究活動の自己評価】

中国の伝統的な学術、思想である経学、儒学は漢代にその地位を得たと言えるが、その漢代における経学的歴史認識というものについて考えている。経学的歴史認識というものは個々の学者によって異なるものであり、ここ数年は劉歆の三統暦を主な対象として二本の論文を発表した。今後の研究計画はあるのだが、集中的に取り組める時間が少ないため、なかなか論文執筆に至らない。

【職・氏名】助教 鈴木 崇 義 SUZUKI Takayoshi

【学 位】修士(文学)

【本学就任】平成21年

【略 歴】國學院大學大学院文学研究科博士課程前期日本文学専攻修了
國學院大學大学院文学研究科博士課程後期日本文学専攻単位取得退学
筑波大学附属駒場中・高等学校 高校国語(漢文)非常勤講師

【専門分野】中国古典文学

【最近5年間の主な研究業績等】 [平成22～26年度] (10点まで)

種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または 該当ページ	発行年月
論文	共	「呼び出し対応における学生との関わりから見えてきたもの及び学生対応の今後の展望」	『國學院大學教育開発推進機構紀要』第5号 國學院大學教育開発推進機構	全9p	平26. 3
論文	単	「張衡「二京賦」小考」	『國學院中國學會報』58 國學院大學中國學會	全21p	平25. 3
論文	単	「相談事例からみる学修支援の現状と課題についての覚書」	『國學院大學教育開発推進機構紀要』第4号 國學院大學教育開発推進機構	全10p	平25. 3
学会発表等	単	「張衡の「二京賦」について」	國學院大學中國學會第55回大会 國學院大學中國學會		平24. 6
論文	単	「國學院大學における学修支援体制構築に向けて」	『國學院大學教育開発推進機構紀要』第2号 國學院大學教育開発推進機構	全171p中 pp.49-62	平23. 3
その他	単	「学修支援センター相談室における学生相談の現状と課題—いかに学生と向き合うか—」	『教育開発ニュース』3 國學院大學教育開発推進機構	全24p中 pp.4-7	平23. 1
論文	単	「邊讓「章華賦」小考」	『國學院中國學會報』56 國學院大學中國學會	pp.31-43	平22. 12

【平成21年度以前の主な研究業績等】 (5点まで)

種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または 該当ページ	発行年月
論文	単	「曹植「洛神賦」小考」	『中国古典研究』第53号 中国古典研究会	pp.49-67	平21. 3
論文	単	「班彪「北征賦」小考」	『國學院大學大学院紀要—文学研究科—』39 國學院大學大学院	pp.281-301	平20. 3
翻訳・ 翻刻書	単	方蘊華著「漢代賦に見える漢代長安の社会風俗と都市精神」	矢野建一・李浩編『長安都市文化と朝鮮・日本』 汲古書院	全352p中 pp.18-30	平19. 9
論文	単	「詠鳥賦考—禰衡「鸚鵡賦」を中心に—」	『國學院大學大学院紀要—文学研究科—』38 國學院大學大学院	pp.197-218	平19. 3
論文	単	「張衡「帰田賦」小考」	『國學院中國學會報』第51輯 國學院大學中國學會	pp.15-30	平17. 12

【所属学会】國學院中國學會、中唐文學會、日本中國學會、六朝學術學會、中國古典學會、日本リメディアル教育学会、三同志学会

【最近5年間の学会等および社会における主な活動】

六朝學術学会 幹事(平23. 4～平26. 3)・総務委員(平26. 4～現在)、日本中国学会大会委員会幹事(平25. 4～現在)、三同志学会評議員(平24. 9～現在)

【教育活動の自己評価】

《学修支援センターにおける教育活動》平成21年度後期より開設された、学修支援センター相談室にて恒常的な学修相談を実施している。主な相談内容としては、前期後期の履修登録に関するものであり、もともと件数も多い。特に、留年学生や卒業延期学生に関しては、進級、卒業に必要な授業の選択やコンスタントに授業に出席できる時間制作成の指導を行い、学生の学修習慣が定着するような工夫について試行錯誤を行った。また、試験対策やレポート作成に関する相談も随時受け付け、学生に寄り添う形の指導を心がけることにより、学生が学修に関して気軽に相談できる雰囲気作りに努めた。平成24年度からは障害がある学生からの支援申請がなされたため、教育開発推進機構の教員として、ノートテイカーの配置や授業担当教員への配慮を依頼し、当該学生の学修に関するハンディを下げることに努めた。《授業における教育活動》平成23年度より、文学部日本文学科初年次必修科目である「漢文学概説」の再履修クラス、人間開発学部初等教育学科の「漢文学概説」を担当し、平成23年度からは文学部日本文学科の「基礎漢文学」も担当した。日本文学科の科目では、再履修クラスということで漢文読解の基本事項を確認すること、漢文への苦手意識を和らげることを意識して授業に臨んだ。そのため、高校の教科書に収録されている作品を選び、一度触れたことのあるものを丁寧に読むということを試みた。この他、「基礎漢文学」では漢文の原文に触れることを中心にしつつも、授業の初回から数回は、導入として身近な熟語の構成や故事成語の語源について解説しつつ進め、所謂「漢文アレルギー」を取り払うことに努めた。かつ、文章読解に関しては、『世説新語』を中心とした比較的短文で内容の面白いものを読み進め、また、自分の好きな漢詩を選んでコメントをするというレポートを課し、文学作品の魅力に学生自身が気づけるような授業を心がけた。初等教育学科の「漢文学概説」は、唐詩を授業テーマに設定し、中学、高校の国語教員になることを念頭に置いた授業を実施した。テキストを中心に、受講生が将来教壇に立った時に利用できる参考文献について、実際に触れることにより、漢文から一つの現代語訳を試みるために必要な過程がいくつもあるということを示した。また、夏期休暇にはレポートを課し、唐詩を鑑賞することを実践した。さらに、本レポートは2回の添削を経て返却して学生にフィードバックすると共に、文集にまとめて受講生内で互いのレポートを読み合うということも行い、文学作品の鑑賞には様々な違いがあることを示した。

【研究活動の自己評価】

漢代を中心とした辞賦についての研究を継続して行い、後世の文学にどのように継承されていったのかを明らかにすることを目的としている。邊讓の「章華賦」については、揚雄が指摘したように、賦が政治的に無力であるという思潮の中で、あえて諷諭をテーマにした作品を書いた理由について検証した。また、張衡の「二京賦」は班固の「兩都賦」の模倣的作品として閑却されてきたが、模倣という行為を通じて作者独自の社会批判が込められていることを明らかにした。学修支援に関する研究としては、所属しているリメディアル教育学会における学生対応事例を参考にしつつ、学修支援センター相談室での相談事例を洗い出し、学修支援の在り方と学業不振に陥る問題解明およびそれをどのように克服するかの検証に努めた。

【職・氏名】准教授 中山 郁 NAKAYAMA Kaoru
 【学位】博士(宗教学)(平成20年3月 國學院大學 文乙第235号)
 【本学就任】平成18年
 【略歴】國學院大學大学院文学研究科神道学専攻博士課程後期単位取得満期退学
 國學院大學文学部神道学科兼任講師
 國學院大學21世紀研究教育計画委員会 上席研究員
 【専門分野】宗教学
 【受賞歴等】第17回日本山岳修験学会賞(平成20年)

【最近5年間の主な研究業績等】 [平成22～26年度] (10点まで)					
種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または該当ページ	発行年月
著書	共	『教員カステップアップ講座 あなたの授業を豊かにする究極の一冊』	國學院大學教育開発推進機構	pp.18-21, 32-43, 48-52	平26. 4
論文	単	「初年次教育科目における「アクティブラーニング型(学生主体型)授業」の試み—その可能性と課題について—」	『國學院大學教育開発推進機構紀要』第4号 國學院大學教育開発推進機構	全132p中 pp.15-38	平25. 3
論文	単	「海外慰霊巡拝覚書き—千葉県・栃木県 護国神社主催、「東部ニューギニア慰霊巡拝」の事例から—」	國學院大學研究開発推進センター 編『招魂と慰霊の系譜』 國學院大學研究開発推進センター	全343p中 pp.216-264	平25. 3
論文	単	「南太平洋の慰霊巡拝—戦没者の霊魂と交感する旅—」	星野英紀・山中弘・岡本亮輔編『聖地巡礼ツーリズム』 弘文堂		平24. 11
論文	単	「御嶽講における「行法」小考」	菅原壽清編『木曾御嶽信仰とアジアの憑霊文化』 岩田書院	全494p中 pp.105-121	平24. 10
論文	単	「東部ニューギニア地域における遺骨収集と慰霊巡拝の展開」	『軍事史学』47巻3号 軍事史学会編、錦正社発行	全192p中 pp.75-94	平23. 12
論文	単	「戦場の慰霊—東部ニューギニア地域の遺骨収集・慰霊巡拝から—」	『季刊考古学』116 雄山閣	全116p中 pp.80-84	平23. 8
論文	単	「戦後日本の大学と「建学の精神」—宗教系大学の事例から—」	『國學院大學教育開発推進機構紀要』第2号 國學院大學教育開発推進機構	全171p中 pp.15-	平23. 3

【平成21年度以前の主な研究業績等】 (5点まで)					
種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または該当ページ	発行年月
編著	共	『木曾のおんたけさん その信仰と歴史』	岩田書院	全261ページ 中 pp.15-25, 40-76. 195-246	平21. 7
論文	単	「國學院大學と教派神道—教派神道連合会「神道講座」・御嶽教「地方教学院」の事例から—」	國學院大學研究開発推進センター 編『史料から見た神道—國學院大學の学術資産を中心に』 弘文堂	全365p中 pp.227-264	平21. 3
論文	単	「生還将兵の戦地体験と慰霊—小田敦巳『一兵士の戦争体験—ビルマ戦線 生死の境—』の事例から—」	『國學院大學研究開発推進センター研究紀要』第3号 國學院大學研究開発推進センター	全27p	平21. 3
論文	単	「夜明け前の御嶽山—御嶽神社と明治維新一」	『明治聖徳記念学会紀要』復刊第45号 明治聖徳記念学会	全512p中 pp.54-82	平20. 11
著書	単	『修験と神道のあいだ—木曾御嶽信仰の近世・近代—』	弘文堂	全332p	平19. 7

【所属学会】神道宗教学会、日本山岳修験学会、日本宗教学会、「宗教と社会」学会、軍事史学会

【最近5年間の学会等および社会における主な活動】

日本山岳修験学会理事(平25. 11～現在)、日本パプアニューギニア協会会員(平20. 4～現在)、長野県ニューギニア会会員(平20. 4～現在)

【教育活動の自己評価】

教育開発推進機構に所属して以降、高等教育およびFDの研究を行なうとともに、その成果の大学授業への還元と、さらには共通教育カリキュラムの開発に活用することを心がけた。具体的には、「神道文化基礎演習」を始めとする担当授業にグループワークの手法を導入し、その成果をもとに各授業のアクティブラーニング化を行なってきた。「神道と文化」などの教養の授業や「建学の精神と人材育成(國學院大学栃木高校)のアクティブラーニング化を行った。さらに大規模教室における授業コントロール法についても検討したうえで、遅刻、私語をほぼなくす方法を開発・実践し、所期の成果を挙げることができた。なお、25年度に行なった教養総合カリキュラムの改編に際しては、所属機関での研究成果に基づき、新たな授業群の開発、設置の手伝いを行なった。また、教員に対する研修活動の企画、立案、実践も職務の一端として実施した。

【研究活動の自己評価】

教育開発推進機構に移動後、FD・大学教育改革に関する研究を行い、その成果を論文や教員向けのティーチングテキスト『教員カステップアップ講座』において発表するとともに、大学におけるアクティブラーニング型科目や「國學院科目」の開発、学部への支援、教員研修プログラムの企画、運営に生かすことができた。また、自身の専門分野における研究は、高等教育に関する研究を並行して行なう事となったため、研究にかける時間が減少してしまったものの、科研の研究分担者として、パプアニューギニア、パラオ諸島を舞台とした海外慰霊研究を行い、その成果を学会に発表し、論文として刊行した。

【職・氏名】准教授 松岡 弥生子 MATSUOKA Yaoko
 【学 位】Master of Arts(TESOL)
 【本学就任】平成26年
 【略 歴】コロンビア大学大学院ティーチャーズカレッジ修了
 国際基督教大学大学院 博士後期過程 博士候補資格取得
 国際基督教大学教育研究所 準研究員
 【専門分野】第二言語習得、語用論、ICT活用英語教育

【最近5年間の主な研究業績等】 [平成22～26年度] (10点まで)

種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または該当ページ	発行年月
学会発表等	単	Use of Recast in Implicit Pragmatics Instruction	JALT 2014: 40th Annual International Conference on Language Teaching and Learning 於 筑波大学		平26. 10
学会発表等	単	Learning beyond the Classroom: Encouraging International Communication through Online Discussion Forum with Guest Access	JACET 2014: 大学英語教育学会 第53回国際大会 於 広島市立大学		平26. 8
論文	単	Influence of Learners' Communication Apprehension on the Mode of Communicative Activities in EFL Class	Japanese Society for Language Sciences JSLs 2014 Conference Handbook	pp.43-47	平26. 6
学会発表等	単	Influence of Learners' Communication Apprehension on the Mode of Communicative Activities in EFL Class	International Symposium on Innovative Teaching and Research in ESP 2014: 於 電気通信大学		平26. 6
論文	単	A Prerequisite for ESP :Use of Online Forum for Critical Argument	Proceedings of the International Symposium on Innovative Teaching and Research in ESP 2014		平26. 4
著書	共	『TOEIC (R) テスト 550点突破リスニング講座』	株式会社アルク	全112p	平26. 3
論文	単	Developing Collaborative Writing in LMS Wiki	Nakasendo 2013 Conference Proceedings	pp.21-26	平26. 2
論文	単	Revisiting Communication Strategy :A Comprehensive Review of the Literature on the Strategies of Interlanguage Communication	文教大学 情報研究 第49号	pp.43-57	平25. 7
論文	単	Using Member Only Wiki Space for Collaborative Writing and Peer Interaction	ACTC 2013 Proceedings 3 : Third Asian Conference on Technology in Classroom	pp.325-336	平25. 6
論文	単	Designing Web-class: Applying ARCS Model to the Blended Learning for EFL Course	第18回日本教育メディア学会年次大会発表論文集	pp.59-61	平23. 10

【平成21年度以前の主な研究業績等】 (5点まで)

種類	区分	著書・論文名等	掲載誌・発行所等	総頁数または該当ページ	発行年月
学会発表等	単	Possible Strategies for Listening Comprehension	JALT 2009 : 国語学教育学会第35年次大会 於 静岡グランシップ		平21. 11
論文	単	Possible Strategies for Listening Comprehension: Applying the Concepts of Conversational Implicature and Adjacency Pairs to Understand Speaker Intention in the TOEFL Listening Section	Accents Asia [On line], 3 (2)	pp.26-61	平21. 11
学会発表等	単	Applying Conversational Analysis to TOEFL Listening			平21. 9
著書	共	『奪取550点TOEIC テスト解答テクニック講座 TEXTBOOK 3』	株式会社アルク	全107p	平20. 4

【所属学会】全国語学教育学会、大学英語教育学会、JALTプラグマティクス研究会、日本教育科学学会

【最近5年間の学会等および社会における主な活動】

目黒ユネスコ協会 広報・翻訳担当(平17. 4～現在)

【教育活動の自己評価】

教育に於いては、基礎英語力の確立、英語を通じたグローバルな知識の獲得、そして社会人としての英語コミュニケーション能力の促進という3点を念頭に置きつつ大学における英語教育を行ってきた。これら英語のインプットとアウトプットをバランスよく配分することが、より効果的な教育に必須である。具体的には、大学低学年の一般英語科目では英語による身近な話題の購読およびその話題に関して平易な英語表現による一方的及び両サイドからの議論を行なわせた。上級生用の英語科目では、時事問題、英語ニュース等の話題を取り上げ、ライティング課題とプレゼンテーションの指導を通して、広義でのコミュニケーション力の育成に努めてきた。CNN、ABCといった海外英語メディアやニュース動画のようなauthentic material を通して、グローバルな知識獲得と批判的思考力の育成を行うと共に、学生の学修意欲の持続を図った。学期当初の調査結果では、多くの学生が「自分の考えを英語で言えるようになる」ことを強く希望しており、教育者と学習者間で英語学修の目標を共有できたと思われる。

【研究活動の自己評価】

当該の研究は、英語のプラグマティクス(色々な場面に適した言い方や話者の言下の意思を理解する研究)、コミュニケーション方略(外国語での伝達行動の際、言語能力の不足を補うために学習者が用いる方略の研究)、またそれらを英語学修に効果的に取り入れるためのICT(コンピュータ媒介の伝達テクノロジー)を活用した双方向情報伝達(話し言葉および書き言葉を含む)と効果的なインストラクショナル・デザインを中心に行ってきた。平成23年度以降は、フォーラム、ウィキ、チャットといったオンライン総合学習管理システム(LMS)のツールを媒体とする実験研究を実施し、これらの双方向コミュニケーションが、英語の運用力・伝達力・ライティング力・協調学修への取り組み姿勢を向上させ、継続使用による一定の効果が期待できるという結果を得た。平成25年度からは、学修の妨げとなる一要因として学習者の「コミュニケーション不安」に着目し、不安度を数値化することで、日本人英語学習者の特性と能力に合った授業方法の開発を研究し、日本教育科学学会にて発表した。

氏名索引（五十音順）

【あ】			【お】			【き】		
青木	豊	67	大江	毅	145	木下	順	112
赤井	益久	31	大久保	一男	9	木原	志乃	91
秋澤	互	5	大久保	桂子	69			
秋吉	良人	41	大熊	光子	44	【く】		
浅井	理恵子	42	大坂	健	107	久野	マリ子	14
浅野	春二	32	太田	直之	214	久保田	裕子	113
安部	住雄	63	大森	俊夫	215	黒崎	浩行	179
甘利	航司	141	大和	博幸	10	黒澤	直道	47
新井	大祐	271	岡田	哲	11			
嵐	義人	173	岡田	莊司	177	【こ】		
栗田	義彦	89	小川	直之	12	呉	鴻春	34
			小木曾	道夫	108	小池	寿子	92
【い】			尾近	裕幸	109	小手川	正二郎	93
飯倉	義之	6	尾崎	麻弥子	110	小濱	歩	272
池田	行伸	224	長田	恵理	195	小宮山	隆	114
石井	研士	174	小澤	直子	240	紺井	博則	115
石川	清明	225	落合	知子	70	近藤	良彦	197
石川	則夫	7	小原	薫	146			
石本	道明	33						
磯部	力	239	【か】					
磯村	早苗	142	カイザー,シュテファン		13			
一木	孝之	143	柿沼	秀雄	99			
伊藤	英之	211	笠間	直穂子	45			
井上	明芳	8	加瀬	直弥	178			
井上	順孝	175	加藤	季夫	196			
今井	秀智	250	門広	乃里子	147			
岩瀬	由佳	43	金杉	武司	90			
			金子	修一	71			
			金子	良太	111			
【う】			上石田	麗子	46			
上口	孝文	212	神長	美津子	226			
植原	吉朗	213	上西	亘	258			
植村	勝慶	144	荻田	真司	148			
上山	和雄	68	川合	敏樹	149			
内川	隆志	257	河合	繁昭	251			
			川口	愛子	216			
【え】								
遠藤	潤	176						

【さ】

齊藤 こそゑ …… 100
 齊藤 智朗 …… 259
 齋藤 智哉 …… 101
 坂本 一登 …… 150
 阪本 是丸 …… 180
 坂本 正徳 …… 198
 佐川 繭子 …… 273
 佐古田 真紀子 …… 151
 捧 剛 …… 152
 笹田 弥生 …… 227
 笹生 衛 …… 181
 佐藤 彰一 …… 241
 佐藤 長門 …… 72
 佐藤 秀勝 …… 153
 佐野 光一 …… 15
 猿田 祐嗣 …… 199

【し】

穴戸 節太郎 …… 48
 四宮 啓 …… 252
 柴崎 和夫 …… 200
 柴田 紳一 …… 73
 柴田 保之 …… 201
 出世 直衛 …… 49
 東海林 孝一 …… 116
 白井 重範 …… 50
 新谷 尚紀 …… 16
 新富 康央 …… 228

【す】

菅 浩二 …… 182
 菅井 益郎 …… 117
 鈴木 聡子 …… 260
 鈴木 崇義 …… 274
 鈴木 達次 …… 154
 須永 和之 …… 17
 スピアーズ,スコット …… 51

【せ】

関 哲夫 …… 155

【た】

大東 敬明 …… 261
 高内 寿夫 …… 242
 高木 康順 …… 118
 高塩 博 …… 156
 高橋 克秀 …… 119
 高橋 昌一郎 …… 52
 高橋 大助 …… 102
 高橋 尚子 …… 120
 高橋 信行 …… 157
 高橋 誠 …… 53
 高屋 景一 …… 54
 高山 真琴 …… 202
 高山 実佐 …… 103
 滝井 章 …… 203
 筒石 賢昭 …… 229
 武田 秀章 …… 183
 武田 誠 …… 243
 田嶋 一 …… 104
 辰巳 正明 …… 18
 田中 和子 …… 158
 谷口 雅博 …… 19
 谷口 康浩 …… 74
 田沼 茂紀 …… 204
 田原 裕子 …… 121

【ち】

千々和 到 …… 75
 茅野 信行 …… 122
 中馬 祥子 …… 123

【つ】

塚田 穂高 …… 262
 土田 壽孝 …… 124

【て】

寺本 貴啓 …… 205

【と】

豊島 秀範 …… 20

【な】

中泉 真樹 …… 125
 中川 孝博 …… 159
 中川 徹也 …… 253
 中曾根 玲子 …… 244
 中田 有祐 …… 126
 中西 正幸 …… 184
 中村 正明 …… 21
 永森 誠一 …… 160
 中山 一郎 …… 245
 中山 郁 …… 275
 夏秋 英房 …… 230
 成田 信子 …… 206

【に】

西岡 和彦 …… 185
 西村 清和 …… 94

【ね】

根岸 茂夫 …… 76
 根岸 毅宏 …… 127

【の】

野田 隆夫 …… 128
 野村 一夫 …… 129
 野本 茂夫 …… 231
 野呂 健 …… 55

【は】

一	正孝	217
橋元	秀一	130
橋本	貴朗	22
長谷川	清貴	35
長谷川	光一	161
秦	信行	131
波戸岡	旭	36
花部	英雄	23
林	和生	77
林	貢一郎	218
原	英喜	219
針谷	壮一	56
針本	正行	24

【ひ】

樋口	秀実	78
姫野	学郎	162
平地	秀哉	163
平林	勝政	246
平藤	喜久子	263
廣井	雄一	232
廣瀬	美佳	247

【ふ】

深澤	太郎	264
福井	崇史	57
福岡	英明	248
福島	直之	58
藤井	喜一	207
藤澤	紫	79
藤嶋	亮	164
藤田	和也	220
藤田	大誠	221
藤野	敬介	59
藤本	頼生	186
古沢	広祐	132
古山	正人	80

【へ】

ヘイヴンズ, ノルマン	187
-------------	-----

【ほ】

星野	靖二	265
星野	広和	133
星野	光樹	188
細井	長	134
本田	一成	135

【ま】

牧野	格子	37
松岡	弥生子	276
松本	久史	189

【み】

水谷	三公	165
宮内	克浩	38
宮内	靖彦	166
宮川	八岐	208
宮下	大志	167
宮下	雄治	136
宮元	啓一	95
宮本	誉士	266

【む】

村	和男	254
村井	のり子	249
村上	佳司	222
村山	雅人	60

【も】

茂木	栄	190
茂木	貞純	191
本久	洋一	168
森川	隆	169
諸星	美智直	25

【や】

矢島	昂	61
安野	功	209
矢部	健太郎	81
山岡	敬和	26
山崎	雅稔	82
山瀬	範子	233
山田	佳弘	223
山西	治男	62
山本	健太	137

【ゆ】

結城	孝治	234
----	----	-----

【よ】

横山	謙一	170
吉岡	孝	83
吉田	恵二	84
吉田	敏弘	85
吉田	永弘	27
吉永	安里	235

【わ】

渡邊	卓	267
渡邊	雅俊	210
渡邊	欣雄	28